

第1章 概要

第1節 施設

第1 敷地及び建物

当がんセンターは、名古屋市千種区鹿子殿1番1号にあり、付近は住宅と公園からなる閑静な場所となっている。

敷地面積は49,788.56平方メートル、施設の建物面積は71,935.58平方メートルで、昭和63年度から平成7年度にかけて病院の全面改装工事を実施し、さらに平成9年度から着手した研究所の改装工事が平成14年1月に終了したことにより、一新した病院施設となっている。

1. 病院建物

病院建物は、病棟、特殊放射線・診療棟、国際医学交流センター・外来棟に区分され、この概要は次のとおりである。

病棟は、鉄骨鉄筋コンクリート造り地下1階地上9階建て、地階及び1階はサービス部門及び管理部門、2階及び3階は検査部門及び管理部門、4階から9階までは病室となっている。

特殊放射線・診療棟は、鉄骨鉄筋コンクリート造り地下1階地上5階建てで、この建物は放射線診断・治療、手術及び臨床検査を主体とした部門で、地階、2階及び5階は放射線部門、4階は手術部門、3階は臨床検査部門、1階は中央滅菌材料部門となっている。

国際医学交流センター・外来棟は、鉄骨鉄筋コンクリート造り地下1階地上3階建てで、1階は400人収容のメインホール、大会議室、視聴覚室の3つの会議室とロビーからなる国際医学交流センターで、地階は薬剤部門及びカルテ・フィルム庫、2

階及び3階は外来部門となっている。

また、これらの建物の接点にアトリウム（吹き抜け空間）を設けて、安らぎの空間及び明るさの取り入れになる等の他にアトリウム内を横断する通路を設け、各部門と有機的な連携を図っている。

2. 研究所建物

研究所は、研究所棟本館、研究所棟北館、生物学総合実験棟の3棟から構成され、その概要は次のとおりである。

研究所棟本館は、平成14年に地下1階、地上6階の建物として竣工し、疫学・予防部、中央実験室、発がん制御研究部、腫瘍ウイルス学部、腫瘍免疫学部、分子病態学部、腫瘍病理学部、分子腫瘍学部、遺伝子医療研究部の各研究室の他に、実験動物施設、RI実験施設、細胞調製施設、臨床研究室などの共同利用施設が設置されている。

研究所北館は、昭和58年に地下1階、地上3階の旧診療管理棟として竣工し、平成14年に研究所棟北館として改修工事が行われた。所長室、副所長室、疫学・予防部、研究経費管理室、図書室およびセミナー室などが設置されている。

生物学総合実験棟は、昭和63年に竣工し、地下1階、地上3階の建物で組み換えDNA実験施設、RI実験施設、実験動物施設、中央管理室などが設置されている。

土地・建物一覧

(単位：平方メートル)

区 分	摘 要	20年度末	21年度末	22年度末
土 地		49,788.56	49,788.56	49,788.56
建 物		71,935.58	71,935.58	71,935.58
鉄骨鉄筋コンクリート造 病 棟	地下1階、地上9階、塔屋2階 (H4.2.29 竣工)	55,253.90	55,253.90	55,253.90
特殊放射線・診療棟	地下1階、地上5階 (H3.12.20 竣工)	12,274.96	12,274.96	12,274.96
国際医学交流センター・外来棟	地下1階、地上3階 (H5.3.18 竣工)	7,203.43	7,203.43	7,203.43
研究所棟本館	地下1階、地上6階 (H14.1.11 竣工)	7,112.72	7,112.72	7,112.72
鉄筋コンクリート造 研究所棟北館	地下1階、地上3階、塔屋1階 (S58.11.22 竣工・H14年度改修)	16,467.60	16,467.60	16,467.60
生物学総合実験棟	地下1階、地上3階、塔屋1階 (S63.8.31 竣工)	3,244.43	3,244.43	3,244.43
立体駐車場	2層建 (H7.6.30 竣工)	2,116.03	2,116.03	2,116.03
		6,526.47	6,526.47	6,526.47

区 分	摘 要	20 年度末	21 年度末	22 年度末
危 険 物 倉 庫	地上 1 階	50.20	50.20	50.20
看 護 師 宿 舎	地上 4 階, 塔屋 1 階, 2 棟	3,352.33	3,352.33	3,352.33
職 員 公 舎	地上 3 階, 2 棟	712.56	712.56	712.56
車 庫 ・ 保 安 公 舎	地上 3 階	313.92	313.92	313.92
ご み 集 積 場 棟	地上 1 階	101.99	101.99	101.99
そ の 他 建 物	保管庫	47.67	47.67	47.67
コ ン ク リ ー ト ブ ロ ッ ク 造	自転車置場 (看護師宿舎)	24.00	24.00	24.00
軽 量 鉄 骨 造		190.08	190.08	190.08
作 業 事 務 所	地上 2 階	129.60	129.60	129.60
そ の 他 建 物	物置 (職員公舎) 等	60.48	60.48	60.48

第2 医療情報トータルシステム (ACCTIS)

このシステムは ACCTIS (Aichi Cancer Center TotalInformation System) と称し、患者サービスの向上ならびに医療業務の合理化・省力化、医療の質的向上、研究・教育の支援等をめざして導入された。

平成4年の病棟の全面改築にあたり、大型コンピュータによるオーダーリングシステム、医事会計システムを中心とした電算システムの導入が計画され、病棟、外来棟の完成に合わせ順次導入された。

平成14年度の機器更新では、今までの大型コンピュータを核としたホスト/パソコン連携方式から、各部門が独自にシステムを持った分散型コンピュータシステムであるクライアント/サーバ方式に変更し、平成22年2月の機器更新を経て現在

まで稼働している。

クライアント/サーバ方式に変更後は、オーダーリングシステムと医事会計部門等の部門別システム(17システム)から構成されている。

オーダーリングシステムは、診療現場で発生する情報を診療現場で捉え、必要とする部門に伝達する。また、各部門別システムは、送られてきた情報をそれぞれの部門で蓄積、加工、利用すると同時に要求される情報(検査結果等)を他部門に伝達する。

また、蓄積したデータ(診療情報データベース)は、患者の診療及び臨床研究に利用する

主な機器構成

(平成22年度末現在)

システム名	サーバ機種	台数	クライアント機種	延べ台数
オーダーリングシステム(本系)	RX300	1		281
〃(中間)	RX300	1	D5280	125
〃(テスト系)	RX100	1	E8280	
医事システム(本系)	RX300	1	D5280	43
〃(プリンタサーバー)	RX100	2	E8280	1
物流システム	RX300	1	D5280	281
			E8280	125
検体検査システム(オーダ)	TX300	1	D5280	29
〃(分析器)	RX200	1		
〃(連携)	RX200	1		
放射線システム	RX300	1	D5280	30
〃(連携)	RX300	1	E8280	11
病理システム	TX300	1	E8280	5
院内がん登録システム	TX200 S3	1	D5280	6
			E8280	2
給食システム	RX300	1	D5280	3
看護勤務管理システム	RX300	1	D5280	16
経営支援システム	TX300	1	D5280	3
			E8280	2
診療支援システム(データベース)	RX300	1	D5280	281
〃(WEB系)	RX200	1	E8280	125
手術システム	TX200	1	D5280	7
			E8280	9
人事給与/服薬指導システム	RX300	1	D5280	5
病歴管理システム	RX300	1	D5280	64
			E8280	16
病診連携システム	RX300	1	D5280	1
表示システム(本系)	RX100	1	D5280	45
〃(テスト系)	RX100	1	E8280	7
EFSシステム	TX200	1		
POSレジシステム	TX150	1		
			再来受付機	3
			POSレジ	2
			自動精算機	2
			オートエンボッサ	1
	合計	27	合計 延べ台数 (実台数)	1016 (406)

第3 病床数

病床数500のうち、一般病床は、1床室29、2床室2、4床室87、合計381床で、各病床はそれぞれカーテンで区切ることができる。

また、4、5、6、7、8、9階に特別病床（個室）92床を設け、この利用者からは室料差額を徴収している。このほかに特殊病床27床がある。

科別病床

(平成22年度末現在)

西病棟		階	東病棟			
特別病床(混合) A室 B室 C室	25床 5 2 18	1床室 25室	9階	特別病床(混合) A室 B室 C室	25床 5 2 18	1床室 25室
一般病床 泌尿器科 放射線診断科 放射線治療科 特別病床 D室	48床 2床 2	1床室 6室 4床室 11室	8階	特別病床(混合) B室 C室	30床 2 28	1床室 30室
一般病床 消化器内科 消化器外科 特別病床 D室	49床 1床 1	1床室 6室 4床室 11室	7階	一般病床 消化器内科 消化器外科 特別病床 D室	48床 2床 2	1床室 6室 4床室 11室
一般病床 血液・細胞療法科 薬物療法科 特殊病床 バイオクリーン	48床 1床 1	1床室 5室 4床室 11室	6階	一般病床 呼吸器内科 整形外科 特殊病床 感染 特別病床 D室	48床 1床 1 1床 1	1床室 6室 4床室 11室
一般病床 婦人科 乳腺科 放射線治療科 特別病床 D室	48床 2床 2	1床室 6室 4床室 11室	5階	一般病床 頭頸部外科 放射線治療科 特殊病床 小線源 特別病床 D室	45床 4床 4 1床 1	1床室 10室 2床室 2室 4床室 9室
一般病床 胸部外科 呼吸器外科 乳腺科 特別病床 D室	49床 3床 3	1床室 6室 4床室 11室	4階	特別病床 ICU HCU 人工透析 セミクリーン	21床 4 15 1 1	1床室 17室 4床室 1室
合計	特別病床 92床 一般病床 381床 特殊病床 27床 計 500床	1床室 148室 2床室 2室 4床室 87室 計 237室				

第4 備品・設備

平成 22 年度末における備品総額は、10,419,133,007 円で、その主なものは次表のとおりである。

なお、平成 22 年度には、モニター読影入力システム、質量

分析システム、据置型デジタル式汎用 X 線撮影装置、据置型デジタル式汎用 X 線透視診断装置などを整備した。

主な備品・設備一覧（1,000 万円以上）

(22 年度末現在)

品名	型	式	数量	備考
(病院関係)				
遠隔操作式腔内治療装置	ニュークレトロン	マイクロセレクトロン HDR システム	1	放射線治療
核磁気共鳴断層撮影装置	GE メディカルシステム	Signa HDxt 3.0T	1	放射線治療
放射線治療管理装置	日本電気	ACCROS	1	放射線治療
小線源ニードルクリーンユニット	千代田テクノル	TH - 1400TM - 2	1	放射線治療
線源確認写真撮影装置	島津製作所	CH - 50 (特)	1	放射線治療
リニアアクセラレーター	バリアンメディカルシステムズ	CLINAC2100C トク	1	放射線治療
医療用リニアック	バリアンメディカルシステムズ	CLINAC - 21EX	1	放射線治療
前立腺がん密封小線源治療支援システム	バリアンメディカルシステムズ	VariSeed	1	放射線治療
医療用リニアアクセラレータ	トモセラピー	H i - ART システム	1	放射線治療
放射線治療位置決め装置	東芝メディカルシステムズ	LX - 40A	1	放射線治療
小線源確認写真撮影装置	島津製作所	C vision PLUS	1	放射線治療
診断用 X 線装置	東芝メディカルシステムズ	KXO85	1	放射線診断
乳がん検診用画像処理装置	日本アビオニクス	MDR - 2	1	放射線診断
乳房 X 線撮影装置	GE メディカルシステム	セノグラフ 2000D	1	放射線診断
超音波診断装置	日立メディコ	EUB - 8500 (e - com)	1	放射線診断
X 線 TV 装置	東芝メディカルシステムズ	DBW - 220A ガタ	1	放射線診断
FPD 搭載 C アーム X 線テレビシステム	東芝メディカルシステム	ULTIMAX-I	1	放射線診断
全身用 X 線コンピューター断層撮影装置	東芝メディカルシステムズ	Aquilion Multi	1	放射線診断
乳房 X 線撮影装置	GE メディカルシステム	セノグラフ DMR	1	放射線診断
フィルム保管棚	文祥堂	BSD エレコンパック	1	放射線診断
デジタル画像処理装置	東芝メディカルシステムズ	DFP-2000A/AS	1	放射線診断
IVR アンギオシステム	東芝メディカルシステムズ	CAS-8000V	1	放射線診断
ガンマカメラ	GE 横河メディカル	MillenniumVG	1	放射線診断
デジタル超音波診断装置	東芝メディカル	APL10	1	放射線診断
全身用 X 線コンピューター断層撮影装置	東芝メディカルシステムズ	Aquilion32	1	放射線診断
血管造影検査治療システム	東芝メディカルシステムズ	AquilionLB/INFX-8000C	1	放射線診断
乳房組織診断装置	日立メディコ	マルチケアプラチナ	1	放射線診断
放射線モニタリングシステム	アロカ	MSR-500	1	放射線診断
多方向 X 線撮影装置	島津製作所	VS-20	1	放射線診断
超高速再構成演算装置	東芝メディカルシステム	CT 透視モード	1	放射線診断
モニター読影入力システム	富士フィルムメディカル(株)	放射線読影レポートシステム F-Report	1	放射線診断
据置型デジタル式汎用 X 線撮影装置	富士フィルムメディカル(株)	FUJIFILM DR BENE0	1	放射線診断
据置型デジタル式汎用 X 線透視診断装置	日立メディコ	CUREVISTA	1	放射線診断
診断用 X 線撮影装置	富士メディカルシステムズ	KXO-80F	1	放射線診断
心音計ポリグラフシステム	フクダ電子	MIC9400	1	臨床検査
細胞自動解析分離装置	日本ベクトン・ディッキンソン	FACSTAR	1	臨床検査
自動免疫化学分析装置	デイドバーリング	ネフェロメーター	1	臨床検査
自動分析装置	日立ハイテクノロジーズ	7350 ガタ	1	臨床検査
プレパレート保存用移動棚	イトーキ	EMA ガタイドウダナ	1	臨床検査
臓器保存用移動棚	イトーキ	RPG ガタイドウダナ	1	臨床検査
自動細菌検査装置	日本ビオメリュール	ATB ソシステム	1	臨床検査

品名	型式	数量	備考
自動細胞解析分離装置	日本ベクトン・ディッキンソン FACS Calibur	1	臨床検査
生化学自動分析装置	日立メデイコ 7170S	1	臨床検査
マイクロダイセクションシステム	カールツァイス PALM	1	臨床検査
遺伝子解析装置	アプライドバイオシステムズジャパン 7900HT- II	1	臨床検査
血液成分分離装置	フレゼニウス AS. TEC204	1	臨床検査
細胞自動解析装置	ベクトン・ディッキンソン FACS Canto II	1	臨床検査
バーチャル顕微鏡システム	日本 Aperio バーチャルスコープシステム	1	臨床検査
超音波メス	バリーラブ CUSA Excel	1	手術
術中超音波診断装置	東芝メデイカルシステムズ SSA-260A	1	手術
内視鏡下外科手術セット	スミス・アンド・ネフュー 特型	1	手術
多目的ポリグラフ	日本光電 RMC-1200	1	手術
手術室内 ITV システム	ソニー 特型	1	手術
集中患者監視システム	日本コーリン CBM-3000CN 特型	1	手術
手術画像記録システム	ナックイメージテクノロジー 特型	1	手術
手術用顕微鏡	カールツァイス OPMI-NEURO	1	手術
手術用顕微鏡	カールツァイスメディック OPMI Pentero	1	手術
プラズマ滅菌器	ジョンソンアンドジョンソン ステラッド 100 シングルドア	1	手術
超音波診断装置	アロカ SSD-2000	3	診療
超音波診断装置	アロカ SSD-270	1	診療
アルゴン色素レーザー装置	日本レーザー クーパーレーザーソニック	1	診療
超音波内視鏡システム	オリンパス光学工業 EU-M20	1	診療
消化器及び呼吸器用 X 線 TV	東芝メデイカルシステムズ DBW - 220A, PDS-5	1	診療
超音波ガストロスコープ	オリンパス光学工業 GF-UM2, EU-M2	1	診療
高輝度光源装置	オリンパス光学工業 特型	1	診療
アルゴンダイレーザー光凝固装置	エースクラップメディテック MDS10	1	診療
酸化エチレンガス滅菌装置	サクラ精機 Σ II ER-B09W	1	診療
酸化エチレンガス滅菌装置	サクラ精機 Σ II ER-009W	1	診療
プラズマ滅菌器	ジョンソン・エンド・ジョンソン ステラッド 200X	1	診療
純粋製造装置	サクラ精機 SM-6RO	1	診療
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機 Σ II R-G12W	2	診療
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機 Σ III R-G12W	3	診療
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機 Σ III R-B09W	1	診療
自動カート洗浄装置	サクラ精機 CWR-2500W	1	診療
全自動ホルマリン殺菌装置	ドレーゲル アゼプター 8800 ダイ 1 ドア	1	診療
ビデオシステム	ソニー 特型	1	診療
クラス 100 滅菌病室設備	東洋熱工業 LI-30	1	診療
クラス 100 滅菌病室設備システム	東洋熱工業 MIU-201	1	診療
オートスパイロメーター	ミナト医科学 システム 9 特型	1	診療
心電図自動解析装置	フクダ電子 FCP-800	1	診療
モニタリングシステム	横河メデイカルシステム M1166A	1	診療
生体情報モニタリングシステム	フィリップスエレクトロニクスジャパン MP50	1	診療
全自動錠剤分包機	トーショー M-TOPRA-168-PC	1	診療
ラックン MGS システム	三田理化学工業 RDPA50F200-B100H	1	診療
薬剤保管払出用自動棚	セントラルユニ VF-AAD	1	診療
レーザーメス装置	エスエルティジャパン CL-50	1	診療
薬袋印字システム	トーショー TYS-4BX2 特型	1	診療
超音波内視鏡ビデオシステム	オリンパス光学工業 EU-M30	1	診療
超音波洗浄装置	フーメッド ハイブリッド・ダブルドア	1	診療

品名	型	式	数量	備考
純水製造装置	日本ウォーターシステム	MC-4000C	1	診療
内視鏡ビデオシステム	オリンパス光学工業	EVIS-240	1	診療
自動輸血検査システム	ダイアグノスティック	Auto Vue System	1	診療
医局システム机	イトーキ	特型	1	診療
内視鏡業務支援システム	オリンパス	Solemio ENDO Ver.3	1	診療
超音波診断装置（乳腺科）	ジーイー横河メディカルシステム	Voluson 730 Expert	1	診療
超音波内視鏡ビデオシステム	アロカ	SSD-ALPHA10	1	診療
コンピュータ型ナースコールシステム	ケアコム	NICSS	1	診療
カルテ保管庫	日本ファイリング	カルテ管理システム	1	管理
エコロラインシステム	ホバート	F5-1244UC	1	管理
医療廃棄物専用焼却炉	インシナー	HOS-5000G	1	管理
EOG 殺菌乾燥燻蒸装置	日本リメイク	C X -3 特型	1	管理
エレコンパック電動式移動棚	文祥堂	A 4-5 特型	1	管理
電話交換機	日立製作所	C X -90000- M 1	1	管理
放射線管理総合システム (研究所関係)	アロカ	MSR - 3000	1	管理
がん研究情報解析システム	日本電気	Express5800/140Rb	1	
大会議室映像・光学・同時通訳システム	日本電気	特型	1	
視聴覚室・光学システム	日本電気	特型	1	
がん診療ネットワークシステム	インテック	特型	1	
超遠心機	日立工機	70P-72	2	
DNA シークエンサ	アプライドバイオシステムズジャパン	PRISM3100	1	
イメージングアナライザ	富士写真フイルム	BAS-2500Mac	1	
フローサイトメーター	日本ベクトン・ディッキンソン	FACS Calibur HG	1	
プロテイン・シーケンサー	アプライドバイオシステムズジャパン	473A	1	
超遠心機	ベックマンコールター	OptimaXL-90	1	
レーザー蛍光顕微鏡	オリンパス光学工業	GB200X-SP	1	
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機	FLC-009W	1	
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機	FRC-Y15A	1	
動物排水処理システム	壽化工機	SB10500	1	
顕微鏡画像解析装置	オリンパス光学工業	LSM-GB200	1	
純水製造システム	日本ミリポア	ミリ RX45/ ミリ Q	1	
中央実験台等	イトーキ	特型	1	
動物飼育設備	ダイダン	特型	1	
共焦点顕微鏡	バイオラド	Radiance 2100/K2	1	
蛍光イメージアナライザ	アマシャム・ファルマシア	Fluorimager595	1	
細胞調整システム	日本エアテック	プレハブ式特型	1	
X線照射調整システム	日立メディコ	MBR-1520R3	1	
フローサイトメーター	日本ベクトン・ディッキンソン	FACS Calibur HG 4 カラー	1	
生体分子間相互作用解析装置	ピアコア	Biacore X システム	1	
共焦点レーザー顕微鏡	カールツァイス	LSM510MATE-ACC	1	
X線照射装置	日立メディコ	日立メディコ・MBR-1520R3	1	
高速遺伝子多型解析装置	アプライドバイオシステムズジャパン	3130 X 1-230 ジェネティックアナライザ	1	
質量分析システム	エービー・サイエックス	4800 Plus MALDI TOF/TOF Analyzer	1	
In vivo イメージング装置	Xenogen 社	IVIS Lumina II	1	

主な付属設備

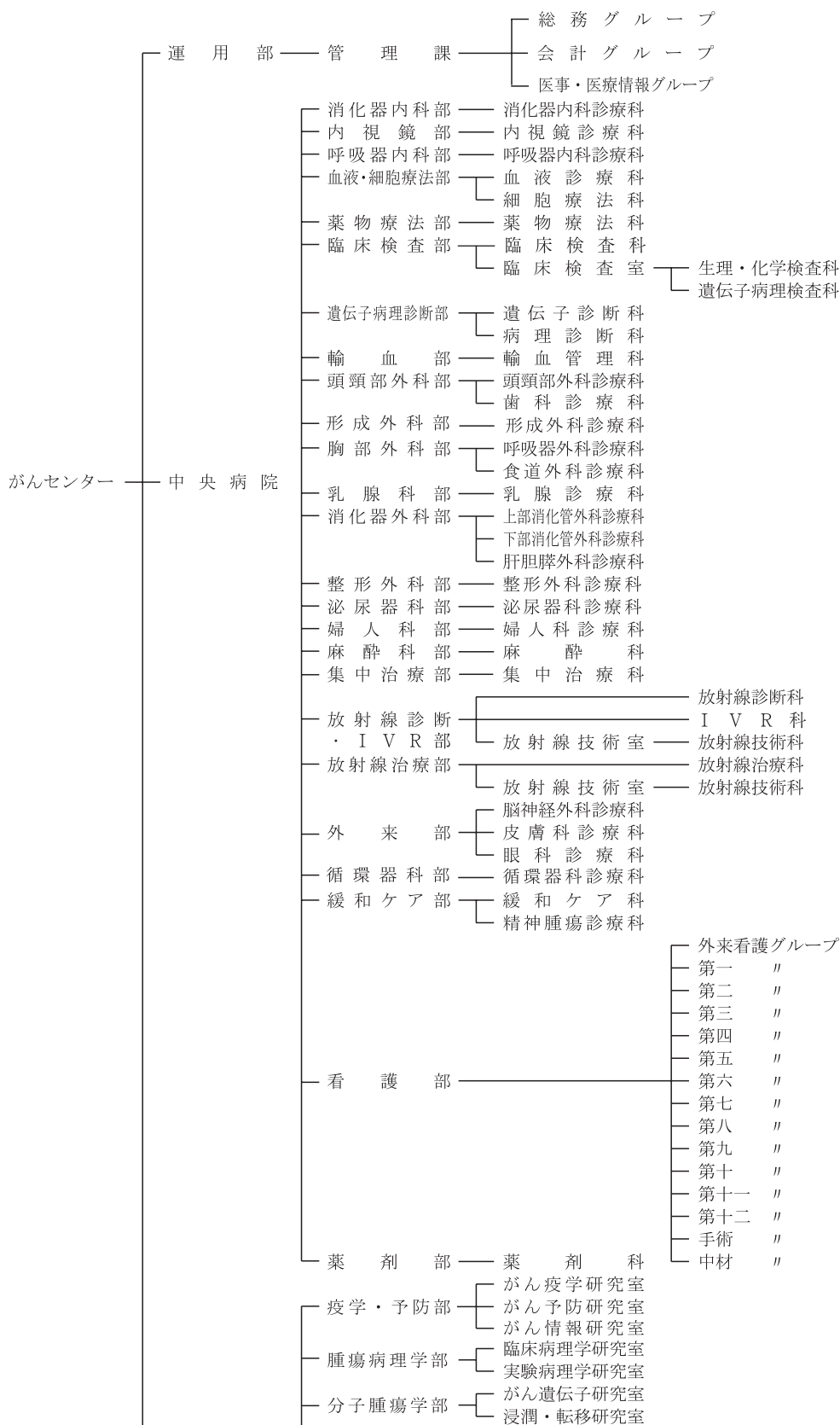
(平成22年度末現在)

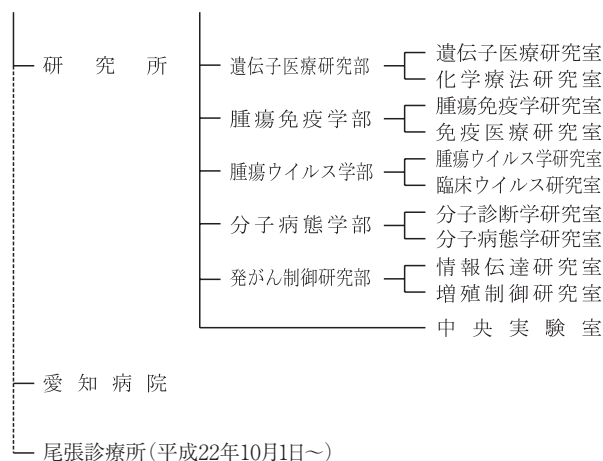
設備名	設備機械	数量	備考
空気換気設備	ターボ冷凍機	2	450冷凍トン
	〃	1	高効率450冷凍トン
	二重効用吸収式冷凍機	1	450冷凍トン
	ヒートポンプチラー	3	43.8冷凍トン
	パツケーージ	12	
	ガス焚吸収式冷温水発生機	2	60冷凍トン
	直焚式冷温水発生機	3	200冷凍トン
	冷却塔	10	
	炉筒煙管ボイラー	2	6,000kg/h
	小型貫流ボイラー	3	2,000kg/h
	空気調和機	116	
	給排風機	203	
医療ガス設備	液体酸素貯蔵タンク	1	5,000l
	真空ポンプ(吸引用)	4	3.7KW
	液体窒素貯蔵タンク	1	
	純生空気用混合器	1	
電気設備	特高変電室	1	受電用変圧器 2台
	変電室	6	変圧器 47台
	発電機	1	ガスタービン 6.6KV 2000KVA
	〃	1	コージェネレーションガスエンジン 6.6KV 610KW
	〃	1	ディーゼル 200V 305KVA
	〃	1	ガスタービン 200V 500KVA
	発電システム装置	1	小水力 9KW
	電話交換機	1	内線 2,000回線
	昇降機	20	エレベーター18台, エスカレーター2台
井戸設備	地下水膜ろ過装置	1	300トン

第2節 組織

第1 組織

運用部、病院及び研究所の3部門からなり、平成22年度における組織は次のとおりである。





第2 人事

平成22年度における主な役職名は次のとおりである。

主な役職者一覧

(平成23年3月31日現在)

役職名	氏名	備考	役職名	氏名	備考
総長	二村 雄次	(事務取扱)病院事業庁長	整形外科部長	杉浦 英志	
(運用部)			泌尿器科部長	林 宣男	
運用部長	中村 和重		婦人科部長	中西 透	
管理課長	安藤 正嗣		麻酔科部長	細田 蓮子	
(病院)			集中治療部長	波戸岡 俊三	
院長	篠田 雅幸		放射線診断・IVR部長	稲葉 吉隆	
副院長	森島 泰雄		放射線治療部長	古平 毅	
〃	光富 徹哉		外来部長	堀尾 芳嗣	
〃	兵藤 千草		循環器科部長	波多野 潔	
消化器内科部長	山雄 健次		緩和ケア部長	細田 蓮子	麻酔科部長(兼)
内視鏡部長	丹羽 康正		看護部長	兵藤 千草	副院長(兼)
呼吸器内科部長	樋田 豊明		薬剤部長	大石 和明	
血液・細胞療法部長	森島 泰雄	副院長(兼)	(研究所)		
薬物療法部長	室 圭		研究所長	田島 和雄	
臨床検査部長	谷田部 恭	遺伝子病理診断部長(兼)	副所長	瀬戸 加大	
遺伝子病理診断部長	谷田部 恭		疫学・予防部長	田中英夫	
輸血部長	森島 泰雄	副院長(兼)	腫瘍病理学部長	近藤 英作	
頭頸部外科部長	長谷川 泰久		分子腫瘍学部長	関戸 好孝	
胸部外科部長	光富 徹哉	副院長(兼)	遺伝子医療研究部長	瀬戸 加大	副所長(兼)
乳腺科部長	岩田 広治		腫瘍免疫学部長	葛島 清隆	
			腫瘍ウイルス学部長	鶴見 達也	
			分子病態学部長	青木 正博	
			発がん制御研究部長	稲垣 昌樹	

職員の年度別定員数及び現員数の変遷は次のとおりである。

職 種 別 職 員 定 員 数

職 種	部 門	総 数				運 用 部				病 院				研 究 所			
		20	21	22		20	21	22		20	21	22		20	21	22	
				4月	10月			4月	10月			4月	10月			4月	10月
総 数		586	643	645	661	51	50	48	51	483	542	546	559	52	51	51	51
事 務		26	26	26	26	26	26	26	26	-	-	-	-	-	-	-	-
M S W		1	1	1	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
医 師		97	100	100	111	1	1	1	1	66	69	69	80	30	30	30	30
研 究 員		12	12	12	12	-	-	-	-	-	-	-	-	12	12	12	12
診 療 放 射 線 技 師		22	22	22	23	-	-	-	-	22	22	22	23	-	-	-	-
薬 剤 師		13	14	17	17	-	-	-	-	13	14	17	17	-	-	-	-
検 査 技 師		29	29	29	29	-	-	-	-	29	29	29	29	-	-	-	-
臨 床 工 学 技 士		-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
理 学 療 法 士		-	2	2	2	-	-	-	-	-	2	2	2	-	-	-	-
看 護 師		343	397	399	400	-	-	-	-	343	397	399	400	-	-	-	-
看 護 助 手		10	9	7	7	-	-	-	-	10	9	7	7	-	-	-	-
給 食 関 係 職 員		20	19	19	22	20	19	19	22	-	-	-	-	-	-	-	-
病 歴 士		1	1	1	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
保 安 関 係 職 員		2	2	0	0	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
研 究 助 手		10	9	9	9	-	-	-	-	-	-	-	-	10	9	9	9

※平成 22 年度については、9 月 30 日付循環器呼吸器病センター廃止に伴い 10 月 1 日付定数増員があったもの

職 員 現 員 数

(各年度 3 月 31 日現在)

区 分	20 年度	21 年度	22 年度
総 数	582	610	641
指 定 職	0	0	0
行 政 職 (一)	55	52	56
医 療 職 (一)	75	74	76
医 療 職 (二)	67	69	77
医 療 職 (三)	335	371	388
研 究 職	50	44	44

第2章 管理業務

第1節 会計業務

第1 決算の概況

平成22年度の事業収益は161億8,406万円で、前年度（148億9,959万円）に比べ12億8,446万円（8.6%）増加し、事業費用は151億1,435万円で、前年度（143億4,831万円）に比べ、7億6,604万円（5.3%）増加となっている。

平成22年度は、10億6,970万円の利益が発生したが、前年

度の純利益（5億5,128万円）に比べ、5億1,842万円（94.0%）の増加となっている。

平成22年度末現在の累積欠損金は87億813万円で、前年度末（97億7783万円）に比べ、10.9%の減少となっている。

損益計算書

科 目	平成20年度	平成21年度	平成22年度		
	金 額	金 額	金 額	前年度比	対前年度増減額
	円	円	円	%	円
事業収益	14,223,220,382	14,899,594,521	16,184,062,188	108.6	1,284,467,667
医業収益	12,665,131,090	13,422,350,973	14,062,271,332	104.8	639,920,359
うち一般会計負担金	1,306,908,000	1,230,942,000	1,255,359,000	102.0	24,417,000
医業外収益	1,558,089,292	1,477,243,548	1,926,914,046	130.4	449,670,498
うち一般会計負担金	1,372,826,000	1,291,682,000	1,445,707,000	111.9	154,025,000
一般会計補助金	0	0	0	-	0
特別利益	0	0	194,876,810	-	194,876,810
事業費用	14,010,290,704	14,348,314,461	15,114,356,725	105.3	766,042,264
医業費用	13,363,272,357	13,767,121,694	14,512,371,828	105.4	745,250,134
医業外費用	647,018,347	581,192,767	471,640,417	81.2	△ 109,552,350
特別損失	0	0	130,344,480	-	130,344,480
当年度純利益（△純損失）	212,929,678	551,280,060	1,069,705,463	-	518,425,403

貸借対照表

科 目	平成20年度末	平成21年度末	平成22年度末		
	金 額	金 額	金 額	前年度比	対前年度増減額
	円	円	円	%	円
資産の部					
固定資産	16,552,875,420	16,098,600,005	15,844,034,487	98.4	△ 254,565,518
流動資産	3,462,382,416	2,975,099,337	3,363,462,289	113.1	388,362,952
繰延勘定	231,793,849	216,813,273	204,818,435	94.5	△ 11,994,838
資産合計	20,247,051,685	19,290,512,615	19,412,315,211	100.6	121,802,596
負債の部					
固定負債	0	0	0	-	0
流動負債	1,541,275,330	1,226,237,093	1,372,738,645	111.9	146,501,552
負債合計	1,541,275,330	1,226,237,093	1,372,738,645	111.9	146,501,552
資本の部					
資本金	30,572,584,958	30,350,729,106	29,953,371,404	98.7	△ 397,357,702
剰余金	7,662,309,850	7,841,384,809	8,294,338,092	105.8	452,953,283
欠損金	△ 10,329,118,453	△ 9,777,838,393	△ 8,708,132,930	89.1	1,069,705,463
病院間調整勘定	△ 9,200,000,000	△ 10,350,000,000	△ 11,500,000,000	111.1	△ 1,150,000,000
資本合計	18,705,776,355	18,064,275,522	18,039,576,566	99.9	△ 24,698,956
負債資本合計	20,247,051,685	19,290,512,615	19,412,315,211	100.6	121,802,596

第2 資本的収入・支出の概況

平成22年度の資本的収入は78億6,278万円であり、前年度(33億7,679万円)に比較して25億9,051万円の減少となっている。

また、資本的支出は11億8,295万円であり、前年度(37億9,322万円)に比較して26億1,026万円の減少となっている。

資本的収入及び支出

科 目	平成20年度		平成21年度		平成22年度		
	金 額	比率	金 額	比率	金 額	比率	対前年度増減額
	円	%	円	%	円	%	円
資 本 的 収 入	1,998,880,000	100.0	3,376,795,144	100.0	786,278,264	100.0	△ 2,590,516,880
企 業 債	1,689,700,000	84.5	3,174,410,000	94.0	342,000,000	43.5	△ 2,832,410,000
他 会 計 負 担 金	307,626,000	15.4	197,915,000	5.9	440,864,000	56.1	242,949,000
国 庫 支 出 金	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0
雑 収 入	1,554,000	0.1	4,470,144	0.1	3,414,264	0.4	△ 1,055,880
資 本 的 支 出	2,265,652,455	100.0	3,793,220,095	100.0	1,182,955,674	100.0	△ 2,610,264,421
建 設 改 良 費	2,310,000	0.1	6,300,000	0.2	88,908,644	7.5	82,608,644
資 産 購 入 費	362,026,738	16.0	390,654,243	10.3	354,689,328	30.0	△ 35,964,915
企 業 債 償 還 金	1,901,315,717	83.9	3,396,265,852	89.5	739,357,702	62.5	△ 2,656,908,150

第3 事業収益の概況

事業収益は、医業収益と医業外収益に分けられる。

年度106.0、平成22年度111.0となっている。

医業収益の推移は、平成20年度を100とした場合、平成21

医業外収益のほとんどは一般会計負担金である。

医業収益

科 目	平成20年度			平成21年度			平成22年度		
	金 額	割合	指数	金 額	割合	指数	金 額	割合	指数
	円	%		円	%		円	%	
医 業 収 益	12,665,131,090	100.0	100.0	13,422,350,973	100.0	106.0	14,062,271,332	100.0	111.0
入 院 収 益	6,666,217,139	52.6	100.0	7,138,036,494	53.2	107.1	7,805,576,518	55.5	117.1
外 来 収 益	3,840,227,744	30.3	100.0	4,205,726,461	31.3	109.5	4,130,728,855	29.4	107.6
一 般 会 計 負 担 金	1,306,908,000	10.3	100.0	1,230,942,000	9.2	94.2	1,255,359,000	8.9	96.1
そ の 他 医 業 収 益	851,778,207	6.7	100.0	847,646,018	6.3	99.5	870,606,959	6.2	102.2

(注)「割合」当該年度の医業収益に対する割合

「指数」収益ごとに平成20年度の金額を100とした割合の値

診療報酬額診療行為別割合

科 目	外 来 患 者			入 院 患 者		
	20 年度	21 年度	22 年度	20 年度	21 年度	22 年度
	%	%	%	%	%	%
総 数	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0
基 本 診 療 料	32.3	45.5	31.7	202.8	207.5	209.2
投 薬 料	62.0	75.4	66.5	27.1	32.9	36.6
注 射 料	432.2	403.5	451.7	123.9	151.3	138.3
検 査 料	168.3	170.8	151.9	28.7	34.2	35.8
画 像 診 断 料	216.6	225.2	206.8	88.1	95.9	97.1
処置及び手術麻酔料	9.1	6.8	10.5	456.0	403.0	407.0
理 学 療 法 料	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.4
そ の 他	79.6	72.8	80.9	11.8	11.6	11.6
食 事 療 法 費				61.5	63.4	64.0

(注) 輸血料は注射料に含む。

第 4 事業費用の概況

事業費用は、医業費用と医業外費用に分けられる。

事業費用のほとんどは医業費用であり、その大部分は給与費

及び材料費である。医業費用の推移は、平成 20 年を 100 とし

た場合、平成 21 年度 103.0%、平成 22 年度 108.6%となっている。

医 業 費 用

科 目	平成 20 年度			平成 21 年度			平成 22 年度		
	金 額	割合	指数	金 額	割合	指数	金 額	割合	指数
	円	%		円	%		円	%	
医 業 費 用	13,363,272,357	100.0	100.0	13,767,121,694	100.0	103.0	14,512,371,818	100.0	108.6
給 与 費	6,359,683,355	47.6	100.0	6,570,233,576	47.7	103.3	7,131,720,338	49.2	112.1
材 料 費	4,280,889,035	32.0	100.0	4,537,446,616	33.0	106.0	4,576,232,333	31.5	106.9
経 費	1,560,769,406	11.7	100.0	1,525,902,564	11.1	97.8	1,670,324,270	11.5	107.0
減 価 償 却 費	800,000,513	6.0	100.0	802,613,043	5.8	100.3	744,192,617	5.1	93.0
資 産 減 耗 費	10,197,753	0.1	100.0	6,616,711	0	64.9	39,308,189	0.3	385.5
研 究 研 修 費	351,732,295	2.6	100.0	324,309,184	2.4	92.2	350,594,081	2.4	99.7

(注) 「割合」当該年度の医業収益に対する割合

「指数」収益ごとに平成 20 年度の金額を 100 とした割合の値

第5 経営分析

総収支比率は107.1%で、前年度（103.8%）に比べ3.3ポイント高くなっている。

また、医業収支比率は96.9%で前年度（97.5%）に比べ0.6ポイント低くなっている。

財務分析表

区 分		計 算 式	20 年 度	21 年 度	22 年 度
資 産 及 び 資 本 構 成 比 率	固定資産構成比率 (%)	$\frac{\text{固定資産}}{\text{総資産}} \times 100$	81.8	83.5	81.6
	固定負債構成比率 (%)	$\frac{\text{固定負債} + \text{借入資本金}}{\text{負債資本合計}} \times 100$	31.1	31.4	29.2
	自己資本構成比率 (%)	$\frac{\text{自己資本} (= \text{自己資本金} + \text{剰余金} - \text{欠損金})}{\text{総資本} (= \text{負債} + \text{資本})} \times 100$	106.8	115.8	123.0
	固定資産対長期資本比率 (%)	$\frac{\text{固定資産}}{\text{資本合計} + \text{固定負債}} \times 100$	88.5	89.1	87.8
	固定比率 (%)	$\frac{\text{固定資産}}{\text{自己資本}} \times 100$	76.6	72.0	66.4
	流動比率 (%)	$\frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}} \times 100$	224.6	242.6	245.0
回 転 率	自己資本回転率 (回)	$\frac{\text{医業収益}}{(\text{期首自己資本} + \text{期末自己資本}) \times 1/2}$	0.59	0.61	0.61
	固定資産回転率 (回)	$\frac{\text{医業収益}}{(\text{期首固定資産} + \text{期末固定資産}) \times 1/2}$	0.76	0.82	0.88
	減価償却率 (%)	$\frac{\text{当年度減価償却費}}{\text{有形固定資産} + \text{無形固定資産} - \text{土地} - \text{建設仮勘定} + \text{当年度減価償却費}} \times 100$	4.70	4.84	4.60
	流動資産回転率 (回)	$\frac{\text{医業収益}}{(\text{期首流動資産} + \text{期末流動資産}) \times 1/2}$	3.45	4.17	4.44
	未収金回転率 (回)	$\frac{\text{医業収益}}{(\text{期首未収金} + \text{期末未収金}) \times 1/2}$	7.75	7.70	7.20
損 益 関 係 比 率	総収支比率 (%)	$\frac{\text{総収益} (= \text{医業収益} + \text{医業外収益} + \text{特別利益})}{\text{総費用} (= \text{医業費用} + \text{医業外費用} + \text{特別損失})} \times 100$	101.5	103.8	107.1
	経常収支比率 (%)	$\frac{\text{経常収益} (= \text{医業収益} + \text{医業外収益})}{\text{経常費用} (= \text{医業費用} + \text{医業外費用})} \times 100$	101.5	103.8	106.7
	医業収支比率 (%)	$\frac{\text{医業収益}}{\text{医業費用}} \times 100$	94.8	97.5	96.9

第2節 図書室等の業務

第1 図書室の業務

図書室は、毎年専門雑誌、専門図書等の整備を図っている。 に関する調査研究をしようとする者)の利用にも供しており、
 なお、図書室は管理規制に基づき、職員以外の者(悪性新生物 蔵書状況は次表のとおりである。

図書蔵書状況 (受入数 - 除籍累計 = 総数)

年度	種類	総数	単行本		専門雑誌	
			洋	和	洋	和
40～19年度受入れ		62,454	11,213	13,824	27,827	9,590
20年度	〃	2,574	163	1,259	415	737
21年度	〃	878	117	662	0	99
22年度	〃	1,306	151	976	26	153
除籍累計		10,990	3,128	3,496	3,395	971
総数		56,222	8,516	13,225	24,873	9,608

第2 レジデント業務

当センターにおける診療業務を通じ、がん専門医を養成する (レジデント) 制度」を昭和61年から発足させた。
 ため、修得期間を2年とする「がんセンター病院診療嘱託員(レ

レジデント履修状況

区分	総数	消化器内科 コース	呼吸器内科 コース	腫瘍内科・ 血液内科 コース	頭頸部外科 コース	胸部外科・ 乳腺科 コース	消化器外科 コース	泌尿器・婦 人科・整形 外科コース	放射線診 断コース	放射線治 療コース	麻酔科 コース	遺伝子理 論断 コース
61～17年度	494	62	48	16	62	82	89	35	65	29	2	4
18年度	19	2	1	2	2	3	2	1	1	1	-	4
19年度	17	2	-	-	3	4	2	1	2	2	-	1
20年度	39	5	1	5	4	7	5	3	2	4	-	3
21年度	44	4	-	5	6	9	6	2	4	4	-	4
22年度	38	4	-	5	4	9	6	2	4	3	-	1
総数	651	79	50	33	81	114	110	44	78	43	2	17

第3 リサーチレジデント業務

当センターにおける研究業務を通じ、がん専門職員を養成する (リサーチレジデント) 制度」を平成13年度から発足させた。
 ため、修得期間を2年とする「がんセンター研究所研究嘱託

リサーチレジデント履修状況

区分	総数	疫学・予防学 コース	腫瘍病理学 コース	分子腫瘍学 コース	遺伝子医療 研究コース	腫瘍免疫学 コース	分子病態学 コース	腫瘍ウイ ルス学コース	発がん制御 研究コース	臨床研究基 礎コース
13～17年度	33	1	3	2	3	4	4	7	4	5
18年度	5	1	-	-	-	1	-	1	1	1
19年度	5	-	1	-	-	-	1	1	1	1
20年度	15	1	3	2	2	1	2	2	2	-
21年度	11	1	1	-	2	1	1	2	3	-
22年度	9	1	1	1	2	1	1	1	1	-
総数	78	5	9	5	9	8	9	14	12	7

第4 医療技術者専門研修業務

がん専門職員の不足が、がん対策推進のあい路となっており、これを解消するため医療技術者の研修を実施することとし、昭和41年度から本格化した。研修の種類として当初、厚生省の委託を受けて行う委託研修、希望に応じて随時行う任意研修、当センターの計画に基づいて行う計画研修の3種類があった

が、委託研修が昭和52年で終了し、現在は、任意研修、計画研修の2本立てである。

なお、研修希望者は、国内に限らず、東南アジアを始め欧米各国に及んでいる。

研修実施状況

区 分		総数	41～ 11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
総 数		5,153	3,716	130	106	143	138	164	164	147	124	135	107	87
委 託 研 修	総 数	496	496	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	医 師	169	169	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	診 療 放 射 線 技 師	114	114	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	臨 床 (衛 生) 検 査 技 師	71	71	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	看 護 師	142	142	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
計 画 研 修	総 数	215	196	2	2	2	0	2	2	2	1	3	2	2
	医 師	141	141	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	診 療 放 射 線 技 師	12	12	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	臨 床 (衛 生) 検 査 技 師	62	43	2	2	2	0	2	1	2	1	3	2	2
任 意 研 修	総 数	4,442	3,017	128	104	141	138	162	162	145	123	132	105	85
	医 師 (病 院)	1,993	1,533	55	38	51	49	49	42	26	26	48	42	34
	〃 (研 究 所)	889	522	32	30	49	40	49	40	41	37	15	17	17
	診 療 放 射 線 技 師 (病 院)	94	82	1	-	-	1	1	2	3	3	-	1	-
	〃 (研 究 所)	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	臨 床 (衛 生) 検 査 技 師 (病 院)	374	285	1	1	12	6	10	19	13	9	10	5	3
	〃 (研 究 所)	77	51	1	-	2	1	3	5	4	3	3	3	1
	看 護 師	155	130	4	2	3	1	3	-	-	4	4	3	1
	研 究 員 (病 院)	20	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	〃 (研 究 所)	86	86	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	そ の 他 (運 用 部)	5	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃 (病 院)	265	100	10	10	5	5	9	17	28	20	35	14	12	
〃 (研 究 所)	483	202	24	23	19	35	38	37	30	21	17	20	17	

第5 知識普及業務

一般県民へのがんの予防啓発や知識の普及は、新聞・テレビ等報道機関に対し、取材協力や資料提供等により行うとともに、各種団体・個人からの依頼に基づき施設見学等を行っている。

一般県民を対象に「がんセンター公開講座」を開催しており、平成22年度は7月から10月までの間に「がん—予防から治療まで—」をメインテーマに国際医学交流センターにおいて3回開催し、延べ414名の受講者があった。

また、毎年9月のがん征圧月間にちなみ開催している「がん

征圧講演会」を、9月18日に同じく国際医学交流センターで講演「がん研究の温故創新」の内容で行い242名の聴講者があった。

更に、9月開催の公開講座の際に「研究所研究内容のパネル展示」を開催し、研究所の活動内容の広報を行った。

この他、研究所として、8月6日に高校生を対象とした実験・体験コースを開催し、10名ががんの研究や基礎医学などの分野で用いられる重要な実験技術を体験した。

第6 がん患者登録及び追跡調査業務

当センターで受診した全てのがん患者の登録を行い、毎年12月に登録患者の追跡調査を行っている。

なお、平成21年までの年次別患者登録数及び平成22年12月の追跡調査結果のあらましは、次表のとおりである。

年次別・部位別がん患者数(男女計) 1964-2009

がんの部位 区分 (ICD10)	全部位 (C00~D09)	食道 がん (C15)	胃がん (C16)	結腸 がん (C18)	直腸 がん (C19~C21)	肝臓 がん (C22)	頭頸部 のがん (C00~C14 C30~C32)	肺がん (C33,C34)	乳房がん (C50)	子宮がん (C53~C55 C58)	泌尿器 のがん (C60~C68)	甲状腺 がん (C73)	悪性リ ンパ腫 (C82,C84, C85,C96)	白血病 (C91~C95)	その他 のがん
昭和39年(1964)	65	2	18	0	2	0	11	5	10	10	2	0	0	0	5
昭和40年(1965)	1,437	43	506	20	58	16	109	99	167	245	19	13	4	19	119
昭和41年(1966)	1,606	51	549	28	68	20	145	101	207	257	19	19	6	17	119
昭和42年(1967)	1,525	40	525	32	62	25	136	114	156	263	24	13	4	12	119
昭和43年(1968)	1,485	36	448	25	49	23	125	115	191	291	23	21	9	20	109
昭和44年(1969)	1,571	42	488	20	68	21	131	120	203	286	19	22	9	10	132
昭和45年(1970)	1,567	48	437	36	62	27	124	124	222	287	21	20	7	23	129
昭和46年(1971)	1,639	45	438	32	59	37	149	125	228	303	21	30	10	12	150
昭和47年(1972)	1,659	46	427	40	70	30	155	152	242	297	20	19	6	17	138
昭和48年(1973)	1,497	41	390	32	73	28	116	132	191	284	12	26	14	13	145
昭和49年(1974)	1,364	54	348	36	61	9	113	121	224	222	14	25	6	9	122
昭和50年(1975)	1,427	38	375	42	65	13	100	133	214	243	9	28	5	19	143
昭和51年(1976)	1,326	39	352	32	92	25	66	119	202	236	12	18	11	2	120
昭和52年(1977)	1,286	37	327	49	85	14	62	111	201	215	8	20	7	15	135
昭和53年(1978)	1,391	53	345	42	74	15	69	133	231	212	15	24	8	9	161
昭和54年(1979)	1,358	36	336	53	49	28	82	132	241	197	12	21	34	9	128
昭和55年(1980)	1,377	45	334	55	71	23	68	136	289	164	15	26	31	15	105
昭和56年(1981)	1,363	43	326	48	73	32	48	143	302	162	16	22	29	11	108
昭和57年(1982)	1,332	34	295	49	69	26	68	151	316	170	9	14	27	13	91
昭和58年(1983)	1,405	49	297	76	85	25	72	154	300	161	12	19	34	13	108
昭和59年(1984)	1,362	41	306	72	67	27	63	139	331	134	6	15	29	16	116
昭和60年(1985)	1,482	35	297	77	77	37	86	157	364	140	12	19	50	3	128
昭和61年(1986)	1,396	37	311	54	74	43	67	134	326	149	8	22	52	6	113
昭和62年(1987)	1,384	34	268	68	74	34	74	156	337	139	14	20	38	10	118
昭和63年(1988)	1,421	39	275	105	57	28	81	167	348	147	6	18	40	11	99
平成元年(1989)	1,261	32	272	64	54	32	86	151	269	141	7	28	32	10	83
平成2年(1990)	1,280	39	246	82	72	45	96	125	243	151	8	30	39	7	97
平成3年(1991)	1,262	39	217	99	68	39	64	134	276	168	6	22	34	9	87
平成4年(1992)	1,344	46	224	84	64	32	94	169	275	175	8	38	30	6	99
平成5年(1993)	1,464	48	261	125	74	62	88	184	300	143	10	26	39	8	96
平成6年(1994)	1,469	62	264	100	84	42	94	180	298	152	24	23	45	3	98
平成7年(1995)	1,463	46	249	111	74	49	113	178	287	106	57	24	36	1	132
平成8年(1996)	1,462	51	202	96	66	49	124	200	290	106	74	29	32	7	136
平成9年(1997)	1,598	43	235	110	67	60	144	219	307	129	61	23	24	9	167
平成10年(1998)	1,684	56	250	120	68	67	134	246	296	144	68	30	31	11	163
平成11年(1999)	1,810	66	245	101	84	64	141	277	364	116	73	30	29	11	209
平成12年(2000)	1,812	65	252	113	63	55	168	275	309	136	74	27	38	13	224
平成13年(2001)	1,922	114	242	122	94	58	158	291	326	153	71	44	38	10	201
平成14年(2002)	2,049	106	257	134	110	61	198	314	314	141	88	44	40	10	232
平成15年(2003)	2,085	113	242	150	110	54	201	305	293	144	116	43	46	7	261
平成16年(2004)	2,162	130	270	131	108	61	203	297	295	174	115	52	41	7	278
平成17年(2005)	2,223	139	286	147	147	73	206	317	296	143	102	36	42	5	284
平成18年(2006)	2,192	146	304	144	155	55	193	307	285	117	156	43	53	5	229
平成19年(2007)	2,359	152	295	154	152	61	178	332	329	152	138	50	57	5	304
平成20年(2008)	2,079	103	283	135	130	28	124	262	339	148	132	46	44	3	302
平成21年(2009)	2,709	150	292	159	157	68	241	367	412	224	218	47	33	0	341
合計	72,414	2,754	14,406	3,604	3,645	1,721	5,368	8,303	12,446	8,277	1,954	1,229	1,273	451	6,983

※平成8年までは、ICD9による集計

年次別・部位別がん患者割合 (%) (男女計) 1964-2009

がんの部位 区分 (ICD10)	全部位 (C00~D09)	食道 がん (C15)	胃がん (C16)	結腸 がん (C18)	直腸 がん (C19~C21)	肝臓 がん (C22)	頭頸部 のがん (C00~C14 C30~C32)	肺がん (C33,C34)	乳房がん (C50)	子宮がん (C53~C55 C58)	泌尿器 のがん (C60~C68)	甲状腺 がん (C73)	悪性リ ンパ腫 (C82,C84, C85,C96)	白血病 (C91~C95)	その他 のがん
昭和 39 年 (1964)	100.0	3.1	27.7	0.0	3.1	0.0	16.9	7.7	15.4	15.4	3.1	0.0	0.0	0.0	7.7
昭和 40 年 (1965)	100.0	3.0	35.2	1.4	4.0	1.1	7.6	6.9	11.6	17.1	1.3	0.9	0.3	1.3	8.3
昭和 41 年 (1966)	100.0	3.2	34.2	1.7	4.2	1.2	9.0	6.3	12.9	16.0	1.2	1.2	0.4	1.1	7.4
昭和 42 年 (1967)	100.0	2.6	34.4	2.1	4.1	1.6	8.9	7.5	10.2	17.2	1.6	0.9	0.3	0.8	7.8
昭和 43 年 (1968)	100.0	2.4	30.2	1.7	3.3	1.6	8.4	7.7	12.9	19.6	1.6	1.4	0.6	1.3	7.3
昭和 44 年 (1969)	100.0	2.7	31.1	1.3	4.3	1.3	8.4	7.6	12.9	18.2	1.2	1.4	0.6	0.6	8.4
昭和 45 年 (1970)	100.0	3.1	27.9	2.3	4.0	1.7	7.9	7.9	14.2	18.3	1.3	1.3	0.4	1.5	8.2
昭和 46 年 (1971)	100.0	2.7	26.7	2.0	3.6	2.3	9.1	7.6	13.9	18.5	1.3	1.8	0.6	0.7	9.2
昭和 47 年 (1972)	100.0	2.8	25.7	2.4	4.2	1.8	9.3	9.2	14.6	17.9	1.2	1.2	0.4	1.0	8.3
昭和 48 年 (1973)	100.0	2.7	26.1	2.1	4.9	1.9	7.7	8.8	12.8	19.0	0.8	1.7	0.9	0.9	9.7
昭和 49 年 (1974)	100.0	4.0	25.5	2.6	4.5	0.7	8.3	8.9	16.4	16.3	1.0	1.8	0.4	0.7	8.9
昭和 50 年 (1975)	100.0	2.7	26.3	2.9	4.6	0.9	7.0	9.3	15.0	17.0	0.6	2.0	0.4	1.3	10.0
昭和 51 年 (1976)	100.0	2.9	26.6	2.4	6.9	1.9	5.0	9.0	15.2	17.8	0.9	1.4	0.8	0.2	9.0
昭和 52 年 (1977)	100.0	2.9	25.4	3.8	6.6	1.1	4.8	8.6	15.6	16.7	0.6	1.6	0.5	1.2	10.5
昭和 53 年 (1978)	100.0	3.8	24.8	3.0	5.3	1.1	5.0	9.6	16.6	15.2	1.1	1.7	0.6	0.6	11.6
昭和 54 年 (1979)	100.0	2.7	24.7	3.9	3.6	2.1	6.0	9.7	17.8	14.5	0.9	1.5	2.5	0.7	9.4
昭和 55 年 (1980)	100.0	3.3	24.3	4.0	5.1	1.7	4.9	9.9	21.0	11.9	1.1	1.9	2.2	1.1	7.6
昭和 56 年 (1981)	100.0	3.2	23.9	3.5	5.4	2.3	3.5	10.5	22.2	11.9	1.2	1.6	2.1	0.8	7.9
昭和 57 年 (1982)	100.0	2.6	22.1	3.7	5.2	2.0	5.1	11.3	23.7	12.8	0.7	1.0	2.0	1.0	6.8
昭和 58 年 (1983)	100.0	3.5	21.1	5.4	6.0	1.8	5.1	11.0	21.4	11.5	0.9	1.3	2.4	0.9	7.7
昭和 59 年 (1984)	100.0	3.0	22.5	5.3	4.9	2.0	4.6	10.2	24.3	9.8	0.5	1.1	2.1	1.2	8.5
昭和 60 年 (1985)	100.0	2.4	20.0	5.2	5.2	2.5	5.8	10.6	24.6	9.4	0.8	1.3	3.4	0.2	8.6
昭和 61 年 (1986)	100.0	2.6	22.3	3.9	5.3	3.1	4.8	9.6	23.3	10.7	0.6	1.6	3.7	0.4	8.1
昭和 62 年 (1987)	100.0	2.5	19.4	4.9	5.4	2.5	5.4	11.3	24.3	10.0	1.0	1.4	2.7	0.7	8.5
昭和 63 年 (1988)	100.0	2.7	19.4	7.4	4.0	2.0	5.7	11.7	24.5	10.3	0.4	1.3	2.8	0.8	7.0
平成元年 (1989)	100.0	2.5	21.6	5.1	4.3	2.5	6.8	12.0	21.3	11.2	0.6	2.2	2.5	0.8	6.6
平成2年 (1990)	100.0	3.1	19.2	6.4	5.6	3.5	7.5	9.8	19.0	11.8	0.6	2.3	3.1	0.5	7.6
平成3年 (1991)	100.0	3.1	17.2	7.8	5.4	3.1	5.1	10.6	21.9	13.3	0.5	1.7	2.7	0.7	6.9
平成4年 (1992)	100.0	3.4	16.7	6.2	4.8	2.4	7.0	12.6	20.5	13.0	0.6	2.8	2.2	0.4	7.4
平成5年 (1993)	100.0	3.3	17.8	8.5	5.0	4.2	6.0	12.6	20.5	9.8	0.7	1.8	2.7	0.5	6.6
平成6年 (1994)	100.0	4.2	18.0	6.8	5.7	2.9	6.4	12.2	20.3	10.3	1.6	1.6	3.1	0.2	6.7
平成7年 (1995)	100.0	3.1	17.0	7.6	5.1	3.4	7.7	12.2	19.6	7.2	3.9	1.6	2.5	0.1	9.0
平成8年 (1996)	100.0	3.5	13.8	6.6	4.5	3.3	8.5	13.7	19.8	7.2	5.1	2.0	2.2	0.5	9.3
平成9年 (1997)	100.0	2.7	14.7	6.9	4.2	3.7	9.0	13.7	19.2	8.1	3.8	1.4	1.5	0.6	10.5
平成10年 (1998)	100.0	3.3	14.8	7.1	4.0	4.0	8.0	14.6	17.6	8.6	4.0	1.8	1.8	0.7	9.7
平成11年 (1999)	100.0	3.7	13.5	5.6	4.6	3.5	7.8	15.3	20.1	6.4	4.0	1.7	1.6	0.6	11.6
平成12年 (2000)	100.0	3.6	13.9	6.2	3.5	3.0	9.3	15.2	17.0	7.5	4.1	1.5	2.1	0.7	12.4
平成13年 (2001)	100.0	5.9	12.6	6.3	4.9	3.0	8.2	15.1	17.0	8.0	3.7	2.3	2.0	0.5	10.5
平成14年 (2002)	100.0	5.2	12.6	6.5	5.4	3.0	9.7	15.3	15.3	6.9	4.3	2.1	2.0	0.5	11.3
平成15年 (2003)	100.0	5.4	11.5	7.2	5.3	2.6	9.6	14.6	14.1	6.9	5.6	2.1	2.2	0.3	12.5
平成16年 (2004)	100.0	6.0	12.5	6.1	5.0	2.8	9.4	13.7	13.6	8.1	5.3	2.4	1.9	0.3	12.9
平成17年 (2005)	100.0	6.3	12.9	6.6	6.6	3.3	9.3	14.3	13.3	6.4	4.6	1.6	1.9	0.2	12.8
平成18年 (2006)	100.0	6.7	13.9	6.6	7.1	2.5	8.8	14.0	13.0	5.3	7.1	2.0	2.4	0.2	10.4
平成19年 (2007)	100.0	6.4	12.5	6.5	6.4	2.6	7.5	14.1	13.9	6.4	5.8	2.1	2.4	0.2	12.9
平成20年 (2008)	100.0	5.0	13.6	6.5	6.3	1.3	6.0	12.6	16.3	7.1	6.4	2.2	2.3	0.1	14.5
平成21年 (2009)	100.0	5.5	10.8	5.9	5.8	2.5	8.9	13.5	15.2	8.3	8.1	1.7	1.2	0.0	12.6
合 計	100.0	3.8	19.9	5.0	5.0	2.4	7.4	11.5	17.2	11.4	2.7	1.7	1.8	0.6	9.6

※平成8年までは、ICD9による集計

登録（診断）年次別がん患者の生存数（男女計） 1964－2008

登録（診断）年	症例数	経過年数					
		1年経過	2年経過	3年経過	4年経過	5年経過	10年経過
昭和39年(1964)	65	38	33	31	26	23	15
昭和40年(1965)	1,437	801	637	572	541	508	414
昭和41年(1966)	1,606	965	764	673	640	613	507
昭和42年(1967)	1,525	915	708	619	576	551	443
昭和43年(1968)	1,485	940	746	662	617	582	472
昭和44年(1969)	1,571	981	788	697	630	593	502
昭和45年(1970)	1,567	1,019	803	724	671	629	536
昭和46年(1971)	1,639	1,049	850	768	701	642	535
昭和47年(1972)	1,659	1,104	907	820	753	713	593
昭和48年(1973)	1,497	1,010	844	748	707	667	561
昭和49年(1974)	1,364	948	769	684	638	597	497
昭和50年(1975)	1,427	963	776	704	659	634	553
昭和51年(1976)	1,326	924	755	673	636	602	503
昭和52年(1977)	1,286	908	736	677	630	599	521
昭和53年(1978)	1,391	979	811	742	689	654	550
昭和54年(1979)	1,358	985	822	749	701	669	574
昭和55年(1980)	1,377	1,005	843	775	720	684	582
昭和56年(1981)	1,363	1,016	856	775	737	692	582
昭和57年(1982)	1,332	986	845	763	726	698	564
昭和58年(1983)	1,405	1,048	882	798	734	700	593
昭和59年(1984)	1,362	1,035	873	792	741	709	602
昭和60年(1985)	1,482	1,177	1,007	905	841	810	696
昭和61年(1986)	1,396	1,094	946	857	808	771	648
昭和62年(1987)	1,384	1,100	948	862	787	749	631
昭和63年(1988)	1,421	1,140	991	904	856	829	712
平成元年(1989)	1,261	985	861	800	766	739	624
平成2年(1990)	1,280	1,041	898	839	796	761	661
平成3年(1991)	1,262	1,049	917	846	799	760	661
平成4年(1992)	1,344	1,099	955	887	849	815	698
平成5年(1993)	1,464	1,193	1,037	941	894	858	726
平成6年(1994)	1,469	1,206	1,075	993	930	894	767
平成7年(1995)	1,463	1,190	1,032	935	878	850	718
平成8年(1996)	1,462	1,201	1,054	947	907	859	729
平成9年(1997)	1,598	1,336	1,146	1,041	980	940	750
平成10年(1998)	1,684	1,367	1,198	1,096	1,031	980	768
平成11年(1999)	1,810	1,470	1,271	1,163	1,099	1,056	976
平成12年(2000)	1,812	1,492	1,294	1,195	1,118	1,054	969
平成13年(2001)	1,922	1,557	1,372	1,259	1,176	1,114	465
平成14年(2002)	2,049	1,682	1,447	1,299	1,222	1,181	
平成15年(2003)	2,085	1,719	1,485	1,375	1,278	1,310	
平成16年(2004)	2,162	1,830	1,570	1,434	1,440	1,357	
平成17年(2005)	2,223	1,849	1,619	1,719	1,613	1,507	
平成18年(2006)	2,192	2,070	2,024	1,839	1,722		
平成19年(2007)	2,359	2,027	1,941	1,836			
平成20年(2008)	2,356	1,941	1,405				

登録（診断）年次別がん患者の実測生存率[※]（％）（男女計） 1964－2008

※ K a p l a n - M e i e r 法による

登録（診断）年	経過年数					
	1年経過	2年経過	3年経過	4年経過	5年経過	10年経過
昭和39年(1964)	58.5	50.8	47.7	40.0	35.4	23.1
昭和40年(1965)	55.7	44.3	39.8	37.6	35.4	28.8
昭和41年(1966)	60.1	47.6	41.9	39.9	38.2	31.6
昭和42年(1967)	60.0	46.4	40.6	37.8	36.1	29.0
昭和43年(1968)	63.3	50.2	44.6	41.5	39.2	31.8
昭和44年(1969)	62.4	50.2	44.4	40.1	37.7	32.0
昭和45年(1970)	65.0	51.2	46.2	42.8	40.1	34.2
昭和46年(1971)	64.0	51.9	46.9	42.8	39.2	32.6
昭和47年(1972)	66.5	54.7	49.4	45.4	43.0	35.7
昭和48年(1973)	67.5	56.4	50.0	47.2	44.6	37.5
昭和49年(1974)	69.5	56.4	50.1	46.8	43.8	36.4
昭和50年(1975)	67.5	54.4	49.3	46.2	44.4	38.8
昭和51年(1976)	69.7	56.9	50.8	48.0	45.4	37.9
昭和52年(1977)	70.6	57.2	52.6	49.0	46.6	40.5
昭和53年(1978)	70.4	58.3	53.3	49.5	47.0	39.5
昭和54年(1979)	72.5	60.5	55.2	51.6	49.3	42.3
昭和55年(1980)	73.0	61.2	56.3	52.3	49.7	42.3
昭和56年(1981)	74.5	62.8	56.9	54.1	50.8	42.7
昭和57年(1982)	74.0	63.4	57.3	54.5	52.4	42.3
昭和58年(1983)	74.6	62.8	56.8	52.2	49.8	42.2
昭和59年(1984)	76.0	64.1	58.1	54.4	52.1	44.2
昭和60年(1985)	79.4	67.9	61.1	56.7	54.7	47.0
昭和61年(1986)	78.4	67.8	61.4	57.9	55.2	46.4
昭和62年(1987)	79.5	68.5	62.3	56.9	54.1	45.6
昭和63年(1988)	80.2	69.7	63.6	60.2	58.3	50.1
平成元年(1989)	78.1	68.3	63.4	60.7	58.6	49.5
平成2年(1990)	81.3	70.2	65.5	62.2	59.5	51.6
平成3年(1991)	83.1	72.7	67.0	63.3	60.2	52.4
平成4年(1992)	81.8	71.1	66.0	63.2	60.6	51.9
平成5年(1993)	81.5	70.8	64.3	61.1	58.6	49.6
平成6年(1994)	82.1	73.2	67.6	63.3	60.9	52.2
平成7年(1995)	81.3	70.5	63.9	60.0	58.1	49.1
平成8年(1996)	82.1	72.1	64.8	62.0	58.8	49.9
平成9年(1997)	83.6	71.7	65.1	61.3	58.8	46.9
平成10年(1998)	81.2	71.1	65.1	61.2	58.2	45.6
平成11年(1999)	81.2	70.2	64.3	60.7	58.3	53.9
平成12年(2000)	82.3	71.4	65.9	61.7	58.2	53.5
平成13年(2001)	81.0	71.4	65.5	61.2	58.0	51.9
平成14年(2002)	82.1	70.6	63.4	59.6	57.6	
平成15年(2003)	82.4	71.2	65.9	61.3	62.8	
平成16年(2004)	84.6	72.6	66.3	66.6	62.8	
平成17年(2005)	83.2	72.8	77.3	72.6	62.8	
平成18年(2006)	94.4	92.3	83.9	69.2		
平成19年(2007)	85.9	82.3	75.1			
平成20年(2008)	88.4	86.0				

第3章 病院業務

第1節 概要

当部門において、がんの診断及び診察を行うため、次の診療科を置き、業務を行っている。

<診療科目>消化器内科、呼吸器内科、血液内科、薬物療法内科、臨床検査科、病理診断科、循環器内科、頭頸部外科、形成外科、胸部外科、乳腺科、消化器外科、整形外科、泌尿器科、

皮膚科、婦人科、麻酔科、放射線診断科、放射線治療科、脳神経外科、眼科、歯科、緩和ケア内科計23診療科診断については、原則として総合診断方式、すなわち初診医師の指示により諸検査を行い、検査終了後関係医師団による総合診断を行い、その治療方針及び担当部を決定している。

第2節 診断、治療及び社会復帰業務

第1 外来患者状況

初診患者は、開院以来昭和39年12月1日～平成23年3月31日) 402,625人となり、性別比率は男37.4%、女62.6%、住所別では、

愛知県81.0% (このうち名古屋市43.8%)、愛知県以外は19.0%となっている。

外来患者状況

区分	平成20年度	平成21年度	平成22年度	昭和39年～平成22年度
外来患者数	6,697	6,193	5,557	403,651
外来患者延数	153,514	154,001	149,769	5,429,945
実外来診療日数	243	242	243	12,674
1日平均患者数	631.7	636.4	616.3	428.4
平均通院回数	22.9	24.9	27.0	13.5

初診患者数（性別）

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		昭和39年～平成22年度	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
総数	6,697	108.1	6,193	111.4	5,557	100.0	402,625	100.0
男	2,647	42.7	2,654	47.8	2,398	43.2	150,718	37.4
女	4,050	65.4	3,539	63.7	3,159	56.8	251,907	62.6

初診患者住所地別割合

区分	平成20年度	平成21年度	平成22年度	昭和39年～平成22年度
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
愛知県	76.2	77.1	76.1	81.0
(名古屋市)	(42.6)	(39.4)	(40.6)	(43.8)
(その他)	(33.6)	(37.7)	(35.5)	(37.2)
岐阜県	9.9	10.0	8.8	9.1
三重県	9.5	8.8	10.1	6.4
静岡県	0.6	0.6	0.6	1.0
その他	3.8	3.5	4.4	2.5

第2 入院患者状況

入院患者は、開院以来（昭和39年12月21日～平成23年3月31日）177,938人となり、性別比率は男51.3%、女48.7%、住所地別では、愛知県76.8%（このうち名古屋市39.2%）、愛知県以外は23.2%となっている。

入院患者状況

区 分		平成20年度	平成21年度	平成22年度	昭和39年～平成22年度
入院患者数	総数	9,936	10,175	10,020	・
	繰越	375	375	396	・
	新入院	9,561	9,800	9,624	177,938
退院患者数	総数	9,561	9,800	9,624	177,563
	死亡	429	442	455	16,018
	その他	9,132	9,358	9,169	161,545
入院患者延数	152,710	154,884	154,352	6,096,698	
1日平均患者数	418.4	424.3	422.9	・	
平均在院日数	15.0	14.8	15.1	・	
病床利用率	88.5	89.7	89.4	・	
死亡率	4.5	4.5	4.7	・	

新入院患者数（性別）

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		昭和39年～平成22年度	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
総数	9,561	100.0	9,800	100.0	9,624	100.0	177,938	100.0
男	5,359	56.1	5,626	57.4	5,422	56.3	91,315	51.3
女	4,202	43.9	4,174	42.6	4,202	43.7	86,623	48.7

入院患者住所地別割合

区 分	平成20年度	平成21年度	平成22年度	昭和39～平成22年度
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
愛知県	72.4	74.6	75.3	76.8
（名古屋市）	(32.8)	(33.4)	(36.1)	(39.2)
（その他）	(39.6)	(41.2)	(39.2)	(37.6)
岐阜県	12.6	11.2	9.9	10.6
三重県	10.5	10.1	10.4	8.1
静岡県	0.5	0.5	0.6	1.0
その他	4.0	3.6	3.8	3.5

第3 社会復帰業務

健康医療相談では、一般予防に関する資料を配布している。

また、術後患者の社会生活をサポートするために、専門の看護師がリマンマ・ストーマ相談を行っている。

平成6年度からは医療ソーシャルワーカーが配置され、患者・家族の経済的、心理社会的相談に対応している。

また、平成19年度からは相談支援室を開設、平成21年度からは乳腺科外来に乳がん認定看護師を配置し、手術前のオリエンテーションは認定看護師が主に担当するようになったため、乳腺看護相談件数が飛躍的に増加した。

毎週月曜日には、日本喉頭摘出者団体連合会愛友会による、喉頭がん術後患者のための発声訓練指導が行われ、約30名の患者が参加している。

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	件数	1月平均	件数	1月平均	件数	1月平均
人工肛門(ストーマ)相談	185	15.4	200	16.7	232	19.3
乳腺(リマンマ)相談	15	1.3	360	30.0	269	22.4
乳腺看護相談	40	3.3	400	33.3	14	1.2
医療社会福祉相談	4,258	354.8	4,926	410.5	4,570	380.8
〔内訳 電話相談〕	〔2,637〕	〔219.8〕	〔3,343〕	〔278.6〕	〔2,821〕	〔235.1〕
〔面接相談〕	〔1,621〕	〔135.1〕	〔1,583〕	〔131.9〕	〔3,183〕	〔265.3〕

第4 放射線診断及び治療業務

1. 診断業務

平成20年度を100とした場合、照射回数は21年度101.1、22年度98.3、アイソトープ検査件数は、21年度92.9、22年度

87.1、超音波断層撮影件数は、21年度84.4、22年度60.6となっている。

放射線照射回数（診断）

直接撮影・方法別取扱件数

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	45,778	188.4	46,299	191.3	45,001	185.2
単 純 撮 影	39,820	163.9	40,378	166.9	39,035	160.6
造 影 撮 影	5,015	20.6	4,979	20.6	4,988	20.5
特 殊 撮 影	943	3.9	942	3.9	978	4.0

アイソトープ検査件数

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	1,329	5.5	1,234	5.1	1,157	4.8
シンチスキャン	1,021	4.2	934	3.9	838	3.4
センチネルリンパ	292	1.2	285	1.2	308	1.3
動態計測	16	0.1	15	0.1	11	0.0

超音波断層撮影件数

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	5,933	24.4	5,009	20.7	3,595	14.8
甲 状 腺	806	3.3	948	3.9	588	2.4
乳 腺	1,375	5.7	836	3.5	775	3.2
腹 部	1,674	6.9	1,721	7.1	1,681	6.9
そ の 他	2,078	8.6	1,504	6.2	551	2.3

2. 治療業務

平成20年度を100とした場合、照射回数は21年度110.5、22年度111.2、となっている。

放射線照射回数（治療）

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		
	回 数	1日平均	回 数	1日平均	回 数	1日平均	
総 数	56,815	233.8	62,784	259.4	63,188	260.0	
放射線物質	コバルト遠隔大量照射	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	R A L S	79	0.3	85	0.4	95	0.4
	小 線 源	25	0.1	23	0.1	19	0.1
その他	リニアック	52,454	215.9	58,039	239.8	58,320	240.0
	C T	1,083	4.5	1,067	4.4	981	4.0
	M R I	2,948	12.1	3,377	14.0	3,577	14.7
	シミュレータ	226	0.9	193	0.8	196	0.8

第5 検査業務

一般臨床検査においては、平成20年度の総件数を100とした場合、21年度104.0、22年度は99.8となっている。

一般臨床検査件数

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	2,812,427	11,573.8	2,925,549	12,089.0	2,805,573	11,545.6
尿 検 査	29,086	119.7	27,821	115.0	27,733	114.1
糞 便 検 査	1,227	5.0	720	3.0	747	3.1
血液学的検査	900,392	3,705.3	1,021,237	4,220.0	919,789	3,785.1
生化学的検査	1,480,405	6,092.2	1,470,775	6,077.6	1,453,125	5,979.9
細菌学的検査	15,077	62.0	15,065	62.3	17,214	70.8
血清学的検査	{ 181,853 (1,688)	{ 748.4 (6.9)	{ 190,445 (1,745)	{ 787.0 (7.2)	{ 193,101 (1,740)	{ 794.7 (7.2)
病理組織検査	8,845	36.4	8,379	34.6	8,303	34.2
癌遺伝子検査	1,324	5.4	1,547	6.4	1,580	6.5
細胞学的検査	8,619	35.5	7,568	31.3	7,345	30.2
その他採血業務 治験処理等	181,894 3,705	748.5 15.2	176,977 3,270	731.3 13.5	173,633 3,003	714.5 12.4

(注) () 内はアイソトープ使用により実施した件数を再掲した。

機能検査件数

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	20,598	84.8	22,089	91.3	22,076	90.8
心電図検査	5,498	22.6	5,593	23.1	5,735	23.6
負荷心電図検査	1,983	8.2	1,908	7.9	1,864	7.7
トレッドミル検査	691	2.8	696	2.9	705	2.9
ホルター心電図検査	419	1.7	359	1.5	381	1.6
心臓超音波検査	2,062	8.5	1,951	8.1	2,221	9.1
肺機能検査	6,611	27.2	6,645	27.5	6,569	27.0
ピロリ菌呼気試験検査	67	0.3	84	0.3	81	0.3
聴力純音検査	79	0.3	119	0.5	102	0.4
乳腺超音波検査	1,272	5.2	796	3.3	719	3.0
骨塩定量検査	3	0.0	0	0.0	0	0.0
血液ガス検査	1,912	7.9	3,933	16.3	3,699	15.2
その他検査	1	0.0	5	0.0	0	0.0

内視鏡検査件数

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	8,834	36.4	8,740	36.1	8,515	35.0
上部消化管	5,012	20.6	4,779	19.7	4,820	19.8
下部消化管	2,537	10.4	2,717	11.2	2,540	10.5
気 管 支	165	0.7	151	0.6	159	0.7
膵胆管造影(ERCP)	148	0.6	157	0.6	90	0.4
超音波内視鏡(EUS)	687	2.8	664	2.7	640	2.6
超音波内視鏡下穿刺生検 (EUS-FNBAB)	285	1.2	272	1.1	266	1.1

内視鏡治療件数

区 分	平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度	
	件 数	1 日平均	件 数	1 日平均	件 数	1 日平均
総 数	842	3.5	905	3.7	913	3.8
食 道 E M R	44	0.2	44	0.2	61	0.3
胃 E M R	83	0.3	91	0.4	82	0.3
大腸 EMR, ポリペク	315	1.3	355	1.5	302	1.2
食 道 狭 窄 拡 張 術	213	0.9	203	0.8	218	0.9
胆 道 ス テ ン ト 留 置 術	131	0.5	166	0.7	183	0.8
乳 頭 切 開 術, 胆 道 砕 石 術	56	0.2	46	0.2	67	0.3

第6 手術業務

部位別手術件数は、次表のとおりである。

手術件数（部位別）

区 分	平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度	
	件 数	1 日平均	件 数	1 日平均	件 数	1 日平均
総 数	2,761	11.4	2,663	11.0	2,637	10.9
頭 頸 部 系	462	1.9	477	2.0	438	1.8
胸 部 系	786	3.2	766	3.2	774	3.2
消 化 器 系	805	3.3	703	2.9	735	3.0
婦 人 科 系	304	1.3	310	1.3	300	1.2
泌 尿 器 系	186	0.8	191	0.8	175	0.7
そ の 他	218	0.9	216	0.9	215	0.9

第3節 看護業務

病棟部門の勤務体制は、平成 21 年度から 7 対 1 看護の 3 交代制をとり、普通病棟では 1 看護単位当り、50 床を担当するもの 7 単位、49 床を担当するもの 1 単位、30 床を担当するもの 1 単位、25 床を担当するもの 2 単位からなり、特殊病棟では、ICU 病棟の 4 床及び HCU 等の病棟の 17 床を担当するもの 1

単位となっている。

その他外来診療を担当する外来部門、手術を担当する手術部門、衛生材料・器具当の滅菌業務を担当する中材部門がある。看護力の配置状況は次表のとおりである。

看護体制

区 分		平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
看 護 単 位 数		15	15	15
配 置 状 況	総 数	353	406	395
	病 棟 部 門	290	343	331
	外 来 部 門	33	34	34
	手 術 部 門	27	26	27
	中 材 部 門	1	1	1
	そ の 他	2	2	2
職 種	総 数	353	406	395
	看 護 師	343	397	388
	看 護 助 手	10	9	7

第4節 薬剤業務

平成20年から平成22年までの薬剤業務の状況は次表のとおりである。

薬 剤 業 務

区 分			平成20年度		平成21年度		平成22年度	
			総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均
処方	枚数	総数	77,728	319.9	75,118	310.4	75,173	309.4
		外来	11,213	46.1	9,211	38.1	8,574	35.3
		入院	66,515	273.7	65,907	272.3	66,599	274.1
	剤数	総数	138,711	570.8	135,593	560.3	137,542	566.0
		外来	24,442	100.6	21,882	90.4	19,499	80.2
		入院	114,269	470.2	113,711	469.9	118,043	485.8
	延剤数	総数	1,435,099	5,905.8	1,374,632	5,680.3	1,086,309	4,470.4
		外来	466,497	1,919.7	399,375	1,650.3	292,969	1,205.6
		入院	968,602	3,986.0	975,257	4,030.0	793,340	3,264.8
治験処方枚数		総数	954	3.9	836	3.5	1,002	4.1
		外来	816	3.4	779	3.2	859	3.5
		入院	138	0.6	57	0.2	143	0.6
注射	枚数 (患者人数)	総数	104,148	428.6	110,407	456.2	104,899	431.7
		外来	21,485	88.4	22,239	91.9	22,330	91.9
		入院	82,663	340.2	88,168	364.3	82,569	339.8
	剤数	総数	494,874	2,036.5	519,211	2,145.5	478,858	1,970.6
		外来	64,337	264.8	68,023	281.1	64,344	264.8
		入院	430,537	1,771.8	451,188	1,864.4	414,514	1,705.8
薬剤管理指導数		人数	2,605	10.7	1,912	7.9	2,397	9.9
		算定件数	3,002	12.4	2,018	8.3	2,640	10.9
外来抗がん剤 調製数*1	調製件数(患者数)	11,034	45.4	14,475	59.8	14,453	59.5	
	調製本数(剤数)	17,262	71.0	22,766	94.1	21,888	90.1	
外来抗がん剤 (治験) 調製数*2	調製件数(患者数)	712	2.9	1,315	5.4	685	2.8	
	調製本数(剤数)	1,123	4.6	1,706	7.0	888	3.7	
入院抗がん剤 (治験を含む) 調製数*3	調製件数(患者数)	50	0.3	2,351	9.7	8,844	36.4	
	調製本数(剤数)	115	0.7	3,286	13.6	11,866	48.8	
麻薬処方せん枚数		5,884	24.2	6,916	28.6	8,237	33.9	
麻薬注射せん枚数		12,345	50.8	13,232	54.7	16,107	66.3	
TDM実施件数*4		93	0.4	59	0.2	62	0.3	

*1 外来抗がん剤調製数は、薬剤師が調製した分のみを計上

*2 外来抗がん剤調製数(治験)は、薬剤師が調製した分のみを計上

*3 入院抗がん剤調製数(治験を含む)は、薬剤師が調製した分のみを計上(平成20年度から集計)

*4 TDM実施件数は平成20年度から集計

第5節 給食業務

平成20年度から平成22年度までの患者給食の状況は、次表のとおりである。

患者給食実施状況

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		
	総 数	%	総 数	%	総 数	%	
入 院 患 者 延 数	152,710	・	154,884	・	154,352	・	
給 食 数 (配膳延人数)	総数	111,096	100.0	115,668	100.0	121,252	100.0
	一般食	93,617	84.3	97,493	84.3	101,263	83.5
	特別食	17,479	15.7	18,175	15.7	19,989	16.5
給 食 率	・	72.7	・	74.7	・	78.6	

第6節 血液管理業務

平成20年度から平成22年度までの血液管理業務は、次表のとおりである。

輸 血 状 況

1 血液使用量

(単位：件)

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	総 数	月 平 均	総 数	月 平 均	総 数	月 平 均
自 己 血 液	431	35.9	385	32.1	325	27.1
全 血 液	-	-	-	-	-	-
赤 血 球 製 剤	16	1.3	2	0.17	16	1.3
赤 血 球 濃 厚 液	4,908	409.0	5,578	464.8	5,396	449.7
凍 結 血 漿	754	62.8	934	77.8	684	57.0
血 小 板	15,995	1332.9	16,565	1380.4	15,395	1282.9

2 検査件数

(単位：件)

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	総 数	月 平 均	総 数	月 平 均	総 数	月 平 均
ク ロ ス マ ッ チ	2,903	241.9	3,425	285.4	3,195	266.3
血 液 型 (A B O)	3,309	275.8	3,314	276.2	3,554	296.2
R H 因 子	3,309	275.8	3,314	276.2	3,554	296.2
間 接 ク ー ム ス 試 験	8,827	735.6	9,616	801.3	9,198	766.5
抗 体 ス ク リ ー ニ ン グ	5,913	492.8	6,181	515.1	5,981	498.4
直 接 ク ー ム ス 試 験	12	1.0	17	1.4	27	2.3

(注) ・全血製剤は血液200mlを1単位，成分製剤は血液200mlを由来する成分を1単位とする。

・直接クーモス試験は平成9年度より，臨床検査部から血液管理部へ移管。

第4章 研究業務

第1節 概要

当がんセンターにおいては、がん患者の診断治療を行うのみならず、がんの研究機関としての研究業務も設置目的に含まれており、病院部門における臨床医学的研究と、研究部門における基礎医学的研究と相まって、当センターの機能を発揮している。

その研究体制は、研究所における人当研究、病院における課題別研究、病院及び研究所両部門による共同研究並びに受託研究の四つに大別され、各研究テーマの研究が実施されている。

第2節 研究業務

第1 研究所部門の研究業務

当部門における定型的な研究単位は部であり、その構成はおおむね部長1名、室長2名、研究員2名、研究助手1～2名であり、総計9部により研究所を構成している。

また、研究課題についても、これらの室ごとにそれぞれ研究テーマを受け持っているが、必ずしも独立して研究を行うのではなく、部門において相互に有機的な連携をはかり研究を行っており、また「部」においても他部と密接な連携を保ち研究業務を実施している。

務を実施している。

これらの研究に要する経費には、人当研究費が当てられ、その研究課題は次表のとおりである。また、文部科学省の委託による研究も実施している。なお、これらの研究の成果を全国あるいは地方の各学会等に発表した件数は20年度217件、21年度233件、22年度209件となっている。

研究所における部別研究課題

(平成22年度)

部 名	研 究 課 題
研 究 所 長	日本と東アジア諸国における民族疫学研究
疫 学 ・ 予 防 部	1 がん統計情報の構築に必要な地域がん登録の精度向上を目指した記述疫学研究 2 がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用を解明するための病院疫学研究 3 「健康日本21あいち」に基づく愛知県民のためのがん予防啓発技術の開発研究 4 がん治療の長期予後(効果)に影響する要因の分析
腫 瘍 病 理 学 部	1 難治性がん(難治性消化器がん、呼吸器がん、血液系・神経系腫瘍など)の分子病理学的特徴解析の研究 2 難治性がんに対する分子治療学的技術開発の基盤研究 3 胃がん・大腸がん発生・増殖進展・転移の分子機序の研究 4 病理剖検症例の病理組織学的研究
分 子 腫 瘍 学 部	1 肺がんの発症・進展機序の解明と分子標的療法の探索 2 中皮腫の発がん機序の解明と細胞生物学的研究 3 消化器がんの発症におけるエピジェネティクス関与の解明
遺 伝 子 医 療 研 究 部	1 造血管腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用 2 造血管細胞の分化、増殖に関与する遺伝子の血清学的、分子生物学的研究
腫 瘍 免 疫 学 部	1 腫瘍抗原の免疫学的、分子生物学的検索 2 免疫診断及び免疫治療の前臨床的及び臨床的研究
腫 瘍 ウ イ ル ス 学 部	1 ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析 2 遺伝子組み換えウイルスを用いた発がん研究 3 抗ウイルス療法の開発
分 子 病 態 学 部	1 癌の浸潤・転移及び腫瘍血管新生における細胞間識別・接着機構とその動態の研究 2 悪性細胞における異常糖鎖の発現調節機構の研究 3 細胞接着分子セレクチン、CD44、シグレクおよびその特異的リガンドの研究 4 グリコサミノグリカンおよびスフィンゴ脂質と癌の進展に関する分子生物学的研究
発 がん 制 御 研 究 部	1 中間径フィラメント関連蛋白質を介した発がんの基礎研究 2 プロテインキナーゼを介した発がんの基礎研究 3 抗リン酸化ペプチド抗体の進化 4 ノックアウトマウスの手法を用いた細胞増殖・細胞分化の二律背反に関する研究
中 央 実 験 室	1 食道がん、頭頸部腫瘍の分子遺伝学的研究

第2 病院部門の研究業務

病院における研究は、診断、治療を通じての臨床研究であることはいうまでもないが、課題別研究の形式をとっているため、その課題に関係する医師群等によって行われている。これらの研究には、課題別研究費が充てられるが、その研究

課題は次表のとおりである。

また、これらの研究の成果は愛知県がんセンターとしての全国あるいは地方の各学会に発表しているが、その件数は、20年678件、21年度778件、22年度809件となっている。

病院部門における研究課題

(平成22年度)

	研 究 課 題	研 究 員
1	がん治療におけるインターベンショナル・ラジオロジーの応用についての研究	稲葉 吉隆 ほか8名
2	治療感受性と再発リスクによる乳癌術後補助療法の選択に関する研究	岩田 広治 ほか5名
3	骨軟部肉腫進行例に対する治療法の研究	杉浦 英志 ほか1名
4	局所前立腺がんに対する総照射量74グレイの放射線治療の臨床的研究	林 宣男 ほか2名
5	病理細胞診断における分子腫瘍診断法の研究	谷田部 恭 ほか5名
6	食道癌に対する術前化学療法についての臨床試験	室 圭 ほか4名
7	悪性リンパ腫に対する大量化学療法	森島 泰雄 ほか3名
8	がん患者におけるうつアセスメント用紙活用の確立	篠田 雅幸
9	トモセラピーを用いた強度変調放射線治療の臨床応用	古平 毅 ほか3名

第3 病院・研究所両部門間共同の研究業務

病院、研究所両部門が共同して行う当研究は、共同研究員によって行われるが、その研究課題は次表のとおりである。

1. 病院・研究所両部門による共同研究課題

(平成22年度)

	研 究 課 題	研 究 員
1	非小細胞肺癌におけるEGFR遺伝子変異とIressa治療効果に関する前向き検討	樋田 豊明 ほか6名
2	RT-PCR法による腹腔内洗浄細胞診からみた網膜切除の有用性に関する検討	伊藤 誠二 ほか3名
3	消化器がんに対する超音波内視鏡下生検法の有用性の検討	山雄 健次 ほか10名

2. プロジェクト研究課題

(平成22年度)

	研 究 課 題	研 究 員
1	加齢性EBV関連B細胞性リンパ増殖異常症の臨床病理学的及び分子生物学的解析	山本 一仁 ほか2名
2	悪性中皮腫移植マウスモデルでのTGF-β阻害剤による腫瘍増殖抑制効果	藤井 万紀子 ほか9名

第4 受託研究

当センターでは、薬事法に基づく医薬品の製造販売承認申請等の際に必要な資料の収集のために行われる臨床試験(治験等)を受託している。

受託は「愛知県がんセンター中央病院受託研究取扱要綱」に基づいて実施している。

受託状況は次表のとおりである。

表中委託者(医薬品製造販売業者等)数は延数ではなく実数で、昭和59年度から平成22年度までの延受託件数は1,939件である。

年 度	20年度	21年度	22年度	59～22年度
受 託 件 数	126	153	158	1,939
委 託 者 数	34	37	38	.

第5 特許の状況

当センターでは県民の健康の推進、医療の向上等を目的とした知的財産創造の主要な担い手として、「愛知県試験研究機関の知的財産戦略推進方針」に基づき、優れた知的財産の創出を推進してきた。

特許の状況は以下のとおりであり、平成16年度からは外国出願も行っている。

また、企業への技術移転にも努めており、6件の実施許諾契約を締結している。

区 分		平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
発 明 件 数		13	4	4	6	7
登 録 件 数	年 度 当 初	3	1	3	6	9
	新 規	1	2	3	3	6
	権 利 消 滅	3	0	0	0	0
	年 度 末	1	3	6	9	15
実 施 許 諾 件 数	年 度 当 初	1	3	6	6	7
	新 規	2	4	0	2	0
	満 了 ・ 解 約	0	1	0	1	1
	年 度 末	3	6	6	7	6

(注) 出願件数には外国出願、国際(PCT)出願を含む。

第6 科学研究費補助金獲得状況

平成20年度から平成22年度までの科学研究費補助金の獲得状況は、次表のとおりである。

年 度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
件 数	119件	136件	137件

(注) 分担金の配分を受けた研究分担者も含む。

第7 民間企業等との共同研究

当センターが、「愛知県がんセンター共同研究取扱規程」に とおりである。
基づいて民間等と行っている共同研究の実施状況は、次表の

年 度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
件 数	28件	24件	26件

第5章 国際交流業務

昭和39年の開院以来、愛知県がんセンターで築かれたがんの診断・治療、研究に関する実績は、国内はもとより国際的にも高く評価されている。さらに積極的にこれらの成果を世界に伝え、また、外国の情報を収集するために、さまざまな形で医

学の国際交流を進めている。

因みに、平成22年度におけるがんの診断、治療に係る国際協力活動は、受入4件、派遣45件、合計49件であり、その概要は、次のとおりである。

がんの診断，治療等に係る国際協力活動状況一覧

1 受入状況

目的	国名等	部署等	期間	備考
研修	タイ	消化器内科	22.7.5～22.7.16	
研修	韓国	消化器内科	22.7.14～22.7.29	
共同研究	インドネシア, 中国, 韓国, 台湾, フィリピン	疫学・予防部	22.10.11～22.10.15	第3次対がん総合戦略研究事業 「日中両国を含む東アジア諸国におけるがん対策の質向上と標準化を目指した調査研究」班
研修	イラク	消化器内科	23.3.2～23.3.18	

2 派遣状況

目的	派遣者	派遣先	期間	備考
研究発表	研究所長 田島 和雄	トルコ イスタンブール	22.4.3～ 22.4.7	アジア太平洋がん予防学会特別講演招待
研究発表	総長 二村 雄次	アルゼンチン共和国 ブエノスアイレス	22.4.13～ 22.4.24	第9回国際肝胆膵学会世界大会
研究発表 研究打合	疫学・予防部 室長 松尾 恵太郎	アメリカ ワシントンDC	22.4.13～ 22.4.24	第101回米国癌学会総会(AACR)
研究発表	消化器内科部 医長 原 和生 医長 澤木 明	アルゼンチン共和国 ブエノスアイレス	22.4.18～ 22.4.23	第9回国際肝胆膵学会世界大会
研究発表	消化器内科部 医長 脇岡 範	アメリカ ニューオーリンズ	22.4.29～ 22.5.5	米国 消化器病週間
研究発表	総長 二村 雄次	中国 武漢	22.5.7～ 22.5.10	国際肝胆膵学会主催 第4回中国支部大会
情報交換	研究所長 田島 和雄	中国 天津	22.5.25～ 22.5.27	国際対がん連合理事会
会議 議論	遺伝子医療研究部 部長 瀬戸 加大	カナダ バンクーバー, アメリカ シカゴ・セントルイス	22.6.1～ 22.6.12	6/2:会議及び議論 6/4-8:2010年度アメリカ臨床腫瘍学会 6/10:会議及び議論
研究発表 及び共同 研究打合	消化器内科部 医長 澤木 明	アメリカ シカゴ	22.6.2～ 22.6.10	米国臨床腫瘍学会 AVAGAST Investigator Meeting
情報収集	薬物療法部 部長 室 圭 シニアレジデント 横田 知哉	アメリカ シカゴ	22.6.3～ 22.6.10	ASCO2010
情報交換	研究所長 田島 和雄	カザフスタン アスタナ・アルマティ	22.6.8～ 22.6.12	中央アジアのがん罹患状況とがん対策の実態把握
研究発表	分子腫瘍学部 室長 近藤 豊	韓国 済州島	22.6.20～ 22.6.22	5th Asian Epigenomics Meeting and A3 Symposium
情報交換	研究所長 田島 和雄	シンガポール, オーストラリア メルボルン・ブリスベン	22.6.27～ 22.7.3	国際共同研究推進計画の実態, がん対策などの実態把握
情報交換	研究所長 田島 和雄	中国 シンセン	22.8.17～ 22.8.22	国際対がん連合世界がん会議, 同理事会

研究発表	分子腫瘍学部	室長 近藤 豊	スウェーデン スtockホルム	22.9.6～ 22.9.7	Japan Society for Promotion of Science (JSPS) Sweden-Japan Joint Colloquium
研究発表	総長	二村 雄次	韓国 ソウル	22.9.10～ 22.9.12	肝門部胆管癌国際シンポジウム
研究発表	薬物療法部	レジデント 野村 基雄	スペイン バルセロナ	22.9.12～ 22.9.18	ESTRO
講演	薬物療法部	医長 高張 大亮	中国 北京	22.9.15～ 22.9.17	Chinese Society of Clinical Oncology
研究発表	消化器内科部	医長 澤木 明 医長 脇岡 範	マレーシア クアラルンプール	22.9.18～ 22.9.21	アジア太平洋消化器週間
研究打合	疫学・予防部	室長 松尾 恵太郎	イタリア ミラノ	22.9.27～ 22.10.8	Mario-Negri研究所
研究発表 及び 情報収集	疫学・予防部	部長 田中 英夫	オーストラリア シドニー	22.10.3～ 22.10.9	Asia Pacific Conference on Tobacco or Health 2010
情報収集 及び 研究発表	薬物療法部	部長 室 圭 医長 設楽 紘平	イタリア ミラノ	22.10.7～ 22.10.14	ESMO
講演	薬物療法部	医長 高張 大亮	中国 上海	22.10.16～ 22.10.18	Chinese Society of Clinical Oncology
研究打合 及び 情報収集	疫学・予防部	室長 松尾 恵太郎	中国 北京	22.10.17～ 22.10.20	学振日中間A3フォーサイトプログラムセミナー
研究発表	内視鏡部	部長 丹羽 康正	エジプト カイロ	22.10.19～ 22.10.25	世界外科・消化器内科・腫瘍内科国際会議
研究発表	消化器内科部	医長 原 和生	スペイン バルセロナ	22.10.23～ 22.10.28	欧州消化器病週間
研究発表	内視鏡部	医長 田近 正洋 医長 近藤 真也	スペイン バルセロナ	22.10.23～ 22.10.29	欧州消化器病週間
研究発表	腫瘍免疫学部	リサーチレジデント 廣澤 友也	チェコ共和国 プラハ	22.10.23～ 22.10.26	13th Biennial Meeting of the International Gynecologic Cancer Society
研究発表	分子腫瘍学部	部長 関戸 好孝	イタリア ローマ	22.11.1～ 22.11.8	2nd Workshop on The Hippo Tumor Suppressive Pathway
研究発表	消化器内科部	医長 脇岡 範	エジプト アシユート	22.11.6～ 22.11.14	Assiut 消化器病週間
研究発表	消化器内科部	部長 山雄 健次 医長 原 和生 レジデント 小倉 健 レジデント 羽場 真	中国 上海	22.11.12～ 22.11.14	国際超音波内視鏡シンポジウム (EUS2010)
研究発表	腫瘍病理学部	部長 近藤 英作	ドイツ ベルリン	22.11.16～ 22.11.19	22nd EORTC-NCI-AACR Symposium
研究発表	分子腫瘍学部	室長 近藤 豊	日本 東京	22.11.16～ 22.11.20	The 41st International Symposium of The Princess Takamatsu Cancer Research Fund
研究発表	総長	二村 雄次	中国 上海	22.11.18～ 22.11.20	肝胆道外科中国国際フォーラム2010

情報収集 及び 研究発表	腫瘍免疫学部 主任研究員 西尾 信博	アメリカ オーランド・ヒュ ーストン	22.12.1～ 22.12.11	第52回アメリカ血液学会, JMML国際シン ポジウム, テキサス小児病院
研究発表	遺伝子医療研究部 部長 瀬戸 加大	アメリカ オーランド	22.12.2～ 22.12.9	第52回アメリカ血液学会
情報交換	研究所長 田島 和雄	スイス ジュネーブ	22.12.3～ 22.12.7	国際対がん連合理事会
情報交換	研究所長 田島 和雄	タイ コンケン	22.12.10～ 22.12.13	肝内胆管がんの予防対策構築のための民 族疫学研究
研究打合	疫学・予防部 部長 田中 英夫 リサーチレジデント 中尾 心人	タイ コンケン	22.12.10～ 22.12.13	コンケン大学
情報収集 及び 研究発表	薬物療法部 部長 室 圭 医長 高張 大亮 医長 設楽 紘平 シニアレジデント 横田 知哉 レジデント 野村 基雄	アメリカ サンフランシスコ	23.1.18～ 23.1.24	ASCO-GI
情報収集	薬物療法部 レジデント 近藤 千紘	アメリカ オーランド	23.2.16～ 23.2.21	ASCO-GU
研究打合	疫学・予防部 部長 田中 英夫 リサーチレジデント 中尾 心人	タイ コンケン	23.2.17～ 23.2.19	コンケン大学
共同研究 打 合	消化器内科部 部長 山雄 健次	アメリカ ボルチモア	23.2.24～ 23.2.28	膀胱スクリーニング国際サミット
情報収集	薬剤部 専門員 木野 淑子	フランス	23.2.26～ 23.3.4	抗がん剤調製業務の安全対策視察 (ロン ジューモー病院・トゥールズ大学病院・ブ レスト大学病院・アイソレーター製造工場 (ゲティング社))
研究発表	腫瘍病理学部 室長 中西 速夫	中国 北京	23.3.23～ 23.3.25	BIT's 3rd International Congress of Antibodies-2011

第6章 部門紹介

第1節 病院

消化器内科部

消化器疾患（食道、胃、十二指腸、大腸、肝臓、胆嚢・胆管、膵臓）のがんの診断と治療を中心に、（1）安全かつ質の高い医療を提供すること、（2）患者さんの負担を軽減すること、（3）知りえた情報は患者さんと医療スタッフが共有し治療を行うこと、を目標に行っています。

平成22年度入院患者数（新患数）の疾患別内訳は、食道がん103例、胃がん（GIST含む）144例、肝がん11例、大腸がん46例、胆道がん61例、膵がん166例などでした。とくに食道がんと膵がんに関しては来院され、入院加療をされる患者さんは中部地方では最も多い施設の一つです。

内視鏡的診断と治療に関しても高いレベルの技術を提供させていただいています。とくに内視鏡を用いた食道・胃・大腸などの消化管がんの内視鏡的切除術、閉塞性黄疸に対する内視鏡的ドレナージ術と超音波内視鏡を用いた胆・膵がんの正確な診断と治療を得意としています。平成22年度の検査実績は、上部消化管内視鏡検査総数6079件（うち検査のみ4820件）、下部消化管内視鏡検査総数2627件（うち検査のみ2325件）、内視鏡的膵管胆管造影検査（ERCP）368回（うち胆道ドレナージは183回）、超音波内視鏡（EUS）921回、（うち超音波内視鏡下生検；EUS-FNAは299回）でした。

消化器がんに対する内視鏡的治療の診療実績は、内視鏡部部門紹介を参照して下さい。

移転あるいは手術不能な進行がんにおいては常に患者さんのQOLを考慮し、化学療法や放射線治療を行っています。また、全国のがんセンターと協力して抗がん剤の臨床試験を積極的に推進し、一般診療では使用できない新規抗がん剤や既存の抗がん剤を組み合わせる治療を提供しております。平成22年度化学療法、放射線療法実績（年間入院患者数（のべ人数））は、胃がん180例、食道がん132例、大腸がん14例、膵がん118例、胆道がん43例でした。

若手が研究者の育成をめざしてレジデント、数多くの国内・国外からの研修、見学を受け入れています。本年度はレジデント6名、海外からはエジプトから1名の研修医を受け入れました。さらに国内・国外（韓国、タイ、イラク）から14名の短期見学者を受け入れました。また、研究の成果は学会発表117件（国内86件、海外31件）、論文数は67件（和文42件、英文25件）などを通じ積極的に公表しています。

内視鏡部

当部は2005年4月に開設されました。内視鏡検査・内視鏡治療の高度専門化に伴い、消化器内科部のスタッフの一部を内視鏡検査・治療の専任とし、この分野のさらなる発展を目的として立ち上げられました。専任スタッフは4人ですが、消化器内科部のスタッフの5人は内視鏡部も兼任しており、実際の検査・治療は消化器内科部・内視鏡部が一体となって行っています。

当部の目標は、苦痛のない正確な診断と安全確実な内視鏡治

療です。食道癌・胃癌・大腸癌などの消化管の癌の早期発見はもちろん、色素を散布した内視鏡検査や拡大内視鏡・超音波内視鏡などを用いて癌の広がりや深さの診断を精密に行います。NBI（narrow band image）やFICE（Flexible spectral Imaging Color Enhancement）などの新しい画像強調診断法を積極的に取り入れています。また苦痛のないように鎮静剤や経鼻内視鏡用の極細径内視鏡を適宜使用して行います。消化管の癌の内視鏡切除は、外科手術にくらべて体に大変やさしい治療法です。この方法を行う場合には、その適応・方法・合併症などを十分説明し、ご理解いただいた上で行います。なお、胆膵疾患の内視鏡診断（内視鏡的胆膵管造影、超音波内視鏡検査、超音波内視鏡下穿刺生検）・内視鏡治療（乳頭切開、乳頭切除、胆管ドレナージ）は消化器内科スタッフが中心となり行っています。

平成22年度の食道・胃・大腸の内視鏡検査数と内視鏡治療数は、上部消化管内視鏡検査4,820件、下部消化管内視鏡検査2,540件、食道癌内視鏡切除61件、胃癌内視鏡切除82件、大腸癌・ポリープ内視鏡切除302件、内視鏡的消化管狭窄拡張術218件などとなっています。検査数・治療件数いずれの数字も年々増加傾向にあります。食道癌の内視鏡切除は、以前は年間20例未満でしたが、最近は顕著な増加がみられています。胃癌に対する内視鏡切除は、2003年より新しい方法として内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）を導入して適応が広がり、その数も増加しています。本法は食道や大腸でも適応されてきており、内視鏡切除の適応がますます広がってきております。食道癌、胃癌、大腸癌に対する抗癌剤治療についても積極的に進んでいます。

研究面では、胃MALTリンパ腫に対するヘリコバクターピロリ除菌療法は、日本で最も多くの症例に行っています。また、除菌療法の効果とMALTリンパ腫に特有な染色体異常との関係を世界に先駆けて解明しました。拡大内視鏡とNBI、FICEといった新しい画像強調法を併用して術前の癌の範囲診断と深達度診断を正確に行い、病理像との対比をしています。バイオマーカーとして注目を集めているHER2と胃癌の内視鏡所見、臨床像との対比および治療効果についても研究を進めています。

呼吸器内科部

呼吸器内科部では、肺がん、胸膜中皮腫をはじめとした呼吸器腫瘍の診断と内科的治療を担当している。肺がんは増加の一途をたどっており、現在の年間死亡数は7万人以上に上り、2015年には10万人を越えることが予測されている。

診断に関しては、診断に難渋する診断困難例の紹介が多いのも当科の特色と考えられるが、診断困難例に対しては、超音波気管支鏡による診断に加え、放射線診断部とCTガイド下生検検査を行い診断を確定する場合、食道に接した腫瘍の診断には消化器内科部で食道からの超音波ガイド下生検を行い診断を確

定する場合など、病院各部との密接な連係が構築できている。

肺がんの治療は、外科手術、抗がん剤による化学療法、放射線療法が3本柱とされているが、内科的治療としての化学療法の占める割合が大きくなっている。その理由は早い時期より肺がんは転移をすることが多く、全身療法としての化学療法が多く症例に必要なためである。放射線治療が適応になる場合には放射線治療部と、手術に関しては胸部外科部と密接に連係をとり、最善の治療を目指した集学的治療を行っている。進行肺がんに対する標準的治療は十分確立されたものではないが、呼吸器内科部では厚生労働省肺がん研究班(JCOG)や西日本がん研究機構(WJOG)のメンバーとして治療法の開発を目指した臨床研究を行っている。がん薬物療法専門医による専門性の高い、繊細で患者さん本位の医療が行えるように心がけ、エビデンスに基づいた標準的治療を迅速かつ確実に提供するとともに、抗がん剤の臨床試験では、有望な分子標的薬や新規抗がん剤をいち早く患者さんに提供している。

基礎研究面では、肺がんの発生や増殖のメカニズムについて急速に知見が蓄積されつつあり、がん細胞の増殖を抑える分子標的薬による新しい治療法も開発されている。呼吸器内科部では、患者さんに最新で最良の治療を提供するとともに、新しい薬剤の肺がん治療への応用について研究所と共同研究し、基礎研究で得られた成果をいち早く臨床に還元していきたいと考えている。

血液・細胞療法部

血液・細胞療法部は、当センター設立当初より開設されていた血液化学療法部が、平成15年4月1日の組織改編により名称が変更された部門であり、悪性リンパ腫、白血病、骨髄腫などの造血器腫瘍に対する化学療法、抗体療法などの薬物療法と、自家もしくは同種造血幹細胞移植併用の大量化学療法などの細胞療法を専門とする診療科である。化学療法、新薬試験から移植まで全ての治療法に対応している。外来診療は新患、再来ともに毎日行っており、入院治療は6西病棟を中心に、癌の化学療法、移植療法、疼痛治療に精通した看護スタッフとともにしている。化学療法(特に、初発例の化学療法)、抗体療法は、最近ではできる限り外来治療で実施することを原則としている。

基本方針として、医学的に十分な根拠(エビデンス)と各種ガイドライン・臨床実績に基づいた最適で最新の治療法を治療方針(Decision Tree)としてまとめ、どの患者さんにも、症例・病状に対応したきめ細かい適切な治療を、個々の医師の判断のみでなく診療科として責任を持って提供できるようにしている。

Japan Clinical Oncology Group (JCOG)、厚生労働科学研究造血細胞移植研究班、日本骨髄バンク、Japan Adult Leukemia Study Group (JALSG)などに積極的に参加し、わが国における造血器腫瘍の診断・試験・臨床研究の推進に主導的な役割を担うとともに、臨床検査/遺伝子病理診断部、研究所の腫瘍免疫学部、遺伝子医療研究部、疫学・予防部と三位一体となりトランスレーショナルリサーチを推進している。

薬物療法部

近年のがん治療における薬物療法(抗がん剤治療)の進歩は著しく、がん薬物療法の専門家(腫瘍内科医)が化学療法を実践していくことの必要性が叫ばれている。私どもは4名のスタッフと4名のレジデントの計8名という少ないスタッフ数ではあるが、がん薬物療法の専門家として少数精鋭で積極的に治療を行っている。

診療領域は、食道癌、胃癌、大腸癌といった消化管癌の化学療法、化学放射線療法を中心に、その他、原発不明癌、頭頸部癌、胚細胞腫瘍などの固形癌に対する化学療法を行っている。最近では新薬の第I相試験に力を入れている。外来診療は新患、再来ともに毎日行っており、入院治療は4階西と6階西病棟を中心に行っている。最近の抗がん剤治療は外来治療が主となっているが、入院での治療に関しては、癌の化学療法・疼痛治療・緩和医療に精通した薬剤部や看護スタッフ、MSWらと共に診療に当たっている。

当科で行う薬物療法はエビデンスおよび最新の知見に基づいて治療を行っており、がん専門病院として他科(消化器外科、胸部外科、消化器内科、放射線診断・IVR部、放射線治療部、病理部)と緊密な連絡をとり、総合的な医療を提供している。基本的に確立された標準的化学療法を行っているが、さらに優れた治療法の開発を目指した臨床研究(JCOGの公的臨床試験やWJOGの臨床試験、企業主導の試験、院内あるいは専門施設での自主研究など)にも積極的に取り組んでいる。また標準的治療が確立されていないがん種や一般的な治療が無効になってしまった場合には、新規抗がん剤や分子標的薬などの臨床試験を行い、新しい治療法や新薬の開発に努めている。

当科は抗がん剤治療を提供するとともに、院内での外来化学療法、入院化学療法が安全かつ適正に遂行されるために主導的な役割を担っており、化学療法チームを組織している。県のがん診療連携拠点病院として、特にがん薬物療法の地域のリーダーとして新たな治療開発とともに均てん化に取り組んでいる。

臨床検査部

臨床検査部は、がんセンターの基本理念及び臨床検査部の理念に基づき、がん専門病院の診療を支える精度の高い検査結果を提供すると共に、診察前検査に対応した迅速検査報告体制をとっています。また、時間外緊急検査には夜間の宿直体制、休診日の日直体制で対応しています。

部は2科8部門から構成され、血液検査部門では一般的血液検査である血球数算定検査、凝固検査、骨髄検査の他に、白血病や悪性リンパ腫を対象としたフローサイトメトリーによる細胞表面抗原解析を行っており、診断や残存腫瘍の検出に役立っています。また、骨髄移植や末梢血幹細胞移植のためのCD34陽性細胞の測定も行っており、その役割は重いと認識しています。

生化学・血清検査部門では、生化学的あるいは免疫学的手法による各種分析装置を使用し、血中の各種物質を精度よく迅速に測定しています。これらの結果により患者さんや疾患の状態を把握することができ、診断、治療、経過観察に役立っています。特に腫瘍マーカー検査は、がん細胞と直接関連する分子を測定し、がんの診断、進展状況や治療効果の判定に不可欠とな

っています。

一般検査部門では、尿を材料とした尿一般検査(蛋白質、糖、潜血など)や尿沈渣(尿中の細胞成分や固形成分を調べる)、便の潜血検査、や胸水・腹水などの穿刺液などの検査を行っています。

生理検査部門では、主に手術前やがんの化学治療前後の心肺機能評価を目的とした心電図、運動負荷試験検査、心臓超音波検査、肺機能検査を実施しています。また乳腺超音波検査・聴力検査・ピロリ菌呼気試験なども行っています。

病理検査部門では、生検組織・手術摘出臓器の病理組織標本の作製と術中迅速病理検査を行っています。原発不明がんや転移性がんの鑑別、がん関連遺伝子産物や関連ウイルスの検索、悪性リンパ腫などに対する免疫組織学的検索など、病理医による診断から治療方針の決定に重要な役割を果たしています。

遺伝子検査部門では、遺伝子を用いて腫瘍における遺伝子変異の検討を行っています。また、新しい治療薬である分子標的薬の治療感受性予測の検査をはじめとした有用な遺伝子検査項目の拡充を図っています。

細胞診検査部門では、尿、子宮頸部および内膜材料を対象とした通常の細胞診の他に、手術中の胸腔あるいは腹腔洗浄液の迅速検査、超音波内視鏡下での穿刺吸引材料の迅速検査の実施で診療支援を行っています。また穿刺吸引細胞診の実施時にはベッドサイドに技師が赴き標本作製し、質の高い標本作りに努力し診断精度向上に貢献しています。

細菌検査部門では、抗がん剤投与や骨髄移植などで免疫機能の低下した患者さんの感染症に特に眼を向けて検査を行っています。また、院内感染対策チームの一員として、検出菌情報、耐性菌情報を提供し、アウトブレイク(集団発生)を防ぐための一翼を担っています。

遺伝子病理診断部

遺伝子病理診断部は、外来・入院部門を持たない特殊な診療科です。そのため、患者さんとは直接接する機会はありませんが、診断に関わる重要な三つの診断業務(病理組織診断、細胞診、遺伝子診断)を行っています。その内容は、生検で腫瘍の性質を判断し臨床医師に伝え、治療が効果的に行われているかを第三者的な目で判断する重要な役割を果たします。

この重要な業務について、中央病院のみならず、愛知病院、尾張診療所も含めた、愛知県がんセンター全体の病理診断を担い、安全、的確で迅速な診断を遂行することを通じて医療の質を高めることを目標としています。

1. 病理組織診断

平成22年は、中央病院約8000件、愛知病院2500件の病理診断を行っています。そのほとんどが腫瘍性疾患であり、件数が同等の一般病院とくらべて作業量はその数倍にのぼります。術中迅速検査数が多いのも特徴であり、年間述べ2000件・一日平均延べ8~9件をこなしています。また、細分化、専門家が進む各科の要求に対応するため、高度で専門化された病理診断を遂行しています。このほか、免疫組織化学法も開発当初より積極的に取り入れ、原発不明がんや転移性腫瘍の診断、造血器腫瘍の診断、腫瘍の悪性度診断に役立っています。また、遺伝子診断のための組織固定包埋方法の開発や穿刺細胞診からのセル

ブロック標本の作成も平行して行っています。

2. 細胞診

平成22年には、中央病院約6000件、愛知病院約1300件の細胞診のうち、診断医に回る件数は半数以上であり、さらにその約半数近くが偽陽性以上を占めます。すなわち全体としておよそ1/4の症例が偽陽性もしくは陽性であり、がんセンターの特徴を良く表わしています。特に乳腺腫瘍の細胞診は年約1000件前後を占めるとともに、手術適応、術式決定について重要な情報を提供しています。細胞診は簡便で、迅速な診断法であり、必要な場合には検体採取当日の報告も積極的に行っています。さらに、臨床医とのその場での細胞量のチェックや詳細な臨床情報交換を通じて、診断精度を上げる試みも行っています。

3. 遺伝子診断

当部の特徴の一つとして、院内で多数の遺伝子解析を施行していることを挙げるができます。国内でも高い水準を誇り、肉腫の診断はもとより、分子標的療法の効果予測(肺癌におけるEGFRチロシキナーゼ阻害剤、大腸癌におけるセツキシマブ、乳癌・胃癌におけるトラツズマブなど)を中心に行っています。これらの結果について年間1800件のレポートを提出しています。この実績から、多数の見学者や研修者を受け入れると同時に、これらの結果をもとにした研究成果は海外でも高く評価されています。

頭頸部外科部

頭頸部の「頭」は「顔面頭蓋」を意味しています。当診療科の担当する解剖学的レベルは頭蓋底から鎖骨までになります。従いまして、私どもの領域は従来の耳鼻咽喉科とほぼ同義であります。眼科領域、脳神経外科領域および脊椎を除く頭部、頸部臓器の腫瘍性疾患を扱っております。鼻、副鼻腔、口腔、咽頭、喉頭、唾液腺、甲状腺、副甲状腺、頸部食道、顔面頸部皮膚、さらにリンパ組織の腫瘍性疾患の治療にあたります。

当科の人員構成は部長の長谷川泰久をはじめ、医長の花井信広、小澤泰次郎、平川仁さらにレジデントが現在4名在籍しており、総勢8人で日々の診療にあたっております。長谷川は部長として科全体を統括し、入院患者の主治医は部長と医長の3人がレジデントと共に担当しています。外来は月、水、木、金の週4日で、金にはセカンドオピニオン外来を行っています。

頭頸部癌の治療については、歴史的に拡大手術による治療成績の向上の時代を経て、今日では、根治性を損なわない縮小手術、機能温存手術、また、化学療法および放射線治療による臓器温存治療へと治療戦略がシフトしてきております。私どもは頭頸部外科であり、外科的治療が私どもの仕事で最も大きなウェイトを占める部分ではありますが、積極的に化学療法を取り入れ、当院の放射線治療部と協力し、放射線治療を取り入れ可能な限り臓器温存、ないし手術が必要な場合でも縮小、機能温存手術に努めております。常に、治療を受ける方の根治性と生活の質を念頭において日々の診療を行っています。平成22年度は他科の手術に協力した例を含め、約480例の手術を行いました。

研究面では、頭頸部領域における厚生労働省班研究に積極的に参加し、臨床治験も数々手がけております。当科におけるオリジナルの研究としましては、薬物療法バイオマーカーの研

究、口腔癌におけるセンチネルリンパ節ナビゲーション手術の研究、咽喉頭癌に対する機能的温存切除と再建などが主なテーマであります。また、これらにとどまらず、日々の臨床をテーマにした研究も行い、全国学会等で積極的に発表、論文の投稿を行っております。平成22年度の業績は学会および研究会発表が37件、論文が欧文2篇と邦文11篇の13編でありました。

今後も患者さまの利益につながるよう、臨床、研究ともに日々努力を続けていきたいと思っております。

輸血部

愛知県赤十字血液センターから供給される輸血用血液製剤主に赤血球製剤、血小板製剤、血漿製剤の確保から保存、支給までを一元的に管理している。輸血の検査項目としては血液型検査、赤血球製剤を輸血する場合の交差適合試験、赤血球がすでに不完全抗体で感作されているか否かを確かめる直接抗グロブリン試験、赤血球に対する抗体スクリーニング（間接抗グロブリン試験）などで、人による過誤を減らすため自動輸血検査装置を用い、より安全性の高い輸血検査を実施している。

血液のがんなどに有効な治療法として末梢血幹細胞移植が行われるようになってきた。これは従来、血液幹細胞として骨髄から採取されてきたが、末梢血にも流れていることが明らかになり、血球成分採血装置を用いて腕の静脈から採取する方法である。その採取、分離、保存を血液・細胞療法部とともに実施している。

また、愛知県赤十字血液センターの協力を得て、輸血に関する情報の収集や輸血副作用の原因究明などを行っている。年に数回、輸血委員会を開催し輸血事故防止や適正な輸血について話し合いの場を設けている。平成13年度から臨床検査部と協力して24時間体制で時間外の緊急輸血に対応している。

形成外科部

形成外科は、身体外表の形状変化に対して、外科手技によって機能・形態を正常に近づけることにより、個人が社会に適応することを目的としています。

たとえば、舌癌により舌の大部分を切除された場合でも、大腿部や腹部の皮膚を含めた組織（遊離皮弁）を移植することにより、残った舌の動きを妨げず、食事や会話をすることが可能になります。また、乳房再建では、一人一人の希望に合わせた再建をこころがけ、乳癌術後の生活の質がなるべく保たれるよう手術を行っています。

当院の特徴として、他科と共同で手術を行うことが多く、口腔癌や咽喉頭癌切除後や乳房切除後、四肢・体幹の腫瘍切除後に、体のさまざまな部位から皮膚・皮下組織、筋肉、骨、腸などを移植する再建手術を行っています。

I) マイクロサージャリー（顕微鏡下手術）を用いた再建

舌癌の手術では、舌の半分～大部分を切除されてしまうことがあります。大腿部や腹部の皮膚を含めた組織（皮弁）を移植することにより、残った舌の動きを妨げず、食事や会話をすることが可能になります。大腿部や腹部などの頸部からはなれた部位から移植する場合、皮弁が口やのどで生着するためには、顕微鏡下の血管吻合術が必要となります。2010年4月～2011年3月の1年間に80件のマイクロサージャリーを用いた再

建を行いました。

II) 乳房再建

乳癌手術後の乳房再建は、主に2通りの再建方法があります。腹部や背部の皮膚や皮下脂肪等の自家組織を用いる方法と、インプラントによる人工物を用いた方法です。それぞれ特徴があり、患者さんの希望や適応に添った方法が選択されています。当科では平成22年度43件の乳房再建関連手術をおこないました。

III) 瘢痕や変形に対する治療、創治療遅延に対する治療

手術後の傷跡や変形が気になる方の修正や傷跡がケロイド状になった方の治療なども行っています。また、褥瘡に関しても、コメディカルスタッフと共同で治療に関わっています。

IV) リンパ浮腫の治療

現在、月に一回ほどリンパ浮腫外来の診察を担当させていただいています。

他のリンパ浮腫外来を担当している先生がたと相談し、外科的治療の適応のある患者さんに対しては、リンパ管静脈吻合術を23年度より行います。

22年11月よりスタッフ1名の増員により、現在形成外科部はスタッフ2名、レジデント1名の体制で診療に当たっています。今後さらに臨床に即した研究を行い、よりよい再建手術が行えるよう研鑽して参りたいと思っています。

胸部外科部

胸腔内臓器の悪性腫瘍の診療、すなわち原発性肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、および食道癌の外科治療を中心に、薬物療法から緩和医療まで担当している。スタッフは光富徹哉（部長、副院長兼務）、波戸岡俊三（集中治療部長）、安部哲也、伊藤志門、福井高幸の計5名である。呼吸器外科を光富、伊藤、福井、波戸岡で、食道外科を波戸岡、安部で担当している。これに加え、レジデントとして厚田幸子（呼吸器）、丹羽由紀子（食道）、尾関直樹（呼吸器）、小林祥久（呼吸器）の4名が診療を行った。さらに九州大学から須田健一、群馬大学から富沢健二の計2名が当科にて肺癌の分子生物学的な基礎研究を行っている。

日本の癌死亡原因の1位は肺癌であり、これを反映して当科の肺癌手術症例は増加傾向にある。平成10年に初めて100例を超えた切除症例数は平成19年には初めて200例を突破し、平成22年は189例であったが、呼吸器外科手術全体が271例で、転移性肺腫瘍55例、縦隔腫瘍8例の手術を行った。1995-2005年の肺癌切除症例においてステージごとの5年生存率はIA、IB、IIA、IIB、IIIAでそれぞれ91、81、69、52、37%で、1999年の全国集計13010例の83、66、61、47、33%と比して遜色ない成績を誇っている。一方、食道外科においても切除数は増加の一途をたどっており、平成20年の切除症例数は50例であった。治療成績は、当初15.5%であった5年生存率は3倍以上の伸びを示し1998-2002年の全症例の5年生存率は53%となっている。

肺癌も食道癌も代表的な難治癌であり、新たな治療戦略を構築していく必要がある。このためには多施設共同で臨床試験を行っていくことが必須であり、われわれはJCOG（日本臨床腫瘍研究グループ）やWJOG（西日本がん研究機構）などの日本

を代表するがん臨床研究グループの中核的メンバーとして活動している。

他癌腫と同様に肺癌に対しても分子標的薬がつつぎと臨床応用されつつある。ゲフィチニブ（イレッサ）やエルロチニブ（タルセバ）は上皮成長因子受容体（EGFR）のチロシンキナーゼに対する選択的阻害剤で、EGFR遺伝子の突然変異を有する患者（肺腺癌の一部）に劇的な効果を示す。われわれは遺伝子病理診断部とともにこの発見の重要性にいち早く注目し、EGFR遺伝子変異のゲフィチニブの効果予測因子としての意義を追試して専門誌に発表するとともにEGFR遺伝子検査を実地臨床に取り込んだ。遺伝子情報などでがんの個性を明らかにし、投与に適切な患者さんを選択することで、最小の負担で最大の効果が得られる医療を提供できると考えている。

なお、2011年4月からは食道癌の診療部門が消化器外科部に編入されることとなり、主に肺、縦隔の診療を行う「呼吸器外科部」という名称に改変されることとなっている。

乳腺科部

平成22年度は岩田広治、藤田崇史、林裕倫、服部正也、近藤直人（平成23年1月から）堀尾章代のスタッフ6名（平成22年12月まで5人）と、山田、末田、足立、牛尾、権藤のレジデント5名の体制で診療にあたった。乳腺科の特徴は外来診療がメインであり、手術や全身状態の悪い方の入院など特殊な場合を除き、化学療法などもすべて外来で行っている。一日の外来患者数が100人を超える日も多く、多くの紹介患者を含め新患者が1日20人を超えることも稀にある。乳腺科は、乳癌の診断から手術、薬物療法、再発治療まで、トータルに乳癌診療を担当している。

診断では、堀尾、近藤がマンモグラフィ読影資格のA判定をもち読影を担当、超音波検査は検査技師が毎日午後に行っている。マンモグラフィ検診の普及に伴い、非触知病変の確定診断の重要性が増してきた【ステレオガイド下マンモトーム生検：90例、超音波ガイド下マンモトーム生検：203例】。非触知乳がんの低侵襲な診断（細胞診、マンモトーム生検）に努めることにより、平成22年は乳癌手術患者の約18.2%が非浸潤癌であった。

手術は、平成22年の乳癌手術患者数が373人と年間の乳癌手術患者数が昨年度を若干下回り（スタッフが流動的だった為に）、温存率は51.7%であった。センチネルリンパ節生検は1999年から当院で行ってきた研究等の実績により、2010年に保険適応となった。平成22年は、これによる腋窩リンパ節郭清省略が温存術群では85.5%、乳房切除群でも61.1%になっている。また平成22年は乳房再建手術が開始3年目で15例に1期再建手術が行われた。

薬物療法に関しては、術前療法症例が年々増加している。平成22年度の術前化学療法は医師主導臨床試験へ主に登録し、術前ホルモン療法は閉経後の方のC-SPOR-06(NEOS) 試験へ登録した。術後薬物療法に関しては世界的なエビデンスに基づき当院の独自の治療指針を作成し、地域の先生方の好評を得ている。再発治療では、様々な関連科（整形外科、放射線治療部、放射線診断部、脳外科、循環器科など）と密な連携を保ちながら、co-medicalとも連携し、チームアプローチを実践してい

る。平成22年度は乳癌看護認定看護師2名の活動が院内で周知され、外来と入院での継続したチーム医療がよりスムーズに行え、毎週開催される再発カンファレンスは入院早期からの方針決定の場として定着した。術前、術後、再発治療を通じ、日本あるいは世界との共同試験として、多数の治験、臨床試験に参加している。

このような日常業務で忙しい毎日であるが、乳癌学会をはじめとする各種関連学会にはスタッフ、レジデント共に積極的に発表し高い評価を得ている。また、地域の活性化のために、TBCRGという東海地区の臨床試験グループを立ち上げ、事務局を当院において臨床試験を行っている。さらに、新しい治療手段の確立の為に、術中照射や腋窩リバースマッピング法の確立に関する研究も開始した。

消化器外科部

消化器外科部では、腹腔内消化管及び肝胆膵領域の悪性腫瘍を診療対象としています。平成22年度のスタッフは胃癌を中心とする上部消化管グループ（伊藤誠二、三澤一成、伊藤友一）、下部消化管グループ（金光幸秀、小森康司、石黒成治）、肝胆膵グループ（清水泰博、佐野力、千田嘉毅）で、さらにレジデント6名（森本守、松井聰、金城和寿、志村正博、服部憲史、大澤高陽）が加わり、診療・研究にあたりました。

平成22年度も院内では消化器内科、内視鏡部、放射線診断部、薬物療法部と、また院外では診療所、他病院の医師との連絡を密にし、紹介された時はできるだけ早く手術となる様にし、治療後は報告を速やかに行い、化学療法などの次のステップに移行できるように努力しています。

診療面では手術枠の有効利用に努め、1年間に719件の手術を行いました。病院全体（2,200件）の33%にあたります。愛知県がんセンター中央病院での治療を希望される方の待機時間を短縮するように努力をしています。また、病院全体として浸透してきているチームケア、クリニカルパスの充実を図り、合併症や医療過誤のおきにくいシステム作りにも努めています。研究面においては、学会発表119件、論文発表53編（うち英文25編）でした。

胃グループでは昨年227例の胃癌手術を行いました。近年は低侵襲手術である腹腔鏡下手術が増加し、年間に約70例の腹腔鏡下胃切除術を行っています。またがんセンター研究所との微小転移の共同研究、工学系研究室との画像手術支援の共同研究などにも力を入れています。

大腸グループは昨年度332例の手術を行いました。早期癌に対しては経肛門的手術（TEM）や腹腔鏡下手術などの低侵襲化手術を行っています。また、進行癌には従来より3群郭清を標準とし、手術の精度を高めたことにより、合併症を低下させつつ、10年単位でステージ別の5年生存率が改善しています。

肝胆膵グループは昨年160例の手術を行いました。膵癌は的確な術式選択、術後補助化学療法の導入で良好な成績をあげており、術後5年生存率は25.8%と極めて良好です。大腸癌肝転移では治癒切除288例の術後5年生存率53%と良好で、最近では肝切除と新規抗がん剤（FOLFOX等）を組み合わせる進行例でも治療成績が向上しています。

3診療グループともにJCOGを始めとする多施設の共同臨床

試験に積極的に参加し、手術や化学療法のエビデンス作りに取り組んでいます。また平成23年度は胸部外科から食道グループ（スタッフ2名）が消化器外科に編入され4診療グループとなり、消化器がん全般の外科診療を行う予定です。

整形外科部

整形外科部は外来部整形外科から平成15年6月より整形外科部として新設され、現在常勤2名のスタッフと1名のレジデントで臨床および研究を行っている。平成22年度の実績については、外来患者数は年間7,263人であり、その内新患者は211人で、約60%が紹介患者であった。再来患者は3,309人、入院患者の依頼診察は672人、リハビリテーション依頼診察3,071人であった。これらの患者のほとんどが原発性骨軟部腫瘍あるいは癌の骨転移患者である。平成22年度の手術件数は年間140件であり、その内骨悪性腫瘍広範切除術12件、骨良性腫瘍切除術14件、軟部悪性腫瘍広範切除術26件、軟部良性腫瘍切除術35件、その他53件であった。原発性骨悪性腫瘍の5年生存率は67.3%、原発性軟部悪性腫瘍の5年生存率は79.2%とその予後は海外データと比較しても良好な成績である。しかしながら初診時転移を呈していた症例では予後は厳しく、このような症例に対しては末梢血幹細胞移植を併用した超大量化学療法や分子標的治療としての臨床試験を行っている。骨肉腫の治療に関しては抗がん剤治療を手術と併用することで、初診時に遠隔転移がない症例の5年生存率が約90%、無病生存率が約70%、患肢温存率85%である。切除後の再建には顕微鏡を使つての自家複合組織移植術や、罹患骨を再利用する温熱処理骨移植というユニークな手術を行っており、これらの成果を学会で報告している。また、転移性軟部腫瘍又は骨腫瘍患者を対象とした治験や骨肉腫、ユーイング肉腫に対する臨床試験も積極的に行っている。なお、当科外来で圧倒的に多いのは、患者の7割を占める骨転移であるが、骨転移患者の治療の第一選択は手術ではなく放射線治療や薬物治療であり、各科と連携しながらそれらの治療法向上に力を入れている。このうち脊椎への転移では、脊椎に一定量以上の照射ができないことから、脊椎には照射せず周囲の骨だけに照射する脊椎打ち抜き照射法を放射線治療部と共同で行っている。研究面においては、研究所と協力して、文部科学省科学研究費基盤研究「骨肉腫転移阻止の為の血管新生抑制剤と抗体投与による併用療法の開発」についての基礎的研究を行っており、今後の臨床にフィードバックしていきたいと考えている。

泌尿器科部

泌尿器科は、スタッフ3名で診療を行っている。平成22年度の手術件数は187例で、76例の全身麻酔手術、111例の腰椎麻酔手術を行った。全身麻酔手術の内訳は、根治的前立腺全摘術が49件、根治的腎摘術が3件、腎尿管摘出術が10例、根治的膀胱全摘術が7件、腎部分切除術が3例、膀胱部分切除術が2例、副腎摘出術が1例、精巣癌の後腹膜リンパ節廓清術が1例であった。腰椎麻酔手術では、経尿道膀胱腫瘍切除術が60例、小線源治療が19例、前立腺Saturation biopsyが12例、男性の尿管ステントカテーテル交換が8例、尿道切開術が6例、膀胱ランダム生検が4例、尿管鏡検査が1例、除鞅術が1例であった。手術件数

から明らかのように、愛知県がんセンター中央病院泌尿器科の診療の特徴は、最近急増している前立腺がんと膀胱がんが中心となっていることである。

前立腺がんに関しては、手術治療以外の根治治療として、放射線治療部と協力し、トモセラピーによる強度変調放射線治療（IMRT）で総照射量78グレイを照射している。手術治療（平成16年度は32件、平成17年度は47件、平成18年度は38件、平成19年度は48件、平成20年度は45件、平成21年度は50件、平成22年度は49件）も放射線治療（平成16年度は79件、平成18年度は71件、平成18年度は81件、平成19年度は76件、平成20年度は65件、平成21年度は65件、平成22年度は65件）も最近では症例数が安定している。また、根治的前立腺全摘術後の局所再発に対しても、三次元照射法による放射線治療を第一選択として行っている。前立腺癌の新しい治療法として、平成18年度6月からI-125シード線源を使用する小線源療法を開始し、月2例のペースで行っている。現在、前立腺がんに対する全ての保険適応の治療が愛知県がんセンター中央病院で可能である。

膀胱がんに関しては、表在性であれば経尿道膀胱腫瘍切除術を、浸潤性であれば根治的膀胱全摘術を基本的に行っている。表在性膀胱がんは、術後再発の頻度が高いので、抗癌剤（マイトマイシンC）やBCGの膀胱内注入療法を再発予防の目的で施行している。また、膀胱全摘術後の尿路変更も自然排尿型回腸新膀胱造設術、回腸導管造設術および尿管皮膚瘻造設術の適応基準を決めて選択している。

研究面では、前立腺がんに関しては、名古屋市立大学大学院実験病態病理学教室と前立腺がんに関与する癌遺伝子や癌抑制遺伝子について共同研究している。

婦人科部

婦人科部では女性性器に発生する悪性腫瘍の診断・治療を行っており、主に取り扱う疾患は子宮頸がん・子宮体がん・卵巣がんで、平成22年の初回治療症例数は各々164例・57例・52例で、これ以外に外陰がんや膣がん3例を治療した。この様に当院には国内有数の婦人科悪性腫瘍の症例数があり、現在東海地方の中核病院である。部内では手術や化学療法を中心に、放射線治療は放射線治療部と連携して行っている。子宮頸がんに対する主な手術は子宮頸部円錐切除と広汎子宮全摘術で、子宮体がんには主に準広汎子宮全摘術、卵巣癌には卵巣癌根治手術を行っており、昨年の手術施行数は子宮頸部円錐切除術が110例、広汎子宮全摘術が40例、準広汎子宮全摘術が45例、卵巣癌根治手術が53例であった。他に良性～境界悪性卵巣腫瘍に対する付属器摘出術2例、初期の子宮がんや子宮肉腫に対する腹式子宮全摘術10例、子宮頸部異型上皮や初期子宮頸がんに対する膣式子宮全摘術9例、外陰がんに対する外陰腫瘍切除0例、腹腔内再発に対する再発腫瘍切除を2例、再発腫瘍に対する骨盤内蔵全摘術を0例施行している。放射線治療は、子宮頸がんの中でも進行症例や手術により子宮外病変が確認された症例に対し行っている。放射線治療時にはその効果を高めるために積極的に化学療法を併用し、進行癌の治療成績向上に努めている。化学療法は、主に子宮体がんや卵巣がんの手術後追加治療として使用し、進行症例に対する手術前化学療法も積極的に行っている。再発症例の場合には疾病の治療が難しいため、十分

な説明と同意を得た上で延命を目的とした化学療法も行っている。診療にあたり、看護師や薬剤師など他のスタッフと連携し、また十分な説明機会を設けるなどして、患者さんとの意志の疎通がはかれる様努力している。現在婦人科部のスタッフは4名のみで、国内の他がん専門施設に比べ非常に少数であるため、日常診療以外の研究活動がなかなかできない状況である。それでも平成22年度の当院からの学会報告を6件、論文報告1件を行い、また日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）や婦人科悪性腫瘍化学療法研究機構（JGOG）などの主催する臨床試験や新規薬剤の治験に積極的に参加している。

麻酔科部

愛知県がんセンター麻酔科部平成22年度の常勤麻酔科医は4名で、名古屋大学の麻酔科をはじめ、非常勤医の応援を得て、手術件数増という病院組織目標達成にむけて努力している。

麻酔科部長：細田蓮子・麻酔指導医、日本麻酔科学会代議員、ペインクリニック専門医、緩和医療学会暫定指導医

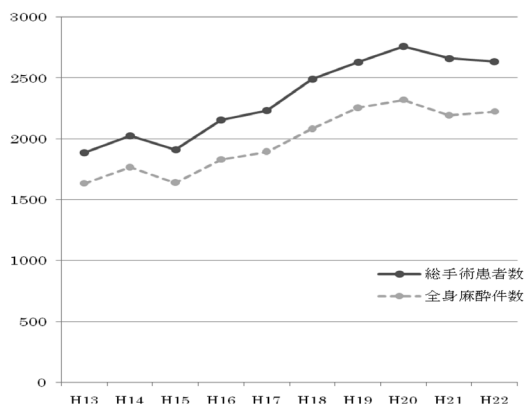
麻酔科医長：伊藤直哉・麻酔専門医

麻酔科医長：西良雅夫・麻酔専門医

麻酔科医長：仲田純也・麻酔専門医

平成22年度活動業務

手術総件数：2637件(前年度2663件)、全身麻酔：2226件(前年度2188件)、長時間麻酔：166件、緊急手術：106件であった。全体の手術件数は横ばいだが、全身麻酔はわずかに増加。次年度に向け再び件数増加が期待される。



平成22年年間麻酔科管理麻酔法別統計（1～12月）

全身麻酔（吸入）	879例
全身麻酔（TIVA）	41例
全身麻酔（吸入）＋硬・脊・伝麻	1250例
全身麻酔（TIVA）＋硬・脊・伝麻	37例
脊髄くも膜下麻酔	8例
その他	1例
合計	2216例

手術部位別麻酔科管理統計

開頭	3例
開胸・縦隔	271例
開胸＋開腹	65例
開腹（上腹部）非内視鏡	309例
内視鏡	111例
開腹（下腹部）非内視鏡	498例
内視鏡	29例
頭頸部・咽喉頭	403例
胸壁・腹壁・会陰（乳腺含）	446例
股関節・四肢	63例
検査	1例
その他	17例
合計	2216例

麻酔法はよりシンプルにより質の高い方法に進化している。手術を無事終えたばかりの患者さんが穏やかに覚醒し、十分な鎮痛を得て回復室のベッドにいる。そこで我々に「ありがとうございました」と言って下さる患者さんも多く、その言葉に力を得て一同頑張っている。

<今後の方針について>

電子カルテ導入に向け、手術室ではフィルムレスへの対応、電子麻酔記録の導入、医事物流への情報移行など議論を重ね、実施してゆかなければならないことが山積みされている。予算が限られ手術室機能のペーパーレス化が後回しになったが、トップレベルのがん手術を目指してゆく上で、手術室こそ早急に近代化を目指してほしい。平成3年に新手術室が作られてから20年近くとなり、次なる飛躍のために将来構想を立てなおす時期と思われる。

集中治療部

集中治療部は、平成21年4月から診療科として開設されました。内科系、外科系を問わず呼吸、循環、代謝そのほかの重篤な急性機能不全の患者を24時間体制で管理し、より効果的な治療を行うことを目的としています。

つぎの患者を集中治療管理の対象としています。1. 集中管理を必要とする術後患者、2. 大量化学療法、骨髄移植を受けクリーンルームでの管理を要する患者、3. 心タンポナーデなどのoncologic emergencyの患者、4. 一般病棟で急変し全身管理を必要とする患者。

病床は、ICU（集中治療室）4床、HCU（高度治療室）17床からなっています。ICUは術後回復室を高度にしたもので、主に全身麻酔による外科手術後の患者が、容態が安定するまで使われています。2：1看護体制（1名の看護師が2名の患者を担当）となっています。HCUはICUと一般病棟の中間の病床で、4：1看護（1名の看護師が4名の患者を担当）の体制で一般病棟へ移動するまでの病床として利用されています。

運営診療形式は、各診療科が独自に利用する主治医制をとっています。

集中治療認定看護師1名が中心となり、院内研修会、勉強会を開催しています。より安全で高度な周術期管理を行える体制を順次整えているところです。

放射線診断・IVR部

平成18年に放射線診断部から、放射線診断・IVR部へと部署名が変更になりました。以前から力を入れてきたIVRの名前を全面に押し出し、その活動内容が分かりやすくなっております。

メンバーは部長以下5名のスタッフと4名のレジデントの計9名です。全体に若い年齢層ながら、一般臨床ほか、学会・研究会、臨床試験に力をいれるとともに、放射線科領域とは離れた消化器癌の化学療法にも深く関わって活発な活動を行っています。

画像診断部門では、まずCT装置は8列と32列のMDCTが稼働しており、年間14,000件以上の検査と読影が行われています。特にMDCTで得られるデータはMPR像や3D画像へと応用され、臨床的にも有用であることから、その需要は年々のびていきます。MRは3T装置が1台稼働しています。近年のMRではCT同様にボリュームデータが得られるようになり、病変部の詳細な観察が可能となっています。しかし、機器の発達をもたらした大量のデータを効率よく処理し、臨床の場へと還元するにはモニター診断やフィルムレス化といった環境の設備が必須ですが、残念ながら当院はその整備が遅れており、今後、早急に進めていく必要があります。

PET検査は、がんの存在診断のみならず、治療効果の診断にも有用とされ、がん診療には欠かせないものとなっています。PET装置は当院にはないものの、同じ敷地内に誘致された東名古屋画像診断クリニックの協力により、PETを含めた診療が身近なものとなりました。また、近年、メタストロンやゼバリンといった、放射性物質を用いた治療薬が発売され、ゼバリンを用いた悪性リンパ腫の治療は当部も協力して行われています。

IVR部門では、FOLFOX、FOLFIRI療法といった、大腸癌に対する全身化学療法が多く行われている事や、外来での抗がん治療、また終末期の在宅医療が普及してきたことにより、中心静脈ポートの需要が年々増加し、数年前まで年間150件程度でしたが、現在は400件を超えるようになっています。また、現在は、先進医療として胸部悪性腫瘍に対するラジオ波凝固療法に取り組んでいます。

放射線治療部

当科では1960年代に愛知がんセンター名誉総長高橋信二先生が開発された当時としては画期的な「高精度放射線治療」である原体照射法を当初より臨床応用し、以来頭頸部がん・婦人科がん・前立腺がん・肺がん・食道がんに優れた治療効果と安全性を報告してきた。近年治療技術や計画コンピュータの革新的な進歩により三次元放射線治療や定位放射線治療、強度変調放射線治療などの高精度放射線治療は急速に臨床に浸透しているが、これら最先端放射線治療の基礎は当院で長い実績をもつ原体照射法に端を発しているといっても過言でない。

現在当院では外部照射装置(リニアック2台、トモセラピー1

台)、小線源治療(RALS セレクトロン1台、密封小線源治療;イリジウム、ゴールドグレーン、ヨード)を主たる治療手法として年間1000名程度の新規患者治療を行っており、全国でも有数の治療件数を誇っている。また頭頸部がん・子宮がんに代表される根治的な放射線治療を行う患者は当科で化学療法を含む包括的治療を行っている。

高精度治療の代表的手法である強度変調放射線治療は「究極の放射線治療」と呼ばれ複雑な形状の病変にたいして正確な放射線投与が可能になると同時に、周辺の正常組織の放射線をきわめて少なくすることを可能にする。トモセラピーは強度変調放射線治療の専用機であり、ライナックでの強度変調放射線治療に比し効率よい運用が可能であるだけでなく治療精度が優れていると考えられている。トモセラピーはCT撮影装置を内蔵しており、治療毎に正確な位置確認を行うだけでなく、経過中の病変や臓器の移動形状の変化を確認しこの画像情報を元に線量分布の確認修正を可能にする優れた特徴を持っている。トモセラピーは現在主に頭頸部がん・前立腺がんの強度変調放射線治療を中心に行っており、将来肺定位照射への応用、婦人科がんへの強度変調放射線治療の適応を検討している。

当科の特徴として頭頸部癌の症例が豊富なことがあげられる。強度変調放射線治療だけでなく、動注療法、小線源治療など様々な治療手技をもちい機能温存を重視した個別化治療による個々の治療に対応している。頭頸部がんは発声、嚥下、呼吸などの重要な機能を担当する臓器であることに加え、形態を温存して治療することが美容的、精神的に満足度の高い治療ができる利点がある。昨今患者さんからのニーズの大きいいわゆる低侵襲治療の代表的治療の一つである。

トップレベルのがん専門病院に要求される高品質のがん治療の基盤治療の一つとして当科の放射線治療は大きく貢献している。高品質な集学的治療に重要な役割を果たすのみならず、がん治療に本質的な役割を担う緩和治療の根幹を支える重要な役割も担っている。今後も当科の放射線治療は当院の日常臨床および新しい治療開発に大きく貢献していくと思われる。

外来部

外来部は、病院の基本理念、基本方針に基づいて、初診患者さんや再診患者さんが外来診療に満足していただけるようにすること、かかりつけ医や地域の病院と当院の各診療科との医療連携がスムーズに行えるように院内外の調整を行うことが重要と考えています。また、がん診療も入院から外来に軸足を移してきており、外来で精密検査や化学療法などを受ける患者さんが増えているため、各診療科間の横断的で効率的な診療を行えるようにすることも重要です。

外来部所属の診療科としては、脳神経外科、皮膚科、眼科の3科です。当院のがん治療を安全かつ円滑に進めるために必要不可欠の診療科であるために外来部として統括されています。常勤医師ではないので、当院では手術などの治療は行っていませんが、名古屋大学や名古屋医療センターなどと連携をとっています。

外来化学療法センターは、平成17年12月に29床で開設し、平成18年9月からは全診療科共通の点滴当番医制を導入、専任看護師、受付クラークも配置し、薬剤部の抗がん剤ミキシングの

協力も得てほぼフルに稼働しています。一日の外来化学療法件数も約60-120となり、ベッドが3-4回転する日も多くあります。外来治験治療数も増加し、場所も手狭になってきています。安全で効率のよい外来化学療法を行うため、平成24年度には新外来化学療法センターの運営開始計画が立ち上がってきており、さらなる充実化が期待されています。

外来診療の大きな課題として診察待ち時間があります。平成19年にセカンドオピニオン外来を設置し、通常診療と分けることでセカンドオピニオン患者の待ち時間の短縮と時間的に余裕のあるセカンドオピニオンを受けていただくようになりました。再来診察も予約制が浸透してきています。再診患者の当日予約は10%未満になりました。しかしながら、がん患者の診療はなかなか時間通りの診察は難しい側面があります。初診患者も事前に医療連携室で予約がとれ、受診時間の予定がたつようにしましたが、今後は紹介医に予約制の案内をさらに広げ、システムの簡略化もはかり、多くの初診患者の方が予約制度を利用できるようにすることを目指しています。

平成22年2月15日より新しいオーダーリングシステムが稼働し、外来での患者呼び出しシステムも番号呼び出しとなりました。今後は電子カルテ導入に向けての種々の調整・整備及び業務電子化に対応することがさらに重要になってくると思われま

循環器科部

循環器疾患には、心筋梗塞、心室細動など短時間で生命を奪ってしまう疾患が多いです。したがって、循環器科部の診療では、常に、すばやく正確な判断が要求されます。

当センターでは、次のような循環器科の業務を行なっております。

1) がん治療前の循環器チェック

循環器疾患には、悪性腫瘍（以下がんと表現します）がほとんどありません。しかし、がんも循環器疾患も比較的高齢者に多く発症しますので、循環器疾患を持ってみえるがん患者さんは少なくありません。がん治療前に循環器チェックを行っておりますが、このチェックで循環器疾患が初めて見つかる方もおみえになります。

2) 循環器疾患を合併してみえるがん患者さんの循環器治療

手術療法、化学（薬物）療法、放射線療法、内視鏡治療などの多くのがん治療は心臓に負担をかけます。循環器疾患を合併してみえる場合、がん治療が安全に行なえるようにがん治療に合った循環器治療を行ないます。

3) がん治療により誘発される循環器疾患の予防と治療

がん治療自体が心筋梗塞、狭心症、心不全などの循環器疾患の原因となることがあります。また、心毒性をもった抗がん剤による心筋障害が発生することもあります。これに対し、循環器科は、がん治療中に循環器疾患が発生しないように予防処置を講じます。循環器疾患が発生した場合には、治療を迅速に行ないます。

4) その他

転移性心膜炎の診断、人工ペースメーカが植え込みされている患者さんの放射線検査および放射線治療時の循環器的な診療支援。

これら雑多な診療内容ですが、がん診療の主科と連携しながら循環器診療を行っております。

スタッフは部長の波多野潔1名のみです。循環器専門医で狭心症や心筋梗塞などの虚血性心疾患、不整脈、人工ペースメーカ、高血圧症などの一般的な循環器疾患の多数の臨床研究および臨床経験がありますので循環器診療の知識と経験は豊富です。

がんセンター着任後は、がん患者さんに対する循環器診療を行っております。抗がん剤の心毒性や自律神経障害、悪性心膜炎に関する治療、研究などがん治療に伴う循環器診療を行ってきました。特殊な診療分野ですので解明されていない事象が多く、難しい舵取りが要求されます。しかしながら、一般病院の循環器科15年、がんセンター循環器科18年勤務のベテランです。蓄積した貴重な経験が、最良のがん患者さんのための循環器診療に導いてくれているものと自負しております。

緩和ケア部

1 診療活動

緩和ケアチームは、適切な緩和ケアが迅速に実施できるように病院全体で取り組むことを目的に組織されており、医師、看護師、薬剤師など多職種のメンバーが、がん治療に関する専門的な力を発揮し活動している。

緩和ケア部長	細田蓮子 (緩和ケア暫定指導医・ペインクリニック専門医・麻酔指導医)
緩和ケア部・精神腫瘍科医長	小森康永 (精神科専門医・精神保健指定医・臨床心理士)
緩和ケアチームリーダー	小森康永
調整ナース	リーダー (専従看護師) 山崎祥子 (がん性疼痛看護認定看護師) 精神看護リーダー (専従看護師) 段浩美 (精神看護専門看護師) メンバー 新貝夫弥子 (がん看護専門看護師) メンバー 向井未年子 (がん看護専門看護師) メンバー 永田智子 (緩和ケア認定看護師) メンバー 藤田恵 (がん性疼痛看護認定看護師) メンバー 新田都子 (がん性疼痛看護認定看護師) メンバー 美濃屋亜矢子 (緩和ケア認定看護師) メンバー 深谷恭子 (緩和ケア認定看護師)
支援グループ 1) リンクナース 2) 連携ナース	各病棟1名 退院調整ナース 日置みさき 家族支援チーム 柴田亜弥子 (がん看護専門看護師) スピリチュアルケア推進チーム 宮原久枝

緩和ケアチームでは調整ナースを中心に、患者情報を的確に把握し、医師と薬剤部、MSW、病棟リンクナース、リハビリ、口腔ケア、また院内サポートチームとの連携により、迅速かつ専門的な緩和ケアの提供が可能になっている。緩和ケアチームへの介入依頼はオーダーリングからフリーアクセスで行え、鯨メールが配信されたメンバーが迅速に対応している。毎週水曜16時には、部長以下全メンバーで症例検討を続けている。平成22年度の依頼件数は、334件であった。看護チームで行ったがんセンター入院患者の除痛率は80%以上とよい結果を出している。また薬剤部の統計で、オピオイドの総投与量が減少して

きていることがわかった。これは処方患者数が減ってきたというよりも、適切な使用量により質の高い疼痛コントロールが行き渡ってきたことを反映している。ペインクリニック外来（毎週水曜）では、がん患者の痛みについて木村智政非常勤医師が相談にのっている。一方、こころの痛みについては、精神腫瘍診療科小森康永医師が入院緩和ケアを提供すると共に、外来でも介入とフォローアップを続けている。

平成22年10月には第8回名古屋がん疼痛緩和フォーラムを開催した。社会保険神戸中央病院 新城 拓也 先生には緩和ケア薬物療法の新ガイドラインについて、星薬科大学 成田 年 先生には緩和医療薬物療法の統合的分子理解：がん疼痛のトランスレーショナルリサーチをテーマに最先端の講演をしていただいた。第3回がん診療に携わる医師に対するPEACE緩和ケア研修会は1月23-24日に主催した。年々充実した会になっており、今後2回で終了になるのでがんセンター医師は是非受講されるように希望する。

看護部

平成22年度看護部目標は以下の4点とした。

- 1 倫理的問題に気づく感性を高め、心あるがん看護を実践する
- 2 他部門との連携を強化して、チーム医療を推進する
- 3 リスク感性を高め、医療安全を推進する
- 4 働きやすく魅力ある職場環境をつくる

まず目標1の倫理感性について目標にあげたのは、前年度のクリニカルラダー評価で、あらゆるレベルの看護師で倫理に関する項目の到達度が低かったためである。院内研修開催要項に、日本看護協会が掲げる倫理綱領15項目のうち、研修を受講することでどの項目の倫理的視点が深まるかを意識して取り組むことにした。また、病棟では倫理事例のカンファレンスを積極的に開催し、師長・副師長研修でも倫理的問題を取り上げた。その結果スタッフの意識が高まりクリニカルラダー評価が向上した。

スタッフの学習ニーズの高さは職務満足度調査からも読み取れた。院外発表においてはがん看護学会、日本ストーマ、乳がん学会など全部で25題の発表成果を果たすことができ、心あるがん看護を実践し組織に貢献した。

がん看護の均てん化、がん診療連携拠点病院としての使命を果たすため前年度から始めた「がん看護ジェネラリストナース育成プログラム研修」では、今年度「がん化学療法看護」「緩和ケア」「皮膚・排泄ケア」「乳がん看護」「摂食嚥下障害看護」の5分野を開講し合計392名が受講した。この研修ではジェネラリストナースの育成だけでなく、愛知県下20施設のがん診療拠点病院のスペシャリストが連携・協働して企画・運営に関わったことも、がん看護の均てん化に大きく前進した。

目標2のチーム医療の推進では、退院調整カンファレンス69件、乳腺再発カンファレンスを中心に他職種を含めたカンファレンス46件開催した。他職種合同カンファレンスが全病棟で定着したことは2年間連続の成果である。

目標3の医療安全の推進では、毎月のリスクマネージャー会議で代表的なインシデント事例を検討すると共に、事実がわかるインシデンレポートの作成に向け所属の師長が日常的にスタ

ッフと関わりを持った。医療安全の視点で5つの業務が改善できた。転倒転落防止マニュアルの運用、オピオイド換算表を全職員に配布、内服薬自己管理フローチャート作成、注射薬ミキシングマニュアル見直し、湯たんぼ・アンカの適正使用などである。

目標4の働きやすい職場環境は、新人看護師離職率の高さに象徴されるように目標達成度が低かった。教育体制やプログラム内容は整備されているが、入職後3か月で経験するリアリティーショックの回避ができず離職に至った新人看護師が多かったことが背景にある。打たれ弱いという新人の資質も離職の大きな要因として考えられるが、看護部ではこの点を真摯に受け止め、23年度は教育体制を見直し、入職後3か月で職場に適應できるまでのサポート体制を強化することにした。

23年度に向けた最重要課題は、新人看護師だけでなくすべての職員がワークライフバランス（仕事と私生活の両立）を実現し、楽しく生き生きと働くことができるよう職場環境を整えていくことである。

薬剤部

薬剤部は17名の薬剤師を中心として、次のような理念、目標を掲げ、日々業務に努めている

薬剤部の理念

- 1 最良の心あるがん医療の一翼を担います。
- 2 良質で安全な医療の一翼を担います。

薬剤部の目標

- 1 安心できるお薬を、患者さんにお届けします。
- 2 わかりやすいお薬の説明に努めます。
- 3 薬剤師としての専門性を発揮し、知識・技術の向上に努めます。
- 4 チーム医療の一員として他職種と協力して、より良い医療を目指します。

薬剤部の業務は、調剤、注射薬の供給、医薬品情報（DI）の提供、服薬指導（薬剤管理指導）、抗がん剤の調製、治験（医薬品の臨床試験）など多岐に渡っており、安全で質の高い薬物療法の一翼を担っている。

がんの薬物療法の進歩は著しく、分子標的薬をはじめとする新薬も次々と開発され、使用されている。これら新しい薬剤については、医師、患者さんに対し情報提供を行い、適切な治療を支えている。また、抗がん剤の調製は、これまで外来患者を対象としていたが、平成22年度からは入院患者の化学療法についても休日も含め、薬剤部で調製することとなった。

近年、がんの治療と合わせて、緩和医療の重要性が高まってきている。使用できるオピオイドの種類も増えてきており、多彩な薬剤の中から患者さんに適したオピオイドを選択したり、痛み以外の生活の妨げとなる症状の緩和について、緩和ケアチームとも連携しながら症状のコントロールを図り、患者さんのQOLの維持向上に努めている。

医薬品の開発に必要な臨床試験（治験）の件数もここ数年増加の一途をたどっており、承認前の医薬品のみならず、新薬として承認された後の製造販売後臨床試験や適応拡大のための臨

床試験も行われている。これら治験の適切な実施、データ収集は治験の結果を左右することとなるので、治験の進行管理は重要な業務であり、薬剤部としても業務のウエイトが大きくなってきている。

第2節 研究所

疫学・予防部

疫学・予防部の主要な研究目的をまとめると、第一に、県下のがん流行の実態把握、第二に、発がんに関する危険・防御要因の探索、第三に、がん予防に役立つ情報に基づいた予防的介入による効果評価など、愛知県民・国民のがん予防対策に役立つ総合的な情報を構築していくことである。平成22年度は研究員4名、研究技師2名、リサーチレジデント2名、大学院生4名、研究・研修生6名、それに約20名の非常勤研究補助者らに助けられ、さらに競争資金としての文部科学省や厚生労働省の研究補助を得て、国内外の共同研究者らと共に、国際学術誌に原著論文48編を出版し、国内外の学術会議では34課題を報告できた。それらに関連した主な研究内容をまとめると以下のようになる。

第一に、県のがん対策の策定に不可欠ながんの統計情報を得るため、健康福祉部が健康増進推進事業の一環として実施している「地域がん登録」の精度向上を目指し、疫学研究の側面から技術的支援を継続実施している。そして、東アジア地域でのがん医療の均てん化を目指して、地域がん登録資料を用いた、日本、韓国、台湾、中国、フィリピンの主要部位別がんの5年相対生存率共同研究を主導した。また、愛知県内で設置が検討されている重粒子線治療について、その治療の対象者となる県内のがん罹患者数の推計を行った。

第二に、疫学的研究手法を用いながら、県民を対象とした主要な発がん関連要因を探索していく、世界に例のない大規模病院疫学研究を1988年から展開しており、平成22年までに健康調査票から得られた14万人以上（県民の2%）の newcomer データを蓄積した。また、平成22年度から血液を提供して頂いた方へは、ヘリコバクターピロリ菌抗体検査の結果通知サービスを開始した。さらに、がんの要因としての生活習慣の影響を左右する個人の人々の特性、つまり遺伝子多型に焦点を当てた分子疫学研究を展開し、個人の人々の遺伝子体質を考慮したがんのテーラーメイド予防に役立つ情報を構築してきた。これらの情報は、がんセンターのホームページを通じて国民にわかりやすい形に編集し、発信している。

第三に、健康福祉部の事業としての「健康日本21あいち」に基づく健康推進事業に参画し、社会医学的側面からがん予防研究に取り組んでいる。例えば、保健を使った禁煙治療を標準化して、治療成績を向上させるための多施設共同研究を主導し、平成22年度末までに6施設で700症例を登録した。

腫瘍病理学部

腫瘍病理学部は、研究の基本方針として、ヒト悪性腫瘍の病理組織学を基盤とする組織学的・分子生物学的解析の総合的基礎研究と、基礎病理学研究成果を生かすという視点に立った先進分子治療学の技術研究・診断学的研究を二大骨子として併せて推進中である。また、がんセンター中央病院の依頼を受けて実施している病理解剖に基づく人体病理学的研究もこれらに加えて行っている。（※臨床的に特に重要な病理解剖症例については、臨床病理検討会（CPC）で討議され、当がんセンターの医療水準向上の一端を担っている。）

主な研究課題とその成果を以下に要約する。（詳細は研究抄録の部を参照されたい。）

（1）新規がん細胞選択的透過性ペプチドの開発とそのユーティリティの研究：

我が国の制がん医療における先進医療技術の新しいレパートリーを創出することを目的として、人工配列ランダムペプチドライブラリーを応用し、がん細胞膜透過能を発揮する新規ペプチドの開発研究を行っている。さらにこれを基盤材料とした細胞内分子輸送システムや分子標的治療システム、疾患診断用イメージングシステムの構築を目指した研究を進めている。

現在までペプチドライブラリーを用いた各種がん細胞透過アッセイの実施により、発生由来の異なる約10種類のヒト悪性腫瘍細胞に対して選択的勾配を示して高透過能を発揮する新規配列をコードする細胞膜透過ペプチドを得ている。現在これらの医療への応用技術系を研究中である。

本研究課題は科学技術振興機構（JST）重点地域研究開発推進プログラム（育成研究）採択課題として平成20年～22年度実施され、さらに平成21年度～23年度文部科学省新学術領域研究に採択され現在も発展的に継続中である。

（2）胃がんの微小転移に対する新しい診断法と治療法の開発：腹腔洗浄液中遊離がん細胞に対する高感度検出のための25Kチップを用いた新規マーカーの網羅的探索を行い、新しい遺伝子マーカーを4個同定し、個々の遺伝子の予後予測マーカーとしての有用性を評価すると同時に60個程度の遺伝子セットによる診断用アルゴリズムの有用性を明らかにした。また近赤外蛍光標識EGFR抗体等を用いた腹膜転移の3D光分子イメージング法ならびに従来のMRIとの融合によるMultimodality imaging法を確立し、その有用性を明らかにした。一方、新規治療法に関してはこれまでに構築したマンノース被覆リポソームを用いたドラッグデリバリーシステムがマウスmφのみならず健康人末梢血のmφ、胃癌患者の腹腔mφ及び患者切除大腸を用いたヒトex vivoモデルでも乳斑に選択的に抗癌剤を送達できることを明らかにした。

（3）難治性がんの性状に関する分子病理学的研究：

a) がん幹細胞を標的とする治療法に関する基礎的検討。とくに、頭頸部扁平上皮癌、胃癌、大腸癌等の消化器がんを対象とした新しい分子標的治療法に関する研究：

大腸がんおよび頭頸部がん由来の複数のがん幹細胞様細胞を作成、それらのEGFR標的薬（Gefitinib、Cetuximab）に対する感受性、抵抗性とその機構を検討し、一部のがん幹細胞様細胞がEGFR標的薬に対し著効性を示すことを見だし、がん幹細胞を標的とする新しい治療法の可能性を示唆した。現在これらに加えて脳腫瘍（グリオーマ）幹細胞の遺伝子学的特徴の解析研究も準備している。

b) 分子標的薬耐性肺がん克服に向けた薬剤耐性機序の解明：近年問題となっているEGFR標的薬（Gefitinib）耐性肺がんの出現の現状を踏まえ、薬剤感受性肺がん耐性肺がんの薬剤反応に関する分子機構を詳細に比較・解析している。Gefitinib刺激により、特異的に変動する細胞増殖制御遺伝子に焦点を絞り、現在この点での耐性癌の特徴を洗い出している。今後この分子機構を基盤に治療学的アプローチへ発展させることを企図している。

c) 固形がんの増殖を制御する新規治療学的標的分子の探索：扁平上皮癌、腺癌、移行上皮癌など細胞間接着が増殖に必須の悪性腫瘍などにおいて、従来報告のない接着分子の遺伝子発現制御によって、正常細胞に大きな影響を与えずに効率的に腫瘍細胞の増殖抑制と細胞死を誘導する系を探索・解析している。これらのkey分子についてその作用機序を詳細に明らかにすることによって、がん標的候補の新規分子としての可能性を検討することが目的である。

分子腫瘍学部

分子腫瘍学部ではがんに対する新たな予防、診断、治療法への展開を目的とした前臨床的研究を進めている。特に、肺がん、中皮腫、消化器がん（大腸がん、肝がん、GIST）、脳腫瘍を主たる研究対象とし、中央病院各科や他大学・研究機関との共同研究を通じその原因遺伝子の探索研究や悪性形質獲得に関する解析研究を行っている。

平成22年度は科学技術振興調整費：重要課題解決型研究の国内共同研究「アスベスト関連疾患への総括的取り組み」（川崎医科大学研究代表）の5年次（最終年度）であり、当部は“細胞株モデルによる中皮腫細胞特性検討”を担当し悪性中皮腫の研究を推進した。肝腫瘍、大腸がん、GIST、脳腫瘍、および肺がんにおけるエピジェネティクス解析研究や、肺がんの神経内分泌分化の研究、microRNAの解析研究も進んだ。

平成22年度は常勤スタッフとしては関戸好孝部長、長田啓隆室長、近藤豊室長、村上秀樹主任研究員、藤井万紀子主任研究員と技師1名および嘱託技師1名を含めた計7名の体制であった。また、名古屋大学大学院医学系研究科細胞工学講座（連携大学院）の教官として関戸（教授）、長田（准教授）が担当した。リサーチレジデントとして水野鉄也（1年次）、石黒太志（1年次）および細胞工学講座（名古屋大学連携大学院）の大学院生として新城恵子（3年次）が参加し、任意研修生としては名大、名古屋市大、名城大学等から6名が参加し、熱心に研究活動を行った。

遺伝子医療研究部

遺伝子医療研究部は「造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用」と「造血器細胞の分化・増殖に関与する遺伝子の血清学的、分子生物学的研究」をテーマに研究をつづけている。

HTLV1ウイルスが関与する成人T細胞性白血病リンパ腫(ATLL)の中の「急性型」群と「リンパ腫型」群の異同の詳細は明らかでなかったが、今回アレイCGH解析により両者は全く異なるゲノム異常様式を持つことが明らかとなった。さらに、「急性型」群を詳細に検討した結果、腫瘍はリンパ節内でクローナルエボリューションを起こし、その一部のクローンが末梢血に出て白血化していることが明らかとなった。

HTLV1ウイルスが関与しない末梢性T細胞リンパ腫(PTCL-U)に関しては、やはりアレイCGH解析により、ゲノム異常や病理所見・予後に関して均一な新規サブグループを見出すことに成功している。

以上からも示唆されるように、リンパ腫の発症には複数の遺伝子の協調作用が必要である。今回Bcl2、Myc、Ccnd1遺伝子

の協調作用を検討した結果、3遺伝子の協調によりマウスの初代培養B細胞がin vitro/in vivo両実験系において形質転換することを見出した。さらに、この遺伝子協調作用を利用して新規がん遺伝子をin vitroでスクリーニングする方法を開発し、その探索を進めている。

また、これまでにリンパ腫のゲノム異常6q23領域の責任遺伝子TNFAIP3/A20を同定し、その異常によってNF-kBの活性が増強することが腫瘍化に重要な役割を果たしていることを報告している。しかしながら、NF-kB活性化単独ではB細胞性腫瘍の形成には至らず、何らかの遺伝子異常の協調が必要と考えられる。そこで、現在NF-kB活性化B細胞リンパ腫細胞株のcDNAライブラリーを作成し、これとcanonical NF-kB恒常的活性化を引き起こすIKK2CAを共発現させ、造腫瘍性にかかわる遺伝子をin vivoでスクリーニングしている。

NK細胞性リンパ腫はアジア地区で頻度の高い腫瘍であり、その病態解明が待たれる。今回アレイCGH法を用いて、NK細胞性腫瘍のゲノム異常の解析を行ったところ、6q21領域において、最も高頻度な欠失が認められた。この領域にある遺伝子のうちPRDM1およびFOXO3の欠失が腫瘍化に重要であるとの知見を得た。

小児リンパ性白血病の原因として最も多い染色体転座t(12;21)はTEL-AML1を形成する。今回マイクロアレイ解析によりTEL-AML1によってB細胞で発現の変化する遺伝子を抽出し、各遺伝子のB細胞における機能を検討した。また、TEL-AML1との相関が示唆される転写因子ERGは、白血病の一部のタイプで予後と密接な関係が報告されているが、その白血病化能は不明であった。マウスモデルを用いて、ERGは白血病化を促進し、さらに白血病を維持するために重要であることが明らかとなった。

腫瘍免疫学部

がん治療において、以前から免疫療法に対する強い期待があったが、特にこの数年、様々な新規の免疫療法が臨床応用に至っている。代表的な治療法として、ペプチドワクチン、蛋白ワクチン、樹状細胞ワクチン、T細胞抗原受容体(TCR) 遺伝子移入T細胞療法、 $\gamma\delta$ T細胞療法、NKT細胞療法などをあげることができる。これらの治療は、治験、先進医療、臨床研究いずれかの枠組みで実施されている。より有効な免疫療法を確立するために、今後はそれぞれの治療法における問題点を明らかにして、その解決策を見出していくことが重要である。

腫瘍免疫学部では、これらの動向を注視しつつ、将来の免疫治療の基盤となるような独創的な発想を模索しながら研究を実施している。今年度は、1) 新たに開発した人工抗原提示細胞を利用した卵巣がんを傷害する細胞傷害性Tリンパ球(CTL)の樹立、2) 膀胱がん細胞で亢進しているオートファジーがCTLエピソードの生成に必要であること、3) HLAクラスII分子を標的とするユニークなCTLが造血幹細胞移植後の抗白血病効果に貢献している可能性、4) $\gamma\delta$ T細胞を利用した小児神経芽腫に対する免疫治療の基盤、5) がん抗原特異的CTLから単離したTCRを装備したNKT細胞の作製とその機能解析について、国内の第一線で活躍する複数の研究者と共同で研究を行った。

腫瘍ウイルス学部

ヒトがんのおよそ15%がウイルスによる発がんであると推計され、ウイルス発がんは重要な研究領域となっている。現在、ヒトがんウイルスは7種類同定されている。腫瘍ウイルス学部ではヒトがんウイルスであるEpstein-Barrウイルス (EBV) を主な研究対象としている。EBVはパーキットリンパ腫、上咽頭がんと深く関わりがあることが1960年代から知られていたが、最近多くのがん（胃がん、ホジキン病、T細胞リンパ腫、臓器移植後リンパ腫等）に感染していることが明らかとなっている。EBV増殖機構、感染とがん発症の分子機構についての解析を通して、EBV感染症の制御を目標として研究を行っている。EBV陽性がん細胞の大部分は潜伏感染状態にあり、ウイルスの産生はないが、一部のがん細胞は溶解感染を誘発し、IL6,IL10などのサイトカインを発現させ、潜伏感染状態にあるがん細胞の増殖を促進させている。従って潜伏感染状態と同様、溶解感染状態のウイルス増殖機構の解明はEBV陽性がんを制御する上で重要である。

平成22年度において我々は感染中期や後期においてEBV溶解感染のトリガーでありウイルスDNA複製のori結合タンパクでもあるBZLF1が、がん抑制遺伝子p53のDNA結合性を増強することでp53依存性転写を促進することを明らかにした(Sato et al., Cell Cycle. 2010)。またBZLF1はSUMO化をうけ、それによりHDAC3と相互作用し転写活性が抑制されることを見いだした(Murata et al. J. Biol. Chem. 2010) ほか、BZLF1の転写がJDP2と呼ばれる転写抑制因子によって制限されていることを報告した(Murata et al. J. Biol. Chem. 2011)。

一方、EBV DNAポリメラーゼ付随タンパクであるBMRF1の構造解析(Murayama et al. J. Biol. Chem. 2009) の結果明らかになったBMRF1のテトラマーリング構造が、ウイルスの複製に重要であることを示した(Nakayama et al. J. Biol. Chem. 2010)。

さらにEBV溶解感染を誘導した細胞において、経時的にウイルス複製関連タンパクや複製されたウイルスDNA、宿主の修復関連因子の局在を詳細に観察し、それらの挙動について新しい知見を得た(Sugimoto et al., J. Virol. 2011)。

この他、ヒトサイトメガロウイルスのUL76遺伝子部分の配列が、後ろのUL77遺伝子の発現に寄与していること(Isomura et al., PLoS One. 2010)、UL79、UL87、UL95遺伝子がウイルスの後期遺伝子の発現に重要なはたらきをしていること(Isomura et al., J. Virol. 2011) を報告した。

分子病態学部

分子病態学部では、年度途中(平成22年12月)の部長新任に伴い主要研究課題が変更された。新体制では、主に大腸がんの形成や浸潤・転移の機構について、特に腫瘍微小環境内での異種細胞間相互作用やシグナル経路に着目し、遺伝子改変マウスを用いた生体レベルでの解析を行い、先進的な分子標的治療の開発に役立てることを目指している。また、従来の研究テーマとして、「大腸がんの上皮間葉転換 (EMT) に伴うセレクチンリガンド糖鎖発現制御機構」、「グリコサミノグリカンおよびスフィンゴ脂質と癌の進展」についても精力的な研究活動を行った。

Apc遺伝子にヘテロ接合変異を持つマウス (Apc変異マウス) は、Apc遺伝子座でのヘテロ接合性の消失によりWnt経路が活性化される結果、腸管に多くの腺腫性ポリープを生じ、大腸がんの発がん初期過程のマウスモデルとして汎用されている。この腫瘍細胞に、さらにSmad4遺伝子の変異が重なる (Apc/Smad4複合変異マウス)、浸潤性の腺がんを生じる。これまでに、京都大学医学研究科遺伝薬理学教室にて、SmoothenedというHedgehog経路の分子が腸管腫瘍のWnt経路活性化に関与すること、腫瘍の成長にはWnt経路だけでなくmTORC1経路の活性化が必要であることなどを明らかにしてきた。また、腸がん細胞はケモカインを分泌して周囲に未分化骨髄球と呼ばれる特殊な細胞を引き寄せますが、平成22年度には、この未分化骨髄球が大腸がんの肝転移でも重要な役割を果たすことを示した (Kitamura et al., 2010)。今後、これら大腸がんの発生・進展に関わるシグナル経路の活性化機序、腫瘍微小環境での異種細胞間相互作用などを解明し、新しい治療法の開発につなげたい。

CDX1、CDX2は腸上皮細胞の分化に重要な役割を果たす転写因子で、大腸がんのがん抑制タンパクの候補とされる。平成22年度には、酪酸など短鎖脂肪酸のトランスポーターをコードするSLC5A8がCDXの新規標的遺伝子であることを示した (Kakizaki et al., 2010)。今後、他のCDX標的遺伝子候補が大腸がんの発生、進展に果たす役割について明らかにするとともに、大腸がん臨床検体での発現解析を行いたい。

発がん制御研究部

「染色体の不安定性」という現象が、がんの悪性化のみならず、発がん過程そのものにも深く関与している可能性が指摘されていますが、この「染色体の不安定性」は、細胞が分裂する時の異常によっておこることが多いと考えられています。そこで、私たちは分裂期キナーゼであるcdk1、Plk1、Aurora-A、Aurora-Bの細胞分裂に果たす分子メカニズム、及び各キナーゼ間の関連を明らかにしようとして研究しています。

一方、多くの抗がん剤や放射線によるがん治療は、がん細胞のDNAに障害を与えることで細胞死を引き起こすことを目的としています。しかし、細胞にはDNA障害にตอบสนองして細胞増殖を一時停止させ、損傷DNAを修復する機構「DNAダメージチェックポイント (チェックポイント)」が備わっています。損傷DNAが修復されたがん細胞は再び増殖を繰り返すことから、がんの放射線治療や化学療法においてチェックポイントは障壁になると考えられており、発がん制御研究部では、チェックポイントを標的とした抗がん剤の併用療法の可能性について検討しています。私たちは最近、チェックポイントシグナルの中核的シグナルとして機能しているChk1 (チェックポイントキナーゼ 1) の新しい制御の仕組みをいくつか明らかにしています。これらの研究をさらに推し進めて、チェックポイントにおけるChk1機能制御の分子基盤を明らかにすることで抗がん剤開発に貢献しようと考えています。

さらに私たちは、がん細胞の形や運動を司る仕組みについても研究を進めており、がんの浸潤・転移の制御機構を明らかにすることによって浸潤・転移を阻止する抗がん剤の開発にも寄与したいと考えています。

中央実験室

中央実験室では現在、研究員1名、技師2名、再任用職員1名、臨時雇用職員1名のスタッフで、研究所全体の研究活動や臨床研究を円滑に進めるのに必要な種々のサービス業務を行うとともに、研究員が独自の研究も行っている。

研究所全体の研究活動における共通業務では、1. 共同利用機器の整備と維持管理、2. 研究所設備の整備全般に関わる業務、3. RI 実験施設の維持管理、4. セキュリティーシステムの維持管理、5. 名簿・連絡先の作成、6. 見学者の案内、7. 動物管理委員会による実験動物飼育施設の維持管理の補助業務、など、広範囲に及ぶ。実験動物飼育施設の維持作業は、器具の洗浄、えさの滅菌など実務を業者に委託している。中央実験室では、その管理及び動物管理委員会と協力して動物飼育室の円滑な利用を推進している。共同利用機器の中で、DNA シーケンサーは、研究者から依頼されたサンプルをまとめて運転し、そのDNA 塩基配列を決定している。ここ数年は約15,000サンプルで安定しているが、ほぼ毎日運転している。本年度は質量分析装置が導入され、今まで外部委託したり、共同研究により他施設を利用していた解析が、本研究所で行えるようになった。このことによって、研究を加速出来ると共に、より詳細な独自の解析が可能となった。本機器を始め共同機器の利用を円滑に行うために、テクニカルセミナーを随時開催し、毎回多数の参加があり、好評を得ている。

中央実験室は「ミトコンドリアDNA の多型と食道がん発がんリスク」と言うテーマで研究を行っている。ミトコンドリアでは酸化的リン酸化によりATP を産生しているが、その副産物として、電子が漏れることにより活性酸素が発生する。酸化的リン酸化に関与するタンパク質の多型や変異によって、活性酸素の発生量は異なると考えられることから、これらのタンパク質の一部をコードしているmtDNA の多型によって活性酸素の量や、mtDNA および核ゲノムへの変異の入り易さが異なる可能性が考えられる。このことを明らかにするため、食道がん患者および非がん患者のmtDNA のD-loop 領域の多型を網羅的に調べ、食道がん発がんとの関連を解析することを計画した。現在、それぞれの症例のD-loop 領域の塩基配列を決定するため、市販のリシーケンシングプライマーを用い、D-loop 領域全域を増幅し、塩基配列を決定している。今後、食道がん症例、非がん患者由来のDNA を用い、それぞれの多型の位置、種類、数を決定した後、食道がん発がんへの関連性を解析する。

第1章 研究抄録関係

1. 病院における研究（課題別研究費）

<研究課題1>

がん治療におけるインターベンショナル・ラジオロジーの応用についての研究

Clinical evaluation of interventional radiology in oncology
切除不能悪性大腸狭窄に対するステント治療

<研究者氏名> 放射線診断・IVR部 稲葉 吉隆

共同研究者 山浦 秀和、佐藤 洋造、加藤 弥菜
金本 高明、北角 淳、鈴木 梨津子
栗延 孝至、佐藤 健司

【はじめに】

大腸閉塞症状を伴う切除不能悪性大腸狭窄に対して、その狭窄部に金属ステントを留置して内腔を確保するステント治療が行われるようになっており、予後の限られた患者における外科的対処（人工肛門造設やバイパス手術）が困難な場合の症状改善の手段として期待されている。本研究は、切除不能大腸狭窄に対するステント治療の有効性と安全性を前向きに評価するものである。

【対象と方法】

切除不能悪性大腸狭窄に対するステント治療の臨床的有効性を前向きに評価するために、臨床的症状改善割合、有害事象の発現頻度と程度、手技の実行性を調査した。

評価の適格基準として、切除不能悪性大腸狭窄で以下の条件を満たすものとした。

- ①切除適応のない悪性腫瘍による直腸またはS状結腸の狭窄または閉塞を有し、その狭窄または閉塞により急性大腸閉塞症状が生じている。大腸狭窄または閉塞の範囲は、直腸またはS状結腸が切除されている場合も含めて、肛門側が肛門縁より5cm以上口側で、口側が腸骨稜レベルより肛門側までとする。
- ②临床上、当該大腸狭窄より口側の消化管に明らかな狭窄がない。
- ③主要臓器機能が保たれている（明らかな心不全がない、血小板数 $\geq 50,000/\text{mm}^2$ 、総ビリルビン値 $\leq 3.0\text{mg/dl}$ 、血清Cr $\leq 2.0\text{mg/dl}$ ）。
- ④performance status (PS) が ECOG分類で3以下。
- ⑤4週以上の生存が見込める。
- ⑥患者本人から文書による同意が得られている。

除外基準として、人工肛門造設が適当である症例、直腸またはS状結腸狭窄部に対する一期的手術を意図しての術前減圧を必要とする症例、直腸またはS状結腸狭窄部より止血処置を要する出血を認める症例とした。

切除不能悪性大腸狭窄に対するステント治療は、経肛門的にX線透視誘導下操作で、切除不能悪性腫瘍に起因する直腸またはS状結腸の狭窄または閉塞部位に膜なし金属ステントを留置することとして、内視鏡の補助的使用やバルーン拡張の併用

は許容した。

ステント治療後4週間を評価観察期間として、治療翌日と1週毎に自覚症状を確認し、血液検査と腹部X線撮影を行った。

治療翌日と1週毎に自覚症状改善の程度を3段階に評価した。2週間以上連続して排便・排ガス状況、腹部症状が改善したものを「有効」、症状の改善がないものを「無効」とした。臨床的有効率（臨床的症状改善割合）は「有効」例数の登録数に対する割合とした。有害事象はNCI-CTC（version-2.0）により評価した。手技の実行性はステント治療の完遂例の割合とした。

重篤な有害事象ならびに有効率の評価に必要な症例数を、検定に一標本検定の二項検定で行うと、有害事象については、合併症の予測値を10%とし、30%以上は許容されなかった場合に、 $\alpha=0.05$ 、 $\beta=0.20$ の条件下では30例要する。有効率については、期待有効率80%、閾値有効率50%とした場合に、 $\alpha=0.05$ 、 $\beta=0.20$ の条件化では19例要する。よって、本研究では必要症例数を30例とし、これに10%のプロトコル逸脱等を見込んで、予定登録症例数を33例とした。

【結果】

登録された33例について評価した。実行性を示す治療完遂割合は成功32例、失敗1例で、97.0%（32/33）であった。失敗した1例は、狭窄部が強固でステントデリバリーカテーテルの通過不可症例であった。手技に伴う合併症は認めなかった。臨床的症状改善割合は81.8%（27/33）であり、「有効」が27例、「無効」が4例、2週以上の効果を評価できなかった評価不能が1例、手技失敗が1例であった。臨床的有効であった27例では観察期間中の再閉塞はみられなかった。観察中止例は原病死3例（有効2、評価不能1）、肛門痛によるステント抜去1例（無効1）、口側消化管狭窄1例（無効1）であった。観察期間中におけるGrade2-3の有害反応は、下痢12例（36.4%）、疼痛5例（15.2%）、出血1例（3.0%）、排尿困難1例（3.0%）であり、Grade4の有害反応や治療関連死は認めなかった。また、ステント留置後4週間観察できた27例では腹部X線写真で閉塞部を逸脱するようなステント移動は認めなかった。全33例でのステント治療後の生存期間中央値は91日（95%CI：60-122）であった。

【考察】

消化管狭窄に対するステント治療は1991年にSongらにより報告されて以降、食道狭窄を中心に広く用いられている。日本では、1996年に、悪性食道狭窄へのステント治療が適用承認され、悪性腫瘍に起因する食道狭窄、食道気管支瘻への姑息的治療として使用されている。食道以外では、胃、十二指腸、大腸狭窄にもステントは利用され、2009年には十二指腸用ステントが本邦でも承認された。大腸用ステントは、海外では市販されているが、本邦では現時点で未承認である。

大腸領域では、当初一期的切除が困難な狭窄病変を減圧後根

治切除に導く手段として有用とする報告は多くみられる。日本でも同様の報告が散見されるが、大腸用ステントは認可されておらず使用できない。従って、有用性を示唆する報告はあるものの、安全性や有効性を検証するための前向き臨床試験はない。そこで、今回、日本で入手可能（研究開始当時）な消化管ステントである食道用ステントを用いての切除不能悪性大腸狭窄へのステント治療における臨床的有用性を確認するため前向き評価を行った。ステント逸脱を危惧して膜なしステントのみに使用に限定したため、事実上膜なしウルトラフレックスステントのみが使用されることとなった。また、ステント留置キットの施行者による改良を禁じたため、規定されるデリバリーシステムの長さによりステント留置可能範囲は限定されることとなり、直腸からS状結腸領域の狭窄病変が対象となった。

今回の研究の結果として、目的部位へのステント留置成功率は97%であり、高い実行性が示された。登録症例の82%で臨床症状の改善が確認され、臨床的有効性も良好であった。但し、ステント留置が成功しても、臨床症状の改善に至らない症例が15.6%（5/32）存在し、これは過去の報告と同様であった。その原因は、ステント留置部の口側に別の狭窄が存在するもの、広範な癌性腹膜炎のために消化管機能が低下していたもの、直腸下部へのステント端の刺激により激痛が生じステント抜去したものであり、これらの原因をステント留置前に的確に判断することができないため、臨床症状改善が得られる症例のみを選択することが難しいことが認識された。ステント留置手技中の合併症は認められず、ステント留置後の下痢、疼痛、出血などの有害反応は過去の報告と同様であった。許容できないステント逸脱はみられなかった。Grade4の有害事象や消化管穿孔や治療関連死は生じておらず、安全性は許容範囲内であると判断された。

今回の研究の問題点として、有効性の指標を自覚症状の改善としているため、客観性にかける点、この病態における症状改善期間の長さを2週で有効とする根拠が不十分な点が挙げられる。さらに、使用したステントが食道用ステントであり、長さや径や、あるいは柔軟性や拡張力などが大腸狭窄の治療に最適ではないかもしれない。しかし、今回の結果は、この治療法が十分な実行性を有し、かつ高い症状改善を得られることを示しており、本治療法がこのような病態を有すがん終末期の患者の症状緩和に有効な治療であることが示された。

<共同研究2>

治療感受性と再発リスクによる乳癌術後補助療法の選択に関する研究

The selection of adjuvant therapy for breast cancer, based on the treatment sensitivity and the relapse risk

<研究者氏名> 乳腺科部 岩田 広治

共同研究者 藤田 崇史、林 裕倫、服部 正也、
近藤 直人、堀尾 章代

【1年間の総括】

この1年間にも乳癌の術前後薬物療法に関する膨大な情報が世界中から流入し、我々が参加している国内・国外の臨床試験も多方面にわたって進行したが、徐々に考え方がmolecular subtype別に考える方向性に向いてきた。

1：術後内分泌療法に関する研究

報告：閉経後乳癌患者ではアロマターゼ阻害剤の5年間投与が標準治療と位置づけられるが、現在の課題は投与期間である。ホルモン感受性乳癌の全再発の内、術後5年以降の再発が全体の23%にも達することが判明して（当院データ）、5年以降の長期内分泌療法によって、再発が減少できるかは極めて重要な課題である。これを検証する臨床試験が世界中で行われ、当院ではアナストロゾールの5年と10年を比較するN-SAS-BC05試験（日本）とSOLE（global study）に参加している。さらに今年度はホルモン剤の効果と肥満の関係が大きく取り上げられ、大規模診療試験の結果をBMIでのsubgroupで解析した結果が多く報告された。当院でも同様の検討を行い、日本人の初めてのデータを発表する予定である。

2：術後化学療法に関する研究

報告：術後薬物療法の適応を考える入口を、まずmolecular subtypeで考えようとする方向性が出てきた。ホルモン高感受性乳癌に対する抗癌剤の意義に疑問がもたれ、当院でも化学療法の必要性を判断する指標としてKi67indexを遺伝子病理部の協力で全例に測定を行っている。

3：術後分子標的治療に関する研究

報告：昨年度から引き続き、HER2陽性乳癌に対する術後Trastuzumab投与に変化はない。腫瘍径0.5cm以上に対する投与も浸透してきた感がある。今年度はHER2陽性のhigh risk患者を対象に、Neratinibを追加投与することの意義を検証するglobal studyに参加をして9例を登録した。さらに高齢者HER2陽性乳癌患者における化学療法を省略したTrastuzumab単独治療の意義を検証するN-SAS-BC07試験には現在2例の登録である。術後TykerbやBevasizumabの効果を検証する世界共同試験は、経過観察中であり試験結果が早く待たれるところである。

4：術前化学内分泌療法に関する研究

報告：この分野の臨床試験は世界の中でも特に日本で積極的に行われている。本年度はHER2陰性患者を対象にしたrandomized phase II試験（医師主導試験）の登録が開始され、carboplatinの承認を目指した試験として登録中である。閉経後ホルモン感受性乳癌では術前ホルモン療法の効果で術後の抗がん剤の必要性を検証する、第III相多施設共同比較試験（N-SAS-BC06：NEOS study）が開始から3年が経過した。当院からの登録数は日本トップである。登録期間の延長が認められ、登録促進が期待される場所である。

5：術後denosumab投与に関する研究

報告：骨転移を有する乳癌患者にゾメタとの比較試験で有効性を示し、現在承認申請中のdenosumab（RANKL抗体）を、術後high risk患者に再発予防で使用する世界共同大規模臨床試験が動いている。当院からも積極的に参加し、現在10例の登録を行っている。

全体として2011.3にSt Gallen2011が開催されて、周術期薬物

療法の考え方が少しずつ変化をしてきている。Key wordの一つがdiversityである。人種の多様化、社会通念の多様化、文化の多様化、癌の多様化、様々な分野でdiversityが目目され、乳癌の分野でも大きく取り上げられている。今後は更なる個別化を目指した治療戦略が重要になってくることは間違いのない事実である。

<研究課題3>

骨軟部肉腫進行例に対する治療法の研究

A clinical trial of novel therapy for cases with advanced musculoskeletal sarcomas.

<研究者氏名> 整形外科部 杉浦 英志

共同研究者 山田 健志

【目的】

進行性の骨軟部肉腫症例に対しては有効な標準的治療がないのが現状である。今回腫瘍の進行の為に手術療法が困難な症例あるいは再発性の腫瘍に対してカルボプラチン、エトポシドによる動注化学療法及び術前放射線療法を行い、その有効性と安全性を確認した。

【対象および方法】

血管造影により腫瘍血管を確認。血管造影後にカテーテルをmain feederにおき、病室にてカルボプラチン300mg/m² (2時間)・エトポシド200mg/body (2時間)を順に計4時間にわたって投与した。上記動注療法を2クール以上行っても縮小効果の見られなかった症例では放射線療法を追加した。照射法は分割照射とし、一回2-3Gy、totalで30-60Gyとした。動注療法を施行した骨軟部腫瘍症例は12例であり、放射線療法を併用した症例は7例であった。放射線線量は30-60Gy、平均44.9Gyであった。12例の内訳は男性6例、女性6例、平均年齢は41.8歳 (22-73歳)であった。腫瘍の組織型は、骨腫瘍ではEwing肉腫1例、骨MFH1例、軟部腫瘍では平滑筋肉腫4例、MFH3例、滑膜肉腫2例、類上皮肉腫1例であった。腫瘍発生部位は骨腫瘍では上腕骨1例、脊椎1例であり、軟部腫瘍では大腿部4例、臀部2例、下腿部1例、頭部1例、肩部1例、会陰部1例であった。

【結果】

治療効果については12例中9例がPR、3例はNCであった。PR9例のうち2例は60%以上の著明な腫瘍縮小が認められた。著明な腫瘍縮小の見られた症例は滑膜肉腫1例と平滑筋肉腫2例であり、滑膜肉腫の1例と平滑筋肉腫の1例は最終経過観察時においてCDF及びNEDであった。局所再発は12例中3例に見られ、遠隔転移は7例に見られた。また、最終経過観察時の予後はCDF4例、NED1例、DOD7例であった。

副作用としては軽度の悪心を訴えたが、嘔気が持続することはなく、外来通院でも治療可能であった。血液検査では、初期の2コースでは白血球の軽度の減少を見るのみであったが、3コース以後は、白血球のみならずヘモグロビン、血小板いずれ

もが減少する汎血球減少症を呈した。

【考察】

神経血管束等の重要臓器に近接した軟部肉腫進行例では、機能温存のために切除縁を縮小した手術が試みられるが、これには術前計画に基づいた一定の治療方針が必要である。放射線照射は、脂肪肉腫等の比較的感受性が高いものを除き、大部分の軟部肉腫に対してはその有用性は明らかではない。化学療法においては、小円型細胞肉腫を除き軟部腫瘍の感受性は乏しく、術前治療において有効性が確認されているものは現在のところ見られない。このため、腫瘍の縮小と安全な切除縁の確保を目的に、我々はカルボプラチン・エトポシドによる動注療法を行った。また、放射線治療の併用によって更なる効果を期待したが、CRといった著しい効果を得る事は困難であった。しかしながら本法においてPRを示した症例は12例中9例 (75%)であり、重要臓器の機能温存に寄与するものと考えられた。

<研究課題4>

局所前立腺がんに対する総照射量74グレイの放射線治療の臨床的研究

Clinical study of radiotherapy with 74 gray as total dose against localized prostate cancer

<研究者氏名> 泌尿器科部 林 宣男

共同研究者 小倉 友二、脇田 利明

【研究目的】

愛知県がんセンター中央病院では、局所前立腺癌に対して放射線治療を内分泌治療と併用し行ってきた。その治療成績と治療成績に關与すると考えられる因子の解析を行った。さらに、放射線治療により生じた有害事象を調べた。

【研究の対象と方法】

2004年11月以降、Stage B およびStage C と診断した70症例を対象とした。放射線治療開始は、内分泌治療によるPSAのnadirを確認後とした。放射線照射は三次元原体照射法で、総線量は74Gyとした。照射法は、最初の40Gyは前立腺と精囊腺を含め、残りの34Gyは前立腺のみに絞って照射を行った。Neoadjuvant療法は照射開始時まで行った。Adjuvant療法は、Stage Bは1年間、Stage Cは2年間のLH-RH agonist単独療法を行った。PSA再発は、RTOG-ASTROの新基準 (PSA Nadirから2 ng/ml上昇)に従った。非再発率はKaplan-Meier法で検討し、臨床的諸因子の予後に関する有意差検定は、Log-rank testを用いた。

【患者背景】

平均年齢は70.63±5.09歳、Stage Bが26例、Stage Cが44例であった。生検時PSA値は40.42±72.56 ng/ml、Gleason scoreは6以下が20例、7が37例、8以上が13例であった。Neoadjuvant内分泌療法 (LH-RH agonist単独もしくはLH-RH agoni

stと抗アンドロゲン剤の併用)の期間は225.6±140.9日、放射線治療直前のPSA値は0.21±0.22 ng/ml、平均観察期間は50.6±12.7か月であった。

【研究結果】

- 1) 全症例の5年非再発率は87.6%、Stage別ではStage Bが87.9%、Stage Cが86.2%と2群間に有意差はなかった(p=0.772)。
- 2) Gleason score別の5年非再発率は、6以下が94.1%、7が87.4%、8以上が88.9%と3群間に有意差はなかった(p=0.730)。
- 3) 診断時PSA値の階層別の5年非再発率は、PSA<10が83.3%、10≤PSA≤20が94.7%、20<PSAが88.5%と3群間に有意差はなかった(p=0.749)。
- 4) 放射線治療直前のPSA値階層別の5年非再発率は、PSA≤0.1が82.2%、0.1<PSAが93.0%と2群間に有意差はなかった(p=0.429)。
- 5) Neoadjuvant期間別の5年非再発率は、期間が200日以下で84.8%、200日を超えると92.2%で2群間に有意差はなかった(p=0.435)。
- 6) D'Amicoのリスク分類別の5年非再発率は、Good Risk群で100%、Intermediate Risk群で92.0%、High Risk群で87.4%と3群間に有意差はなかった(p=0.445)。
- 7) Grade2以上の有害事象は、急性期でGrade2の直腸出血が1例、晩期でGrade2の直腸出血が3例、Grade2の直腸炎が1例、Grade2の膀胱炎が1例であった。保存的治療で対応可能であった。

【結果】

- 1) 70例の局所前立腺癌に対して、内分泌療法を併用した総照射量74Gyの放射線治療(三次元原体照射法)の5年非再発率は87.9%であった。
- 2) Stage、Gleason score、診断時PSA値、放射線治療開始時PSA値、Neoadjuvant内分泌治療期間、D'Amicoのリスク分類などの因子の中では、有意差を認めなかった。
- 3) 重篤な有害事象はみられず、保存的治療で対応可能であった。

<研究課題5>

病理細胞診断における分子腫瘍診断法の研究

Development of molecular analysis on cancer diagnosis

<研究者氏名> 遺伝子病理診断部 谷田部 恭

共同研究者 細田 和貴、佐々木 英一、村上 善子
菅野 雅人、長坂 暢

【研究成果】

近年の分子生物学の飛躍的な発達により、がんの発生・悪性度の評価・薬剤応答性などの知見が蓄積され、それは現在も増えつつある。これら情報の一都は実臨床に直結しており、その応用により適切な診断・治療に結びつくものも多い。そこで、これらの

知見を検証した上で、実際の病理診断、細胞診断に導入、応用することを目標に掲げた。その際に、診断に用いられる臨床検体は、生検検体などの小さな組織を利用しなければならなかったり、正常細胞が多数混じているなどの問題点も多い。そこで、それらの点を踏まえた新たなアッセイ系の確立を検討した。

本年度は、胃・食道吻合部におけるHER2遺伝子増幅について検討を行った。検討当時はTOGA studyの結果を受けて近い将来に実臨床に取り入れられることと目されてきたが、実際に平成23年3月に保険承認がなされた。上部消化管腫瘍におけるHER2遺伝子の増幅は胃・食道吻合部癌に特に頻度が高いとされ、種々の方法によってその遺伝子増幅が検討されてきた。この中で、現在では乳癌に用いられている免疫組織化学染色法とFISH法による検討が主体であり、本院においても、乳癌での数千例に及ぶ経験から同法を用いて検討を進めた。実際にTOGA studyでは、治療効果との関連は免疫染色のほうが優れた効果予測因子との結果が報告されたが、乳癌においてはFISH法の結果が良いバイオマーカーであるとのコンセンサスが得られている。そこで、TOGA studyで用いられた検体をもとに、ドイツの中央判定と本院で改めて実施した免疫染色・FISH法との結果の比較を行った。検討を実施した検体は、low amplificationや発現の低かった症例などであるが、その結果を表に示す。trastuzumab治療の対象とされるIHC 2+以上、FISHでの増幅比2以上で分別すると、中央判定との結果が異なる症例が17例中5例(30%)見られた。とくにFISH法での評価の相違が目立った。この検討では評価が分かれるであろう症例を選んだといえども、この乖離は臨床に重要な意味をもつため、その原因についてさらなる詳細な検討が必要である。胃・食道吻合部癌のHER2遺伝子増幅は、腫瘍内多様性が認められることが知られており、そのFISH判定基準も未だ確立していない。これらのことが要因となると考え、さらなる検討を行っている。

sID	検体	中央(ドイツ)判定結果			愛知県がんセンター検討			
		IHC	FISH	ratio	IHC	FISH	ratio	Cep Num
1	biopsy	+1	positive	2.25	0	positive	2.65	1.9
3	biopsy	+2	positive	3.55	2+	negative	1.53	3.36
5	biopsy	0	negative	1.10	0	negative	1.15	2.28
9	surgery	0	positive	2.00	0	positive	2.01	4.26
10	surgery	0	negative	1.57	0	negative	1.47	3.62
16	biopsy	+1	negative	1.46	0	negative	1.5	3
23	biopsy	+1	negative	1.21	0	negative	1.34	3.01
25	biopsy	+2	negative	1.03	1+	negative	1.4	2.83
26	biopsy	+1	negative	1.15	1+			
27	biopsy	+1	negative	1.43	1+			
29	biopsy	+2	negative	1.13	2+	negative	1.17	3.25
32	biopsy	+1	positive	4.22	1-2+	positive	4.49	2.07
44	biopsy	+2	negative	1.14	2+			
45	biopsy	0	positive	2.44	0	negative	1.58	7.1
47	biopsy	+1	positive	3.35	0	negative	1.7	3.1
65	biopsy	0	positive	2.07	0-1+	positive	3.3	3.25
74	biopsy	0	negative	1.08	0			

<研究課題6>

食道癌に対する術前化学療法についての臨床試験

Clinical trial of preoperative chemotherapy for esophageal

cancer

<研究者氏名> 薬物療法部 室 圭

共同研究者 宇良 敬、田近 正洋、安部 哲也

【研究目的】

根治切除可能な、胸部食道癌を対象とし、術前補助化学療法としてのDocetaxel/Cisplatin/5-FU療法の有用性評価のための第Ⅱ相試験の準備として、同療法の安全性を評価する。

【研究計画】

根治切除可能な、胸部食道癌を対象とし、術前補助化学療法としてのDocetaxel/Cisplatin/5-FU療法の有用性評価のための第Ⅱ相試験の準備として、同療法の安全性を評価する。Primary endpoint は治療完遂割合。secondary endpoints は治療関連死割合、1年生存割合、術前化学療法の奏効割合、有害事象発生割合、重篤な有害事象発生割合、入院期間とする。治療計画は、登録後1週以内にDCF療法を4週毎に2コース施行する。DCF療法終了後4週以降に手術を施行する。DCF療法の用量は、Docetaxel 70mg/m² 第1日目、Cisplatin 80mg/m² 第1日目、5-FU 800mg/m² 第1～5日目とする。予定登録数は24例。登録期間は1.5年。登録終了後1年を追跡期間とし、総研究期間2.5年である。

【結果】

本試験は28例の登録が終了した。3例登録時に化学療法実施中に血清クレアチニン値上昇がみられ、周術期の腎機能保全に努めるべく改訂を行った。症例の年齢中央値59歳、PS0/1：11/17例、臨床病期Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ：11/13/4例であった。2コースの術前化学療法は25例で行われ、効果不良で2例が1コースのみで終了となり、有害事象による患者希望中止で1例が1コースのみで終了となった。化学療法によるGr3以上の有害事象は、好中球減少Gr3/4：82%、感染Gr3：4%、食欲低下Gr3：14%であった。減量は11例で、G-CSF製剤投与は11例で行われた。根治切除が26例でなされ、1例は口側断端陽性のため非根治切除となった。1例は術中に観転移を認め試験開腹に終わった。周術期合併症に重篤なものはなかった。本試験の結果は、2009年食道学会、癌治療学会、2010年ASCO GI meeting、ACOS meetingで発表された。

<研究課題7>

悪性リンパ腫に対する大量化学療法

High dose chemotherapy of malignant lymphoma

<研究者氏名> 血液・細胞療法部 森島 泰雄

共同研究者 山本 一仁、田地 浩史、小野田 浩

初発進行期かつ国際予後指標（IPI）高リスク群びまん性大細胞型B細胞リンパ腫（DLBCL）を対象として、rituximab併

用寛解導入化学療法＋自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法（LEED療法）を標準的治療として確立するため、導入化学療法であるR-biweekly CHOP療法（A群）とR-biweekly CHOP/CHASER療法（B群）のランダム化第Ⅱ相試験をおこなっている。日本臨床腫瘍グループ（JCOG）のリンパ腫研究グループ（Lymphoma Study Group:LSG）に所属する47施設の多施設臨床試験として、研究代表者、臨床試験事務局を愛知県がんセンター中央病院血液・細胞療法部とする臨床試験のプロトコルをJCOGデータセンターの支援を得て作成し、臨床試験を遂行している。

研究結果：初発進行期かつ国際予後指標（IPI）高リスク群びまん性大細胞型B細胞リンパ腫（DLBCL）を対象として、rituximab併用寛解導入化学療法＋自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法（LEED療法）を標準的治療として確立するため、導入化学療法であるR-biweekly CHOP療法（A群）とR-biweekly CHOP/CHASER療法（B群）のランダム化第Ⅱ相試験を計画した。このプロトコルの症例選択基準は（1）CD20陽性のDLBCLと診断され、（2）年齢調節国際リスク分類（IPI）でH-1群、もしくはH群と判定され、（3）臨床病期Ⅱ bulky, Ⅲ, Ⅳ期、（4）年齢が20歳以上65歳以下などである。方法は、step Iの導入化学療法として、無作為化割付後、R-biweekly CHOP療法を6コース（A群）もしくはR-biweekly CHOP/CHASERを各3コースの計6コース（B群）を実施し、PR、CR症例に対しStepⅡとして自家末梢血幹細胞移植併用の大量化学療法（LEED療法）を実施する。主要評価項目は、登録時からの2年無増悪生存割合とする。副次的評価項目は、（1）step I終了後の完全奏効割合（CR）、（2）stepⅡ終了後の（CR＋CRu）、（3）登録時からの2年全生存割合、（4）5年無増悪生存割合、（5）5年全生存割合、（6）治療の安全性とする。必要症例数は、Simonの選択デザインに基づき、有効性が低い方の治療群での2年無増悪生存割合が65%で、高い方の治療法がこれを10%以上上回っていた場合に、良い方の治療群を正しく選択する確率を80%以上とすると各群それぞれ30例、計60例が必要となる。以上より、病理中央診断などによる不適合例を計10%弱と見込んで目標症例数は両群合わせて70例とした。平成20年前半に参加予定施設から最終の意見聴取を行い、本プロトコルの最終了解が得られ、CRF作成など臨床試験実施に向けて、計画書の詳細な詰めやデータセンターとの打ち合わせ、CRF作成など臨床試験実施に向けて最終プロトコルを完成させた。目標症例数は70例としており、この症例数を集積するために、これまでにJCOG-LSGでおこなった臨床研究から3年（平成24年度登録終了）が必要であると見込まれる。

IPIで高リスク群DLBCL及びMCLの予後は不良で、治療強度を強めた導入化学療法と自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法（APBSCT-HDC）により治癒率の向上が示唆されている。この試験をおこなうことにより、将来標準療法となりうる効果的で安全な導入療法を選択できると考えられる。

<研究課題8>

がん患者におけるうつアセスメント用紙活用の確立

<研究者氏名> 病院長 篠田雅幸

I 研究目的

がん患者には診断された時点から終末期に至るまで、肉体的、精神的、社会的困難がつきまとい、それにより「うつ状態」が生じる場合がある。今回、がん患者が陥りやすい「うつ状態」を把握する手段として「うつアセスメント用紙」を用いることにより、うつ状態の早期診断が可能か検討した。

II 研究方法

平成22年4月～平成23年3月の間に、精神腫瘍科医に相談のあった患者を対象とした。患者の背景、緩和ケアチームに相談するまでの経過におけるアセスメント用紙の活用状況について調査した。

III 研究結果

- 1) 精神腫瘍科医への相談は207件であった。
- 2) 精神腫瘍科への相談内容としてせん妄、うつ状態が多かった。
- 3) うつ状態の患者背景としては化学療法を繰り返しおこなっている患者が多かった。
- 4) 相談にいたるまでにアセスメント用紙を利用していた医療者は数名であった。

IV 考察

がん患者は、その治療・療養過程において長期にわたり様々なストレスに曝されることになる。その結果、睡眠障害、気分の落ち込み、食欲低下、活動低下などのうつ状態を呈する場合がある。愛知県がんセンター中央病院でも精神腫瘍科への相談件数が年々増加しているが、具体的な疾患としては「せん妄」が最も多く、次いで「うつ状態」の順となっている。うつ状態になると、感情の表出や苦しいの訴えが少なくなり、患者の反応が正常範囲内であるのか、うつ状態なのか判断が難しくなる。特に化学療法を受けている患者では、うつ状態の睡眠障害、食欲低下、倦怠感などが化学療法の副作用と重なるため、早期に診断し対処することがより困難になるが、うつアセスメント用紙を用いて評価を受けた患者では、化学療法の副作用との識別が可能であった。さらに、うつ状態を疑った患者での利用は、精神腫瘍科にコンサルトする行動につながっていた。アセスメント用紙の記入は「手間がかかる」「カルテと重複する」などの理由で件数は少なかったが、アセスメント用紙の存在自体は、うつ状態を評価する項目の周知に有用と思われた。

V まとめ

うつアセスメント用紙活用の推進は、がん患者がうつ状態に陥りやすいという認識を広め、早期対応を可能にすると考えられた。

<研究課題9>

トモセラピーを用いた強度変調放射線治療の臨床応用
Clinical application of intensity modulated radiotherapy
using Helical Tomotherapy

<研究者氏名> 放射線治療部 古平 毅

共同研究者 古谷 和久、立花 弘之、富田 夏夫

はじめに

当院では2006/6にトモセラピー（TomoTherapy社 TomoTherapy Hi-Art System）が設置されて以来、臨床例のIMRTによる治療を開始してきた。今回われわれはIMRTの治療効果とその有用性の指標である唾液腺機能を評価検討し当院での頭頸部IMRTの臨床的評価を試み、臨床的有用性・妥当性の評価を行うことを目的とした。

方法

我々は今回IMRTの臨床的評価の目的で咽頭がんおよび頭頸部リンパ腫症例に対し、治療前後での唾液腺機能評価の目的で唾液腺シンチグラフィを実施してきた。

2006/6-2010/4に頭頸部癌に対しヘリカルトモセラピーを用いた220例の頭頸部癌へのIMRT治療の経験を得た。上咽頭および中咽頭はIMRTによる耳下腺の線量低減のメリットが大きいと考えられ、積極的にIMRTの適応を勧めてきた。誌面の関係で上咽頭癌の成績を紹介するにとどめる。対象年齢は中央値55歳(11-83)、男性37例・女性11例、臨床病期は II: III: IV(2例のIVを含む) = 11 : 20 : 19という内訳だった。化学療法は45例に併用し、3例は放射線単独治療が行われた。WHOの病理組織分類のtype IIは12例(25%) type II-IIIは35例(73%)、のこり1例は組織型判別不能であった。予後調査の解析時点で観察期間中央値は28.6ヵ月(9.4-46.5ヵ月)、無病生存は35例、担癌生存は5例、原病死が8例の内訳だった。2年粗生存率は86.3%、無増悪生存率は73.4%という結果であった。また唾液腺機能評価の目的で唾液腺機能評価の目的で、治療前・治療後3ヵ月・治療後1年に唾液腺シンチグラフィの評価を施行した。41症例・82耳下腺を対象に、経過中少なくとも2回以上の唾液腺シンチグラフィを施行できた症例を対象とした。治療前の評価が行えた症例は約半数程度だが、治療後3ヵ月のMER値に比較し、治療後1年のMER値は有意に上昇していた(p<0.0001)。治療後3ヵ月時点の分布に比し、治療後1年のG2の割合は有意に減少しており(p<0.05)、1年時点の口渇症状がないG0の割合も全体の約4分の1を占めていた。

まとめ

当院におけるトモセラピーを用いた頭頸部癌のIMRTにおいて治療効果および治療後QOL改善の点で、その高い臨床的有用性が示された。

2. 研究所における研究（人当研究費）

所長室

研究課題

（主題） 日本と東アジアにおける民族疫学的研究

（副題） 胆道がんの予防対策策定のための民族疫学研究

<研究者氏名>

田中英夫¹⁾、松尾恵太郎¹⁾、中尾心人¹⁾、渡邊美貴¹⁾、
Puangrat Y²⁾、Chawalit P²⁾、Paiboon S²⁾、Sopit W²⁾
田島和雄

<目的・概要・進捗状況>

タイ国東北部では胆道がんの発生頻度が世界で最も高く、保健医療上重要な問題となっている。これまでの疫学研究により肝吸虫感染・炎症との密接な関連が示され、吸虫感染者の胆道がんの予防、早期診断法の確立が急務、かつ可能な新局面に入った。われわれは、日本では肝吸虫と無関係な胆道がんの頻度が高いことから、日本とタイの両国における胆道がんの疫学的、臨床的、分子遺伝学的比較、特にがん関連遺伝子やゲノムコピー数多型や血清タンパク質の網羅的解析などの新手法を用いて胆道がんの特性を明らかにし、予防法の確立、診断マーカーの同定を目指す研究を今年度から展開していく。

本研究は、東京大学医科学研究所村上教授を研究代表者とする国内外の研究チームで構成されており、特に、田島は20年以上、タイ側と共同研究を展開しておりコーンケン大学の研究者とも深い信頼関係を築いてきた。また、本研究は胆道がん制御の新局面を拓く若い世代の共同研究基盤を構築も目指しており、寄生虫感染と慢性炎症による発がんという重要な課題の解決を通し、日本とタイ国との若手研究者の交流の一助として貢献できるものと期待している。

<今後の方針>

今後三年計画で、肝吸虫感染者の胆道がん発生に至る疫学因子の解明、胆道がんの診断マーカー候補分子を用いて、胆道癌克服へ向けた次世代の研究を進展させる。具体的には、疫学因子の修飾による胆道癌発生の抑制、診断マーカーの実用化とその評価、それを用いた胆道がん対策の改善を目指す研究を国際協力により展開していく。また、本研究を介して若手研究者を含む両国の研究者間の信頼関係を築き、研究協力体制に基づくタイ側から日本側への研究者受け入れ体制の推進し、将来的には、両国政府によるがん研究協力、交流の制度化を目指す。

¹⁾ 疫学・予防部、²⁾ コーンケン大学

疫学・予防部

<研究課題> 1

（主題） がん統計情報の構築に必要な地域がん登録の精度向上を目指した記述疫学研究

（副題） 地域がん登録情報を用いた骨髄異形成症候群の罹患動向の検討

<研究者氏名>

伊藤秀美、松尾恵太郎、田中英夫

<目的・概要・進捗状況>

造血器腫瘍に関する疫学的な記述は、白血病、悪性リンパ腫、骨髄腫の3分類のみでこれまで報告されており、骨髄異形成症候群(Myelodysplastic syndrome: MDS)に関する情報は殆ど公開されていなかった。これは、骨髄異形成症候群診療体制を含めた将来計画を立てる上で問題であった。一般的にMDSは高齢者に多いとの認識をされているが、その点を含めて、全国の地域がん登録情報を用いた推計を行い、MDSの疫学的な現状を他の造血器腫瘍と平行して検討することにより把握することが本研究の目的である。研究対象データは、国立がん研究センターがん対策情報センターの整備する全国がん罹患モニタリング集計データ(MCIJ)の部位別詳細解析用データである。本データを元に、骨髄腫、悪性リンパ腫を除く造血器腫瘍の罹患傾向を分析した。MCIJデータ中の各道府県別のデータにて、DCN(Death Certificate Notified)の症例が50%を越えず、DCNが0%ではない、という条件を満たす道府県のデータを使用した。解析対象となったのは、岩手県、宮城県、山形県、茨城県、千葉県、神奈川県、新潟県、福井県、愛知県、滋賀県、岡山県、広島県、長崎県、沖縄県の14道府県データである。このデータを、1)対象全県(全国動向の把握)、2)九州(成人T細胞性白血病の影響の強い都道府県)、3)長崎県のみ(病理組織登録を実施している県)の3パターンに分けて、急性骨髄性白血病、急性リンパ性白血病、慢性骨髄性白血病、慢性リンパ性白血病、成人T細胞性白血病、その他の白血病、MDSに対して罹患率の推計を行った。MDSの年齢調整罹患率(人口100万対)は、男性で6.87、女性で3.35であった。これは慢性骨髄性白血病とほぼ同等の罹患率である。また、MDSは全国的に増加傾向を示していた一方、検討対象としたその他の造血器腫瘍では、大きな変動が認められなかった。ただし、この増加は、がん登録制度の変更に伴う見かけ上の増加である可能性が否定出来ないため、今後更なるフォローアップが必要であると考えられる。また、MDSは、50歳以上で好発していることが罹患率のデータで確認された。

<今後の方向>

高齢化の進む本邦において、MDSの罹患数の増加は確実であり、医療体制の充実の必要性が示唆された。ただし、地域がん登録の制度変更に伴う見かけ上の変動であることは完全には否定出来ず、今後死亡動向を含めた形での詳細な検討を継続する方針である。

<研究課題> 2-1

（主題） がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用

を解明するための病院疫学研究

(副題) 歯磨回数を指標とした口腔衛生状況と頭頸部・食道がんリスクとの関連

<研究者氏名>

松尾恵太郎、佐藤文仁¹⁾、伊藤秀美、細野覚代、渡邊美貴、波戸岡俊三²⁾、谷田部恭³⁾、長谷川泰久⁴⁾、篠田雅幸⁵⁾、田島和雄⁶⁾、田中英夫

<目的・概要・進捗状況>

これまで数多くの疫学研究において、口腔衛生状況とがんリスクとの関連が検討されてきた。その中で最も一貫した関連が示されてきたのが頭頸部・食道がんである。我々のこれまでの検討より、残存歯数が多いほど頭頸部・食道がんリスクが低いことを報告している。本研究では、直接的な行動変容をもたらさう口腔衛生指標として歯磨回数を選択し、その関連を評価した。

本研究は、当院で実施されている大規模病院疫学研究のデータベースに基づき実施された。856名の頭頸部・食道がん患者に対し、性、年齢を適合させた2,696名の非がん患者を選択し、症例対照研究を実施した。歯磨回数は、1日あたり1回を基準に、磨かない、2回以上の3群に分類して検討した。関連は、既存のリスク要因である、喫煙、飲酒、職業、残存歯数、野菜・果物摂取などの影響を統計学的に調整したオッズ比により検討した。

1日1回磨く群を基準とした場合の2回以上磨く群の調整オッズ比は、0.82 (95%信頼区間: 0.68-0.99)であった。一方、磨かない群では1.79 (0.79-4.05)であった。歯磨回数の増加と頭頸部・食道がんリスクとの関連は、傾向性検定においても統計学的に有意なものであった。全体におけるこれらの関連は部位別の検討においてもほぼ同様の関連を示した。歯磨回数を増やすことにより、これらのがんの予防が可能であることを示す結果である。

本研究の結果の背景のメカニズムに関して、現時点で確定された知見はないが、いくつかの可能性が考えられる。口腔衛生状況が悪いことは、口腔内常在菌に起因する慢性的な炎症の原因となり、それががんの原因となっている可能性がある。また、口腔内常在菌により産生されるアセトアルデヒドなどの発がん物質に対する慢性的な曝露も候補として考えられる。あるいは歯磨自体ではなく、歯磨に伴ううがい、喫煙、飲酒等への曝露を和らげている、という可能性も考えられる。

<今後の方向>

背景にあるメカニズムを明らかにするための研究を継続する必要がある。また、日常的な歯磨が頭頸部・食道がんのリスクを示すという知見に関して、がん予防に対する新たな方法の一つとして周知を行うことが必要である。

¹⁾ 名大医、²⁾ 中央病院呼吸器外科、³⁾ 中央病院遺伝子病理診断部、⁴⁾ 中央病院頭頸部外科、⁵⁾ 中央病院院長、⁶⁾ 研究所所長

<研究課題> 2-2

(主題) がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用を解明するための病因疫学研究

(副題) 日本人におけるヒト白血球抗原A [Human-Leukocyte-Antigen-A (HLA-A)]遺伝子多型と子宮頸癌リスクとの関連

<研究者氏名>

細野覚代、川瀬孝和、松尾恵太郎、鈴木勇史、伊藤秀美、梶山広明¹⁾、広瀬かおる²⁾、中西透³⁾、浜島信之⁴⁾、吉川史隆¹⁾、田島和雄⁵⁾、田中英夫

<目的・概要・進捗状況>

近年、子宮頸癌とヒトパピローマウイルスhuman papilloma virus (HPV)感染との強い関連が明らかにされている。しかし、ほとんどのHPV感染は一過性感染のみで浸潤癌へ進展していく例は決して多くはない。HPVの排除や子宮頸癌への進展には宿主の免疫系が重要な役割を果たしており、HLA遺伝子多型と子宮頸癌リスクを検討した基礎研究・疫学研究も近年報告されてきている。今回、我々は日本人女性におけるHLA-A遺伝子多型と子宮頸癌リスクとの関連を検討した。

愛知県がんセンターを受診した、子宮頸癌119例と非がん女性119名を研究対象とした。全員の血液検体を用いてHLA-A遺伝子多型を決定した。ロジスティック回帰分析を用いて喫煙等交絡因子調整オッズ比 (OR)と95%信頼区間 (95%CI)を調べ、HLA-A遺伝子多型と子宮頸癌リスクとの関連の強さを検討した。

HLA-A*0206のアレル頻度は症例において有意に低かった。HLA-A*0206のアレルを持つヒトのオッズ比は、0.31 (95%信頼区間 0.15-0.65)であった。喫煙状況による層別化解析では、HLA-A*0206は喫煙とは独立した危険因子であることも示された。

<今後の方向>

子宮頸癌の予防に関するエビデンスを集積するため、今後もさまざまな生活習慣や遺伝的要因に関する研究を実施していく。

¹⁾ 名大産婦人科学、²⁾ 愛知県衛生研究所、³⁾ 中央病院婦人科、⁴⁾ 名大予防医学、⁵⁾ 研究所所長

<研究課題> 2-3

(主題) がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用を解明するための病院疫学研究

(副題) 日本人集団におけるABO血液型と膵臓がん発症リスクの検討

<研究者氏名>

中尾心人¹⁾、松尾恵太郎、細野覚代、尾形早映子²⁾、伊藤秀美、渡邊美貴、水野伸匡³⁾、飯田真介⁴⁾、佐藤滋樹⁴⁾、矢田部恭⁵⁾、山雄健次³⁾、上田龍三⁴⁾、田島和雄⁶⁾、田中英夫

<目的・概要・進捗状況>

ABO血液型と膵臓がん発症リスクの関連性について、これまでいくつかの報告があるが、日本人においてはまだ十分に検討されていなかった。今回の研究では、日本人集団におけるABO遺伝子型の膵臓がん発症に与える影響について検討した。

愛知県がんセンターの病院疫学研究システム (HERPACC)に参加した、185人の膵臓がん患者と1465人の非がん患者を用いて、症例対照研究を行った。ABO遺伝子型は、血液検体を用いて3ヶ所の遺伝子多型をTaqMan法で調べることで決定した。O alleleの判定にはrs8176719、B alleleの判定にはrs8176746とrs8176747の多型を用いた。ABO遺伝子型が膵臓がん発症に与える影響については、年齢、性別、喫煙歴、飲酒歴、来院時のBMI、20歳時のBMI、膵臓がんの家族歴、糖尿病を調整した多変量解析で評価した。また、ABO遺伝子と環境因子の交互作用についても評価を行った。

遺伝子型がOOの被験者と比較して、遺伝子型がAO、AA、AB、BO、BBの被験者は、オッズ比がそれぞれ1.67 (95%CI: 1.08-2.57)、1.53 (0.80-2.91)、1.67 (0.93-2.98)、1.24 (0.74-2.06)、3.28 (1.38-7.80)であった。また、調整因子との間に有意な遺伝子・環境交互作用は認めなかった。

日本人集団においても、ABO遺伝子型と膵臓がん発症に有意な相関を認めた。A遺伝子やB遺伝子を持つ群では、遺伝子型がOOの群より有意に膵臓がん発症リスクが高く、これまでの海外での報告と矛盾しない結果であった。

<今後の方向>

膵臓がん以外のがん発症リスクにもABO遺伝子が関連しているかどうか、また、ABO遺伝子が発がんリスクに影響を与えるメカニズムなどについて、今後さらなる検討を行っていく。

¹⁾ リサーチレジデント、²⁾ 警視庁科学捜査研究所、³⁾ 中央病院消化器内科、⁴⁾ 名市大腫瘍・免疫内科学、⁵⁾ 中央病院遺伝子病理診断部、⁶⁾ 研究所所長

<研究課題> 2-4

- (主題) がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用を解明するための病院疫学研究
(副題) 頭頸部扁平上皮癌における葉酸摂取量の予後への影響

<研究者氏名>

川北大介¹⁾、松尾恵太郎、伊藤秀美、細野覚代、尾瀬功²⁾、渡邊美貴、谷田部恭³⁾、花井信広³⁾、長谷川泰久⁴⁾、田島和雄⁵⁾、田中英夫

<目的・概要・進捗状況>

葉酸はDNA合成、メチル化に関わっており、摂取量低下が頭頸部がんの発症リスクとなることが知られている。また、葉酸代謝酵素であるMethylenetetrahydrofolate reductase (MTHFR) やThymidylate synthase (TYMS) の遺伝子多型と頭

頸部がん罹患との関係を示唆した報告も散見される。しかし、これらの予後への影響はまだ知られていない。今回我々は、葉酸摂取と葉酸代謝酵素遺伝子多型の予後への影響を検討する、後ろ向きコホート研究を実施した。

愛知県がんセンターにて行っているHospital-based Epidemiologic Research Program at Aichi Cancer Center (HERPACC) データベースより抽出した頭頸部がん患者437人を対象とした。そのうち、採血に同意の得られた277人に対して、遺伝子多型をTaqman法を用いて調べた。葉酸摂取量に関しては、定量的食物摂取頻度調査票より推定した。生存解析には、Kaplan-Meier法ならびに比例ハザードモデルを用いた。ハザード比は既知の予後要因を調整した。

葉酸摂取量の多い患者 (320 μ g/day以上) は少ない患者 (320 μ g/day以下) と比較して、有意に良好な生存を示した (5年全生存率: 79.1% vs 68.2%, p=0.020、ハザード比=0.56; 95%信頼区間: 0.37-0.84, p=0.006)。また、多変量解析では、葉酸摂取量が多いこと、MTHFR677TT polymorphism、TYMS-3'untranslated region 6-bp insertionが、良好な予後と関連を示した。葉酸摂取と遺伝子多型の間に交互作用は認めなかった。

今回の研究において、葉酸摂取量、MTHFR polymorphism、TYMS polymorphismは、頭頸部がん患者の独立した予後因子であることが示唆された。

<今後の方向>

今後も疫学データを臨床データの融合による、介入可能な頭頸部癌新規予後要因の探索研究を実施していく。

¹⁾ リサーチレジデント、²⁾ がん研究振興財団リサーチレジデント、³⁾ 中央病院遺伝子病理診断部、⁴⁾ 中央病院頭頸部外科部、⁵⁾ 研究所所長

<研究課題> 2-5

- (主題) がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用を解明するための病院疫学研究
(副題) 飲酒後の顔面紅潮とALDH2遺伝子多型が飲酒と頭頸部がん・食道がんリスクの関連に及ぼす影響の比較

<研究者氏名>

尾瀬功¹⁾、松尾恵太郎、細野覚代、伊藤秀美、川瀬孝和、渡邊美貴、鈴木勇史、波戸岡俊三²⁾、谷田部恭³⁾、長谷川泰久⁴⁾、篠田雅幸⁵⁾、田島和雄⁶⁾、田中英夫

<目的・概要・進捗状況>

飲酒は頭頸部がん・食道がんの危険因子である。日本人はALDH2(アセトアルデヒド脱水素酵素)遺伝子多型をもつため、ALDH2酵素活性の違いによって飲酒と頭頸部がん・食道がんの関連が異なることが知られている。飲酒後の顔面紅潮もALDH2遺伝子多型と関連するが、顔面紅潮が直接的に頭頸部がん・食道がんリスクの指標になりうるかどうか定かではない。そこで我々はALDH2遺伝子多型と顔面紅潮のどちらが頭

頸部がん・食道がんリスクの予測に有用か比較を行った。

愛知県がんセンター中央病院で実施されている大規模疫学研究プログラムに参加した585名の頭頸部がん・食道がん患者と、性・年齢を適合させた1,170名の非がん対象者に対して、症例対照研究を実施した。ALDH2遺伝子多型(rs671)はTaqMan法を用いて測定した。顔面紅潮および交絡要因となる生活習慣は、質問票調査によって収集した。

ALDH2遺伝子多型は頭頸部がん・食道がんと有意な関連を示し、飲酒との有意な交互作用も認められた一方、顔面紅潮は頭頸部がん・食道がんと有意な関連は見られず、飲酒との交互作用も見られなかった。顔面紅潮とALDH2遺伝子多型の不一致は、ALDH2 Glu/Gluの対照者の18%およびALDH2 Glu/Lysの対照者の16%に見られた。

頭頸部がん・食道がんリスクを予測するにあたり、顔面紅潮を用いることは、ALDH2遺伝子多型を用いるのに比べ、有用性は低いことが示された。

<今後の方向>

頭頸部がん・食道がん高危険群の同定に有用な指標の探索を継続する必要がある。

¹⁾ がん振興財団リサーチレジデント、²⁾ 中央病院胸部外科、³⁾ 中央病院遺伝子病理診断部、⁴⁾ 中央病院頭頸部外科、⁵⁾ 中央病院委員長、⁶⁾ 研究所所長

<研究課題> 3

(主題) 禁煙治療効果に影響する諸要因 – 大規模医療機関による多施設共同研究 –

<研究者氏名>

田中英夫、伊藤秀美、尾瀬功¹⁾、川北大介²⁾、坂英雄³⁾、野崎裕宏⁴⁾、鈴木幸男⁵⁾、橘和延⁶⁾、末久弘⁷⁾、谷口千枝³⁾

<目的・概要・進捗状況>

主として大規模な医療機関で行われる禁煙治療において、より個別化された介入方法を作り出すための知見を得ることを目的に、多施設で標準化された禁煙治療を実施し、患者属性や使用薬剤、行動科学的指標の変化などの要因から、禁煙成功に関連する要因を分析した。

禁煙治療6ヵ月後の禁煙成功率（この場合の成功率は、初回来院した患者全員を分母とし、6ヵ月後の禁煙成功者を分子とする。途中来院を中止した患者や追跡調査の未返信者は全員失敗とみなす）は、全体で28.3%であった。行動科学的な指標である、動機、自信の強さは、禁煙成功者と失敗者で大きな相違がみられた。禁煙治療中継続して禁煙できた者は初回から禁煙の動機が高く（83%）、禁煙に失敗し続けた人は、初回から動機の低い状態が続いた（57~73%）。また、治療中継続して禁煙できた者は、初回から2回目にかけて自信の強さが大きく高まり（59→82%）、その後も徐々に増加を続けた（82→94%）。これに対し禁煙に失敗した人の自信は初回から低く（39%）、その後も明らかな増加がみられなかった。次に、基礎疾患、性別、FTND、CES-D、動機（%）、自信

（%）、処方薬を説明変数とした多重ロジスティック回帰分析を行った。女性は男性に比べて有意に禁煙しにくく（ $p=0.04$ ）、初回の動機が高い者はそうでない者に比べ禁煙成功しやす傾向がみられた（ $p=0.07$ ）。また、最終回の診療時点での自信が90%以上の者は、89%以下の者に比べて性別や薬の種類に関わらず有意に禁煙成功率が高かった（OR:6.12、 $p=0.00$ 、95%CI:2.89-12.9）。

禁煙継続と行動科学的な指標に関連性が見られた。これらの指標を維持的に測定し、初回の動機を強化すること、最終回の自信を強化することは、患者の禁煙成功および継続につながることを示唆された。また、多変量解析によると、禁煙しにくい属性として女性が挙げられた。女性特有の禁煙の障壁（より大きなダイエットへの関心、生理周期による気分の変調、メンソールタバコの使用率の高さ）などを考慮した支援が必要と考えられた。

<今後の方向>

継続して禁煙成功率の把握を行い、長期的な禁煙成功に関わる要因の分析を実施する予定である。

¹⁾ がん振興財団リサーチレジデント、²⁾ リサーチレジデント、³⁾ 国立病院機構名古屋医療センター、⁴⁾ 社会保険中京病院、⁵⁾ 北里研究所病院、⁶⁾ 近畿中央胸部疾患センター、⁷⁾ 四国がんセンター

腫瘍病理学部

<研究課題> 1

(主題) 制がん医療の基盤材料となる機能性ペプチドの開発
(副題) がん細胞高透過性膜透過ペプチドの分離と制がんに向けたユージェネリティの開発

<研究者氏名>

近藤英作、齋藤憲¹⁾

<目的・概要・進捗状況>

ペプチドは生分解性を持ち“からだにやさしい”バイオツールである。近年この点に注目して、ペプチドは高血圧や高血糖・高脂血症改善の健康食品、抗菌ペプチド、がんワクチン療法への応用など国民の健康生活の様々な分野に登場し始めている。一方、先進医療の領域では肺がんにおけるgefitinib（イレッサ）、白血病・肉腫におけるimatinib（グリベック）などの分子標的薬が活躍しているが、製薬企業による巨額の資本投資の必要性や100万分の1といわれるスクリーニング効率と労力、さらには耐性変異腫瘍の出現など幾つかの大きな解決課題が立ちだかっている。またこの様な先進医療によっても一部のがんは現行の医療技術を以てなお治療困難である。われわれはこれらの現状を鑑み、我が国の制がん医療における先進医療の新しいレパートリーを創出する創薬展開としてランダムペプチドライブラリーをソースとして、がん細胞膜透過能を發揮す

る新規ペプチドを開発し、これを基盤材料とした細胞内分子輸送システムや分子標的治療システム、疾患診断用イメージングシステムの構築を目指す。

現在までペプチドライブラリーを用いた各種がん細胞透過アッセイの実施により、発生由来の異なる約10種類のヒト悪性腫瘍細胞に対して選択的勾配を示して高透過能を発揮する新規配列をコードする細胞膜透過ペプチドを得た（特許申請）。さらにこれらの中の代表的ペプチド2種類を用いて、癌抑制遺伝子 p16INK4a の機能を代償する配列を融合した抗腫瘍ペプチドをデザインし、白血病や大腸癌細胞を対象とした具体的な腫瘍増殖抑制システムを検討中である。

<今後の方向>

われわれの分離・同定した新規膜透過ペプチドは、現在タンパク分子デリバリーに世界的に最も汎用されている膜透過ペプチドTAT(HIV-1由来)に優る透過性能を示すことが判明したので、今後はこれらペプチドを用いた具体的ながん医療への応用技術の開発研究を進めたいと考えている。

¹⁾ リサーチレジデント

<研究課題> 2

- (主題) 難治性がんに対する抗腫瘍ペプチドを応用した新規治療学的アプローチ
- (副題) 分子標的薬耐性難治性肺がんに対する新規がんペプチド療法の研究

<研究者氏名>

斎藤憲¹⁾、中西速夫、斉藤典子、近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

肺がんにおける先進医療の領域では gefitinib (イレッサ)、erlotinib (タルセバ) などの分子標的薬がベッドサイドに登場し活躍しているが、近年、感染症における菌交代現象に似て、このような分子標的薬による耐性クローン腫瘍の出現が新たに克服を要する大きな課題として浮上している。同問題への対処として製薬系企業ではすでに耐性変異型遺伝子産物に対する結合親和性を向上させた既薬剤のバリエーションの開発が急ピッチで進められているが、治療学的にたちごっここの感否めない。このような現状に鑑みて、われわれは疾患の克服に貢献する新たな経路・新たなツールを用いた治療アプローチの研究を大変重要と考え、肺がん細胞透過能をもつ抗腫瘍ペプチドによる増殖抑制システムの検討を行っている。数種類のがん細胞増殖抑制あるいはアポトーシス誘導能をもつ機能性ペプチドを EGFR 感受性変異および耐性変異細胞株にチャレンジした結果、Cell cycle inhibitor としての機能を発揮する膜透過性抗腫瘍ペプチドがいずれの細胞系にも最も有効な増殖抑制効果を発揮した。この結果に基づいて、現在標的肺がん細胞側の反応分子機構や細胞学的特徴およびユーティリティに関する詳細な検討を進めている。

<今後の方向>

各種の高悪性度肺がん細胞において、どのようなデザインの抗腫瘍ペプチドが最も有効であるかの検討、また in vivo tumor model マウスにおける実効性の検討、さらに機能増強を企図したペプチドの修飾改良などを行っていく予定である。

¹⁾ リサーチレジデント

<研究課題> 3

- (主題) 固形癌細胞膜表面レセプター CXADR(CAR) を介する増殖制御機構の解析
- (副題) がん細胞膜上に恒常的に発現するウイルスレセプターのがん増殖制御における役割の解析

<研究者氏名>

小屋恵理子、斎藤憲¹⁾、中西速夫、近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

遺伝子治療に応用されているアデノウイルスなど組み換えウイルスの治療適用や効果は、標的とする腫瘍細胞側の感受性に大きく左右される。感受性の重要な指標となるのは、これらウイルスに対する細胞膜表面ウイルスレセプターの発現であり、非発現細胞は基本的に組み換えウイルスに対する有意な感染性(感受性)を持たないためウイルス遺伝子治療の適用外と考えられる。一方、多種類のヒトがん細胞で、増殖時ウイルス非存在下に恒常的なウイルスレセプター遺伝子の有意な発現が維持されている現象が認められる。われわれは、このような現象に対してウイルスレセプター分子の中から CXADR (Coxs Adenovirus receptor; CAR) を選び、その恒常的な発現ががん細胞の生物学的動態に及ぼす役割を担っているのかを検討している。まず、発現の特徴を洗い出すために、約30種類のヒト悪性腫瘍細胞株について qPCR 法を用いて CAR の発現を解析したところ、固形癌で高発現、血球系腫瘍では発現が極めて低いことが判明した。さらに CAR を標的とする siRNA 導入による機能的ノックダウンを行ったところ、有意な CAR 発現を維持し増殖を示していた数種類のがん細胞群で、増殖能の顕著な低下やアポトーシスが認められた。現在、この増殖抑制の分子機構を詳細に検討中である。

<今後の方向>

in vitro アッセイでの結果の再現性を確認したのち、次段階として CAR が固形癌の増殖進展に必要な分子であることを in vivo 担癌モデルマウスで検証していきたい。

¹⁾ リサーチレジデント

<研究課題> 4

- (主題) ヒトおよび動物癌転移の分子病理学的研究
- (副題) 胃癌・大腸癌の微小転移に対する新しい診断法および治療法の開発

<研究者氏名>

中西速夫、村上弘城¹⁾、伊藤誠二²⁾、金光幸秀²⁾、近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

胃癌の術後再発の半数以上は腹膜再発である。この腹膜再発は腹腔内の遊離癌細胞あるいは目に見えない微小転移によるものと考えられることから、微小転移に対する高感度な診断法と効果的な治療法の組み合わせにより再発の予防と生存率の大幅な改善が期待できる。我々はこれまでに微小転移の検出法として定量RT-PCR法を用いた遺伝子診断法を確立し、高度先進医療、固形腫瘍遺伝子診断法（保険適応）として前向き研究を行ってきた。一方、GFP遺伝子導入ヒト胃癌の腹膜微小転移モデルを用いて、微小転移は進行した転移に比較して各種抗癌剤（殊にパクリタキセルの腹腔内投与）に対する化学療法感受性が高いことを明らかにしてきた。以上の知見から遺伝子診断により微小転移の発見と術後の腹腔内化学療法による腹膜再発予防戦略を提唱してきた。微小転移に対する新しい診断・治療法のさらなる改善をはかるため、これまでに、CEAを補完できる新しいマーカー遺伝子を見出すために25Kチップを用いた網羅的探索を行い、新規診断遺伝子マーカーを4個同定し、個々の遺伝子の予後予測マーカーとしての有用性を評価した。さらに60個の遺伝子セットからなる診断用オリゴマイクロアレーを企業との共同研究により作成、再発予測アルゴリズムを構築し、それを用いた前向き研究を開始している。また高感度な診断法と並んで薬剤（パクリタキセル）感受性予測にもとづく要治療患者の選別は個別化医療をすすめるためにも臨床的に重要である。そこで3種類の胃癌細胞株（親株）からin vivo selectionによりパクリタキセル耐性株を作成し、網羅的解析により薬剤抵抗性候補遺伝子の探索を行っている。これまでに30Kチップによる発現解析から1次選別しqRT-PCRで確認した10個程度の抵抗性候補遺伝子につき、感受性の評価が可能であった臨床検体（Responder、Non-responder）を用いてvalidationを行い、少なくとも3個の遺伝子がパクリタキセル抵抗性に関連している可能性を明らかにした。

一方、新規治療法に関しては1)近年、保険適応になった経口抗がん剤（S-1）に比べ、パクリタキセル（PTX）の腹腔内投与が腹膜播種抑制により効果的であることをGFP導入微小腹膜転移モデルを用いた動物実験により明らかにしてきた。しかし、上記した様にPTXに抵抗性を示す胃癌細胞が存在し、これに対しBevacizumab（抗VEGF抗体）に有為な抗腫瘍効果と生存延長効果があり（特に微小転移に対して）これが血管新生阻害効果によることを明らかにした。2)EGFRは胃癌では原発巣に対して腹膜転移巣では約80%と高率に発現していることを免疫染色により見いだした。そこでCetuximabの腹腔内投与の腹膜転移抑制効果を検討したところ、比較的EGFRの発現の低い胃癌細胞に対しても殆ど副作用なく、有為な腹膜転移抑制効果を示した。この抗腫瘍効果はNK細胞を活性化するIL-2の前処理で増強されること、ADCC活性がEGFRの発現とほぼ相関することからシグナル伝達阻害よりもADCCによる可能性が示唆された。

<今後の方向>

現状のCEA等をマーカーとするRT-PCRに比べより高い診断

精度を有し、かつ薬剤感受性予測等の可能な多機能性診断用DNAチップの開発を進める。一方、上記した胃癌腹膜転移の分子基盤に基づいた新しい分子標的治療法に関する基礎的研究、前臨床試験をさらに進め、遺伝子診断法陽性症例に対する上述の各種治療の有用性に関する第1-2、3相臨床試験をめざして研究を進めて行く予定である。

¹⁾ 研修生、²⁾ 愛知県がんセンター中央病院・消化器外科、

<研究課題> 5

(主題) ヒトおよび動物癌転移の分子病理学的研究

(副題) 胃癌等の消化器がん転移に対する新しい分子光イメージング法に関する研究

<研究者氏名>

中西速夫、土田大輔¹⁾、小笠原麻衣¹⁾、三澤一成²⁾

伊藤友一²⁾、近藤英作

胃癌の腹膜転移を早期に発見することは従来のCT/MRIでは困難であり、CT/MRIの弱点とされてきた。この点を改善するためにはがん細胞を特異的に検出できるプローブを用いた分子イメージング法の開発が必要である。我々はそのプローブとして種々の抗体について検討し、EGFRが胃癌の腹膜転移巣では80%と高率に発現していることを免疫染色により見いだした。そこで、今年度はプローブとして臨床ですでに分子標的治療薬として大腸がんに対して使われている抗体医薬（抗EGFR抗体）であるCetuximabについて検討した。

このEGFR抗体をXenolight750ならびに現在すでに肝機能検査薬として臨床で使われ、米国FDAにより安全性も承認されているICG(indocyanine green)などの近赤外(NIR)蛍光色素で標識し、腹膜転移を有するヌードマウスの腹腔内（静脈内）に接種してIVIS Lumina システム（愛知県がんセンター）により体外発光イメージングおよび蛍光イメージングを行ったところ、数mmサイズの小さな腹膜転移を特異的に検出することができた。このことからNIR蛍光標識Cetuximabを用いた蛍光イメージングにより腹膜転移を高感度にしかも簡便、安全に早期診断できる可能性が示唆された。

しかし、腹膜転移の蛍光イメージングでは、2次元のイメージしか取得できず、正確な3次元的な位置情報が得られなかった。そこで3Dイメージングの可能なIvis Spectrumを用いて3Dイメージング像を取得し、専用の画像ソフトを使って愛知県がんセンターで取得したMRI画像と融合することに成功した。これにより2Dイメージでは得られなかった体内における正確な転移巣の部位の特定が可能になった。

<今後の方向>

NIR蛍光標識抗体を用いた体外分子イメージングはマウスモデルにおいては1-2 mmサイズの腹膜微小転移をMRIなどの従来の画像診断法に比較して高感度かつ簡便に検出できることを今回初めて明らかにした。臨床応用に向けた一番の課題は蛍光の組織透過性の問題で、実際の胃癌患者でどの程度の感度が

得られるかである。光イメージングは光源の輝度、近赤外光に対するCCDカメラの解像度等に依存することから医工連携、企業との連携によりこれらハードに対する開発も共同で進めてゆきたい。

¹⁾ 研修生、²⁾ 愛知県がんセンター中央病院・消化器外科

<研究課題> 6

(主題) ヒトおよび動物癌転移の分子病理学的研究

(副題) 頭頸部扁平上皮癌、胃癌、大腸癌等の消化器がんに対する新しい分子標的治療法に関する研究-がん幹細胞を標的とする治療法に関する基礎的検討

<研究者氏名>

中西速夫、大島由起子¹⁾、欄真一郎¹⁾、斉藤卓也¹⁾、田中晴就²⁾、伊藤誠二³⁾、金光幸秀³⁾、長谷川泰久⁴⁾、近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

根治可能ながん治療法としてがん幹細胞を標的とする分子標的治療法の研究が注目されている。EGFR、HER2などのHER family標的薬は大腸がん(CRC)、胃がん(GC)、肺がん、頭頸部扁平上皮がん(HNSCC)において一般臨床に使用され、有意な生存延長効果が示されているが、耐性の獲得は避けられず、その克服が臨床上大きな課題となっている。我々は、耐性克服のための有力なアプローチとしてがん幹細胞を標的とする分子標的治療法の開発を目指している。そのためにがん幹細胞様形質を有する種々の消化器がん細胞株を確立し、それらのがん幹細胞様細胞のHER family標的薬(Gefitinib、Lapatinib、Cetuximab、Trastuzumab)に対する感受性とその機構の検討を行っている。これまでにCRC株、GC株ならびにHNSCC株など複数のがん幹細胞様細胞を作成している。大腸癌がん細胞株COLM-5は変異や増幅はないがEGFRを高発現し、Gefitinib、Cetuximabは本株に対し強い抗腫瘍効果、転移抑制効果を示した。本細胞からsortingしたCD133(+)細胞はCD133(-)細胞に比べ、spheroid形成能やNOD/Scidマウス皮下腫瘍形成率が高く、がん幹細胞様形質を示した。両細胞のGefitinib感受性を検討したところ、Gefitinib感受性はCD133(-)細胞に比べ、CD133(+)細胞の方が有意に高かった。またHER2陽性胃がん細胞株のSP fractionはnon SP fractionに比べてLapatinib感受性が高かった。一方、頭頸部がん細胞株UMSCC81Bは低分化型SCCの組織像を呈し、角化型のUMSCC6細胞株に比べ、Vimentin+/Podoplanin+/ALDH+/Nanog+などを高発現し、またNOD/Scidマウス造腫瘍能、分化能などEMT/がん幹細胞様形質を示した。UMSCC81B細胞のGefitinib感受性を検討したところ、UMSCC81B細胞、中でもがん幹細胞様/EMT形質を有するサブセットはUMSCC6細胞に比べGefitinib抵抗性であった。

以上のことより、がん幹細胞様形質を示す大腸がん、胃がんのサブセットはGefitinib高感受性であるのに対して、頭頸部SCCではがん幹細胞様形質を示す細胞は逆にGefitinib抵抗性であることが明らかになり、同じEGFR標的薬が適応となるがん

でも、腫瘍によりがん幹細胞増殖シグナル経路が異なる可能性が示唆された。Gefitinib高感受性のがん幹細胞様細胞では治療に匹敵する顕著な抗腫瘍効果がみられ、耐性克服のための治療戦略としてがん幹細胞を標的とする治療法の可能性が示唆された。

<今後の方向>

がん幹細胞様形質を示す大腸がん、胃がん細胞株のGefitinib感受性ならびにPodoplanin+頭頸部がん細胞株のGefitinib抵抗性のシグナル経路としてHER familyが密接に関連している可能性が示唆される。HER familyの下流シグナルや他のシグナル経路とのクロストーク等の解析を行い、この制御機構を明らかにし、がん幹細胞を標的とする新しい分子標的治療を構築したい。

¹⁾ 研修生、²⁾ 愛知県がんセンター研究所中央実験室、³⁾ 愛知県がんセンター中央病院・消化器外科、⁴⁾ 愛知県がんセンター中央病院・頭頸部外科

<研究課題> 7

(主題) 人体剖検例の病理組織学的研究

<研究者氏名>

中西速夫、斎藤典子、近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

本年度(平成22年4月~平成23年3月)は8体の病理解剖を行い、開所以来の総剖検数を2,612体とした。これらの症例は組織検査後、病理診断・解剖所見を付して担当医に報告されると同時に、日本病理学会の剖検輯報に掲載される。学問的に貴重な症例、臨床的(診断並びに治療上)に重要で検討を要する症例に関しては、担当医との意見の交換は勿論であるが、適時行われるCPC(臨床病理検討会)に提出し相互討議を深め、当がんセンターの医療水準の向上の一役を担ってきた。本年度は胸部外科の肺がん1症例についてCPCを開催した。

<今後の方向>

がんの診断技術、制がん手段(手術・照射・制がん剤・免疫療法)の進歩によって、根治例の増加は勿論、非根治例でも長期間寛解をもたらす機会が開かれつつある。悪性リンパ腫等に対する幹細胞移植を組み合わせた超大量化学療法や分子標的治療、食道がん、脳転移巣への分割照射の治療効果などがその代表で、剖検時腫瘍の顕著な縮小、瘢痕治癒を認めることが少なくない。しかし一方で感染症をはじめ出血、血栓症などの合併症が死因となる例も決して稀ではない。かかる症例を疾患の自然史的立場から系統的な病理学的検討を行い、良好な予後に導く要因を引き出すのが今後の重要な課題である。また近年増加傾向にある臨床試験(治験)が行われている症例や医療事故が疑われる症例の剖検については臨床側との密接な協力、また第3者機関へのコンサルテーション等により積極的に症例報告、情報開示を行ってゆくことが大切である。

分子腫瘍学部

¹⁾ 名大・院医・分子腫瘍、²⁾ 中央病院・遺伝子病理

<研究課題>1

- (主題) 肺がんの発症・進展機序の解明と分子標的療法の探索
(副題) 肺癌発症におけるmicroRNAの役割

<研究者氏名>

長田啓隆、西川恵理、有馬千夏¹⁾、立松義朗、谷田部恭²⁾
藤井万紀子、村上秀樹、近藤豊、柳澤聖¹⁾、関戸好孝
高橋隆¹⁾

<目的・概要・進捗状況>

多くの先進諸国において癌死亡率第一位を占める肺癌の予後改善のために革新的な新規治療法の開発が求められており、そのために肺癌の発生・進展機序に関する分子生物学的な解析が精力的になされ、ジェネティック・エピジェネティックな異常の蓄積に基づく特徴的な遺伝子発現プロファイルが、肺癌の病理組織像や臨床予後と強い関連を持つことが明らかとなってきた。我々はこのような過程で、肺癌における遺伝子発現異常だけでなく、遺伝子発現制御に関わるmicroRNA (miRNA) にも注目し検討してきており、let-7発現低下・miR-17-92クラスター発現亢進といった代表的なmiRNAの発現異常が、肺癌の発生・進展に深く関わっていることを明らかとしてきた。同時に肺癌細胞の細胞系列・分化異常の重要性にも注目し、肺神経内分泌細胞(PNEC)の発生・分化のマスターレギュレーターである転写制御因子achaete-scute homologue 1 (ASH1/ASCL1)が、高悪性度肺癌である神経内分泌肺癌の分子病態獲得にも重要な寄与をすることを以前報告した。

平成22年度はこのような研究経過から、神経内分泌肺癌の分子病態におけるmiRNA発現異常の意義を検討した。ASH1を神経内分泌分化傾向を持たない肺腺癌細胞株A549に発現させると、神経内分泌肺癌様の変化が誘導される。この時にRNAを採取してmiRNA microarrayによりmiRNA発現を網羅的に検討した。するとASH1によるmiRNA発現プロファイルの変化が観察され、その中でも特にmiR-375の非常に強い発現誘導が見られた。このmiR-375をトランスフェクション或いはウイルスベクターにより肺癌細胞株に発現させて機能解析を行ったところ、miR-375単独で神経内分泌分化を誘導し、miR-375がASH1による神経内分泌分化誘導シグナルの中で重要なメディエーターの役割を果たすことが判明した。また、miR-375導入時のRNAを採取してmicroarrayにより遺伝子発現プロファイル検討して、miR-375の標的遺伝子を探索したところ、がん関連遺伝子として注目されているYAP1がRNAレベル・蛋白レベルの両方で強い発現抑制を受けることが判明した。

<今後の方向>

この今年度の解析は、ASH1-miR-375-YAP1というシグナルが神経内分泌肺癌の発症進展に重要な寄与をしていることを示唆している。今後も肺癌の分子病態の全貌を理解する上でmiRNAの発現異常の解析が非常に重要であると考えられる。

<研究課題>2

- (主題) 中皮腫の発がん機序の解明と細胞生物学的研究
(副題) 中皮腫における細胞接着分子ALCAMの発現

<研究者氏名>

石黒太志¹⁾、村上秀樹、水野鉄也¹⁾、藤井万紀子、近藤豊、長田啓隆、関戸好孝

<目的・概要・進捗状況>

悪性中皮腫はアスベスト曝露によって引き起こされる極めて予後不良の腫瘍である。診断時には既に進行していることが多く、現在、有効な標準治療法は確立していない。他のコモンな腫瘍に比べて、その分子病態の解析は極めて遅れており新規の診断法や分子標的治療法の開発への大きな障壁となっている。

Activated leukocyte cell adhesion molecule (ALCAM: CD166とも呼ばれる)は免疫グロブリンスーパーファミリーに属する細胞間接着分子である。近年、メラノーマや乳がんなどにおける高発現や発現異常による悪性細胞の運動能への影響が報告されている。悪性中皮腫に関してはALCAMの発現上昇の報告が一部あるものの発がんや浸潤に関わる意義は不明である。本年度、ALCAMの中皮腫における生物学的意味および診断・治療への応用を目的としてその検討を行った。最初に当部で樹立した14株の中皮腫細胞株を含む20株の中皮腫細胞株から抽出したtotal RNAを用い、アレイを用いた網羅的な遺伝子発現の解析を行ったところ、ALCAMは中皮腫細胞に特異的に過剰発現している遺伝子群に存在していることを確認した。さらにmRNA発現を定量的リアルタイムPCR(qRT-PCR)法で再検討したところ、ALCAMは20細胞株すべてにおいて不死化正常中皮細胞のMeT-5A株と比較し4.5倍以上の発現レベルであることを明らかにした。また、ウェスタンブロット法によるタンパクレベルでの高発現も20細胞株すべてにおいて認められた。さらに、悪性中皮腫の外科切除症例22検体で酵素抗体法による免疫染色を施行したところ、22例中16例(73%)で陽性であった。

次に、中皮腫2細胞株 (NCI-H290、Y-MESO-27)を用いshort-hairpin RNAを用いたRNA干渉法によるALCAMのノックダウンを施行し、細胞増殖、運動能、浸潤能、足場非依存性増殖への影響を評価した。ノックダウンによる細胞増殖への影響は認めなかったものの、運動能、浸潤能、足場非依存性増殖はNCI-H290、Y-MESO-27ともに30-50%の低下を認めた。さらに、可溶性isoform (soluble ALCAM)がスプライシングバリエーションとして存在し、ALCAMの細胞間のホモフィリック結合を阻害し運動能を阻害することが以前報告されていたため、soluble ALCAMの中皮腫細胞株に対する効果を検討した。293FT細胞株にsoluble ALCAM発現ベクターをトランスダクションし、培養上清からsoluble ALCAMを精製した。Soluble ALCAMを培養液中に添加したところ、NCI-H290株の運動能、浸潤能が30%低下することを明らかにした。

<今後の方向>

本年度の結果により、1) 細胞間接着分子ALCAMは悪性中皮腫の多くの臨床症例、および中皮腫細胞株において高発現していること、2) ALCAMの発現は悪性中皮腫の浸潤や転移に関与している可能性があること、3) ALCAMの発現あるいは機能を抑制することにより、中皮腫細胞の運動能や浸潤能を抑制することができること、が強く示唆された。今後は、実験動物への中皮腫移植モデル系を用いて、in vivoでのALCAM抑制効果を検討する必要があることが考えられた。本研究結果によりALCAMは悪性中皮腫における新規の治療標的となる可能性があることが強く示唆された。

¹⁾ レジデント

<研究課題> 3

(主題) 消化器がんの発症におけるエピジェネティクス関与の解明

<研究者氏名>

岡本泰幸¹⁾、近藤 豊

<目的・概要・進捗状況>

肝細胞がんの発症は、B型肝炎ウイルス (HBV)、C型肝炎ウイルス (HCV) 感染による慢性炎症の経過中に蓄積したエピジェネティクス異常が原因の一つと考えられている。したがって、HBV、HCV感染後のエピジェネティクス異常の誘導機序および発がんとの関連を明らかにすることは、肝細胞がんの発がん予防および発がんリスクの予測の上から重要な課題である。本研究では、ヒト肝細胞置換マウスの肝炎ウイルス感染モデルを用いて、DNAメチル化異常の誘導機序の解析を試みた。ヒト肝細胞置換マウスにHBVおよびHCVを感染させた後、経時的に肝組織からDNAを抽出し、マイクロアレイを用いて、プロモーター領域のDNAメチル化異常を網羅的に解析した。さらにマウスモデルに観察されたDNAメチル化プロファイルと、実際の肝細胞がん症例のDNAメチル化異常の関連を比較検討した。ヒト肝細胞置換マウスでは、B型肝炎ウイルス感染後 (HBV感染マウス、n=13) に、経時的にDNAメチル化遺伝子数は増加し、平均164遺伝子 (2.7%) が高メチル化となった。一方、C型肝炎ウイルス感染 (HCV感染マウス、n=14) では、感染早期から高メチル化遺伝子が増加し、平均307遺伝子 (5.0%) がメチル化していた。これらの遺伝子の約50%は、ヒト肝細胞がん症例でもメチル化していた。HBV感染マウスでメチル化した遺伝子のうち、約80%はHCV感染マウスでもメチル化しており、さらにDNAメチル化異常は、ウイルスが感染しないマウス由来の肝組織でも認められた。ウイルス感染後には、マウス由来のマクロファージやNK細胞から産生されるサイトカインが上昇しており、また感染肝組織内で活性酸素の産生亢進が観察された。本解析から、HBV、HCVウイルス感染後、肝組織内の感染細胞・非感染細胞の両方で炎症を介したDNAメチル化を誘導する機序が存在すると考えた。

<今後の方向>

ウイルス感染後の炎症によるエピジェネティクス異常の誘導機序およびその制御についてさらに解明を試みる予定である。

¹⁾ 研修生

遺伝子医療研究部

<研究課題> 1-1

(主題) 造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用

(副題) Array CGHによるT細胞性リンパ腫の疾患特徴的ゲノム構造異常/標的遺伝子の探索

<研究者氏名>

中川雅夫、海野 啓¹⁾、中村栄男²⁾、塚崎邦弘³⁾、宇都宮興⁴⁾、大島孝一⁵⁾、瀬戸加大

<目的・概要・進捗状況>

我々は、造血器腫瘍におけるゲノム構造変化を全ゲノムにわたって均等に配置された2304個の人工ヒトDNAを貼り付けたスライドガラスを作成し、Comparative genomic hybridization (CGH)をする方法=Array CGH法を確立した。これを用いて約300例近くのB細胞リンパ腫をこれまでに解析し、ゲノム異常を詳細に明らかにしてきた。一方、T細胞性リンパ腫は世界的にもいまだゲノム異常解析が不十分で、特徴的なゲノム異常は全く分かっていない。その原因の一端は臨床・病理・ゲノム異常に相関する疾患分類がいまだ十分でない点にある。Peripheral T-cell lymphoma, unspecified (PTCL-U)は新WHO分類で提唱されているどのT細胞性リンパ腫病型にも分類し得ない症例を扱う疾患単位で、複数の疾患を含んでいる可能性がある。再分類に関して様々に検討されているがいまだ結論は出ていない。本研究では網羅的、かつ高精度にゲノム異常を解析できるアレイCGH法でPTCL-U 51症例のゲノム異常を検討した。その結果、ゲノム異常や病理所見・予後に関して均一な新規サブグループを見出す事に世界で初めて成功した。さらにこの新規サブグループは別のPTCLであるリンパ腫型ATLLと高度に類似したゲノム異常様式を持つこともはじめて明らかにした。一方、同じくATLLの中でも異なる臨床サブグループである急性型ATLLは、リンパ腫型ATLLとは全く異なるゲノム異常様式を持つことも明らかにした。また、急性型ATLL同一症例における末梢血・リンパ節ペア13検体のゲノム異常をオリゴアレイCGH法で詳細に比較検討し、1) リンパ節においてゲノム異常が積み重なり、クローナルエポリューションを起こし、複数のサブクローンが同時に存在する症例が高頻度に存在する (13症例中9例:69%)、2) その複数サブクローンからの一部クローンのみが末梢血白血病細胞となっていることを明らかにした。このことは急性型ATLLは白血病でありながら、実際はリンパ腫のようにリンパ節内で増殖していることを意味している。

【今後の方向】

詳細なゲノム異常解析から、これまでの病型分類とは全く異なる分子学的病型が存在する可能性を見出してきた。今後慢性型ATLLのゲノム異常を解析に加え、ATLLの分子学的分類について更に検討していく。

¹⁾ 三重大学大学院医学系研究科・血液腫瘍内科学、²⁾ 名古屋大学医学部附属病院・病理部、³⁾ 長崎大学医学部・原爆後障害医、⁴⁾ 慈愛会今村病院分院、⁵⁾ 久留米大学医学部・病理学教室

〈研究課題〉 1-2

【主題】 造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用

【副題】 IgH転座関連B細胞リンパ腫がん遺伝子Bcl2, Myc, Ccnd1の機能的協調の検討

〈研究者氏名〉

中川雅夫、都築 忍、田口 修¹⁾、瀬戸加大

【目的・概要・進捗状況】

がんは複数の遺伝子異常が積み重なった結果起こるため、これらの協調作用の検討は腫瘍形成機序の解明に必須である。ヒトB細胞リンパ腫において、BCL2、MYC、CCND1は最も頻度高く見られる遺伝子異常である。とくにIgH染色体転座の相手遺伝子として頻度が高く、B細胞リンパ腫の病態形成に深く関わっている。BCL2, MYCあるいはMYC, CCND1の2遺伝子間協調作用は、これまでマウスモデルを用いた限定的な方法でいくつか報告されているが、実際の腫瘍形成プロセスには3つ目あるいはそれ以上の遺伝子異常の付加が必要であることが示唆されている。しかし、腫瘍形成における3遺伝子機能協調の知見は乏しい。今回我々はBcl2、Myc、Ccnd1の3遺伝子が協調的に作用し、マウスprimary B細胞をin vitro/in vivo両実験系において形質転換させることを見出した。さらにこの発見に基づき、遺伝子協調作用を利用した新規がん遺伝子in vitroスクリーニング法を開発した。この新規スクリーニング法からBcl2、Mycと協調する遺伝子としてCCND3および変異NRASを初めて同定した。

【今後の方向】

今後も本研究で開発した新規がん遺伝子スクリーニング法を施行し、未知の機能協調的ヒトB細胞リンパ腫がん遺伝子を同定していく。

¹⁾ 分子病態学部

〈研究課題〉 1-3

研究課題)

【主題】 造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用

【副題】 NF-κBと協調的に機能する癌関連遺伝子のスクリーニング

〈研究者氏名〉

本間圭一郎、瀬戸加大

【目的・概要・進捗状況】

B細胞受容体やTLRを介したシグナル制御に関わる遺伝子の異常は、多くのB細胞リンパ腫で認められ、中でもNF-κBはB細胞リンパ腫の腫瘍形成・維持に重要な役割を果たしていると考えられている。我々も、B細胞受容体やTLR刺激によるNF-κB活性を制御しているA20遺伝子の異常が、B細胞リンパ腫に高頻度に見られることを過去の研究において見出した。しかしながら、A20を含め、canonical NF-κBシグナル活性化のマウスモデルには、造腫瘍性亢進は認められていない。またB細胞におけるB細胞受容体の生存シグナルは、NF-κB活性化で代替できないことも知られている。このことはNF-κB活性化単独では、B細胞の生存や腫瘍形成のdriver geneとしては弱く、他の協調する遺伝子異常を必要とすることを示唆している。また、NF-κBを標的にした治療は、期待されたような臨床成績が得られておらず、相互作用を示す別のシグナル経路の阻害も必要と考えられる。このことから、NF-κBと相互作用を示す、がん関連遺伝子の同定を試みることにした。方法として、NF-κB活性化B細胞リンパ腫細胞株の、cDNAライブラリーを作成し、これとcanonical NF-κB恒常的活性化を引き起こすIKK2CAを共発現させ、造腫瘍性にかかわる遺伝子をin vivoスクリーニングすることを計画した。当初は、造血幹細胞にcDNAライブラリーとIKK2CAを導入し、長期間生体内で維持させB細胞受容体シグナルが入るImmature B cellまで分化する際の腫瘍形成を見ることを試みたが、B細胞発現プロモーターのlineage特異性が低いため、うまくいかなかった。このためプロB細胞を採取し、cDNA libraryとIKK2CAを感染後、In vitroでB細胞受容体発現B細胞まで分化させる系を確立し、そのままでは形質細胞まで分化してしまうため、Bcl6遺伝子を共発現させ形質細胞への分化を止めた状態で移植することとした。実験系の確認として、変異型Tnfrsf13cをIKK2CA、Bcl6と共発現させ、in vitroでImmature B細胞まで分化させ、移植したところ、生存期間中央値130日ほどでB細胞受容体陽性リンパ腫によって死亡した。

【今後の方向】

スクリーニングにより、癌関連遺伝子を抽出する。その中から、治療標的分子として有望なものを選択する。

〈研究課題〉 1-4

【主題】 造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用

【副題】 遺伝子発現プロファイルおよびアレイCGHを用いた、NK細胞性腫瘍の病因遺伝子の同定

〈研究者氏名〉

加留部謙之輔、中川雅夫、瀬戸加太

【目的・概要・進捗状況】

NK細胞性腫瘍は、欧米よりもアジアに頻度が高い悪性リンパ腫であり、日本から発信する研究が重要と考えられる。しかし、その頻度の低さと検体の取りにくさから、その病態の解明は、他のリンパ腫、特にB細胞リンパ腫に比べ進んでいない。

NK細胞性腫瘍の癌化に関わる遺伝子を同定するため、アレイCGHによるゲノム解析および遺伝子発現プロファイルを用いて以下のステップで研究を行った。

1.NK細胞性腫瘍の遺伝子発現プロファイルおよびゲノム異常オリゴアレイCGHを用いて、NK細胞性腫瘍のゲノム異常の解析を行った。その結果、6q21の領域において、最も高頻度な欠失が認められた。この部位にはAIM1、PREP、PRDM1、FOXO3、ATG5、LACE1が認められた。またこの領域の近傍には最近注目されているHACE1およびA20が位置していた。これらを候補遺伝子群とし、その中でどの遺伝子の欠失がよりがん化を促進しているのかを探るために、NK細胞性腫瘍の細胞株に対してそれぞれの遺伝子を導入し、細胞の状態に変化があるかを検討した。その結果、PRDM1、FOXO3において著明な増殖抑制効果が認められた一方で、他の候補遺伝子群においては同様の効果は認められなかった。この結果からPRDM1およびFOXO3を最終候補遺伝子として、より詳細に検討することにした。両遺伝子は発現レベルでも正常NK細胞に比べ低下しており（RT-PCR）、PRDM1は40例中2例、FOXO3は40例中3例に遺伝子変異を認めた。

【今後の方向】

以上の結果から、FOXO3とPRDM1が6q欠失に伴うがん化において重要な役割を担っている可能性が示唆された。これらの遺伝子導入による変化が細胞にどのような影響を与えているかを発現解析を通して検討し、NK細胞性腫瘍の発がんメカニズムを解明したい。

〈研究課題〉 2-1

（主題） 造血器細胞の分化・増殖に関与する遺伝子の血清学的、分子生物学的研究

（副題） TEL-AML1型B細胞性白血病の発症機構解析と白血病関連遺伝子ERGの機能解析

〈研究者氏名〉

都築忍、瀬戸加太

【目的・概要・進捗状況】

TEL-AML1は染色体転座t(12;21)に伴って形成される異常融合遺伝子で、小児リンパ性白血病の原因として最も多いことが知られている。TEL-AML1の機能として、B細胞の分化を特にプロB細胞レベルで著しく阻害する作用があること、B細胞の自己複製能を亢進させることによりB細胞を増殖優位にする機能があることを見出し、更にマイクロアレイ解析によ

りTEL-AML1によってB細胞で発現の変化する遺伝子を抽出した。更にこうして抽出した遺伝子がTEL-AML1の機能発現にどのように寄与するのかをshRNAの手法で検討した。

一方、転写因子ERGは、白血病の一部のタイプで予後と密接な関係が報告されているものの、その造血系における機能は不明であった。今回、骨髄移植アッセイおよびshRNAによるノックダウン実験によって、ERGにはT細胞性白血病を引き起こす機能があり、かつ種々の白血病の維持に必須であることが判明した。

【今後の方向】

TEL-AML1によって発現が変化する遺伝子の生物学的意義についてshRNAの手法を用いて解析し、さらに各遺伝子がすでに成立した白血病においても重要な役割を果たすかどうかを解析する。また、ERGを標的とした新規治療法の開発をめざす。

腫瘍免疫学部

〈研究課題〉 1-1

（主題） 腫瘍抗原の免疫学的、分子生物学的検索

（副題） 内因性HLAの発現を抑制し目的のHLA-A24を発現する人工抗原提示細胞を用いた卵巣がんを傷害するCTLの誘導

近藤紳司¹⁾、岡村文子、廣澤友也、山本英子¹⁾
柴田清住¹⁾、吉川史隆¹⁾、葛島清隆

【目的・概要・進捗状況】

担がん患者のリンパ球を自己のがん細胞株で刺激することで得られる細胞傷害性Tリンパ球（CTL）は、CTL標的抗原の同定に必須である。しかし、リンパ球と抗原提示細胞が同一ドナーに由来しない場合、一致していないHLAに対する強いアロ反応がCTLの誘導を阻害する。我々はこのアロ反応を回避するため、任意の単一HLAのみを発現する人工抗原提示細胞（aAPC）システムの構築を試みている。今年度は、卵巣がん細胞株がもともと保有するHLAの発現を完全に抑制し、目的のHLA-A24および共刺激分子であるCD86を発現するaAPCを作製して、HLA-A24拘束性のがん細胞株を認識するCTLを誘導することを目的とした。

HLA-A24陰性の卵巣がん細胞株TOV21G（明細胞腺がん）にHLA-class I遺伝子を標的とするshort interfering RNA（siRNA）を導入し、内因性HLAの発現を完全に抑制した。siRNAの標的となる遺伝子のコドンを変換したsiRNA抵抗性のHLA-A24およびCD86を、レンチウイルスベクターを用いて導入した。この細胞をaAPCとし、HLA-A24陽性健康人のナイーブCD8+T細胞を刺激してCTL株を誘導した。特異性はIFN- γ キャッチ法にて確認した。限界希釈法にてCTLクローンを複数樹立した。ELISPOTアッセイによる検討を行ったところ、これらのクローンは、HLA-A24陽性TOV21Gを認識したが、HLA-A24陰性の親株TOV21GやHLA-A24陽性線維芽細胞は認識

しなかった。⁵¹Cr 細胞傷害性試験で他の卵巣がん細胞株への反応性を調べたところ、一部のクローンは複数の卵巣がん細胞株に細胞傷害性を示した。また様々な細胞株への反応性パターンから、樹立したクローンはいくつかの異なる抗原を認識していると考えられた。

卵巣がん細胞株の内因性HLAの発現をsiRNAによって抑制し、さらにsiRNA抵抗性のHLA-A24を導入したaAPCを用いることによって、卵巣がんを傷害するHLA-A24拘束性CTLを効率誘導することができた。この手法は他のがん細胞株にも応用可能であることから、広く腫瘍抗原の探索に有用であると考えられた。

【今後の方向】

CTLクローンの一部は、aAPCとして使用したがん細胞株以外のHLA-A24陽性卵巣がん細胞株でも細胞傷害性を認めた。これは、本aAPCシステムが、がんが発現する共通の腫瘍抗原を同定するのに有効なツールとなり得ることを示している。現在までに、TOV21G細胞から単離したmRNAからcDNAライブラリーの作製を完了している。今後は、発現スクリーニング法によりCTLクローンが認識する抗原の同定を進める。

¹⁾ 名古屋大学大学院医学系研究科産婦人科学

<研究課題> 1-2

(主題) 腫瘍抗原の免疫学的、分子生物学的検索

(副題) 膀胱がん細胞における恒常的高活性オートファジーによるCTLエピトープの産生

岡村文子、鳥飼宏基¹⁾、赤塚美樹²⁾、吉森保³⁾
葛島清隆

【目的・概要・進捗状況】

HLA-A24拘束性細胞傷害性Tリンパ球 (CTL) クローン 16F3は、HLA-A24を発現するK562細胞と膀胱がん細胞株を認識し、HLA-A24陽性の繊維芽細胞、上皮細胞、Bリンパ芽球などの正常細胞は認識しない。標的抗原のピューロマイシン感受性アミノペプチダーゼ (PSA) はユビキタスな発現であるが、種々の特異的阻害剤を用いた免疫学的解析からオートファジー装置がエピトープ生成に関与していることが示唆された。そこで、今年度はこのエピトープが非常によく提示される膀胱がん細胞株におけるオートファジーについて細胞生物学的検討を行った。

オートファジーマーカーであるLC3と蛍光蛋白質による融合遺伝子を発現するレトロウイルスベクターを作製し、膀胱がん細胞株におけるLC3の活性を融合している蛍光を指標に測定すると、CTLによって認識される、すなわちエピトープが生成されているKP-3およびMIA PaCa-2膀胱がん細胞株で非常に強い蛍光が観察された。次に、LC3特異的抗体を用いて免疫染色を行い蛍光顕微鏡で観察したところ、KP-3およびMIA PaCa-2膀胱がん細胞株では、特徴的なオートファジーシグナルが異常に多く検出され、強制発現系および内在性蛋白質検出系においてオー

トファジーが高活性状態にあることが示唆された。一方、エピトープを産生していない細胞においては、オートファジーは低活性であった。また、これらの膀胱がん細胞株においては抗原蛋白質PSAとオートファジーマーカーLC3が共局在しており、抗原がオートファゴソームで分解されていると考えられた。さらにオートファジーシグナルの異常亢進が一部経路の停滞によるものかどうかを、2つのpH感受性の異なる蛍光蛋白質とLC3融合蛋白質を導入した細胞において調べた所、pHが酸性状態にあるオートライソソームで見られる赤色の蛍光シグナルが得られたことから、オートファジーの経路が途中で止まることなく流れており、一連のオートファジー経路が活性化していると考えられた。以上のことから、本エピトープの生成には高活性オートファジーが必要であることが明らかとなった。

【今後の方向】

ユビキタスに発現しているPSAは、オートファジー経路を介して処理を受けた後、オートファジーが亢進している膀胱がん細胞においてのみ提示されていることが明らかとなった。最近、オートファジーはk-ras変異による悪性形質転換に関与していること、膀胱がん細胞の増殖に必要であることが報告された。膀胱がんでは高頻度にk-ras遺伝子の変異があることが知られており、オートファジーが高活性状態にあると推測される。これらのことから、オートファジー依存性エピトープは膀胱がんに対する免疫療法の発展に重要であると考え、新規エピトープペプチドの探索を行う予定である。

¹⁾ MDアンダーソンがんセンター、²⁾ 藤田学園保健衛生大学医学部、³⁾ 大阪大学大学院医学系研究科

<研究課題> 2-1

(主題) 免疫診断及び免疫治療の前臨床的及び臨床的研究

(副題) HLA一座不一致同胞間骨髄移植患者より樹立したHLA-class IIを直接認識するCD8+CTLクローンの意義 (続報)

<研究者氏名>

廣澤友也、赤塚美樹、鳥飼宏基、柳澤真弓¹⁾、今橋伸彦²⁾
宮村耕一²⁾、森島泰雄、小寺良尚³⁾、葛島清隆

【目的・概要・進捗状況】

同種造血細胞移植におけるアロ免疫反応は移植片対宿主病 (GVHD) や移植片対白血病 (GVL) 効果の誘導に関与している。選択的GVL効果の誘導は患者血液細胞に特異的に発現するマイナー組織適合抗原を標的とすることが理想的であるが、HLA不適合移植症例が多くなった最近では、マイナー組織適合抗原より抗原性の強い不適合HLA分子そのものが標的抗原となる場合がある。昨年度、我々は移植後の患者末梢血より不一致HLAクラスIIを直接認識するCD8陽性のCTLを誘導しその意義を報告したが、そのCTLが白血病幹細胞を傷害するか、患者体内における全アロ免疫反応のどの程度が不適合HLAクラスII分子に向けられているか、またこのCD8陽性CTL

によるHLAクラスII分子認識が普遍的な現象かは未解決であったため、さらに検討を行った。

【方法】

実験に用いたCTLクローン 1 H8はHLA-DRB1*0803を認識し、HLA-DRB1*0803を発現している白血病細胞のCD34陽性分画を傷害した。これらのうち、Ph陽性ALL患者から得られたCD34陽性細胞を大量に純化し、CTL 1H8またはこの白血病細胞のマイナー組織適合抗原は認識できないCTL-1B9と一晚共培養を行った後、NOGマウスに接種し観察した。また、限界希釈法を用い、本症例およびHLAクラスI、II座不適合移植を受けた別の患者の移植後ドナー由来末梢血T細胞を移植前の患者末梢血で刺激後、患者LCL、ドナーLCLに不適合HLAを遺伝子導入したものを標的として細胞障害性試験を行い、前駆体頻度を測定した。

【結論】

NOGマウスに接種後6-7週間の時点でマウス末梢血と骨髄中のヒト由来ALL細胞の存在を抗ヒトCD45、抗ヒトCD34抗体の2重染色で確認したところ、CTL-1B9と共培養した場合、ALL細胞は骨髄で11~33%の頻度で存在することが確認された。他方、CTL 1H8と共培養した場合には0.01~0.07%の頻度で、ほぼbackgroundレベルであった。ついで限界希釈法による検討では、CTL 1H8がクローン化された移植後207日目の末梢血CD8陽性細胞の患者の全アロ抗原に対するCTL前駆体の頻度は1/1,317であり、このうち約半分の1/2,689の頻度で不適合HLA-DRB1*08:03に対するCTLが存在していた。移植後355日目の時点における全アロ抗原反応性CTL中のHLA-DRB1*08:03反応性CTLの割合は73%まで増加していた。このようなCD8陽性CTLによるHLAクラスII分子の認識は本症例だけでなく、HLA-C、DR、DQ3座不一致移植を受けた別の症例でも移植後の3ポイントを通じ2.1~12.1%の割合（HLA-DRの場合）で認められた。以上より、HLA-DR分子はNOGマウス内での生着に関わる白血病幹細胞表面でも発現しており、HLA-DR特異的CTLはこうした幹細胞を駆逐しうること、またアロ反応性CD8陽性T細胞は、移植後予想以上に高率に誘導され、1年以上存在し続けることが判明した。

【今後の方向】

移植後のGVL効果はHLAクラスII分子特異的CTLでも期待しうる可能性が示されたので、HLAクラスII不一致移植例ではCD8陽性のCTL反応を従来のHLAクラスI分子拘束性マイナー組織適合抗原に限らず、クラスII抗原においてもさらに検討を進めたい。

¹⁾ 一宮市立市民病院・血液内科、²⁾ 名古屋第一赤十字病院・血液内科、³⁾ 愛知医科大学・造血細胞移植振興寄附講座

<研究課題> 2-2

(主題) 免疫診断及び免疫治療の前臨床的及び臨床的研究

(副題) 神経芽腫に対する細胞性免疫を利用した新規治療の

ための基盤研究

西尾信博、田中義正¹⁾、高橋義行²⁾、岡村文子、植村靖史
小島勢二²⁾、葛島清隆

【目的・概要・進捗状況】

CTLの働きを利用した免疫療法は、化学療法や放射線治療などの従来の治療に抵抗性の癌に対しても効果を期待できる治療法であるが、神経芽腫においてはHLAの発現が低下しているために、CTLの攻撃から逃避してしまうと考えられる。その問題を克服するための戦略として、2つの研究を行った。

一つは神経芽腫のHLAクラスI分子を高発現させ、その後に腫瘍特異的CTLを作用させるという方法である。我々は、レンチノイン酸などの分化誘導薬、脱メチル化薬やヒストン脱アセチル化酵素阻害薬などのエピジェネティック作動薬、各種サイトカイン等によって神経芽腫のHLAクラスI分子の発現を増強させる試みを行った。その結果、IFN- γ が最も強力にほとんどの神経芽腫細胞株のHLAクラスI分子の発現を増強した。腫瘍関連抗原で神経芽腫にも高発現しているヒトテロメラゼを特異的に認識するCTLクローンと、このクローンから単離したT細胞受容体を遺伝子導入したT細胞株を樹立できたため、現在HLAの発現を増強させ、CTLによる傷害性を増強させることの検証を行っている。

もう一つは、HLA非拘束性に非蛋白抗原であるピロリン酸を認識して細胞傷害性を発揮する $\gamma\delta$ T細胞を用いた研究である。近年、ビスフォスフォネート製剤により $\gamma\delta$ T細胞を簡単に増殖させる方法が見いだされた事、ビスフォスフォネート製剤が内因性のピロリン酸を癌細胞内に蓄積させ、 $\gamma\delta$ T細胞による感受性を増強するというメカニズムが見いだされた事により、 $\gamma\delta$ T細胞を使用した養子免疫療法が注目されている。 $\gamma\delta$ T細胞は、末梢血リンパ球中の3-5%しか存在しないが、ビスフォスフォネート製剤とインターロイキン2 (IL-2) 存在下で、数百倍に増殖した。増殖した $\gamma\delta$ T細胞は、ビスフォスフォネートで処理した神経芽腫細胞株を強く傷害した。また、その傷害性は神経芽腫細胞処理におけるビスフォスフォネート濃度を増加させることにより、また $\gamma\delta$ T細胞培養液中にIL-15、IL-18を添加することで著明に増強した。さらに $\gamma\delta$ T細胞は、神経芽腫細胞株から樹立した「神経芽腫幹細胞様株」のコロニー形成能を阻害し、傷害性を示した。これらの研究結果から、神経芽腫に対する $\gamma\delta$ T細胞を使用した養子免疫療法は有望な治療法であると考えられた。

【今後の方向】

免疫不全マウスモデルを使用した *in vivo*での造腫瘍抑制実験を行う予定である。

¹⁾ 京都大学大学院医学研究科・感染免疫学、²⁾ 名古屋大学大学院医学系研究科小児科学

<研究課題> 2-3

(主題) 免疫診断及び免疫治療の前臨床的及び臨床的研究

【副題】 NKT細胞サブセットをベースとした新規抗腫瘍エフェクター細胞の構築とがん免疫療法への応用

植村靖史、峰野純¹⁾、池田裕明²⁾、藪田精昭³⁾
珠玖洋²⁾、葛島清隆

【目的・概要・進捗状況】

細胞傷害作用と免疫賦活効果を発揮するヒトインバリアントナチュラルキラーT (iNKT) 細胞に、がん抗原を認識するT細胞抗原受容体 (TCR) を人為的に発現させ、がん細胞を特異的に傷害する低侵襲・新規・抗腫瘍エフェクター細胞を作製する。このiNKT細胞をベースとしたエフェクター細胞のがん細胞に対する傷害活性、樹状細胞に賦与する機能的修飾、および効果的な生体内投与方法を明らかにすることで、これをがん患者に投与して、免疫抑制性のがん微小環境を改善するとともに、持続的で強力ながんの排除を誘導する新たな免疫療法を開発することを目的とする。

【方法】

健康人末梢血単核球を α -GalCerにて刺激することによって α -GalCer特異的ヒトV α 24 iNKT細胞の増殖を誘導した。これから高速自動セルソーターを使用して、V α 24+V β 11+6B11+ヒトiNKT細胞を精製分離し、7-9日おきに複数回刺激することで株化した。さらにCD4+CD8 β - (CD4) およびCD4-CD8 β - (DN) の各iNKTサブセットを精製分離した。これら細胞表面抗原発現パターンの異なるiNKTサブセットを、抗CD3抗体を用いて刺激した際の液性因子の産生を比較検討した。一方、それぞれのiNKT細胞サブセットに、HLA-A24拘束性ながん特異抗原ペプチド (MAGE-A4) を認識するTCR、およびCD8 α / β 鎖をレトロウイルス導入系によって発現させた。これらのTCR発現レベル、がん細胞株に対する細胞傷害活性を評価した。

【結果】

抗CD3抗体による刺激において、CD4 iNKT細胞サブセットは大量のTNF- α 、IFN- γ 、IL-4、IL-5、IL-10、IL-13を産生した。一方、DN iNKT細胞サブセットは、TNF- α 、IFN- γ 、IL-4、IL-5、IL-13を産生したがIFN- γ /IL-4比の高いTh1偏向のサイトカイン産生パターンを示した。がんの転移や進行を促進する炎症性サイトカイン (IL-1 β 、IL-6) の産生は認められなかった。また、自己免疫疾患・炎症性疾患の病因・病態に関与することで近年注目視されているTh17サイトカイン (IL-17、IL-22) の産生は認められなかった。

HLA-A24拘束性MAGE-A4特異的TCRを人為的に発現させたiNKT細胞サブセットは、MAGE-A4特異的TCRと α -GalCer特異的インバリアントTCRを共に発現していた。さらに、MAGE-A4特異的TCRを発現するDN iNKT細胞サブセットは、MAGE-A4を発現するメラノーマ細胞株 (SK-MEL-128) 、およびMAGE-A4ペプチド負荷T2-A24に対して細胞傷害活性を示し、抗腫瘍エフェクター細胞としての有用性が示唆された。

【今後の方向】

CD4 iNKT細胞サブセットの細胞傷害活性を評価して、DN iNKTサブセットが発揮する細胞傷害活性との比較検討を行う。また、MAGE-A4あるいは α -GalCerに対する増殖応答性、およびDCに賦与する機能的修飾 (アジュバント効果) を明らかにする。

¹⁾ タカラバイオ株式会社・細胞遺伝子治療センター、²⁾ 三重大学大学院医学系研究科・遺伝子免疫細胞治療学、³⁾ 関西医科大学大学院医学研究科・幹細胞生物学

腫瘍ウイルス学部

<研究課題>

【主題】 ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析

【副題】 EBウイルス潜伏感染の維持を制御する細胞性因子の解析

<研究者氏名>

村田貴之、鶴見達也

【目的・概要・進捗状況】

EBウイルスは多くの健康成人のBリンパ球などに潜伏感染しており、刺激により再活性化し、溶解感染に至る。このようなウイルス感染様式の変化は、ウイルスの複製のみならず、EBウイルス陽性癌の細胞増殖性とも密接に関係しているため、この生活環の制御メカニズムを理解することは重要である。

EBウイルスの再活性化には前初期遺伝子のひとつであるBZLF1が必要かつ十分であることが知られている。BZLF1はウイルスのコードするb-Zip型転写因子であり、ウイルスの初期遺伝子の転写を活性化することでウイルスの再活性化を強力に促進する。

今回我々は、宿主細胞にコードされているb-Zip型転写抑制因子c-Jun dimerization protein 2 (JDP2) が、BZLF1プロモーターに結合し、BZLF1の転写を抑制することでウイルスの再活性化を抑制し、潜伏感染の維持に貢献していることを見いだした。JDP2を過剰発現するとEBウイルス再活性化は抑制され、逆にsiRNAによりJDP2をノックダウンすると再活性化が促進された。レポーターアッセイ、クロマチン免疫沈降法、EMSAアッセイ、点変異導入組み換えEBウイルスの実験により、JDP2はBZLF1プロモーター上のZIIと呼ばれるシスエレメントに結合することを明らかにした。さらに、JDP2は、ヒストン脱アセチル化酵素のひとつであるHDAC3をプロモーター上にリクルートすることでBZLF1の発現を抑制していることを確認した。

以上からJDP2がEBウイルス潜伏感染の維持に重要な働きをしていることが明らかになった。

【今後の方向】

今回の研究では、JDP2に着目して研究を行ったが、我々の行ったcDNAライブラリを用いた網羅的スクリーニングによ

り、他にも潜伏感染の維持や溶解感染の誘導に重要な役割を果たしている因子があることを見いだしている。今後はこれらの因子について同様な研究を展開し、EBウイルスライフサイクル制御メカニズムの包括的解明を目指し、特異的抗ウイルス薬、抗がん治療の開発のための創薬ターゲット探索につながるような基礎研究を展開していきたい。

<研究課題>

(主題) ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析
(副題) EBウイルスBZLF1遺伝子産物の精製

<研究者氏名>

中洲 章、鶴見 達也

<目的・概要・進捗状況>

EBウイルスのBZLF1遺伝子産物(pBZLF1)は、EBウイルスの潜伏感染状態からウイルス産生サイクルへの再活性化を誘発する転写制御因子であると共に、ウイルス産生サイクルで機能する複製開始点に結合する事からDNA複製への関与が示唆されている。ここではpBZLF1の生化学的な機能を調べるために精製を試みている。

昆虫細胞を用いた大量産生系で発現させたpBZLF1は不可逆的に凝集体を作りやすく、カラムクロマトグラフィーで単一のピークを形成しない事からタンパクが正しい高次構造を取っていない事が示唆された。そこでEBウイルスが潜伏感染しているマーモセット由来のB95-8細胞からの精製を試みた。薬剤を用いて再活性化したB95-8細胞から高塩濃度の条件下で界面活性剤によりpBZLF1を抽出し、疎水性カラムクロマトグラフィーで分画する事により低塩濃度(0.1M NaCl)でも可溶化しているpBZLF1標品を得る条件を設定した。しかし低塩濃度でショ糖密度勾配遠心を行うと大部分のpBZLF1は高分子量の分画に広く分布した。この事はpBZLF1は他のタンパクと複合体を形成している事を示し、このタンパクを精製するためには高塩濃度の条件下で分画を行える段階が必要となる。イオン交換カラムで部分精製した後に、高塩濃度(1.5M NaCl)の条件下でショ糖密度勾配遠心、ヒドロキシアパタイトクロマトグラフィーを用いてさらに精製を進め、その後0.3MのNaClの条件でヘパリンセファロースに吸着することによりpBZLF1が主成分になった標品が得られる条件を設定した。しかしながら再現性が悪く回収率のばらつきが大きい。

<今後の方向>

回収率についてはショ糖密度勾配遠心を行う時にBSAを添加する事によりこの段階での回収率を改善できる事をみいだした。またヒドロキシアパタイトについてはサブミリモルの濃度のリン酸でカラムの挙動が変わる事を新たに見いだしている。しかし現時点ではまだ再現性があまり改善されない。そこで精製の最初に用いた疎水性カラムを精製の後半で再度用いることにより改善できるかを検討する。また現在3リットルの細胞培養液から精製を始めているがpBZLF1の量はかなり少ない事が示唆されてきたのでスケールアップしてさらなる精製を試み

る。

<研究課題>

(主題) ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析
(副題) EBウイルスゲノム複製の場の構造解析

<研究者氏名>

杉本温子、鶴見達也

<目的・概要・進捗状況>

EBVは、潜伏感染と溶解感染という2つのライフサイクルを持っている。EBV陽性がんの大部分は潜伏感染状態にあるが、一部は溶解感染状態にあり、そこから分泌されるサイトカインによりEBV潜伏感染細胞の増殖を促進している。そのため、EBV感染制御のためには、溶解感染を理解することが必須といえる。これまでの研究で、EBV溶解感染の際には、replication compartment (RC) と呼ばれる核内の局在した部位にウイルス由来の複製タンパクがリクルートされ、複製の場となっていることがわかっているが、RCの詳細な構造は解明されていなかった。我々は、免疫蛍光染色と3次元再構築を組み合わせた観察法により、RCの内部に二本鎖DNA結合能を持つウイルスタンパクであるBMRF1で構成される構造物(BMRF1-coreと名付けた)があることを発見した。次に、クロロデオキシウリジン(CldU)を用いてウイルスゲノムを標識しpulse-chase analysisを行い、EBVゲノムの経時的な局在の変化を観察した。その結果、BMRF1-coreの外部に局在するウイルスゲノムは、経時的にBMRF1-coreの内部に移行することが明らかとなった。これまでの研究によって宿主細胞のDNA修復を担うHomologous recombinational repair (HRR) やmismatch repair (MMR) の関連因子がRCに集積していることがわかっており、ウイルス複製への関与が示唆されている。そこで、これらの因子とBMRF1-coreの位置関係を同様の方法で観察したところ、HRRの関連因子はBMRF1-coreの外部に局在していることがわかった。一方、MMRの関連因子はBMRF1-coreの内部に局在していた。以上の研究結果から、我々はEBVゲノム複製に関して、以下に示す新しいモデルを提案した。1) EBVのゲノム複製はBMRF1-coreの外部で起こり、HRRとカップリングして行われる。2) 複製された二本鎖DNAにBMRF1が結合し、BMRF1-coreに蓄積される。3) BMRF1-coreの内部にMMRの関連因子がリクルートされ、複製されたウイルスゲノムのミスマッチを修復し、ウイルスゲノムを成熟させている。

<今後の方向>

EBVゲノム複製機構の理解のために、BMRF1-coreの担う役割を解明し、宿主細胞のDNA修復にかかわる因子とのさらに詳しい相互作用を調べる。また、EBVゲノム複製のみならず、転写やカプシドへのパッケージングの詳しい機序を調べる。

<研究課題>

- (主題) ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析
(副題) EBウイルス潜伏感染機構解明に向けたEBNA1蛋白質結合細胞性因子の解析

<研究者氏名>

神田 輝、小布施 力史¹⁾、大川克也²⁾、康 東天³⁾
鶴見達也

【目的・概要・進捗状況】

EBNA1蛋白質は、分裂増殖するEBウイルス潜伏感染細胞のすべてにおいて発現し、ウイルスゲノムの核内維持やトランスフォーム蛋白質の発現制御などにおいて中心的役割を果たす。EBNA1蛋白質の宿主染色体付着の分子メカニズムを明らかにすることを目的として、EBウイルス潜伏感染細胞におけるEBNA1蛋白質相互作用因子の探索を行なった。免疫沈降・質量分析（TOF-MS解析、LC-MS/MS解析）による解析の結果、主要な相互作用因子として、既報告因子であるp32/TAP/gC1q-Rが再同定された。p32蛋白質は、主にミトコンドリアに局在し、核蛋白質であるEBNA1蛋白質との相互作用の意義は明らかにされていない。そこでp32蛋白質をshRNAによりノックダウンすることで、EBNA1蛋白質の宿主染色体上への局在に変化が起きるか調べた。しかし強制発現系、EBウイルス潜伏感染細胞系の両者において、p32のノックダウンによるEBNA1蛋白質の局在変化は認めなかった。

【今後の方向】

p32はエイズウイルスTatをはじめとする様々なウイルス由来の蛋白質との相互作用が報告されており、EBウイルスのウイルス産生、および感染において別の意味で何らかの関与をしている可能性も残るので、ウイルス産生時、および感染時におけるp32ノックダウン効果の検証を行なう。

¹⁾ 北海道大学・先端生命科学研究院

²⁾ 協和発酵キリン(株)

³⁾ 九州大学・大学院医学研究科・臨床検査医学

<研究課題>

- (主題) ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析
(副題) EBウイルスによるヒト上皮細胞がん化メカニズムの解析

<研究者氏名>

神田 輝、鶴見達也

【目的・概要・進捗状況】

EBウイルスは、上咽頭がん、胃がんなど上皮系の細胞へ感染し、そのがん化に関与することが知られている。例えば上咽頭がん細胞では、BamHI A領域の転写産物（BARTs、BamHI-A rightward transcripts）、および近隣の多数のmicroRNA（BART-miRNA）の発現がみられるが、これらの遺伝子発現が上皮細胞のがん化において果たす役割は明らかではない。一

般にウイルス遺伝子産物の機能解析には、変異を導入した組換えEBウイルスの解析が有効であるが、解析のもととなるEBV-BAC（bacterial artificial chromosome）クローンでは、BARTsおよびBART-miRNAを含む約12キロベースのウイルスゲノム領域が欠損していることが知られており、これを使った解析は不可能である。そこで本研究では、こうした上皮細胞での転写が活発な領域を修復した完全長EBV-BACクロンの取得により、BARTsおよびBART-miRNAの上皮細胞がん化における意義を解明する。予備実験により欠損ウイルスゲノム領域を大腸菌内相同組換え法により実際に修復可能であることを確認した。またEBウイルスレセプターCD21/CR2を外因性に発現させた胃がん由来細胞AGS-CR2細胞を樹立し、実際に組換えEBウイルスの効率の良い感染実験が可能であることを確認した。

【今後の方向】

完全長EBV-BACクローンをもとに産生した組換えウイルスおよび変異ウイルスを用いて、各種上皮細胞への感染実験を行なう。

<研究課題>

- (主題) 抗がんウイルス療法の開発
(副題) がん抗原発現リンパ芽球様細胞株を用いたがん抗原特異的細胞傷害性T細胞誘導の試み

<研究者氏名>

神田 輝、葛島清隆、安川正貴¹⁾、鶴見達也

【目的・概要・進捗状況】

EBウイルスを末梢血リンパ球に試験管内感染させることで樹立できるリンパ芽球様細胞株（lymphoblastoid cell line、LCL）は、抗原提示細胞としての有用性が知られている。われわれはウィルス腫瘍原因遺伝子WT1を組み込んだ組換えEBウイルスを用いて、ほぼ100%の細胞がWT1抗原を発現するLCLを容易に樹立可能であることを示した。さらにHLA型の異なる健康人ドナー2名由来のWT1発現LCLを樹立し、樹立したWT1発現LCLにおいてWT1ペプチドがHLA拘束性に抗原提示されていることを確認した。

【今後の方向】

WT1抗原特異的CTLの体外増幅やWT1特異的細胞性免疫のモニタリングにおけるWT1発現LCLの有用性を検証する。

¹⁾ 愛媛大学・生体統御内科学

<研究課題>

- (主題) 遺伝子組み換えウイルスを用いた発がん研究
(副題) EBウイルスLMP1の発現を制御する新規宿主因子の同定とその解析

<研究者氏名>

野田千恵子、村田貴之、神田輝、鶴見達也

【目的・概要・進捗状況】

LMP1は、上咽頭癌を含む、多くのEBV関連癌の発癌における重要なウイルス癌遺伝子である。CD40を模倣し、リガンド非依存的に、NF- κ B、JNK/AP1、JAK/STAT経路などといったCD40からの細胞内シグナル伝達を恒常的に活性化させる。これらのシグナル経路を通して、宿主細胞の増殖、不死化、浸潤転移の促進、アポトーシスの抑制をもたらす。III型においてはEBNA2がRBP-J κ およびPu.1と共同してLMP1遺伝子の発現に寄与することがよく知られているが、II型ではEBNA2は発現しておらず、EBNA2非依存性のLMP1発現の詳細な仕組みは未だ明らかではない。そこで今回我々はLMP1発現のメカニズムを網羅的に解析するため、cDNAライブラリを用いたスクリーニングを遂行し、LMP1プロモーターを活性化させる宿主因子の探索を行った。これまでに2万個以上のクローンを精査し、LMP1の新規転写活性化因子としてC/EBP ϵ を同定した。EBV感染細胞株において、C/EBP α または ϵ を過剰発現させると、LMP1のmRNAおよびタンパク質発現が増強した。またEBV感染細胞での解析の結果、C/EBP α によるLMP1の転写活性化には、近位(ED-L1)、遠位(TR-L1)の2つのプロモーターが関与していることが分かった。変異株を用いたレポーターアッセイおよびEMSAによってC/EBP結合部位を同定し、またこの部位が近位と遠位の両プロモーターの活性化に関与することが分かった。そこで、同定したC/EBP結合部位に変異を加えたEBV-Bacを作製し、解析を行った結果、野生株のウイルスと比較して、LMP1の発現量が転写レベルでもタンパク質レベルでも減少することがわかった。

【今後の方向】

今回、LMP1遺伝子の転写制御因子として、はじめてC/EBP ϵ を同定した。EBNA2非存在下におけるLMP1遺伝子の発現には、IL-4、IL-6、IL-10やIL-21等といったサイトカインが関与していることが知られている。またC/EBPファミリーは、分化、炎症、代謝や細胞増殖等といった様々な生理現象に関与しているが、炎症において、C/EBPはIL-6やIL-10等の様々なサイトカインと関わりがあることが知られている。今後、これらのサイトカインによるC/EBP ϵ を介したLMP1プロモーター活性化の可能性について検討したい。

<研究課題>

- (主題) 遺伝子組換えウイルスを用いた発がん研究
- (副題) 新規抗ヒトサイトメガロウイルス薬のターゲット分子の探索

<研究者氏名>

磯村寛樹、山下依子¹⁾、鶴見達也

【目的・概要・進捗状況】

ヒトサイトメガロウイルス(HCMV)が造血幹細胞移植後

のさまざまな合併症や致死率、さらには拒絶反応の増加に寄与していることはよく知られており、現在のガンシクロビルを用いた治療ではその強い毒性のため不完全である。特に欧米では移植後早期からガンシクロビルの一律投与を始めるため、その毒性が大きな問題となっており、現在、製薬企業では毒性の少ない抗HCMV薬の開発にしのぎを削っている。今後日本でも欧米と同様、入院病床数の絶対的不足や医療費の削減等の目的で、移植後早期の退院が求められる事態が考えられ、毒性の少ない新規抗HCMV薬の開発が必要である。さらに、HCMVが悪性脳腫瘍であるグリオブラストーマに非常に高頻度に検出されるとの認識が世界で共有されつつあり(第13回国際CMVワークショップ、2011)、HCMVのグリオブラストーマの進展に果たす役割と、その予防にむけた抗ウイルス療法や免疫療法等、多くの基礎研究やスモールグループでの臨床試験が発表されつつある。私達も現在、名古屋大学病理学教室との共同研究で、グリオブラストーマからのHCMVの検出を精力的に行なっているところである。さらに、私達はヘルペスウイルスに共通な遺伝子制御機構に着目し、新たな抗ウイルス薬のターゲットとなりうる分子標的の探索を行なっている。ヘルペスウイルスの構造蛋白をコードする後期遺伝子はウイルスDNA複製依存的に発現し、ウイルスDNA複製を阻害すると発現しない。しかし、その分子機構はこれまで全く不明であった。しかし、近年、マウス γ -ヘルペスウイルス68のORFs 18、24あるいは34を欠損した組換えウイルスではウイルスDNA複製は野生型と同じように進行するにも関わらず、後期遺伝子の転写やウイルス増殖が認められないことが報告された。そこで、今回そのHCMVホモログの役割と感染細胞内での挙動を観察した。

マウス γ -ヘルペスウイルス68のORFs 18、24あるいは34のHCMVのホモログであるUL79、87、あるいは95を欠損した組換えHCMV BAC DNAを作成し、さらに組換えレトロウイルスを用いて、それぞれの遺伝子のC端にmcherryを融合させた蛋白を恒常的に発現するそれぞれのヒト繊維芽(HFF)細胞を作製して、組換えHCMVを分離した。同時に、UL87のC端にMycエピトープを持ち、UL95のNあるいはC端にHAエピトープをもつ組換えHCMVを作成した。

(1) UL79、87、あるいは95を欠損した組換えHCMVをHFF細胞に感染させると、ウイルスDNA複製はそれぞれの欠損蛋白を発現する補充HFF細胞に感染させた場合と同様に認められたにもかかわらず、後期遺伝子の発現は欠損蛋白を発現する補充HFF細胞でのみ認められた。その結果、HFF細胞ではウイルス増殖が全く認められなかった。(2) 恒常的に発現させたUL79、87、及び95蛋白はそれぞれのORFを欠損した組換えHCMV感染後、Replication Compartments(RCs)を形成するUL44蛋白と共局在した。(3) ウイルス複製をPAAで阻害すると、UL44蛋白は核内でウイルスDNAやTBPと共局在するmicrofociを形成し、UL87とUL95蛋白はそのmicrofociにリクルートされた。

【今後の方向】

UL44蛋白はPCNAのホモログであり、転写因子を含む多くの蛋白と相互作用することが近年相次いで報告されている。

後期特異的転写因子はウイルス複製前からUL44 microfociに集合することから、UL44 microfociとRCsは、後期遺伝子発現の“タイムキーパー”の役割を果たしているのかもしれない。UL79、87、そして95はこれまでと全く作用機序の異なる新規抗HCMV薬のターゲット分子となる可能性がある。

¹⁾ 名古屋大学医学部生体反応病理学

分子病態学部

< 研究課題 > 1

- (主 題) 大腸がんの発がん初期過程において重要な役割を果たすシグナル経路の解明
(副 題) 腸管腫瘍形成におけるJNK/mTORC1経路の役割

< 研究者氏名 >

青木正博、藤下見章¹⁾、武藤 誠¹⁾

< 目的・概要・進捗状況 >

本研究課題は、平成22年12月の部長新任に伴い新たに加わった研究課題である。大腸がんの多段階発がん過程において最初に生じる遺伝子レベルの変化は、APCがん抑制遺伝子の変異と考えられており、大腸がん症例の約85%にAPC遺伝子の変異が見つかる。Apc遺伝子にヘテロ接合変異を持つ遺伝子改変マウス（以下Apc変異マウス）では、腸上皮細胞のApc遺伝子座でのヘテロ接合性の消失loss of heterozygosity (LOH)によりAPCタンパクの機能が失われる結果、Wnt経路が恒常的に活性化し、腺腫性ポリープを発症する。我々はこれまでに、Apc変異マウスの腸管ポリープの腫瘍性上皮細胞ではmammalian target of rapamycin complex 1 (mTORC1) 経路が活性化されていること、Apc変異マウスにmTORC1阻害薬のRAD001を投与するとポリープのサイズは小さくなり、マウスの生存率も著しく改善することなどを示してきた。平成22年度は、Apc変異マウスの腸管腫瘍におけるmTORC1活性化が腫瘍の大きさに依存すること、mTORC1経路の活性化にはJNK経路が決定的な役割を果たすことを明らかにした。さらに、その分子機序として、JNKがmTORC1の構成分子であるRaptorのSer863を直接リン酸化することによりmTORC1を活性化することを示した。多数見つかる微小腺腫ではWnt経路の活性化は認められるもののmTORC1は活性化されていないことから、Wnt経路の活性化だけでは微小腺腫は成長することができず、何らかの原因によってJNK/mTORC1経路が活性化されて初めて大きなポリープが形成される可能性が示唆された。

< 今後の方向 >

腸管腫瘍におけるJNKの活性化機序を解明する。浸潤性の大腸がんを発症するApc/Smad4複合変異マウスを用いて、JNK/mTORC1経路が大腸がんの進展に果たす役割を明らかにする。さらに、mTORC1の下流で腫瘍の増殖を促進する分子を同定する。

¹⁾ 京大・医・遺伝薬理学

< 研究課題 > 2

- (主 題) CDX1及びCDX2の消化管腫瘍への関与とその分子機序
(副 題) 腸管腫瘍形成におけるPLEKHG1の役割

< 研究者氏名 >

青木正博、後藤嘉子、武藤 誠¹⁾

< 目的・概要・進捗状況 >

本研究課題は、平成22年12月の部長新任に伴い新たに加わった研究課題である。CDX1及びCDX2は消化管上皮細胞の分化に重要な役割を果たすホメオドメイン転写因子で、大腸がんの抑制因子と考えられている。我々はこれまでに、クロマチン免疫沈降法によりいくつかのCDX標的遺伝子候補を同定していた。平成22年度には、酪酸など短鎖脂肪酸を含むモノカルボン酸のトランスポーターをコードし、大腸がんのがん抑制遺伝子候補とされるsolute carrier family 5, member 8 (SLC5A8) がCDX転写因子の新規標的遺伝子であることを示した。さらに、ヒト大腸癌細胞株HCT116にCDX1やCDX2を強制発現させるとSLC5A8の発現上昇に伴いSLC5A8による基質のナトリウム依存的な取り込みが有意に増加すること、逆に内在性SLC5A8を高発現する大腸癌細胞株T84においてCDX1、CDX2をノックダウンするとSLC5A8の発現低下に伴い取り込みが減少することを示した。一方、SLC5A8プロモーターに結合するCDX1、CDX2の量が酪酸投与により顕著に上昇したことから、このSLC5A8の発現上昇は、酪酸のHDAC阻害活性によりSLC5A8プロモーター領域でヒストンのアセチル化が起こり、CDX1、CDX2が結合しやすくなったためと考えられた。これらの結果から、大腸上皮細胞が酪酸等の短鎖脂肪酸を取り込むと、そのHDAC阻害活性によってCDX1、CDX2の発現が上昇し、その結果としてCDXの標的遺伝子であるSLC5A8の発現が上昇して短鎖脂肪酸の取り込みがさらに増加する、というpositive feedback機構の存在が示唆された。また、上記Apc変異マウス、及び過誤腫を発症するCdx2ヘテロ接合変異マウスの大腸腫瘍におけるSLC5A8の発現をqRT-PCR、Western blot、免疫組織化学により解析したところ、いずれの腫瘍においてもSLC5A8の発現が正常部位に比べて有意に低下していた。これらの結果から、CDX2の発現低下に伴うSLC5A8の発現低下が大腸の腫瘍発生に寄与する可能性が示唆された。

< 今後の方向 >

他のCDX標的遺伝子候補が腸管腫瘍の発生、進展において果たす役割についても、細胞生物学的手法、ノックアウトマウスによる遺伝学的手法によって明らかにするとともに、大腸がん臨床検体での発現解析を行いたい。

¹⁾ 京大・医・遺伝薬理学

<研究課題> 3

(主題) 悪性細胞における異常糖鎖の発現調節機構の研究

(副題) 大腸がんのEMTに伴うセレクトインリガンド糖鎖発現亢進機構

<研究者氏名>

佐久間圭一郎、青木正博、神奈木玲児¹⁾

<目的・概要・進捗状況>

シアリルルイスX (sLex) とシアリルルイスA (sLea) はがん細胞に発現する糖鎖性接着分子で、血管内皮細胞のE-セレクトインと接着することでがん細胞の血管外脱出や血管新生を媒介し、血行性転移を促進する。がんのsLex/a発現量と予後はよく相関するため、腫瘍マーカーとして大腸がんをはじめとして多くのがんで測定されている。これらの糖鎖は治療標的としても有望であるが、その発現機構は十分解明されていない。

近年、がん幹細胞が注目を集めている。がん幹細胞は抗がん剤や放射線治療に抵抗性を有する一方、がん細胞の中で唯一転移能を持つ細胞集団であるともいわれている。従って、がん幹細胞の転移能の背景にある分子機構を解明することは、がんの根治を目指す上で極めて意義が大きい。本研究では、大腸がん幹細胞がin vitroにおいてEGF/bFGFで維持されることに着目し、EGF/bFGFがsLex/aの発現におよぼす影響を調べた。

HT29とDLD-1をEGF/bFGF存在下で培養すると、線維芽細胞用の形態変化、E-カドヘリン遺伝子の転写抑制、浸潤能の亢進といったEpithelial-mesenchymal transition (EMT:上皮間葉転換) 様の変化が観察された。これらの細胞ではsLex/aの発現が強く誘導され、E-セレクトインとの接着能が著明に亢進した。sLex/aの合成に関与する複数のシアル酸転移酵素とフコース転移酵素の発現が、c-MycやCDX2を介して転写レベルで変化することが示唆された。また、EGF/bFGFによって、VEGF、IL-1 α 、IL-1 β の発現が誘導された。これらの分子は血管内皮細胞にE-セレクトインの発現を誘導する機能を持つ。さらに、大腸がん臨床検体を用いて、EMTを起こしたがん細胞がin vivoでもsLeaを高発現することを確認した。

以上の結果から、大腸がん幹細胞が有する高転移能の背景に、EGF/bFGF下流シグナルによってもたらされるsLex/aの発現亢進、EMT様変化、E-セレクトイン誘導分子の発現が複合的に存在する可能性が示唆された。

<今後の方向>

EGF/bFGFの下流シグナルの中でsLex/aの発現亢進に特に重要な役割を果たす分子を同定し、治療への応用の可能性を探索していきたい。

¹⁾ 愛知医大 先端医学・医療研究拠点

<研究課題> 4-1

(主題) グリコサミノグリカンおよびスフィンゴ脂質と癌の進展に関する分子生物学的研究

(副題) 神経芽細胞腫SH-SY5Y細胞の分化誘導に関するセラミド・ガングリオシドの発現機構の解明

<研究者氏名>

京ヶ島 守、田中 広治¹⁾、²⁾、萩原 和美³⁾、小泉 恵子²⁾、村上 真史³⁾、村手 隆³⁾、神奈木 玲児⁴⁾

<目的、概要、進捗状況>

ヒト神経芽細胞腫SH-SY5Y細胞は、血清存在下で盛んに増殖するが、全トランスレチノイン酸 (ATRA) が添加されると細胞の増殖は抑制され、神経突起の発現 (分化) が認められる。一方、スフィンゴ脂質の一種であるセラミド (Cer) は、細胞に分化、アポトーシスを誘導する生理活性脂質としてよく知られている。SH-SY5Y細胞において認められた分化にCerが関与しているカリピドミクスの技術を用い調べたところ、分化の前後でCerの総量は有意に増加し、中でも分子種d18:1-C24:1の増加が顕著であった。このCer増加に関与する遺伝子・酵素活性を調べたところ、中性セラミダーゼ (CDase) の発現低下とそれに伴う酵素活性の低下が認められた。またshRNAによる中性CDaseノックダウン細胞を作製したところ、対照と比べ増殖の抑制と神経突起の発現が認められ、以上からATRAによるSH-SY5Y細胞の分化にはCDaseの発現低下により生じたCerが関与することが判明した。

一方、神経分化に関わるスフィンゴ脂質としてガングリオシドが知られている。そこで、CDaseノックダウン細胞のガングリオシド発現を対照と比較した。後者では神経芽細胞腫の腫瘍マーカーであるGM2やGD2の発現が顕著であるのに対し前者ではこの発現は低下し、分化した神経細胞に特有なGD1b、GT1bの発現増強が見られ、部分的ではあるもののがん化によって生じた糖鎖不全現象の改善が認められた。

<今後の方向>

これまでの神経芽細胞の分化とガングリオシドの研究では、専ら糖鎖合成に関与する糖転移酵素にのみ注目が集まっていたが、本研究はガングリオシド生合成の上流にあたるセラミド合成の変化がガングリオシド生合成にまで関与することを示した最初の知見である。正常の神経系に見られるガングリオシドのセラミド組成には特有のものがある。即ち非神経系の組織で見られるガングリオシドのセラミド組成が、脂肪酸はC16:0、C24:0あるいはC24:1、長鎖塩基はd18:1であるのに対し、神経系では各々C18:0とd20:1が主体となる。中性CDaseノックダウンにより分化誘導されたSH-SY5Y細胞の分化型ガングリオシドGD1b、GT1bのセラミド組成はd18:1-C24:1が主体であり、糖鎖においては分化が見られたが脂質部分においては分化が不十分なガングリオシドが発現していると考えられた。ガングリオシドのセラミド組成に注目した研究はこれまでほとんどない。分化誘導治療は、必ずしもすべてのがん細胞を分化、成熟させるところまで至ってはいない。本研究で見られたガングリオシドを構成する脂質部分の未成熟性は、その一面を反映している可能性があり、この問題の解明が分化療法を進展させる上で重要な課題となると考えている。

¹⁾ 名市大院薬、²⁾ 研修生、³⁾ 名大 医 保健、⁴⁾ 愛知医大 先端医学・医療研究拠点

<研究課題> 4-2

(主題) グリコサミノグリカンおよびスフィンゴ脂質と癌の進展に関する分子生物学的研究

(副題) 癌細胞における異常ヘパラン硫酸の発現とその生物学的、臨床的意義

<研究者氏名>

遊佐 亜希子¹⁾、藤井 正宏²⁾、岩田 広治³⁾

横山 幸浩⁴⁾、伊東 良子⁵⁾、伊東 丈夫⁵⁾

小田 高司²⁾、神奈木 玲児⁶⁾、京ヶ島 守

<目的、概要、進捗状況>

ヘパラン硫酸プロテオグリカン (HSPG) の糖鎖ヘパラン硫酸グリコサミノグリカン (HSGAG) は、大変複雑に硫酸化され、こうした特異な陰性荷電糖鎖ドメインは線維芽細胞増殖因子 (FGF) や血管内皮増殖因子 (VEGF) 等に結合能を有し、増殖因子シグナルをより効率よく増幅し細胞に伝達するとされてきた。またHSGAGは細胞表層や細胞外マトリックスに存在するとされてきた。しかしながら全く意外なことに我々の研究からHSGAG中わずか0.7-4%にしか存在しないとされていた陽性荷電を持つGlcA-GlcNH₃⁺ (JM403抗原) が、小腸上皮増殖帯の細胞質内に特異的に発現することが判明した。また、JM403抗原を特異的に認識するモノクローナル抗体を用い、乳がん臨床検体でその発現を調べたところ、核分裂指数やKi67ラベリングインデックスと強い相関があることが判明してきている。そこで、細胞質内におけるJM403抗原の存在様式を共焦点レーザー顕微鏡でKi67抗原と詳細に比較検討した。JM403抗原はKi67抗原と共存している細胞も見られるが、細胞によってはどちらか一つの抗原のみ発現する細胞も少なからず認められ、JM403抗原の細胞質内発現率はKi67ラベリングインデックスとは相関するものの両者の発現は必ずしも同一の意義を示すものではないと考えられた。現在、JM403抗原の持つ独自の意義を検討する目的で乳がんに加え、膵がんについても検討を始めている。プレリミナリーな結果ではあるが、正常な乳管ではJM403抗原はほとんど発現されておらず、膵がん、とりわけ、膵管内乳頭粘液性腫瘍intraductal papillary mucinous neoplasm (IPMN) においてその細胞質内発現が高いことが判明しつつある。

一方、乳がん細胞株MDA-MB-231を用いたHPLC解析では増殖期にあるJM403抗原相当のピークとコンフルエント時におけるそれとでは、前者においてその存在比が多いことが判明しつつある。

<今後の方向>

陽性荷電を帯びたGlcA-GlcNH₃⁺が細胞増殖に関与し、がんの悪性度を反映する可能性を示すデータは集まりつつある。しかしながらこの糖鎖構造の合成に関与する遺伝子が未だに不明なこと、この糖鎖が通常のものとは大変性格が異なる事からこの糖鎖の化学的解析法を工夫する必要があることなど基礎的研究を進める上での課題が残っている。一方、並行してバイオマ

ーカーとしての研究を進める必要がある。特に膵のIPMNで陽性率が高い可能性があることから、膵がんの早期発見に道を開く可能性もあると期待している。

¹⁾ リサーチレジデント、²⁾ 愛知病院乳腺科、³⁾ 中央病院乳腺科、⁴⁾ 名大院 医 腫瘍外科、⁵⁾ 東海大 組織科学 ⁶⁾ 愛知医大 先端医学・医療研究拠点

膵がん制御研究部

<研究課題> 1-1

(主題) 中間径フィラメント関連蛋白質を介した膵がんの基礎研究

(副題) 新規ケラチン結合蛋白質であるトリコブレインとアルバトロスの機能解析

<研究者氏名>

猪子誠人、松山誠¹⁾、衣斐美歩²⁾、井澤一郎、林裕子

米村重信³⁾、清野透⁴⁾、稲垣昌樹⁵⁾

【目的・概要・進行状況】

正常分化上皮細胞の特徴は、はっきりした極性や細胞間接着などに見られる。このような分化は増殖停止状態で起こり、細胞増殖はこれと相反するものである。がんではこのような分化上皮の特徴がしばしば消失しており、同時に無秩序な増殖が起こる。ケラチンは分化上皮細胞に特異的に発現する細胞骨格 (中間径フィラメント) 蛋白質として知られていたが、このようにがん深く関わる上皮分化制御の視点からの研究は立ち遅れていた。

私どもは、新規ケラチン結合蛋白質としてアルバトロスとトリコブレインを同定し、その後の解析からこれらの分子およびケラチンが上皮細胞の分化制御に関わるという新知見を増やしつつある。これまでに、この2つの分子をそのアミノ酸配列からTPHD (トリコヒアリン・プレクチン類似ドメイン) 分子群と名付けた。TPHD分子群の特徴は、分化状態では主に細胞間接着部位に、そして増殖中は主に中心体に局在を変えることにあるが、これはTPHD分子群が分化と増殖の両方の分子メカニズムに関わり得るbi-layer分子であることを示唆している。

本研究の大きな目的は、TPHD分子群による新規上皮細胞分化・増殖制御機構の全容を明らかにすることであり、本年は特に中心体でのトリコブレインの機能解析に焦点を置いた。そして以下の結果から、トリコブレインが中心体で分化・増殖制御さらにその転換と関わる可能性を見出した。

まず、トリコブレインの細胞内局在について、増殖中の細胞では中心体、詳細には中心小体にあることを見出していた。特に母中心小体の機能は、その付属器への微小管細胞骨格の係留と増殖休止期における一次線毛形成が知られている。このうち、微小管細胞骨格の係留について、トリコブレインがナイニンおよびOdf2蛋白質と共にこれを制御していることを明らかにし、報告した。

一次線毛形成との関連については以下のような結果を得た。

増殖中のRPE1細胞ではトリコプレインはすべての中心小体に局在していたが、この細胞を血清飢餓により増殖停止させ一次線毛形成を誘導したところ、トリコプレインの母中心小体への局在が消失した。またトリコプレインの強制発現ではこの一次線毛形成が抑えられた。逆に増殖状態でトリコプレイン機能欠失（ノックダウン）を行ったところ、一次線毛形成が見られ、同時に細胞周期休止を認めた。つまりトリコプレインは増殖細胞において円滑な細胞周期（特にG1期）の進行の為、一次線毛形成を阻止していると考えられる。さらにトリコプレインノックダウンではオーロラAの活性化が減弱しており、またオーロラ-Aノックダウンでも一次線毛形成が見られた。トリコプレインとオーロラAキナーゼの直接結合はin vitroで確認し、またトリコプレインがオーロラAキナーゼを直接活性化することを明らかにした。そして、オーロラAキナーゼ活性化に必要なドメインが少なくともトリコプレインの1-65アミノ酸残基内に、そしてトリコプレインの中心体局在に必要なドメインが66-130アミノ酸残基にあることを示した。つまり、トリコプレインによる一次線毛形成抑制はその中心体局在と中心体に局在するAurora-Aキナーゼの活性化による。

続いて、一次線毛を生じない条件下でトリコプレインノックダウンを行ったところ、この場合は細胞周期休止は起こらないことが増殖マーカー（Cyclin、BrdU）や、FACSでのS、G2/M期の存在により明らかになった。つまり、トリコプレインは一次線毛形成抑制を介することで円滑な細胞周期進行（G1期進行）に重要な役割を担っている。

このようにトリコプレインは一次線毛形成制御を介する新たな分化・増殖転換機構に関わる可能性が示された。またその分子機序として、分裂期キナーゼとして知られるAurora-Aキナーゼの機能をトリコプレインがG1期制御している新発見も見出した。

【今後の方向】

現在までの解析結果を統合すると、分化上皮細胞においては細胞間接着部位にアルバトロスとトリコプレインは局在し、そのうちアルバトロスは極性化分子Par3と複合体を形成し、細胞極性を制御している。また、ケラチンはこの機能に対し促進的に働く。中心体では、アルバトロスは微小管重合制御、トリコプレインは微小管係留、さらには一次線毛形成制御を介する新規分化・増殖転換機構への関与が明らかになりつつある。

今後、これらの分子機構の未解決部分を結合分子の検索等も駆使して補完し、最終的にその相違点を明らかにし統合していくことで、bi-player分子群およびケラチンによる上皮細胞の新規分化・増殖制御機構の全容解明につなげたいと考えている。また、がんでの一次線毛消失はよく報告されているため、がん化のステップへのトリコプレインの関与を調べることは重要な課題であると思われる。

1) 財団法人がん研究振興財団リサーチレジデント、2) 名大グローバルCOEポスドク研究員、3) 理研 発生・再生科学総合研究センター、4) 国立がんセンター、5) 名大・医・細胞腫瘍（兼任）

＜研究課題＞ 2

（主題） プロテインキナーゼを介した発がんの基礎研究

（副題） Chk1の新規リン酸化反応の生理的な役割

＜研究者氏名＞

李萍¹⁾、後藤英仁²⁾、谷田部恭³⁾、笠原広介、松山誠⁴⁾、村上善子³⁾、清野透⁵⁾、稲垣昌樹²⁾

【目的・概要・進行状況】

細胞には、紫外線（UV）や放射線などのDNAの損傷が生じた際やDNAの複製阻止が引き起こされた際、そのDNA異常を監視し修復するチェックポイント機構が存在する。このチェックポイント機構の中心分子として、ATR（ATM- and Rad3-related）からチェックポイントキナーゼ1（Chk1）に至るリン酸化酵素（キナーゼ）カスケードがその中心的な役割を担っている。種々のDNA損傷によって活性化されたATRは、Chk1のSer317およびSer345をリン酸化する。我々は、Chk1が、ATRによるリン酸化修飾後Ser296を自己リン酸化すること、このSer296の自己リン酸化反応を契機に14-3-3ガンマを介してCdc25Aと複合体を形成すること、および、この複合体形成がCdc25Aのリン酸化および分解反応に重要であることを明らかにした。このCdc25Aの分解により、細胞周期の進行エンジンであるサイクリン依存性キナーゼ（Cdk）が活性化しないため、細胞周期の進行が停止する。また、我々は、Cdk1がChk1のSer286およびSer301をリン酸化することでChk1を核外に移行させていること、このChk1の核外移行により核内のCdk1の活性化および分裂期への進行が円滑に遂行されることを明らかにした。つまり、我々は、Chk1は、（これまで知られていた）ATR以外のキナーゼによってリン酸化修飾を受けることで、その機能を大きく変化させていることをこれまでに明らかにしてきた。

我々は、血清（増殖因子）刺激によって、Chk1のSer280が特異的にリン酸化されることを見出した。このリン酸化量の増加は、MAPキナーゼカスケード（Ras-Raf-MEK-ERK-p90RSK）の活性化に伴って引き起こされ、U0126（MEK阻害剤）またはBI-D1870（p90RSK阻害剤）処理やRSK1/2に特異的なsiRNA処理にて減弱することが明らかとなった。血清刺激によってPI-3キナーゼ-Akt/PKB経路も活性化されたが、この経路の阻害剤やAkt1/2に特異的なsiRNA処理ではChk1-Ser280のリン酸化反応の減弱は認められなかった。In Vitroにおける解析で、p90RSKはChk1を効率よくリン酸化すること、および、Chk1-Ser280はp90RSKのほぼ唯一のリン酸化部位であることが判明した。Chk1は、このChk1-Ser280のリン酸化修飾に伴い、細胞質から核に移行することが明らかになった。以上の結果から、Chk1は、増殖因子刺激により、MAPキナーゼカスケードの下流に位置するp90RSKによってそのSer280がリン酸化されること、このリン酸化反応により、Chk1が核に集積することが明らかになった。

【今後の方向】

増殖刺激によって、Chk1が核内に集積することを明らかに

したが、その生理的意義は不明な点が多い。現在、この核内集積とチェックポイント応答や細胞増殖能等の関係を検索中である。ただ、我々は、乳癌組織において、（一般に悪性度が低いとされている）ホルモン依存性癌ではSer280のリン酸化が高レベルで生じていると同時にChk1が核内集積する傾向があるが、（一般に悪性度が高いとされている）ホルモン非依存性癌ではSer280のリン酸化のレベルは低くまさに核内へのChk1の集積がほとんど認められないというデータを得た。つまり、このChk1のSer280のリン酸化修飾がホルモン依存性乳癌におけるChk1の核内集積をもたらしていると考えられる。Chk1は、DNA保全のための必須の分子と位置づけられ、核内で働くことが知られている。そのため、ホルモン非依存性乳癌でChk1-Ser280のリン酸化修飾が減弱し核外にChk1が存在するという事象は、このタイプの乳癌でDNAの変異が蓄積しやすくなることでその悪性化の一翼を担っている可能性が高いと想定できる。今後、その可能性について、より詳細に解析していきたい。

1) リサーチレジデント、2) 名大・医・細胞腫瘍（兼任）、
3) 中央病院・遺伝子病理診断部、4) 財団法人がん研究振興財団リサーチレジデント、5) 国立がんセ・研・ウイルス発がん

<研究課題> 3

(主題) 抗リン酸化ペプチド抗体の進化
(副題) 生細胞で機能するリン酸化抗体の開発

<研究者氏名>

笠原広介、大室有紀¹⁾、上田宏¹⁾、稲垣昌樹²⁾

【目的・概要・進行状況】

がん細胞が無秩序な増殖や転移能を獲得する原因の1つとして、がん細胞の細胞内リン酸化シグナル伝達が異常に亢進していることが挙げられる。現在、時間的・空間的にダイナミックに変化するリン酸化シグナルの解析においては、抗リン酸化抗体を用いた免疫染色法は極めて強力な実験方法として汎用されている。我々は、抗リン酸化抗体を用いた技術をさらに発展させ、生細胞内のリン酸化シグナルを可視化することができる抗リン酸化抗体を開発することを目指している。

生細胞で機能する抗リン酸化抗体を開発する上で、抗体の1) 抗原親和性・特異性の亢進、2) 抗体の生細胞への導入方法、3) 生細胞で抗原抗体反応を検出する方法を開発・改良する必要がある。我々は、中間径フィラメントの1つであるビメンチンに対する抗リン酸化抗体群を用いて抗体可視化を試みているが、これまでにこれら抗体群の変領域部（抗原認識部位）のcDNAをサブクローニングし、変異導入することで抗原親和性を亢進させることに成功している。また、試験管内（in vitro）での抗原親和性・特異検出法としてOS-ELISA（Open-Sandwich ELISA）の系も確立した。

2分子間（抗体と抗原）の相互作用の検出方法は、FRET（Fluorescence Resonance Energy Transfer）法が汎用されて

いるが、より簡便な検出方法としてProtein Complementation Assay（PCA）法の改良を進めている。これまでの緑色蛍光タンパク質GFPを用いたPCA法では、2分子間が相互作用した後の発行までに長い時間を要するという欠点がある。我々は、蛍光タグ（標識）を変更することで発光までの時間を大幅に短く出来ることを見出している。

【今後の方向】

これまでに、抗体可変領域のcDNAサブクローニングと変異導入による抗原親和性・特異性の向上と、2分子間（抗体-抗原）相互作用の検出法の技術は進歩させることができた。今後、上記技術により作製した抗体を生細胞内に導入する技術を進歩させる必要がある。また、これらの技術を組み合わせることで、抗リン酸化抗体を用いて生細胞内のリン酸化シグナル伝達を可視化することを目指す。リン酸化シグナルの生細胞観察により、細胞がん化の分子メカニズムの解明が大きく進展することが期待出来る。

1) 東大・院工、2) 名大・医・細胞腫瘍（兼任）

<研究課題> 4

(主題) ノックアウトマウス的手法を用いた細胞増殖・細胞分化の二律背反に関する研究

<研究者氏名>

松山誠¹⁾、小堀恭子²⁾、稲垣昌樹³⁾

【目的・概要・進捗状況】

中間径フィラメントは、細胞骨格を形成する主要成分の一つである。主に中間径フィラメントとして機能しているタンパク質として、間葉系細胞・がん細胞においてビメンチンがある。中間径フィラメント構成タンパク質の基本構造は、ヘッド・ロッド・テイルの3ドメインで構成される。プロテインキナーゼによる中間径フィラメントの編成制御は、ヘッドドメインのリン酸化を通じて行われる。これまで本研究室において、in vitro、in vivoにおける解析から、細胞周期特異的にリン酸化される部位が同定されている。それらのリン酸化部位がリン酸化されなくなるような変異を導入したビメンチンを培養細胞に導入すると、細胞分裂終了後の娘細胞間に、断裂されていない中間径フィラメントによる架橋が観察されたという報告がある。このことは、細胞周期特異的なリン酸化反応が中間径フィラメントの娘細胞への均等分配に必要であることを示唆している。しかし、マウスなどを用いた個体レベルにおいて、それらのリン酸化シグナルの生理的な機能は、ほとんど解明されていない。そこで我々は、ビメンチンの細胞周期特異的なリン酸化部位に変異を導入したマウスの作製・解析を行っている。

はじめに、細胞周期に依存したリン酸化部位をアラニンに置換したビメンチンのcDNAと、マウスゲノムの情報を用いて、ターゲティングベクターの作製を行った。そのベクターとエレクトロポレーション法を用いて、ビメンチンの遺伝子変異ES細胞の樹立した。マイクロインジェクション法を用いて、マウ

ス胚へ遺伝子変異ES細胞の顕微注入を行い、数匹のキメラマウスが誕生した。作製したキメラマウスを野生型のマウスと交配して、ヘテロ変異マウスを作製する事に成功した。

次に、ヘテロ変異マウス同士を交配して、ホモ変異マウスを作製し、発生過程や成獣における表現型の解析を行った。その解析の結果、ピメンチン点変異マウスは、生存率の低下や生殖機能に異常が認められた。

【今後の方向】

ピメンチン点変異マウスにおける生存率の低下や生殖機能に異常が認められるようである。今後、これらの点において、詳細な検討を行う予定である。また、ピメンチンは間葉系の細胞やがん化した細胞で発現するため、ピメンチンの変異マウスでは、様々な組織において、細胞のがん化や細胞周期の異常がないか検討を行う。

将来、ピメンチン点変異マウスを解析することにより、組織あるいは発生段階特異的な中間径フィラメントの機能が明らかになると予想される。また、中間径フィラメント構成タンパクの点突然変異に起因する様々な疾患との関連づけができると期待でき、発がんの分子機構のメカニズムの一端が明らかになると確信する。

¹⁾ 財団法人がん研究振興財団リサーチレジデント、²⁾ 嘱託技師、³⁾ 名大・医・細胞腫瘍（兼任）

中央実験室

<研究課題>

(主題) 食道がん、頭頸部腫瘍の分子遺伝学的研究

(副題) ミトコンドリアDNAの多型と食道がん発がんリスク

<研究者氏名>

組本博司、松尾恵太郎¹⁾、田中英夫¹⁾、田島和雄²⁾

<目的・概要・進捗状況>

ミトコンドリアゲノムDNA (mtDNA) は核ゲノムDNAと比べ、一般に変異が生じやすいといわれている。また最近では老化やがん化に伴ってmtDNAに変異を生じることも報告されている。我々は、食道がんについて高頻度にmtDNAの変異が蓄積していることを以前明らかにした。もともと食道は、喫煙・飲酒の影響を直接受ける器官であり、これらの生活習慣によって発がんリスクも上昇することが示されている。そこで、本研究の目的は、食道がんの発がんリスクに関わるミトコンドリアゲノムDNAの多型を探索することである。また、mtDNAの多型の数が食道がん発がんリスクに関わっている可能性も考えられることから、mtDNAの多型の数と食道がん発がんリスクの関連も解析する。

本研究には、HERPACC (the Hospital based Epidemiologic Research Program at the Aichi Cancer Center) のデータベースより食道がん患者185例、食道がん患者に性、および年齢

を一致させた非がん患者対照185例を用いた。書面による同意を得た後、自記式質問票により喫煙、飲酒習慣を含む生活習慣に関する情報を得た。さらに、7mlの血液の提供を受け、DNAを抽出した。

mtDNAのD-loop領域は、複製、転写をコントロールする領域であり、多型、変異が多数見つかっている領域でもある。現在、市販のリシーケンシングプライマーセットを用い、食道がん患者および、非がん患者由来のDNAの塩基配列を決定している。さらに、これらの解析した塩基配列と、mtDNAの基準配列であるrCRSと比較することによって、D-loop領域の多型を網羅的に検出している。

<今後の方向>

今後、これらの結果を用いて食道がんリスクを与える多型の探索や、多型の数と食道がんリスクとの関連、さらに飲酒・喫煙のリスクを修飾する多型の探索を行う。また、核だけでなくミトコンドリアでも働いていることが明らかとなっている修復遺伝子、hOGG-1の多型 (Ser326Cys) をそれぞれのサンプルについて解析し、mtDNAの変異と喫煙・飲酒に関連があるかどうか解析する。さらに、これらの解析によって、mtDNAの変異と飲酒・喫煙習慣との関連を明らかにし、食道がんにおけるmtDNAの変異がどのような過程で生じるかを考察する。

¹⁾ 疫学・予防部、²⁾ 研究所長

3. 病院及び研究所における共同研究（共同研究費）

<研究課題1>

非小細胞肺癌におけるEGFR遺伝子変異とIressa治療効果に関する前向き検討

Prospective validation for prediction of gefitinib sensitivity by epidermal growth factor receptor gene mutation in patients with non-small cell lung cancer

<研究者氏名> 呼吸器内科 樋田 豊明

共同研究者 吉田 公秀, 堀尾 芳嗣, 清水 淳市
朴 将哲, 谷田部 恭, 関戸 好孝

腺がんの今後の治療上で重要なsituationと考えられる3症例（全身状態不良のため抗がん剤投与は不可でゲフィチニブをファーストラインから投与した2例と、化学療法後に再発しゲフィチニブ投与した1症例）について検討した。

症例1：63歳,女性。糖尿病にて近医通院中に肺陰影出現。胸水より腺がん認め、肺がん（T4N3M1）と診断。骨、脳、肺に広汎に転移認めPS4で従来の化学療法は施行不能であったが、胸水がん細胞のEGFR遺伝子変異検索でExon 19の遺伝子欠損認め、ゲフィチニブ投与。著効が得られ、腫瘍は縮小し全身状態PS1に改善した。

症例2：69歳,女性。多発骨転移、肝転移、胸水、癌性リンパ管症合併し、PS4と全身状態不良であり胸水より腺がん認め、肺がん（T4N3M1）と診断。EGFR遺伝子変異検索でExon 19の遺伝子欠損認め、ゲフィチニブ投与。著効が得られ全身状態PS1に改善した。

症例3：54歳,女性。左下肺野に腫瘤影指摘され全身精査の結果、多数の微小脳転移巣を伴った肺腺がん4期（T2N1M1）と診断された。腫瘍マーカーはCEA 11.9 ng/mlと上昇を認めた。本人の強い希望もあり左下葉切除・縦隔リンパ節廓清術施行し、術後にシスプラチン80 mg/m²・ドセタキセル60mg/m²を用いた化学療法4コース施行、その後全脳照射40Gy施行し、外来経過観察を行った。手術後4年経過し左鎖骨に骨融解像認められ、骨生検にて肺腺がんの転移と診断し同部位へ24Gyの放射線照射を施行した。手術後5年半経過しCEA値再上昇認められPET、CTにて腭頭部に腫瘍認められ、超音波内視鏡下生検にて肺腺がんの転移と診断。本人の強い希望と、全身検索にて他部位での再発は認められなかった事により腭頭十二指腸切除、child再建、結腸間膜合併切除、腭空腸吻合を施行した。手術標本を用いて、EGFR遺伝子変異の検索を施行した所、Exon19に遺伝子欠失を認め、その後外来にて経過観察施行したが手術後8年半経過時点でCEA 31.7と再上昇し、CTにて腹部の前回切除施行部位近辺に再発が認められた。EGFR遺伝子のExon19欠失の結果に基づいた個別化治療の適応によりEGFRチロシンキナーゼ阻害薬であるゲフィチニブを使用して治療開始した。ゲフィチニブ治療は著効し、腫瘍は消失、CEA 1.5と腫瘍マーカーの正常化が認められた。

分子マーカーやゲノムの情報を個々の治療に反映する個別化治療時代の到来が待たれているが、EGFR遺伝子変異の存在する集団においては個別化医療が現実のものになっている。EGFR遺伝子変異がゲフィチニブの効果を規定し、検討した3症例では従来の治療では困難と考えられたがゲフィチニブの使用により著効が得られた。症例の状態を考慮し、遺伝子情報に基づいた個別化医療を行う事が治療上最も必要と考えられた。

<研究課題2>

RT-PCR法による腹腔内洗浄細胞診からみた網嚢切除の有用性に関する検討

Distribution of free cancer cells in the abdominal cavity with genetic detection using RT-PCR and the value of bursectomy for gastric cancer patients.

<研究者氏名> 消化器外科部 伊藤 誠二

共同研究者 三澤 一成, 伊藤 友一, 中西 速男

横行結腸間膜前面や隣被膜を胃および周囲のリンパ節とともに合併切除する網嚢切除は、根治的胃癌手術の一部として長く慣習的に行われてきた。胃に隣接する網嚢を合併切除することにより、手術時に既に存在する微小転移病巣を除去し、治療率を上げることがその理論的根拠になっている。一方、網嚢はWinslow孔において遊離腹腔内と連続しており、また、胃の前壁中心に病変が存在する場合には直接遊離腹腔内に面していることから、その意義を疑問視する意見も多い。我々は、これまでに上皮マーカーであるCEAやCK20のRT-PCR法による検出を用いて、胃癌患者の腹腔内遊離癌細胞の検出を行い、その陽性所見が独立した予後因子であることを報告してきた。今回、この手法を用いて、網嚢内、左横隔膜下、ダグラス窩の部位別に腹腔内遊離癌細胞の検出を行い、網嚢切除の意義について検討した。

当院にて胃癌根治手術を行った136例について、網嚢内、左横隔膜下、ダグラス窩から腹腔洗浄液を採取し、RT-PCRを用いた検出を行った。これまでの検討から、CEAについてはcut offを0.1、CK20については、ごくわずかでも検出が得られたものを陽性とし、いずれか一方でも陽性となった検体を腹腔内遊離癌細胞陽性とした。

検討した135例中、43例において、網嚢内、左横隔膜下、ダグラス窩のいずれか1カ所以上で陽性所見が得られた。うち、6例では3カ所すべてで、10例では2カ所のみ、27例では1カ所のみ陽性所見であった。網嚢内の陽性所見が得られたのは14例で、このうち12例では網嚢内以外の2カ所でも同時に陽性所見が得られた。

今回の検討から、網嚢内のみ遊離癌細胞が検出された症例は136例中2例に過ぎず、局所療法である外科的網嚢切除の意義は低いと考えられた。今後は抗がん剤の腹腔内投与など、腹腔

内全体を標的とした遊離癌細胞に対する補助療法の開発が必要であると考えられる。

Results of lavage cytology by RT-PCR method								
	Results of lavage cytology							Number of positive cases (%)
	+	+	+	-	+	-	-	
Douglas pouch	+	+	+	-	+	-	-	34(79.1)
Left subphrenic cavity	+	+	-	+	-	+	-	17(39.5)
Bursa-omentalis cavity	+	-	+	+	-	-	+	14(32.6)
Number of cases	6	4	6	0	18	7	2	43(100)

<研究課題3>

消化器がんに対する超音波内視鏡下生検法の有用性の検討

The usefulness of EUS-FNA in the diagnosis of gastrointestinal cancer

<研究者氏名> 消化器内科部 山雄 健次

共同研究者 水野 伸匡、原 和生、澤木 明、
 脇岡 範、丹羽 康正、田近 正洋、
 河合 宏紀、谷田部 恭、細田 和貴、
 越川 卓

平成22年度の当院消化器内科・内視鏡部における超音波内視鏡検査（EUS）実施件数は921回、超音波内視鏡下生検（EUS-FNA）は299回でした。これは前年と比しほぼ同様の検査数であり、2008年以降のEUS-FNAの検査数は200回を超え、ここ2年は約300回を維持しており、全国トップの実施件数である。以下に22年度に掲載されたEUS-FNAに関する英語論文のみを要約し、最近の研究成果の紹介とする。

1. Prospective Clinical Study of EUS-Guided Choledochoduodenostomy for Malignant Lower Biliary Tract Obstruction. *Am J Gastroenterol.* 2011 Mar 29.
 悪性下部胆管閉塞18症例にEUSガイド下胆管十二指腸吻合術の前向きPahse I/II試験を実施し、手技的成功率は94%（17/18）、閉塞性黄疸改善率は100%（17/17）、早期合併症は17%、ステント開存期間は272日であった。
2. Therapeutic endoscopy for stenotic pancreatodigestive tract anastomosis after pancreatoduodenectomy (with videos). *GastrointestEndosc.* 2011;73:376-82.
 膵管消化管吻合術後の繰り返す膵炎や膵液漏の患者14名に対し、吻合口から膵管ステント挿入（5Fr.）は6例（38%）に成功、残りの8例はEUSガイド下ランデブー法にてステント挿入に成功した。
3. Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration for the diagnosis of retroperitoneal schwannoma. *Endoscopy.* 2010;42 Suppl 2
 4例の後腹膜神経鞘腫に対してEUS-FNAと免疫染色にて確定診断され手術が回避できた。
4. EUS-Guided Biliary Drainage. *Gut Liver.* 2010;4:S67-S75.
 EUSガイド下胆道ドレナージについて現在までに成績をReviewした。
5. Can EUS-guided FNA distinguish between gallbladder

cancer and xanthogranulomatous cholecystitis? *GastrointestEndosc.* 2010 Sep;72 (3) :622-7.

黄色肉芽腫性胆嚢炎あるいは胆嚢癌非手術例の15例に対してEUS-FNAを実施し、悪性の診断率は93.3%、最終診断との一致率は80%であった。

6. Diagnostic approach to pancreatic tumors with the specimens of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration. *Pathol Int.* 2010 May;60 (5) :558-64.
 膵腫瘍118検体（EUS-FNA57検体含む）に種々の免疫染色（chromogranin, synaptophysin, CK7, CDX2）とK-ras変異を検索したところ、FNA検体でも膵管癌、神経内分泌腫瘍、腺房細胞癌の鑑別診断が可能であった。
7. Endoscopic ultrasound-guided choledochoduodenostomy. *Dig Endosc.* 2010;22:147-50.
 EUSガイド下胆管十二指腸吻合術の実際の手技、ステント閉塞時の交換方法などを解説した。
8. Diagnostic utility of EUS-guided FNA in patients with gastric submucosal tumors. *GastrointestEndosc.* 2010 May;71 (6) :913-9.
 胃SMT連続141例に対してEUS-FNAを実施し、c-kit, CD34, actin, S-100による免疫染色も併用したところ、検体採取率は83%、最終診断の得られた69例での一致率は95.6%、良悪性の診断率は94.2%であった。
9. Corticosteroids correct aberrant CFTR localization in the duct and regenerate acinar cells in autoimmune pancreatitis. *Gastroenterology.* 2010;138:1988-96.
 自己免疫性膵炎のsteroid治療前後での膵外分泌機能検査とEUSガイド下trucut biopsyを実施し比較したところ、腺房細胞の再生、IgG4陽性形質細胞の消失、膵管上皮のCFTR局在の正常化が証明できた。

4. プロジェクト研究 (共同研究費)

<研究課題1>

加齢性EBV関連B細胞性リンパ増殖異常症の臨床病理学的及び分子生物学的解析

Clinicopathological and molecular analysis for Epstein-Barrvirus positive diffuse large B-cell lymphoma of the elderly

<研究者氏名> 血液・細胞療法部 山本 一仁

共同研究者 森島 泰雄, 加藤 春美

【背景・目的】

加齢性EBV関連リンパ増殖性疾患 (AR-EBV (+) DLB) はWHO分類で新たにリンパ腫亜分類として定義付けられたが、分子生物学的検討はこれまでに十分になされていない。今回われわれは、遺伝子発現レベルでの検討を行った。

【方法】

AR-EBV (+) DLBと診断された症例で凍結標本が利用可能な5例、比較としてEBV陰性びまん性大細胞リンパ腫 (EBV (-) DLB) 8例を対象とした。Agilent oligo microarray (44K) を用いて発現解析を実施した。

【結果】

各上位300遺伝子を用いたsupervised analysisでは、AR-EBV (+) DLBは単独clusterを形成し、上位遺伝子群にはIL6, TNF AIP3, HOPXやSLAMF1など炎症や免疫反応に関する遺伝子が含まれていた。Gene Ontology Analysisで抽出された主なカテゴリーは、AR-EBV (+) DLBではresponse to external stimulus, protein kinase cascade, inflammatory responseであり、EBV (-) DLBではcell cycle process, mitotic cell cycle, nuclear divisionであった。The Kyoto Encyclopedia of Genes and Genomes (KEGG) pathway mapsではAR-EBV (+) DLBで11カテゴリー (Significance Level<0.001) が含まれ、上位3位はNOD-like receptor signaling pathway (P=1.30e-06), JAK-STAT signaling pathway (P=9.01e-06) とToll-like receptor signaling pathway (P=0.0002) であった。これら上位3位についてGene Set Enrichment Analysisによる検証を行ったところ、NOD-like receptor signaling pathway (Nominal p=0.000) とJAK-STAT signaling pathway (Nominal p=0.000) では、Normalized Enrichment Scoreが2.25と1.79であり、全38330遺伝子の中でもこれら2遺伝子セットは濃縮されていた。

【考察・結語】

AR-EBV (+) DLBの症例ではEBV (-) DLBと比較してNOD-like receptor/JAK-STAT signaling pathwayの活性が亢進していた。免疫機構の変化や炎症反応の亢進がAR-EBV (+) DLBの疾患発症や臨床像を特徴づけている可能性が考えられた。

<研究課題2>

悪性中皮腫移植マウスモデルでのTGF- β 阻害剤による腫瘍増殖抑制効果

Effect of TGF- β inhibitor on Malignant Mesothelioma tumor growth in mouse model

<研究者氏名> 分子腫瘍学部 藤井 万紀子

共同研究者 樋田 豊明, 谷田部 恭, 中西 速夫,
近藤 英作, 関戸 好孝, 松平 康枝,
村上 秀樹, 近藤 豊, 長田 啓隆

悪性中皮腫は胸膜や腹膜を原発とする予後不良な悪性疾患である。アスベスト曝露が重要な外的要因と考えられているが、根治的治療は確立していない。職業性曝露以外にもアスベストを扱う工場の周辺住民にも悪性中皮腫が発生しており、また先の東日本大震災のがれき撤去の際にも、吸入に対する注意喚起がなされている。

TGF- β は正常中皮由来細胞株足場非依存的コロニー形成を促進し、線維芽細胞様反応を引き起こすことがわかった。また悪性中皮腫患者由来の組織においてリン酸化Smad2の核内染色が認められることから、悪性中皮腫細胞の増殖にはTGF- β シグナルが関与していることが示唆された。悪性中皮腫細胞株を胸腔内に移植したマウスに、TGF- β I型受容体阻害剤を経口投与したところ、有意にマウスの生存期間を延ばすことができた。

そこでTGF- β による悪性中皮腫細胞の増殖促進にはどのようなメカニズムが関与しているかを調べた。癌抑制遺伝子であるneuroblastoma type2 (NF2)はMerlinといたんぱく質をコードする。悪性中皮腫ではMerlinの下流にあるHippo pathwayの構成たんぱく質であるSalvador1やLATS2を含めると、このシグナル系での欠失、変異は75%で見つかっている。正常の細胞ではMerlinによって下流のSalvador1とLATSがリン酸化され、更にoncogeneであるYAPをリン酸化することによって核外に移行させるが、これらのシグナル経路が欠失すると、YAPが核内に常時留まることになる。つまり、悪性中皮腫ではYAPが核内でTEADを介してDNAに結合し、増殖促進に関わる遺伝子の転写を促進することになる。

この特徴を踏まえ、悪性中皮腫増殖促進作用について調べた。NF2に欠失の見つかった悪性中皮腫細胞株NCI-H290細胞を使用してYAPをshRNAを用いてノックダウンし、更にTGF- β 処理を行った。転写される遺伝子群をマイクロアレイで検索した結果、YAPとTGF- β 双方によって転写制御される遺伝子が endothelin-1 とCTGFのたった二つの遺伝子であることがわかった。このCTGFのプロモーター領域を調べた結果、TGF- β のシグナル伝達因子Smad2/3のDNA結合サイトと、TEAD結合サイトが隣合わせにあるということがわかった。

そこで悪性中皮腫細胞株の増殖に対するCTGFの役割を調べ

た。レンチウイルスベクターを用いて内在性のCTGFをノックダウンしたところ、細胞数は低下し、足場非依存的細胞増殖で、コロニーの大きさ、数ともに低下を認めた。更に、マウスに移植した悪性中皮腫細胞の組織を調べたところ、CTGFを強く発現しているものでは細胞周囲を膠原線維が大量に取り囲んでいることがわかった。

第 2 部 研究発表関係

1. 学会等における研究発表テーマ調べ (総長)

総長

- 001 *Nimura Y*: Japanese and personal contributions to the IHPBA. The 9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association (IHPBA), 2010, (Buenos Aires, Argentina), [Presidential address]
- 002 *Nimura Y*: Hilar cholangiocarcinoma : to drain or not to drain. The 9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association (IHPBA), 2010, (Buenos Aires, Argentina), [Breakfast with the professor]
- 003 *Nimura Y*: Aggressive surgical resection of hilar cholangiocarcinoma. The 2010 Congress of Chinese and Singaporean Chapters of the IHPBA, 2010, (Wuhan, China), [Lecture]
- 004 *Nimura Y*: Extended central bisegmentectomy with total caudate lobectomy for carcinoma of the hepatic bifurcation. Hilar Cholangiocarcinoma Update 2010 : Korea-Japan Single Topic Symposium, 2010, (Seoul, Korea), [Video]
- 005 *Nimura Y*: The current status of the treatment of Klatskin tumor in Japan, 2010 Chinese International Forum on Hepatobiliary Surgery (CIFHBS), 2010, (Shanghai, China), [Lecture]
- 006 二村雄次: 私の体験 ー今, 昔. 日本医学歯学情報機構講演会「質の高い医療を実現するためにー診療関連死の調査のあり方を考えるー」, 2010, (名古屋), [教育セミナー]
- 007 二村雄次: がん治療の実情について. 名古屋地方裁判所「平成22年度専門訴訟事件等のための研究」, 2011, (名古屋), [教育セミナー]

2. 学会等における研究発表テーマ調べ (病院)

病院長

- 001 *M.Shinoda, N.Ando, H.Kato, Y.Tsubosa, K.Minashi, G.Watanabe, K.Ikeda, T.Kawano, K.Nakamura, H.Fukuda*: A multicenter randomized phase II (rPII)/III study comparing concurrent chemoradiotherapy (CRT) with low-dose cisplatin plus continuous infusion of 5-fluorouracil (LDPF) and standard-dose PF (SDPF) for locally advanced unresectable squamous cell carcinoma of the thoracic esophagus (JCOG0303). ASCO, 2010, (Chicago, USA), [Poster].
- 002 篠田雅幸, 渡辺幸子: 病院の枠を越えたDPCデータの活用-パート2 がん医療の質向上をめざすCQI研究会の試み-日本医療マネジメント学会, 2010, (札幌), [講演].
- 003 篠田雅幸, 安藤暢敏, 石倉聡, 福田治彦: 食道がんを対象とした多施設共同研究の課題-JCOG0303を通して-第64回日本食道学会学術集会, 2010, (久留米), [シンポジウム].
- 004 篠田雅幸: 食道がんの周術期呼吸管理. 第63回日本胸部外科学会定期学術集会, 2010, (大阪), [Postgraduate Course (研修コース) 三分野共通の術後呼吸管理].
- 005 篠田雅幸: ここまで進んだがん治療. 愛知県職員OB講演会, 2010, (名古屋)
- 006 *Mizuno N, Hara K, Sawaki A, Hijioka S, Imamura H, Bhatia V, Yamao K*: Clinicopathological features of seronegative autoimmune pancreatitis in Japanese patients. The Joint Meeting of the International Association of Pancreatology and the Japan Pancreas Society 2010. 2010, (福岡), [口演]
- 007 *Hijioka S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Kondo S, Kawai H, Tajika M, Shimizu Y, Niwa Y, Yamao K*: Value of EUS and EUS-FNA for the metastatic pancreas cancers. The Joint Meeting of the International Association of Pancreatology and the Japan Pancreas Society 2010. 2010, (福岡), [口演]
- 008 *Hijioka S, Sawaki A, Hara K, Saeki A, Haba S, Ogura T, Tomono T, Shimizu S, Yamao K*: Utility of EUS-FNA for diagnosing metastatic pancreatic cancer. Asia Pacific Digestive Week 2010. 2010, (Kuala Lumpur), [ポスター]
- 009 *Sawaki A*: Clinicopathological features of advanced gastric cancer with human epidermal growth factor receptor 2. Asia Pacific Digestive Week 2010. 2010, (Kuala Lumpur), [ポスター]
- 010 *Sawaki A, Mizuno N, Hijioka S, Hara K, Kondo S, Kawai H, Tajika M, Niwa Y, Yamao K*: 10-year follow-up of gastric submucosal tumors. The 35th European Society Medical Oncology Congress, 2010, (Milan), [ポスター]

消化器内科部

- 001 *Hara K*: Ampullary adenoma Endoscopic treatment. 9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association, 2010, (Buenos Aires), [シンポジウム]
- 002 *Sawaki A, Yamao K, Hara K, Hijioka S, Mizuno N, Imamura H, Senda Y, Sano T, Shimizu Y, Nimura Y*: Surgical versus non-surgical Approach for the management of pancreatic cancer with venous or plexus invasion. 9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association, 2010, (Buenos Aires), [口演]
- 003 *Hijioka S, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Imamura H, Senda Y, Sano T, Shimizu Y, Nimura Y*: Diagnostic utility of EUS-guided FNA for diagnosis of gallbladder mass lesions. 9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association, 2010, (Buenos Aires), [ポスター]
- 004 *Hijioka S, Mekky M M, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Imamura H, Shimizu Y, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Yamao K*: Diagnosis utility of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration for diagnosis of gallbladder mass lesions. 2010 Digestive Disease Week, 2010, (New Orleans), [ポスター]
- 005 *Hara K, Yamao K, Niwa Y*: EUS-guided biliary drainage (EUS-BD) for patients with malignant biliary obstruction. The 79th Annual Meeting of the Japan Gastroenterological Endoscopy Society, 2010, (Tokyo), [シンポジウム]
- 011 *Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Yamao K*: EMR and ESD for gastric cancer. 20th World Congress of the International Association of Surgeons, Gastroenterologists, and Oncologists (IASGO), 2010, (Cairo, Egypt), [口演]
- 012 *Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Banno K, Miyahara R, Goto H, Yamao K*: Esophageal ESD: indications and complications. 20th World Congress of the International Association of Surgeons, Gastroenterologists, and Oncologists (IASGO), 2010, (Cairo, Egypt), [口演]
- 013 *Hara K, Yamao K, Mizuno N, Hijioka S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Saeki A, Akabane A, Haba S, Ogura T, Shimizu S, Tomono T, Niwa Y*: EUS-guided choledochoduodenostomy (EUS-CDS) for patients with malignant biliary obstruction. 18th United European Gastroenterology Week (UEGW), 2010, (Barcelona), [口演]
- 014 *Kondo S, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Saeki A, Akabane A, Ogura T, Haba S, Ando T, Goto H, Yamao K*: Investigation on the prediction of the procedural time of endoscopic submucosal dissection (ESD) for gastric epithelial neoplasms. 18th United European Gastroenterology Week (UEGW), 2010, (Barcelona), [ポスター]
- 015 *Tajika M, Niwa Y, Bhatia V, Kawai H, Kondo S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Saeki A, Akabane A, Ogura T, Haba S, Yatabe Y, Yamao K*: Efficacy of endoscopic submucosal dissection for colorectal tumors. 18th United European Gastroenterology Week (UEGW), 2010, (Barcelona), [ポスター]

- ター]
- 016 **Hijioka S**:EUS-FNA with adjuvant of immunohistochemical stain for the diagnosis of Schwannoma. American College of Gastroenterology,2010. (San Diego),[ポスター]
- 017 **Hijioka S**:Endoscopy workshop. Assuit Digestive Disease Week 2010.2010.(Assuit,Egypt),[ワークショップ]
- 018 **Hijioka S**:Interventional EUS:Update. Assuit Digestive Disease Week 2010.2010.(Assuit,Egypt),[講演]
- 019 **Haba S,Hijioka S,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Saeki A, Ogura T, Tomono T, Shimizu S, Senda Y, Sano T, Shimizu Y, Niwa Y, Yamao K**:Usefulness of EUS and EUS-FNAB for the metastatic pancreas cancers. 17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography(EUS 2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 020 **Tomono T,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Hijioka S,Niwa Y, Tajika M,Kondo S,Kawai H,Bhatia V,Yamao K**:Diagnostic yield of EUS-FNA for gastroduodenal submucosal tumors (SMTs). 17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography(EUS 2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 021 **Ogura T,Yamao K,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Hijioka S,Niwa Y,Tajika M,Kawai H,Kondo S,Haba S,Hosoda W,Yatabe Y,Bhatia V**:Clinical impact of KRAS gene mutation analysis in EUS-FNA specimens from pancreatic mass lesions. 17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography (EUS2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 022 **Hara K,Yamao K,Mizuno N,Hijioka S,Sawaki A,Tajika M, Kawai H,Kondo S,Saeki A,Akabane A,Haba S, Ogura T, Shimizu S, Tomono T, Niwa Y**:EUS-guided choledochoduodenostomy(EUS-CDS) for patients with malignant lower biliary obstruction.17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography(EUS 2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 023 **Shimizu S,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Hijioka S,Niwa Y, Tajika M,Kawai H,Kondo S,Yamao K**:Usefulness of EUS in the differential diagnosis of malignant versus benign of pancreatic endocrine tumors.17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography(EUS 2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 024 **Yamao K**:Biliary drainage.17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography(EUS 2010),2010. (Shanghai),[講演]
- 025 **近藤真也,小林佑次,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,澤木明,水野伸匡,原和生,脇岡 範,今村秀道,松本和也,佐伯哲,赤羽麻奈,鈴木晴久,山雄健次**:胃痛における血清マーカーREG4の有用性. 第96回日本消化器病学会総会,2010.(新潟),[口演]
- 026 **脇岡 範,水野伸匡,山雄健次**:自己免疫性膵炎 (AIP)と膵癌(PC)の早期鑑別を目的としたFDG-PETの有用性. 第96回日本消化器病学会総会,2010.(新潟),[口演]
- 027 **田近正洋,丹羽安正,河合宏紀,近藤真也,澤木 明,水野伸匡,原和生,今村秀道,脇岡 範,小林佑次,松本和也,佐伯哲,赤羽麻奈,鈴木晴久,山雄健次**:家族性大腸腺腫症における上部消化管病変の検討.第96回日本消化器病学会総会,2010.(新潟),[口演]
- 028 **水野伸匡,脇岡 範,佐伯 哲**:血清マーカー陰性AIPの臨床病理学的特徴.第96回日本消化器病学会総会,2010.(新潟),[ワークショップ]
- 029 **脇岡 範,澤木 明,丹羽康正**:EUS-FNAによる5cm未満のGISTを含む上部粘膜下腫瘍(SMT)に対する診断能の検討.第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京),[シンポジウム]
- 030 **羽場 真**:O-332 胆道病変に対するEUS-FNA. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京),[口演]
- 031 **山雄健次**:胆膵内視鏡治療と医療被ばくについて. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京),[ランチョンセミナー司会]
- 032 **山雄健次**:EUS-FNA 次世代への継承～エキスパートから学ぶ技とコツ～. JGES 2010 オリンパスブースイベント,2010.(東京),[ブースレクチャー司会]
- 033 **原和生**:EUS-BDが有用であった1例. COOK Lunch meeting,2010.(東京),[口演]
- 034 **原和生,山雄健次**:第6回超音波内視鏡下生検法の診断精度向上のための研究会 EUS-FNAのコンセンサス 膵充実性腫瘍. 第79回日本消化器内視鏡学会総会 附置研究会,2010.(東京),[基調講演]
- 035 **田近正洋,近藤真也,丹羽康正,河合宏紀,澤木 明,水野伸匡,原和生,脇岡 範,今村秀道,小林佑次,松本和也,佐伯哲,赤羽麻奈,鈴木晴久,山雄健次**:大腸ESDに対するボールチップ型B-knifeの有用性に関する検討. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京),[口演]
- 036 **山雄健次**:明日から役立つ初～中級者のためのEUS講座 基礎から最新治療まで.第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京),[ランチョンセミナー司会]
- 037 **山雄健次**:胆膵interventional EUS.第34回日本消化器内視鏡学会セミナー,2010.(東京),[司会]
- 038 **脇岡 範,澤木 明,水野伸匡,原和生,河合宏紀,田近正洋,丹羽康正,山雄健次**:転移性膵癌のEUS像およびEUS-FNABの検討. 第83回日本超音波学会総会,2010.(京都),[口演]
- 039 **脇岡 範,原和生,山雄健次**:超音波内視鏡ガイド下胆道ドレナージの現況と今後の展開.第83回日本超音波学会総会,2010.(京都),[ワークショップ]
- 040 **山雄健次**:膵胆道疾患における超音波内視鏡の有用性 - 内視鏡的膵生検(EUS-FNA)を中心に -. 第2回呉西肝胆膵フォーラム,2010.(高岡),[特別講演]
- 041 **小倉 健,山雄健次,原和生,澤木 明,水野伸匡,脇岡 範,近藤真也,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,赤羽麻奈,佐伯哲,羽場 真,清水泰博,細田和貴,谷田部 恭**:術前に膵GISTが疑われた転移性膵平滑筋肉腫の一例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島),[口演]
- 042 **小倉 健,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,近藤真也,原和生,澤木 明,水野伸匡,脇岡 範,赤羽麻奈,佐伯哲,羽場 真,山雄健次**:食道ESD後に肺塞栓症を来した一例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島),[口演]

- 043 佐伯 哲,山雄健次,丹羽康正,澤木 明,田近正洋,水野伸匡,原 和生,河合宏紀,脇岡 範,近藤真也,赤羽麻奈,羽場 真,小倉 健,佐野 力,清水泰博:胆管内乳頭状腫瘍の一例.第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島),[口演]
- 044 羽場 真,山雄健次,原 和生,澤木 明,水野伸匡,脇岡 範,近藤真也,赤羽麻奈,佐伯 哲,小倉 健,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,谷田部 恭:経過中に特異な膵管像の変化を呈した膵管狭細型膵炎の1例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島),[口演]
- 045 山雄健次:IPMN/MCNの診断と手術適応をめぐる. 第95回日本消化器内視鏡学会北陸地方会,2010.(福井),[特別講演]
- 046 山雄健次:6年生存した局所進行膵癌の一部検例. 7th Medical Oncology Network in Pancreato-biliary cancer,2010.(東京),[口演]
- 047 澤木 明:Session1 ASCO2010レポート. 7th Medical Oncology Network in Pancreato-biliary cancer,2010.(東京),[口演]
- 048 原 和生:EUS Radial VS Convex.EFJ 2010.2010.(小樽),[口演]
- 049 山雄健次:Interventional EUS-消化器疾患における超音波内視鏡を用いた組織採取法と治療への応用. 第68回東海総合画像医学研究会,2010.(名古屋),[特別講演]
- 050 河合宏紀,丹羽康正,田近正洋,近藤真也,澤木 明,赤羽麻奈,佐伯哲,小倉 健,羽場 真,山雄健次:食道狭窄に対して症状緩和のために内視鏡的切除術を施行した食道悪性黒色腫の1例.第64回日本食道学会学術大会,2010.(福岡),[ポスター]
- 051 羽場 真,原 和生,水野伸匡,澤木 明,脇岡 範,佐伯 哲,小倉 健,清水泰博,細田和貴,谷田部 恭,山雄健次:術前診断が困難であった膵腫瘍の1例. 第53回消化器画像診断研究会,2010.(北九州),[口演]
- 052 山雄健次:Interventional EUSの現状. 第5回Osaka Gut Forum,2010.(大阪),[特別講演]
- 053 山雄健次:胆膵interventional EUS. 第28回重点卒後教育セミナー,2010.(東京),[司会]
- 054 原 和生:切除不能悪性胆管狭窄に対する超音波内視鏡下胆管十二指腸吻合術(EUS-guided choledochoduodenostomy:EUS-CDS)のコツ. 第46回日本胆道学会学術集会,2010.(広島),[ワークショップ]
- 055 脇岡 範:胆嚢癌に対する病理学的エビデンスの効率的な取得方法の検討. 第46回日本胆道学会学術集会,2010.(広島),[口演]
- 056 山雄健次:胆道がん化学療法の新展開～ネオアジュバント・アジュバント・放射線治療を含む様々な試み～. 第46回日本胆道学会学術集会,2010.(広島),[司会]
- 057 原 和生:EUS-CDSのコツ,安全性を目指して. 第46回日本胆道学会学術集会,2010.(広島),[ワークショップ]
- 058 原 和生:WallFlex Biliary Stentを上手に使うコツ. 第46回日本胆道学会学術集会,2010.(広島),[講演]
- 059 原 和生:膵頭部腫瘍に対するEUS-FNA. FNA-Club,2010.(広島),[講演]
- 060 羽場 真,原 和生,清水 泰博:当院における切除不能/再発胆道癌に対する化学療法の成績. 第46回日本胆道学会学術集会,2010.(広島),[ワークショップ]
- 061 脇岡 範,澤木 明,水野伸匡,原 和生,小倉 健,羽場 真,清水泰博,丹羽康正,山雄健次:胆嚢癌に対する病理学的エビデンスの効率的な取得方法の検討. 第46回日本胆道学会学術集会,2010.(広島),[口演]
- 062 脇岡 範,澤木 明,水野伸匡,原和生,小倉 健,羽場 真,清水泰博,丹羽康正,山雄健次:コンベックス型EUSによる上部/肝門部胆管癌の進展度診断～垂直報告,リンパ節転移～. 第46回日本胆道学会学術集会,2010.(広島),[口演]
- 063 羽場 真,原 和生,水野伸匡,澤木 明,脇岡範,佐伯 哲,小倉 健,友野輝子,清水 怜,清水泰博,谷田部 恭,山雄健次:石灰化を伴った主膵管型IPMNの1例. 第67回東海胆道研究会,2010.(名古屋),[口演]
- 064 水野伸匡,洪 繁,山雄健次:自己免疫性膵炎患者におけるステロイド治療による膵外分泌機能の長期予後.第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜),[パネルディスカッション]
- 065 洪 繁,水野伸匡,後藤秀実:成人膵における膵幹/前駆細胞の局在と自己免疫性膵炎の膵組織回復における幹/前駆細胞の関与.第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜),[ワークショップ]
- 066 原 和生:膵-症例1. 第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜),[司会]
- 067 水野伸匡:膵-症例1. 第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜),[司会]
- 068 水野伸匡,脇岡 範,山雄健次:FDG-PETによる自己免疫性膵炎と膵癌の早期鑑別法.第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜),[ワークショップ]
- 069 洪 繁,水野伸匡,後藤秀実:ステロイド治療による自己免疫性膵炎の機能回復における膵幹/前駆細胞の関与. 第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜),[パネルディスカッション]
- 070 原 和生:EUS-CDSのコツ. 第80回日本消化器内視鏡学会総会(JDDW),2010.(横浜),[ワークショップ]
- 071 佐伯 哲,原 和生,山雄健次:悪性下部胆管狭窄に対するEUS-CDSにおけるcovered EMSの有用性の検討. 第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜),[ポスター]
- 072 原 和生:愛知県がんセンターにおけるEUS-FNAの現状.多地点病理カンファレンス,2010.(愛知県がんセンター),[口演]
- 073 羽場 真,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,近藤真也:多発胃癌の1例.第506回東海胃腸疾患研究会,2010.(名古屋),[口演]
- 074 山雄健次:IPMNの国際診療ガイドラインと最新の話題. 第37回山陰消化器病セミナー,2010.(米子),[特別講演]
- 075 山雄健次:EUS-guided approach in diagnosis and treatment of the biliary disorders.愛知県がんセンター教育セミナー,2010.(名古屋),[セミナー司会]
- 076 山雄健次:Novel endoscopic approach in upper GI tract disorders-Radiofrequency ablation, Cryoablation, and stenting.愛知県がんセンター教育セミナー,2010.(名古屋),[セミナー司会]
- 077 近藤真也,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,佐野 力,谷田部 恭,山雄健次:肝転移で発症した多発小腸カルチノイド腫瘍

- の1例. 第48回小腸研究会,2010.(名古屋),[口演]
- 078 原 和生: Interventional EUS. 膵・胆道癌治療の最前線,2010.(東京),[講演]
- 079 羽場 真, 丹羽康正, 田近正洋: 頭頸部悪性腫瘍を合併した食道表在癌の特徴. 第113回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(名古屋),[シンポジウム]
- 080 山雄健次: セッション2 診断. 第6回NET Work Japan,2011.(東京),[司会]
- 081 山雄健次: Interventional EUSの現状と将来展望. 第20回日本消化器内視鏡学会中国支部セミナー,2011.(松江),[講演]
- 082 水野伸匡: 癌治療の現状と将来 - 膵がんについてもっと知ろう -. 第7回県民講座,2011.(名古屋),[口演]
- 083 羽場 真, 原 和生, 水野 伸匡, 脇岡 範, 佐伯 哲, 小倉 健, 細田 和貴, 谷田部 恭, 佐野 力, 清水 泰博, 山雄 健次: 胆管内乳頭状腫瘍(IPNB)の一例. 第54回日本消化器画像診断研究会,2011.(東京),[口演]
- 084 松井 聡, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 二村雄次, 脇岡 範, 原 和生, 水野伸匡, 山雄健次, 細田和貴: 男性膵頭部SPNの1例. 第68回 東海胆道研究会,2011.(名古屋),[口演]
- 085 羽場真, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯 哲, 小倉 健, 清水泰博, 山雄健次: FDG-PETによる自己免疫性膵炎と膵癌の鑑別. 第42回肝胆膵治療研究会,2011.(名古屋),[シンポジウム]
- and Oncologists (IASGO),2010.(Cairo,Egypt),[口演]
- 007 Niwa Y,Tajika M,Kawai H,Banno K,Miyahara R,Goto H,Yamao K: *Esophageal ESD: indications and complications.* 20th World Congress of the International Association of Surgeons,Gastroenterologists,and Oncologists (IASGO),2010.(Cairo,Egypt),[口演]
- 008 Hara K,Yamao K,Mizuno N,Hijioka S,Sawaki A,Tajika M,Kawai H,Kondo S,Saeki A,Akabane A,Haba S,Ogura T,Shimizu S, Tomono T,Niwa Y:EUS-guided choledochoduodenostomy (EUS-CDS) for patients with malignant biliary obstruction. 18th United European Gastroenterology Week (UEGW),2010.(Barcelona),[口演]
- 009 Kondo S,Niwa Y,Tajika M,Kawai H,Sawaki A,Mizuno N, Hara K,Hijioka S,Saeki A,Akabane A,Ogura T,Haba S,Ando T, Goto H,Yamao K:Investigation on the prediction of the procedural time of endoscopic submucosal dissection (ESD) for gastric epithelial neoplasms. 18th United European Gastroenterology Week (UEGW),2010. (Barcelona),[ポスター]
- 010 Tajika M,Niwa Y,Bhatia V,Kawai H,Kondo S,Sawaki A,Mizuno N, Hara K,Hijioka S,Saeki A,Akabane A,Ogura T, Haba S, Yatabe Y,Yamao K:Efficacy of endoscopic submucosal dissection for colorectal tumors.18th United European Gastroenterology Week (UEGW),2010.(Barcelona),[ポスター]
- 011 Haba S,Hijioka S,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Saeki A, Ogura T, Tomono T, Shimizu S, Senda Y, Sano T, Shimizu Y, Niwa Y, Yamao K: Usefulness of EUS and EUS-FNAB for the metastatic pancreas cancers. 17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography (EUS 2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 012 Tomono T,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Hijioka S,Niwa Y,Tajika M, Kondo S,Kawai H,Bhatia V,Yamao K: Diagnostic yield of EUS-FNA for gastroduodenal submucosal tumors (SMTs). 17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography (EUS 2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 013 Ogura T,Yamao K,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Hijioka S,Niwa Y, Tajika M,Kawai H,Kondo S,Haba S,Hosoda W,Yatabe Y, Bhatia V: Clinical impact of KRAS gene mutation analysis in EUS-FNA specimens from pancreatic mass lesions. 17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography (EUS 2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 014 Hara K,Yamao K,Mizuno N,Hijioka S,Sawaki A,Tajika M, Kawai H,Kondo S,Saeki A,Akabane A,Haba S,Ogura T, Shimizu S, Tomono T, Niwa Y: EUS-guided choledochoduodenostomy (EUS-CDS) for patients with malignant lower biliary obstruction. 17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography (EUS 2010),2010.(Shanghai),[ポスター]
- 015 Shimizu S,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Hijioka S,Niwa Y, Tajika M,Kawai H,Kondo S,Yamao K: Usefulness of EUS in the differential diagnosis of malignant versus benign
- 内視鏡部
- 001 Hijioka S,Mekky M M,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Imamura H, Shimizu Y,Niwa Y,Tajika M,Kawai H,Yamao K: Diagnosis utility of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration for diagnosis of gallbladder mass lesions. 2010 Digestive Disease Week,2010.(New Orleans),[ポスター]
- 002 Hara K,Yamao K,Niwa Y: EUS-guided biliary drainage (EUS-BD) for patients with malignant biliary obstruction. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京),[シンポジウム]
- 003 Hijioka S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Kondo S, Kawai H, Tajika M, Shimizu Y, Niwa Y, Yamao K: Value of EUS and EUS-FNA for the metastatic pancreas cancers. The Joint Meeting of the International Association of Pancreatology and the Japan Pancreas Society 2010,2010.(福岡),[口演]
- 004 Hijioka S,Sawaki A,Mizuno N,Hara K,Kondo S,Kawai H, Tajika M,Shimizu Y,Niwa Y,Yamao K: Utility of EUS-FNA for diagnosing metastatic pancreatic cancer. APDW2010,2010. (Kuala Lumpur),[ポスター]
- 005 Sawaki A,Mizuno N,Hijioka S,Hara K,Kondo S,Kawai H, Tajika M,Niwa Y,Yamao K: 10-year follow-up of gastric submucosal tumors. The 35th European Society Medical Oncology Congress,2010.(Milan),[ポスター]
- 006 Niwa Y,Tajika M,Kawai H,Kondo S,Yamao K: EMR and ESD for gastric cancer. 20th World Congress of the International Association of Surgeons,Gastroenterologists,

- of pancreatic endocrine tumors. 17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography(EUS 2010),2010.(Shanghai)[ポスター]
- 016 近藤真也, 小林佑次, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 脇岡 範, 今村秀道, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山雄健次:胃癌における血清マーカーREG4の有用性. 第96回日本消化器病学会総会,2010.(新潟)[口演]
- 017 田近正洋:胃悪性- I. 第96回日本消化器病学会総会,2010.(新潟)[座長]
- 018 田近正洋, 丹羽康正, 河合宏紀, 近藤真也, 澤木 明, 水野伸匡, 原和生, 今村秀道, 脇岡 範, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山雄健次:家族性大腸腺腫症における上部消化管病変の検討. 第96回日本消化器病学会総会,2010.(新潟)[口演]
- 019 田近正洋:ポスター 胃悪性- I. 第96回日本消化器病学会総会,2010.(新潟)[座長]
- 020 丹羽康正, 宮原良二, 後藤秀実:質問領域に着目した共焦点内視鏡を用いた消化管粘膜像の解析. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京)[シンポジウム]
- 021 脇岡 範,澤木 明,丹羽康正:EUS-FNAによる5cm未満のGISTを含む上部粘膜下腫瘍(SMT)に対する診断能の検討. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京)[シンポジウム]
- 022 河合宏紀,丹羽康正,田近正洋:75歳以上の高齢者における食道がん内視鏡治療の検討. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京)[パネルディスカッション]
- 023 近藤真也,田近正洋,丹羽康正:VS2「上部消化管ESDの手法と工夫」胃ESDにおける治療予定時間設定の試みに関する検討. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京)[シンポジウム]
- 024 田近正洋,近藤真也,丹羽康正,河合宏紀,澤木 明,水野伸匡,原和生,脇岡 範,今村秀道,小林佑次,松本和也,佐伯 哲,赤羽麻奈,鈴木晴久,山雄健次:大腸ESDに対するポールチップ型B-knifeの有用性に関する検討. 第79回日本消化器内視鏡学会総会,2010.(東京)[口演]
- 025 脇岡 範,澤木 明,水野伸匡,原和生,河合宏紀,田近正洋,丹羽康正,山雄健次:転移性膵癌のEUS像およびEUS-FNABの検討. 第83回日本超音波学会総会,2010.(京都)[口演]
- 026 丹羽康正:NSAIDsによる消化管障害. NSAIDs潰瘍を考える会(岐阜),2010.(岐阜)[講演]
- 027 小倉 健,山雄健次,原和生,澤木 明,水野伸匡,脇岡 範,近藤真也,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,赤羽麻奈,佐伯 哲,羽場 真,清水泰博,細田和貴,谷田部 恭:術前に膵GISTが疑われた転移性膵平滑筋肉腫の一例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島)[口演]
- 028 小倉 健,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,近藤真也,原和生,澤木 明,水野伸匡,脇岡 範,赤羽麻奈,佐伯 哲,羽場 真,山雄健次:食道ESD後に肺塞栓症を来した一例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島)[口演]
- 029 田近正洋,近藤真也,丹羽康正:大腸腫瘍に対するESDの有用性の検討. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島)[ワークショップ]
- 030 佐伯 哲,山雄健次,丹羽康正,澤木 明,田近正洋,水野伸匡,原和生,河合宏紀,脇岡 範,近藤真也,赤羽麻奈,羽場 真,小倉 健,佐野 力,清水泰博:胆管内乳頭状腫瘍の一例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島)[口演]
- 031 羽場 真,山雄健次,原和生,澤木 明,水野伸匡,脇岡 範,近藤真也,赤羽麻奈,佐伯 哲,小倉 健,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,谷田部 恭:経過中に特異な膵管像の変化を呈した膵管狭細型膵炎の1例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島)[口演]
- 032 田近正洋:口演 大腸4. 日本消化器学会東海支部第112回例会,2010.(三島)[座長]
- 033 田近正洋:症例レポートの書き方と病態把握. 日本病態栄養学会 平成22年度教育セミナー 東海・北陸地区,2010.(岐阜)[講演]
- 034 丹羽康正:胃ESDの最前線 - 診断・手技・コメディカルの役割 -. 第10回日本消化器内視鏡学会東海支部ガイドライン研修会,2010.(名古屋)[ランチョンセミナー司会]
- 035 丹羽康正:胃X線撮影と内視鏡検査 - 病変の部位・形態と表現のポイント -. 平成22年度消化管撮影技術向上セミナー,2010.(名古屋)[講演]
- 036 河合宏紀,丹羽康正,田近正洋,近藤真也,澤木 明,赤羽麻奈,佐伯哲,小倉 健,羽場 真,山雄健次:食道狭窄に対して症状緩和のために内視鏡的切除術を施行した食道悪性黒色腫の1例. 第64回日本食道学会学術大会,2010.(福岡)[ポスター]
- 037 田近正洋:解剖・病理からみた消化器内視鏡検査の診断と治療. 日本消化器内視鏡技師会医学講座,2010.(名古屋)[講演]
- 038 丹羽康正:セッション3 胃I 腺腫・分化型腺癌の鑑別が必要な胃褪色調陥凹生病変のNBI所見の検討 他3題. 第7回拡大内視鏡研究会,2010.(東京)[司会]
- 039 田近正洋,河合宏紀,丹羽康正:大腸内視鏡検査の前処置におけるクエン酸モサブリドの有用性の検討. 第80回日本消化器内視鏡学会総会(JDDW),2010.(横浜)[パネルディスカッション]
- 040 丹羽康正,澤木 明,谷田部 恭:HER2(human epidermal growth factor receptor 2)陽性胃癌の内視鏡診断. 第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜)[ポスター]
- 041 近藤真也,田近正洋,丹羽康正:食道癌における化学放射線治療後の遺残,再発病変に対する内視鏡治療の有用性について. 第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜)[パネルディスカッション]
- 042 河合宏紀,丹羽康正,田近正洋:Barrett食道癌に対する内視鏡的切除適応の検討. 第52回日本消化器病学会大会(JDDW),2010.(横浜)[ワークショップ]
- 043 羽場 真,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,近藤真也:多発胃癌の1例. 第506回東海胃腸疾患研究会,2010.(名古屋)[口演]
- 044 近藤真也,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,佐野 力,谷田部恭,山雄健次:肝転移で発症した多発小腸カルチノイド腫瘍の1例. 第48回小腸研究会,2010.(名古屋)[口演]
- 045 丹羽康正:小腸疾患の診断と治療の進歩. 日本内科学会信越支部第43回生涯教育講演会,2010.(松本)[講演]

- 046 丹羽康正:共焦点内視鏡を用いた消化管粘膜像の解析-構造異型と間質領域の変化を中心に-.第1回新都市内視鏡病態機能研究会,2010.(東京),[講演]
- 047 羽場 真,丹羽康正,田近正洋:頭頸部悪性腫瘍を合併した食道表在癌の特徴.第113回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(名古屋),[シンポジウム]
- 048 丹羽康正,三木誓雄:シンポジウム2「消化管癌の診断と治療の進歩」.第113回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(名古屋),[司会]
- 049 丹羽康正:胃がん検診と所見の拾い上げ.平成22年度秋季スキルアップセミナー,2010.(富山市),[講演]
- 050 丹羽康正:胃癌に対するESD:診断と治療.第21回日本消化器内視鏡学会東海セミナー,2011.(岐阜),[司会]
- 051 丹羽康正:胃がん検診と所見の拾い上げ.平成23年度第3回胃X線撮影技術スキルアップ研修会,2011.(金沢),[講演]
- 052 羽場 真,水野伸匡,澤木 明,原 和生,脇岡 範,丹羽康正,田近正洋,河合宏紀,近藤真也,佐伯 哲,小倉 健,清水泰博,山雄健次:FDG-PETによる自己免疫性膵炎と膵癌の鑑別.第42回肝胆膵治療研究会,2011.(名古屋),[シンポジウム]
- 053 丹羽康正:非ステロイド系消炎鎮痛薬における消化管障害対策.第10回東海骨関節疾患研究会,2011.(名古屋),[講演]

呼吸器内科部

- 001 Seto T, Ichinose Y, Yamamoto N, Kaira K, Negoro S, Hida T, Takeda K, Masuda N, Yokota S, Fukuoka M: Results of a phase 1/2 trial of amrubicin (AMR) in combination with cisplatin (CDDP) as a first-line treatment in patients with advanced non-small cell lung cancer (NSCLC). 46th American Society of Clinical Oncology Annual Meeting, (2010), (Chicago) [Poster]
- 002 Horio Y, Ishikawa S, Yatabe Y, Shimizu J, Yoshida K, Fukui T, Ito S, Hasegawa Y, Mitsudomi T, Hida T: Clinical features in surgically treated patients with small cell lung cancer: Risk of brain metastasis and possible role of prophylactic cranial irradiation. ASCO, (2010), (Chicago)
- 003 Hida T, Takeda K, Daga H, Ishikawa S, Shiizu J, Tokunaga S, Horio Y, Ito K, Kobayashi K: A safety and tolerability study of vadimezan in combination with docetaxel in Japanese patients with advanced or recurrent solid tumors. ASCO, (2010), (Chicago)
- 004 Sekido Y, Mizuno T, Taniguchi T, Fujii M, Ishiguro F, Fukui T, Akatsuka S, Horio Y, Hida T, Kondo Y, Toyokuni S, Osada H, Murakami H: Inactivation of LATS2 indicates frequent dysregulation of the Merlin-Hippo signaling pathway in malignant mesothelioma cells. 10th International conference of the international mesothelioma interest group, (2010), (Kyoto) [Oral]
- 005 Hattori Y, Yamamoto N, Ichinose Y, Negro S, Hida T, Takeda K, Masuda N, Nakagawa K, Yokota S, Fukuoka M: Results of a phase I / II trial of amrubicin (AMR) in combination with cisplatin (CDDP) as first-line treatment in patients with

- advanced non-small cell lung cancer (NSCLC). 4th Asia Pacific Lung Cancer Conference, (2010), (Seoul)
- 006 堀尾芳嗣, 谷田部 恭, 朴 将哲, 清水淳市, 吉田公秀, 樋田豊明: ゲフィチニブ投与中の肺腺癌患者に小細胞肺癌を発症した1症例. 第50回日本呼吸器学会学術講演会, (2010), (京都) [ポスター]
- 007 横田総一郎, 工藤新三, 樋田豊明, 浅見和弘, 坂 英雄, 牛島淳, 小谷義一, 後藤 功, 高山浩一, 川瀬一郎, 中野孝司, 木村弘, 西村恭昌, 中川和彦: Ⅲ期非小細胞肺癌に対する放射線同時併用毎週投与イリノテカン+カルボプラチン, パクリタキセル+カルボプラチンの第3相無作為化比較試験. 第50回日本呼吸器学会総会学術講演会, (2010), (京都) [ミニシンポジウム]
- 008 藤井万紀子, 豊田武士, 長田啓隆, 谷田部 恭, 松平康枝, 村上秀樹, 近藤 豊, 樋田豊明, 関戸好孝: 悪性中皮腫細胞の増殖におけるTGF- β シグナルおよびYAPの協調的役割. 第69回日本癌学会学術総会, (2010), (大阪) [一般演題]
- 009 樋田豊明, 武田晃司, 駄賀晴子, 石川紫都, 清水淳市, 徳永伸也, 堀尾芳嗣: 日本人の固形癌を対象とするVadimezanとドセタキセル併用による安全性及び耐用性評価試験. 第69回日本癌学会学術総会, (2010), (大阪) [一般演題]
- 010 吉田公秀, 谷田部恭, 朴 将哲, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 樋田豊明: ペメトレキセドが著効したEGFRチロシナーゼ阻害剤抵抗性EGFR遺伝子変異陽性肺癌の1例. 第51回日本肺癌学会総会, (2010), (広島) [示説]
- 011 吉田公秀, 樋田豊明, 山本信之, 一瀬幸人, 根来俊一, 武田晃司, 益田典幸, 中川和彦, 横田総一郎, 松井 薫, 後藤 功, 福岡正博: アムルビシンの未治療進行非小細胞肺癌に対するシスプラチン併用における第1/2相試験成績. 第51回日本肺癌学会総会, (2010), (広島) [口演]
- 012 清水淳市, 朴 将哲, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 光富徹哉, 谷田部 恭, 樋田豊明: 肺癌患者における消化管手術の検討. 第51回日本肺癌学会総会, (2010), (広島) [ポスター]
- 013 朴 将哲, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 樋田豊明: 診断に苦渋した縦隔原発脂肪肉腫. 第51回日本肺癌学会総会, (2010), (広島) [ポスター]
- 014 西尾誠人, 樋田豊明, 平島智徳, 山本信之, 堀尾芳嗣, 田宮基裕, Ken Kobayashi, 宝来 威: 非小細胞肺癌に対するASA404のパクリタキセルとカルボプラチンとの併用投与による第I相臨床試験. 第51回日本肺癌学会総会, (2010), (広島) [ポスター]
- 015 厚田幸子, 伊藤志門, 小林祥久, 尾関直樹, 丹羽由紀子, 福井高幸, 遠藤秀紀, 安部哲也, 波戸俊三, 光富徹哉, 樋田豊明: 80歳以上高齢者肺癌症例における手術例と非手術例の検討. 第51回日本肺癌学会総会, (2010), (広島) [ワークショップ]
- 016 武田晃司, 森田智視, 安藤昌彦, 池田徳彦, 岩本康男, 澤 祥幸, 樋田豊明, 山本雅史, 片山信之, 高山浩一, 齊藤 博, 今村文生, 千場 博, 福岡正博, 中川和彦: 未治療非小細胞肺癌に対するS-1+carboplatinとpaclitaxel+carboplatinの第Ⅲ相試験. 第48回日本癌治療学会学術集会, (2010), (京都) [プレナリー]
- 017 室 圭, 宇良 敬, 高張大亮, 設楽紘平, 横田知哉, 野村基雄, 近

- 藤千紘,溝田綾子,堀尾芳嗣,西尾里美,西尾充代,立松三千子,大石和明,藤井佳代,水野靖也:外来化学療法の現状と問題点 効率的で患者に優しいがん治療を目指して 愛知県がんセンター中央病院における外来化学療法 新しい化療センターのあり方.第48回日本癌治療学会,(2010),(京都)[口演]
- 018 村上晴泰,山本信之,國頭英夫,宝来 威,一瀬幸人,西脇 裕,樋田豊明,河原正明,西條長宏,福岡正博:進行・再発非小細胞肺癌(扁平上皮癌を除く)の初回治療例に対するCBDCA+PTX±ベバシズマブの国内多施設共同無作為化比較第Ⅱ相試験.第8回日本臨床腫瘍学会学術集会,(2010),(東京)[プレナリーセッション]
- 019 北川智余恵,小暮啓人,坂 英雄,高橋利明,村上晴泰,内藤立暁,二村洋平,堀場あかね,澤 祥幸,清水淳市,吉田公秀,樋田豊明,高橋孝輔,奥野元保,齋藤 博:未治療進行非小細胞肺癌に対するS-1+carboplatinとpaclitaxel+carboplatinの第Ⅲ相試験(WJTOG3605).第97回中部肺癌学会中部支部会,(2010),(岐阜)[口演]
- 020 福井高幸,光富徹哉,伊藤志門,樋田豊明,堀尾芳嗣,足立 崇,沖 昌英,坂 英雄,澤 祥幸,杉浦孝彦:縦隔リンパ節転移を有するⅢA期非小細胞肺癌に対する術前化学療法と術前同時放射線併用化学療法の第Ⅲ相比較試験(WJTOG9903)－中途中止結果－.第97回中部肺癌学会中部支部会,(2010),(岐阜)[口演]
- 021 石黒 崇,吉田 勉,澤 祥幸,光富徹哉,伊藤志門,樋田豊明,高橋孝輔,奥野元保,齋藤 博,小暮啓人,北川智余恵,坂 英雄:ヒト上皮成長因子受容体(EGFR)遺伝子変異を有する非小細胞肺癌に対するゲフィチニブ対シスプラチン+ドセタキセル(DP)の比較第Ⅲ相試験(WJTOG3405).第97回中部肺癌学会中部支部会,(2010),(岐阜)[口演]
- 022 朴 将哲,清水淳市,堀尾芳嗣,吉田公秀,樋田豊明,谷田部 恭:EUS-FNAにて診断困難であった縦隔原発脂肪肉腫の1例.第98回中部肺癌学会中部支部会,(2011),(名古屋)[口演]
- 023 尾関直樹,福井高幸,丹羽由紀子,小林祥久,厚田幸子,遠藤秀紀,伊藤志門,安部哲也,波戸岡俊三,光富徹哉,吉田公秀,谷田部 恭:肺非結核性抗酸菌症による肉芽腫と腺癌・扁平上皮癌を同一病巣内に認めた1例.第98回中部肺癌学会中部支部会,(2011),(名古屋)[口演]

血液・細胞療法部

- 001 *Yoshihisa Kodera, Kazubito Yamamoto, Shunichi Kato, Mine Harada, Yoshinobu Kanda, Nobuyuki Hamajima, Shigetaka Asano, Yasuo Ikeda, Masahiro Imamura, Keisei Kawa, Yasuo Morishima, Tatsutoshi Nakahat, Mitsune Tanimoto, Ryuji Tanosaki, Shintaro Shiobara*: Sung-Won Kim, Koji Nagafuji, Masayuki Hino, Koichi Miyamura, Ritsuro Suzuki Safety and Risk of Allogeneic Peripheral Blood Stem Cell Donation: The Comprehensive Report of Nation-Wide Consecutively Pre-Registered 3,264 Family Donor Survey In 10years Project by Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation The 52st American Society of Hematology Annual Meeting

2010.12.(オーランド 米国)[ポスター]

- 002 *Shinichi Kako, Satoshi Morita, Hisashi Sakamaki, Hiromitsu Iida, Mineo Kurokawa, Koichi Miyamura, Heiwa Kanamori, Masamichi Hara, Naoki Kobayashi, Yasuo Morishima, Keisei Kawa, Taichi Kyo, Toru Sakura, Itsuro Jinnai, Jin Takeuchi, Yasushi Miyazaki, Shuichi Miyawaki, Kazunori Ohnishi, Tomoki Naoe, Yoshino bu Kanda*: A Decision Analysis of Unrelated Hematopoietic Stem Cell Transplantation for Adult Patients with Philadelphia Chromosome-Negative Acute Lymphoblastic Leukemia In First Remission Who Lack An HLA-Matched Sibling The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12.(オーランド 米国)[口演]
- 003 *Takashi Watanabe, Yasuo Morishima, Taro Shibata, Nobuo Maseki, Tomohiro Kinoshita, Takayo Suzuki, Motoko Yamaguchi, Kiyo shi Ando, Michinori Ogura, Masafumi Taniwaki, Naokuni Uike, Kengo Takeuchi, Shigeru Nawano, Takashi Terauchi, Kunibiro Tsukasaki, Tomomitsu Hotta, Kensei Tobinai*: Phase II/III Study of Cyclophosphamide, Doxorubicin, Vincristine, and Prednisolone with Rituximab (R-CHOP) Versus Biweekly CHOP with Rituximab (R-Bi-CHOP) In Untreated Advanced-Stage Indolent B-Cell Lymphoma: Japan Clinical Oncology Group (JCOG) 0203 Trial The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12.(オーランド 米国)[口演]
- 004 *Bronwen E. Shaw, Katharina Fleischhauer, Mari Malkki, Theodore Gooley, Elisabetta Zino*: Stephen Spellman, Yasuo Morishima, Andrea Velardi, Peter Bardy, Jean-denis Bignon, J. Alejandro Madrigal, Effie W. Petersdorf Permissive HLA-DPB1 Mismatching Compared to a Non-Permissive Mismatching Significantly Improves Overall Survival Following Allogeneic Transplantation In Patients with Both 10/10 and 9/10 Matched Unrelated Donors The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12.(オーランド 米国)[口演]
- 005 *Saiko Kurosawa, Kimikazu Yakushijin, Takubiro Yamaguchi, Yoshiko Atsuta, Tokiko Nagamura-Inoue, Hideki Akiyama, Shuichi Taniguchi, Koichi Miyamura, Satoshi Takahashi, Tetsuya Eto, Yasuo Morishima, Hisashi Sakamaki, Takahiro Fukuda*: Changes In Incidence and Causes of Non-Relapse Mortality (NRM) After Allogeneic Hematopoietic Cell Transplantation (allo-HCT): Are Transplants Improving? The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12.(オーランド 米国)[口演]
- 006 *Naoko Asano, Tomohiro Kinoshita, Koichi Ohshima, Tadashi Yoshino, Nozomi Niitsu, Norifumi Tsukamoto, Kaoru Hirabayashi, Koji Izutsu, Yasuo Morishima, Tadashi Matsushita, Shigeo Nakamura*: Clinicopathological Features of Nodular Sclerosis-Type Classical Hodgkin Lymphoma In the Elderly: Multicenter Study of Hodgkin Lymphoma In Japan The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12.(オーランド 米国)[口演]
- 007 *Takamasa Katagiri, Aiko Matsubara, Koichi Kashiwase, Motobi*

- ro Kato, Yasuo Morishima, Kobei Hosokawa, Shigeaki Ohtake, Seishi Ogawa, Shinji Nakao*: Immunologically-Selected Hematopoiesis Caused by HLA Allelic Loss In Patients with Aplastic Anemia The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12. (オランダ 米国)[口演]
- 008 *Dai Chihara, Yasuhiro Oki, Keitaro Matsuo, Hiroshi Onoda, Hirofumi Taji, Kazubito Yamamoto, Yasuo Morishima*: Incidence and Risk Factors for Central Nervous System (CNS) Relapse In Patients with Diffuse Large B-Cell Lymphoma (DLBCL): Analysis with Competing Risk Regression (CRR) Model The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12. (オランダ 米国)[ポスター]
- 009 *Takashi Ishida, Tatsuro Job, Naokuni Uike, Kazubito Yamamoto, Atae Utsunomiya, Shinichiro Yoshida, Yoshio Saburi, Toshihiro Miyamoto, Shigeaki Takemoto, Hitoshi Suzushima, Kunihiko Tsukasaki, Kisato Nosaka, Hiroshi Fujiwara, Kenji Ishitsuka, Hiroshi Inagaki, Michinori Ogura, Shiro Akinaga, Masao Tomonaga, Kensei Tobinai, Ryuzo Ueda*: Multicenter Phase II Study of KW-0761, a Defucosylated Anti-CCR4 Antibody, in Relapsed Patients with Adult T-Cell Leukemia-Lymphoma (ATL) The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12. オランダ(米国)[口演]
- 010 *Takashi Tokunaga, Kazuyuki Shimada, Kazubito Yamamoto, Dai Chihara, Takeji Ichihashi, Rika Oshima, Mitsune Tanimoto, Toshihiro Iwasaki, Atsushi Isoda, Akira Sakai, Hikaru Kobayashi, Kunio Kitamura, Kosei Matsue, Masafumi Taniwaki, Sadahiro Tamashima, Yoshio Saburi, Taro Masunari, Tomoki Naoe, Shigeo Nakamura, Tomohiro Kinoshita*: A Retrospective Analysis on Prognostic Factors of Angioimmunoblastic T-Cell Lymphoma: a Multicenter Cooperative Study in Japan The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12. オランダ 米国 [ポスター]
- 011 *Satoko Morishima, Kazubito Yamamoto, Hiroshi Kimura, Seiko Iwata, Tomohiro Kinoshita, Hirokazu Nagai, Isamu Sugiura, Keitaro Tsubota, Yoshitoyo Kagami, Koichi Miyamura, Kiyotaka Kuzushima, Shigeo Nakamura, Yasuo Morishima*: Increased Peripheral T Cell Responses to EBV-Infected Cells with Frequent Detection of EBV-DNA in Plasma and Viral mRNA in Peripheral B-Cells in Immunocompetent EBV-Positive Diffuse Large B-Cell Lymphoma Patients The 52st American Society of Hematology Annual Meeting 2010.12. オランダ 米国 [ポスター]
- 012 徳永隆之, 島田和之, 山本一仁, 千原大, 市橋卓司, 大島理加, 前田嘉信, 杉浦勇, 磯田淳, 坂井晃, 直江知樹, 中村栄男: 血管免疫芽球形T細胞リンパ腫の多施設共同後方視的研究 第50回日本リンパ網内系学会総会 2010.06.新潟[ポスター]
- 013 小野田浩, 森島聡子, 千原大, 大木康弘, 田地浩史, 山本一仁, 森島泰雄, 谷田部恭: MTX中止が奏功したRA合併EBV+monomorphic LPD (DLBCL)の1例第50回日本リンパ網内系学会総会 2010.06.(新潟)[ポスター]
- 014 *Kazubito Yamamoto*: Clinical trials of a defucosylated anti-CCR4 antibody for ATL and PTCL 第72回 日本血液学会学術集会 2010.09.(横浜)[シンポジウム]
- 015 *Naoko Asano, Tomohiro Kinoshita, Koichi Ohshima, Tadashi Yoshino, Nozomi Niitsu, Norifumi Tsukamoto, Kaoru Hirabayashi, Koji Izutsu, Yasuo Morishima, Shigeo Nakamura*: Classical Hodgkin lymphoma: the clinicopathological features of nodular sclerosis of the elderly 第72回日本血液学会学術集会 2010.09.(横浜)[口演]
- 016 *Takashi Tokunaga, Kazuyuki Shimada, Kazubito Yamamoto, Dai Chihara, Takeji Ichihashi, Rika Oshima, Yoshinobu Maeda, Toshihiro Iwasaki, Atsushi Isoda, Akira Sakai, Tomoki Naoe, Shigeo Nakamura, Tomohiro Kinoshita*: A Clinicopathological analysis of angioimmunoblastic T-cell lymphoma 第72回日本血液学会学術集会 2010.09.(横浜)[口演]
- 017 *Shinichi Kako, Satoshi Morita, Hisashi Sakamaki, Hiroatsu Iida, Mineo Kurokawa, Koichi Miyamura, Heiwa Kanamori, Masamichi Hara, Naoki Kobayashi, Yasuo Morishima, Keisei Kawa, Taiichi Kyo, Toru Sakura, Itsuro Jinnai, Jin Takeuchi, Yasushi Miyazaki, Shuichi Miyawaki, Kazunori Obnishi, Tomoki Naoe, Yoshinobu Kanga*: Decision analysis of HLA-matched unrelated stem cell transplantation for ALL in first remission 第72回日本血液学会学術集会 2010.09.(横浜)[口演]
- 018 *Dai Chihara, Yasuhiro Oki, Hiroshi Onoda, Hirofumi Taji, Kazubito Yamamoto, Yasuo Morishima*: Incidence and risk factors for eventual central nervous system (CNS) relapse in patients with DLBCL 第72回日本血液学会学術集会 2010.09.(横浜)[口演]
- 019 *Yosuke Minami, Akihiro Abe, Yuka Nomura, Mibo Minami, Yachiyu Kuwatsuka, Kunio Kitamura, Junji Hiraga, Shinichi Mizuno, Tomohiro Kajiguchi, Kazubito Yamamoto, Masashi Sawa, Yuichiro Inagaki, Kazutaka Ozeki, Koichi Miyamura, Keisuke Watanaabe, Fumihiko Hayakawa, Mayumi Imahashi, Toshiya Yokozawa, Etsuko Aoki, Jamieson Catoriona, Hitoshi Kiyoi, Tomoki Naoe*: Reduction of chronic myeloid leukemia stem cells after treatment with ABL-kinase inhibitors 第72回日本血液学会学術集会 2010.09.(横浜)[口演]
- 020 *Harumi Kato, Yoshitoyo Kagami, Masao Nakagawa, Karnan Sivasingam, Yasushi Yatabe, Shigeo Nakamura, Yasuo Morishima, Masao Seto*: IL-4/CD40 ligand co-stimulation induces long-term proliferation for CD10+ GCB-like DLBCL in vitro 第72回日本血液学会学術集会2010.09.(横浜)[口演]
- 021 *Hiroshi Onoda, Harumi Kato, Yasuhiro Oki, Yoshitoyo Kagami, Dai Chihara, Hirofumi Taji, Kazubito Yamamoto, Yasuo Morishima*: The efficacy and safety of the Mit-GDP(+R) for patients with multiple-relapsed non-Hodgkin lymphoma 第72回日本血液学会学術集会 2010.09.横浜[ポスター]
- 022 黒澤彩子, 薬師神公和, 山口拓洋, 熱田由子, 長村登紀子, 秋山秀樹, 谷口修一, 宮村耕一, 高橋聡, 衛藤徹也, 森島泰雄, 坂巻壽, 福田隆浩: 本邦における同種移植後非再発死亡割合と死因の年次推移: 50歳以上の検討 Changes in Incidence and Causes of Non-Relapse Mortality After Allogeneic Hematopoietic Cell Transplantation: results of elderly patients 第33回日本造血細胞移植学会総会 2011.03.(愛媛) [ワークショップ]

ブ]

- 023 賀古真一,森田知視,坂巻壽,飯田浩充,黒川峰夫,宮村耕一,金森平和,原雅道,小林直樹,森島泰雄,河敬世,許泰一,佐倉徹,陣内逸郎,竹内仁,宮崎泰司,宮脇修一,大西一功,直江知樹,神田善信:フィラデルフィア染色体陰性成人急性リンパ性白血病に対するHLA一致非血縁ドナーからの第一寛解期における同種造血幹細胞移植の妥当性を検討する臨床決断分析 A decision analysis of unrelated hematopoietic stem cell transplantation for adult patients with Philadelphia chromosome-negative acute lymphoblastic leukemia in first remission who lack an HLA-matched sibling 第33回日本造血細胞移植学会総会 2011.03.愛媛 [ワークショップ]
- 024 薬師神公和,黒澤彩子,山口拓洋,熱田由子,長村登紀子,秋山秀樹,谷口修一,宮村耕一,高橋聡,衛藤徹也,森島泰雄,坂巻壽,福田隆浩:本邦における同種移植後非再発死亡割合と死因の年次推移: 49歳以下成人での検討 Changes In Incidence and Causes of Non-Relapse Mortality After Allogeneic Hematopoietic Cell Transplantation:results of younger patients 第33回日本造血細胞移植学会総会 2011.03. [ポスター]

薬物療法部

- 001 *Nomura M*:Opioid titration with transdermal fentanyl in cancer pain. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu),[oral]
- 002 *Shitara K*:What should we do to improvement the prognosis of patients with advanced gastric cancer (AGC)? 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu),[oral]
- 003 *Takahari D*:Feasibility study of adjuvant therapy with S-1 plus cisplatin in gastric cancer. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu),[symposium]
- 004 *Kondo C*:Feasibility study of preoperative docetaxel,cisplatin,and fluorouracil in esophageal cancer. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu),[symposium]
- 005 *Nomura M*:Evaluation of the seventh TNM classification system in esophageal cancer patients treated with definitive chemoradiotherapy. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu),[symposium]
- 006 *Yokota T*:KRAS-BRAF mutations and PTEN/p-AKT expression as predictive markers for cetuximab in Japanese colorectal cancer patients. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu),[symposium]
- 007 *Mizota A*:Cetuximab monotherapy for patients with irinotecan intolerant metastatic colorectal cancer (MCRC). 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology

Society,2010.(Gifu),[oral]

- 008 *Shitara K*:Folate intake associated with better outcome of patients with advanced gastric cancer treated with first-line fluorouracil based chemotherapy. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu),[oral]
- 009 *Muro K*:Treatment strategy for metastatic colorectal cancer. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu),[seminar]
- 010 *Nomura M,Kodaira T,Furutani K,Tachibana H,Tomita N,Goto Y*:Predictive factors for radiation pneumonitis based on DVH analysis of patients with esophageal cancer treated with definitive radiotherapy. European Society for Therapeutic Radiology and Oncology,2010.(Barcelona),[poster]
- 011 *Shitara K,Matsuo K,Takahari D,Yokota T,Ura T,Ito S,Sawaki A,Tajika M,Kawai H,Muro K*:Survival Benefit Associated with Fluoropyrimidines,Platinum Agents,Taxanes,and Irinotecan During All Lines of Treatment in Patients with Advanced Gastric Cancer. 35th European Society for Medical Oncology,2010.(Milan),[poster]
- 012 *Muro K,Kato T,Yamaguchi K,Bando H,Hazama H,Amagi K,Baba H,Denda T,Sakamoto J,Mishima H*:A Phase II study of cediranib in combination with mFOLFOX6 in Japanese patients (pts) with metastatic colorectal cancer (CRC). 35th European Society for Medical Oncology,2010 (Milan),[poster]
- 013 *Shitara K*:Progression-free survival and time to progression as surrogate markers of overall survival in patients with advanced gastric cancer:Literature-based analysis of 36 randomized trials. The 2011 Gastrointestinal Cancers Symposium,2011.(San Francisco),[poster]
- 014 *Yokota T*:Evaluation of BRAF mutation as a powerful prognostic factor in advanced and recurrent colorectal cancer. The 2011 Gastrointestinal Cancers Symposium,2011.(San Francisco),[poster]
- 015 *Nomura M*:Evaluation of the seventh TNM classification system in patients with esophageal cancer receiving chemoradiotherapy. The 2011 Gastrointestinal Cancers Symposium,2011.(San Francisco),[poster]
- 016 室 圭:大腸癌の化学療法. 第110回日本外科学会定期学術集会,2010.(名古屋),[講演]
- 017 野村基雄:フェンタニル持続静注から経皮吸収剤への12時間移行法と6時間移行法の無作為化比較試験.第15回日本緩和医療学会学術大会,2010.(東京),[口演]
- 018 室 圭:胃癌,大腸癌化学療法の現状と今後の展望 第19回日本癌病態治療研究会,2010.(東京),[講演]
- 019 野村基雄:食道癌放射線治療患者におけるDVH解析からみた放射線肺炎の予測因子の検討. 第64回日本食道学会学術集会,2010.(福岡),[口演]
- 020 室 圭:愛知県がんセンター中央病院における外来化学療法-新しい化療センターのあり方-. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[シンポジウム]

- 021 宇良 敬:ブレドロネート併用が大腸癌化学療法の有効性に及ぼす影響についての検討. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[示説]
- 022 高張大亮:当院におけるFOLFOX + bevacizumab療法初回治療例の治療成績. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[口演]
- 023 設楽紘平:進行胃癌に対する4系統の薬剤の使用と予後:大腸癌との比較も含めて. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[シンポジウム]
- 024 設楽紘平:進行胃癌に対する二次治療としてのweekly paclitaxel中の好中球減少と予後の検討. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[口演]
- 025 横田知哉:根治切除が困難と判断された局所進行型食道癌症例に対するDCF療法の有効性. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[シンポジウム]
- 026 横田知哉:BRAF変異は進行再発大腸癌における予後規定因子である. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[シンポジウム]
- 027 横田知哉:進行再発大腸癌に対するセツキシマブの効果予測因子としてのPTEN/p-AKT発現. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[口演]
- 028 野村基雄:食道癌化学放射線治療患者におけるUICC-TNM第6版 vs. 第7版の検討. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[口演]
- 029 近藤千紘:パクリタキセル不応進行再発胃癌におけるドセタキセルの有効性の後方視的検討. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[口演]
- 030 溝田綾子:irinotecan不耐と考えられる大腸癌症例に対するCetuximab単独療法の検討. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[口演]
- 031 野村基雄:食道癌放射線治療患者におけるDVH解析から見た放射線肺炎の予測因子の検討. 日本放射線腫瘍学会第23回学術大会,2010.(千葉)[優秀演題/口演]
- 032 野村基雄:食道癌化学放射線治療患者におけるUICC-TNM第6版 vs. 第7版の検討. 日本放射線腫瘍学会第23回学術大会,2010.(千葉)[要望演題/口演]
- 033 近藤千紘:既治療進行再発胃癌におけるmFOLFOX6療法の使用経験. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[口演]
- 034 溝田綾子:Trastuzumabを含む多剤抵抗性のHER2陽性胃癌に対しtrastuzumab+lapatinibで病勢安定を得られた一例. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[口演]
- 035 溝田綾子:経口摂取不能胃癌における化学療法の効果. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[ワークショップ]
- 036 高張大亮:当院における高齢者胃癌症例に対する化学療法の現況. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[ワークショップ]
- 037 設楽紘平:胃癌化学療法の臨床試験におけるOSのsurrogate endpointとしてのPFS. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[口演]
- 038 設楽紘平:IGF1遺伝子多型と治療切除後胃癌における再発の検討. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[口演]
- 039 設楽紘平:全身状態不良な胃癌患者に対する化学療法. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[ワークショップ]
- 040 設楽紘平:術後補助化学療法後の再発をどう考えるか. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[ラウンドテーブルディスカッション]
- 041 室 圭:Asian global trial-TYTAN試験-に関して. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[シンポジウム]
- 042 室 圭:化学療法2.第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[司会]
- 043 室 圭:術後補助化学療法後の再発をどう考えるか. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(青森)[司会]

臨床検査部・遺伝子病理診断部

- 001 谷田部恭:肺癌のTNM分類の改訂と病理医が注意すべき点.日本病理学会総会,2010.04 (東京)[ワークショップ]
- 002 Yatabe Y:EGFR mutation in lung cancer cell differentiation and survival. American Thoracic Society,2010.05.(米国・ニューオリンズ)[シンポジウム]
- 003 谷田部恭:肺癌では組織型と遺伝子型とはどちらが先に決定づけられるのか.第36回肺癌診断会・画像診断セミナー,2010.06.(大阪)[講演]
- 004 谷田部恭:治療戦略のパラダイムシフトに伴う組織型分類(腺癌vs.扁平上皮癌)について.第49回日本肺癌学会東北支部会,2010.07.(仙台)[講演]
- 005 谷田部恭:腫瘍内科医に必要な病理学の基礎知識と病理医とのコミュニケーション.第1回東海腫瘍内科カンファレンス,2010.08.(名古屋)[講演]
- 006 谷田部恭:癌研究における病理組織標本の利用-利点とその限界.日本癌学会(大阪)[講演]
- 007 谷田部恭:肺癌におけるEGFR,KRAS変異.第51回日本肺癌学会,2010.11 (広島)[シンポジウム]
- 008 谷田部恭:ALK肺癌の臨床病理学的特徴.東海胸部研究会,2010.11 (名古屋)[講演]
- 009 谷田部恭:EGFR遺伝子変異と肺がん治療のパラダイムシフト.2010.11.(神戸)[シンポジウム]
- 010 谷田部恭:免疫組織化学法の新たな一歩.日本肺癌学会,2010.11.(福岡)[講演]
- 011 Yatabe Y:Unveiling the Molecular Landscape of Lung Adenocarcinoma Development.The 4th Asia Pacific Lung Cancer Conference,2010.12.(韓国・ソウル)[シンポジウム]
- 012 谷田部恭:肺癌治療のパラダイムシフトに伴う病理組織診断の意義.日本病理学会近畿支部学術集会,2010.12.(大阪)[講演]
- 013 Yatabe Y,Wistuba I: Molecular correlation and classification of lung cancer. IASLC Pathology Panel Meeting.(つくば)[ワークショップ]
- 014 Yatabe Y:Is the EGFR mutation distributed heterogeneously within tumor?,the 100th annual meeting of US-Canadian Academy of Pathology,2011.02 (米国・サンアントニオ)[口演]
- 015 細田和貴,谷田部恭,鈴木晴久,山雄健次:Endoscopic US-

- guided fine needle aspiration (EUS-FNA)による膵内分泌腫瘍(PNET)の病理学的悪性度の判定はどこまで可能か? JDDW 2010.10.15 (横浜) [シンポジウム]
- 016 村上 善子, 富田章裕, 中村栄男: Cytokeratin陽性を示したBlastic plasmacytoid dendritic neoplasmの一例. 日本リンパ網内系学会. 2010.06 (新潟), [ポスター]
- 017 柴田典子: パラフィン包埋組織(FFPE標本)を用いた遺伝子検査. 日臨技生物化学分析部門(染色体遺伝子領域)研修会. 2010.(神戸)[講演]
- 018 小林雅子, 栗原正喜, 羽佐田香代, 渥美ふき子, 安江鐵雄, 遠山由美子, 水谷和子, 高須和生, 小池孝一, 谷田部恭: 「CA19-9低値例の推移」第11回愛知県医学検査学会2010.(名古屋) [講演]
- 019 所 嘉朗: ベセスダシステムについて. 愛知県細胞診技術者研修会. 2010.(名古屋) [講演]
- 020 宮下拓也, 堀田ありさ, 尾関順子, 所 嘉朗, 長坂 暢, 村上善子, 菅野雅人, 佐々木英一, 細田和貴, 越川 卓, 谷田部恭: 尿路小細胞癌3例の検討. 第129回東海連合会総会および学術集会. 2010.3.(名古屋), [講演]
- 021 鈴木久史, 大野智之, 福岡俊彦, 菅野雅人, 森下由紀雄, 野口雅之: 血清CA19-9高値を呈した縦隔成熟奇形種の1切除例. 日本肺癌学会総会. 2010.11(広島)
- 022 菅野雅人, 佐々木英一, 細田和貴, 長坂暢, 谷田部恭: 肺GGOの症例. 日本病理学会中部支部交見会. 2010.12 (名古屋)
- 023 山田健志, 杉浦英志, 長坂暢, 谷田部恭: 第4腰椎腫瘍. 東海骨軟部腫瘍研究会. 2010.4.17 (名古屋)
- 024 浜田俊介, 杉浦英志, 山田健志, 長坂暢, 谷田部恭: 右肩部軟部腫瘍の1例. 東海骨軟部腫瘍研究会. 2010.9.4(名古屋)

頭頸部外科部

- 001 Hasegawa Y, Yoshimoto S, Matsuzuka T, Kobno N, Shiotani A, Furuya N, Yoshida T, Kitano H: Sentinel node biopsy for oral and Pharyngolaryngeal SCC: A retrospective observational study on 178 patients. 4th International Conference on Sentinel Node Biopsy and Radioguided Head & Neck Surgery. 2010.(デンマーク), [口演]
- 002 Ozawa T, Hasegawa Y, Terada A, Hanai N, Hirakawa H, Kawakita D, Maruo T, Mikami S, Suzuki A, Miyazaki T: The Role of Partial Laryngectomy for Recurrence after Primary Radiotherapy. 4th World Congress of International Federation of Head and Neck Oncologic Societies. 2010.(韓国), [ポスター]
- 003 Hirakawa H, Hasegawa Y, Terada A, Hanai N, Hirakawa H, Ozawa T, Hyodo I, Kawakita D, Saito K, Tachibana E, Koyama K: Craniofacial Surgery for Malignant Skull Base Tumors. 4th World Congress of International Federation of Head and Neck Oncologic Societies. 2010.(韓国), [口演]
- 004 Kawakita D, Hasegawa Y, Terada A, Hanai N, Ozawa T, Hirakawa H, Hyodo I, Koyama K: Clinical Outcome for Head and Neck Mucosal Malignant Melanoma. 4th World Congress of International Federation of Head and Neck Oncologic

- Societies. 2010.(韓国), [ポスター]
- 005 Suzuki A, Terada A, Hanai N, Ozawa T, Hirakawa H, Kawakita D, Maruo T, Mikami S, Miyazaki T, Hasegawa Y: A Case of Major Tracheal Reconstruction with Costal Cartilage. 4th World Congress of International Federation of Head and Neck Oncologic Societies. 2010.(韓国), [ポスター]
- 006 Hasegawa Y, Goto M, Hanai N, Ozawa T, Hirakawa H: Predictive biomarkers for combined chemotherapy with 5-fluorouracil and cisplatin in oro-and hypopharyngeal cancers. AHNS 2010 Research workshop on the biology, Prevention and treatment of head & neck cancer. 2010.(アメリカ), [口演]
- 007 Terada A, Hanai N, Ozawa T, Hirakawa H, Hasegawa Y: Follow up after sentinel lymph node biopsy in early oral cancer patients. The 7th International Sentinel Node Society Meeting. 2010.(横浜), [口演]
- 008 Yoshimoto S, Hasegawa Y, Matsuzuka T, Shiotani A, Fukaya N, Kobno N, Yoshida T, Kitano H: Sentinel node biopsy for oral and Pharyngolaryngeal squamous cell carcinoma: a retrospective study on 177 patients in Japan. The 7th International Sentinel Node Society Meeting. 2010.(横浜), [口演]
- 009 三上慎司, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 鈴木淳志, 宮崎拓也, 長谷川泰久: 甲状腺癌の再発に関する検討. 日本耳鼻咽喉科学会. 2010.(仙台), [口演]
- 010 松塚崇, 長谷川泰久, 三浦智広, 永藤裕, 山内宏一, 唐帆健浩, 甲能直幸, 大森孝一: 分子生物学的手法を用いた転移リンパ節の迅速診断. 日本耳鼻咽喉科学会. 2010.(仙台), [口演]
- 011 宮崎拓也, 小澤泰次郎, 花井信広, 平川仁, 鈴木淳志, 原田生功磨, 長谷川泰久: 頭頸部癌肺転移症例に対する外科的切除の検討. 第141回東海地方部会連合講演会2010.(名古屋), [口演]
- 012 長谷川泰久: 切除 I. 咽候食道下咽頭癌の外科治療 - 下咽頭喉頭全摘頭部食道切除術 - . 日本頭頸部癌学会第1回教育セミナー. 2010.(東京), [講演]
- 013 小澤泰次郎, 寺田聡広, 花井信広, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 鈴木淳志, 宮崎拓也, 長谷川泰久, 兵藤伊久夫, 神山圭史: 放射線治療後の救済手術の検討. 第34回日本頭頸部癌学会. 2010.(東京), [口演]
- 014 杉谷巖, 吉田明, 鈴木真一, 細井裕司, 西舘大宣, 長谷川泰久, 山田弘之, 吉本世一, 宮崎真和, 折田頼尚, 北野博也, 三浦弘規: 「甲状腺未分化癌研究コンソーシアム」29施設572例の症例集積研究. 第34回日本頭頸部癌学会. 2010.(東京), [口演]
- 015 宮崎拓也, 小澤泰次郎, 寺田聡広, 花井信広, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 鈴木淳志, 長谷川泰久: 頭頸部癌肺転移症例に対する外科的切除の検討. 第34回日本頭頸部癌学会. 2010.(東京), [口演]
- 016 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 鈴木淳志, 宮崎拓也, 長谷川泰久: ハーモニックフォーカスを用いた頭頸部外科手術. 第34回日本頭頸部癌学会. 2010.(東京), [口演]
- 017 三上慎司, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 鈴木淳志, 宮崎拓也, 長谷川泰久: Harmonic FOCUSを使用した頭頸部外科手術の経験と検討. 第34回日

- 本頭頸部癌学会,2010.(東京),[口演]
- 018 朝蔭孝宏,齊川雅久,岸本誠司,川端一嘉,西嘉渡,藤井隆,古川まどか,松浦一登,藤本保志,花井信広:下咽頭がんおよび声門上がんに対する頸部郭清術の術式均一化に関する研究. 第34回日本頭頸部癌学会,2010.(東京), [口演]
- 019 伊地知圭,欄真一郎,足立誠,中西速夫,長谷川泰久,小川徹也,村上信五:頭頸部癌細胞株の抗癌剤耐性化による形質変化に関する検討. 第34回日本頭頸部癌学会,2010 (東京),[口演]
- 020 欄真一郎,伊地知圭,中西速夫,小川徹也,長谷川泰久,村上信五:頭頸部扁平上皮癌細胞株におけるGemcitabineとCetuximabの併用療法の検討. 第34回日本頭頸部癌学会,2010.(東京),[ポスター]
- 021 丸尾貴志,鈴木淳志,寺田聡広,花井信広,小澤泰次郎,平川仁,川北大介,三上慎司,宮崎拓也,長谷川泰久:CHEP後の嚥下検討,第72回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会,2010.(倉敷),[口演]
- 022 花井信広,鈴木淳志,小澤泰次郎,平川仁,宮崎拓也,長谷川泰久,立花栄二,兵藤伊久夫,神山圭史:Midfacialdegloving approachによる内視鏡支援下前頭蓋底手術の一例. 第22回日本頭蓋底外科学会,2010.(久留米),[口演]
- 023 鈴木淳志,花井信広,小澤泰次郎,平川仁,宮崎拓也,原田生功磨,水上高秀,長谷川泰久,兵藤伊久夫,古平毅:放射線療法を施行したT4下咽頭癌症例の検討. 第142回東海地方部会連合講演会,2010.(名古屋),[口演]
- 024 長谷川泰久:頭頸部の癌とお酒. 愛友会中部ブロック研修会,2010.(名古屋),[講演]
- 025 花井信広,長谷川泰久,寺田聡広,小澤泰次郎,平川仁:頭頸部がんにおける頸部郭清術の標準化を目指して頸部郭清術の個別化を目指すセンチネルリンパ節生検術. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[シンポジウム]
- 026 齊川雅久,岸本誠司,川端一嘉,長谷川泰久,丹生健一,西嘉渡,藤井隆,古川まどか,松浦一登,朝蔭孝宏,花井信広,宮崎真和:頭頸部がんにおける頸部郭清術の標準化を目指して頸部郭清術の術式均一化. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[シンポジウム]
- 027 松浦一登,齊川雅久,岸本誠司,川端一嘉,西嘉渡,藤井隆,古川まどか,藤本保志,朝蔭孝宏,花井信広,中島格,浅井昌夫,門田伸也:頭頸部がんにおける頸部郭清術の標準化を目指してEBMから見た頸部郭清術の適応 ガイドライン作成に向けて. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[口演]
- 028 花井信広,小澤泰次郎,平川仁,長谷川泰久:頭頸部・食道悪性腫瘍の頸部・上縦隔郭清. 第63回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会,2010.(別府),[ビデオシンポジウム]
- 029 長谷川泰久:低侵襲と個別化を目指す頸部郭清術. 第7回秋田頭頸部腫瘍セミナー,2010.(秋田),[特別講演]
- 030 吉本世一,長谷川泰久,松塚崇,塩谷彰浩,古屋信彦,甲能直幸,吉田知之,北野博也:頭頸部がんセンチネルリンパ節生検についての多施設における実態調査:177例の解析. 第12回SNNS研究会学術集会,2010.(横浜),[口演]
- 031 長谷川泰久:頭頸部癌に対するセンチネルリンパ節生検術の多施設共同研究 第12回SNNS研究会学術集会,2010.(横浜),[口演]
- 032 濱島有喜,伊地知圭,村上信五,花井信広:耳下腺悪性腫瘍におけるTS1の効果. 第23回日本口腔・咽頭科学会・学術講演会,2010.(東京),[口演]
- 033 鈴木淳志,花井信広,小澤泰次郎,平川仁,宮崎拓也,原田生功磨,水上高秀,岡本啓希,長谷川泰久:下咽頭進行癌に対する導入化学療法の検討. 第9回東海頭頸部癌化学療法研究会,2010.(名古屋),[口演]
- 034 花井信広,小澤泰次郎,平川仁,鈴木淳志,宮崎拓也,原田生功磨,長谷川泰久:化学放射線療法後の頸部郭清術(early salvage neck dissection)～郭清範囲に関する考察. 第143回東海地方部会連合講演会,2010.(名古屋),[口演]
- 035 長谷川泰久,花井信広,小澤泰次郎,兵藤伊久夫,齋藤清,立花栄二,鈴木淳志,宮崎拓也,原田生功磨,神山圭史,水上高秀:当科における鼻副鼻腔悪性腫瘍症例に対する頭蓋底手術の検討. 第21回日本頭頸部外科学会ならびに学術集会,2011.(宇都宮),[口演]
- 036 原田生功磨,花井信広,小澤泰次郎,平川仁,宮崎拓也,鈴木淳志,水上高秀,岡本啓希,岩野信吾,長谷川泰久:遺伝子組み換えヒトTSHを用いた進行甲状腺癌放射線ヨード治療に適應の検討.第28回東海頭頸部腫脹研究会,2011.(名古屋),[口演]
- 037 平川仁,花井信広,小澤泰次郎,長谷川泰久,兵藤伊久夫,神山圭史,齋藤清,立花栄二:当科における鼻副鼻腔悪性腫瘍症例に対する頭蓋底手術の検討.第27回東海頭蓋底外科研究会,2011.(名古屋),[口演]

形成外科部

- 001 Keishi Kobayama, Ikuo Hyodo, Yasuhisa Hasegawa, Akibiro Tera da, Nobuhiro Hanai, Taijiro Ozawa, Hitoshi Hirakawa, Yuzuru Kamei: Second microvascular free flaps in head and neck reconstruction -reliability of anastomosis in scars. 4th world congress of international federation of head and neck oncologic societies, 2010. (Soeul), [口演]
- 002 兵藤伊久夫, 神山圭史, 長谷川泰久, 亀井 讓: 当院における下顎再建の検討. 第53回日本形成外科学会総会・学術集会, 2010.(金沢), [口演]
- 003 神山圭史, 兵藤伊久夫, 杉浦英志, 山田健志, 浜田俊介, 亀井讓: 前腕部悪性骨・軟部腫瘍切除後の軟部組織欠損に対する再建. 第53回日本形成外科学会総会・学術集会, 2010.(金沢), [口演]
- 004 兵藤伊久夫, 神山圭史, 長谷川泰久, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川 仁, 亀井 讓: 当院における皮弁を用いた下咽頭再建. 第34回日本頭頸部癌学会, 2010.(東京), [口演]
- 005 神山圭史, 兵藤伊久夫, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 鈴木淳志, 宮崎卓也, 長谷川泰久, 亀井讓: 当院における複数回の遊離皮弁の検討. 第34回日本頭頸部癌学会, 2010.(東京), [口演]
- 006 水上高秀, 兵藤伊久夫, 神山圭史, 長谷川泰久, 亀井 讓: 当院における遊離空腸再建後の吻合部狭窄と放射線療法の関係. 第45回日本形成外科学会中部支部学術集会, 2010.(浜松), [口演]

- 007 神山圭史,兵藤伊久夫,杉浦英志,山田健志,亀井 譲:前腕部悪性骨・軟部腫瘍切除後の軟部組織欠損に対する再建.第43回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京),[ポスター]
- 008 神山圭史,兵藤伊久夫,水上高秀,杉浦英志,山田健志,浜田俊介,亀井 譲:複数の有茎皮弁により臀部悪性軟部腫瘍切除後の広範な欠損を再建した1例.第221回整形外科集談会東海地方会,2010.(名古屋),[口演]
- 009 神山圭史,兵藤伊久夫,水上高秀,杉浦英志,山田健志,浜田俊介:大腿内側穿通枝皮弁により下腿近位を再建した1例.第56回日本形成外科学会中部支部 東海地方会,2010.(岐阜),[口演]
- 010 神山圭史,兵藤伊久夫,杉浦英志,山田健志,浜田俊介:腰臀部悪性軟部腫瘍広範切除後欠損に対して複数の有茎皮弁を用いた2例.第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[ポスター]
- 011 兵藤伊久夫,神山圭史,水上高秀,亀井 譲:当院における遊離皮弁再建後の術後管理.第37回日本マイクロサージャリー学会学術集会,2010.(名古屋),[口演]
- 012 兵藤伊久夫,神山圭史,水上高秀,亀井 譲:移植床血管としての内胸静脈～逆行性静脈吻合の利用～.第37回日本マイクロサージャリー学会学術集会,2010.(名古屋),[口演]
- 013 神山圭史,兵藤伊久夫,水上高秀,杉浦英志,山田健志,浜田俊介,亀井 譲:遊離皮弁による背部再建.第37回日本マイクロサージャリー学会学術集会,2010.(名古屋),[口演]
- 014 水上高秀,兵藤伊久夫,神山圭史,長谷川泰久,亀井 譲:当院における遊離空腸再建後の嚥下障害と放射線照射の関係.第37回日本マイクロサージャリー学会学術集会,2010.(名古屋),[口演]
- 015 神山圭史,兵藤伊久夫,水上高秀,杉浦英志,山田健志,浜田俊介,金光幸秀:切除により側腹部の広範な欠損を生じた大腸癌の1例.第25回骨軟部腫瘍治療法検討会,2010.(名古屋),[口演]
- 016 兵藤伊久夫,神山圭史,水上高秀,亀井 譲:頭頸部再建時の腹直筋皮弁の採取と閉創の工夫.第16回形成外科手術手技研究会,2011.(大阪),[口演]
- 017 水上高秀,兵藤伊久夫,神山圭史,亀井 譲:遊離組織移植におけるICG蛍光血管造影を用いた血管吻合部の血流評価.第57回日本形成外科学会中部支部 東海地方会,2011.(名古屋),[口演]
- 018 兵藤伊久夫,神山圭史,水上高秀,長谷川泰久,寺田聡広,花井信宏,小沢泰次郎,平川 仁,鈴木淳志,宮崎拓也,原田生功磨,岡本啓希,亀井 譲:頭頸部再建時の腹直筋皮弁の採取と閉創の工夫.第28回東海頭頸部腫瘍研究会,2011.(名古屋),[口演]
- 019 神山圭史,兵藤伊久夫,水上高秀,長谷川泰久,寺田聡広,花井信宏,小沢泰次郎,平川 仁,鈴木淳志,宮崎拓也,原田生功磨,岡本啓希,立花英二,齊藤 清,亀井 譲:頭蓋底手術後遊離皮弁再建における照射の影響.第27回東海頭蓋底外科研究会,2011.(名古屋),[口演]
- 001 *Mitsudomi T*:The role of EGFR-TKIs in the first-line setting. Lung Cancer Summit 2010.2010.4.17,(Athens,Greece),[特別講演]
- 002 *Mitsudomi T*:Targeted therapy of lung cancer - EGFR mutations and beyond. The 15th Taiwan Joint Cancer Conference,2010.5.1,(Taipei),[特別講演]
- 300 *Mitsudomi T,Suda K,Tomozawa K,Yatabe Y*:Clinicopathologic features of early stage lung cancer with EML4-ALK translocation. American Society of Clinical Oncology annual meeting,2010.6.4-8,(Chicago),[general poster]
- 004 *Mitsudomi T*:EML4-ALK:Clinical data. 4th Asian Pacific Perspectives in Lung Cancer,2010.9.4,(Hong Kong),[特別講演]
- 005 *Mitsudomi T*:How did EGFR mutation testing become routine in Japan? AstraZeneca sponsored satellite symposium,35th ESMO congress,2010.10.8,(Milan,Italy),[シンポジウム]
- 006 *Mitsudomi T*:Molecular targeting with tyrosine kinase inhibitors. AstraZeneca foundation 2010 symposium "Personalized lung cancer care".2010.11.13,(Leuven,Belgium),[シンポジウム]
- 007 *Mitsudomi T*:Target therapy of lung cancer ... EGFR mutation and beyond. Yonsei Cancer Research Institute- Severance Lung Cancer Clinic Mini-symposium,2010.12.2,(Seoul,Korea),[シンポジウム]
- 008 *Mitsudomi T*:EGFR-TKi in the first treatment option for patients with lung cancer harboring EGFR mutation. AstraZeneca satellite symposium,4th Asia Pacific Lung Cancer Conference,2010.12.4,(Seoul,Korea),[シンポジウム]
- 009 *Mitsudomi T*:What is the next option for acquired resistance to EGFR-TKIs? 4th Asia Pacific Lung Cancer Conference,2010.12.4,(Seoul,Korea),[シンポジウム]
- 010 *Mitsudomi T*:beyond EGFR,KRAS,ALK:What else? European Multidisciplinary Conference in Thoracic Oncology,2011.2.26,(Lugano,Switzerland),[シンポジウム]
- 011 *Mitsudomi T*:Japanese studies. EGFR summit,2011.3.4-5,(London),[口演]
- 012 *Mitsudomi T,Yatabe Y*:Mutation heterogeneity. EGFR summit,2011.3.4-5,(London),[口演]
- 013 *Hatooka T,Abe T,Saito T,Niwa Y,Ito S,Fukui T,Mitsudomi T,Sabinoda M*:Salvage esophagectomy in patients with thoracic esophageal cancer. 12th World Congress of the International Society for the Diseases of the Esophagus,2010.9.2-5,(Kagoshima),[Poster session]
- 014 *Suda K,Murakami I,Katayama T,Tomizawa K,Osada H,Sekido Y,Yatabe Y,Mitsudomi T*:Reciprocal and Complementary Relationship between Epidermal Growth Factor Receptor T790M Mutation and MET Amplification in Acquired Resistance to Kinase Inhibitors in Lung Adenocarcinoma. 4th Asia Pacific Lung Cancer Conference,2010.(Seoul),[口演]

- 015 *Niwa Y, Hatoooka S, Abe T, Saito T, Fukui T, Ito S, Mitsudomi T, S binoda M*: Clinical features of the patients with anastomotic leak after esophagectomy. 12th World Congress of the International Society for Diseases of the Esophagus, 2010. (Kagoshima), [ポスター]
- 016 光富徹哉: Oncogene addiction と肺癌の分子標的治療 EGFR-TKIを中心に. Chugai Lung Cancer Symposium in Osaka 2010. 2010.3.26. (大阪), [特別講演]
- 17 光富徹哉: オンコロジストとしての外科医に求められる基礎研究とは何か. 第110回日本外科学会定期学術集会, 2010.4.8. (名古屋), [シンポジウム]
- 018 光富徹哉: Oncogene addiction と肺癌の分子標的治療 EGFR-TKIを中心に. 横浜肺癌化学療法セミナー, 2010.5.28. (横浜), [特別講演]
- 019 光富徹哉: 肺癌の分子標的治療 EGFR-TKIをとりまく諸問題. 第8回 呼吸器 Up to date Osaka, 2010.6.26. (大阪), [特別講演]
- 020 光富徹哉: 新TNM分類と日本肺癌学会取り扱い規約. 第25回日本肺癌学会ワークショップ, 2010.7.3. (東京), [シンポジウム]
- 021 光富徹哉: 新TNM分類の諸問題. 第50回日本肺癌学会九州支部会ランチョンセミナー, 2010.7.10. (福岡), [特別講演]
- 022 光富徹哉: Oncogene addiction と肺癌の分子標的治療. 第15回三重肺癌キモセラピー研究会, 2010.7.16. (津), [特別講演]
- 023 光富徹哉: 肺癌: どこまで治せるようになったか?. 金沢市医師会 第35回学術セミナー, 2010.8.1. (金沢), [特別講演]
- 024 光富徹哉: 新TNM分類と日本肺癌学会取り扱い規約. 第64回日本食道学会学術集会, 2010.9.1. (久留米), [シンポジウム]
- 025 *Mitsudomi T, Suda K, Tomizawa K, Yatabe Y*: Future perspectives of EGFR-TKI therapy in lung cancer. 第69回日本癌学会学術集会, 2010.9.23. (大阪), [シンポジウム]
- 026 *Mitsudomi T*: Therapeutic strategies based on biological markers ...EGFR mutations and beyond. 第51回日本肺癌学会総会, 2010.11.4. (広島), [プレジデンシャルシンポジウム]
- 027 光富徹哉: EGFR遺伝子変異検査で進む肺がんの個別化治療. 第49回日本臨床細胞学会秋季大会 ランチョンセミナー, 2010.11.22. (神戸), [特別講演]
- 208 光富徹哉: 肺癌の分子標的治療 EGFR-TKIを中心に. 平成22年度 神戸大学大学院医学研究科 先端医学トピックス, 2010.12.14. (神戸), [特別講義]
- 029 光富徹哉: 肺癌の分子マーカーに基づく個別化医療. New Year Seminar, 2011.1.7. (福岡), [特別講演]
- 030 光富徹哉: 肺がん治療の最近の進歩. 医療シンポジウム がんを知りがんとともに生きる vol 2, 2011.3.26. (大阪), [特別講演]
- 031 波戸岡俊三, 安部哲也, 齋藤卓也, 丹羽由紀子, 福井高幸, 伊藤志門, 光富徹哉, 篠田雅幸: 食道がんにおける新stage分類(UICC分類)の検討 第65回日本消化器外科学会総会, 2010. (下関), [ポスター]
- 032 波戸岡俊三, 安部哲也, 丹羽由紀子, 齋藤卓也, 厚田幸子, 福井高幸, 伊藤志門, 光富徹哉, 篠田雅幸: 胸部食道癌における salvage surgery の治療成績 第64回日本食道学会総会, 2010. (久留米), [ポスター]
- 033 波戸岡俊三, 安部哲也, 丹羽由紀子, 福井高幸, 伊藤志門, 光富徹哉, 篠田雅幸: 食道がんからみた他臓器重複癌の解析 第62回日本気管食道科学会総会, 2010. (別府), [パネルディスカッション]
- 034 波戸岡俊三: 食道癌手術手技の実際と周術期管理. 第1回千葉胸部外科手術手技・管理研究会, 2011. (千葉), [教育講演]
- 035 伊藤志門, 福井高幸, 波戸岡俊三, 光富徹哉, 安元公正: 肺癌術後経過観察における画像検査の意義. 日本呼吸器外科学会, 2010. (仙台), [ポスター]
- 036 福井高幸, 光富徹哉, 伊藤志門, 樋田豊明, 堀尾芳嗣, 足立崇, 冲昌英, 坂英雄, 澤祥幸, 杉浦孝彦: 縦隔リンパ節転移を有するIIIA期非小細胞肺癌に対する術前化学療法と術前同時放射線併用化学療法の第III相比較試験(WJTOG9903) -中途中止結果-. 第97回中部肺癌学会, 2010. (岐阜), [口演]
- 037 福井高幸, 小林祥久, 厚田幸子, 丹羽由紀子, 伊藤志門, 安部哲也, 波戸岡俊三, 光富徹哉: 非小細胞肺癌の術前リンパ節転移診断に有用な因子. 第63回日本胸部外科学会, 2010. (大阪), [口演]
- 038 福井高幸, 小林祥久, 厚田幸子, 丹羽由紀子, 伊藤志門, 安部哲也, 波戸岡俊三, 光富徹哉: 2 cm以下肺腺癌の臨床病理学的特徴と予後因子. 第51回日本肺癌学会, 2010. (広島), [口演]
- 039 小林祥久, 福井高幸, 尾関直樹, 厚田幸子, 丹羽由紀子, 遠藤秀紀, 伊藤志門, 安部哲也, 波戸岡俊三, 光富徹哉: A401 肺癌術後に肺塞栓を発症した3例. 第34回愛知臨床外科学会, 2010. (名古屋), [口演]
- 040 小林祥久, 福井高幸, 尾関直樹, 厚田幸子, 丹羽由紀子, 遠藤秀紀, 設楽紘平, 伊藤志門, 安部哲也, 波戸岡俊三, 谷田部恭, 光富徹哉: 16. 肺類上皮血管内皮腫の2切除例. 第97回中部肺癌学会, 2010. (岐阜), [口演]
- 041 小林祥久, 福井高幸, 須田健一, 富沢健二, 厚田幸子, 丹羽由紀子, 伊藤志門, 安部哲也, 波戸岡俊三, 光富徹哉: O-4. チロシンキナーゼ阻害剤に対する耐性獲得後にペメトレキセドが有効であった肺癌の3例. 第51回日本肺癌学会総会, 2010. (広島), [口演]
- 042 須田健一, 富沢健二, 小野里良一, 高坂貴行, 厚田幸子, 丹羽由紀子, 福本紘一, 片山達也, 福井高幸, 伊藤志門, 安部哲也, 波戸岡俊三, 谷田部恭, 光富徹哉: 術後早期に再発をきたしたEGFR 遺伝子変異陽性肺癌患者に対するゲフィチニブ治療効果. 第110回日本外科学会定期学術総会, 2010. (名古屋), [サージカルフォーラム]
- 043 *Suda K, Murakami I, Katayama T, Tomizawa K, Osada H, Sekido Y, Yatabe Y, Mitsudomi T*: Reciprocal relationship between EGFR T790M and MET amplification in acquired resistance to EGFR-TKIs in lung cancer. 第69回日本癌学会総会, 2010. (大阪), [ワークショップ]
- 044 須田健一, 村上功, 片山達也, 富沢健二, 関戸好孝, 谷田部恭, 光富徹哉: EGFR-TKI耐性獲得メカニズムにおけるEGFR T790M変異とMET遺伝子増幅の相反関係. 第51回日本肺癌学会総会, 2010. (広島), [ワークショップ]
- 045 富沢健二, 須田健一, 厚田幸子, 丹羽由紀子, 小野里良一, 福本紘一, 齋藤卓也, 高坂貴行, 片山達也, 福井高幸, 伊藤志門, 安部

- 哲也,波戸岡俊三,光富徹哉:一般口演:日本人原発性肺癌切除例におけるHER4の発現と細胞外ドメインとキナーゼドメインの遺伝子変異解析. 第110回日本外科学会総会, 2010.(名古屋),[口演]
- 046 Tomizawa K,Suda K,Onozato R,Yatabe Y,Mitsudomi T:ポスター: Clinicopathological Features of Lung Cancers with HER2 Mutation. 第69回日本癌学会総会,2010.(大阪),[ポスター]
- 047 富沢健二,須田健一,小野里良一,福井高幸,伊藤志門,谷田部恭,光富徹哉:一般口演: HER2変異陽性肺癌の臨床病理学的特徴と標的治療の可能性. 第51回日本肺癌学会総会,2010.(広島),[口演]
- 048 丹羽由紀子,波戸岡俊三,安部哲也,齊藤卓也,厚田幸子,小野里良一,福本紘一,片山達也,伊藤志門,福井高幸,光富徹哉,篠田雅幸:食道癌周術期Intensive Insulin Therapy における目標血糖値の至適範囲の検討. 第110回日本外科学会定期学術集会,2010.(名古屋),[口演]
- 049 丹羽由紀子,波戸岡俊三,安部哲也,齊藤卓也,厚田幸子,福井高幸,伊藤志門,光富徹哉,篠田雅幸:食道癌術後縫合不全の検討. 第64回日本食道学会学術集会,2010.(久留米),[ポスター]
- 050 丹羽由紀子,波戸岡俊三,安部哲也,齊藤卓也,青山寿昭,小林祥久,尾関直樹,厚田幸子,遠藤秀紀,福井高幸,伊藤志門,光富徹哉,篠田雅幸:胸部外食道癌術後早期嚥下リハビリテーション. 第65回日本消化器外科学会大会,2010.(下関),[ポスター]
- 051 丹羽由紀子,波戸岡俊三,安部哲也,齊藤卓也,厚田幸子,小野里良一,福本紘一,片山達也,伊藤志門,福井高幸,光富徹哉,篠田雅幸:食道癌周術期呼吸器合併症と「肺年齢」について. 第53回関西胸部外科学会学術集会,2010.(名古屋),[口演]
- 052 丹羽由紀子,福井高幸,小林祥久,尾関直樹,厚田幸子,遠藤秀紀,伊藤志門,安部哲也,波戸岡俊三,光富徹哉:肺切除後に乳糜心嚢水貯留を合併した一例. 第34回愛知臨床外科学会,2010.(名古屋),[口演]
- 053 厚田幸子,福井高幸,丹羽由紀子,福本紘一,小野里良一,齊藤卓也,片山達也,伊藤志門,安部哲也,波戸岡俊三,光富徹哉:80歳以上非小細胞肺癌切除例の検討. 第27回日本呼吸器外科学会,2010.(仙台),[示説]
- 054 厚田幸子,伊藤志門,尾関直樹,小林祥久,丹羽由紀子,遠藤秀紀,福井高幸,安部哲也,波戸岡俊三,光富徹哉:80歳以上高齢者肺癌症例における手術例と非手術例の検討. 第51回日本肺癌学会,2010.(広島),[ワークショップ]
- 055 厚田幸子,伊藤志門,尾関直樹,小林祥久,丹羽由紀子,遠藤秀紀,福井高幸,安部哲也,波戸岡俊三,光富徹哉:80歳以上高齢者非小細胞肺癌手術症例の検討. 第6回名古屋肺癌外科研究会,2011.(名古屋),[口演]
- Fulvestrant in Japanese vs non-Japanese postmenopausal women with advanced breast cancer (FINDER1 AND FINDER2). 7th European Breast Cancer Conference,(2010),(Barcelona),[poster]
- 002 Iwata H,Aogi K,Masuda N,Mukai H,Yoshida M,Rai Y,Taguchi K,Sasaki Y,Takashima S:Efficacy and safety of ERIBULIN in Japanese patients (PTS) with advanced breast cancer. ASCO Annual Meeting,(2010),(Chicago),[poster session]
- 003 Fujita T,Hayashi H,Hattori M,Horio A,Yamada M,Ushio A,Godou N,Adachi E,Sueta A,Iwata H:An approach for the differential diagnosis of primary lung cancer and breast cancer relapse presenting as a solitary pulmonary nodule in patients after breast surgery. 33th San Antonio Breast Cancer Symposium,(2010),(San Antonio),[poster]
- 004 Sagara Y,Masuda N,Iwata H,Nakamura S,Yanagita Y,Nisimura R,Iwase H,Kamigaki S,Takei H,Noguchi S:The stage study:A phase III comparison anastrozole plus goserelin with tamoxifen plus goserelin as pre-operative treatments in premenopausal breast cancer patients. 33th San Antonio Breast Cancer Symposium,(2010),(San Antonio),[poster]
- 005 岩田広治:術前薬物療法と画像診断 -術前ホルモン療法を中心にして-. 第24回日本乳腺甲状腺超音波診断会議,(2010),(仙台),[ランチョンセミナー]
- 006 岩田広治:血管新生を標的とした分子標的薬. 第18回日本肺癌学会総会,(2010),(札幌),[パネルディスカッション]
- 007 岩田広治:再発・乳癌治療における新たな治療戦略. 第18回日本肺癌学会総会,(2010),(札幌),[ランチョンセミナー]
- 008 岩田広治:乳癌術前内分泌療法の意義と臨床試験の展望. 第48回日本癌治療学会,(2010),(京都),[ワークショップ]
- 009 岩田広治:再発乳癌の個別化治療戦略. 第48回日本癌治療学会,(2010),(京都),[学術セミナー]
- 010 岩田広治:開業医が知ってほしい乳癌のABC-今後の地域連携を目指して-. 熱田区医師会講演会,(2011),(名古屋),[講演]
- 011 藤田崇史,林裕倫,安藤由明,堀尾章代,波戸ゆかり,豊島千絵子,山田舞,岩田広治:超音波ガイド下吸引式針生検の診断精度の検討. 第110回日本外科学会総会,(2010),(名古屋),[口演]
- 012 藤田崇史,林裕倫,安藤由明,堀尾章代,波戸ゆかり,豊島千絵子,山田舞,岩田広治:局所・領域再発例の検討による乳房切除後放射線治療の適応. 第18回日本肺癌学会総会,(2010),(札幌),[パネルディスカッション]
- 013 藤田崇史,岩田広治,矢田部恭:乳癌術後症例における肺腫瘍陰影に対する鑑別診断. 第63回日本胸部外科学会総会,(2010),(大阪),[口演]
- 014 藤田崇史,林裕倫,服部正也,堀尾章代,山田舞,末田愛子,牛尾文,足立理恵,権藤なおみ,岩田広治:腫瘍像非形成病変に対する超音波ガイド下マンモトーム生検の検討. 第20回日本肺癌検診学会総会,(2010),(福岡),[口演]
- 015 堀尾章代:ステレオマンモトーム(ST-MMT)生検にてDCISと診断された症例にセンチネルリンパ節生検(SLNB)の省略は可能か. 日本外科学会,(2010),(名古屋),[一般口演]
- 016 堀尾章代:腫瘍径1cm以下のリンパ節転移陰性H E R 2陽

乳腺科部

- 001 Iwata H,Obno S,Rai Y,Yamamoto N,Yoshida M,Iwase H,Lindemann J,Macpherson M,Noguchi S,Pritchard K.F:Comparison of two PHASE II trials evaluating three dosing regimens of

性乳癌の予後と術後治療の検討.日本乳癌学会,(2010),(札幌),[一般口演]

- 017 林裕 倫,藤田崇史,波戸ゆかり,堀尾章代,岩田広治:術中センチネルリンパ節生検での微小転移症例に腋窩郭清は必要か.日本乳癌学会,(2010),(札幌),[口演]

消化器外科部

- 001 Sawaki A, Yamao K, Hara K, Hijioka S, Mizuno N, Imamura H, Senda Y, Sano T, Shimizu Y, Nimura Y: SURGICAL VERSUS NON-SURGICAL APPROACH FOR THE MANAGEMENT OF PANCREATIC CANCER WITH VENOUS OR PLEXUS INVASION. 第9回9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association,2010.(Buenos Aires,Argentina)[口演].

- 002 Sano T, Shimizu Y, Senda Y, Shimada K, Nimura Y: STANDARD LEFT HEMIHEPATECTOMY FOR HILAR CHOLANGIOCARCINOMA AT A JAPANESE CANCER CENTER. 第9回9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association,2010.(Buenos Aires,Argentina)[ビデオ].

- 003 Sano T, Shimizu Y, Senda Y, Shimada K, Nimura Y: CENTRAL HEPATIC BISECTIONECTOMY, CAUDATE LOBECTOMY FOR A HEPATOCELLULAR CARCINOMA ORIGINATING IN THE CAUDATE LOBE. 第9回9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association,2010.(Buenos Aires,Argentina)[ビデオ].

- 004 Sano T, Shimizu Y, Senda Y, Yamao K, Nimura Y: SURGICAL OUTCOME FOR PANCREAS BODY AND TAIL CANCER. 第9回9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association,2010.(Buenos Aires,Argentina)[示説].

- 005 Hijioka S, Yamao K, Sawaki A, Haea K, Mizuno N, Imamura H, Senda Y, Sano T, Shimizu Y, Nimura Y: DIAGNOSTIC UTILITY OF EUS-GUIDED FNA FOR DIAGNOSIS OF GALLBLADDER MASS. 第9回9th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association,2010.(Buenos Aires,Argentina)[示説].

- 006 Sano T, Sasako M, Shibata T, Yamamoto S, Tsuburaya A, Nashimoto A, Ito S, Kaji M, Furukawa H, Fukushima N: Randomized controlled trial to evaluate splenectomy in total gastrectomy for proximal gastric carcinoma (JCOG0110): Analyzes of operative morbidity, operation time, and blood loss. 第46回 American Society of Clinical Oncology,2010.(Chicago)[口演].

- 007 Hijioka S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Imamura H, Kobayashi Y, Matsumoto K, Mohammad M, Senda Y, Sano T, Shimizu Y, Niwa Y, Yamao K: Value of EUS and EUS-FNA for Diagnosing Metastatic Pancreatic Cancer. 第14回国際膵臓学会・第41回日本膵臓学会大会合同会議,2010.(福岡)[口演].

- 008 Kinoshita T, Uesaka K, Shimizu Y, Sakamoto H, Kimura W: Effects

of Adjuvant Intra-operative Radiation Therapy Curative Resection in Pancreatic Cancer Patients: Results of a Randomized Study by 11 Institutions in Japan. 第14回国際膵臓学会・第41回日本膵臓学会大会合同会議,2010.(福岡)[口演].

- 009 Shimizu Y, Sano T, Senda Y, Ando M, Mizuno N, Hara K, Osanai M, Maguchi H, Yamao K: A Nomogram for Predicting the Probability of Carcinoma in Patients with Intraductal Papillary-mucinous Neoplasm - Internal and External Validity-. 第14回国際膵臓学会・第41回日本膵臓学会大会合同会議,2010.(福岡)[示説].

- 010 Ando M, Yanagisawa A, Shimizu Y, Sano T, Senda Y, Yamao K, Nagino M: Characteristics and Prognosis of Invasive Pancreatic Ductal Adenocarcinoma Originating from a Branch Pancreatic Duct. 第14回国際膵臓学会・第41回日本膵臓学会大会合同会議,2010.(福岡)[示説].

- 011 Ito S, Kodera Y, Mochizuki Y, Yamamura Y, Nakanishi H: Updated results of a phase II trial of postoperative S-1 monotherapy for CEA mRNA (+) gastric cancer patients. 第9回 International Conference of The Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu)[口演].

- 012 Kanemitsu Y: The relationship of lymph node dissection and colorectal cancer survival after curative resection - multi-institutional study in Japan. 第9回アジア臨床腫瘍学会(ACOS),2010.(岐阜)[口演].

- 013 Matsui S, Shimizu Y, Sano T, Senda Y, Kanemitsu Y, Ito S, Komori K, Misawa K, Ito Y, Hirai T, Nimura N: The Clinical Outcome of Hepatectomy for Colorectal Liver Metastasis after FOLFOX Chemotherapy. 第9回9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society,2010.(Gifu,Japan)[示説].

- 014 Shitara K, Muro K, Matsuo K, Ito S, Sawaki A, Kawai H, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T: Association of folate intake and outcome of patients with advanced gastric cancer treated with first-line fluorouracil-based chemotherapy. 第46回 American Society of Clinical Oncology,2011.(Chicago)[口演].

- 015 三澤一成, 伊藤誠二, 伊藤友一, 金光幸秀, 森 政索, 林 雄一郎, 中村一郎, 森本 守, 千田嘉毅, 小森康司, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 医用画像処理システム(New VES)を用いた腹部外科手術支援. 第110回日本外科学会,2010.(名古屋)[ワークショップ].

- 016 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 安藤公隆, 松井 聡, 二村雄次: 転移性膵癌切除例の検討. 第110回日本外科学会,2010.(名古屋)[口演].

- 017 金光幸秀, 加藤知行, 清水泰博, 島田安博, 森谷亘皓, 中村健一, 福田治彦: 大腸癌術後補助療法に関するJCOG studyの概要. 第110回日本外科学会,2010.(名古屋)[口演].

- 018 山浦秀和, 稲葉吉隆, 宮村廣樹, 清水泰博, 土田龍郎, 黄義孝: 99mTc-GSA dynamic SPECTによる術前残肝予備能評価とICG Kremとの比較. 第69回日本放射線学会,2010.(横浜)

- [サージカルフォーラム].
- 019 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 二村雄次: 膵内分泌腫瘍の術後成績と治療方針の検討. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 020 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 二村雄次, 柳沢昭夫: 小膵癌37例の臨床病理学的検討. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 021 平井 孝, 金光幸秀, 小森康司, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一: 直腸癌側方リンパ節転移に対する治療展望. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 022 小森康司, 金光幸秀, 榎原 巧, 加藤知行, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 森本守, 松井 聡, 金城和寿, 志村正博, 平井 孝: 直腸pMP癌の側方リンパ節郭清の適応—腫瘍浸潤様式とリンパ節転移の関係について—. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 023 江崎 稔, 島田和明, 阪本良弘, 奈良 聡, 小菅智男, 佐野 力: 当科で行われたRCTの結果・問題点と将来への展望. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 024 木下平, 中郡聡夫, 上坂克彦, 清水泰博, 坂本裕彦, 木村理, 砂田祥司, 今泉俊英, 尾澤慶, 岡本篤武, 小田竜也: 膵癌治療切除後の補助療法としての術中放射線治療(IORT)の意義を問うRCT. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[ワークショップ].
- 025 松井 聡, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 平井 孝, 二村雄次: FOLFOLFOX化療後に切除した大腸癌肝転移症例の治療成績と肝障害害度. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 026 中村一郎, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 小森康司, 千田嘉毅, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝: 根治度B Stage IV胃癌における予後因子. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 027 伊藤誠二, 中西速夫, 小寺泰弘, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 森本守, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝: 胃癌腹膜再発予測モデルを用いたmultiple genetic markerの意義の検討. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 028 伊藤友一, 中西速夫, 伊藤誠二, 小寺泰弘, 三澤一成, 森本守, 中村一郎, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝: 胃癌術後S-1補助化学療法症例における腹腔洗浄液CEAmRNA定量法の臨床的意義に関する検討. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 029 森本 守, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝: 胃癌術後患者の縫合不全, 膵液瘻, 腹腔内膿瘍発生の予測. 第110回日本外科学会, 2010.(名古屋)[口演].
- 030 金光幸秀, 加藤知行, 清水泰博, 島田安博, 森谷宜皓, 中村健一, 福田治彦: 大腸癌術後補助療法に関するJCOG studyの概要. 第110回日本外科学会定期学術集会, 2010.(名古屋)[シンポジウム].
- 031 鈴木晴久, 山雄健次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 丹羽康生, 田近正洋, 清水泰博, 佐々木恵子, 細田和貴, 谷田部 恭: 膵内分泌腫瘍(PNET)に対する超音波内視鏡下穿刺吸引法(EUS-FNA)の臨床的有用性の検討. 第96回日本消化器病学会総会, 2010.(新潟)[口演].
- 032 清水泰博, 佐野 力, 山雄健次: 膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)の癌予測ノモグラムの作成—手術適応や経過観察法の決定のために—. 第96回日本消化器病学会総会, 2010.(新潟)[シンポジウム].
- 033 松井 聡, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 平井 孝, 二村雄次: 嚢胞成分を伴った退形成性膵管癌の1例. 第279回東海外科学会, 2010.(名古屋市)[口演].
- 034 森本 守, 平井 孝, 榎原 巧, 金光幸秀, 小森康司, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 金城和寿, 志村正博, 松井 聡, 中村一郎: pagetoid spreadをともなった肛門管癌の1例. 第279回東海外科学会, 2010.(名古屋市)[口演].
- 035 鈴木晴久, 山雄健次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 佐々木恵子, 細田和貴, 谷田部 恭: 膵内分泌腫瘍に対する超音波内視鏡下穿刺吸引法(EUS-FNA)の臨床的有用性の検討. 第79回日本消化器内視鏡学会, 2010.(東京)[口演].
- 036 三澤一成: 消化器外科における外科医の視点—外科医の目は何を見ているか—. 第回画像工学会研究会, 2010.(春日井市)[特別講演].
- 037 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 松井 聡, 小森康司, 二村雄次: 大腸癌肝転移に対する外科治療成績—待機による肝切除成績と化療後肝切除—. 第22回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2010.(仙台)[示説].
- 038 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 島田和明, 小菅智男, 二村雄次: 胆道癌に対する標準的な右肝切除. 第22回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2010.(仙台)[示説].
- 039 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 小森康司, 二村雄次, 山雄健次, 柳澤昭夫: TSI膵癌長期生存例の検討により早期膵癌の定義は可能か?. 第22回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2010.(仙台)[シンポジウム].
- 040 松井 聡, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 小森康司, 二村雄次: FOLFOLFOX化療中および術前休業期間に腫瘍が進展した大腸癌肝転移の2切除例. 第22回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2010.(仙台)[示説].
- 041 金城和寿, 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 安藤公隆, 小森康司, 松井 聡, 二村雄次: IPMN由来浸潤癌との鑑別が問題となった粘液癌の1例. 第22回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2010.(仙台)[示説].
- 042 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 島田和明, 小菅智男, 二村雄次: 胆道再建を伴わない肝中央2区域, 尾状葉切除術. 第22回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2010.(仙台)[ビデオフォーラム].
- 043 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 小森康司, 安藤公隆, 松井

- 聰, 二村雄次:退形成性膵管癌の3例. 第22回日本肝胆膵外科学会・学術集会,2010.(仙台)[示説].
- 044 石黒成治, 上原圭介, 西尾英樹, 江畑智希, 横山幸浩, 伊神剛, 菅原 元, 深谷雅秀, 板津啓太, 柳野正人:当院における術前化学療法後肝切除を施行した9症例の検討. 第22回日本肝胆膵外科学会学術集会,2010.(仙台)[口演].
- 045 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 安藤公隆, 二村雄次:広範な胆管上皮内進展のため肝切除を追加した胆嚢頸部癌の1例. 第51回東海肝胆膵外科懇談会,2010.(名古屋)[口演].
- 046 佐伯 哲, 山雄健次, 丹羽康正, 澤木 明, 田近正洋, 水野伸匡, 原 和生, 河合宏紀, 脇岡 範, 近藤真也, 赤羽麻奈, 羽場 真, 小倉 健, 佐野 力, 清水泰博:胆管内乳頭状腫瘍の一例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島市)[口演].
- 047 小倉 健, 山雄健次, 原 和生, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 近藤真也, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 羽場 真, 清水泰博, 細田和貴, 谷田部 恭:術前に膵GISTが疑われた転移性膵平滑筋肉腫の一例. 第112回日本消化器病学会東海支部例会,2010.(三島)[口演].
- 048 松井 聡, 清水泰博, 金光幸秀, 佐野 力, 千田嘉毅, 小森康司, 平井 孝, 加藤知行:FOLFOX化療後に切除した大腸癌肝転移症例の治療成績. 第73回大腸癌研究会,2010.(奄美大島)[示説].
- 049 渡邊卓哉, 小寺泰弘, 藤原道隆, 伊藤誠二, 三澤一成, 望月能成, 横山裕之, 森岡祐貴, 山村義孝, 中尾章公:早期胃癌におけるアプローチ別(開腹,腹腔鏡)の術後QOL評価臨床試験. 第65回日本消化器外科学会,2010.(下関)[口演].
- 050 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 松井 聡, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 二村雄次:大腸癌肝転移に対する化学療法後肝切除の現状-FOLFOXおよびFOLFIRI後肝切除の治療成績-. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[口演].
- 051 小森康司, 金光幸秀, 加藤知行, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 平井 孝:大腸癌におけるリンパ節内転移形態(節内限局型と節外浸潤型)は予後因子となりえるか?. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 052 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 二村雄次, 柳澤昭夫:分枝膵管原発の膵癌は予後が悪いか?. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 053 中村一郎, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 小森康司, 金光幸秀, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝:腹腔鏡補助下胃切除術における肝圧排法の比較. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 054 志村正博, 三澤一成, 中村一郎, 伊藤友一, 伊藤誠二, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝:腹腔鏡補助下胃切除術133例における learning curve の検討. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 055 三澤一成, 伊藤誠二, 中村一郎, 金光幸秀, 森健策, 蔣 振剛, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公:腹腔鏡下手術における術中ナビゲーションシステムの開発. 第65回日本消化器外科学会,2010.(下関)[示説].
- 056 金光幸秀, 平井 孝, 小森康司, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 加藤知行:腹膜外ルートを用いた側方郭清術. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[ビデオ].
- 057 金城和寿, 金光幸秀, 平井 孝, 小森康司, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 伊藤誠二:肉眼的他臓器浸潤結腸癌症例の検討. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 058 森本 守, 金光幸秀, 榊原 巧, 小森康司, 三澤一成, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝:術前・術後血清CEA値の変動パターンと根治度B stage IV大腸癌症例の予後. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 059 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 安藤公隆, 二村雄次:膵頭部癌術後膵液瘻と膵液感染・ERBDチューブ挿入との関連. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 060 松井 聡, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 平井 孝, 二村雄次:膵中央切除の治療成績. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 061 伊藤誠二, 佐野 武, 笹子三津留, 円谷 彰, 古川 洋, 福島紀雄, 藤谷和正, 種村廣巳, 中村健一, 山本精一郎, 福田治彦:高度リンパ節転移を伴う進行胃がんに対する術前DSC併用化学療法+外科切除の第II相試験. 第65回日本消化器外科学会,2010.(下関)[口演].
- 062 片井 均, 笹子三津留, 中村健一, 福田治彦, 阪 眞, 吉川貴己, 寺島正典, 伊藤誠二:臨床病期 I 期胃癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除の開腹に対する非劣性を検証する第III相試験. 第65回日本消化器外科学会,2010.(下関)[ワークショップ].
- 063 伊藤友一, 伊藤誠二, 三澤一成, 中村一郎, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝:残胃の癌についての検討. 第65回日本消化器外科学会総会,2010.(下関)[示説].
- 064 志村正博, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 二村雄次, 脇岡 範, 原 和生, 水野伸匡, 山雄健次:膵体尾部切除後に残膵全摘したIPMNの1例. 第41回肝胆膵治療研究会,2010.(名古屋)[口演].
- 065 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 安藤公隆, 二村雄次:食道癌術後に胃管温存膵頭十二指腸切除術を施行した2例. 第37回日本膵切研究会,2010.(津)[示説].
- 066 羽場 真, 原 和生, 水野伸匡, 澤木 明, 脇岡 範, 佐伯 哲, 小倉 健, 清水泰博, 細田和貴, 谷田部恭, 山雄健次:術前診断が困難であった膵腫瘍の1例. 第53回日本消化器画像診断研究会,2010.(北九州市)[口演].
- 067 肘岡 範, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 羽場 真, 小倉 健, 友野輝子, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 谷田部恭, 細田和貴, 丹羽康正, 山雄健次:胆嚢癌に対する病理学的エビデンスの効率的な取得方法の検討. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[口演].
- 068 脇岡 範, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 羽場真, 小倉健, 友野

- 輝子, 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 谷田部恭, 細田和貴, 丹羽康生, 山雄健次:胆嚢癌に対する病理学的エビデンスの効率的な取得方法の検討. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[口演].
- 069 脇岡 範, 山雄健次, 清水泰博:コンベックス型EUSによる上部/肝門部胆管癌の進展度診断～垂直方向,リンパ節転移を中心に～. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[口演].
- 070 羽場 真, 原 和生, 清水泰博:当院における切除不能/再発胆道癌に対する化学療法の成績. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[ワークショップ].
- 071 脇岡 範, 山雄健次, 清水泰博:コンベックス型EUSによる上部/肝門部胆管癌の進展度診断～垂直方向,リンパ節転移を中心に～. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[口演].
- 072 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金光幸秀, 平井 孝, 原 和生, 水野伸匡, 山雄健次, 二村雄次:膵IPMNを併存した胆管内乳頭状腫瘍(IPNB)の1例. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[示説].
- 073 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 松井 聡, 小森康司, 二村雄次, 原 和生, 山雄健次:膵頭十二指腸切除術後3年6ヵ月で左肝管断端に再発した胆管癌の1例. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[示説].
- 074 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金光幸秀, 平井 孝, 原 和生, 山雄健次, 二村雄次:肝門部胆管癌に対する肝左3区域切除時の肝動脈再建に左肝動脈を用いた1例. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[示説].
- 075 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野力, 小森康司, 安藤公隆, 二村雄次:広範な胆管上皮内進展のため肝切除を追加した胆嚢頸部癌の1例. 第46回日本胆道学会,2010.(広島)[示説].
- 076 羽場 真, 原 和生, 水野伸匡, 澤木 明, 脇岡 範, 佐伯哲, 小倉 健, 友野輝子, 清水 怜, 清水泰博, 谷田部 恭, 山雄健次:石灰化を伴った主膵管型IPMNの1例. 第67回東海胆道研究会,2010.(名古屋)[口演].
- 077 志村正博, 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 二村雄次:肝angiomyolipomaの1例. 第280回東海外科学会,2010.(岐阜)[口演].
- 078 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金光幸秀, 平井 孝, 脇岡 範, 山雄健次, 二村雄次:膵胆管合流異常を伴い陶器様胆嚢を合併した胆嚢頸部癌の1例. 第18回日本消化器病関連学会週間(JDDW)ー消化器病学会,2010.(横浜)[示説].
- 079 小森康司, 平井 孝, 金光幸秀, 榎原 巧, 清水泰博, 佐野力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 松井 聡, 森本 守, 金城和寿, 志村正博, 加藤知行:術前生検におけるDesmoplastic reaction(DR)の有無はリンパ節転移の危険因子およびリンパ節転移を予測できるか?. 第18回日本消化器病関連学会週間(JDDW)ー消化器外科学会,2010.(横浜)[示説].
- 080 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金光幸秀, 平井 孝, 二村雄次:全身化学療法施行後に左3区域切除,肝動脈門脈合併切除を行った肝門部胆管癌の1例. 第18回日本消化器病関連学会週間(JDDW)ー消化器外科学会,2010.(横浜)[示説].
- 081 金城和寿, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 平井孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 二村雄次:同時性両葉多発肝転移を伴う膵悪性内分泌腫瘍に対し集学的治療を施行中の1例. 第18回日本消化器病関連学会週間(JDDW)ー消化器外科学会,2010.(横浜)[示説].
- 082 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 安藤公隆, 二村雄次:膵全摘を施行したIPMNの6例. 第18回日本消化器病関連学会週間(JDDW)ー消化器外科学会,2010.(横浜)[示説].
- 083 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 二村雄次, 山雄健次, 柳澤昭夫:分枝膵管原発浸潤性膵管癌における初期病変の特徴と予後. 第18回日本消化器病関連学会週間(JDDW)ー消化器外科学会,2010.(横浜)[示説].
- 084 中村一郎, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 下松谷匠, 中村誠昌, 谷口正展:腹腔鏡補助下幽門胃切除術を施行したintravenous leiomyomatosisの1例. 第23回日本内視鏡外科学会総会,2010.(横浜)[口演].
- 085 三澤一成, 伊藤誠二, 伊藤友一, 森本守, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 平井孝:腹腔鏡下胃切除術における術前血管分岐診断に基づいたリンパ節郭清の工夫と定型. 第23回日本内視鏡外科学会総会,2010.(横浜)[口演].
- 086 大橋紀文, 小寺泰弘, 伊藤誠二, 望月能成, 越川克己, 近藤建, 小島宏, 小島泰樹, 松井隆則, 坪井賢治, 高瀬恒信, 藤原道隆, 中尾昭公:腹膜転移陽性胃癌に対する治療戦略 手術時CY1症例に対する術後S-1療法の治療成績から. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[口演].
- 087 設楽紘平, 松尾恵太郎, 横田知哉, 高張大亮, 宇良敬, 近藤千紘, 溝田綾子, 野村基雄, 澤木 明, 田近正洋, 河合宏紀, 伊藤誠二, 室 圭:進行胃癌に対する二次治療としてのweekly paclitaxel中の好中球減少と予後の検討. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[口演].
- 088 山田健志, 宇良 敬, 金光幸秀, 小澤英史, 室 圭, 平井 孝, 杉浦英志:骨転移の治療 大腸癌骨転移に対する治療方針. 第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都)[パネルディスカッション].
- 089 茅野貴洋, 目加田慶人, 森 健策, 三澤一成:部分空間法による腹腔鏡手術シーン分類の検討. 第19回日本コンピューター外科学会,2010.(福岡)[].
- 090 蔣振剛, 二村幸孝, 北坂孝幸, 三澤一成, 藤原道隆, 梶田泰一, 若林俊彦, 森健策:ポリリウムレンダリング画像におけるテキスト情報の表示手法とその手術支援画像生成の応用. 第19回日本コンピューター外科学会,2010.(福岡)[].
- 091 ブイフイ・ホアン, 小田昌宏, 北坂孝幸, 三澤一成, 藤原道隆, 森 健策:3次元腹部CT像における下腹部血管への血管名自動命名に関する研究. 第19回日本コンピューター外科学会,2010.(福岡)[口演].
- 092 三澤一成, 伊藤誠二, 伊藤友一, 金光幸秀, 小森康司, 千田嘉毅, 佐野力, 清水泰博, 林雄一郎, 蔣振剛, 小田昌宏, 森 健策, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公:腹腔鏡下手術における術

- 中ナビゲーションシステムの開発と臨床応用. 第19回日本コンピュータ外科学会,2010.(福岡)[口演].
- 093 中村嘉彦, 北坂孝幸, 水野慎士, 古川和宏, 後藤秀実, 藤原道隆, 三澤一成, 伊藤雅昭, 縄野繁, 森 健策:3次元腹部X線CT像からのリンパ節検出手法の開発. 第19回日本コンピュータ外科学会,2010.(福岡)[口演].
- 094 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 伊藤友一, 三澤一成, 小森康司, 伊藤誠二, 金光幸秀, 平井 孝, 二村雄次:浸潤性膵管癌に対する膵頭十二指腸切除:空腸を最後に切離して切除終了. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[ビデオ].
- 095 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 二村雄次, 柳澤昭夫:腫瘍径1cm以下通常型膵癌切除例の検討. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[示説].
- 096 三澤一成, 伊藤誠二, 伊藤友一, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝:巾着縫合器(PSI)専用軟性直針の開発と臨床使用経験. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[口演].
- 097 森本 守, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金城和寿, 服部憲史, 松井 聡, 小森康司, 金光幸秀, 大澤高陽, 志村正博, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博:腹腔鏡補助下胃癌手術後の縫合不全・膵液瘻・腹腔内膿瘍発生の予測. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[口演].
- 098 伊藤友一, 伊藤誠二, 三澤一成, 望月能成, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝, 山村義孝:胃癌取扱い規約第14版によるステージ分類の有用性と問題点についての検討. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[口演].
- 099 松井 聡, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 森本 守, 志村正博, 服部憲史, 大澤高陽, 平井 孝, 二村雄次:化学療法後に画像上CRとなった大腸癌肝転移の転帰(化療後肝切除27例での検討). 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[口演].
- 100 金城和寿, 伊藤友一, 三澤一成, 小森康司, 千田嘉毅, 金光幸秀, 伊藤誠二, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝:膵粘液性嚢胞腫瘍(MCN)と鑑別困難であった胃原発気管支嚢胞の1例. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[示説].
- 101 服部憲史, 金光幸秀, 平井孝, 小森康司, 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 光富徹也, 福井高幸, 伊藤友一, 三澤一成, 伊藤誠二:結腸・直腸癌の肺・肝転移に対する治療戦略 大腸癌肝・肺転移切除症例の検討ー肺転移単独と肝肺2臓器転移との比較. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[パネルディスカッション].
- 102 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 安藤公隆, 二村雄次, 山雄健次, 真口宏介:膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)の癌予測ノモグラム-internal and external validity-. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[要望演題].
- 103 金光幸秀, 平井孝, 小森康司, 清水泰博, 佐野力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一:大腸がんに対する標準的手術 大腸癌に対する中枢側リンパ節郭清の至適範囲. 第72回第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[シンポジウム].
- 104 小森康司, 金光幸秀, 清水泰博, 佐野力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 平井 孝, 加藤知行:当院における横行結腸癌に対する開腹(D3郭清)手術. 第72回日本臨床外科学会総会,2010.(横浜)[ビデオ].
- 105 金光幸秀, 平井孝, 小森康司, 清水泰博, 佐野力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一:大腸癌に対する標準的手術 大腸癌に対する中枢側リンパ節郭清の至適範囲. 第72回日本臨床外科学会,2010.(横浜)[口演].
- 106 佐伯 哲, 澤木 明, 丹羽康生, 田近正洋, 水野伸匡, 原 和生, 河合宏紀, 脇岡範, 近藤真也, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 山雄健次, 清水泰博, 細田和貴, 谷田部 恭:術前診断に苦慮した肝血管筋脂肪腫の一例. 第113回日本消化器病学会東海支部第113回例会,2010.(名古屋)[口演].
- 107 小森康司, 金光幸秀, 加藤知行, 平井 孝:当科における一時的人工肛門(covering stoma)の造設術および閉鎖術. 第65回日本大腸肛門病学会学術集会,2010.(横浜)[ビデオシンポジウム].
- 108 高橋慶一, 固武健二郎, 安野正道, 板橋道朗, 橋口陽二郎, 金光幸秀, 山口達郎, 松本 寛, 本田五郎, 杉原健一:大腸肛門領域における診療情報データベース大腸癌肝転移のデータベースの作成ポイントと問題点. 第65回日本大腸肛門病学会,2010.(横浜)[口演].
- 109 小森康司, 金光幸秀, 石黒成治, 加藤知行:大腸pSM癌の腫瘍形態と発育進展様式. 第74回大腸癌研究会,2011.(福岡)[示説].
- 110 金光幸秀, 小森康司, 石黒成治:郭清効果およびリンパ節転移予測から見た側方郭清適応基準の妥当性. 第74回大腸癌研究会,2011.(福岡)[口演].
- 111 金光幸秀:大腸癌術後補助療法を考える～EBMと日本からの視点～. 第74回大腸癌研究会,2011.(福岡)[ランチョンセミナー].
- 112 山下未希子, 山口真澄, 榊原由美子, 小森康司, 金光幸秀:術後皮下膿瘍形成により装具転用に難渋した一例. 第28回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会,2011.(福岡)[口演].
- 113 伊藤真衣, 山下未希子, 山口真澄, 榊原由美子, 金光幸秀, 小森康司:イレオストミー造設患者の体型と装具貼用時の補正との検討. 第28回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会,2011.(福岡)[口演].
- 114 金城和寿, 三澤一成, 伊藤誠二, 伊藤友一, 清水泰博, 佐野力, 金光幸秀, 小森康司, 千田嘉毅, 森本 守, 志村正博, 松井 聡:幽門周囲リンパ節転移から見た幽門保存胃切除術の適応. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(三沢市)[口演].
- 115 中西速夫, 大島由記子, 伊藤誠二, 三澤一成, 小寺泰弘, 近藤英作:HER2過剰発現胃癌細胞に対する分子標的治療の検討. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(三沢市)[口演].
- 116 設楽紘平, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 伊東秀美, 田中英夫, 室 圭, 松尾恵太郎:IGF1遺伝子多型と治癒切除後胃癌における再発の検討. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(三沢市)[口演].
- 117 福島紀雄, 野崎功雄, 後藤田直人, 藤谷恒明, 藤田淳也, 伊藤誠二, 大下裕夫:多施設共同研究による胃癌に対する統一

パス作成の検討. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(三沢市)[口演].

- 118 伊藤誠二, 笹子三津留:S-1術後補助化学療法後の転移再発例における生存期間 ACTS-GCにおける後向き探索解析 (ACTS-GCグループ). 第83回日本胃癌学会総会,2011.(三沢市)[口演].
- 119 吉川貴己, 伊藤誠二, 田邊和照, 西川和宏, 円谷彰, 森田智視, 宮下由美, 坂本純一:術前化学療法確立のための臨床試験 術前化学療法の期間とレジメンを比較するランダム化第二相臨床試験「COMPASS trial」. 第83回日本胃癌学会総会,2011.(三沢市)[口演].

整形外科

- 001 Yamada K, Sugiura H, Koyama K, Hyodo I:58-Year-Old Female, Dedifferentiated liposarcoma of proximal thigh developed in recurrent well-differentiated liposarcoma. 第22回骨軟部肉腫外科研究会,2010.(東京)[口演]
- 002 神山圭史, 山田健志, 杉浦英志:腫瘍用人工関節感染に対して salvage 手術を施行した1例. 第219回整形外科集談会東海地方会,2010.(名古屋)[口演]
- 003 濱田俊介, 山田健志, 杉浦英志:腹直筋筋層内に認められた異所性子宮内膜症の1手術例. 第220回整形外科集談会東海地方会,2010.(名古屋)[口演]
- 004 神山圭史, 兵藤伊久夫, 杉浦英志, 山田健志, 濱田俊介:複数の有茎皮弁により臀部悪性軟部腫瘍切除後の広範な組織欠損を再建した1例. 第221回整形外科集談会東海地方会,2010.(名古屋)[口演]
- 005 濱田俊介, 山田健志, 杉浦英志, 神山圭史:足関節内果に発生した骨内ガングリオンの1例. 第222回整形外科集談会東海地方会,2010.(名古屋)[口演]
- 006 濱田俊介, 山田健志, 杉浦英志, 長坂暢, 谷田部恭:左坐骨部に発生したGCTの一例. 第23回骨軟部治療法検討会,2010.(名古屋)[口演]
- 007 神山圭史, 兵藤伊久夫, 水上高秀, 杉浦英志, 山田健志, 濱田俊介, 金光幸秀:切除により側腹部の広範な欠損を生じた大腸癌の1例. 第24回骨軟部治療法検討会,2010.(名古屋)[口演]
- 008 山田健志, 杉浦英志, 谷田部恭, 宮坂和良:第4腰椎腫瘍. 第68回東海骨軟部腫瘍研究会,2010.(名古屋)[口演]
- 009 濱田俊介, 山田健志, 杉浦英志:右肩部軟部腫瘍の1例. 第69回東海骨軟部腫瘍研究会,2010.(名古屋)[口演]
- 010 山田健志, 濱田俊介, 杉浦英志, 谷田部恭:右大腿軟部腫瘍. 第70回東海骨軟部腫瘍研究会,2010.(名古屋)[口演]
- 011 筑紫聡, 西田佳弘, 杉浦英志, 中島浩敦, 山田芳久, 紫藤洋二, 和佐潤志, 亀井譲, 石黒直樹:骨・軟部腫瘍切除後の胸壁欠損に対する再建. 第83回日本整形外科学会学術総会,2010.(東京)[口演]
- 012 濱田俊介:右足関節に発症したPVNSの1例. 第2回自由ヶ丘整形医会,2010.(名古屋)[口演]
- 013 山田健志:骨頭下骨折に至った乳癌大腿骨転移の1例. 第2回自由ヶ丘整形医会,2010.(名古屋)[口演]
- 014 山田健志:疼痛コントロールに難渋している右肩甲骨前面の軟部腫瘍. 第2回自由ヶ丘整形医会,2010.(名古屋)[口演]
- 015 杉浦英志:腫瘍用人工関節置換術後骨折をきたした大腿骨腫瘍の1例. 第2回自由ヶ丘整形医会,2010.(名古屋)[口演]
- 016 杉浦英志:肺転移による咳症状を初発とした軟部腫瘍の1例. 第2回自由ヶ丘整形医会,2010.(名古屋)[口演]
- 017 中島浩敦, 片桐浩久, 高橋満, 杉浦英志:大腿骨近位転移性骨腫瘍に対する人工骨頭置換術後の予後と歩行機能. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 018 筑紫聡, 西田佳弘, 杉浦英志, 中島浩敦, 山田芳久, 紫藤洋二, 和佐潤志, 亀井譲, 石黒直樹:骨・軟部腫瘍切除後の胸壁欠損に対する再建. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 019 西田佳弘, 筑紫聡, 中島浩敦, 杉浦英志, 山田芳久, 紫藤洋二, 和佐潤志, 石黒直樹:膝関節発生色素性絨毛結節性滑膜炎の臨床成績:他部位発生症例との比較. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 020 山田健志, 杉浦英志:切断手術を要した四肢転移性骨腫瘍の3例. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 021 二村尚久, 中島浩敦, 吉田雅博, 西田佳弘, 杉浦英志, 山田芳久:膝下部軟部肉腫の治療成績. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 022 和佐潤志, 西田佳弘, 高橋満, 杉浦英志, 片桐浩久, 中島浩敦, 山田芳久, 筑紫聡, 紫藤洋二, 石黒直樹:MPNSTの治療成績と予後因子について. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 023 神山圭史, 兵藤伊久夫, 杉浦英志, 山田健志, 亀井譲:前腕部悪性骨・軟部腫瘍切除後の軟部組織欠損に対する再建. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 024 紫藤洋二, 西田佳弘, 筑紫聡, 和佐潤志, 石黒直樹, 杉浦英志, 中島浩敦, 山田芳久:軟部肉腫術後肺転移における予後に関する検討. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 025 杉浦英志, 山田健志, 神山圭史, 浦川浩, 新井英介, 西田佳弘, 北村伸二:腫瘍用人工関節置換術後のMRSAおよびMRSE感染例に対する salvage 手術. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 026 西田佳弘, 筑紫聡, 山田芳久, 杉浦英志, 紫藤洋二, 和佐潤志, 鎌田正, 今井礼子, 石黒直樹:仙骨発生脊索腫に対する重粒子線治療の臨床成績:手術治療との比較. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 027 山田健志, 杉浦英志:小円形細胞肉腫に対する大量化学療法. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 028 中村知樹, 松峯昭彦, 川井章, 西田佳弘, 国定俊之, 荒木信人, 杉浦英志, 横内雅博, 富田雅人, 内田淳正, 須藤啓広:大腿骨遠位骨腫瘍に対するKLSシステムの治療成績 —骨軟部肉腫治療研究会多施設共同研究—. 第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京)[口演]
- 029 杉浦英志, 山田健志, 西田佳弘, 中島浩敦, 山田芳久, 高橋満, 片桐浩久:局所再発性軟部肉腫に対する広範切除後の予後と

再々発について.第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京),[口演]

030 小澤英史,西田佳弘,筑紫聡,内堀充敏,中島浩敦,山田芳久,杉浦英志,和佐潤志,紫藤洋二,石黒直樹:足部原発性骨・軟部肉腫33例についての検討.第43回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会,2010.(東京),[口演]

031 杉浦英志:癌骨転移の診断と治療の実際～各科との連携を踏まえて～.骨病変を考える会,2010.(名古屋),[講演]

032 杉浦英志:癌骨転移の診断と治療における整形外科の役割.癌骨転移の治療と課題セミナー,2010.(豊橋),[講演]

033 杉浦英志:骨軟部腫瘍の治療～特に化学療法を中心に～.がん専門薬剤師研修(第1回),2010.(名古屋),[講演]

034 杉浦英志:がん医療におけるリハビリテーションの動向と実際.平成22年度愛知県がん専門分野研修会,2010.(名古屋),[講演]

035 杉浦英志:進行性・再発性の骨軟部腫瘍に対する治療法～新しい知見をふまえて～.第15回外科・整形外科学術講演会,2010.(名古屋),[講演]

036 杉浦英志:骨転移を有するNSCLCに対するアプローチ,整形外科の立場から.ZENITH Meeting-Japan 2010.2010.(東京),[講演]

037 杉浦英志:転移性骨腫瘍に対する治療～適切な時期を逃さないために～.Bone Metastasis Forum 2010.2010.(名古屋),[パネルディスカッション]

038 杉浦英志:癌骨転移の診断と治療について～各科との連携を踏まえて～.第6回豊田がんフォーラム,2010.(豊田),[講演]

039 杉浦英志:骨軟部腫瘍の治療～特に化学療法を中心に～.がん専門薬剤師研修(第2回),2010.(名古屋),[講演]

040 山田健志,宇良敬,金光幸秀,小澤英史,室圭,平井孝,杉浦英志:大腸癌骨転移に対する治療方針.第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[パネルディスカッション]

041 杉浦英志,山田健志,濱田俊介,立花弘之,和佐潤志,不破信和:脊椎転移に対する脊椎打ち抜き原体照射法の画像評価についての検討.第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[口演]

042 濱田俊介,山田健志,立花弘之,岩田広治,杉浦英志:乳癌脊椎髄内転移の3症例.第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[ポスター]

043 神山圭史,兵藤伊久夫,水上高秀,杉浦英志,山田健志,濱田俊介,亀井譲:腰臀部悪性軟部腫瘍広範切除後の広範囲組織欠損に対して複数の有茎皮弁を用いた2例.第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[ポスター]

044 杉浦英志:癌骨転移の診断と治療の実際～各科との連携を踏まえて～.骨転移を考える会～キャンサーボード～,2010.(瀬戸),[講演]

045 杉浦英志:整形外科の立場からみた骨転移治療の重要性.西濃泌尿器癌骨転移を考える会,2010.(大垣),[講演]

泌尿器科部

001 林 宣男,脇田利明,小倉友二,田丸裕巳:2009年愛知県がんセ

ンター中央病院泌尿器科入院手術統計.第47回三重泌尿器科医会,2010.(津),[口演]

002 林 宣男,脇田利明,小倉友二,田丸裕巳:201例の局所前立腺癌に対する内分泌治療併用放射線治療の治療成績.第97回日本泌尿器科学会総会,2010.(盛岡),[口演]

003 小倉友二,脇田利明,林 宣男:前立腺癌に対する密封小線源療法後にSeed追加刺入を施行した1例.第48回三重泌尿器科医会,2010.(津),[口演]

004 小倉友二,脇田利明,林 宣男:前立腺全摘術後再発に対する救済放射線療法についての検討.第48回日本癌治療学会学術集会,2010.(京都),[示説]

005 林 宣男,小倉友二,脇田利明:局所前立腺癌に対する総照射量74グレイの放射線治療の成績.第60回日本泌尿器科学会中部総会,2010.(名古屋),[示説]

006 小倉友二,脇田利明,林 宣男:前立腺癌に対する密封小線源永久挿入治療後にシードの追加挿入を施行した1例.第60回日本泌尿器科学会中部総会,2010.(名古屋),[示説]

婦人科部

001 水野美香,吉田憲夫,伊藤則雄,谷田部恭,中西透:低悪性度子宮内膜間質肉腫の臨床病理学的検討 MPA療法は有用か?第48回日本婦人科腫瘍学会学術講演会,2010.(筑波),[口演]

002 細野覚代,松尾恵太郎,広瀬かおる,伊藤秀美,川瀬孝和,鈴木勇史,渡邊美貴,中西透,田島和雄,田中英夫:日本人女性における成人期の体重増加と子宮内膜癌リスクとの関連.第48回日本婦人科腫瘍学会学術講演会,2010.(筑波),[口演]

003 中西透,河合要介,吉田憲生,伊藤則雄:子宮頸癌の卵巣転移.第127回東海産科婦人科学会,2010.(名古屋),[口演]

004 久保田智巳,曾我部万紀,澤木弘道,野崎浩文,中西速夫,中西透,榎谷内晶,池原譲,成松久:卵巣がんバイオマーカーとしての糖転移酵素.第30回日本分子腫瘍マーカー研究会,2010.(大阪),[口演]

005 野崎浩文,大倉隆司,久野敦,曾我部万紀,久保田智巳,梶裕之,中西速夫,中西透,榎谷内晶,池原譲,成松久:腹腔洗浄液を用いたグライコプロテオミクス解析による明細胞性卵巣癌マーカーの探索.第30回日本分子腫瘍マーカー研究会,2010.(大阪),[口演]

006 河合要介,吉田憲生,伊藤則雄,中西透:子宮体癌に対するリンパ節郭清の適用に関する検討(会議録).第47回日本癌治療学会学術集会,2010.(横浜),[ポスター]

007 東真規子,梶山広明,梅津朋和,水野美香,柴田清住,那波明宏,木下吉登,榎原克己,松澤克治,水野高雄,山室理,中西透,竹田明宏,河井通泰,吉川史隆:1期卵巣癌における被膜破綻は長期予後に影響を及ぼすか?大規模組織型別解析から.第47回日本癌治療学会学術集会,2010.(横浜),[口演]

008 河合要介,廣澤友也,吉田憲生,中西透:再発卵巣癌に対するpegylated liposomal doxorubicin (PLD)の臨床効果.第128回東海産科婦人科学会,2011.(名古屋),[口演]

麻酔科部

- 001 *Bagues A, Arendt-Nielsen L, Martin M.I, Hosoda R, Wang K*: DNIC Responses Evoked By Chemical or Mechanical Craniofacial Conditioning Stimuli in Healthy Men and Women. 13th WORLD CONGRESS ON PAIN, 2010, (Montreal, Canada), [ポスター]
- 002 細田蓮子: がん緩和治療の実際～疼痛管理～. 新臨床腫瘍学セミナー, 2010, (名古屋), [講演]
- 003 細田蓮子: 緩和ケアにおける「難渋・失敗例」. 名古屋緩和ケアカンファレンス研究会, 2010, (名古屋), [口演]
- 004 細田蓮子: 頭頸部手術の麻酔01. 日本麻酔科学会第57回学術集会, 2010, (福岡), [座長]
- 005 佐藤洋造, 坂根誠, 稲葉吉隆, 宇良敬, 細田蓮子: 大腸癌巨大卵巣転移に対する症状緩和目的の卵巣動脈化学塞栓療法. 第15回 日本緩和医療学会, 2010, (東京), [ポスター]
- 006 細田蓮子: 愛知県がんセンター中央病院緩和ケアの取り組み. J P A P オレンジサークルアワード, 2010, (東京), [口演]
- 007 細田蓮子: がん性疼痛 今後期待される薬剤(オピオイド-鎮痛補助薬). 愛知県病院薬剤師会学術講演会, 2010, (名古屋), [講演]
- 008 細田蓮子: がん診療に携わる医師に対する緩和ケア基本研修会. 日本緩和医療学会(P E A C E), 2010, (豊橋), [講義]
- 009 細田蓮子: 「フェンタニル貼付剤を安全かつ有効に使いこなす: 長所と短所を熟知した上での戦略」. フェントステープ発表記念講演会, 2010, (名古屋), [座長]
- 010 細田蓮子: がん性疼痛の薬物療法に関するガイドライン. 第8回名古屋がん疼痛緩和フォーラム, 2010, (名古屋), [座長]
- 011 仲田純也, 細田蓮子, 西良雅夫: 麻酔導入時におけるレミフェンタニルボラス投与. 日本臨床麻酔学会第30回大会, 2010, (徳島), [ポスター]
- 012 細田蓮子: がん性疼痛に対するインターベンション治療. 愛知県立看護大学がん性疼痛看護認定コース, 2010, (名古屋), [講義]
- 013 細田蓮子: がんの痛みのメカニズム. 愛知県立看護大学がん性疼痛看護認定コース, 2010, (名古屋), [講義]
- 014 細田蓮子: 県がん診療連携拠点病院としてのCapability of PCT. 東海がんプロフェッショナル養成プラン, 2010, (名古屋), [講演]
- 015 細田蓮子: がん診療に携わる医師に対する緩和ケア基本研修会. 名古屋第二赤十字病院, 2010, (名古屋), [講義]
- (TACE) for huge ovarian metastases of colorectal cancer. 4th Global Embolization Symposium and Technologies, 2010 (San Francisco)[Poster]
- 003 *Kanamoto T, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Kato M*: IR approach via postoperative abdominal adhesions. 8th Asia-Pacific Congress of Cardiovascular and Interventional Radiology, 2010 (Seoul)[Poster]
- 004 *Sato Y, Inaba Y, Yamaura H, Kato M, Kanamoto T, Tomozawa Y*: Biliary stricture at the hepatic hilus developed after transcatheter arterial chemoembolization for hepatocellular carcinoma. 8th Asia-Pacific Congress of Cardiovascular and Interventional Radiology, 2010 (Seoul) [Poster]
- 005 *Sato Y, Inaba Y, Yamaura H, Kato M, Kanamoto T*: Percutaneous transesophageal gastrotubing (PTEG) for palliative care in cancer patients. 4th Society of Gastrointestinal Intervention, 2010 (Seoul)[Poster]
- 006 *Anai H, Tanaka T, Nishiofuku H, Sueyoshi S, Yamamoto K, Morimoto K, Inoue M, Sakaguchi H, Inaba Y, Kichikawa K*: Phase II study of segmental transcatheter arterial chemoembolization using oil mixed with cisplatin powder for unresectable hepatocellular carcinoma. 2011 Gastrointestinal Cancers Symposium, 2011 (San Francisco)[Poster]
- 007 *Nishiofuku H, Tanaka T, Anai H, Sueyoshi S, Matsuoka M, Otsuji T, Yamamoto K, Inaba Y, Sakaguchi H, Kichikawa K*: Phase I/II study of transcatheter arterial chemoembolization with cisplatin powder and degradable starch microspheres for unresectable hepatic metastases from colorectal cancer refractory to systemic standard chemotherapy. 2011 Gastrointestinal Cancers Symposium, 2011 (San Francisco)[Poster]
- 008 *Tanaka T, Nishiofuku H, Sho M, Anai H, Sueyoshi S, Yamamoto K, Inaba Y, Sakaguchi H, Nakajima Y, Kichikawa K*: Phase I/II study of arterial infusion with 5-fluorouracil combined with systemic gemcitabine for unresectable pancreatic cancer. 2011 Gastrointestinal Cancers Symposium, 2011 (San Francisco)[Poster]
- 009 名嶋弥菜, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 寺倉梨津子: 肝細胞癌に対するシスプラチン動注療法の治療成績および著効例に関する検討. 第69回日本医学放射線学会, 2010(横浜)[口演]
- 010 坂根誠, 佐藤洋造, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 北角淳, 寺倉梨津子: 大腸癌巨大卵巣転移に対する症状緩和目的の卵巣動脈化学塞栓療法. 第69回日本医学放射線学会, 2010(横浜)[口演]
- 011 山浦秀和, 稲葉吉隆, 宮村廣樹, 清水泰博, 土田龍郎, 黄義孝: 99mTc-GSA dynamic SPECTによる術前残肝予備能評価とICG-Kremとの比較. 第69回日本医学放射線学会, 2010(横浜)[口演]
- 012 金本高明, 山浦秀和, 佐藤洋造, 加藤弥菜, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 寺倉梨津子, 稲葉吉隆: 術後腹壁癒着部からのIVRアプ

放射線診断・IVR部

- 001 *Tomozawa Y, Inaba Y, Yamaura H, Kato M, Kanamoto T, Sato Y, Murata K*: Preoperative percutaneous transhepatic portal embolization (PTPE) for major liver resection. 4th Global Embolization Symposium and Technologies, 2010 (San Francisco)[Poster]
- 002 *Sakane M, Sato Y, Yamaura H, Kato M, Kanamoto T, Tomozawa Y, Inaba Y*: Transarterial chemoembolization

- ローチ. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[口演]
- 013 佐藤洋造,稲葉吉隆,山浦秀和,名嶋弥菜,金本高明,細田蓮子,向井未年子:緩和医療におけるIVR:当院での現状. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[口演]
- 014 坂根誠,佐藤洋造,稲葉吉隆,山浦秀和,加藤弥菜,金本高明,友澤裕樹,北角淳,寺倉梨津子,室圭:大腸癌巨大卵巣転移に対する症状緩和目的の卵巣動脈化学塞栓療法. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[口演]
- 015 佐藤洋造,友澤裕樹,西尾福英之,稲葉吉隆,山浦秀和,名嶋弥菜,金本高明,坂根誠,北角淳,寺倉梨津子:TACE後の肝門部胆管狭窄についての検討. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[口演]
- 016 友澤裕樹,稲葉吉隆,山浦秀和,佐藤洋造,加藤弥菜,金本高明,坂根誠,北角淳,寺倉梨津子:当院における経皮経肝門脈塞栓術(PTPE)についての検討. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[口演]
- 017 菅原俊祐,曾根美雪,荒井保明,坂本憲昭,新禎剛,佐藤洋造,稲葉吉隆,竹内義人,植野映子,松枝清:悪性難治性腹水に対する腹腔-静脈シャント造設術:多施設共同後ろ向き研究(JIVRO SG-0809). 第39回日本IVR学会,2010(東京)[口演]
- 018 新禎剛,森口理久,對馬隆浩,澤田明宏,朝倉弘郁,遠藤正浩,稲葉吉隆,山浦秀和,佐藤洋造,名嶋弥菜,荒井保明:胆道出血に対する止血術の検討:とくに経皮経肝胆道ドレナージュルートアプローチについて. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[口演]
- 019 笹川良子,福嶋敬子,稲葉吉隆,山浦秀和:当センターにおける看護師のIVRの理解度に対するアンケート調査結果. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[ポスター]
- 020 稲葉吉隆:IVR看護師教育講演. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[座長]
- 021 稲葉吉隆:ランチョンセミナー4. 第39回日本IVR学会,2010(東京)[座長]
- 022 佐藤洋造,稲葉吉隆,山浦秀和,加藤弥菜,金本高明,友澤裕樹,坂根誠,北角淳,寺倉梨津子,宇良敬,安倍哲也:Niti-S esophageal stentの使用経験. 第28回日本Metallic Stents & Grafts研究会,2010(東京)[口演]
- 023 稲葉吉隆:Institut Gustave Roussyにて. 第36回東海IVR懇話会,2010(名古屋)[講演]
- 024 北角淳,佐藤洋造,山浦秀和,名嶋弥菜,金本高明,寺倉梨津子,栗延孝至,佐藤健司,稲葉吉隆,澤木明:GIST肝転移TACE後の胆道狭窄に対して総胆管よりPTCDを施行した1例. 第29回日本IVR学会中部地方学会,2010(金沢)[口演]
- 025 名嶋弥菜:ステント. 第29回日本IVR学会中部地方学会,2010(金沢)[座長]
- 026 佐藤健司,佐藤洋造,山浦秀和,名嶋弥菜,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,栗延孝至,稲葉吉隆,設楽鉦平:Niti-S食道ステントロングカバードタイプが有用であった1例. 第29回日本IVR学会中部地方学会,2010(金沢)[口演]
- 027 名嶋弥菜,山浦秀和,松島秀,佐藤洋造,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,栗延孝至,佐藤健司,稲葉吉隆:Gd-EOB-DTPAの高度取り込み低下を認めた正常肝の1例. 第148回日本医学放射線学会中部地方会,2010(金沢)[口演]
- 028 寺倉梨津子,松島秀,山浦秀和,佐藤洋造,名嶋弥菜,金本高明,北角淳,栗延孝至,佐藤健司,稲葉吉隆:MRI-ECR画像を用いた骨盤部リンパ節の評価. 第148回日本医学放射線学会中部地方会,2010(金沢)[口演]
- 029 加藤弥菜:もしかして、リンパ腫? :画像診断医からのメッセージ. 第5回Hematology/Oncology Club in Aichi,2010(名古屋)[講演]
- 030 山浦秀和,宮村廣樹,佐藤洋造,加藤弥菜,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,栗延孝至,佐藤健司,稲葉吉隆:99mTc-GSA Dynamic SPECTによる残肝予備機能評価とICG-Kremとの比較. 第68回東海総合画像医学研究会,2010(名古屋)[口演]
- 031 加藤弥菜,山浦秀和,松島秀,佐藤洋造,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,栗延孝至,佐藤健司,稲葉吉隆:Gd-EOB-DTPAの高度取り込み低下を認めたICG不耐症の1例. 第68回東海総合画像医学研究会,2010(名古屋)[口演]
- 032 加藤弥菜:肝病理の症例検討会. 第5回肝病理よろず相談勉強会,2010(静岡)[症例報告]
- 033 稲葉吉隆:CVポート挿入. 第35回リザーバー研究会,2010(札幌)[座長]
- 034 栗延孝至,佐藤洋造,稲葉吉隆,山浦秀和,加藤弥菜,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,佐藤健司:CDDP動注によると思われるアナフィラキシーショックをきたした2例. 第35回リザーバー研究会,2010(札幌)[口演]
- 035 山浦秀和,稲葉吉隆,佐藤洋造,加藤弥菜,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,佐藤健司,栗延孝至:全身化学療法不応胃癌肝転移に対するCDDP+WHF療法. 第35回リザーバー研究会,2010(札幌)[口演]
- 036 佐藤洋造,山浦秀和,加藤弥菜,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,佐藤健司,栗延孝至,稲葉吉隆,室圭:全身化学療法不応例に対する肝動注化学療法:Cetuximab導入後の意義. 第35回リザーバー研究会,2010(札幌)[口演]
- 037 山浦秀和,稲葉吉隆,佐藤洋造,加藤弥菜,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,佐藤健司,栗延孝至:大腸癌肝転移に対するBi-Weekly High dose 5FU(B-WHF)療法. 第35回リザーバー研究会,2010(札幌)[口演]
- 038 佐藤健司,稲葉吉隆,山浦秀和,佐藤洋造,加藤弥菜,金本高明,北角淳,寺倉梨津子,吉田公秀,山田健志:松葉杖の使用が関与したと思われる中心静脈ポートカテーテル断裂の1例. 第35回リザーバー研究会,2010(札幌)[ポスター]
- 039 坂田正治,山口裕美子,丹羽沙津木,福嶋敬子,笹川良子,稲葉吉隆,山浦秀和,佐藤洋造:肝動注リザーバー留置術/自己抜針指導クリニカルパスにおける再評価. 第35回リザーバー研究会,2010(札幌)[ポスター]
- 040 稲葉吉隆:がん診療におけるIVR. 第3回東濃厚生病院放射線科セミナー,2010(瑞浪)[講演]
- 041 佐藤洋造,稲葉吉隆,山浦秀和,加藤弥菜,金本高明:進行肝細胞癌患者に対するsorafenib療法の検討. 第48回日本癌治療学会,2010(京都)[口演]
- 042 吉田元樹,設楽鉦平,結城敏志,高張大亮,佐藤洋造,宇都宮節夫,田近正洋,横田知哉,稲葉吉隆,山浦秀和,加藤弥菜,河合宏紀,山崎健太郎,小松嘉人,室圭:KRAS野生型の大腸癌患者に対するbiweekly cetuximab+irinotecan併用療法の第II相試

- 験. 第48回日本癌治療学会,2010(京都)[口演]
- 043 高張大亮,設楽紘平,宇良敬,横田知哉,野村基雄,近藤千紘,溝田綾子,金本高明,加藤弥菜,佐藤洋造,山浦秀和,稲葉吉隆,室圭:当院におけるFOLFOX+bevacizumab療法初回治療例の治療成績. 第48回日本癌治療学会,2010(京都)[口演]
- 044 池田公史,奥坂拓志,佐藤洋造,仲地耕平,光永修一,森実千種,上野秀樹,加藤弥菜,竹内義人,佐竹光夫,稲葉吉隆,荒井保明:肝細胞癌に対して肝動注化学療法は全身化学療法より有効か?:FMP療法での検討. 第48回日本癌治療学会,2010(京都)[口演]
- 045 稲葉吉隆:肝癌治療の最新情報. 愛知肝動注療法フォーラム,2010(名古屋)座長]
- 046 加藤弥菜:肝細胞癌に対するアイエーコール動注療法の成績. 愛知肝動注療法フォーラム,2010(名古屋)[口演]
- 047 稲葉吉隆:肝臓がんについて. 港区医師会学術講演会,2010(名古屋)[講演]
- 048 福嶋敬子,坂田正治,山口裕美子,丹羽沙津木,笹川良子,伊藤志門,佐藤洋造,稲葉吉隆,山浦秀和:病棟一外来連携クリニカルパスの再評価:肝動注リザーバー留置術/自己抜針指導クリニカルパスの見直しから. 第11回日本クリニカルパス学会,2010(愛媛県)[ポスター]
- 049 稲葉吉隆:Interventional EUS-消化器疾患における超音波内視鏡を用いた組織採取方法と治療への応用. 第68回東海総合画像医学研究会,2010(名古屋)[特別講演座長]
- 050 福嶋敬子,坂田正治,山口裕美子,丹羽沙津木,笹川良子,伊藤志門,佐藤洋造,稲葉吉隆,山浦秀和:病棟一外来連携クリニカルパスの再評価:肝動注リザーバー留置術/自己抜針指導クリニカルパスの見直しから. 第30回日本IVR学会中部地方会,2011(三重)[口演]
- 051 佐藤洋造,山浦秀和,加藤弥菜,金本高明,北角淳,鈴木梨津子,栗延孝至,佐藤健司,稲葉吉隆,原和生:門脈本幹閉塞を伴う肝門部空腸吻合部静脈瘤に対してPTOを施行した1例. 第30回日本IVR学会中部地方会,2011(三重)[口演]
- 052 栗延孝至,佐藤洋造,山浦秀和,加藤弥菜,金本高明,北角淳,鈴木梨津子,佐藤健司,稲葉吉隆,近藤千紘:胃全摘後吻合部食道静脈瘤に対して経脾的塞栓術を施行した1例. 第30回日本IVR学会中部地方会,2011(三重)[口演]
- 053 加藤弥菜:頭頸部・その他. 第30回日本IVR学会中部地方会,2011(三重)[座長]
- 054 鈴木梨津子,山浦秀和,佐藤洋造,加藤弥菜,金本高明,北角淳,栗延孝至,佐藤健司,稲葉吉隆:大腸癌肝転移におけるEOB-ブリモビスト造影MRと血管造影下CTの比較. 第149回日本医学放射線学会中部地方会,2011(三重)[口演]
- 055 北角淳,山浦秀和,佐藤洋造,加藤弥菜,金本高明,鈴木梨津子,栗延孝至,佐藤健司,稲葉吉隆:肝細胞癌におけるEOB-ブリモビスト造影MRと血管造影下CTの比較. 第149回日本医学放射線学会中部地方会,2011(三重)[口演]
- 056 佐藤健司,佐藤洋造,山浦秀和,加藤弥菜,金本高明,北角淳,鈴木梨津子,栗延孝至,稲葉吉隆,千田嘉毅:肝原発epithelioid angiomyolipomaの1例. 第149回日本医学放射線学会中部地方会,2011(三重)[口演]

放射線治療部

- 001 T.Toita,S. Kato,Y. Niibe,T. Kazumoto,T. Kodaira,M. Kataoka,T. Ohno,T. Teshima,M. Oguchi,Y. Kagami,et al:Prospective Multi-institutional Study of Definitive Radiotherapy with High-dose-rate Intracavitary Brachytherapy in Early Stage Uterine Cervical Cancer. A Cooperative Study of Japan Radiation Oncology Group (JAROG and Japanese Radiation Oncology Study Group (JROSG),52th Annual meeting of the American Society for Therapeutic Radiation and Oncology ,(2010),(SanDiego),[口演]
- 002 S. Tokumaru,T. Toita,S. Kato,Y. Niibe,T. Kazumoto,T. Kodaira,M. Kataoka,T. Ohno,M. Oguchi,M. Hiraoka:Insufficiency Fractures after Pelvic Radiotherapy for Uterine Cervical Cancer:An Analysis of Subjects in a Prospective Multi-institutional Trial,and Cooperative Study of Japan Radiation Oncology Group (JAROG and Japanese Radiation Oncology Study Group (JROSG). 52th Annual meeting of the American Society for Therapeutic Radiation and Oncology ,(2010),(SanDiego),[口演]
- 003 N. Mizoguchi,Y. Goto,M. Nomura,R. Nakahara,N. Tomita,H. Tachibana,K. Furutani,T. Kodaira:Dose Deformity In Patients Of HNC Treated With Helical TomoTherapy. 52th Annual meeting of the American Society for Therapeutic Radiation and Oncology ,(2010),(SanDiego),[ポスター]
- 004 Yoko Goto,Junji Ito,Natsuo Tomita,Hiroyuki Tachibana,Kazubisa Furutani,Takeshi Kodaira:Re-irradiation combined with concurrent chemotherapy for patients with locally recurrent nasopharyngeal carcinoma:Clinical advantage of intensity modulated radiotherapy using Helical TomoTherapy. 52th Annual meeting of the American Society for Therapeutic Radiation and Oncology ,(2010),(SanDiego),[ポスター]
- 005 Shimizu,S. Matsushima,Y. Kinosada,H. Miyamura,T. Kodaira:New Imaging Tool For Evaluating The Post-radiated Parotid Gland Function During IMRT Session Assessed By Original QA Program. 52th Annual meeting of the American Society for Therapeutic Radiation and Oncology ,(2010),(SanDiego),[ポスター]
- 006 Kazubisa Furutani,Hidetoshi Shimizu,Nobutaka Mizoguchi,Rie Nakahara,Youko Goto,Motoo Nomura,Natsuo Tomita,Hiroyuki Tachibana,Takeshi Kodaira:Helical Tomotherapy for the Treatment of Head and Neck Cancer:Clinical Outcomes and Failure Patterns. 96th Scientific assembly and annual meeting of Radiological Society of North America RSNA (2010),(Chicago),[口演]
- 007 Takeshi Kodaira,Kazubisa Furutani,Hiroyuki Tachibana,Natsuo Tomita,Motoo Nomura,Yoko Goto,Jyunji Ito:Intensity Modulated Radiotherapy Combined with concomitant chemotherapy using Helical Tomotherapy for patients with nasopharyngeal carcinoma. European Society for Therapeutic

- Radiology and Oncology ,(2010),(Barcelona),[ポスター]
- 008 **Motoo Nomura, Takeshi Kodaira, Kazubisa Furutani, Hiroyuki Tachibana, Natsuo Tomita, Rie Nakahara, Nobutaka Mizoguchi, Yoko Goto**: Predictive factors for radiation pneumonitis based on dose volume histogram analysis of patients with esophageal cancer treated with definitive radiotherapy. European Society for Therapeutic Radiology and Oncology, (2010), (Barcelona), [ポスター]
- 009 **Takeshi Kodaira**: Chemoradiotherapy for head and neck cancer: Improving benefits using IMRT and molecular target agent. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society, (2010), (Gifu), [口演]
- 010 **Motoo Nomura, Takeshi Kodaira, Shunzo Hatoooka, Ayako Mizota, Chihiro Kondoh, Kobei Shitara, Tomoya Yokota, Daisuke Takahari, Takashi Ura, Kazubisa Furutani, Hiroyuki Tachibana, Natsuo Tomita, Tetsuya Abe, Masayuki Shinoda, Kei Muro**: Evaluation of the 6th and 7th TNM classification system in esophageal cancer patients treated with chemoradiotherapy. 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society, (2010), (Gifu), [口演]
- 011 **Homma I A, Zenda S, Matsuura K, Tachibana H, Kirita T, Monden N, Tabara M, Kato K, Asai M**: Multicenter Phase II Study of an Opioid-based Pain Control Program for Patients with Head and Neck Cancer Treated by Chemoradiotherapy. 35th ESMO Congress, (2010), (Italy), [口演]
- 012 **Motoo Nomura, Takeshi Kodaira, Ayako Mizota, Chihiro Kondoh, Kobei Shitara, Tomoya Yokota, Daisuke Takahari, Takashi Ura, Shunzo Hatoooka, Kei Muro**: Evaluation of the seventh TNM classification system in esophageal cancer patients receiving chemoradiotherapy. 2011 Gastrointestinal Cancers Symposium, (2011), (San Francisco), [口演]
- 013 **古平 毅**: 教育講演 治療1 高精度放射線治療 IMRT. 第69回日本医学放射線学会総会, (2010), (横浜), [口演]
- 014 **古平 毅**: IMRT & IGRTの広域展開時代のTomotherapyの現状と展望. Pinacle3 & Tomotherapy ユーザーシンポジウム, (2010), (横浜), [口演]
- 015 **戸板孝文, 加藤真吾, 新部譲, 大野達也, 楮本智子, 古平毅, 片岡正明, 鹿間直人, 権丈雅浩, 徳丸直郎, 山内智香子, 鈴木修, 櫻井英幸, 沼崎穂高, 手島昭樹, 小口正彦, 加賀美芳和, 中野隆史, 平岡真寛, 三橋紀夫**: I, II期子宮頸癌に対する高線量率腔内照射を用いた根治的放射線治療に関する多施設共同前向き臨床試験(JAROG0401/JROGS04-2): 最終解析報告. 第12回小線源治療部会研究会, (2010), (東京), [口演]
- 016 **古平 毅**: 緩和医療における放射線治療の役割. 愛知県病院薬剤師会 研究会, (2010), (愛知), [口演]
- 017 **古平 毅, 古谷和久, 立花弘之**: Helical Tomotherapyを用いた上咽頭癌にたいしてのIMRTの臨床経験. 第34回日本頭頸部腫瘍学会, (2010), (東京), [口演]
- 018 **立花弘之, 古谷和久, 富田夏夫, 後藤容子, 伊藤淳二, 古平 毅, 全田貞幹, 松浦一登, 本間明宏, 桐田忠明, 門田信也, 大田洋二郎, 岩江信法, 大鶴 洋, 秋元哲夫, 浅井昌大**: 化学放射線療法を行う頭頸部がん患者を対象とするクリニカルパスを用いた疼痛管理法 有効性・安全性評価試験. 第34回日本頭頸部腫瘍学会, (2010), (東京), [口演]
- 019 **古谷和久, 清水秀年, 伊藤淳二, 後藤容子, 富田夏夫, 立花弘之, 古平 毅**: トモセラピーによる前立腺がんのIMRT: MVCTを用いた治療時DVH評価. 日本医学放射線学会第147回中部地方会, (2010), (金沢), [口演]
- 020 **立花弘之, 古谷和久, 富田夏夫, 後藤容子, 伊藤淳二, 古平 毅, 全田貞幹, 松浦一登, 本間明宏, 桐田忠明, 門田信也, 大田洋二郎, 岩江信法, 大鶴 洋, 秋元哲夫, 浅井昌大**: 化学放射線療法を行う頭頸部がん患者を対象とするクリニカルパスを用いた疼痛管理法 有効性・安全性評価試験. 日本医学放射線学会第147回中部地方会, (2010), (金沢), [口演]
- 021 **富田夏夫, 古平 毅, 古谷和久, 立花弘之, 後藤容子, 伊藤淳二**: 子宮頸癌に対する全骨盤照射法の検討. 日本医学放射線学会第147回中部地方会, (2010), (金沢), [口演]
- 022 **後藤容子, 伊藤淳二, 富田夏夫, 立花弘之, 古谷和久, 古平 毅**: 当院での上咽頭癌に対する化学放射線療法治療成績の週及的解析. 日本医学放射線学会第147回中部地方会, (2010), (金沢), [口演]
- 023 **古平 毅**: 頭頸部癌の最近の放射線治療-IMRTを中心とした現状と今後の展望-. 沖縄放射線治療研究会, (2010), (沖縄), [口演]
- 024 **戸板孝文, 加藤真吾, 新部譲, 大野達也, 楮本智子, 古平毅, 片岡正明, 鹿間直人, 権丈雅浩, 徳丸直郎, 山内智香子, 鈴木修, 櫻井英幸, 沼崎穂高, 手島昭樹, 小口正彦, 加賀美芳和, 中野隆史, 平岡真寛, 三橋紀夫**: I, II期子宮頸癌の根治的放射線治療(高線量率腔内照射)多施設共同試験(JAROG0401/JROSG04-2). 第48回日本婦人科腫瘍学会, (2010), (筑波), [口演]
- 025 **古平 毅**: Helical TomotherapyによるIMRTの実践. Oita radiation oncology conference, (2010), (大分), [口演]
- 026 **古平 毅, 古谷和久, 立花弘之, 富田夏夫, 野村基雄, 後藤容子, 伊藤淳二**: シンポジウム1: 「高精度放射線治療の最新エビデンス」EBMから見た頭頸部癌IMRTの現状と展望. 第22回日本高精度放射線外部照射研究会, (2010), (滋賀), [口演]
- 027 **古平 毅, 古谷和久, 野村基雄**: 食道癌の標的治療容積のDVH解析による3次元放射線治療の検証 - IMRTの適応に向けての考案-. 第64回日本食道学会, (2010), (久留米), [口演]
- 028 **野村基雄, 古谷和久, 古平 毅**: 食道癌放射線治療患者におけるDVH解析からみた放射線肺炎の予測因子の検討. 第64回日本食道学会, (2010), (久留米), [口演]
- 029 **古平 毅**: 頭頸部癌の放射線治療の現状と展望. 神戸大学がんプロフェッショナル養成プラン, (2010), (神戸), [講演]
- 030 **古平 毅**: Tomotherapyの現状と展望. 広島大学病院放射線治療講演会, (2010), (広島), [講演]
- 031 **古平 毅, 古谷和久, 立花弘之, 富田夏夫, 後藤容子, 野村基雄, 伊藤淳二**: シンポジウム がん治療における放射線医学の新しい展開 高精度放射線治療の臨床への浸透 IMRT, IGRTを中心に. 第48回癌治療学会, (2010), (京都), [講演]
- 032 **野村基雄, 古平 毅, 波戸岡俊三, 古谷和久, 立花弘之, 富田夏夫, 篠田雅幸, 室 圭**: 食道癌化学放射線治療患者における

- UICC-TNM第6版vs. 第7版の検討. 第48回癌治療学会,(2010),(京都),[講演]
- 033 古平 毅:教育講演3 頭頸部 IMRTを中心に. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[講演]
- 034 古平 毅,清水秀年,古谷 和久,立花 弘之,富田 夏夫,後藤容子,野村 基雄,伊藤淳二:要望演題1—高精度治療および短期照射治療に伴う有害事象 頭頸部癌IMRT症例の唾液腺機能評価の検討. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[講演]
- 035 古平 毅:トークセッション 4 臨床試験セミナー~実施に向けてエキスパートに聞く~0701の臨床試験の経験から得たもの. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[講演]
- 036 古谷和久,清水秀年,立花弘之,伊藤淳二,後藤容子,富田 夏夫,古平 毅:前立腺がんのIMRTにおける計画時DVHと照射時 DVH の比較. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 037 立花弘之,清水秀年,古谷和久,富田夏夫,後藤容子,伊藤淳二,古平 毅:TomoTherapy における照射時間短縮についての検討. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 038 富田夏夫,古平毅,古谷和久,立花弘之,後藤容子,伊藤淳二:子宮頸癌に対する全骨盤照射法の検討:3次元治療計画からIMRTへ. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 039 後藤容子,伊藤淳二,富田夏夫,立花弘之,古谷和久,古平 毅,不破信和:要望演題3 化学放射線療法 当院における上咽頭癌に対する化学放射線療法の治療成績の検討. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 040 野村基雄,古平 毅,波戸岡俊三,古谷和久,立花弘之,富田夏夫,篠田雅幸,室 圭:要望演題3 化学放射線療法 食道癌化学放射線治療患者における UICC-TNM 第 6 版 vs. 第 7 版の検討. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 041 野村基雄,古平 毅,古谷和久,立花弘之,富田夏夫,後藤容子,伊藤淳二:優秀演題 食道癌放射線治療患者におけるDVH解析からみた放射線肺炎の予測因子の検討. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 042 清水秀年,久保田隆士,河合稔,中島地康,大崎光,中山雅詞,織部祐介,古平 毅:Mega-Voltage CT を用いた画像照合における照合者間偏差の評価. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 043 石倉 聡,篠田雅幸,中村健一,伊藤芳紀,西村哲夫,古平 毅,小野澤正勝,光森通英,中村隆二,安藤暢敏:切除不能胸部食道癌に対する化学放射線療法のランダム化第II/III相試験(JCOG0303). 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 044 中村和正,秋元哲夫,溝脇尚志,幡野和男,古平 毅,中村直樹,小塚拓洋,鹿間直人,加賀美芳和:前立腺癌外部照射における画像誘導技術利用等についてのアンケート結果. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 045 戸板孝文,加藤真吾,新部讓,大野達也,楳本智子,古平 毅,片岡正明,手島昭樹,小口正彦,加賀美芳和:III期子宮頸癌根治的放射線治療の多施設共同臨床試験(JROG0401/JROGS04-2). 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 046 粕谷吾朗,戸板 孝文,儀儀彰,宇野隆,古平 毅,古谷 和久,大野達也,吉村亮一,兼安祐子,平岡真寛:局所進行子宮頸癌の骨盤内リンパ節転移分布の検討. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 047 徳丸直郎,戸板 孝文,小口正彦,大野達也,加藤真吾,新部讓,楳本智子,古平 毅,片岡正明,権文雅浩:子宮頸癌放射線治療に伴うinsufficiency fracture(不全骨折)の検討:多施設共同試験. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 048 光森通英,宇野隆,大西洋,小口正彦,権文雅浩,小泉雅彦,古平 毅,鹿間直人,角美奈子,立崎 英夫,手島昭樹,戸板孝文,中村和正:JASTRO研究課題 医療実態調査研究による放射線治療施設規準化(案)の改訂. 第23回日本放射線腫瘍学会,(2010),(東京),[口演]
- 049 古平 毅:頭頸部腫瘍に対する強度変調放射線治療. 東信地区がん医療従事者研修会「厚生労働省科学研究(がん臨床研究)推進事業」3. 分科会(高精度放射線治療),(2010),(佐久),[口演]
- 050 古平 毅,古谷和久,立花弘之,富田夏夫,中原理絵,溝口信貴,野村基雄,後藤容子:TomotherapyによるIGRTの実践とその臨床成績—adaptive radiotherapy—. 多地点合同メディカル・カンファレンス[2010-第5回],(2010),(名古屋),[口演]
- 051 立花弘之,清水秀年,古谷和久,富田夏夫,後藤容子,伊藤淳二,古平 毅:TomoTherapy における照射時間短縮についての検討. 第23回日本高精度放射線外部照射研究会,(2011),(東京),[口演]
- 052 古平 毅,清水秀年,古谷和久,立花弘之,富田夏夫,後藤容子,伊藤淳二:頭頸部癌IMRT症例の唾液腺機能評価の検討. 日本医学放射線学会第148回中部地方会,(2011),(津),[口演]
- 053 古谷和久,伊藤淳二,後藤容子,富田夏夫,立花弘之,古平 毅:副鼻腔癌に対する根治的放射線治療成績. 日本医学放射線学会第148回中部地方会,(2011),(津),[口演]
- 054 立花弘之,伊藤淳二,後藤容子,富田夏夫,古谷和久,古平 毅:Tomotherapyにおける照射時間短縮についての検討. 日本医学放射線学会第148回中部地方会,(2011),(津),[口演]
- 055 富田夏夫,古平毅,古谷和久,立花弘之,後藤容子,伊藤淳二,松尾政之:トモセラピーによるI期肺癌と単発肺転移に対する放射線治療の成績. 日本医学放射線学会第148回中部地方会,(2011),(津),[口演]
- 056 後藤容子,伊藤淳二,富田夏夫,立花弘之,古谷和久,古平 毅:当院における頭頸部術後照射の検討. 日本医学放射線学会第148回中部地方会,(2011),(津),[口演]
- 057 古平 毅,古谷和久,立花弘之,富田夏夫,後藤容子,野村基雄,伊藤淳二:頭頸部癌IMRT症例の唾液腺機能評価の検討. 第28回東海頭頸部腫瘍研究会. (2011),(名古屋),[口演]

緩和ケア部

- 001 Yasunaga K:Post-modern perspective change:Therapy & Effectivity of Counseling. Seoul Women's University,2010. (Seoul,South Korea),[講演]
- 002 Yasunaga K:Narrative approach to Chronic Illness. Seoul Women's University,2010,(Seoul,South Korea),[講演]
- 003 Yasunaga K:Narrative approach to Chronic Illness. Pre-

- workshop of CIFA(アジア家族研究・家族療法学会シンポジウム),2010,(Tokyo),[講演]
- 004 小森康永:緩和ケアチームの実際と精神腫瘍学. 新臨床腫瘍学セミナー,2010,(名古屋),[講演]
- 005 小森康永:あなたのカウンセリングは時間センシティブですか?. 第43回ブリーフセラピー研究会主催定例研究会,2010,(東京),[講演]
- 006 小森康永:ナラティブセラピー「精神・心理的支援の理論的背景を学ぶ」. 第15回日本緩和医療学会,2010,(東京),[パネルディスカッション]
- 007 小森康永:緩和ケアと時間. 第8回がん治療と病診連携懇話会,2010,(名古屋),[講演]
- 008 小森康永:精神腫瘍学. 安城厚生病院緩和ケア研修会,2010,(安城),[講演]
- 009 小森康永:もしも「うつ病」が話したら. 第23回サイコロロジー学会,2010,(名古屋),[講演]
- 010 小森康永:ナラティブ・時間・アート. 第4回子どもの絵と発達を学ぶ会(直島勉強会),2010,(岡山),[講演]
- 011 小森康永:ナラティブ・アートセラピー. 第20回日本描画イラスト療法学会シンポジウム,2010,(高松),[講演]
- 012 小森康永:精神腫瘍学. 名古屋記念病院緩和ケア研修会,2010,(名古屋),[講演]

看護部

- 001 川瀬洋子:臨床におけるスピリチュアルケア. 臨床パストラル教育研究センター第13回全国大会,2010,(神戸),[口演]
- 002 高木礼子,山本香織:パクリタキセルの末梢神経障害に対する客観的評価の検討. 第18回日本乳がん学会学術総会,2010,(札幌),[示説]
- 003 新貝夫弥子:乳がん補助化学療法におけるタキサン系抗がん剤による体水分貯留の特徴. 第18回日本乳がん学会学術総会,2010,(札幌),[示説]
- 004 瀬古志桜:乳がん患者が外来に寄せる電話相談内容の検討. 第18回日本乳がん学会学術総会,2010,(札幌),[口演]
- 005 青山寿昭:食道がん術後反回神経麻痺による嚥下障害へのかかり. 日本嚥下障害臨床研究会,2010,(福井),[口演]
- 006 高木仁美:がん専門病院におけるジェネラリストナースの育成. 第14回日本看護管理学会年次大会,2010,(横浜),[口演]
- 007 校條 舞:外国人看護師に関する文献研究. 第14回日本看護管理学会年次大会,2010,(横浜),[口演]
- 008 近藤景子,櫻木君子,金高美都子,齋藤和佐:手術室看護師の倫理的問題への取り組み. 日本手術看護学会,2010,(京都),[示説]
- 009 坂田正治,福嶋敬子,笹川良子,山口裕美子,丹羽沙津木:肝動注リザーバー留置術/自己抜針指導クリニカルパスにおける再評価. 第35回リザーバー研究会,2010,(北海道),[示説]
- 010 福嶋敬子,坂田正治,笹川良子,山口裕美子,丹羽沙津木:病棟外来連携クリニカルパスの再評価～肝動注リザーバー留置術/自己抜針指導クリニカルパスの見直しから～. 第11回日本クリニカルパス学会学術集会,2010,(松山),[示説]
- 011 福嶋敬子,坂田正治,笹川良子,山口裕美子,丹羽沙津木:病棟外来連携クリニカルパスの再評価～肝動注リザーバー留置術/自己抜針指導クリニカルパスの見直しから～. 日本IVR学会第30回地方会,2011,(三重),[口演]
- 012 笹川良子,福嶋敬子:当センターにおける看護師のIVRの理解度に対するアンケート調査結果. 第39回日本IVR学会総会,2010,(東京),[示説]
- 013 西尾里美:乳がん患者におけるドセタキセル投与中の過敏症反応とその対応. 日本乳がん学会中部地方会,2010,(名古屋),[口演 示説]
- 014 中島貴子:地域で支える在宅ホスピスケア. 第13回日本在宅ホスピス協会全国大会,2010,(岐阜),[口演]
- 015 宮谷美智子,戸崎加奈江,西尾充代,小原真紀子:オキサリプラチン末梢血管投与時の血管痛に関する実態調査. がん治療学会学術集会,2010,(京都),[示説]
- 016 中山衣代:大腸内視鏡検査の前処置における患者背景と腸管洗浄効果に関する検討. 第22回愛知県消化器内視鏡懇話会,2011,(名古屋),[口演]
- 017 柴田亜弥子:在宅移行困難事例に対するがん看護専門看護師の介入の視点. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[口演]
- 018 井上さよ子:中年期の非小細胞肺がん罹患体験者の職場復帰・就業の継続に関する課題と取り組み. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[口演]
- 019 畠山清巳,山田美佐子,堀部陽子,足立明美,黒河瑞江,高木仁美:がん看護に特化した新人看護師教育について. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[示説]
- 020 黒河瑞江,竹内麻純:新人看護師研修プログラムの実際と評価と課題-Aがん専門病院のB病棟の取り組み-. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[示説]
- 021 戸崎加奈江,小原真紀子,西尾充代,宮谷美智子:オキサリプラチン末梢血管投与時の血管痛への対策を試みて. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[示説]
- 022 青山寿昭:食道癌術後嚥下障害に対する嚥下訓練の効果. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[口演]
- 023 森 莉那:青年期にある肺がん患者の病いの体験. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[口演]
- 024 藤田 恵:終末期せん妄患者の意思決定への支援を考える～療養場所の選択のためのインフォームドコンセントについて～. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[示説]
- 025 渡邊美和子:ターミナル期における精神的ケアについての考察死の受容過程を用いて. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[示説]
- 026 新田都子,向井未年子,藤田恵,永田智子:Aがんセンターにおける有痛率と除痛率. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[示説]
- 027 向井未年子:緩和ケアをサブスペシャリティとして活動するがん看護専門看護師の活動状況～精神看護専門看護師との連携・協働に焦点をあてて～. 第25回日本がん看護学会学術集会,2011,(神戸),[示説]
- 028 山口真由美:呼吸サポートチーム活動の課題と対策. 第38回日本集中治療医学会学術集会,2011,(横浜),[示説]

- 029 伊藤真衣:イレオストミー造設患者の体型と装具貼用時の補正との検討.第28回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会,2011,(福岡),[示設]
- 030 山下未希子:術後皮下膿瘍形成により装具貼用に難渋した一例.第28回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会,2011,(福岡),[示設]
- 031 兵藤千草:がん診療連携拠点病院における看護管理者の役割.名市大医療・保健学び直し講座,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 032 兵藤千草:安全・確実ながん化学療法.Educational TV Seminar for Nurse,2010,(大阪市),[座長]
- 033 兵藤千草:がんにならない・がんに負けない.名古屋ライオンズクラブ月例会,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 034 兵藤千草:乳がん患者へのこころのケアについて.第7回日本乳癌学会中部地方会,2010,(名古屋),[ランチョンセミナー 司会]
- 035 兵藤千草:チーム医療・化学療法看護.第7回日本乳癌学会中部地方会,2010,(名古屋),[一般演題 司会]
- 036 高木仁美,中村直子:看護管理.愛知県立総合看護専門学校,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 037 高木仁美:看護管理.愛知県看護教員養成講習会,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 038 高木仁美:看護の経営的視点.県立病院研修検討会,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 039 高木仁美:東海北陸地区看護研究会,2010,(名古屋),[学会口演 座長]
- 040 高木仁美:看護職確保定着シンポジウム.愛知県看護協会,2010,(名古屋),[シンポジウム 座長]
- 041 川瀬洋子:スピリチュアルケア.愛知県看護協会,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 042 榊原由美子:スキンケア.愛知西部排泄ケア研究会,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 043 山田美佐子:新人看護職員研修,2010,(愛知県看護協会),[講義 講師]
- 044 濱口由美子:訪問看護職員養成講習会,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 045 新貝夫弥子:看護管理者と倫理.県立病院研修検討会,2010,(愛知県がんセンター),[講義 講師]
- 046 新貝夫弥子:緩和ケアと症状マネジメント.愛知県看護協会,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 047 新貝夫弥子:認定看護師教育課程,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 048 新貝夫弥子:CNSコース,2010,(名古屋)(栃木),[講義 講師]
- 049 新貝夫弥子:全人的苦痛のある終末期がん患者へのアプローチ,2010,(名古屋)(札幌),[講義 講師]
- 050 向井未年子:がん看護.愛知医科大学看護学部,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 051 向井未年子:コンサルテーション.認定看護師教育課程,2010,(愛知県立大学),[講義 講師]
- 052 向井未年子:看護管理機能論.名古屋市立大学大学院,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 053 向井未年子:がん看護専門職として一実践の共有と連携ー.東海がんプロフェッショナル養成プラン,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 054 向井未年子:医療者とがん患者が語り合う.パネルディスカッション,2010,(名古屋),[パネリスト]
- 055 向井未年子:コンサルテーション論.愛知県立大学大学院,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 056 向井未年子:第25回日本がん看護学会学術集会,2010,(神戸),[学会 口演 座長]
- 057 向井未年子:日本におけるAPの今後と課題.第12回日本看護医療学会学術集会,2010,(名古屋),[シンポジウム 座長]
- 058 段 浩美:せん妄の看護.緩和ケア講演会,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 059 段 浩美:コミュニケーション.薬剤師研修,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 060 段 浩美:アサーション.陶生病院研修,2010,(瀬戸),[講演 講師]
- 061 段 浩美:コミュニケーション.西尾市民病院研修,2010,(西尾),[講演 講師]
- 062 段 浩美:教育セッション.第17回日本家族看護学会,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 063 段 浩美:認定看護師教育課程.愛知県立大学,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 064 青山寿昭:嚥下学習会.日進福祉会,2010,(日進),[講義 講師]
- 065 青山寿昭:摂食嚥下障害看護認定看護師カンファレンス,2010,(新潟),[座長]
- 066 青山寿昭:認定看護師教育課程.愛知県立大学,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 067 青山寿昭:名古屋市実務研修,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 068 青山寿昭:嚥下学習会.名古屋第一赤十字病院研修,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 069 青山寿昭:外来で食べるに関わる.第25回日本がん看護学会,2010,(神戸),[シンポジスト]
- 070 瀬古志桜:四日市社会保険病院研修,2010,(四日市),[講演 講師]
- 071 瀬古志桜:がんセンター公開講座,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 072 藤田 恵:痛みに対する看護.愛知県立総合看護専門学校,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 073 黒河瑞江:歯科衛生士に必要な看護.愛知県歯科衛生専門学校,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 074 西尾里美:認定看護師教育課程.愛知県立大学,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 075 久保 知:認定看護師教育課程.愛知県立大学,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 076 西尾充代:抗がん剤の被爆対策と副作用対策について.愛知県看護協会,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 077 新田都子:疼痛緩和マネジメントにおけるコミュニケーション.薬剤師研修会,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 078 新田都子:認定看護師の役割と専門性.愛知県立大学,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 079 新田都子:痛みとうまくつきあうために.公開講座,2010,(名古屋),[講師]
- 080 千種智之:城山病院研修,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 081 千種智之:済生会病院研修,2010,(名古屋),[講義 講師]
- 082 千種智之:薬剤師会研修,2010,(名古屋),[講義 講師]

- 083 永田智子: 終末期の意思決定.第22回生命倫理学会年次大会, 2010,(名古屋),[シンポジウム シンポジスト]
- 084 永田智子:スピリチュアルペイン寄り添うケア大同病院研修. 2010,(名古屋),[講義 講師]
- 085 笹川良子:第35回リザーバー研究会. 2010,(札幌),[ワークショップ 座長]
- 086 笹川良子:第39回日本IVR学会.2010,(東京),[パネルディスカッション パネリスト]
- 087 福岡敬子:第39回日本IVR学会.2010,(東京),[シンポジウムシンポジスト座長]
- 088 高木礼子:乳がん治療セミナー.2010,(群馬), [講演 講師]
- 089 段 浩美, 青山寿昭, 瀬古志桜, 宮谷美智子, 藤田 恵, 西尾里美, 久保 知, 西尾充代, 高木礼子:がん専門分野研修. 2010,(愛知県がんセンター),[講義 講師]
- 090 段浩美, 青山寿昭, 瀬古志桜, 宮谷美智子, 戸崎加奈江, 小原真紀子, 西尾里美, 西尾充代, 永田智子, 高木礼子:がん看護ジェネラリストナース育成プログラム. 2010,(愛知県がんセンター),[講義 講師]
- 薬剤部**
- 001 *Maeda A*:The impact of CYP2C19 gene polymorphism on the antiplatelet effect of clopidogrel and ticlopidine; the efficacy of ticlopidine on the non-responders of clopidogrel with CYP2C19 gene polymorphism. European Society of Cardiology.2010.(Stockholm).[示説]
- 002 *Maeda A*:Different influences of CYP2C19 gene polymorphisms on antiplatelet effect of clopidogrel and ticlopidine. American Heart Association,2010.(Chicago),[示説]
- 003 松崎雅英:「がん専門病院における薬剤師の活動」. 静薬学友会東海支部・第34回薬剤師セミナー,2010,(名古屋),[口演]
- 004 東方 都:「モース氏ペーストの紹介」.第7回 日本乳癌学会中部地方会看護セミナー,2010 ,(名古屋),[口演]
- 005 中川千玲:「再発患者の看護」.第7回 日本乳癌学会 中部地方会看護セミナー,2010 ,(名古屋),[公開カンファレンス参加]
- 006 立松三千子:「緩和医療における薬剤師の役割」.愛知県病院薬剤師会学術講演会,2010,(名古屋),[講演]
- 007 立松三千子:「地域連携における薬剤師のがんばりどころは?事例から「誰と?何のため?どうやって?」をみんなで語ろう!」.第4回日本緩和医療薬学会年会・シンポジウム,2010,(鹿児島),[シンポジスト]
- 008 井之上浩一,立松三千子,野村基雄,松下祥子,水谷和子,日野知証,岡 尚男:「薬学連携の確立に向けた『オピオイド血中モニタリング』の試み」.第4回日本緩和医療薬学会年会・シンポジウム,2010,(鹿児島),[口演]
- 009 松下祥子,井之上浩一,立松三千子,水谷和子,野村基雄,日野知証,岡 尚男:「がん患者における血清中フェンタニル濃度のLC-MS/MSを用いた測定法について」.第4回日本緩和医療薬学会年会・シンポジウム,2010,(鹿児島),[示説]
- 010 立松三千子:「がん専門施設での薬剤師の役割」.山陰大腸癌化学療法研究会 第5回特別講演会,2010,(鳥取),[講演]
- 011 富田敦嗣,松崎雅英,立松三千子,西尾充代,室 圭,前田正雄:「XELOX療法におけるオキサリプラチン投与時の血管痛様症状に対する簡易輸液加温法の評価」.第20回日本医療薬学会年会,2010,(千葉),[示説]
- 012 深谷幸代,立松三千子,大石和明,室 圭:「がん専門病院における国際共同治験の現状と問題点について」.第20回日本医療薬学会年会,2010,(千葉),[示説]
- 013 水野靖也:「臨床薬理」.愛知県立大学認定看護師教育課程(がん性疼痛看護分野),2010.(名古屋),[講義]
- 014 木野淑子:「薬剤師の視点から見たアブラキサンの特徴～利便性と調製上の注意点～」.アブラキサン発売記念講演会,2010,(名古屋),[口演]
- 015 前田章光:「ヒト有機アニオントランスポーター3発現細胞とラットを用いたセレコキシブメトトレキサート間相互作用」.日本腎臓学会,2010.(神戸),[ポスター]
- 016 前田章光:「病院薬剤師による薬物療法のエビデンス構築の重要性とその課題 ～愛知県立循環器呼吸器病センターにおける臨床試験から考える～」.日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会,2010.(静岡),[シンポジウム(示説)]
- 017 前田章光,伊藤基博:「Clopidogrelの薬効に対する各PPIの影響～CYP2C19遺伝子多型別の解析～」.日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会,2010.(静岡),[口演]
- 018 前田章光:「Clopidogrelとticlopidineの抗血小板効果に及ぼすCYP2C19遺伝子多型の影響の違い」.日本臨床薬理学会,2010(京都),[シンポジウム]

3. 学会等における研究発表テーマ調べ (研究所)

所長室

001 *Tajima K*: History of the Asian Pacific Organization for Cancer Prevention. 5th International APOCP Conference, 2010.(Istanbul, Turkey) [特別講演]

疫学・予防部

001 *Truong T, Lathrop M, Brennan P, on behalf of the INHANCE consortium*: A genome-wide association study of upper aerodigestive tract cancers identifies 4q21, 4q23, and 12q24 as susceptibility loci. American Association for Cancer Research 101st ANNUAL MEETING 2010, 2010.(Washington), [口演]

002 *Tanaka H, Saka H, Amagai K, Tanaka M, Katanoda K, Taniguchi C*: Proceeding of 'Tobacco Control Planning' for 32 cancer hospitals designated by Japanese Ministry of Health, Labor and Welfare. Asia Pacific Conference on Tobacco or Health 2010, 2010.(Sydney), [ポスター]

003 *Taniguchi C, Hibino F, Minami M, Hyoudou C, Maruguchi M, Tokunaga N, Saka H, Tanaka H*: Tobacco intervention attitudes and practices among Japanese nurses for cancer patients. Asia Pacific Conference on Tobacco or Health 2010, 2010.(Sydney), [ポスター]

004 *Ito H, Matsuo K, Ajiki W, Sobue T, Tanaka H, The Japan Cancer Surveillance Group*: Male breast cancer: a population-based comparison with female breast cancer based on data in the monitoring of cancer incidence in Japan project. 32nd Annual Meeting of International Association of Cancer Registries, 2010. (Yokohama), [ポスター]

005 *Matsuo K, Kanda J, Inoue M, Iwasaki M, Sawada N, Shimazu T, Yamaji T, Sasazuki S, Tsugane S*: Association of alcohol intake with the risk of malignant lymphoma and plasma cell myeloma in Japanese: a population-based cohort study. 32nd Annual Meeting of International Association of Cancer Registries, 2010.(Yokohama), [ポスター]

006 *Oze I, Matsuo K, Hosono S, Watanabe M, Ito H, Tajima K, Tanaka H*: Positive association between green tea consumption and risk for upper aerodigestive tract cancer in Japanese population. 32nd Annual Meeting of International Association of Cancer Registries, 2010.(Yokohama), [口演]

007 *細野覚代, 梶山広明, 吉川史隆*: Primary suboptimal surgeryを受けた進行上皮性卵巣癌患者の予後因子についての検討～組織型による比較検討～.第62回日本産婦人科学会, 2010.(東京), [ポスター]

008 *細野覚代*:日本人女性における成人期の体重増加と子宮内膜癌リスクとの関連.第48回日本婦人科腫瘍学会学術講演会, 2010.(つくば), [ワークショップ]

009 *松尾恵太郎*:乳がんに関する分子疫学研究:愛知県がんセンター症例対照研究 (HERPACC study) の結果から.がん予防学術大会2010札幌, 2010.(札幌), [シンポジウム]

010 *伊藤秀美, 松尾恵太郎, 細野覚代, 田中英夫, 田島和雄*:日本人における染色体15q25, 5q15上の遺伝子多型と肺癌リスクとの関連.がん予防学術大会2010札幌, 2010.(札幌), [ポスター]

011 *細野覚代, 松尾恵太郎, 伊藤秀美, 川瀬孝和, 渡邊美貴, 田島和雄, 田中英夫*:閉経後子宮体がん罹患リスクに対するCYP19A1遺伝子多型と肥満との交互作用について.がん予防学術大会2010札幌, 2010.(札幌), [ポスター]

012 *渡邊美貴, 立石多貴子, 尾瀬 功, 鈴木勇史, 松尾恵太郎, 川瀬孝和, 細野覚代, 伊藤秀美, 田中英夫*:ヒト集団へのドコサヘキサエン酸(DHA) 摂取が血漿, 赤血球膜組織リン脂質の脂肪酸構成に与える影響.日本脂質栄養学会第19回大会, 2010.(犬山), [ポスター]

013 *栗木清典, 田島和雄, 山雄健次, 田中英夫*:膵臓がんリスクと赤血球膜中のn-3高度不飽和脂肪酸構成割合の関連.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]

014 *松尾恵太郎*:国際頭頸部がん疫学コンソーシアム.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), []

015 *伊藤秀美, 松尾恵太郎, 細野覚代, 渡邊美貴, 田島和雄, 田中英夫*:日本人の肺がんリスクにおける15q25染色体と喫煙習慣との遺伝子-環境要因の交互作用.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]

016 *朴 智栄, 嶽崎俊郎, 伊藤秀美, 中村昭彦, 松尾恵太郎, 田中英夫, 小川 浩, 田島和雄, 青木國雄*:フィルターのないたばこからあるたばこへの移行は肺がんのリスクを減らすのに貢献するか? 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]

017 *細野覚代, 松尾恵太郎, 伊藤秀美, 渡邊美貴, 広瀬かおる, 中西 透, 田島和雄, 田中英夫*:日本人におけるCYP19A1遺伝子多型と閉経後子宮内膜癌リスクとの関連.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]

018 *尾瀬 功, 松尾恵太郎, 細野覚代, 渡邊美貴, 伊藤秀美, 田島和雄, 田中英夫*:コーヒー摂取と上部気道・消化管がんの危険性.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]

019 *富田秀太, 柳澤 聖, 衣斐寛倫, 竹内俊幸, 有馬千夏, 松尾恵太郎, 長田啓隆, 光富徹哉, 谷田部 恭, 高橋 隆*:バイオインフォマティクス手法を用いた肺癌のトランスクリプトームおよびプロテーム解析.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]

020 *佐伯宣久, 斎藤 聡, 松尾恵太郎, 片井 均, 大浪澄子, 口羽文, 佐々木博己, 梶村春彦, 中村祐輔, 廣橋説夫, 吉田輝彦, 坂本裕美*:全ゲノム関連解析により同定されたびまん型胃がん易罹患性関連染色体領域1q22及びその機能的SNP.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]

021 *伊藤秀美, 松尾恵太郎, 味木和喜子, 祖父江友孝, 田中英夫, The Japan Cancer Surveillance Group*:地域がん登録デー

- タを用いた男性乳がんの罹患の動向－女性乳がんと比較して－.Monitoring of Cancer Incidence in Japan (MCIJ) 2004.地域がん登録全国協議会 第19回学術集会, 2010.(横浜), [ポスター]
- 022 尾瀬功, 松尾恵太郎, 細野覚代, 渡邊美貴, 伊藤秀美, 田島和雄, 田中英夫.緑茶摂取と頭頸部・食道がんの関連.地域がん登録全国協議会 第19回学術集会, 2010.(横浜), [ポスター]
- 023 松尾恵太郎.肺がんの疫学.第51回日本肺癌学会総会,2010.(広島), [招請講演]
- 024 中村正和, 大島 明, 飯田真美, 川合厚子, 繁田正子, 田中英夫, 狭間礼子, 増居志津子, 石川善紀.禁煙治療のための指導者トレーニングプログラムの開発と評価 (第1報).第69回日本公衆衛生学会総会, 2010.(東京), [ポスター]
- 025 増居志津子, 中村正和, 大島 明, 川合厚子, 繁田正子, 田中英夫, 飯田真美, 狭間礼子, 石川善紀.禁煙治療のための指導者トレーニングプログラムの開発と評価 (第2報).第69回日本公衆衛生学会総会, 2010.(東京), [ポスター]
- 026 中尾心人, 松尾恵太郎, 細野覚代, 渡邊美貴, 伊藤秀美, 田島和雄, 田中英夫.日本人集団におけるABO血液型と膵臓がん発症リスクの検討.第21回日本疫学会学術総会, 2011.(札幌), [口演]
- 027 細野覚代, 松尾恵太郎, 伊藤秀美, 広瀬かおる, 中西 透, 田島和雄, 田中英夫.日本人女性におけるDNA修復遺伝子多型と子宮体がんリスクとの関連.第21回日本疫学会学術総会, 2011.(札幌), [口演]
- 028 川北大介, 松尾恵太郎, 中尾心人, 尾瀬 功, 渡邊美貴, 細野覚代, 伊藤秀美, 長谷川泰久, 田島和雄, 田中英夫.葉酸摂取量, Methylenetetrahydrofolate (MTHFR) polymorphism Thymidylate synthase (TYMS) polymorphismの頭頸部癌患者における予後への影響.第21回日本疫学会学術総会, 2011.(札幌), [口演]
- 029 尾瀬 功, 松尾恵太郎, 細野覚代, 伊藤秀美, 渡邊美貴, 田中英夫, J-MICC Study Group.ALDH2遺伝子多型と酒類別消費量の関連.J-MICC横断研究.第21回日本疫学会学術総会, 2011.(札幌), [口演]
- 030 伊藤秀美, 松尾恵太郎, 田中英夫, 三宅哲也, 山口通代.地域がん登録, 院内がん登録の整備のための愛知県下医療機関に対する意識・実態調査.第21回日本疫学会学術総会, 2011.(札幌), [口演]
- 031 井上真奈美, 永田知里, 辻 一郎, 菅原由美, 若井建志, 玉腰暁子, 松尾恵太郎, 溝上哲也, 田中恵太郎, 笹月 静, 津金昌一郎.日本人における飲酒と相死亡及び主要死因死亡との関連－わが国における6コホート研究の統合解析－.第21回日本疫学会学術総会, 2011.(札幌), [ポスター]
- 032 中村昭彦, 新村英士, 巖崎俊郎, 久保充明, 田中英夫, 若井建志, 浜島信之, J-MICC Study Group.血中HDLコレステロール濃度に関わる遺伝子多型及び生活習慣に関する横断研究.第21回日本疫学会学術総会, 2011.(札幌), [ポスター]
- 033 田中英夫, 伊藤秀美, 坂英雄, 谷口千枝, 橘和延, 所昭宏, 末久弘, 加藤有加, 野崎裕広, 近藤千昌, 鈴木幸男, 川名由紀子.禁煙治療標準化のための多施設協同研究 (1) - 治療の効果を中心に -.第20回 日本禁煙医師歯科医師連盟総会, 2011.(北九州), [口演]
- 034 菱澤方勝, 諫田淳也, 宇都宮興, 谷口修一, 衛藤徹也, 森内幸美, 田野崎隆二, 河野文夫, 宮崎泰司, 増田昌人, 長藤宏司, 原 雅道, 高梨美乃子, 甲斐俊朗, 熱田由子, 鈴木律朗, 川瀬孝和, 松尾恵太郎, 長村登紀子, 加藤俊一.成人T細胞白血病(ATL)の同種造血幹細胞移植におけるドナーのHTLV-1感染の影響.第33回日本造血細胞移植学会総会, 2011.(松山), [ワークショップ]

腫瘍病理学部

- 001 *Kondo E.*: Development of novel cancer cell-selective cell-penetrating peptides for the advanced peptide-based drug delivery system. 22nd EORTC-NCI-AACR Symposium, 2010.(Berlin), [ポスター]
- 002 *Nakanishi H, Oshima Y, Tsuchida D, Kondo E.*: Molecular targeting and imaging of gastric cancer metastasis. BIT's 3rd International Congress of Antibodies-2011(ICA-2011), 2011, (Beijing), [口演]
- 003 中西速夫, 松井誠, 西田敬子, 近藤英作.がん幹細胞様形質を示す大腸がん低分化型腺癌細胞株のgefitinib高感受性.第99回日本病理学会総会, 2010.(東京), [口演]
- 004 松井誠, 中西速夫, 近藤英作.ヒト各種悪性腫瘍細胞におけるCXADR分子の発現の特徴とその生物学的役割についての解析.第99回日本病理学会総会, 2010.(東京), [口演]
- 005 中西速夫, 欄真一郎, 松井誠, 近藤英作.がん幹細胞様形質を示す口腔扁平上皮癌細胞株のGefitinib感受性とその機構.第19回日本がん転移学会, 2010.(金沢), [口演]
- 006 近藤英作.分子標的ツールとしてのがん選択的細胞膜浸潤性を発揮する新規高透過能ペプチドの開発研究.第14回日本がん分子標的治療学会学術集会, 2010.(東京), [ワークショップ]
- 007 近藤英作, 中西速夫, 松井誠, 富田勇樹.がん細胞選択的高透過性ペプチドを応用した抗腫瘍ペプチドデリバリー系の開発.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ワークショップ]
- 008 中西速夫, 大島由記子, 土田大輔, 近藤英作.HER2遺伝子増幅胃がんに対するTrastuzumabとLapatinibの抗腫瘍効果の差異とその分子機構の解析.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 009 小屋恵理子, 阪口政清, 松井誠, 富田勇樹, 許南浩, 近藤英作.アデノウイルス受容体(CAR: CXADR)の固形癌細胞の増殖制御における役割の解析.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 010 欄真一郎, 伊地知圭, 長谷川泰久, 小川徹也, 近藤英作, 中西速夫.頭頸部扁平上皮癌細胞株におけるEMT (上皮間葉移行) とEGFR標的薬の感受性の検討.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 011 田中晴就, 中西速夫, 松井誠, 近藤英作.低分化型大腸癌におけるHER3の発現低下の機構とその意義.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]

- 012 中西速夫, 大島由記子, 伊藤誠二, 三澤一成, 小寺泰弘, 近藤英作: HER2過剰発現胃癌細胞に対する分子標的治療の検討. 第83回日本胃癌学会総会, 2011.(青森), [口演]
- 013 村上弘城, 中西速夫, 大橋紀文, 中山吾郎, 小池聖彦, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 胃癌腹膜転移に対するPTX新規感受性予測因子の網羅的探索. 第83回日本胃癌学会総会, 2011.(青森), [ポスター]

分子腫瘍学部

- 001 *Kondo Y*: Clinical implications of DNA methylation in gastrointestinal malignancies. A3 Symposium 2010, 2010.(Jeju), Korea [シンポジウム]
- 002 *Murakami H, Kawata S, Taniguchi T, Kawaguchi K, Mizuno T, Ishiguro F, Fujii M, Kondo Y, Osada H, Sekido Y*: Expression and functional analysis of Hairy Enhancer of Split 1(HES1) in human malignant mesothelioma cell lines. 10th International Conference of International Mesothelioma Interest Group, 2010.(Kyoto), [ポスター]
- 003 *Mizuno T, Murakami H, Fujii M, Taniguchi T, Ishiguro F, Kondo Y, Akatsuka S, Toyokuni S, Ueda Y, Yokoi K, Osada H, Sekido Y*: YAP induces malignant mesothelioma cell proliferation via induction of CCND1 expression. 10th International Conference of International Mesothelioma Interest Group, 2010.(Kyoto), [ポスター]
- 004 *Ishiguro F, Murakami H, Mizuno T, Fujii M, Kondo Y, Usami N, Yokoi K, Osada H, Sekido Y*: Activated leukocyte cell adhesion molecule is involved in motility and invasion of malignant pleural mesothelioma. 10th International Conference of International Mesothelioma Interest Group, 2010.(Kyoto), [ポスター]
- 005 *Sekido Y, Mizuno T, Taniguchi T, Fujii M, Ishiguro F, Fukui T, Akatsuka S, Horio Y, Hida T, Kondo Y, Toyokuni S, Osada H, Murakami H*: Inactivation of LATS2 indicates frequent dysregulation of the Merlin-Hippo signaling pathways in malignant mesothelioma. 10th International Conference of International Mesothelioma Interest Group, 2010.(Kyoto), [ワークショップ]
- 006 *Horio M, Sato M, Takeyama Y, Hase T, Yoshida K, Sekido Y, Kondo M, Hasegawa Y*: Knockdown of ZEB1, a master epithelial mesenchymal transition (EMT) inducing gene, suppresses growth of pleural mesothelioma cell lines. 10th International Conference of International Mesothelioma Interest Group, 2010.(Kyoto), [ポスター]
- 007 *Kondo Y*: Epigenetic plasticity regulated by PRC-mediated H3K27me3 as a novel target for human glioblastoma treatment. JSPS Sweden -Japan Joint Colloquium, 2010.(Stockholm), Sweden [シンポジウム]
- 008 *Shinjo K, Okamoto Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Sekido Y, Kondo Y*: Significance of CpG island methylator phenotype in human lung cancers. JSPS Sweden -Japan Joint Colloquium, 2010.(Stockholm), Sweden [ポスター]

- loquium, 2010.(Stockholm), Sweden [ポスター]
- 009 *Sekido Y*: LATS2 is a tumor suppressor gene of malignant mesothelioma. 2nd Workshop on the Hippo Tumor Suppressor Pathway, 2010.(Rome), Italy [ワークショップ]
- 010 *Kondo Y*: Epigenetic Plasticity Regulated by Polycomb Repressive Complex Contributes to Tissue Heterogeneity in Human Glioblastoma. The 41st International Symposium of The Princess Takamatsu Cancer Research Fund, 2010.(Tokyo), [シンポジウム]
- 011 *Suda K, Murakami I, Tomizawa K, Osada H, Sekido Y, Yatabe Y, Mitsudomi T*: Reciprocal relationship between EGFR T790M and MET amplification in acquired resistance to EGFR-TKIs in lung cancer. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ワークショップ]
- 012 *Fujii M, Toyoda T, Osada H, Yatabe Y, Matsudaira Y, Murakami H, Kondo Y, Hida T, Sekido Y*: TGF- β controls the Malignant Mesothelioma cell growth synergistically with YAP. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 013 *Okamoto Y, Kondo Y, Sawaki A, Nishida T, Takahashi T, Shinjo K, Fujii M, Murakami H, Osada H, Kataoka H, Job T, Sekido Y*: Aberrant DNA methylation is associated with aggressiveness of gastrointestinal stromal tumor (GIST). 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ワークショップ]
- 014 *Katsushima K, Shinjo K, Fujii M, Murakami H, Osada H, Sekido Y, Natsume A, Kondo Y*: Induction of lincRNAs and associated H3K27me3 gene silencing mechanisms during glioma-initiating cell differentiation. 第33回 日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会 合同学会, 2010.(神戸), [ポスター]
- 015 竹山佳宏, 佐藤光夫, 堀尾美穂子, 長谷哲成, 吉田健也, 小栗知世, 関戸好孝, 近藤征史, 長谷川好規: 腫瘍EMT制御因子ZEB1のノックダウンは肺癌細胞の増殖を抑制する. 第50回日本呼吸器学会学術講演会, 2010.(京都), [シンポジウム]
- 016 藤井万紀子, 豊田武士, 長田啓隆, 谷田部恭, 松平康枝, 村上秀樹, 近藤豊, 樋田豊明, 関戸好孝: 悪性中皮腫細胞の増殖におけるTGF- β シグナルおよびYAPの協調的役割について. 日本組織培養学会第83回大会, 2010.(岡山), [口演]
- 017 新城恵子, 岡本泰幸, 藤井万紀子, 村上秀樹, 長田啓隆, 関戸好孝, 近藤豊: ヒト肺癌におけるDNAメチル化とCpG island methylator phenotype の意義. 第4回日本エピジェネティクス研究会, 2010.(米子), [ポスター]
- 018 藤井万紀子, 豊田武士, 長田啓隆, 谷田部恭, 松平康枝, 村上秀樹, 近藤豊, 樋田豊明, 関戸好孝: 悪性中皮腫細胞の増殖におけるTGF- β シグナルおよびYAPの協調的役割について. 第14回日本がん分子標的治療学会学術集会, 2010.(東京), [ポスター]
- 019 近藤 豊: エピジェネティクス制御機構を標的とした新規がん治療戦略. 第14回日本がん分子標的治療学会学術集会, 2010.(東京), [シンポジウム]
- 020 村上秀樹, 谷口哲郎, 藤井万紀子, 近藤豊, 長田啓隆, 関戸好孝: 悪性中皮腫の増殖および浸潤における転写コアクターYAP/TAZの生物学的役割. 第69回日本癌学会学

- 術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 021 遊佐亜希子, 井澤峯子, 近藤藤, 神奈木玲児:大腸癌のシアリルルイスX発現誘導におけるヒストンH3トリメチル化の役割.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 022 長田啓隆, 高橋隆:Roles of ASH1-regulated miRNAs in lung cancer development.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [シンポジウム]
- 023 富田秀太, 柳澤聖, 衣斐寛倫, 竹内俊幸, 有馬千夏, 松尾恵太郎, 長田啓隆, 光富徹哉, 谷田部恭, 高橋隆:Bioinformatic analysis of transcriptome and proteome for lung cancer patients.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 024 近藤 豊, 関戸好孝:Epigenetic Plasticity in Human Malignancies.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [シンポジウム]
- 025 柳澤聖, 小西裕之, 有馬千夏, 富田秀太, 長田啓隆, 高橋隆:CIM, novel lung cancer metastasis gene, regulates multiple cellular stress-response pathways.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 026 鈴木元, 富田秀太, 有馬千夏, 増田雄司, 神谷研二, 長田啓隆, 谷田部恭, 黄勤びょう, 高橋隆:Implications of POLD4 regulation and genomic instability in small cell lung cancer.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 027 新城恵子, 近藤豊, 岡本泰幸, 横山俊彦, 宇佐美範恭, 藤井万紀子, 村上秀樹, 長田啓隆, 関戸好孝:Significance of CpG island methylator phenotype in human lung cancer.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 028 岡本泰幸, 澤木明, 近藤豊:GISTにおけるDNAメチル化と悪性度の検討.JDDW2010 第18回 日本消化器関連学会週間, 2010.(横浜), [ワークショップ]
- 029 近藤 豊:エピジェネティクスを標的とした がん治療の実際とその可能性.第48回日本癌治療学会学術集会, 2010.(京都), [シンポジウム]
- 030 須田健一, 村上功, 片山達也, 富沢賢二, 関戸好孝, 谷田部恭, 光富徹哉:肺癌に対する分子標的治療EGFR-TKI獲得メカニズムにおけるEGFR790M変異とMET遺伝子増幅の相反関係.第51回日本肺癌学会総会, 2010.(広島), [ワークショップ]
- 031 村上秀樹, 谷口哲郎, 水野鉄也, 石黒太志, 関戸好孝:高密度CGHアレイを用いた悪性中皮腫細胞株における染色体欠失・増幅領域の網羅的解析.第51回日本肺癌学会総会, 2010.(広島), [口演]
- 032 石黒太志, 村上秀樹, 水野鉄也, 宇佐美範恭, 横井香平, 関戸好孝:悪性中皮腫におけるALCAM/CD166発現の解析.第51回日本肺癌学会総会, 2010.(広島), [ポスター]
- 033 竹山佳宏, 佐藤光夫, 堀尾美穂子, 長谷哲成, 吉田健也, 小栗知世, 関戸好孝, 近藤征史, 長谷川好規:EMT制御因子ZEB1のノックダウンは肺がん細胞の足場非依存性増殖を抑制する.第51回日本肺癌学会総会, 2010.(広島), [ポスター]
- 034 水野鉄也, 村上秀樹, 石黒太志, 豊國伸哉, 横井香平, 関戸好孝:悪性胸膜中皮腫におけるYAPを介した細胞増殖機構の解析.第51回日本肺癌学会総会, 2010.(広島), [ポスター]
- 035 長田啓隆, 高橋隆:肺癌におけるmicroRNA異常.第51回日本肺癌学会総会, 2010.(広島), [シンポジウム]
- 036 大槻剛巳, 中野孝司, 長谷川誠紀, 岡田守人, 辻村亨, 関戸好孝, 豊國伸哉, 西本寛, 福岡和也, 田中文啓:科学技術振興調整費「アスベスト関連疾患への総括的取り組み」班 悪性中皮腫集学的治療に関する安全性確認試験ならびに基礎研究の進捗状況.第58回日本職業・災害医学会学術大会, 2010.(東京), [口演]
- 037 近藤 豊:がん細胞における エピジェネティクス制御異常.第21回 フォーラム・イン・ドージン, 2010.(熊本), [シンポジウム]
- 038 関戸好孝:悪性中皮腫細胞におけるNF2(マーリン) -Hippoシグナル伝達系の異常.第33回 日本分子生物学会年会・第83回 日本生化学会大会 合同学会, 2010.(神戸), [ワークショップ]
- 039 長田啓隆, 西川恵理, 有馬千夏, 立松義朗, 谷田部恭, 村上秀樹, 藤井万紀子, 近藤豊, 柳澤聖, 関戸好孝, 高橋隆:Roles of ASH1-regulated miRNAs in lung cancer development.第33回 日本分子生物学会年会・第83回 日本生化学会大会 合同学会, 2010.(神戸), [口演]
- 040 新城恵子, 近藤豊, 岡本泰幸, 横山俊彦, 宇佐美範恭, 藤井万紀子, 村上秀樹, 長田啓隆, 関戸好孝:肺腺がんの生物学的特性に関わるエピジェネティクス異常の解析.第33回 日本分子生物学会年会・第83回 日本生化学会大会 合同学会, 2010.(神戸), [ポスター]
- 041 近藤 豊:がんの組織多様性に関わる エピジェネティクス可塑性とその制御機構.第33回 日本分子生物学会年会・第83回 日本生化学会大会 合同学会, 2010.(神戸), [ワークショップ]
- 042 近藤 豊:エピジェネティクスと がん分子標的創薬.日本がんと分子標的治療学会 第7回がんTRワークショップ, 2011.(東京), [シンポジウム]

遺伝子医療研究部

- 001 *Umino A, Nakagawa M, Utsunomiya A, Tsukasaki K, Katayama N, Seto M*: Array comparative genomic hybridization revealed polyclonality in acute type adult T-cell leukemia/lymphoma and PTCL NOS. 第52回米国血液学会総会, 2010.(オーランド・米国), [ポスター (示説)]
- 002 *Karube K, Obshima K*: Molecular heterogeneity of follicular lymphoma and its clinical implications. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [口演]
- 003 *Honma K, Seto M*: Significant roles of a novel tumor suppressor, TNFAIP3/A20 discovered by genome-wide array-based comparative genomic hybridization in B-cell lymphoma. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [招請講演]
- 004 本間 圭一郎, 瀬戸 加太: Significant roles of A20 in lymphomagenesis. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [シンポジウム]
- 005 海野 啓, 中川 雅夫, 宇都宮 興, 塚崎 邦弘, 片山 直之, 瀬戸 加太: アレイCGH法を用いて明らかになった急性型成人T細胞性白血病リンパ腫と末梢T細胞性リンパ腫の類似性.

- 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 006 都築 忍, 瀬戸 加大: ERG発現による白血球化. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター (示説)]
- 007 加留部 謙之輔, 中川 雅夫, 都築 忍, 清水 則夫, 中村 栄男, 高田 尚良, 瀬戸 加大: NK/T細胞性腫瘍のゲノムプロファイル. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター (示説)]
- 008 塚本 善之, 中田 知里, 野口 剛, Tung Nguyen, 内田 智久, 泥谷 直樹, 松浦 恵子, 瀬戸 加大, 守山正胤: 胃癌で発現低下するmiR-375はPDK1と14-3-3zを標的として細胞生存を制御する. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター (示説)]
- 009 成松 隆弘, 井上 享, 吉本 多一郎, 中田 知里, 松浦 恵子, 佐藤 文憲, 瀬戸 加大, 三股 浩光, 守山正胤: 腎癌転移と9pゲノムコピー数異常の関係. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター (示説)]
- 010 黒田 明子, Tung Nguyen, 野口 剛, 塚本 善之, 内田 智久, 中田 知里, 内田 政広, 泥谷 直樹, 松浦恵子, 瀬戸 加大, 守山 正胤: 粘膜下浸潤胃癌のアレイCGH. 解析第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター (示説)]
- 011 吉岡 俊一, 泥谷 直樹, 塚本 善之, 中田 知里, Tung Nguyen, 松浦 恵子, 内田 智久, 瀬戸 加大, 河野 憲司, 守山 正胤: array-CGH法による口腔扁平上皮癌のゲノム異常解析. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター (示説)]
- 012 中川 雅夫, 都築 忍, 瀬戸 加大: BCL2, c-MYC, CCND1は協調的に働き, 正常B細胞をトランスフォームさせる. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 013 中川 雅夫, 都築 忍, 瀬戸 加大: BCL2, c-MYC, CCND1は協調的に働き, 正常B細胞の因子非依存性増殖をもたらす. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [口演]
- 014 本間 圭一郎, 瀬戸 加大: Significant roles of TNFAIP3/A20 discovered by array CGH in B cell lymphoma. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [シンポジウム]
- 015 加藤 春美, 鏡味 良豊, 中川 雅夫, シバスダラム カルナン, 谷田部 恭, 中村 栄男, 森島 泰雄, 瀬戸 加大: IL-4/CD40 ligand 共刺激はCD10陽性GCB-likeびまん性大細胞型Bリンパ腫細胞を長期増殖させる. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [口演]
- 016 瀬戸 加大: Molecular Study for B-Cell Lymphoma. Lymphoma Symposium ZENYAKU2010, (東京), [招請講演](英語)
- 017 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫のゲノム異常と分子病態. 第28回宮崎血液研究会, 2010, (宮崎市), [招請講演]
- 018 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫のゲノム異常と分子病態. : MALTリンパ腫とATL研究から教訓. 南九州腫瘍研究会 第19回学術集会, 2010.(鹿児島市), [招請講演]
- 019 瀬戸 加大: リンパ腫研究の現状と未来への展望. 第13回日本血液病理研究会, 2010.(新潟市), [特別講演]
- 020 瀬戸 加大: 消化管リンパ腫の発症機序と染色体転座. 第16回日本ヘリコバクター学会学術集会, 2010.(京都), [特別講演]
- 021 瀬戸 加大: ゲノム研究が明らかにした悪性リンパ腫発症機序と臨床へのimpact. 第63回 佐賀ブルーアートイベント, 2010.(佐賀市), [特別講演]
- 022 瀬戸 加大: 胃MALTリンパ腫の分子病態が明らかにした悪性リンパ腫発症機序. 悪性リンパ腫研究会, 2010.(神奈川県伊勢原市), [特別講演]
- 023 加留部謙之輔, 瀬戸 加大: Genetical abnormality in NK cell tumor. Lymphoma Zinzai Conference, 2010.(高根県出雲市), [招請講演]
- 024 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫の発症機序と今後の研究の方向性. 第30回埼玉先端血液懇話会, 2011, (埼玉), [招請講演]

腫瘍免疫学部

- 001 Uemura Y, Liu T, Nobori YN, Suzuki M, Hirosawa N, Ichihara Y, Ishihara O, Kikuchi H, Sakamoto Y, Sonoda Y, Senju S: Cytokine-dependent modification of IL-12p70 and IL-23 balance in dendritic cells by ligand activation of Va24 in variant natural killer T cells. 14th International Congress of Immunology, 2010.(Kobe), [ポスター]
- 002 Liu T, Suzuki M, Nobori YN, Guo Y, Hirosawa N, Ichihara Y, Sakamoto Y, Ishihara O, Kikuchi H, Senju S, Uemura Y: Distinct subsets of human invariant NKT cells differentially regulate T helper responses via dendritic cells. 14th International Congress of Immunology, 2010.(Kobe), [ポスター]
- 003 Suzuki M, Uemura Y, Liu T, Nobori YN, Hirosawa N, Uchino, S, Ichihara Y, Kikuchi H, Sakamoto Y, Senju S, Ishihara O: Role of human non-invariant NKT lymphocytes in the maintenance of type 2 T helper environment during pregnancy. 14th International Congress of Immunology, 2010.(Kobe), [ポスター]
- 004 Nobori YN, Guo H, Liu T, Hirosawa N, Uemura Y, Jiao S, Wang D, Lin Z, Suzuki M, Ichihara Y, Ishihara O, Senju S, Kikuchi H, Sakamoto Y, Sonoda Y: Bisphenol A in combination with TNF α selectively induces Th2 cell-promoting dendritic cells in vitro with an estrogen-like activity. 14th International Congress of Immunology, 2010.(Kobe), [ポスター]
- 005 Kitawaki T, Kadowaki N, Fukunaga K, Utsumi M, Kasai Y, Maekawa T, Ohmori K, Maekawa R, Kondo T, Nieda M, Yokokawa K, Ito T, Shimizu A, Tada H, Kuzushima K, Ishikawa T, Uchiyama T: Phase I/IIa clinical trials of dendritic cell-based immunotherapy for acute myeloid leukemia in elderly patients. 14th International Congress of Immunology, 2010. (Kobe), [口演]
- 006 Kitawaki T, Kadowaki N, Fukunaga K, Kasai Y, Maekawa T, Ohmori K, Maekawa R, Kondo T, Nieda M, Yokokawa K, Ito T, Shimizu A, Tada H, Kuzushima K, Ishikawa T, Uchiyama T: Phase I/IIa clinical trials of dendritic cell-based immunotherapy for acute myeloid leukemia in elderly patients using autologous apoptotic leukemic cells or a heteroclitic WT1 peptide as antigens. DC2010, 2010.(Lugano), [口演]
- 007 Hirosawa T: Is There Survival Benefits Performing Retroperitoneal Systemic Lymphadenectomy in Advanced Ep

- ithelial Ovarian cancer? 13th Biennial Meeting of the International Gynecologic Cancer Society, 2010.(Prague), [ポスター]
- 008 *Takahashi Y, Doisaki S, Nishio N, Muramatsu H, Shimada A, Hama A, Kojima S*: The telomere length in peripheral blood lymphocytes is a useful predictor of the response to immunosuppressive therapy in patients with acquired aplastic anemia. 52th annual meeting of american society of hematology, 2010.(Orlando), [ポスター]
- 009 *Nishio N, Takahashi Y, Tanaka M, Xu Y, Yoshida N, Sakaguchi H, Doisaki S, Hama A, Muramatsu H, Shimada A, Kojima S*: Aberrant phosphorylation of STAT5 by granulocyte-macrophage colony-stimulating factor in infant cytomegalovirus infection mimicking juvenile myelomonocytic leukemia. 2010 International JMML symposium, 2010.(Orlando), [口演]
- 010 *Yamamura T, Bleakley M, Hikita J, Matsubara A, Hamajima T, Nannya Y, Takahashi T, Emi N, Morishima Y, Kodera, Y, Kuzushima K, Riddell SR, Ogawa S, Akatsuka Y*: Development of an online tool to scan single nucleotide polymorphisms for identification of novel minor histocompatibility antigens. 第17回BMT Tandem Meetings, 2011, (Honolulu), [ポスター]
- 011 *Akatsuka Y*: Characterization and clinical application of minor histocompatibility antigens. The 15th Annual Winter Meeting of the Korean Society of Blood and Marrow Transplantation, 2011, (Muju), [招請講演]
- 012 *西尾信博, 高橋義行, 村松秀城, 濱麻人, 嶋田明, 小島勢二*: Flow-FISH法によるリンパ球テロメア長測定は先天性角化不全症のscreeningに有用である. 第113回日本小児科学会学術集会, 2010.(盛岡), [口演]
- 013 *近藤紳司*: 当院における絨毛癌First Line:Modified MEA療法の検討. 第62回日本産科婦人科学会学術講演会, 2010.(東京), [ポスター]
- 014 *Akatsuka Y, Yamamura T, Bleakley M, Hikita J, Hamajima T, Nannya Y, Matsubara A, Riddell SR, Takahashi T, Kuzushima K, Ogawa S*: Identification of novel minor histocompatibility antigens using HAPMAP EBV-LCL panels transduced with restricting HLA cDNA retrovirally. 第16回日本遺伝子治療学会, 2010.(宇都宮), [ポスター]
- 015 *岡村文子, 鳥飼宏基, 赤塚美樹, 近藤紳司, 廣澤友也, 西尾信博, 植村靖史, 葛島清隆*: HLA-A24拘束性ピューロマイシン感受性アミノペプチダーゼ特異的CTLのエピトープはオートファジーを介して隣がん細胞に提示される. 第14回日本がん免疫学会総会, 2010.(熊本), [口演]
- 016 *永井功造, 藤原弘, 越智俊元, 安軍, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 安川正貴*: Development of anti-leukemia gene immunotherapy using Aurora-A kinase-specific T-cell receptor gene transfer. 第14回日本がん免疫学会総会, 2010.(熊本), [口演]
- 017 *越智俊元, 藤原弘, 岡本幸子, 安軍, 永井功造, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 珠玖洋, 安川正貴*: 内在性TCRを抑制できるWT1特異的TCRベクターを用いたがんに対する新たな免疫遺伝子療法の開発. 第14回日本がん免疫学会総会, 2010.(熊本), [口演]
- 018 *安軍, 藤原弘, 越智俊元, 峰野純一, 葛島清隆, 珠玖洋, 安川正貴*: Engineered T cells using both chemokine-receptor gene and tumor-specific TCR gene transfer for adoptive therapy. 第14回日本がん免疫学会総会, 2010.(熊本), [口演]
- 019 *越智俊元, 藤原弘, 岡本幸子, 安軍, 永井功造, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 珠玖洋, 安川正貴*: 内在性TCR抑制指向性WT1特異的TCRベクターを用いた白血病に対する新たな免疫遺伝子療法の開発. 第2回造血器腫瘍免疫療法研究会学術集会, 2010.(松山), [口演]
- 020 *永井功造, 藤原弘, 越智俊元, 安軍, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 珠玖洋, 安川正貴*: Aurora-A kinase特異的T細胞受容体遺伝子を用いたがん免疫遺伝子療法の開発. 第2回造血器腫瘍免疫療法研究会学術集会, 2010.(松山), [口演]
- 021 *安軍, 藤原弘, 越智俊元, 永井功造, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 安川正貴*: ケモカインレセプターとがん特異的T細胞レセプターを利用したがんに対する免疫遺伝子療法の開発. 第2回造血器腫瘍免疫療法研究会学術集会, 2010.(松山), [口演]
- 022 *小川誠司, 松原亜以子, 鬼塚真, 柏瀬貢一, 真田昌, 南谷泰仁, 赤塚美樹, 佐竹正博, 千葉滋, 佐治博夫, 丸谷悦子, 猪子英俊, 森島泰雄, 小寺良尚, 笹月健彦*: MHCと疾患 GWASの手法による同種造血幹細胞移植の遺伝学的背景の探索. 第19回日本組織適合性学会大会, 2010.(東京), [口演]
- 023 *藤原弘, 安軍, 越智俊元, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 珠玖洋, 安川正貴*: 養子免疫療法の効果増強を目的にケモカイン受容体とがん腫瘍特異的T細胞受容体の両遺伝子を導入したTリンパ球. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 024 *永井功造, 藤原弘, 越智俊元, 安軍, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 安川正貴*: Aurora-A kinase特異的T細胞受容体遺伝子を用いたがん遺伝子免疫療法の開発. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 025 *岡村(出町)文子, 鳥飼宏基, 赤塚美樹, 近藤紳司, 廣澤友也, 西尾信博, 植村靖史, 葛島清隆*: HLA-A24拘束性ピューロマイシン感受性アミノペプチダーゼ特異的CTLの認識エピトープはオートファジーを介して提示される. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 026 *越智俊元, 藤原弘, 岡本幸子, 安軍, 永井功造, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 珠玖洋, 安川正貴*: 内在性TCRを抑制できるWT1特異的TCRベクターを用いたがんに対する新たな免疫遺伝子療法の開発. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 027 *Sakaguchi H, Takahashi Y, Watanabe N, Doisaki S, Muramatsu H, Yoshida N, Nishio N, Maeda N, Hama A, Matsumoto K, Horibe K, Kojima S, Kato K*: Cord blood versus bone marrow for the alternative stem cell source of children with acute leukemia. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [口演]
- 028 *Takahashi Y, Bustos I, Doisaki S, Muramatsu H, Nishio N, Shi*

- mada A, Hama A, Kojima S*: Recovery of deficient regulatory T cells after IST or SCT using ATG in children with aplastic anemia. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [口演]
- 029 *Hama A, Makishima H, Muramatsu H, Sugimoto Y, Doisaki S, Nishio N, Shimada A, Takahashi Y, Kiyoi H, Maciejewski JP, Kojima S*: Gene alterations of acute megakaryoblastic leukemia (AMKL) with and without Down syndrome. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [口演]
- 030 *Muramatsu H, Watanabe N, Takahashi Y, Shimada A, Nishio N, Hama A, Doisaki S, Yagasaki H, Matsumoto K, Kato K, Horibe K, Kojima S*: Imatinib and HSCT improves the outcome of pediatric patients with Ph ALL. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [口演]
- 031 *Doisaki S, Muramatsu H, Nishio N, Hama A, Shimada A, Takahashi Y, Kojima S*: Favorable outcome of children with Juvenile Myelomonocytic Leukemia (JMML) and RAS mutations. 第72回日本血液学会学術集会, 2010.(横浜), [口演]
- 032 赤塚美樹: マイナー組織適合抗原の重要性. 第33回日本造血細胞移植学会, 2011.(松山), [シンポジウム]
- 033 藤原 弘, 越智俊元, 永井功造, 安 軍, 岡本幸子, 峰野純一, 浅井洋晶, 宮崎幸大, 白方俊章, 成見弘, 葛島清隆, 珠玖洋, 安川正貴: Development of gene-immunotherapy using tumor antigen-specific T-cell receptor gene against human leukemia (Update report): Attempts to conquer facing problems. 第33回日本造血細胞移植学会総会, 2011.(松山), [ワークショップ]
- 034 嶋田明, 高橋義行, 土居崎小夜子, 村松秀城, 西尾信博, 濱麻人, 鈴木道雄, 伊藤嘉規, 小島勢二, 齊藤美香, 木村博一: 持続的cytomegalovirus及びhuman parvovirus B19感染がみられた臍帯血移植後のLangerhans cell histiocytosisの1女児例.第33回日本造血細胞移植学会総会, 2011.(松山), [ポスター]
- 035 赤塚美樹, 山村武史, Bleakley Marie, 疋田潤哉, 濱島剛, 南谷泰仁, 松原亜以子, Riddell Stanley, 恵美宣彦, 小寺良尚, 森島泰雄, 小川誠司: HapMap資源を利用したマイナー組織適合抗原に関するSNP同定のためのオンラインソフトの開発.第33回日本造血細胞移植学会, 2011.(松山), [ポスター]
- 腫瘍ウイルス学部**
- 001 *Tsurumi T*: Epstein-Barr virus replication and host cell interactions. International symposium Infection-associated Cancers, 2010.(Sapporo), [招請講演]
- 002 *Isomura H, Stinski ME, Murata T, Chiba S, Kanda T, Tsurumi T*: Human Cytomegalovirus Late Transactivators Recruited to the Replication Compartments. 35th Annual International Herpes Virus Workshop, 2010. (Salt Lake City, Utah), [ポスター]
- 003 *Tsurumi T, Nakayama S, Murata T*: Tail to tail contact for tetrameric ring formation of EBV processivity factor is crucial for viral replication. The EMBO meeting 2010, 2010.(Barcelona), [ポスター]
- 004 *Kanda T, Tsurumi T*: The impact of viral repetitive sequences on the biological properties of Epstein-Barr virus recombinants. The 14th Biennial Conference of the International Association for Research on Epstein-Barr Virus & Associated Diseases, 2010.(Birmingham), [ポスター]
- 005 *Murata T, Tsurumi T*: Screening of cellular factors that enhance reactivation from the Epstein-Barr virus latency. The 14th Biennial Conference of the International Association for Research on Epstein-Barr Virus & Associated Diseases, 2010.(Birmingham), [口演]
- 006 *Isomura H, Stinski M, Mutata T, Yamashita Y, Kanda T, Toyokuni S, and Tsurumi T*: Human cytomegalovirus genes required for late viral gene expression and assembly into pre-replication complexes before viral DNA replication. 13th International CMV/BetaHerpesvirus Workshop, 2011. (Nuremberg, Germany), [口演]
- 007 神田輝:潜伏感染EBウイルスエピソードの宿主染色体付着に必要なシス塩基配列の解析. 第27回染色体ワークショップ, 2010.(御殿場), [口演]
- 008 磯村寛樹, 鶴見達也:ウイルスDNA複製の場に集合するヒトサイトメガロウイルスの後期遺伝子特異的転写活性化因子. 第25回ヘルペスウイルス研究会, 2010.(浜松), [口演]
- 009 神田輝, 鶴見達也:潜伏感染EBウイルスエピソードの宿主染色体付着機構の解析. 第25回ヘルペスウイルス研究会, 2010.(浜松), [口演]
- 010 神田輝, 鶴見達也: 潜伏感染細胞中でEBNA1蛋白質と相互作用する細胞性因子の解析. 第7回EBウイルス研究会, 2010.(札幌), [口演]
- 011 村田貴之, 鶴見達也: EBウイルスBZLF1はSUMO化によりその転写活性を強く抑制される. 第7回EBウイルス研究会, 2010.(札幌), [口演]
- 012 磯村寛樹, 鶴見達也:Human cytomegalovirus late transactivators recruited to the pre-replication compartments.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 013 村田貴之, 鶴見達也:Screening of cellular factors that enhance reactivation of Epstein-Barr virus from latency.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 014 中山早苗, 村田貴之, 鶴見達也:Tail to tail contact for tetrameric ring formation of EBV BMRF1 is crucial for viral replication.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 015 安田愛, 野口耕治, 片山和浩, 三橋純子, 坂東俊和, 杉山弘, 神田輝, 杉本芳一:Pyrrrole-imidazole polyamide inhibiting EBNA1-oriP interaction.第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 016 神田輝, 越智俊元, 安川正貴, 岡本幸子, 峰野純一, 葛島清隆, 鶴見達也:Utilizing WT1-expressing lymphoblastoid cell lines for the induction of WT1-specific cell immunity. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]磯村寛樹, 鶴見達也: ヒトサイトメガロウイルスのウイルスDNA複製に依存する後期遺伝子発現機構の解明. 第58回日本ウ

- イルス学会学術集会, 2010.(徳島), [口演]
- 017 磯村寛樹, 鶴見達也: ヒトサイトメガロウイルスのウイルスDNA複製に依存する後期遺伝子発現機構の解明. 第58回日本ウイルス学会学術集会, 2010.(徳島), [口演]
- 018 神田輝, 鶴見達也: EBウイルス潜伏感染細胞内におけるEBNA1蛋白質結合細胞性因子の解析. 第58回日本ウイルス学会学術集会, 2010.(徳島), [口演]
- 019 野口耕司, 安田愛, 片山和浩, 三橋純子, 葦島維文, 坂東俊和, 杉山弘, 神田輝, 杉本芳一: EBNA1蛋白質のDNA結合能を阻害する化合物の探索研究. 第58回日本ウイルス学会学術集会, 2010.(徳島), [口演]
- 020 村田貴之: EBV再活性化の分子メカニズム. 第58回日本ウイルス学会学術集会, 2010.(徳島), [シンポジウム]
- 021 村田貴之, 遠山恵則, 鶴見達也: EBウイルスBGLF5のスクレアーゼ活性とシャットオフ活性のウイルス学的検討. 第58回日本ウイルス学会学術集会, 2010.(徳島), [口演]
- 022 中山早苗, 村田貴之, 安井善宏, 村山和隆, 鶴見達也: EBVポリマーゼ付随蛋白質の4量体形成のtail-to-tail結合はウイルス複製に重要である. 第58回日本ウイルス学会学術集会, 2010.(徳島), [口演]
- 023 野田千恵子, 村田貴之, 鶴見達也: EBウイルスLMP1の発現を制御する細胞性因子のスクリーニング. 第58回日本ウイルス学会学術集会, 2010.(徳島), [ポスター]
- 024 杉本温子, 西山幸廣, 鶴見達也: Epstein-Barrウイルスreplication compartmentの構造解析. 第58回日本ウイルス学会学術集会, 2010.(徳島), [ポスター]
- 分子病態学部
- 001 *Kamijo Y, Zhang X, Nakajima T, Hashimoto K, Kannagi R, Kyogashima M, Higuchi M, Hara A, Aoyama T*: Oxidative stress induced by murine protein-overload nephropathy down-regulates gene expression of hepatic cerebroside sulfotransferase, resulting in reduction of liver and serum sulfatides. The ISN (International Society of Nephrology) Nexus Symposia, "Kidney and Vascular System: Emerging Culprits in Pathogenesis and Advances in Therapy", 2010.(Kyoto), [ポスター]
- 002 *Tanaka K, Yamada M, Yamazaki Y, Eaton A, Aoyama T, Hara A, Kannagi R, Kyogashima M*: A novel method for analysis of diversities in ceramides and glycosphingolipids by MALDI-TOFMS and MS2 equipped with high-energy CID. 58th ASMS Conference on Mass Spectrometry and Allied Topics, 2010.(Salt Lake City), [ポスター]
- 003 *Tanaka K, Yamada M, Yamazaki Y, Eaton A, Aoyama T, Hara A, Kannagi R, Kyogashima M*: A novel method for analysis of diversities in ceramides and neutral sphingoglycolipids by MALDI-TOFMS and MS2 equipped with high-energy CID. The 58th Annual Conference on Mass Spectrometry and The 1st Asian Oceanic Mass spectrometry conference, 2010.(Tsukuba), [ポスター]
- 004 *Kyogashima M, Tanaka K, Yamada M, Kannagi R*: Characterization of free ceramides and compositional ceramides in neutral glycosphingolipids by MALDI-TOFMS/MS2 with high-energy CID. GlycoT2010 Tokyo 7th International Symposium on glycosyltransferases, 2010.(東京), [ポスター]
- 005 *Takematsu H, Naito Y, Tanaka K, Kyogashima K, Kannagi R*: Genetic Understanding of Biosynthetic Pathway Branching Regulation by a Novel Phenotype-Genotype Correlation Analysis. Cires. 2010 Annual Conference of the Society for Glycobiology, 2010.(St. Pete Beach), [ポスター]
- 006 *Tanaka K, Tamiya-Koizumi K, Hagiwara K, Murakami M, Murate T, Kannagi R, Kyogashima M*: ATRA down-regulates neutral ceramidase and induces neuronal differentiation in SH-SY5Y cells. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 007 *Tanaka K, Tamiya-Koizumi K, Hagiwara K, Murakami M, Murate T, Banno Y, Nakamura M, Kannagi R, Kyogashima M*: Down regulation of neutral ceramidase induces neural differentiation in human neuroblastoma SH-SY5Y cells. BMB2010, 2010.(神戸), [ポスター]
- 008 京ヶ島 守: スフィンゴ脂質の分子種多様性・疾患バイオマーカーとしてのスフィンゴ脂質について -高エネルギーCIDを装備したMALDI-TOFMSを用いた解析例の紹介-. 第52回日本脂質生化学会, 2010.(伊香保), [ポスター]
- 009 田中広治, 山田真希, 小泉恵子, 神奈木玲児, 京ヶ島 守: 高エネルギーCIDを装備したMALDI-TOFMSによるスフィンゴ脂質の体系的解析. 第5回スフィンゴセラピィ研究会, 2010.(米子), [口演]
- 010 田中広治, 萩原和美, 村上真史, 村手 隆, 坂野喜子, 中村光浩, 神奈木玲児, 小泉恵子, 京ヶ島 守: 中性セラミダーゼの発現抑制はヒト神経芽細胞腫SH-SY5Y細胞に分化を誘導する. 糖鎖科学名古屋拠点「若手の力」フォーラム第8回, 2010.(名古屋), [ポスター]
- 011 遊佐亜希子, 藤井正宏, 後藤嘉子, 小田高司, 宇都宮洋才, 京ヶ島守, 神奈木玲児: 陽性荷電をもつHS糖鎖GlcA-GlcNH3⁺の細胞生物学的研究. 糖鎖科学名古屋拠点 第8回「若手の力」フォーラムおよび名古屋拠点若手研究奨励賞講演, 2010.(名古屋), [口演]
- 012 遊佐亜希子, 井澤峯子, 近藤豊, 関戸好孝, 神奈木玲児: Role of histone H3 trimethylation in induction of sialyl Lewis x expression in colon cancer. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 013 佐久間圭一郎, 神奈木玲児: Growth factor-induced EMT enhances expression of E-selectin ligand glycans on colorectal cancer cells. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [口演]
- 014 田中広治, 萩原和美, 村上真史, 村手 隆, 中村光浩, 坂野喜子, 小泉恵子, 神奈木玲児, 京ヶ島 守: 中性セラミダーゼの発現抑制はヒト神経芽細胞腫SH-SY5Y細胞に分化を誘導する. 第3回セラミド研究会 学術集会, 2010.(東京), [口演]
- 015 古橋卓也, 佐久間圭一郎, 神奈木玲児, 森田明理, 等: Quantifying carbohydrate adhesion molecules on helper memory

- T cells for the diagnosis and evaluation of atopic dermatitis severity.第35回日本研究皮膚科学会, 2010.(和歌山), [ポスター]
- 016 遊佐亜希子, 藤井正宏, 後藤嘉子, 小田高司, 宇都宮洋才, 京ヶ島守, 神奈木玲児. The expression of cationic heparan sulfate is increased in cell proliferation, differentiation and apoptosis. BMB2010, 第83回日本生化学会大会, 2010.(神戸), [口演・ポスター]

発がん制御研究部

- 001 *Inoko A, Ibi M, Izawa I*: Trichoplein, the centriolar Aurora-A partner, prevents primary cilia. MEXT Priority Research Project "Cell Proliferation Control" International Symposium Cell Cycle and Cell Differentiation From A to Z, 2010.(Nagoya), [シンポジウム]
- 002 *Matsuyama M, Kasahara K, Goto H*: Nuclear Chk1 prevents premature activation of cyclinB1-Cdk1. MEXT Priority Research Project "Cell Proliferation Control" International Symposium Cell Cycle and Cell Differentiation From A to Z, 2010.(Nagoya), [シンポジウム]
- 003 *Kasahara K*: 14-3-3 γ mediates Cdc25A proteolysis to induce S and G2 arrest after DNA damage. GCOE第13回プログレスレポート会議, 2010.(名古屋), [シンポジウム]
- 004 *Izawa I, Hayashi Y, Inagaki M*: Interaction of Scribble, a LAP family protein, with p0071. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 005 *Inoko A, Ohmuro-Matsuyama Y, Matsuyama M, Enomoto M, Zou P, Ibi M, Kiyono T, Yonemura S, Goto H, Inagaki M*: Trichoplein, a keratin-binding protein, suppresses a cilia assembly program. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 006 *Kasahara K, Goto H, Kiyono T, Inagaki M*: PP2A antagonizes Chk1 phosphorylation by ATR through 14-3-3 proteins in DNA damage checkpoint. 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 007 *Li P, Goto H, Kasahara K, Kiyono T, Inagaki M*: Chk1 phosphorylation at Ser280 by p90 ribosomal S6 kinase (RSK). 第69回日本癌学会学術総会, 2010.(大阪), [ポスター]
- 008 *Inoko A, Matsuyama M, Goto H, Ohmuro-Matsuyama Y, Ibi M, Hayashi Y, Kiyono T, Yonemura S, Urano T, Izawa I, Inagaki M*: Trichoplein, the centriolar Aurora-A and Odf2 partner, blocks cilia assembly. 第3回NAGOYAグローバルリトリート, 2011.(大府), [ポスター]
- 009 *Kasahara K, Goto H, Inagaki M*: The involvement of 14-3-3 gamma in mitotic progression. 第3回NAGOYAグローバルリトリート, 2011.(大府), [ポスター]
- 010 *Ibi M*: A novel function of trichoplein at the cell junctions. 第3回NAGOYAグローバルリトリート, 2011.(大府), [ポスター]
- 011 稲垣昌樹, 笠原広介, 李萍, 後藤英仁: 抗リン酸化ペプチド抗体とチェックポイントシグナル.H22生化学会中部支部例会, 2010.(名古屋), [シンポジウム]
- 012 猪子誠人: ケラチン結合蛋白質であるトリコブレインは一次線毛形成を抑制する.H22生化学会中部支部例会, 2010.(名古屋), [ポスター]
- 013 衣斐美歩: ケラチン結合蛋白質trichopleinは中心小体に局在し微小管のanchoring (アンカリング) を制御する.H22生化学会中部支部例会, 2010.(名古屋), [ポスター]
- 014 稲垣昌樹: 多彩なリン酸化によってチェックポイントキナーゼ1 (Chk1) は機能修飾される. 日本分子生物学会第10回春季シンポジウム, 2010.(松島), [シンポジウム]
- 015 李萍, 後藤英仁, 笠原広介, 松山誠, 清野透, 稲垣昌樹: 増殖刺激応答におけるChk1-Ser280のリン酸化反応. 第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会年会, 2010.(神戸), [ポスター]
- 016 松山誠, 後藤英仁, 笠原広介, 川上和孝, 井澤一郎, 榎本将人, 小堀恭子, 中西真, 清野透, 五島直樹, 稲垣昌樹: 中心体ではなく核に局在するChk1が細胞周期において重要な役割を果たす. 第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会合同大会, 2010.(神戸), [ポスター]
- 017 松山誠: 中心体ではなく核に局在するChk1が分裂期の進行に重要な役割を果たす. グローバルCOE第20回プログレスレポート会議, 2011.(名古屋), [シンポジウム]
- 018 李萍, 後藤英仁, 笠原広介, 松山誠, 清野透, 稲垣昌樹: Chk1 is phosphorylated at Ser280 by p90 ribosomal S6 kinase (RSK) in response to serum stimulation. 第3回NAGOYAグローバルリトリート, 2011.(大府), [ポスター]
- 019 松山誠: Nuclear Chk1 prevents premature mitotic entry. 第3回NAGOYAグローバルリトリート, 2011.(大府), [シンポジウム]
- 020 稲垣昌樹: 癌治療に向けての新しい標的分子の探索. 第32回泌尿器科分子・細胞研究会, 2011.(津), [シンポジウム]

4. 学会誌・その他誌上発表テーマ調べ (総長)

総長

- 001 *Nimura Y*: Extrahepatic cholangiocarcinoma. In: Surgical Management of Hepatobiliary and Pancreatic Disorders, Second Edition. Eds. Graeme Poston, Mike D'Angelica, Rene Adam, Informa Healthcare, London, UK, 333-342, 2010.
- 002 *Nimura Y*: Venous resection in pancreatic cancer surgery. In: Pancreatic Cancer, Volume 2. Eds. John P. Neoptolemos, Raul Urrutia, James L. Abbruzzese, Markus W. Büchler, Springer, New York, USA, 997-1013, 2010.
- 003 *Okusaka T, Nakachi K, Fukutomi A, Mizuno N, Ohkawa S, Funakoshi A, Nagino M, Kondo S, Nagaoka S, Funai J, Koshiji M, Nambu Y, Furuse J, Miyazaki M, Nimura Y*: Gemcitabine alone or in combination with cisplatin in patients with biliary tract cancer: a comparative multicentre study in Japan. *British Journal of Cancer* 103:469-474, 2010.
- 004 二村雄次: 膵・胆道腫瘍の2010年WHO新分類と日本の役割. *肝胆膵*, 62:5-6, 2011.

5. 学会誌・その他誌上発表テーマ調べ (病院)

病院長

- 001 小澤壮司, 日月裕司, 田中乙雄, 篠田雅幸, 宇田川晴司, 松原久裕, 馬場秀夫, 竹内裕也, 小山恒男, 室圭, 宇野隆, 手島昭樹, 沼崎穂高:臓器がん登録の現状と将来展望-臨床へのフィードバックを目指して-食道癌全国登録の現状と将来展望.外科治療, 102(4):永井書店:353-357, 2010.
- 002 Soji Ozaawa, Yuji Tachimori, Hideo Baba, Hisabiro Matsubara, Kei Muro, Hodaka Numasaki, Tsuneo Oyama, Masayuki Shinoda, Hiroya Takeuchi, Otsuo Tanaka, Teruki Teshima, Harushi Udagawa, Takashi Uno, J.Patrick Barron:Comprehensive Registry of Esophageal Cancer in Japan, 2002.Esophagus, 7:7-22, 2010.
- 003 Shunzo Hatooka, Tetsuya Abe, Takuya Saito, Tetsuya Mitudomi, Masayuki Shinoda:Lymph node metastasis of an esophageal cancer behind the thoracic descending aorta.Esophagus, 7:111-114, 2010.
- 004 安藤暢敏, 加藤抱一, 篠田雅幸, 福田治彦:Upper G.I.Cancer 食道・胃癌 II.わが国における食道癌集学的治療の歩み.癌と化学療法, 癌と化学療法社 37:1674-1678, 2010.
- 005 竜 崇正, 浜野公明, 清水英昭, 篠田雅幸, 三浦 猛, 吉田 功:特集消化器外科データベースの構築とその展開2.癌専門病院のDPCデータのベンチマーキングによる癌医療の質向上と標準化の試み.Surgery Frontier, 17(4):18-27, 2010.

消化器内科部

[原著]

001. Hosoda W, Takagi T, Mizuno N, Shimizu Y, Sano T, Yamao K, Yatabe Y:Diagnostic approach to pancreatic tumors with the specimens of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration.Pathol Int, 60(5):358-364, 2010.
002. Mekky MA, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Nafeh MA, Osman AM, Koshikawa T, Yatabe Y, Bhatia V:Diagnostic utility of EUS-guided FNA in patients with gastric submucosal tumors.Gastrointest Endosc., 71(6):913-919, 2010.
003. Ko SB, Mizuno N, Yatabe Y, Yoshikawa T, Ishiguro H, Yamamoto A, Azuma S, Naruse S, Yamao K, Muallem S, Goto H: Corticosteroids correct aberrant CFTR localization in the duct and regenerate acinar cells in autoimmune pancreatitis.Gastroenterology, 138(5):1988-1996, 2010.
004. Shitara K, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Shibata T, Ura T, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Muro K:Neutropenia as a prognostic factor in advanced gastric cancer patients undergoing second-line chemotherapy with weekly paclitaxel.Ann Oncol, 21(12):2403-2409, 2010.
005. Shitara K, Muro K, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H,

Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Tajika K, Yatabe Y, Tanaka H, Matsuo K:Folate intake along with genetic polymorphisms in methylenetetrahydrofolate reductase and thymidylate synthase in patients with advanced gastric cancer.Cancer Epidemiol Biomarkers Prev, 19(5):1311-1319, 2010.

006. Okusaka T, Nakachi K, Fukutomi A, Mizuno N, Ohkawa S, Funakoshi A, Nagino M, Kondo S, Nagaoka S, Funai J, Koshiji M, Nambu Y, Furuse J, Miyazaki M, Nimura Y:Gemcitabine alone or in combination with cisplatin in patients with biliary tract cancer:a comparative multicentre study in Japan.Br J Cancer, 103(4):469-74, 2010.
007. Bang YJ, Van Cutsem E, Feyereislova A, Chung HC, Shen L, Sawaki A, Lordick F, Ohtsu A, Omuro Y, Satoh T, Aprile G, Kulikov E, Hill J, Lehle M, Rüschoff J, Kang YK:ToGA Trial Investigators:Trastuzumab in combination with chemotherapy versus chemotherapy alone for treatment of HER2-positive advanced gastric or gastro-oesophageal junction cancer (ToGA):a phase 3, open-label, randomised controlled trial.Lancet, 376(9742):687-697, 2010.
008. An B, Kondo Y, Okamoto Y, Shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JP, Sekido Y:Characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers.Int J Cancer, 127(9):2095-2105, 2010.
009. Kobayashi Y, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Hara K, Mizuno N, Hijioka S, Sawaki A, Matsuo K, Nakagawa H, Nakamura Y, Yamao K:Serum tumor antigen REG4 as a useful diagnostic biomarker in gastric cancer. Hepatogastroenterology, 57(104):1631-1634, 2010.
010. Sawai Y, Yamao K, Bhatia V, Chiba T, Mizuno N, Sawaki A, Takahashi K, Tajika M, Shimizu Y, Yatabe Y, Yanagisawa A:Development of pancreatic cancers during long-term follow-up of side-branch intraductal papillary mucinous neoplasms.Endoscopy, 42(12):1077-1084, 2010.
011. Shimizu Y, Kanemitsu Y, Sano T, Senda Y, Mizuno N, Yamao K:A nomogram for predicting the probability of carcinoma in patients with intraductal papillary-mucinous neoplasm.World J Surg., 34(12):2932-2938, 2010.
012. Yamao K, Yanagisawa A, Takahashi K, Kimura W, Doi R, Fukushima N, Obike N, Shimizu M, Hatori T, Nobukawa B, Hifumi M, Kobayashi Y, Tobita K, Tanno S, Sugiyama M, Miyasaka Y, Nakagobri T, Yamaguchi T, Hanada K, Abe H, Tada M, Fujita N, Tanaka M:Clinicopathological features and prognosis of mucinous cystic neoplasm with ovarian-type stroma:a multi-institutional study of the Japan pancreas society.Pancreas, 40(1):67-71, 2011.
013. Matsumoto K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Niwa Y,

- Tajika M, Kawai H, Kondo S, Yamao K*:Clinical efficacy and safety of sunitinib after imatinib failure in Japanese patients with gastrointestinal stromal tumor.Jpn J Clin Oncol, 41(1):57-62, 2011.
014. *Okusaka T, Furuse J, Funakoshi A, Ioka T, Yamao K, Ohkawa S, Boku N, Komatsu Y, Nakamori S, Iguchi H, Ito T, Nakagawa K, Nakachi K*:Phase II study of erlotinib plus gemcitabine in Japanese patients with unresectable pancreatic cancer. Cancer Sci., 102(2):425-431, 2011.
015. *Hara K, Senga T, Biswas MH, Hasegawa H, Ito S, Hyodo T, Hirooka Y, Niwa Y, Goto H, Hamaguchi M*:Recovery of anoikis in Src-transformed cells and human breast carcinoma cells by restoration of the SIRP α 1/SHP-2 signaling system.Cancer Research, 71(4):1229-1234, 2011.
016. *Sawaki A, Nishida T, Doi T, Yamada Y, Komatsu Y, Kanda T, Kakeji Y, Onozawa Y, Yamasaki M, Ohtsu A*:Phase 2 study of nilotinib as third-line therapy for patients with gastrointestinal stromal tumor.Cancer. :Epub, 2011.
- [総説 , その他]
001. *Hara K, Yamao K, Mizuno N, Sawaki A, Takagi T, Bhatia V*:Endoscopic ultrasound-guided choledochoduodenostomy.Dig Endosc., 22(2):147-150, 2010.
002. *Chari ST, Deshpande V, Fernandez del Castillo C, Freeman ML, Frulloni L, Gardner TB, Go VL, Irisawa A, Ito T, Kamisawa T, Kawa S, Kim MH, Kloppel G, Kojima M, Lerch MM, Levy MJ, Lohr M, Longnecker DS, Mayerle J, Mino-Kemudson M, Mizuno N, Notohara K, Okazaki K, Rodriguez-Justo M, Shimosegawa T, Smyrk TC, Srivastava A, Sugumar A, Takahashi N, Webster G, Zamboni G, Zen Y, Zhang L*:Histopathologic and clinical subtypes of autoimmune pancreatitis:the Honolulu consensus document.Pancreas, 39(5):549-54, 2010.
003. *Yamao K, Hara K, Mizuno N, Sawaki A, Hijioka S, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Shimizu Y, Bhatia V*EUS-Guided Biliary Drainage.Gut Liver, 4(Suppl1):S67-S75, 2010.
004. *Hara K, Yamao K, Mizuno N, Hijioka S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Shimizu Y, Niwa Y*:Interventional endoscopic ultrasonography for pancreatic cancer.World J Clin Oncol, 2(2):108-114, 2011.
005. 原 和生, 水野伸匡, 今村秀道, 脇岡 範, 山雄健次:胆膵[診断]コンベックス型EUSの基本.消化器内視鏡, 22(4):683-686, 2010.
006. 脇岡 範, 澤木 明, 山雄健次:GISTに対する術後補助療法.腫瘍内科, 5(4):399-404, 2010.
007. 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 二村雄次, 水野伸匡, 原 和生, 山雄健次:自然史からみた膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)の手術適応の再検討 術後成績および長期経過観察例の臨床経過から.胆と膵, 31(5):455-460, 2010.
008. 鈴木晴久, 澤木 明, 山雄健次, 水野伸匡, 原和生, 丹羽康正:小さいGISTの取り扱い.臨床消化器内科, 25(6):681-686, 2010.
009. 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 丹羽康正, 山雄健次:胆道癌化学療法に対する新たな展開 ゲムシタピン+シスプラチン併用療法.胆と膵, 31(6):615-618, 2010.
010. 友野輝子, 澤木 明, 山雄健次, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 丹羽康正:GISTに対する分子標的治療薬と治療の実際.消化器の臨床, 13(5):555-560, 2010.
011. 知念健司, 山雄健次, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 脇岡範, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 谷田部恭, 細田和貴:超音波内視鏡ガイド下膵生検.胆と膵, 31(9):855-862, 2010.
012. 小林佑次, 原和生, 澤木明, 水野伸匡, 今村秀道, 脇岡範, 松本和也, 清水泰博, 佐野力, 山雄健次:Mucous cystic neoplasm 診断と予後.肝・胆・膵, 61(3):391-395, 2010.
013. 脇岡 範, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯 哲, 小倉 健, 羽場 真, 赤羽麻奈, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 谷田部 恭, 細田和貴, 山雄健次:膵の転移性腫瘍.肝胆膵画像, 12(5):625-634, 2010.
014. 清水 怜, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博:膵腫瘍に対する超音波内視鏡下穿刺吸引法(EUS-FNA).Pharma Medica, 28(10):41-44, 2010.
015. 入澤篤志, 山雄健次, Binmoeller Kenneth F., 原和生, 高木忠之, 引地拓人, 渋谷悟朗, 佐藤愛, 池田恒彦, 鈴木玲, 佐藤匡記, 渡邊晃, 中村純, 宍戸昌一郎, 阿部洋子, 鈴木啓二, 小原勝敏, 大平弘正:EUS TechniqueによるStenting 経胃経肝胆道ドレナージ.胆と膵, 31(臨増特大):1073-1076, 2010.
016. 佐伯 哲, 原 和生, 丹羽康正, 澤木 明, 水野伸匡, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 脇岡 範, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 友野輝子, 清水 怜, 山雄健次:胆管・十二指腸乳頭部 超音波内視鏡ガイド下胆道ドレナージ(超音波内視鏡を用いた胆道ドレナージ).肝・胆・膵, 61(4):639-643, 2010.
017. 糸井隆夫, 山雄健次, 真口宏介, 入澤篤志:胆膵EUS-FNAのエビデンス2010.胆と膵, 31(10):1249-1259, 2010.
018. 羽場 真, 山雄健次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博:膵癌 早期診断.臨牀と研究, 87(10):1407-1412, 2010.
019. 入澤篤志, 引地拓人, 山雄健次, 高木忠之, 小原勝敏, 大平弘正:内視鏡技術のNew Frontier Interventional EUS.内科, 106(4):681-687, 2010.
020. 脇岡 範, 原 和生, 水野伸匡, 澤木 明, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯 哲, 小倉 健, 羽場 真, 清水 怜, 友野輝子, 赤羽麻奈, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 丹羽康正, 山雄健次:胆膵EUS-FNAのエビデンス2010 胆道疾患に対するEUS-FNA.胆と膵, 31(10):1181-1188, 2010.
021. 羽場 真, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 山雄健次:Gastrointestinal stromal tumorに対するチロシンキナーゼ阻害剤の開発~現状の到達点と今後の課題.血液・腫瘍科, 61(5):536-540, 2010.
022. 山雄健次, 小林祐次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 友野輝子,

- 清水 怜, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博:卵巣型間質を有する膵MCNの臨床病理学的特徴と予後 日本膵臓病学会多施設共同研究の成績から.肝胆膵画像, 12(6):723-726, 2010.
023. 小倉 健, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範:診断の手順, 早期診断, 進展度診断.臨床消化器内科, 26(1):35-40, 2010.
024. 清水 怜, 山雄健次, 谷田部 恭:膵内分泌腫瘍の細胞診および組織診断法 超音波内視鏡下穿刺吸引法を中心に.BIO Clinica, 25(13):1130-1135, 2010.
025. 小倉 健, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 羽場 真, 清水泰博, 細田和貴, 谷田部 恭:粘液性嚢胞性膵腫瘍.肝・胆・膵, 62(1):83-90, 2011.
026. 友野輝子, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 清水 怜, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 清水泰博, 谷田部 恭, 細田和貴:膵腫瘍に対する最新の超音波内視鏡検査.外科, 73(2):179-186, 2011.
027. 羽場 真, 山雄健次, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 清水泰博:肝胆膵癌実地臨床の最前線 - 膵・胆道癌の診断と治療.内科, 107(3):375-382, 2011.
028. 羽場 真, 山雄健次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 丹羽康正, 田近正洋, 近藤真也, 河合宏紀, 清水泰博:臨床からみた早期膵癌の特徴 早期膵癌診断に必要な画像診断.肝・胆・膵, 62(3):547-555, 2011.

[症例報告]

001. *Hijioka S, Mekky MA, Bhatia V, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hosoda W, Shimizu Y, Tamada K, Niwa Y, Yamao K*:Can EUS-guided FNA distinguish between gallbladder cancer and xanthogranulomatous cholecystitis?.Gastrointest Endosc., 72(3):622-627, 2010.
002. *Matsumoto K, Hara K, Sawaki A, Mizuno N, Hijioka S, Kondo S, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Shimizu Y, Hosoda W, Yatabe Y, Yamao K*:Pre-operative diagnosis of synchronous solid-pseudopapillary neoplasms of the pancreas.Clin J Gastroenterol, 3(5):301-306, 2010.
003. *Hijioka S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Mekky MA, Bhatia V, Hosoda W, Yatabe Y, Shimizu Y, Tamada K, Niwa Y, Yamao K*:Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration for the diagnosis of retroperitoneal schwannoma.Endoscopy, 42(Suppl2):E296, 2010.
004. 原 和生: Clinical Challenge 問題:膵嚢胞.肝胆膵画像, 12(3):280-281, 2010.
005. 脇岡 範, 原 和生, 澤木 明, 河合宏紀, 丹羽康正, 山雄健次:転移性膵癌のEUS像およびEUS-FNABの検討.超音波医学, 37(Suppl):S317, 2010.
006. 脇岡 範, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 丹羽康正, 山雄健次:EUS-FNAにて診断しえた後腹膜神経鞘腫の2例.超音波医学, 37(3):355-

356, 2010.

007. 安藤公隆, 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 二村雄次, 原和生, 高木忠之, 水野伸匡, 澤木明, 細田和貴, 谷田部恭, 藤本正夫, 柳澤昭夫, 山雄健次:粘液癌とIPMN由来浸潤癌の鑑別が問題となった膵頭部癌の1例.肝胆膵画像, 12(4):526-532, 2010.
008. 松本和也, 小林佑次, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 脇岡 範, 今村秀道, 近藤真也, 鈴木晴久, 佐伯哲, 赤羽麻奈, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博, 山雄健次:超音波内視鏡下穿刺吸引細胞診により診断が可能であった腫瘍径5mmの膵内分泌腫瘍の1例.肝胆膵画像, 12(4):465-470, 2010.
009. 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金光幸秀, 平井孝, 脇岡 範, 山雄健次, 二村雄次:膵胆管合流異常を伴い陶器様胆嚢を合併した胆嚢頸部癌の1例.日本消化器病学会雑誌, 107(臨増):A937, 2010.
010. 知念健司, 脇岡 範, 吉田幸生, 久保田富秋, 新城雅行, 島袋容司樹, 菊地馨, 丹羽康正, 山雄健次:EUS-FNAにて診断しえた後腹膜神経鞘腫の2例.Gastroenterological Endoscopy, 52(Suppl 2):2562, 2010.

[分担執筆]

001. 原 和生, 山雄健次:胆道癌の画像所見と鑑別診断～乳頭部癌～.肝胆膵癌 画像診断アトラス:212-220, 2010.
002. 水野伸匡, 山雄健次:膵癌の画像所見と鑑別診断～腫瘍形成性膵炎:自己免疫性膵炎～.肝胆膵癌 画像診断アトラス:270-277, 2010.
003. 脇岡 範, 山雄健次:肝胆膵癌の画像検査法 ～超音波内視鏡検査～.肝胆膵癌 画像診断アトラス:54-61, 2010.
004. 鈴木晴久, 山雄健次:膵癌の画像所見と鑑別診断～膵内分泌腫瘍～.肝胆膵癌 画像診断アトラス:247-255, 2010.
005. 原 和生, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 丹羽康正:腫瘍性病変における内視鏡診療の進歩 膵・胆道腫瘍.内科, 106(4):651-657, 2010.
006. 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 丹羽康正:腫瘍性病変における内視鏡診療の進歩.膵・胆道腫瘍.内科, 106(4):651-657, 2010.
007. 原 和生:上部消化管SMTに対するEUS-FNAのコツ.消化器内視鏡, 23(1):88-91, 2011.

内視鏡部

[原著]

001. *Banno K, Niwa Y, Miyahara R, Nakamura M, Nagaya T, Nagasaka T, Watanabe O, Ando T, Kawashima H, Obmiya N, Itoh A, Hirooka Y, Goto H*:Confocal endomicroscopy for phenotypic diagnosis of gastric cancer.J Gastroenterol Hepatol, 25(4):712-8, 2010.
002. *Fujita T, Ando T, Watanabe O, Hasegawa M, Miyake N, Kondo S, Kato T, Ishiguro K, Nakamura M, Miyahara R, Obmiya N, Niwa Y, Goto H*:Clinicopathological study of colorectal cancer occurring in patients with ulcerative

- colitis: results from a single hospital in Japan. *Hepatogastroenterology*, 57(99):487-92, 2010.
003. *Sbitara K, Matsuo K, Takahara D, Yokota T, Shibata T, Ura T, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Muro K*:Neutropenia as a prognostic factor in advanced gastric cancer patients undergoing second-line chemotherapy with weekly paclitaxel.*Ann Oncol*, 21(12):2403-2409, 2010.
004. *Sbitara K, Muro K, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Yokota T, Takahara D, Shibata T, Ura T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Tajima K, Yatabe Y, Tanaka H, Matsuo K*:Folate intake along with genetic polymorphisms in methylenetetrahydrofolate reductase and thymidylate synthase in patients with advanced gastric cancer.*Cancer Epidemiol Biomarkers Prev*, 19(5):1311-1319, 2010.
005. *Mizutani T, Tadauchi A, Arinobe M, Narita Y, Kato R, Niwa Y, Ohmiya N, Itoh A, Hirooka Y, Honda H, Ueda M, Goto H*:Novel strategy for prevention of esophageal stricture after endoscopic surgery.*Hepatogastroenterology*, 57(102-103):1150-1156, 2010.
006. 001. *An B, Kondo Y, Okamoto Y, Shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JB, Sekido Y*:Characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers.*Int J Cancer*, 127(9):2095-2105, 2010.
007. *Kobayashi Y, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Hara K, Mizuno N, Hijioka S, Sawaki A, Matsuo K, Nakagawa H, Nakamura Y, Yamao K*:Serum tumor antigen REG4 as a useful diagnostic biomarker in gastric cancer. *Hepatogastroenterology*, 57(104):1631-1634, 2010.
008. *Sawai Y, Yamao K, Bhatia V, Chiba T, Mizuno N, Sawaki A, Takahashi K, Tajika M, Shimizu Y, Yatabe Y, Yanagisawa A*:Development of pancreatic cancers during long-term follow-up of side-branch intraductal papillary mucinous neoplasms.*Endoscopy*, 42(12):1077-1084, 2010.
009. *Sbitara K, Yuki S, Yoshida M, Takahara D, Utsunomiya S, Yokota T, Sato Y, Inaba Y, Tajika M, Kawai H, Yamaura H, Kato M, Yamazaki K, Komatsu Y, Muro K*:Phase II study of combination chemotherapy with biweekly cetuximab and irinotecan for wild-type KRAS metastatic colorectal cancer refractory to irinotecan, oxaliplatin, and fluoropyrimidines.*Invest New Drugs*, Epub, 2010.
010. *Matsumoto K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Yamao K*:Clinical efficacy and safety of sunitinib after imatinib failure in Japanese patients with gastrointestinal stromal tumor.*Jpn J Clin Oncol*, 41(1):57-62, 2011.
011. *Obno E, Hirooka Y, Itoh A, Ishigami M, Katano Y, Ohmiya N, Niwa Y, Goto H*:Intraductal Papillary Mucinous Neoplasms of the Pancreas: Differentiation of Malignant and Benign Tumors by Endoscopic Ultrasonography Findings of Mural Nodules.*Ann Surg*:Epub, 2011.
012. *Hara K, Senga T, Biswas MH, Hasegawa H, Ito S, Hyodo T, Hirooka Y, Niwa Y, Goto H, Hamaguchi M*:Recovery of anoikis in Src-transformed cells and human breast carcinoma cells by restoration of the SIRP α 1/SHP-2 signaling system.*Cancer Research*, 71(4):1229-1234, 2011.
- [症例報告]
001. *Hijioka S, Mekky MA, Bhatia V, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hosoda W, Shimizu Y, Tamada K, Niwa Y, Yamao K*:Can EUS-guided FNA distinguish between gallbladder cancer and xanthogranulomatous cholecystitis?*Gastrointest Endosc*, 72(3):622-627, 2010.
002. *Matsumoto K, Hara K, Sawaki A, Mizuno N, Hijioka S, Kondo S, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Shimizu Y, Hosoda W, Yatabe Y, Yamao K*:Pre-operative diagnosis of synchronous solid-pseudopapillary neoplasms of the pancreas.*Clin J Gastroenterol*, 3(5):301-306, 2010.
003. *Hijioka S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Mekky MA, Bhatia V, Hosoda W, Yatabe Y, Shimizu Y, Tamada K, Niwa Y, Yamao K*:Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration for the diagnosis of retroperitoneal schwannoma.*Endoscopy*, 42(Suppl 2):E296, 2010.
004. 脇岡 範, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 丹羽康正, 山雄健次:EUS-FNAにて診断しえた後腹膜神経鞘腫の2例.*超音波医学*, 37(3):355-356, 2010.
005. 松本和也, 小林佑次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 今村秀道, 近藤真也, 鈴木晴久, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博, 山雄健次:[膵内分秘腫瘍の画像と病理 典型例から非典型例まで]超音波内視鏡下穿刺吸引細胞診により診断が可能であった腫瘍径5mmの膵内分秘腫瘍の1例.肝胆膵画像, 12(4):465-470, 2010.
006. 知念健司, 脇岡 範, 吉田幸生, 久保田富秋, 新城雅行, 島袋容司樹, 菊地馨, 丹羽康正, 山雄健次:EUS-FNAにて診断しえた後腹膜神経鞘腫の2例.*Gastroenterological Endoscopy*, 52(Suppl 2):2562, 2010.
- [総説, その他]
001. *Yamao K, Hara K, Mizuno N, Sawaki A, Hijioka S, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Shimizu Y, Bhatia V*:EUS-Guided Biliary Drainage.*Gut Liver*, 4(Suppl1):S67-S75, 2010.
002. *Hara K, Yamao K, Mizuno N, Hijioka S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Shimizu Y, Niwa Y*:Interventional endoscopic ultrasonography for pancreatic cancer.*World J Clin Oncol*, 2(2):108-114, 2011.
003. 脇岡 範, 原 和生, 澤木 明, 河合宏紀, 丹羽康正, 山雄健次:転移性膵癌のEUS像およびEUS-FNABの検討. 超音波医学, 37(Suppl):S317, 2010.
004. 丹羽康正, 田近正洋, 坂野閣紀, 宮原良二, 後藤秀実:Confocal laser endomicroscopyによるHelicobacter pylori関連疾患の観察.*Helicobacter Research*, 14(5):344-348, 2010.
005. 鈴木晴久, 澤木 明, 山雄健次, 水野伸匡, 原 和生, 丹羽康

- 正:【GIST 診断・治和文療の進歩】小さいGISTの取り扱い.臨床消化器内科, 25(6):681-686, 2010.
006. 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 丹羽康正, 山雄健次:胆道癌化学療法に対する新たな展開 ゲムシタピン+シスプラチン併用療法. 胆と膵, 31(6):615-618, 2010.
007. 友野輝子, 澤木 明, 山雄健次, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 丹羽康正:[消化器癌・悪性腫瘍の分子標的治療薬を用いた薬物療法]GISTに対する分子標的治療薬と治療の実際.消化器の臨床, 13(5):555-560, 2010.
008. 知念健司, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 谷田部 恭, 細田和貴:[胆膵診療に必須な細胞診・生検診断の知識]超音波内視鏡ガイド下膵生検.胆と膵, 31(9):855-862, 2010.
009. 脇岡 範, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯 哲, 小倉 健, 羽場 真, 赤羽麻奈, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 谷田部 恭, 細田和貴, 山雄健次:[肝胆膵の転移性腫瘍]膵の転移性腫瘍.肝胆膵画像, 12(5):625-634, 2010.
010. 清水 怜, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博:[消化器画像診断 最近の進歩]膵腫瘍に対する超音波内視鏡下穿刺吸引法(EUS-FNA).Pharma Medica, 28(10):41-44, 2010.
011. 佐伯 哲, 原 和生, 丹羽康正, 澤木 明, 水野伸匡, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 脇岡 範, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 友野輝子, 清水 怜, 山雄健次:[エキスパートに学ぶIVRのテクニック, 適応, 合併症]胆管・十二指腸乳頭部 超音波内視鏡ガイド下胆道ドレナージ(超音波内視鏡を用いた胆道ドレナージ).肝・胆・膵, 61(4):639-643, 2010.
012. 羽場 真, 山雄健次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博:[進歩した膵炎・膵癌の診療]膵癌 早期診断.臨床と研究, 87(10):1407-1412, 2010.
013. 脇岡 範, 原 和生, 水野伸匡, 澤木 明, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯 哲, 小倉 健, 羽場 真, 清水 怜, 友野輝子, 赤羽麻奈, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 丹羽康正, 山雄健次:胆膵EUS-FNAのエビデンス2010 胆道疾患に対するEUS-FNA.胆と膵, 31(10):1181-1188, 2010.
014. 田近正洋:大腸ポリープ 悪化性が心配.中日新聞 紙上診察室, 2010.
015. 羽場 真, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 山雄健次:[固形腫瘍領域と血液腫瘍領域のクロストーク 新薬開発と合併症管理]Gastrointestinal stromal tumorに対するチロシンキナーゼ阻害剤の開発 現状の到達点と今後の課題.血液・腫瘍科, 61(5):536-540, 2010.
016. 山雄健次, 小林祐次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 友野輝子, 清水 怜, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博:[膵の漿液性嚢胞腫瘍(SCN)と粘液性嚢胞腫瘍(MCN) 最近の知見] 卵巣型間質を有する膵MCNの臨床病理学的特徴と予後 日本膵臓病学会多施設共同研究の成績から.肝胆膵画像, 12(6):723-726, 2010.
017. 丹羽康正, 田近正洋, 宮原良二, 後藤秀実, 谷田部 恭:食道のconfocal endomicroscopy 連載「内視鏡と病理の接点」.病理と臨床, 28(12):1303-1309, 2010.
018. 友野輝子, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 清水 怜, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 清水泰博, 谷田部 恭, 細田和貴:[肝胆膵領域における最新の画像診断]膵腫瘍に対する最新の超音波内視鏡検査.外科, 73(2):179-186, 2011.
019. 羽場 真, 山雄健次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 脇岡 範, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 丹羽康正, 田近正洋, 近藤真也, 河合宏紀, 清水泰博:[早期膵癌の病態解明]臨床からみた早期膵癌の特徴 早期膵癌診断に必要な画像診断.肝・胆・膵, 62(3):547-555, 2011.

【分担執筆】

001. 田近正洋, 中村常哉:治療 悪性リンパ腫-MALTリンパ腫. 大腸疾患診療のStrategy, 365-371, 2010.
002. 田近正洋, 中村常哉:治療:B細胞リンパ腫:2.限局期胃MALTリンパ腫の治療. 血液診療エキスパート 悪性リンパ腫.:64-77, 2010.
003. 原 和生, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 丹羽康正:消化器内視鏡診療の進歩 パラダイムシフトへの胎動を覗きみる]腫瘍性病変における内視鏡診療の進歩 膵・胆道腫瘍.内科, 106(4):651-657, 2010.
004. 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 丹羽康正:腫瘍性病変における内視鏡診療の進歩 膵・胆道腫瘍.内科, 106(4):651-657, 2010.

呼吸器内科部

【原著】

- 001 Tomita N, Kodaira T, Hida T, Tachibana H, Nakamura T, Nakahara R, Inokuchi H.:The impact of radiation dose and fractionation on outcomes for limited-stage small-cell lung cancer.Int J Radiat Oncol Biol Phys, 76:1121-1126, 2010.
- 002 Yoshida K, Yatabe Y, Park J, Ogawa S, Park JY, Shimizu J, Horio Y, Matsuo K, Mitsudomi T, Hida T.:Clinical outcomes of advanced non-small cell lung cancer patients screened for epidermal growth factor receptor gene mutations.J Cancer Res Clin Oncol, 136:527-535, 2010.
- 003 Horio Y, Osada H, Shimizu J, Ogawa S, Hida T, Sekido Y.:Relationship of mRNA expressions of RanBP2 and topoisomerase II isoforms to cytotoxicity of amrubicin in human lung cancer cell lines.Cancer Chemother Pharmacol, 66:237-243, 2010.
- 004 Tajima K, Obashi R, Sekido Y, Hida T, Nara T, Hashimoto M, Iwakami S, Inakata K, Yae T, Takahashi F, Saya H, Takahashi K.:Osteopontin-mediated enhanced hyaluronan binding

induces multidrug resistance in mesothelioma cells. *Oncogene*, 29:1941-1951, 2010.

- 005 *Park JY, Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Oze I, Hida T, Yatabe Y, Mitsudomi T, Takezaki T, Tajima K, Tanaka H*: Impact of smoking on lung cancer risk is stronger in those with the homozygous aldehyde dehydrogenase 2 null allele in a Japanese population. *Carcinogenesis*, 31:660-665, 2010.
- 006 *Yamamoto N, Nakagawa K, Nishimura Y, Tsujino K, Satouchi M, KUdo S, Hida T, Kawahara M, Takeda K, Katakami N, Sawa T, Yokota S, Seto T, Imamura F, Saka H, Iwamoto Y, Semba H, Chiba Y, Uejima H, Fukuoka M*: Phase III Study comparing second- and third-generation regimens with concurrent thoracic radiotherapy in patients with unresectable stage III non-small-cell lung cancer: West Japan Thoracic Oncology Group WJTOG0105. *J Clin Oncol*, 28:3739-3745, 2010.
- 007 *Murakami H, Mizuno T, Taniguchi T, Fujii M, Ishiguro F, Fukui T, Akatsuka S, Horio Y, Hida T, Kondo Y, Toyokuni S, Osada H, Sekido Y*: LATS2 is a tumor suppressor gene of malignant mesothelioma. *Cancer Res*, 71:873-883, 2011.
- 008 *Hida T, Tamiya M, Nishio M, Yamamoto N, Hirashima T, Horai T, Tanii H, Shi MM, Kobayashi K, Horo Y*: Phase I study of intravenous ASA404 (vadimezan) administered in combination with paclitaxel and carboplatin in Japanese patients with non-small cell lung cancer. *Cancer Sci*, 102:845-851, 2011
- 009 樋田豊明, 朴 将哲, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 吉田公秀: 個別化治療の適応により著効を示した肺がん症例. 臨床腫瘍ブランクティス, 7(1):110-113, 2010.

[総説 , その他]

- 001 清水淳市, 光富徹哉: Series 癌治療の最新医療情報 「肺癌の分子標的治療薬 - 今後の展開について -」. *Approach to Oncology*, 第3号:12-13, 2010.

血液・細胞療法部

- 001 *Kato H, Kagami Y, Kodaira T, Oka S, Oki Y, Chihara D, Tajima H, Yatabe Y, Nakamura T, Nakamura S, Seto M, Yamamoto K, Morishima Y*: Nodal relapse after *Helicobacter pylori* eradication in a patient with primary localized gastric mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma. *Am J Gastroenterol*. 2011 Mar;106(3):549-51. PubMed PMID:21378774.
- 002 *Askar M, Sobecks R, Morishima Y, Kawase T, Nowacki A, Makiashima H, Maciejewski J*: Predictions in the Face of Clinical Reality: HistoCheck versus High-Risk HLA Allele Mismatch Combinations Responsible for Severe Acute Graft-versus-Host Disease. *Biol Blood Marrow Transplant*. 2011 Feb 4. [Epub ahead of print] PubMed PMID:21296176.
- 003 *Espinoza JL, Takami A, Onizuka M, Kawase T, Sao H, Akiyama*

H, Miyamura K, Okamoto S, Inoue M, Obtake S, Fukuda T, Morishima Y, Koderu Y, Nakao S: A single nucleotide polymorphism of IL-17 gene in the recipient is associated with acute GVHD after HLA-matched unrelated BMT. *Bone Marrow Transplant*. 2011 Jan 10. [Epub ahead of print] PubMed PMID:21217785.

- 004 *Ohmachi K, Tobinai K, Kobayashi Y, Itoh K, Nakata M, Shibata T, Morishima Y, Ogura M, Suzuki T, Ueda R, Aikawa K, Nakamura S, Fukuda H, Shimoyama M, Hotta T*: On behalf of the members of the Lymphoma Study Group of the Japan Clinical Oncology Group (JCOG-LSG). Phase III trial of CHOP-21 versus CHOP-14 for aggressive non-Hodgkin's lymphoma: final results of the Japan Clinical Oncology Group Study. *JCOG 9809. Ann Oncol*. 2010 Dec 31. [Epub ahead of print] PubMed PMID:21196441.
- 005 *Inamoto Y, Miyamura K, Okamoto S, Akiyama H, Iida H, Eto T, Morishima Y, Kawa K, Kikuchi A, Nagatoshi Y, Tanaka J, Ashida T, Hirokawa M, Tsuchida M, Mori S*: Disease stage stratified effects of cell dose in unrelated BMT for hematological malignancies: a report from Japan marrow donor program. *Bone Marrow Transplant*. 2010 Nov 8. [Epub ahead of print] PubMed PMID:21057551.
- 006 *Mizuta S, Matsuo K, Yagasaki F, Yujiri T, Hata Y, Kimura Y, Ueda Y, Kanamori H, Usui N, Akiyama H, Miyazaki Y, Obtake S, Atsuta Y, Sakamaki H, Kawa K, Morishima Y, Ohnishi K, Naoe T, Ohno R*: Pre-transplant imatinib-based therapy improves the outcome of allogeneic hematopoietic stem cell transplantation for BCR-ABL-positive acute lymphoblastic leukemia. *Leukemia*. 2011 Jan;25(1):41-7. Epub 2010 Oct 14. PubMed PMID:20944676.
- 007 *Tobinai K, Ogura M, Itoh K, Kinoshita T, Hotta T, Watanabe T, Morishima Y, Igarashi T, Terauchi T, Ohashi Y*: All Collaborators of the IDEC-C2B8 Study Group in Japan. Randomized phase II study of concurrent and sequential combinations of rituximab plus CHOP (cyclophosphamide, doxorubicin, vincristine and prednisolone) chemotherapy in untreated indolent B-cell non-Hodgkin lymphoma: 7-year follow-up results. *Cancer Sci*. 2010 Dec;101(12):2579-85. doi:10.1111/j.1349-7006.2010.01703.x. PubMed PMID:20942866.
- 008 *Nishiwaki S, Inamoto Y, Sakamaki H, Kurokawa M, Iida H, Ogawa H, Fukuda T, Ozawa Y, Kobayashi N, Kasai M, Mori T, Iwato K, Yoshida T, Onizuka M, Kawa K, Morishima Y, Suzuki R, Atsuta Y, Miyamura K*: Allogeneic stem cell transplantation for adult Philadelphia chromosome-negative acute lymphocytic leukemia: comparable survival rates but different risk factors between related and unrelated transplantation in first complete remission. *Blood*. 2010 Nov 18;116(20):4368-75. Epub 2010 Jul 27. PubMed PMID:20664060.
- 009 *Hishizawa M, Kanda J, Utsunomiya A, Taniguchi S, Eto T, Moriuchi Y, Tanosaki R, Kawano F, Miyazaki Y, Masuda M, Nagafuji K, Hara M, Takanashi M, Kai S, Atsuta Y, Suzuki R, Ka*

- wase T, Matsuo K, Nagamura-Inoue T, Kato S, Sakamaki H, Morishima Y, Okamura J, Ichinobe T, Uchiyama T*: Transplantation of allogeneic hematopoietic stem cells for adult T-cell leukemia: a nationwide retrospective study. *Blood*.2010 Aug 26;116(8):1369-76.Epub 2010 May 17.PubMed PMID:20479287.
- 010 *Takami A, Espinoza JL, Onizuka M, Ishiyama K, Kawase T, Kanda Y, Sao H, Akiyama H, Miyamura K, Okamoto S, Inoue M, Ohtake S, Fukuda T, Morishima Y, Kodera Y, Nakao S*: Japan Marrow Donor Program. A single-nucleotide polymorphism of the Fc γ receptor type IIIA gene in the recipient predicts transplant outcomes after HLA fully matched unrelated BMT for myeloid malignancies. *Bone Marrow Transplant*.2011 Feb;46(2):238-43.Epub 2010 Apr 19.PubMed PMID:20400988.
- 011 *Morishima S, Ogawa S, Matsubara A, Kawase T, Nannya Y, Kasbiwase K, Satake M, Saji H, Inoko H, Kato S, Kodera Y, Sasazuki T, Morishima Y*: Japan Marrow Donor Program. Impact of highly conserved HLA haplotype on acute graft-versus-host disease. *Blood*.2010 Jun 10;115(23):4664-70.Epub 2010 Mar 24.PubMed PMID:20335219.
- 012 *Asano N, Suzuki R, Obshima K, Kagami Y, Ishida E, Yoshino T, Ogawa H, Morishima Y, Nakamura S*: Linkage of expression of chemokine receptors (CXCR3 and CCR4) and cytotoxic molecules in peripheral T cell lymphoma, not otherwise specified and ALK-negative anaplastic large cell lymphoma. *Int J Hematol*.2010 Apr;91(3):426-35.Epub 2010 Mar 9.PubMed PMID:20217288.
- 013 *Itoh K, Kinoshita T, Watanabe T, Yoshimura K, Okamoto R, Chou T, Ogura M, Hirano M, Asaoku H, Kurosawa M, Maeda Y, Omachi K, Moriuchi Y, Kasai M, Ohnishi K, Takayama N, Morishima Y, Tobinai K, Kaba H, Yamamoto S, Fukuda H, Kikuchi M, Yoshino T, Matsuno Y, Hotta T, Shimoyama M*: Prognostic analysis and a new risk model for Hodgkin lymphoma in Japan. *Int J Hematol*.2010 Apr;91(3):446-55.Epub 2010 Mar 3.PubMed PMID:20198461.
- 014 *Kato H, Yamamoto K, Matsuo K, Oki Y, Taji H, Kuwatsuka Y, Seto M, Kagami Y, Morishima Y*: Clinical impact and predisposing factors of delayed-onset neutropenia after autologous hematopoietic stem-cell transplantation for B-cell non-Hodgkin lymphoma: association with an incremental risk of infectious events. *Ann Oncol*.2010 Aug;21(8):1699-705. Epub 2010 Feb 19.PubMed PMID:20172906.
- 015 *Chihara D, Oki Y, Ine S, Kato H, Onoda H, Taji H, Kagami Y, Yamamoto K, Morishima Y*: Primary gastric diffuse large B-cell Lymphoma (DLBCL): analyses of prognostic factors and value of pretreatment FDG-PET scan. *Eur J Haematol*.2010 Jun;84(6):493-8.Epub 2010 Feb 9.PubMed PMID:20148943.
- 016 *Kanda J, Matsuo K, Suzuki T, Hosono S, Ito H, Ichinobe T, Seto M, Morishima Y, Tajima K, Tanaka H*: Association between obesity and the risk of malignant lymphoma in Japanese: a case-control study. *Int J Cancer*.2010 May 15;126(10):2416-25.PubMed PMID:19821488.
- 017 *Shimada K, Murase T, Matsue K, Okamoto M, Ichikawa N, Tsukamoto N, Niitsu N, Miwa H, Asaoku H, Kosugi H, Kikuchi A, Matsumoto M, Saburi Y, Masaki Y, Yamamoto K, Yamaguchi M, Nakamura S, Naoe T, Kinoshita T*: and for the IVL Study Group in Japan: Central nervous system involvement in intravascular large B-cell lymphoma: A retrospective analysis of 109 patients. *Cancer Sci*.101(6):1480-1486, 2010.
- 018 *Ishikawa Y, Kiyoi H, Watanabe K, Miyamura K, Nakano Y, Kitamura K, Kobno A, Sugiura I, Yokozawa T, Hanamura A, Yamamoto K, Iida H, Emi N, Suzuki R, Ohnishi K, and Naoe T*: Trough plasma concentration of imatinib reflects BCR-ABL kinase inhibitory activity and clinical response in chronic-phase chronic myeloid leukemia: a report from the BIN GO study. *Cancer Sci*.101(10):2186-2192.2010.

薬物療法部

[原著]

- 001 *Ozawa S, Tachimori Y, Baba H, Matsubara H, Muro K, Numasaki H, Oyama T, Shinoda M, Takeuchi H, Tanaka O, Teshima T, Udagawa H, Uno T, Barron P*: Comprehensive registry of esophageal cancer in Japan, 2002. *Esophagus* 7:7-22, 2010.
- 002 *Doi T, Muro K, Boku N, Yamada Y, Nishina T, Takiuchi H, Komatsu Y, Hamamoto Y, Obno N, Fujita Y, Robson M, Ohtsu A*: Multicenter phase II study of everolimus in patients with previously treated metastatic gastric cancer. *J Clin Oncol* 28:1904-1910, 2010.
- 003 *Shitara K, Muro K, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe m, Tajima K, Yatabe Y, Tanaka H, Matsuo K*: Folate intake along with genetic polymorphisms in methylenetetrahydrofolate reductase and thymidylate synthase in patients with advanced gastric cancer. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev* 19(5):1311-1319, 2010.
- 004 *Doi T, Boku N, Kato K, Komatsu Y, Yamaguchi K, Muro K, Hamamoto Y, Sato A, Koizumi W, Mizunuma N, Takiuchi H*: Phase I/II study of Capecitabine Plus Oxaliplatin (XELOX) Plus Bevacizumab As first-line therapy in Japanese patients with metastatic colorectal cancer. *Jpn J Clin Oncol* 40:913-920, 2010.
- 005 *Shitara K, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Shibata T, Ura T, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Muro K*: Neutropenia as a prognostic factor in advanced gastric cancer patients undergoing second-line chemotherapy with weekly paclitaxel. *Ann Oncol* 21:2403-2409, 2010.
- 006 *Yokota T, Shibata N, Ura T, Takahari D, Shitara K, Muro K, Yatabe Y*: Cycleave polymerase chain reaction method is practically applicable for V-Ki-ras2 Kirsten rat sarcoma vi

- ral oncogene homolog (KRAS)/V-raf murine sarcoma viral oncogene homolog B1 (BRAF) genotyping in colorectal cancer. *Transl Res* 156:98-105, 2010.
- 007 **Hironaka S, Yamazaki K, Taku K, Yokota T, Sbitara K, Kojima T, Ueda S, Machida N, Muro K, Boku N**:Phase I study of docetaxel, cisplatin and S-1 in patients with advanced gastric cancer. *Jpn J Clin Oncol* 40:1014-1020, 2010.
- 008 **Muro K**:Transition of chemotherapy for metastatic colorectal cancer and recent advances. *Nippon Rinsho* 68:1143-1149, 2010.
- 009 **Kato K, Tabara M, Hironaka S, Muro K, Takiuchi H, Hamamoto Y, Imamoto H, Amano N, Seriu T**:A phase II study of paclitaxel by weekly 1-h infusion for advanced or recurrent esophageal cancer in patients who had previously received platinum-based chemotherapy. *Cancer Chemother Pharmacol* 2010.
- 010 **Muro K, Boku N, Shimada Y, Tsuji A, Sameshima S, Baba H, Satoh T, Denda T, Ina K, Nishina T, Yamaguchi K, Takiuchi H, Esaki T, Tokunaga S, Kuwano H, Komatsu Y, Watanabe M, Hyodo I, Morita S, Sugihara K**:Irinotecan plus S-1 (IRIS) versus 5-fluorouracil/folinic acid plus irinotecan (FOLFIRI) as second-Line chemotherapy for metastatic colorectal cancer (mCRC):a randomized phase II/ III non-inferiority study (FIRIS Study Group). *Lancet Oncol* 11:853-860, 2010.
- 011 **Takahari D, Shimada Y, Takeshita S, Nishitani H, Takashima A, Okita H, Hirashima Y, Kato K, Hamaguchi T, Yamada Y**:Second-line chemotherapy with irinotecan plus cisplatin after the failure of S-1 monotherapy for advanced gastric cancer. *Gastric Cancer* 13:186-190, 2010.
- 012 **Oba K, Matsuoka M, Satoh T, Muro K, Oriuchi N, Sakamoto J, Mishima H**:Multicentre phase II study of XELOX with Bevacizumab in late stage elderly patients with unresectable advanced/recurrent colorectal cancer:an ASCA study. *Jpn J Clin Oncol*, 2010.
- 013 **Kato K, Muro K, Minashi K, Ohtsu A, Ishikura S, Boku N, Takiuchi H, Komatsu Y, Miyata Y, Fukuda H**:Phase II Study of Chemoradiotherapy with 5-Fluorouracil and Cisplatin for Stage II-III Esophageal Squamous Cell Carcinoma:JCOG Trial (JCOG 9906). *Int J Radiat Oncol Biol Phys*, 2010.
- 014 **Yokota T, Ura T, Shibata N, Takahari D, Sbitara K, Nomura M, Kondo C, Mizota A, Utsunomiya S, Muro K, Yatabe Y**:BRAF mutation is a powerful prognostic factor in advanced and recurrent colorectal cancer. *British Journal of Cancer*, 2011:1-7, 2011.
- 015 **Sbitara K**:KRAS genotypes and outcome in patients with chemotherapy -Refractory metastatic colorectal cancer treated with cetuximab. *JAMA* 305(6), 564-565, 2011.
- 016 **Nomura M, Sbitara K, Kodaira T, Hattori S, Mizota A, Kondoh C, Yokota T, Takahari D, Ura T, Muro K**:Prognostic impact of the 6th and 7th American joint committee on cancer TNM staging systems on esophageal cancer patients treated with chemoradiotherapy. *Int.J.Radiation Oncology Biol.Phys*, 2011.
- [総説]
- 017 **室 圭 他, 桑野博行編**:食道がん化学療法を行うにあたって, 前身化学療法, 根治学的放射線療法.食道がん標準化学療法の実践, 金原出版:10-25, 2010.
- 018 **横田知哉, 室 圭**:食道癌の放射線療法, 化学療法.今日の消化器疾患治療方針第3版, 医学書院:330-332, 2010.
- 019 **市倉 隆, 市川 度 編, 室 圭 他**:食道癌に対する薬物療法.消化器がん薬物療法2010, 日本メディカルセンター:159-169, 2010.
- 020 **小澤壯治, 日月裕司, 田中乙雄, 篠田雅幸, 宇田川晴司, 松原久裕, 馬場秀夫, 竹内裕也, 小山恒男, 室 圭, 宇野 隆, 手島昭樹, 沼崎穂高**:臓器がん登録の現状と将来展望-臨床へのフィードバックを目指して-, 外科治療, Vol.102 No.4, 永井書店:353-357, 2010.
- 021 **室 圭**:治療の新たな取り組み 臓器別集学的治療-EBMに基づいて- 大腸癌.日本臨牀, 68巻6号, 日本臨牀社:1143-1149, 2010.
- 022 **宇良 敬**:抗EGFR抗体薬について.癌と化学療法, 37(5), 癌と化学療法社:777-781, 2010.
- 023 **室 圭**:新規分子標的薬剤・支持療法の外来導入 ベバシズマブ. *Pharma Medica*, Vol.28 No.6:9-12, 2010.
- 024 **室 圭**:食道癌に対する化学療法・分子標的治療の展望. *消化器外科*, Vol.33 No.8, へるす出版:1313-1318, 2010.
- 025 **野村基雄, 室 圭**:レジメンのベーシック講座.消化器外科ナーシング, Vol.15 No.8, メディカ出版:448-63, 2010.
- 026 **室 圭**:食道癌 高度な集学的治療がかかせない. *メディカル朝日*, 39(10), 朝日新聞社:20-21, 2010.
- 027 **室 圭**:がん領域の診療ガイドラインに関する諸問題-作成法の国内外差- 腫瘍内科, 6(3), 科学評論社:266-272, 2010.
- 028 **室 圭**:大腸癌における術後補助化学療法.外科医のための大腸癌の診断と治療, Vol.65 No.11, 医学書院:428-436, 2010.
- 029 **宇良 敬, 室 圭**:クリニカルパスの実例 大腸癌化学療法.外来癌化学療法, Vol.1 No.2, メディカルレビュー社:38-44, 2010.
- 030 **横田 知哉**:ASCO報告:消化器がん領域.がん分子標的治療, Vol.8 No.4, メディカルレビュー社:19-31, 2010.
- 031 **室 圭**:他科領域の癌にみる集学的治療 食道癌. *JOHNS*, Vol.27 No.4, 東京医学社:601-604, 2011.
- 032 **室 圭**:mTOR阻害薬.癌と化学療法, 38(1), 癌と化学療法社:7-11, 2011.

臨床検査部・遺伝子病理診断部

- 001 **脇岡範, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯哲, 小倉健, 羽場真, 友野輝子, 清水怜, 赤羽麻奈, 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 谷田部恭, 細田和貴, 山雄健次**[肝胆膵の転移性腫瘍]膵の転移性腫瘍.肝胆

- 腔画像 2010; 12:625-634.
- 002 佐々木英一, 谷田部恭:[肺・胸膜腫瘍 分類と診断UPD ATE]EGFR遺伝子異常と肺癌組織像.病理と臨床 2010; 28:132-138.
- 003 田近正洋, 中村常哉, 松本和也, 河合宏紀, 近藤真也, 丹羽康正, 谷田部恭, 中村栄男:Helicobacterと内視鏡技術(第15回) Helicobacter pylori陰性の胃MALTリンパ腫の内視鏡診断.Helicobacter Research 2010; 14:4-10.
- 004 越川卓, 所嘉朗, 鈴木緑, 小林雅子, 佐々木英一, 細田和貴, 北村淳子, 谷田部恭, 岩田広治, 市原周:[乳腺画像診断の進歩が細胞診に与えるインパクト]画像診断モダリティの進歩に対応した乳腺細胞診のスコアリングシステム.日本臨床細胞学会雑誌 2010; 49:134-141.
- 005 谷田部恭:[病理形態学キーワード]肺 腫瘍 終末呼吸ユニット(terminal respiratory unit).病理と臨床 2010; 28:52-53.
- 006 谷田部恭:[肺癌新TNM分類を使用するにあたって]病理からみた新TNM分類のポイント.日本胸部臨床 2010; 69:493-502.
- 007 安藤公隆, 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 二村雄次, 原和生, 高木忠之, 水野伸匡, 澤木明, 細田和貴, 谷田部恭, 藤本正夫, 柳澤昭夫, 山雄健次:粘液癌とIPMN由来浸潤癌の鑑別が問題となった膵頭部癌の1例.肝胆膵画像 2010; 12:526-532.
- 008 知念健司, 山雄健次, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 脇岡範, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 谷田部恭, 細田和貴:[胆膵診療に必須な細胞診・生検診断の知識]超音波内視鏡ガイド下膵生検.胆と膵 2010; 31:855-862.
- 009 蒲貞行, 所嘉朗, 鈴木緑, 小林雅子, 尾関順子, 土田秀, 小島勝, 越川卓, 谷田部恭:[検体採取・塗抹法の精度管理(検体採取・塗抹法の工夫と効果)]リンパ節穿刺細胞診における精度管理.特に検体不適正率の改善に向けて.日本臨床細胞学会雑誌 2010; 49:437-442.
- 010 谷田部恭:EGFR遺伝子検査の注意点 迅速かつ効果的に臨床医が情報を得るための検体処理法.コンセンサス癌治療 2010; 9:220-223.
- 011 清水怜, 山雄健次, 谷田部恭:[膵・消化管神経内分泌腫瘍の診断と内科治療の進歩]膵内分泌腫瘍の細胞診および組織診断法 超音波内視鏡下穿刺吸引法を中心に.BIO Clinica 2010; 25:1130-1135.
- 012 丹羽康正, 田近正洋, 宮原良二, 後藤秀実, 谷田部恭:内視鏡と病理との接点(第3回) 食道のConfocal endomicroscopy.病理と臨床 2010; 28:1303-1309.
- 013 小倉健, 山雄健次, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 脇岡範, 佐伯哲, 赤羽麻奈, 羽場真, 清水泰博, 細田和貴, 谷田部恭:[肝内胆管, 胆道, 膵の腫瘍分類 WHOの新たな試みを含めて]膵 粘液性嚢胞性膵腫瘍.肝・胆・膵 2011; 62:83-90.
- 014 谷田部恭:呼吸器系の生物学終末呼吸ユニットと肺腺癌. Annual Review呼吸器 2011; 2011:57-63.
- 015 友野輝子, 山雄健次, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 脇岡範, 佐伯哲, 赤羽麻奈, 小倉健, 羽場真, 清水怜, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 清水泰博, 谷田部恭, 細田和貴:[肝胆膵領域における最新の画像診断]膵腫瘍に対する最新の超音波内視鏡検査.外科 2011; 73:179-186.
- 016 細田和貴, 谷田部恭:マクロクイズ(19回).病理と臨床 28:1069-72.
- 017 村上善子, 島田聡子, 中村栄男:DLBCLの新項目:血管内大細胞型B細胞性リンパ腫.病理と臨床2010; 28:746-748.
- 018 所 嘉朗, 安原俊弘, 牛田展浩, 久田 順, 亀井仁美, 中井規隆:平成21年度検査室の管理運営に関するアンケート調査」報告.社団法人愛知県臨床衛生検査技師会誌らぼ, Vol.61 No.2:3-10, 2010.
- 019 所 嘉朗:悪性リンパ腫の細胞診.臨床病理, Vol.58 No.11:1113-1120, 2010.
- 020 岡田恭孝:入門フローサイトメトリー法-表面抗原解析の基礎と実際-.臨床病理, 第58巻, 日本臨床検査医学会:1121-1130, 2010.
- 021 廣瀬由紀, 田淵経司, 大久保英樹, 中山雅博, 林健太郎, 菅野雅人, 長田道夫, 原晃:耳下腺原発小細胞癌例.耳鼻咽喉科臨床 2010; 103(8):729-735.
- 022 大原祐介, 山本雅由, 柳沢和彦, 稲川智, 寺島秀夫, 鈴木英雄, 菅野雅人, 大河内信弘:虫垂粘液嚢胞腺癌と原発性腹膜癌の重複癌の1例.日消外会誌 2010; 43(5):584-588.
- 023 佐々木英一, 谷田部恭:マクロクイズ第20回.病理と臨床 28(11):1183-1186, 2010年
- 024 佐々木英一, 谷田部恭:マクロクイズ第22回.病理と臨床 29(1):71-74, 2011年
- 025 長坂暢, 谷田部恭:マクロクイズ第21回.病理と臨床 28(12):1291-1293, 2010年
- 026 長坂暢, 谷田部恭:マクロクイズ第26回.病理と臨床 29(5):505-507, 2011年
- 027 山田舞, 岩田広治:[乳腺・術後補助療法 浸潤がんに対する分子標的治療]術後トラスツマブの適応はどのような症例か? 2.HER2要請症例での術後化学療法のレジメンは? 中外医学社 EBMがん化学療法・分子標的治療2011-2012:293-301.
- 028 Yoshida M, Sasano H, Kikumori T, Imai T, Murakami Y, Nakamura S, Ogawa K, Miyata M, Murakami M, Oiso Y. A case of subclinical Cushing's syndrome due to primary pigmented nodular adrenocortical disease associated with adrenocortical adenoma. Endocrine. 2011. [Letter to the Editor]
- 029 Bryant CM, Albertus DL, Kim S, Chen G, Brambilla C, Guedj M, Arima C, Travis WD, Yatabe Y, Takahashi T, Brambilla E, Beer DG. Clinically relevant characterization of lung adenocarcinoma subtypes based on cellular pathways: an international validation study. PLoS One 2010; 5:e11712.
- 030 Tsuboi J, Tajika M, Nakamura T, Kawai H, Bhatia V, Takayama R, Kitamura J, Yatabe Y, Hatooka S, Shinoda M, Yamao K, Ogura Y. Endoscopic features of short-term progression of esophageal intramural pseudodiverticulosis. Endoscopy 2010; 42 Suppl 2:E92-93.
- 031 Hijioka S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Mekky MA, Bhatia V, Hosoda W, Yatabe Y, Shimizu Y, Tamada K, Niwa Y, Yamao K. Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration for

- the diagnosis of retroperitoneal schwannoma. *Endoscopy* 2010; 42 Suppl 2:E296.
- 032 *Shitara K, Matsuo K, Ito S, Sawaki A, Kawai H, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Tajima K, Yatabe Y, Tanaka H, Muro K.* Effects of genetic polymorphisms in the ABCB1 gene on clinical outcomes in patients with gastric cancer treated by second-line chemotherapy. *Asian Pac J Cancer Prev* 2010; 11:447-452.
- 033 *Hosono S, Kawase T, Matsuo K, Watanabe M, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kidokoro K, Ito H, Nakanishi T, Yatabe Y, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H.* HLA-A alleles and the risk of cervical squamous cell carcinoma in Japanese women. *J Epidemiol* 2010; 20:295-301.
- 034 *Ito H, Matsuo K, Hosono S, Watanabe M, Kawase T, Suzuki T, Hirai T, Yatabe Y, Tanaka H, Tajima K.* Association between CYP7A1 and the risk of proximal colon cancer in Japanese. *Int J Mol Epidemiol Genet* 2010; 1:35-46.
- 035 *Takayama R, Nakagawa H, Sawaki A, Mizuno N, Kawai H, Tajima M, Yatabe Y, Matsuo K, Uehara R, Ono K, Nakamura Y, Yamao K.* Serum tumor antigen REG4 as a diagnostic biomarker in pancreatic ductal adenocarcinoma. *Journal of gastroenterology* 2010; 45:52-59.
- 036 *Thunnissen FB, Beasley MB, Borczuk A, Brambilla E, Chirieac LR, Flieder DB, Gazdar A, Geisinger K, Hasleton PS, Ishikawa Y, Kerr KM, Matsuno Y, Minami Y, Moreira A, Motoi N, Nicholson AG, Noguchi M, Nonaka D, Pelosi G, Peterson I, Rehkman N, Roggli VL, Travis WD, Tsao M, Wistuba I, Xu H, Yatabe Y, Kuik J.* Reproducibility of histopathological subtypes in pulmonary adenocarcinoma. *Mod Pathol* 2010; 23:In press.
- 037 *Travis WD, Rehkman N, Riley GJ, Geisinger KR, Asamura H, Brambilla E, Garg K, Hirsch FR, Noguchi M, Powell CA, Rusch VW, Scagliotti G, Yatabe Y.* Pathologic diagnosis of advanced lung cancer based on small biopsies and cytology: a paradigm shift. *J Thorac Oncol* 2010; 5:411-414.
- 038 *Fujiwara S, Nawa A, Nakanishi T, Shimoyama Y, Kajiyama H, Shibata K, Ino K, Nakamura S, Kikkawa F, Yatabe Y.* Thyroid transcription factor 1 expression in ovarian carcinoma as is an independent prognostic factor. *Hum Pathol* 2010; 41:560-565.
- 039 *Park JY, Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Oze I, Hida T, Yatabe Y, Mitsudomi T, Takezaki T, Tajima K, Tanaka H.* Impact of smoking on lung cancer risk is stronger in those with the homozygous aldehyde dehydrogenase 2 null allele in a Japanese population. *Carcinogenesis* 2010; 31:660-665.
- 040 *Yoshida K, Yatabe Y, Park J, Ogawa S, Park JY, Shimizu J, Horio Y, Matsuo K, Mitsudomi T, Hida T.* Clinical outcomes of advanced non-small cell lung cancer patients screened for epidermal growth factor receptor gene mutations. *J Cancer Res Clin Oncol* 2010; 136:527-535.
- 041 *Oka K, Nagayama R, Yatabe Y, Iijima S, Mori N.* Angioimmunoblastic T-cell lymphoma with autoimmune thrombocytopenia: a report of two cases. *Pathol Res Pract* 2010; 206:270-275.
- 042 *Yokota T, Shibata N, Ura T, Takahari D, Shitara K, Muro K, Yatabe Y.* Cycle-activated polymerase chain reaction method is practically applicable for V-Ki-ras2 Kirsten rat sarcoma viral oncogene homolog (KRAS)/V-raf murine sarcoma viral oncogene homolog B1 (BRAF) genotyping in colorectal cancer. *Transl Res* 2010; 156:98-105.
- 043 *Oze I, Matsuo K, Hosono S, Ito H, Kawase T, Watanabe M, Suzuki T, Hatooka S, Yatabe Y, Hasegawa Y, Shinoda M, Tajima K, Tanaka H.* Comparison between self-reported facial flushing after alcohol consumption and ALDH2 Glu504Lys polymorphism for risk of upper aerodigestive tract cancer in a Japanese population. *Cancer Sci* 2010; 101:1875-1880.
- 044 *Katayama T, Matsuo K, Kosaka T, Sueda T, Yatabe Y, Mitsudomi T.* Effect of gefitinib on the survival of patients with recurrence of lung adenocarcinoma after surgery: A retrospective case-matching cohort study. *Surg Oncol* 2010.
- 045 *Sawai Y, Yamao K, Bhatia V, Chiba T, Mizuno N, Sawaki A, Takahashi K, Tajika M, Shimizu Y, Yatabe Y, Yanagisawa A.* Development of pancreatic cancers during long-term follow-up of side-branch intraductal papillary mucinous neoplasms. *Endoscopy* 2010; 42:1077-1084.
- 046 *Yanagisawa K, Konishi H, Arima C, Tomida S, Takeuchi T, Shimada Y, Yatabe Y, Mitsudomi T, Osada H, Takahashi T.* Novel metastasis-related gene CIM functions in the regulation of multiple cellular stress-response pathways. *Cancer Res* 2010; 70:9949-9958.
- 047 *Mizuno M, Nawa A, Nakanishi T, Yatabe Y.* Clinical benefit of endocrine therapy for benign metastasizing leiomyoma. *International journal of clinical oncology / Japan Society of Clinical Oncology* 2010.
- 048 *Mitsudomi T, Morita S, Yatabe Y, Negoro S, Okamoto I, Tsurutani J, Seto T, Satouchi M, Tada H, Hirashima T, Asami K, Katakami N, Takada M, Yoshioka H, Shibata K, Kudoh S, Shimizu E, Saito H, Toyooka S, Nakagawa K, Fukuoka M.* Gefitinib versus cisplatin plus docetaxel in patients with non-small-cell lung cancer harbouring mutations of the epidermal growth factor receptor (WJTOG3405): an open label, randomised phase 3 trial. *Lancet Oncol* 2010; 11:121-128.
- 049 *Mitsudomi T, Yatabe Y.* Epidermal growth factor receptor in relation to tumor development: EGFR gene and cancer. *FEBS J* 2010; 277:301-308.
- 050 *Shitara K, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Utsunomiya S, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Najima M, Kawai H, Tajika M, Sawaki A, Yatabe Y, Muro K.* Phase II study of combination chemotherapy with irinotecan and cetuximab for pretreated metastatic colorectal cancer harboring wild-type KRAS. *Invest New Drugs* 2010.
- 051 *Girard N, Lou E, Azzoli CG, Reddy R, Robson M, Harlan M, Orlow I, Yatabe Y, Nafa K, Ladanyi M, Viale A, Kris MG, Riely G, Miller V, Klein RJ, Matsuo K, Pao W.* Analysis of genetic

- variants in never-smokers with lung cancer facilitated by an Internet-based blood collection protocol: a preliminary report. *Clin Cancer Res* 2010; 16:755-763.
- 052 *Oka K, Shinonaga M, Nagayama R, Kashimura H, Yonekawa N, Tatebe S, Kuraoka S, Yatabe Y, Mori N*: Coexistence of primary pulmonary Hodgkin lymphoma and gastric MALT lymphoma associated with Epstein-Barr virus infection: a case report. *Pathology international* 2010; 60:520-523.
- 053 *Kitamura A, Hosoda W, Sasaki E, Mitsudomi T, Yatabe Y*: Immunohistochemical detection of EGFR mutation using mutation-specific antibodies in lung cancer. *Clin Cancer Res* 2010; 16:3349-3355.
- 054 *Tokunaga T, Naruke Y, Shigematsu S, Kobno T, Yasui K, Ma Y, Chua KJ, Katayama I, Nakamura T, Hishikawa Y, Koji T, Yatabe Y, Nagayasu T, Fujita T, Matsuyama T, Hayashi H*: Aberrant expression of interferon regulatory factor 3 in human lung cancer. *Biochem Biophys Res Commun* 2010; 397:202-207.
- 055 *Yatabe Y*: EGFR mutations and the terminal respiratory unit. *Cancer Metastasis Rev* 2010; 29:23-36.
- 056 *Ko SB, Mizuno N, Yatabe Y, Yoshikawa T, Ishiguro H, Yamamoto A, Azuma S, Naruse S, Yamao K, Muallem S, Goto H*: Corticosteroids correct aberrant CFTR localization in the duct and regenerate acinar cells in autoimmune pancreatitis. *Gastroenterology* 2010; 138:1988-1996.
- 057 *Hosoda W, Takagi T, Mizuno N, Shimizu Y, Sano T, Yamao K, Yatabe Y*: Diagnostic approach to pancreatic tumors with the specimens of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration. *Pathology international* 2010; 60:358-364.
- 058 *Shitara K, Muro K, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Yokota T, Takahashi D, Shibata T, Ura T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Tajima K, Yatabe Y, Tanaka H, Matsuo K*: Folate intake along with genetic polymorphisms in methylenetetrahydrofolate reductase and thymidylate synthase in patients with advanced gastric cancer. *Cancer Epidemiol Bio markers Prev* 2010; 19:1311-1319.
- 059 *Mekky MA, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Nafeh MA, Osman AM, Koshikawa T, Yatabe Y, Bhatia V*: Diagnostic utility of EUS-guided FNA in patients with gastric submucosal tumors. *Gastrointestinal endoscopy* 2010; 71:913-919.
- 060 *Tomizawa K, Suda K, Onozato R, Kuwano H, Yatabe Y, Mitsudomi T*: Analysis of ERBB4 mutations and expression in Japanese patients with lung cancer. *J Thorac Oncol* 2010; 5:1859-1861.
- 061 *Huang QM, Tomida S, Masuda Y, Arima C, Cao K, Kasahara TA, Osada H, Yatabe Y, Akashi T, Kamiya K, Takahashi T, Suzuki M*: Regulation of DNA polymerase POLD4 influences genomic instability in lung cancer. *Cancer Res* 2010; 70:8407-8416.
- 062 *An B, Kondo Y, Okamoto Y, Shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JP, Sekido Y*: Characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers. *Int J Cancer* 2010; 127:2095-2105.
- 063 *Suda K, Murakami I, Katayama T, Tomizawa K, Osada H, Sekido Y, Maehara Y, Yatabe Y, Mitsudomi T*: Reciprocal and complementary role of MET amplification and EGFR T790M mutation in acquired resistance to kinase inhibitors in lung cancer. *Clin Cancer Res* 2010; 16:5489-5498.
- 064 *Sawaki M, Iwata H, Sato Y, Wada M, Toyama T, Sasaki E, Yatabe Y, Imai T, Obashi Y*: Phase II study of preoperative systemic treatment with the combination of docetaxel and trastuzumab in patients with locally advanced HER2-overexpressing breast cancer. *Breast* 2010; 19:370-376.
- 065 *Choi YL, Soda M, Yamashita Y, Ueno T, Takashima J, Nakajima T, Yatabe Y, Takeuchi K, Hamada T, Haruta H, Ishikawa Y, Kimura H, Mitsudomi T, Tanio Y, Mano H*: EML4-ALK mutations in lung cancer that confer resistance to ALK inhibitors. *N Engl J Med* 2010; 363:1734-1739.
- 066 *Koike S, Kadera Y, Nakao A, Iwata H, Yatabe Y*: Absence of the caveolin-1 P132L mutation in cancers of the breast and other organs. *J Mol Diagn* 2010; 12:712-717.

頭頸部外科

- 001 *Fujii M, Nishijima W, Tsukuda M, Hasegawa Y, Ishitoya J, Yamane H, Homma A, Tomita T*: Phase I/II study of S-1 plus cisplatin combination chemotherapy in patients with advanced/recurrent head and neck cancer. *Jpn J Clin Oncol*, 40(3):214-221, 2010.
- 002 *Oze I, Matsuo K, Hosono S, Ito H, Kawase T, Watanabe M, Suzuki T, Hatooka S, Yatabe Y, Hasegawa Y, Shinoda M, Tajima K, and Tanaka H*: Comparison between self-reported facial flushing after alcohol consumption and ALDH2 Glu504Lys polymorphism for risk of upper aerodigestive tract cancer in a Japanese population. *Cancer Science*, 101(8):1875-1880, 2010.
- 003 吉原俊雄, 長谷川泰久: シンポジウム 1 「放射線治療の進歩」 司会者のまとめ. *日本気管食道科学会会報*, 61(2):66, 2010.
- 004 長谷川泰久: 切除 I .咽候食摘 下咽頭癌の外科治療 - 下咽頭喉頭全摘頸部食道切除術 -. *日本頭頸部癌学会第1回教育セミナーテキスト*, p20-21, 2010.
- 005 丹生健一, 鬼塚哲郎, 川端一嘉, 藤井隆, 浅井昌大, 林隆一, 宮崎眞和, 松浦一登, 吉積隆, 西島渡, 菅澤正, 土井勝之, 岸本誠司, 朝蔭孝宏, 藤井正人, 甲能直幸, 古川まどか, 長谷川泰久, 北村守正, 門田伸也, 中谷宏章, 富田吉信, 中島格, 尾尻博也, 齊川雅久: 頭頸部がんの頸部リンパ節転移に対する標準的手術法の確立に関する研究 - 頸部郭清術の後遺症調査. *頭頸部癌*, 36(1):82-88, 2010.
- 006 花井信広, 長谷川泰久: N2-3症例で化学放射線治療後のリンパ節の治療は? - 計画的頸部郭清術の立場から -. *JOHNS*,

- 26(10):1699-1702, 2010.
- 007 後藤満雄, 長谷川泰久:舌扁平上皮癌二次症例における救済手術の予後—一次症例との比較より—.日本口腔外科学会雑誌, 56(10):561-567, 2010.
- 008 花井信広, 長谷川泰久, 寺田聡広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司:中下咽頭癌における計画的頸部郭清術の検討.頭頸部癌, 36(3):354-358, 2010.
- 009 小澤泰次郎, 長谷川泰久:耳下腺悪性腫瘍の手術.JOHNS, 26(2):179-182, 2010.
- 010 花井信広:[ここまで変わった頸部郭清術]頸部郭清術の新しい考え方—化学放射線療法後の計画的頸部郭清術.JOHNS, 27(2):195-199, 2011.
- 011 平川仁, 長谷川泰久:[ここまで変わった頸部郭清術]頸部郭清術の新分類法—日本から世界に向けて.JOHNS, 27(2):161-165, 2011.
- 012 吉田明, 宮内昭, 杉野公則, 杉谷巖, 藤盛啓成, 伊藤研一, 富澤勇貴, 田中克浩, 鳥正幸, 和田修幸, 鈴木眞一, 杉野圭三, 吉田剛, 細井裕司, 小野田尚佳, 長谷川泰久, 山田弘之, 岩瀬克己, 吉本世一, 今井常夫, 折田頼尚, 宮崎眞和, 宇賀達也, 福内敦, 清水一雄, 栗原英夫, 原尚人, 小川利久, 北野博也, 藤森実, 三浦弘規:[甲状腺未分化癌研究コンソーシアム]長期生存例の生存因子解析.内分泌外科, 28(1):27-32, 2011.
- 013 古川まどか, 斉川雅久, 藤本保志, 門田伸也, 松浦一登, 花井信広, 古川政樹:[ここまで変わった頸部郭清術]頸部リンパ節の画像診断.超音波診断, JOHNS, 27(2):171-177, 2011.
- 形成外科部**
- 001 神山圭史, 兵藤伊久夫, 長谷川泰久, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 亀井譲, 兵藤伊久夫, 長谷川泰久:当院における遊離皮弁を用いた頭頸部再建の術後安静度に関する検討.日本マイクロサージャリー学会誌, 23(4):336-340, 2010
- 002 神山圭史, 兵藤伊久夫, 杉浦英志, 山田健志:前十字靭帯再建術時のガーゼ遺残による膝部異物肉芽腫の1例.臨床整形外科, 46(1):89-92, 2011
- 003 橋川和信, 杉山大典, 横尾聡, 兵藤伊久夫, 元村尚嗣, 久保盾貴, 栗田智之, 吉本世一, 多久嶋亮彦, 山下徹郎, 櫻庭実, 八木原一博, 中川雅裕, 矢野智之, 石田勝大, 櫻井裕之, 寺尾保信, 田中克己, 木股敬裕, 田原真也:がん切除後下顎骨区域欠損の新しい分類法「CAT分類」(第2報) 妥当性と有用性の検証.頭頸部癌, 36(3):309-315, 2010
- 胸部外科部**
- 001 *Hatooka S, Abe T, Saito T, Mitsudomi T, Shinoda M*: Lymph node metastasis of an esophageal cancer behind the thoracic descending aorta. *Esophagus*, 7, 111-114, 2010
- 002 *Hatooka S*: Resecting an unresectable tumor? *Annals of Thoracic and Cardiovascular Surgery*, 16(3), 147-149, 2010
- 003 *Yoshida K, Yatabe Y, Park J, Ogawa S, Park JY, Shimizu J, Horio Y, Matsuo K, Mitsudomi T, Hida T*: Clinical outcomes of advanced non-small cell lung cancer patients screened for epidermal growth factor receptor gene mutations. *J Cancer Res Clin Oncol*, 136, 527-35, 2010.
- 004 *Yanagisawa K, Konishi H, Arima C, Tomida S, Takeuchi T, Shimada Y, Yatabe Y, Mitsudomi T, Osada H, Takahashi T*: Novel metastasis-related gene CIM functions in the regulation of multiple cellular stress-response pathways. *Cancer Res*, 70, 9949-58, 2010.
- 005 *Tomizawa K, Suda K, Onozato R, Kuwano H, Yatabe Y, Mitsudomi T*: Analysis of ERBB4 mutations and expression in Japanese patients with lung cancer. *J Thorac Oncol*, 5, 1859-61, 2010.
- 006 *Takahashi T, Yamamoto N, Nukiwa T, Mori K, Tsuboi M, Horai T, Masuda N, Eguchi K, Mitsudomi T, Yokota S, Segawa Y, Ichinose Y, Fukuoka M, Saijo N*: Phase II study of erlotinib in Japanese patients with advanced non-small cell lung cancer. *Anticancer Res*, 30, 557-63, 2010.
- 007 *Suda K, Tomizawa K, Mitsudomi T*: Biological and clinical significance of KRAS mutations in lung cancer: an oncogenic driver that contrasts with EGFR mutation. *Cancer Metastasis Rev*, 29, 49-60, 2010.
- 008 *Suda K, Murakami I, Katayama T, Tomizawa K, Osada H, Sekido Y, Maehara Y, Yatabe Y, Mitsudomi T*: Reciprocal and Complementary Role of MET Amplification and EGFR T790M Mutation in Acquired Resistance to Kinase Inhibitors in Lung Cancer. *Clin Cancer Res*, 16, 5489-98, 2010.
- 009 *Saijo N, Fukuoka M, Thongprasert S, Ichinose Y, Mitsudomi T, Mok TS, Ohe Y, Park K, Wu YL*: Lung cancer working group report. *Jpn J Clin Oncol*, 40 Suppl 1, i7-12, 2010.
- 010 *Park JY, Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Oze I, Hida T, Yatabe Y, Mitsudomi T, Takezaki T, Tajima K, Tanaka H*: Impact of smoking on lung cancer risk is stronger in those with the homozygous aldehyde dehydrogenase 2 (ALDH2) null allele in a Japanese population. *Carcinogenesis*, 2010.
- 011 *Oh YH, Kim Y, Kim YP, Seo SW, Mitsudomi T, Ahn MJ, Park K, Kim HS*: Rapid detection of the epidermal growth factor receptor mutation in non-small-cell lung cancer for analysis of acquired resistance using molecular beacons. *J Mol Diagn*, 12, 644-52, 2010.
- 012 *Mitsudomi T, Yatabe Y*: Epidermal growth factor receptor in relation to tumor development: EGFR gene and cancer. *FEBS J*, 277, 301-8, 2010.
- 013 *Mitsudomi T, Morita S, Yatabe Y, Negoro S, Okamoto I, Tsurutani J, Seto T, Satouchi M, Tada H, Hirashima T, Asami K, Takakami N, Takada M, Yoshioka H, Shibata K, Kudoh S, Shimizu E, Saito H, Toyooka S, Nakagawa K, Fukuoka M*: Gefitinib versus cisplatin plus docetaxel in patients with non-small-cell lung cancer harbouring mutations of the epidermal growth factor receptor (WJTOG3405): an open label, randomis

- ed phase 3 trial. *Lancet Oncol*, 11, 121-8, 2010.
- 014 **Mitsudomi T**: Advances in target therapy for lung cancer. *Jpn J Clin Oncol*, 40, 101-6, 2010.
- 015 **Kitamura A, Hosoda W, Sasaki E, Mitsudomi T, Yatabe Y**: Immunohistochemical detection of EGFR mutation using mutation-specific antibodies in lung cancer. *Clin Cancer Res*, 16, 3349-55, 2010.
- 016 **Kawabara A, Yamamoto C, Nakashima K, Azuma K, Hattori S, Kashiwara M, Aizawa H, Basaki Y, Kuwano M, Kage M, Mitsudomi T, Ono M**: Molecular diagnosis of activating EGFR mutations in non-small cell lung cancer using mutation-specific antibodies for immunohistochemical analysis. *Clin Cancer Res*, 16, 3163-70, 2010.
- 017 **Katayama T, Matsuo K, Kosaka T, Sueda T, Yatabe Y, Mitsudomi T**: Effect of gefitinib on the survival of patients with recurrence of lung adenocarcinoma after surgery: a retrospective case-matching cohort study. *Surg Oncol*, 19, e144-9, 2010.
- 018 **Kanemitsu Y, Kato T, Komori K, Fukui T, Mitsudomi T**: Validation of a Nomogram for Predicting Overall Survival After Resection of Pulmonary Metastases from Colorectal Cancer at a Single Center. *World J Surg*, 34, 2973-8, 2010.
- 019 **Ishiguro F, Matsuo K, Fukui T, Mori S, Hatoaka S, Mitsudomi T**: Effect of selective lymph node dissection based on patterns of lobe-specific lymph node metastases on patient outcome in patients with resectable non-small cell lung cancer: a large-scale retrospective cohort study applying a propensity score. *J Thorac Cardiovasc Surg*, 139, 1001-6, 2010.
- 020 **Ishiguro F, Fukui T, Mori S, Katayama T, Sakakura N, Hatoaka S, Mitsudomi T**: Serum carcinoembryonic antigen level as a surrogate marker for the evaluation of tumor response to chemotherapy in nonsmall cell lung cancer. *Ann Thorac Cardiovasc Surg*, 16, 242-7, 2010.
- 021 **Hishida T, Nagai K, Mitsudomi T, Yokoi K, Kondo H, Horinouchi H, Akiyama H, Nagayasu T, Tsuboi M**: Salvage surgery for advanced non-small cell lung cancer after response to gefitinib. *J Thorac Cardiovasc Surg*, 140, e69-71, 2010.
- 022 **Hirsch FR, Mitsudomi T, Janne PA**. Chapter 49, *Anti-EGFR therapies: How to select patients*. In: **Pass H, Carbone DP, Johnson DH, Minna JD, Turrisi AT, Scagliotti GV**: editors. *Principles and Practice of Lung Cancer*. 4 ed. Baltimore: Lippincott Williams & Wilkins; 2010. p.717-39.
- 023 **Fukui T, Mitsudomi T**: Small peripheral lung adenocarcinoma: clinicopathological features and surgical treatment. *Surg Today*, 40, 191-8, 2010.
- 024 **Choi YL, Soda M, Yamashita Y, Ueno T, Takashima J, Nakajima T, Yatabe Y, Takeuchi K, Hamada T, Haruta H, Ishikawa Y, Kimura H, Mitsudomi T, Tanio Y, Mano H**: EML4-ALK mutations in lung cancer that confer resistance to ALK inhibitors. *N Engl J Med*, 363, 1734-9, 2010.
- 025 須田健一, 富沢健二, 光富徹哉. 女性肺腺癌の病因と病態. In: 永井厚志, 巽浩一郎, 桑野和善, 高橋和久: editors. *Annual Review 呼吸器* 2010. 東京: 中外医学社; 2010. p.91-9.
- 026 福井高幸, 光富徹哉: 術後補助化学療法では, 経口抗腫瘍剤と白金製剤を含む2剤併用療法のどちらを選択すべきか? *EBMがん化学療法・分子標的治療法* 東京: 中外医学社; 182-186, 2010 [総説]
- 027 福井高幸, 光富徹哉: 固型癌に対する術後補助化学療法の現状. *日本臨床*, 68:1019-23, 2010 [総説]
- 028 福井高幸, 光富徹哉: 肺癌の新しいTNM分類. *Annual Review 呼吸器* 東京: 中外医学社; 180-186, 2010 [総説]
- 029 光富徹哉: EGFR遺伝子変異とEGFR-TK阻害薬の感受性. *呼吸器内科*, 17, 270-5, 2010.
- 030 光富徹哉: 肺がんのgenotypeと治療. *呼吸*, 29, 335-42, 2010.

乳腺科部

- 001 **Koike S, Kadera Y, Nakao A, Iwata H, Yatabe Y**: Absence of the caveolin-1 P132L mutation in cancers of the breast and other organs. *The Journal of Molecular Diagnostics*, (2010).
- 002 **Sawaki M, Iwata H, Sato Y, Wada M, Toyama T, Sasaki E, Yatabe Y, Imai T, Ohashi Y**: Phase II study of preoperative systemic treatment with the combination of docetaxel and trastuzumab in patients with locally advanced HER2-overexpressing breast cancer. *The Breast*, (19:370-376), (2010).
- 003 **Obno S, Rai Y, Iwata H, Yamamoto M, Yoshida M, Iwase H, Masuda N, Nakamura S, Taniguchi H, Kamigaki S, Noguchi S**: Three dose regimens of fulvestrant in postmenopausal Japanese women with advanced breast cancer: results from a double-blind, phase II comparative study (FINDER1). *Annals of Oncology*, doi:10.1093/annonc/mdq249, (2010).
- 004 **Toi M, Sperinde J, Huang W, Saji S, Winslow J, Jin X, Tan Y, Obno S, Nakamura S, Iwata H, Masuda N, Aogi K, Morita S, Petropoulos C, Bates M**: Differential survival following trastuzumab treatment based on quantitative HER2 expression and HER2 homodimers in a clinic-based cohort of patients with metastatic breast cancer. *BMC Cancer*, (10:56), (2010).
- 005 **Aihara T, Takashima Y, Ohsumi S, Aogi K, Hozumi Y, Imoto S, Mukai H, Iwata H, Watanabe T, Shimizu C, Nakagami K, Tamura M, Ito T, Masuda N, Ogino N, Hisamatsu K, Mitsuyama S, Abe H, Tanaka S, Yamaguchi T, Ohashi Y**: phase III randomized adjuvant study of tamoxifen alone versus sequential tamoxifen and anastrozole in Japanese postmenopausal women with hormone-responsive breast cancer: N-SAS-BC03 study. *Breast Cancer Res Treat*, (121:379-387), (2010).
- 006 **Toi M, Iwata H, Yamanaka T, Masuda N, Obno S, Nakamura S, Nakayama T, Kashiwaba M, Kamigaki S, Kuroi K, JBCRG**: Clinical significance of the 21-Gene signature (Oncotype DX) in hormone receptor-positive early stage primary breast

- st cancer in the Japanese population. *Cancer*, (116:3112-8), (2010).
- 007 *Yosimoto N, Yamashita T, Fujita T, Hayashi H, Tsunoda N, Kimura M, Tsuzuki N, Yamashita H, Toyama T, Kondo N, Iwata H*: Impact of prophylactic prridoxine on occurrence of hand-foot syndrome in patients receiving capecitabine for advanced or metastatic breast cancer. *Breast Cancer*, (17:298-302), (2010)
- 008 越川卓, 所嘉朗, 鈴木緑, 小林雅子, 佐々木英一, 細川和貴, 北村淳子, 谷田部恭, 岩田広治, 市原周:画像診断モダリティの進歩に対応した乳腺細胞診のスコアリングシステム. *日本臨床細胞学会雑誌*, (49:134-141), (2010).
- 009 藤田崇史, 岩田広治:乳癌-基礎と臨床の架け橋- 治療戦略 新規抗HER2療法. *最新医学*, (233-242), (2010).
- 010 豊島千絵子, 山田舞, 波戸ゆかり, 堀尾章代, 林裕倫, 藤田崇史, 安藤由明, 岩田広治:高齢者HER2陽性乳癌に対する trastuzumabの認容性の検討. *乳癌の臨床*, 25(3), (321-325), (2010).
- 011 藤田崇史, 岩田広治:新規抗HER2療法. *最新医学*, (65), 最新医学社:(1475-1484), (2010).
- 012 藤田崇史, 岩田広治:ホルモン剤. *プロフェッショナルがんナーシング*, (1), メディカ出版:(68-73), (2010).
- 013 林裕倫, 安藤由明, 藤田崇史, 堀尾章代, 波戸ゆかり, 豊島千絵子, 山田舞, 岩田広治:HER2陽性再発乳癌に対する Lapatinib投与後のTrastuzumab再投与の検討. *乳癌の臨床* 25-26, (645(41)-648(44)), (2010)
- 005 *Yoshikawa T, Tsuburaya A, Morita S, Kodera Y, Ito S, Cho H, Miyashita Y, Sakamoto J*:A Comparison of Multimodality Treatment:Two or Four Courses of Paclitaxel plus Cisplatin in or S-1 plus Cisplatin Followed by Surgery for Locally Advanced Gastric Cancer, a Randomized Phase II Trial (COMPASS). *Jpn J Clin Oncol*, 40(4), 369-372, 2010.
- 006 *Hosoda W, Takagi T, Mizuno N, Shimizu Y, Sano T, Yamao K, Yatabe Y*:Diagnostic approach to pancreatic tumors with the specimens of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration. *Pathology International*, 60(5), 358-364, 2010.
- 007 *Kanemitsu Y, Hirai T, Komori K, Kato T*:Prediction of residual disease or distant metastasis after resection of locally recurrent rectal cancer. *Diseases of the Colon & Rectum*, 53(5), 779-789, 2010.
- 008 *Shitara K, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Shibata T, Ura T, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Muro K*:Neutropenia as a prognostic factor in advanced gastric cancer patients undergoing second-line chemotherapy with weekly paclitaxel. *Annals of Oncology*, 21(12), 2403-2409, 2010.
- 009 *Shitara K, Muro K, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura t, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Tajima K, Yatabe Y, Tanaka H, Mastuo K*:Folate Intake along with Genetic polymorphisms in Methylenetetrahydrofolate Reductase and Thymidylate Synthase in Patients with Advanced Gastric Cancer. *American Association for Cancer Research*, 19(5), 1311-1319, 2010.
- 010 *Ito Y, Nakanishi H, Kodera Y, Hirai T, Nakao A, Kato T*:Characterization of a novel lymph node metastasis model from human colonic cancer and its preclinical use for comparison of anti-metastatic efficacy between oral S-1 and UFT/LV. *Cancer Science*, 101(8), 1853-1860, 2010.
- 011 *Hijioka S, Mekky MA, Bhatia V, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hosoda W, Shimizu Y, Tamada K, Niwa Y, Yamao K*:Can EUS-guided FNA distinguish between gallbladder cancer and xanthogranulomatous cholecystitis?. *Gastrointest Endosc*, 72(3), 622-627, 2010.
- 012 *Ymao K, Hara K, Mizuno N, Sawaki A, Hijioka S, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Shimizu Y, Bhatia V*:EUS-Guided Biliary Drainage. *Gut Liver*, 4(1), 67-75, 2010.
- 013 *Ito S, Kodera Y, Mochizuki Y, Kojima T, Nakanishi H, Yamamura Y*:Phase II Clinical Trial of Postoperative S-1 Monotherapy for Gastric Cancer Patients with Free Intraperitoneal Cancer Cells Detected by Real-Time RT-PCR. *World J Surg*, 34(9), 2083-2089, 2010.
- 014 *Ito S*:Aduvant S-1 Chemotherapy for Gastric Cancer and peritoneal Wash. *World J Surg*, 35(9), 470-471, 2011.
- 015 *Fukagawa T, Sasako M, Ito S, Nakanishi H, Iinuma H, Natsugoe S, Katai H, Shimoda T*:The prognostic significance of isolated tumor cells in the lymph nodes of gastric cancer patients. *Gastric Cancer*, 13(3), 191-196, 2010.
- 016 *Kodera Y, Ishiyama A, Yoshikawa T, Kinoshita T, Ito S, Yokoyama H, Mochizuki Y, Ito H, Tsuburaya A, Sakamoto J, Nakao A*:A

消化器外科部

[原著]

- 001 *Sakamoto Y, Shimada K, Nara S, Esaki M, Kajiwarra T, Arai Y, Sano T, Yamamoto J, Kosuge T*:Risk factors for early bilirubinemia after major hepatectomy for perihilar cholangiocarcinoma with portal vein embolization. *Hepatogastroenterology*, 57(97), 22-28, 2010.
- 002 *Sakamoto Y, Shimada K, Nara S, Esaki M, Kajiwarra T, Arai Y, Sano T, Yamamoto J, Kosuge T*:Surgical management of infrahilar/suprapancreatic cholangiocarcinoma:an analysis of the surgical procedures, surgical margins, and survivals of 77 patients. *J Gastrointest Surg*.14(2), 335-343, 2010.
- 003 *Shitara K, Matsuo K, Ito S, Sawaki A, Kawai H, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Tajima K, Yatabe Y, Tanaka H, Muro K*:Effects of Genetic Polymorphisms in the ABCB1 Gene on Clinical Outcomes in Patients with Gastric Cancer Treated by Second-line Chemotherapy. *Asian Pac J Cancer Prev.*, 11(2), 447-452, 2010.
- 004 *Matsumoto K, Hara K, Sawaki A, Mizuno M, Hijioka S, Kondo S, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Shimizu Y, Hosoda W, Yatabe Y, Yamao K*:Pre-operative diagnosis of synchronous solid-pseudopapillary neoplasms of the pancreas. *Clin J Gastroenterology*, 3(3), 301-306, 2010.

- feasibility study of postoperative chemotherapy with S-1 and cisplatin (CDDP) for gastric carcinoma (CC0G0703). *Gastric Cancer*, 13(3), 197-203, 2010.
- 017 **Shiomi A, Ito M, Saito N, Hirai T, Ohue M, KUbo Y, Takii Y, Sudo T, Kotake M, Moriya Y**:The indications for a diverting stoma in low anterior resection for rectal cancer.:a prospective multicentre study of 222 patients from Japanese cancer centers. *Colorectal Disease*, 10(9), 1463-1318, 2010.
- 018 **Hijioka S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Mekky M.A, Bhatia V, Hosoda W, Yatabe Y, Shimizu Y, Tamada K, Niwa Y, Yamao K**: Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration for the diagnosis of retroperitoneal schwannoma. *Endoscopy*, 42(Suppl2), 296-, 2010.
- 019 **An B, Kondo Y, Okamoto Y, shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JP, Sekido Y**:Characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers. *Int J Cancer*, 127(9), 2095-2105, 2010.
- 020 **Komori K, Hirai T, Kanemitsu Y, Shimizu Y, Sano T, Ito S, Senda Y, Misawa K, Ito Y, Kato T**:Is "depth of submucosal invasion > or = 1,000 microm" an important predictive factor for lymph node metastases in early invasive colorectal cancer(pT1)?.*Hepato-Gastroenterology*,57(11),1123-1127, 2010.
- 021 **Shitara K, Mastuo K, Mizota A, Kondo C, Nomura M, Takahari D, Yokota T, Ura T, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Muro K**:Association of fluoropyrimidines, platinum agents, taxanes, and irinotecan in any line of chemotherapy with survival in patients with advanced gastric cancer.. *Gastrointestinal Cancer*, 28(33), 4945-4952, 2010.
- 022 **Shimizu Y, Kanemitsu Y, Sano T, Senda Y, Mizuno N, Yamao K, Kanemitsu Y, Sano T, Senda Y, Mizuno N, Yamao K**:A nomogram for predicting the probability of carcinoma in patients with intraductal papillary-mucinous neoplasm. *World J Surg.*, 34(12), 2932-2938, 2010.
- 023 **Sawaki Y, Yamao K, Bhatia V, Chiba T, Mizuno N, Sawaki A, Takahashi K, Tajika M, Shimizu Y, Yatabe Y, Yabagisawa A**:Development of pancreatic cancers during long-term follow-up of side branch intraductal papillary-mucinous neoplasms. *Endoscopy*, 42(12), 1077-1084, 2010.
- 024 **Kanemitsu Y, Kato T, Komori K, Fukui T, Mitsudomi T**:Validation of a nomogram for predicting overall survival after resection of pulmonary metastases from colorectal cancer at a single center.. *World Journal of Surgery*, 34(12), 2973-2978, 2010.
- 025 **Komori K, Hirai T, Kanemitsu Y, Shimizu Y, Sano T, Ito S, Senda Y, Misawa K, Ito Y, Kato T**:Pathology Studies of Combined Radical Resection of Seminal Vesicle in the Treatment of Rectal Cancer. *International Surgery*, 96(1), 51-55, 2011.
- 026 **中村嘉彦, 北坂孝幸, 古川和宏, 後藤秀美, 藤原道隆, 三澤一成, 伊藤雅昭, 縄野繁, 森健策**:3次元腹部X線CT像からのリンパ節抽出手法の改良. *MEDICAL IMAGING TECHNOLOGY*, 28(Suppl), 1-6, 2010.
- 027 **清水泰博, 安井健三, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 平井孝, 金光幸秀, 小森康司, 加藤知行**:大腸癌同時性肝転移の治療成績 待機肝切除は妥当か?. *消化器内科*, 50(1), 80-85, 2010.
- 028 **清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 二村雄次, 水野伸匡, 原 和生, 山雄健次**:自然史からみた膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)の手術適応の再検討—術後成績および長期経過観察例の臨床経過から—。 *胆と膵*, 31(5), 455-460, 2010.
- 029 **伊藤誠二, 円谷彰, 吉川貴己, 岩崎善毅, 佐野武, 川島吉之, 笹子三津留**:[進行胃がんに対する集学的治療法—化学療法と根治手術]高度リンパ節転移を伴う進行胃がんに対する術前化学療法+外科切除の治療開発 JCOG臨床試験を通じた標準治療の確立. *癌の臨床*, 55(10), 725-730, 2010.
- 030 **金光幸秀, 加藤知行, 小森康司, 平井孝**:[大腸癌肝転移に対する治療のUpdate] 大腸癌取扱い規約(第7版)で一新した肝転移分類(H分類とGrade分類). *外科治療*, 102(6), 821-828, 2010.
- 031 **蔣振剛, 二村幸孝, 北坂孝幸, 三澤一成, 藤原道隆, 梶田泰一, 若林俊彦, 森健策**:ボリュームレンダリング画像上における血管名表示手法. *MEDICAL IMAGING TECHNOLOGY*, 28(0), 1-6, 2010.
- 032 **BuiHuy H, 小田昌宏, 北坂孝幸, 三澤一成, 藤原道隆, 森健策**:3次元腹部CT像における下腹部血管領域への血管名自動対応付けに関する研究. *MEDICAL IMAGING TECHNOLOGY*, 28(Suppl), 1-7, 2010.
- 033 **平井孝, 金光幸秀, 小森康司**:手術手技 結腸右半切除D3郭清no touch isolationと支配動脈走行variationへの対応. *手術*, 64(7), 1169-1175, 2010.
- 034 **中岡輝久, 小田昌宏, 北坂孝幸, 古川和宏, 三澤一成, 藤原道隆, 森健策**:臓器存在尤度アトラスとグラフカットを用いた腹部3次元CT像からの複数臓器同時セグメンテーション手法の開発. *MEDICAL IMAGING TECHNOLOGY*, 28(Suppl), 1-5, 2010.
- 035 **肘岡 範, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 丹羽康生, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯哲, 小倉健, 羽場真, 友野輝子, 清水怜, 赤羽麻奈, 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 谷田部恭, 細田和貴, 山雄健次**:膵の転移性腫瘍. *肝胆膵画像*, 12(5), 625-634, 2010.

[総説]

- 001 **脇岡 範, 原和生, 水野伸匡, 澤木明, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 佐伯哲, 小倉健, 羽場真, 清水怜, 友野輝子, 赤羽麻奈, 千田嘉毅, 佐野力, 清水泰博, 丹羽康生, 山雄健次**:胆道疾患に対するEUS-FNA. *胆と膵*, 31(10), 118-1188, 2010.
- 002 **山雄健次, 小林佑次, 水野伸匡, 澤木明, 原和生, 脇岡範, 近藤真也, 佐伯哲, 赤羽麻奈, 小倉健, 羽場真, 友野輝子, 清水怜, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博**:卵巣型間質を有する膵MCNの臨床病理学的特徴と予後—日本膵臓病学会多施設共同研究の成績から—. *肝胆膵画像*, 12(6), 723-726,

2010.

- 003 平井孝, 金光幸秀, 小森康司:[外科医のための大腸癌の診断と治療]大腸癌の外科治療 開腹手術 腹会陰式直腸切除術. 臨床外科, 65(11), 264-270, 2010.
- 004 平井孝, 金光幸秀, 小森康司:[マスターしておきたい縫合・吻合法の実際より安全・確実に行うために]縫合・吻合法の実際大腸切除後の再建術回腸結腸吻合, 結腸結腸吻合. 外科治療, 102(suppl-1), 581-586, 2010.
- 005 小寺泰弘, 藤原道隆, 伊藤誠二, 大橋紀文, 中尾昭公:[Stage IV胃癌における外科治療の有用性]Stage IV胃癌における胃切除後の化学療法「昔ながらの戦略」の実力は?. 癌の臨床, 56(4), 283-289, 2011.
- 006 伊藤誠二:[頭頸部・消化管がんの補助化学療法]胃がんに対する補助化学療法 胃がんにおける術前化学療法の臨床試験. 腫瘍内科, 5(4), 374-379, 2010.
- 007 三澤一成:(特集)First person vision(一人称ビジョン):消化器外科における外科医の視点. 画像ラボ, 22(3), 67-73, 2011.
- 008 金光幸秀, 小森康司, 石黒成治:[大腸癌 最新の研究動向]大腸癌の予後因子リンパ節検索個数の大腸癌予後因子としての評価. 日本臨床, 増刊(3), 202-211, 2011.
- 009 金光幸秀:[ビギナーズお助け企画! 臓器&術式&ケア&観察大特集]キーポイント解説付き主要術式マップストーマ造設術. 消化器外科 Nursing, 15(4), 348-, 2010.

[症例検討]

- 001 安藤公隆, 清水泰博, 安井健三, 佐野力, 千田嘉毅, 山雄健次, 二村雄次:胃管再建による食道癌術後に胃管を温存した幽門論温存膵頭十二指腸切除術を施行した十二指腸乳頭部癌の1例. 胆道, 24(1), 119-126, 2010.
- 002 安藤公隆, 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 二村雄次, 原和生, 高木忠之, 水野伸匡, 澤木明, 細田和貴, 谷田部恭, 藤本正夫, 柳澤昭夫, 山雄健次:粘液癌とIPMN由来浸潤癌の鑑別が問題となった膵頭部癌の1例. 肝胆膵画像, 12(4), 526-532, 2010.
- 003 朴智栄, 鈴木勇史, 谷口千枝, 佐野力, 田中秀夫:ニコチンパッチ使用中に低ナトリウム血症を呈した肝硬変・糖尿病患者の1例. 内科, 105(5), 919-922, 2010.
- 004 森本守, 平井孝, 金光幸秀, 小森康司, 伊藤誠二, 清水泰博:Pagetoid spread を伴った肛門管癌の1例. 日本臨床外科学会雑誌, 71(11), 2917-2921, 2010.

[分担執筆]

- 001 小林佑次, 原 和生, 澤木 明, 水野伸匡, 今村秀道, 脇岡 範, 松本和也, 清水泰博, 佐野 力, 山雄健次:Mucous cystic neoplasm診断と予後. 肝胆膵, 61(3), 391-395, 2010.
- 002 加藤知行, 安井久晃, 島田安博, 清水泰博, 金光幸秀, 稲葉吉隆:切除可能肝転移に対する術後補助化学療法. 大腸癌FRONTIER, 3(1), 40-46, 2010.
- 003 清水 怜, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 小倉 健, 羽場 真, 丹羽康生, 田鹿正洋, 河合宏紀, 清水泰博:膵腫瘍に対する超音波内視鏡下穿刺吸引法(EUS-FNA). Pharma Medica, 28(10),

41-44, 2010.

- 004 金光幸秀, 平井 孝, 小森康司:[最新の大腸癌補助化学療法]直腸癌の術前, 術後補助療法(化学放射線も含む). 大腸癌 Frontier, 3(1), 24-29, 2010.

[図説 / 特集]

- 001 金光幸秀:[ビギナーズお助け企画! 臓器&術式&ケア&観察大特集]キーポイント解説付き主要術式マップ結腸切除術. 消化器外科Nursing, 15(4), 346-, 2010.

整形外科

[論文]

- 001 Nakashima H, Katagiri H, Takahashi M, Sugiura H:Survival and ambulatory function after endoprosthetic replacement for metastatic bone tumor of the proximal femur.Nagoya J Msd Sci, 72:13-21, 2010.
- 002 Yamada Y, Nishida Y, Nakashima H, Sugiura H, Tsukushi S, Kamei Y, Yoriyama K, Ishiguro N:Oncologic and Functional Outcomes of Soft Tissue Sarcomas of the Distal Upper Extremity:Comparison With Those of the Proximal Upper Extremity.Int Surg, 95:33-39, 2010.
- 003 Sugiura H, Fujiwara Y, Ando M, Kawai A, Ogose A, Ozaki T, Yokoyama R, Hiruma T, Ishii T, Morioka H, Mugishima H:Multicenter phase II trial assessing effectiveness of imatinib mesylate on relapsed or refractory KIT-positive or PDGFR-positive sarcoma.J Orthop Sci, 15(5):654-60, 2010.
- 004 Wasa J, Nishida Y, Tsukushi S, Shido Y, Sugiura H, Nakashima H, Ishiguro N:MRI features in the differentiation of malignant peripheral nerve sheath tumors and neurofibromas. AJR Am J Roentgenol, 194(6):1568-74, 2010.
- 005 Arai E, Nishida Y, Tsukushi S, Sugiura H, Ishiguro N:Intramuscular granular cell tumor in the lower extremities.Clin Orthop Relat Res, 468(5):1384-9, 2010.
- 006 Kozawa E, Sugiura H, Wasa J, Kobayama K, Yamada K, Nishio A, Nishida Y, Ishiguro N, Taguchi O:Suppression of Tumor Metastasis in a Murine Osteosarcoma Model with Anti-CD25 Monoclonal Antibody Treatment.Anticancer Res, 30:5019-5022, 2010.
- 007 中島浩敦, 吉田雅博, 二村尚久, 杉浦英志, 兵藤伊久夫, 亀井讓:腹壁再建を要した腹壁原発軟部肉腫. 整形外科, 61:217-222, 2010.
- 008 山田健志, 安藤智洋, 佐藤公治, 小澤英史, 杉浦英志:病院間連携による転移性脊椎腫瘍患者の手術治療. 臨床整形外科, 45(3):255-261, 2010.
- 009 中島浩敦, 片桐浩久, 高橋満, 杉浦英志:大腿骨近位転移性骨腫瘍に対する人工骨頭置換術後の予後と歩行機能. 別冊整形外科, 57:177-180, 2010.
- 010 杉浦英志:基礎研究と臨床研究, 双方の推進を重視する伝統と最先端医療の実践 整形外科医の立場から.L-forum, 4:6-7, 2010.

- 011 山田健志, 杉浦英志, 北村淳子, 谷田部恭:腹腔内腫瘍で発症した左下腿軟部腫瘍の1例.東海骨軟部腫瘍, 22:7-8, 2010.
- 012 山田健志, 杉浦英志, 北村淳子, 谷田部恭:鼠径リンパ節転移を伴う外陰部皮下腫瘍.東海骨軟部腫瘍, 22:17-18, 2010.
- 013 杉浦英志, 山田健志, 神山圭史, 佐々木英一, 谷田部恭:左側胸部軟部腫瘍の1例.東海骨軟部腫瘍, 22:25-26, 2010.
- 014 杉浦英志, 中島浩敦:骨平滑筋肉腫.アトラス骨・関節画像診断, 4:68-71, 2010.
- 015 安藤雄一, 森瀬昌宏, 近藤征史, 杉浦英志, 西田佳弘, 満間綾子, 上平修, 佐々直人, 荒木英盛, 吉野能, 立花弘之, 伊藤善之:転移性骨腫瘍に対する治療の実際.臨床腫瘍プラクティス, 6:473-480, 2010.
- 016 杉浦英志, 藤原康弘, 安藤正志, 川井章, 生越章, 尾崎敏文, 横山良平, 比留間徹, 石井猛, 森岡秀夫, 麦島秀雄:再発性あるいは治療抵抗性のKITあるいはPDGFR陽性肉腫に対する多施設共同研究によるimatinibの第II相試験.日本整形外科学会雑誌, 84(11):77, 2010.
- 017 和佐潤志, 杉浦英志, 山田健志, 兵藤伊久夫, 亀井謙:右前腕軟部腫瘍の1例.骨軟部腫瘍治療, 3:19-22, 2010.
- 018 山田健志, 和佐潤志, 杉浦英志:神経線維腫症I型を基とした頸部(鎖骨上窩)悪性末梢神経鞘腫瘍(MPNST)の1例.骨軟部腫瘍, 3:29-31, 2010.
- 019 小澤英史, 山田健志, 杉浦英志:再発を繰り返した胸壁軟部肉腫の1例.骨軟部腫瘍治療, 3:55-58, 2010.
- 020 小澤英史, 杉浦英志, 山田健志, 北村淳子, 谷田部恭:膝蓋骨摘出後に腸脛靭帯にて再建を行った膝関節部MFHの1例.骨軟部腫瘍治療, 3:73-76, 2010.
- 021 小澤英史, 杉浦英志, 山田健志, 筑紫聡:左脛骨骨肉腫の1例.骨軟部腫瘍治療, 3:83-86, 2010.
- 022 山田健志, 小澤英史, 杉浦英志:同側肩甲骨病変を伴う鎖骨腫瘍の1例.骨軟部腫瘍治療, 3:103-106.

婦人科部

- 001 Fujiwara S, Nawa A, Nakanishi T, Shimoyama Y, Kajiyama H, Shibata K, Ino K, Nakamura S, Kikkawa F, Yatabe Y:Thyroid transcription factor 1 expression in ovarian carcinomas is an independent prognostic factor.Hum Pathol, 41(4):560-5, 2010.
- 002 Satoh T, Hatae M, Watanabe Y, Yaegashi N, Ishiko O, Kodama S, Yamaguchi S, Ochiai K, Takano M, Yokota H, Kawakami Y, Nishimura S, Ogishima D, Nakagawa S, Kobayashi H, Shiozawa T, Nakanishi T, Kamura T, Konishi I, Yoshikawa H:Outcomes of fertility-sparing surgery for stage I epithelial ovarian cancer:a proposal for patient selection.J Clin Oncol, 28(10):1727-32, 2010.
- 003 Hosono S, Matsuo K, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kawase T, Kidokoro K, Nakanishi T, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H:Association between dietary calcium and vitamin D intake and cervical carcinogenesis among Japanese women.Eur J Clin Nutr, 64(4):400-9, 2010.
- 004 Hosono S, Kawase T, Matsuo K, Watanabe M, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kidokoro K, Ito H, Nakanishi T, Yatabe Y, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H:HLA-A Alleles and the Risk of Cervical Squamous Cell Carcinoma in Japanese Women.J Epidemiol, 20(4):295-301, 2010.
- 005 Aoki D, Katsumata N, Nakanishi T, Kigawa J, Fujiwara K, Takehara K, Kamiura S, Hiura M, Hatae M, Sugiyama T, Ochiai K, Noda K:A phase II clinical trial of topotecan in Japanese patients with relapsed ovarian carcinoma.Jpn J Clin Oncol, 41(3):320-7, 2011.

麻酔科部

001. Obata S, Moriyama C, Yamashita A, Nishida T, Kusumoto C, Mochida S, Minami Y, Nakada J, Shomori K, Inagaki Y, Ohta Y, Matura T:Polaprezinc Protects Mice against Endotoxin Shock.J Clin Biochem Nutr.46, 234-43, 2010.

放射線診断・IVR部

- 001 Nishiofuku H, Tanaka T, Aramaki T, Boku N, Inaba Y, Sato Y, Matsuoka M, Otsuji T, Arai Y, Kichikawa K:Hepatic arterial infusion of 5-Fluorouracil for patients with liver metastases from colorectal cancer refractory to standard systemic chemotherapy: a multicenter, retrospective analysis. Clin Colorectal Cancer. 9(5): 305-310, 2010
- 002 Inaba Y, Arai Y, Yamaura H, Sato Y, Najima M, Aramaki T, Sone M, Kumada T, Tanigawa N, Anai H, Yoshioka T, Ikeda M:Phase I/II study of hepatic arterial infusion chemotherapy with gemcitabine in patients with unresectable intrahepatic cholangiocarcinoma (JIVROSG-0301). Am J Clin Oncol. 34(1): 58-62, 2011
- 003 Iguchi T, Idani H, Asami S, Endo H, Inaba Y, Arai Y, Kanazawa S:Hepatic arterial infusion chemotherapy prior to standard systemic chemotherapy in patients with highly advanced unresectable liver metastases from colorectal cancer: a report of three patients. Acta Med Okayama. 65(1): 49-53, 2011
- 004 Inaba Y, Arai Y, Yamaura H, Saito H, Aramaki T, Sato M, Kumada T, Takeuchi Y:Phase II clinical study on stent therapy for unresectable malignant colorectal obstruction (JIVROSG-0206). Am J Clin Oncol.2011 Feb 2 [Epub ahead of print]
- 005 Shitara K, Yuki S, Yoshida M, Takahara D, Utsunomiya S, Yokota T, Sato Y, Inaba Y, Tajika M, Kawai H, Ura K, Komatsu Y, Muro K:Phase II study of combination chemotherapy with biweekly cetuximab and irinotecan for wild-type KRAS metastatic colorectal cancer refractory to irinotecan, oxaliplatin, and fluoropyrimidines. Invest New Drugs.2010

Dec 22 [Epub ahead of print]

- 006 *Nishiofuku H, Matsushima S, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Morishima Y, Kichikawa K*: Cellular density evaluation for malignant lymphoma using equivalent cross-relaxation rate imaging - initial experience. *Korean J Radiol.* 11(3): 327-332, 2010
- 007 *Kato K, Inaba Y, Tsuji Y, Esaki T, Yoshioka A, Mizunuma N, Mizuno T, Kusaba H, Fujii H, Muro K, Shimada Y, Shirao K*: A multicenter phase-II study of 5-FU, leucovorin and oxaliplatin (FOLFOX6) in patients with pretreated metastatic colorectal cancer. *Jpn J Clin Oncol.* 41(1): 63-68, 2011
- 008 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠: リザーバー肝動注カテーテル留置技術. 日本放射線技術学会雑誌 66(6): 652-655, 2010
- 009 佐藤洋造, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 寺倉梨津子: 消化管ステント治療におけるEBM. *IVR* 25(Suppl): 35-36, 2010
- 010 寺倉梨津子, 佐藤洋造, 山浦秀和, 加藤弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 稲葉吉隆: Myelolipomaの1例. 名古屋レントゲンカンファランス症例集 18: 45, 2010
- 011 佐藤洋造, 稲葉吉隆: 消化管ステント留置術 (食道、胃十二指腸、大腸). *IVR看護ナビゲーション*, 医学書院, pp148-150, 2010
- 012 佐藤洋造, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 寺倉梨津子: 大腸ステント留置術. *IVR* 25(2): 99-101, 2010
- 013 加藤弥菜: 転移のみを有する大腸がん. あらゆる病態・症例に対応できる消化器がん化学療法の実践, 羊土社, pp158-160, 2010
- 014 加藤弥菜: 化学放射線治療後に、食道狭窄をきたしている症例. あらゆる病態・症例に対応できる消化器がん化学療法の実践, 羊土社, pp251-253, 2010
- 015 稲葉吉隆, 佐藤洋造, 山浦秀和, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 寺倉梨津子: 悪性大静脈狭窄に対するステント治療: 下大静脈ステントを中心に. *IVR* 25(4): 93-97, 2010
- 016 加藤弥菜, 山浦秀和, 松島秀, 佐藤洋造, 金本高明, 北角淳, 寺倉梨津子, 栗延孝至, 佐藤健司, 稲葉吉隆: Gd-EOB-DTPAの高度取り込み低下を認めたICG不耐症の1例. 映像情報メディカル 43(1): 82-84, 2011
- 017 佐藤洋造, 山浦秀和, 加藤弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 寺倉梨津子, 稲葉吉隆, 宇良敬, 安部哲也: Niti-S 食道用stentの使用経験. *IVR* 26(Suppl): 28-29, 2011
- 002 *Tomita N, Kodaira T, Hida T, Tachibana H, Nakamura T, Nakabara R, Inokuchi H*: The Impact of Radiation Dose and Fractionation on Outcomes for Limited-Stage Small-Cell Lung Cancer. *Int J Radiat Oncol Biol Phys* 76(4):1121-6, 2010.
- 003 *Tomita N, Kodaira T, Furutani K, Tachibana H, Hasegawa Y, Terada A, Hanai K, Ozawa T, Nakamura T, Fuwa N*: Long-term follow-up and a detailed prognostic analysis of patients with oropharyngeal cancer treated with radiotherapy. *J Cancer Res Clin Oncol.* 136(4):617-23, 2010.
- 004 *Shitara K, Matsuo K, Hatooka S, Ura T, Takahari D, Yokota T, Abe T, Kawai H, Tajika M, Kodaira T, Shinoda M, Tajima K, Muro K, Tanaka H*: Heavy smoking history interacts with chemoradiotherapy for esophageal cancer prognosis: A retrospective study. *Cancer Sci* 101(4):1001-6, 2010
- 005 *Toita T, Obno T, Kaneyasu Y, Uno T, Yoshimura R, Kodaira T, Furutani K, Kasuya G, Ishikura S, Kamura T, Hiraoka M*: A Consensus-based Guideline Defining the Clinical Target Volume for Pelvic Lymph Nodes in External Beam Radiotherapy for Uterine Cervical Cancer. *Jpn J of Clin Oncol* 40(5):456-63, 2010.
- 006 *Tomita N, Shimizu H, Kodaira T*: Dosimetric Comparison of Three-Dimensional Conformal Radiotherapy in Salvage Radiotherapy for PSA Relapse after Radical Prostatectomy. *J Radiat Res* 51 (5), p581-7, 2010.
- 007 *Tomita N, Kodaira T, Matsuo M, Furutani K, Tachibana H, Daïmon T, Shimizu H*: Helical tomotherapy for solitary lung tumor: feasibility study and dosimetric evaluation of treatment plans. *Technology in Cancer Research and Treatment* 9(4):407-415, 2010.
- 008 *Inokuchi H, Kodaira T, Tachibana H, Nakamura T, Tomita N, Nakabara R, Takada A, Mizoguchi N, Tamaki T, Fuwa N*: Clinical Usefulness of [(18)F]Fluoro-2-Deoxy-d-Glucose Uptake in 178 Head-and-Neck Cancer Patients with Nodal Metastasis Treated with Definitive Chemoradiotherapy: Consideration of Its Prognostic Value and Ability to Provide Guidance for Optimal Selection of Patients for Planned Neck Dissection. *Int J Radiat Oncol Biol Phys* 79(3):747-55, 2011.
- 009 *Kato H, Kagami Y, Kodaira T, Oka S, Oki Y, Chibara D, Taji H, Yatabe Y, Nakamura T, Nakamura S, Seto M, Yamamoto K, Morishima Y*: Nodal relapse after Helicobacter pylori eradication in a patient with primary localized gastric mucosa associated lymphoid tissue lymphoma. *Am J Gastroenterology* 106 (3): 549-51, 2011.
- 010 *Tomita N, Fuwa N, Arijii Y, Kodaira T, Mizoguchi*: Factors associated with nodal metastasis in nasopharyngeal cancer: an approach to reduce the radiation field in selected patients. *Br J Radiol* 84(999): 265-70, 2011.
- 011 *Toita T, Kato S, Ishikura S, Tsujino K, Kodaira T, Uno T, Hatanokawa K, Sakurai H, Niibe Y, Kazumoto T, Nishimura T, Kitagawa R, Fukutani M, Oguchi M, Umayahara K, Hirashima Y, Aoki Y, Takizawa K*: and Disease Committee of Radiation Onco

放射線治療部

- 001 *Kodaira T, Fuwa N, Nakanishi T, Tachibana H, Nakamura T, Tomita N, Nakabara R, Inokuchi H, Mizoguchi N, Takada A*: Retrospective analysis of definitive radiotherapy for patients with superficial esophageal carcinoma: Consideration of the optimal treatment method with a focus on late morbidity. *Radiotherapy and Oncology* 95:234-9, 2010.

- logy, Japanese Gynecologic Oncology Group:Radiotherapy quality assurance of the Japanese Gynecologic Oncology Group study (JGOG1066):a cooperative phase II study of concurrent chemoradiotherapy of uterine cervical cancer.Int J Clin Oncol in press.
- 012 **Toita T, Kato S, Niibe Y, Ohno T, Kazumoto T, Kodaira T, Kataoka M, Shikama N, Kenjo M, Tokumaru S, Yamauchi C, Suzuki O, Sakurai H, Numasaki H, Teshima T, Oguchi M, Kagami Y, Nakano T, Hiraoka M, Mitsubashi N**:Prospective multi-institutional study of definitive radiotherapy with high-dose rate intracavitary brachytherapy in patients with non-bulky (< 4 cm) stage I, II uterine cervical cancer (JAROG0401/JROSG04-2), Int J Radiat Oncol Biol Phys in press.
- 013 **Nomura M, Shitara K, Kodaira T, Hatooka S, Mizota A, Kondoh C, Yokota T, Takahari D, Ura T, Muro K**:Prognostic Impact of the 6th and 7th American Joint Committee on Cancer TNM Staging Systems on Esophageal Cancer Patients Treated with Chemoradiotherapy.Int J Radiat Oncol Biol Phys in press.
- 014 **Shikama N, Oguchi M, Isobe K, Nakamura K, Tamaki Y, Hasegawa M, Kodaira T, Sasaki S, Kagami Y; on behalf of the Japan Radiation Oncology Group (JAROG)**:.A Long-term Follow-up Study of Prospective 80%-dose CHOP Followed by Involved-field Radiotherapy in Elderly Lymphoma Patients.Jpn J of Clin Oncol in press
- 015 **Nomura M, Kodaira T, Furutani K, Tachibana H, Tomita N, Goto Y**:Predictive factors for radiation pneumonitis in esophageal cancer patients treated with chemoradiotherapy without prophylactic nodal irradiation.Br J Radiol in press
- 016 **古平毅**:質疑応答 最新の癌の放射線治療.週間日本医事新報, 4487:79-80, 2010.
- 017 **古平毅 後藤容子 野村基雄 富田夏夫 立花弘之 古谷和久**:II上咽頭癌に対する診断と治療の進歩 再発上咽頭癌に対しての放射線治療トモセラピーによる強度変調放射線治療の有用性の検討.耳鼻と臨床, 56 S46-53, 2010.
- 018 **古平毅, 戸板孝文, 篠田充功, 宇野隆, 富田夏夫, 沼崎穂高, 五十野優, 手島昭樹, 光森通英**:日本PCS子宮頸癌小作業部会特集「医療実態調査研究(PCS)から見たわが国の放射線治療の10年間の変化・現状そして問題点」3.疾患各論 子宮頸癌 非手術症例:医療実態調査研究(PCS)からみた子宮頸癌非手術(根治的治療)症例における放射線治療の現状と問題点.がんの臨床56(2):139-147, 2010.
- 019 **古平毅**:最新の放射線治療の動向～IMRTガイドライン改定をふまえてトモセラピーによるIMRTの現況と問題点. Rad Fan 8(12): 61-63, 2010.
- 020 **古平毅**:トモセラピーによる高精度放射線治療.放射線利用振興協会HP, 2010.
- 021 **後藤容子, 野村基雄, 溝口信貴, 中原理絵, 富田夏夫, 立花弘之, 古谷和久, 古平毅**:Tomotherapyを用いた上咽頭癌局所再発に対しての再照射例の検討.臨床放射線, 55(8):1018-24, 2010.
- 022 **篠田充功, 戸板孝文, 古平毅, 宇野隆, 富田夏夫, 沼崎穂高, 五十野優, 手島昭樹, 光森通英**:日本PCS子宮頸癌小作業部会特集「医療実態調査研究(PCS)から見たわが国の放射線治療の10年間の変化・現状そして問題点」3.疾患各論 子宮頸癌 手術症例:医療実態調査研究(PCS)からみた子宮頸癌手術(術後照射)症例における放射線治療の現状.がんの臨床, 56(2):149-161, 2010.

[書籍]

- 001 **古平毅**:第7章 頭頸部腫瘍「下咽頭」.がん放射線療法 2010 第一版.篠原出版社:693-705, 2010.
- 002 **古平毅**:「5 下咽頭」.がん放射線療法2010別冊 代表的照射野とCT上のターゲット 第一版, 篠原出版社:30-31, 2010.

緩和ケア部

[論文 / 総説] など

- 001 **小森康永**:原家族再訪.家族療法研究, 27(2):153-156, 2010
- 002 **小森康永**:I Q82 精神医学のパラレルワールド.家族療法研究, 27(2):192-194, 2010

[著作]

- 001 **小森康永**:緩和ケアと時間.金剛出版, 2010

看護部

- 001 **新貝夫弥子**:疼痛ガイドライン オピオイドの誤解についての医学的真相.金原出版, P78-79, 2010
- 002 **新貝夫弥子**:緩和ケアのちょっとしたコツ 小さなテープを使った外来や自宅での工夫.青海社, P99-100, 2010.
- 003 **向井未年子, 新田都子, 永田智子, 藤田 恵**:消化器外科ナーシング.メディカ出版, 2010,
- 004 **林 千春**:化学療法を受けるがん患者に対する看護の実践状況と関連要因.日本がん看護学会誌, 第24巻 第3号,P33-44, 2010
- 005 **青山寿昭**:エッセイ 創造再生 7本.2010. http://kango.aikotoba.jp/essay_v5/004/index.html
- 006 **福嶋敬子, 大本美穂, 笹川良子**:消化管ステント留置術.IVRナビゲーション, 医学書院, P151-155, 2010.
- 007 **戸崎加奈江, 小原真紀子**:愛知県下におけるプロジェクトセツキシマブの立ち上げが看護, 南江堂:1 6巻1号, P42-47, 2011
- 008 **戸崎加奈江**:症状マネジメントから学ぶ.オンコロジーナーシング ケーススタディ, 先端医学社, 2010.
- 009 **久保 知**:がん放射線治療と看護.プロフェッショナルがんナーシング, メディカ出版:1 巻2号, 2011.
- 010 **新田都子**:誌上コンサルテーション.エキスパートナース, 2011.

- 011 高木礼子, 伊藤環:患者の立場に立ったQ O Lを高める乳がん周手術期看護.日総研, 2011.

薬剤部

- 001 *Maeda A, et al.*:Drug interaction between celecoxib and methotrexate in organic anion transporter3-transfected renal cells and in rats in vivo.Eur J Pharmacol, 640, 168-71, 2010.
- 002 *Maeda A, et al.*:Differential impacts of CYP2C19 gene polymorphisms on the antiplatelet effects of clopidogrel and ticlopidine.Clin Pharmacol Ther, 89, 229-33, 2011.
- 003 *Obno M, Komakine J, Suzuki E, Nishizuka M, Osada S, Imagawa M*:Repression of the promoter activity mediated by liver receptor homolog-1 through interaction with ku proteins.Biol Pharm Bull,33(5),784-91,2010
- 004 *Yura T,Hashizume H,Suzuki E,Imagawa M,Osada S*:Promotion of Anchorage-independent Growth by Cytoplasmic and Nuclear Histone Deacetylase 9.Journal of Health Science,56(5),581-588,2010

6. 学会誌・その他誌上発表テーマ調べ (研究所)

所長室

[原著]

- 001 *Honjo K, Iso H, Tsugane S, Tamakoshi A, Satoh H, Tajima K, Suzuki T, Sobue T*: The effects of smoking and smoking cessation on mortality from cardiovascular disease among Japanese: pooled analysis of three large-scale cohort studies in Japan. *Tabacco Control*, 19:50-57, 2010.
- 002 *Pham TM, Fujino Y, Nakachi K, Suzuki K, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Tamakoshi A, Yoshimura T*: for the JACC Study Group: Relationship between serum levels of insulin-like growth factors and subsequent risk of cancer mortality: Findings from a nested case-control study with in the Japan Collaborative Cohort Study. *Cancer Epidemiol*, 34:279-284, 2010.
- 003 *Gao CM, Gong JP, Wu JZ, Cao HX, Ding JH, Zhou JN, Liu YT, Li SP, Cao J, Matsuo K, Takezaki T, Tajima K*: Relationship between growth hormone 1 genetic polymorphism and susceptibility to colorectal cancer. *J Hum Genet*, 55(3):163-166, 2010.
- 004 *Katanoda K, Sobue T, Satoh H, Tajima K, Suzuki T, Nakatsuka H, Takezaki T, Nakayama T, Nitta H, Tanabe K, Tominaga S*: An association between long-term exposure to ambient air pollution and mortality from lung cancer and respiratory diseases in Japan. *J Epidemiol*, 21:132-143, 2011.
- 005 *Li M, Zhou Y, Chen P, Yang H, Yuan X, Tajima K, Cao J, Wang H*: Genetic variants on chromosome 8q24 and colorectal cancer risk: A case-control study in China and meta-analysis of the published literature. *Plos One J*, 6 (3):e18251, 2011.

[総説]

- 001 *Long N, Moore MA, Chen W, Gao CM, Lai MS, Mizoue T, Ouyunchimeg D, Park S, Shin HR, Tajima K, Yoo K*: Cancer epidemiology and control in north-East Asia – past, present and future. *Asian Pac J Cancer Prev*, 11(Suppl 2):107-148, 2010.
- 002 *Sonoda S, Li HC, Tajima K*: *Ethnoepidemiology of HTLV-1 related diseases*: Ethnic determinants of HTLV-1 susceptibility and its worldwide dispersal. *Cancer Sci*, 102:295-301, 2011.
- 003 **田島和雄**: がん予防の温古創新. 日本医事新報, No.4493:1, 2010.
- 004 **田島和雄**: 喫煙が及ぼす生体障害の検証① ーがん疾患の発生リスク-. *The Lung perspectives*, 18(1):28-31, 2010.
- 005 **栗木清典, 田島和雄**: 大腸癌の疫学. *The GI Forefront*, 6(1):14-16, 2010.

[単行本]

- 001 *Tajima K*: General cancer control program in Asia-Pacific

countries: Japan as an example. *Cancer Report 2010*, Asian Pacific Organization for Cancer Prevention, Tuncer AM, ed, New Hope in Health Foundation, pp147-153, 2010.

- 002 *Tajima K*: Recent advances of cancer in Japan. *Recent Advances of Cancer in Asian Countries*, The Asian Clinical Oncology Society, ed, Cancer and Chemotherapy Publishers Co, Japan, pp26-34, 2010.

疫学・予防部

- 001 *Truong T, Sauter W, McKay JD, Hosgood HD, Gallagher C, Amos CI, Spitz M, Muscat J, Lazarus P, Illig T, Wichmann E, Bickeboller H, Risch A, Dienemann H, Zhang ZF, Naeim BP, Yang P, Zienolddiny S, Haugen A, Le Marchand L, Hong YC, Kim JH, Duell EJ, Andrew AS, Kiyohara C, Shen H, Matsuo K, Suzuki T, Seow A, Ng DP, Lan Q, Zaridze D, Szeszenia-dabrowska N, Lissowska J, Rudnai P, Fabianova E, Constantinescu V, Bencko V, Foretova L, Janout V, Caporaso NE, Albanes D, Thun M, Landi MT, Trubicka J, Lener M, Lubinski J, EPIC-lung, Wang Y, Chabrier A, Boffetta P, Brenann P, Hung RJ*: International Lung Cancer Consortium: Coordinated genotyping of 10 potential lung cancer susceptibility variants. *Carcinogenesis*, 31:625-633, 2010.
- 002 *Yoshida K, Yatabe Y, Park J, Ogawa S, Park JY, Shimizu J, Horio Y, Matsuo K, Mitsudomi T, Hida T*: Clinical outcomes of advanced non-small cell lung cancer patients screened for epidermal growth factor receptor gene mutations. *J Cancer Res Clin Oncol*, 136:527-535, 2010.
- 003 *Hosono S, Matsuo K, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kawase T, Kidokoro K, Nakanishi T, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H*: Association between dietary calcium and vitamin D intake and cervical carcinogenesis among Japanese women. *Eur J Clin Nutr*, 64:400-409, 2010.
- 004 *Hishida A, Matsuo K, Goto Y, Mitsuda Y, Hiraki A, Naito M, Wakai K, Kazuo T, Hamajima N*: No association between A1CDA 7888 C/T polymorphism, *Helicobacter pylori* seropositivity, and the risk of atrophic gastritis and gastric cancer in Japanese. *Gastric Cancer*, 13:43-49, 2010.
- 005 *Kawase T, Matsuo K, Suzuki T, Hirose K, Hosono S, Watanabe M, Inagaki M, Iwata H, Tanaka H, Tajima K*: Association between vitamin D and calcium intake and breast cancer risk according to menopausal status and receptor status in Japan. *Cancer Sci*, 101:1234-1240, 2010.
- 006 *Sbitara K, Muro K, Ito S, Sawaki A, Tajima M, Kawai H, Yokota T, Takabari D, Shibata T, Ura T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Tajima K, Yatabe Y, Tanaka H, Matsuo K*: Folate intake along with genetic polymorphisms in methylenete

- trahydrofolate reductase and thymidylate synthase in patients with advanced gastric cancer. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev*, 19:1311-1319, 2010.
- 007 Ennishi D, Asai H, Maeda Y, Shinagawa K, Ikeda K, Yokoyama M, Terui Y, Takeuchi K, Yoshino T, Matsuo K, Hatake K, Tanimoto M: Statin-independent prognosis of patients with diffuse large B-cell lymphoma receiving rituximab plus CHOP therapy. *Ann Oncol*, 21:1217-1221, 2010.
- 008 Tanaka M, Tanaka H, Tsukuma H, Ioka A, Osbima A, Nakahara T: Risk factors for intrahepatic cholangiocarcinoma: a possible role of hepatitis B virus. *J Viral Hepatitis*, 17:742-748, 2010.
- 009 Park JY, Matsuo K, Suzuki K, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Oze I, Hida T, Yatabe Y, Mitsudomi T, Takezaki T, Tajima K, Tanaka H: Impact of smoking on lung cancer risk is stronger in those with the homozygous aldehyde dehydrogenase 2 null allele in a Japanese population. *Carcinogenesis*, 31:660-665, 2010.
- 010 Okasaka T, Usami N, Taniguchi T, Kawaguchi K, Okagawa T, Suzuki H, Matsuo K, Yokoi K: Can non-performance of radical systematic mediastinal lymphadenectomy be justified in elderly lung cancer patients? An evaluation using propensity-based survival analysis. *Eur J Cardiothorac Surg*, 38:27-33, 2010.
- 011 Kanda J, Matsuo K, Inoue M, Iwasaki M, Sawada N, Shimazu T, Yamaji T, Sasazuki S, Tsugane S: Association of anthropometric characteristics with the risk of malignant lymphoma and plasma-cell myeloma in a Japanese population: A population-based cohort study. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev*, 19:1623-1631, 2010.
- 012 Segawa Y, Kiura K, Takigawa N, Kamei H, Harita S, Hiraki S, Watanabe Y, Sugimoto K, Shibayama T, Yonei T, Ueoka H, Takemoto M, Kanazawa S, Takata I, Nogami N, Hotta K, Hiraki A, Tabata M, Matsuo K, Tanimoto M: A randomized phase III trial comparing docetaxel and cisplatin combination chemotherapy to mitomycin, vindesine and cisplatin combination chemotherapy with concurrent thoracic radiotherapy in locally advanced non-small-cell lung cancer: OLCSG 0007. *J Clin Oncol*, 28:3299-3306, 2010.
- 013 Hosono S, Kawase T, Matsuo K, Watanabe M, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kidokoro K, Ito H, Nakanishi T, Yatabe Y, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H: HLA-A alleles and the risk of cervical squamous cell carcinoma in Japanese women. *J Epidemiol*, 20:295-301, 2010.
- 014 Nakanishi H, Hayamashi H, Yamada R, Yamashiro K, Nakata I, Shimada N, Ohno-Matsui K, Mochizuki M, Ozaki M, Yoshitake S, Kuriyama S, Saito M, Iida T, Matsuo K, Matsuda F, Yoshimura N: Single nucleotide polymorphisms in promoter region of matrix metalloproteinase 1, 2, and 3 in Japanese with High Myopia. *Invest Ophthalmol Vis Sci*, 51:4432-4436, 2010.
- 015 Oze I, Matsuo K, Hosono S, Ito H, Kawase T, Watanabe M, Suzuki T, Hatooka S, Yatabe Y, Hasegawa Y, Shinoda M, Tajima K, Tanaka H: Comparison between Self-report Facial Flushing After Alcohol Consumption and ALDH2 Glu504Lys Polymorphism for Risk of Upper Aerodigestive Tract Cancer in a Japanese Population. *Cancer Sci*, 101:1875-1880, 2010.
- 016 Nagafuji K, Matsuo K, Tesbima T, Mori S, Sakamaki H, Hida M, Ogawa H, Kadera Y, Kanda Y, Maruta A, Mori T, Yoshida F, Ichinohe T, Kasai M, Takatsuka Y, Kubo K, Sao H, Atsuta Y, Suzuki R, Yoshida T, Tsuchida M, Harada M: Peripheral blood stem cell versus bone marrow transplantation from HLA-identical sibling donors in patients with leukemia: A propensity score-based comparison from the Japanese Society of Hematopoietic Stem Cell Transplantation Registry. *Int J Hematol*, 91:855-864, 2010.
- 017 Segawa Y, Kiura K, Hotta K, Takigawa N, Tabata M, Matsuo K, Yoshioka H, Hayashi H, Kawai H, Aoe K, Maeda T, Ueoka H, Tanimoto M: A randomized phase II study of a combination of docetaxel and S-1 versus docetaxel monotherapy in patients with non-small-cell lung cancer previously treated with platinum-based chemotherapy: Results of Okayama Lung Cancer Study Group (OLCSG) trial 0503. *J Thorac Oncol*, 5:1430-1444, 2010.
- 018 Long J, Cai Q, Shu XO, Qu S, Li C, Zheng Y, Gu K, Wang W, Xiang YB, Cheng J, Chen K, Zhang L, Zheng H, Shen CY, Huang CX, Hou MF, Shen H, Hu Z, Wang F, Deming SL, Kelley MC, Shrubsole MJ, Khoo US, Chan KYK, Chan SY, Haima CA, Henderson BE, Le Marchand L, Iwasaki M, Kasuga Y, Tsugane S, Matsuo K, Tajima K, Iwata H, Huang B, Shi J, Li G, Wen W, Gao YT, Lu W, Zheng W: Identification of a functional genetic variant at 16q12.1 for breast cancer risk: Results from the Asia Breast Cancer Consortium. *Plos Genet*, 6(6):e1001002, 2010.
- 019 Goto Y, Hishida A, Matsuo K, Tajima K, Morita E, Naito M, Wakai K, Hamajima N: PRKCH gene polymorphism is associated with the risk of severe gastric atrophy. *Gastric Cancer*, 13:90-94, 2010.
- 020 Niibe Y, Watanabe J, Tsunoda S, Arai M, Arai T, Kawaguchi M, Ono S, Numata A, Matsuo K, Jobo T, Unno N, Hayakawa K: Co-mutational expression of HER2 and HIF-1alpha is a predictor of poor prognosis in uterine cervical carcinoma treated with concurrent chemoradiotherapy: prospective analysis (KGROG0501). *Eur J Gynaecol Oncol*, 31:491-496, 2010.
- 021 Shitara K, Matsuo K, Ito S, Sawaki A, Kawai H, Yokota T, Takahashi D, Shibata T, Ura T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Tajima K, Yatabe Y, Tanaka H, Muro K: Effects of genetic polymorphisms in the ABCB1 gene on clinical outcomes in patients with gastric cancer treated by second-line chemotherapy. *Asian Pac J Cancer Prev*, 11:447-452, 2010.
- 022 Hishizawa M, Kanda J, Utsunomiya A, Taniguchi S, Eto T, Moriuchi Y, Tanosaki, Kawano F, Miyazaki Y, Masuda M, Nagaf

- uji K, Hara M, Takanashi M, Kai S, Atsuta Y, Suzuki R, Kawase T, Matsuo K, Nagamura-Inoue T, Kato S, Sakamaki H, Morishima Y, Okamura J, Ichinobe T, Uchiyama T*:Transplantation of allogeneic hematopoietic stem cells for adult T-cell leukemia:a nationwide retrospective study. *Blood*, 116:1369-1376, 2010.
- 023 *Hayashi H, Yamashiro K, Gotob N, Nakanishi H, Nakata I, Tsujikawa A, Otani A, Saito M, Iida T, Matsuo K, Tajima K, Yamada R, Yoshimura N*:CFH and ARMS2 Variations in Age-related Macular Degeneration, Polypoidal Choroidal Vasculopathy, and Retinal Angiomatous Proliferation. *Invest Ophthalmol Vis Sci*, 51:5914-5919, 2010.
- 024 *Katayama T, Matsuo K, Kosaka T, Sueda T, Yatabe Y, Mitsudomi T*:Effect of gefitinib on the survival of patients with recurrence of lung adenocarcinoma after surgery:A retrospective case-matching cohort study. *Surg Oncol*, 19:e144-9, 2010.
- 025 *Sobue T, Inoue M, Tanaka H, and 46 Members*:Cancer Registry and Epidemiological Study Working Group report. *Jpn J Clin Oncol*, 40(Suppl 1):i76-i81, 2010.
- 026 *Tanaka H, Tsukuma H, Oshima A*:Long-term prospective study of 6104 survivors of srsenic poisoning during infancy due to contaminated milk powder in1955. *J Epidemiol*, 20:439-445, 2010.
- 027 *Shitara K, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Shibata T, Ura T, Ito S, Sawaki A, Tajika M, Kawai H, Muro K*:Neutropenia as a prognostic factor in advanced gastric cancer patients undergoing second-line chemotherapy with weekly paclitaxel. *Ann Oncol*, 21:2403-2409, 2010.
- 028 *Obmura K, Terao C, Maruya E, Katayama M, Matoba K, Shimada K, Murasawa A, Honjo S, Takasugi K, Tobma S, Matsuo K, Tajima K, Yukawaa N, Kawabata D, Nojima T, Fujii T, Yamada R, Saji H, Matsuda F, Mimori T*:Anti-citrullinated peptide antibody-negative RA is a genetically distinct subset:a definitive study using only bone-erosive ACPA-negative rheumatoid arthritis. *Rheumatology*, 49:2298-2304, 2010.
- 029 *Hishida A, Matsuo K, Goto Y, Naito M, Wakai K, Tajima K, Hamajima N*:Smoking behavior and risk of Helicobacter pylori infection, gastric atrophy and gastric cancer in Japan. *Asian Pac J Cancer Prev*, 11:313-317, 2010.
- 030 *Ennishi D, Maeda Y, Niitsu N, Kojima M, Izutsu K, Takizawa J, Kusumoto S, Okamoto M, Yokoyama M, Takamatsu Y, Sunami K, Miyata A, Murayama K, Sakai A, Matsumoto M, Shinagawa K, Takaki A, Matsuo K, Kinoshita T, Tanimoto M*:Hepatic toxicity and prognosis in hepatitis C virus-infected patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with rituximab-containing chemotherapy regimens:a Japanese multicenter analysis. *Blood*, 116:5119-5125, 2010.
- 031 *Hishida A, Matsuo K, Goto Y, Hamajima N*:Genetic predisposition to Helicobacter pylori-induced gastric precancerous conditions. *World J Gastrointest Oncol*, 2:369-379, 2010.
- 032 *Hishida A, Matsuo K, Goto Y, Naito M, Wakai K, Tajima K, Hamajima N*:No associations of Toll-like receptor 2 (TLR2) -196 to -174del polymorphism with the risk of Helicobacter pylori seropositivity, gastric atrophy, and gastric cancer in Japanese. *Gastric Cancer*, 13:251-257, 2010.
- 033 *Truong T, Hung RJ, Amos CI, Wu X, Bickeboller H, Rosenberger A, Sauter W, Illig T, Wichmann HE, Risch A, Dienemann H, Kaks R, Yang P, Jiang R, Wiencke JK, Wrensch M, Hansen H, Kelsey KT, Matsuo K, Tajima K, Schwartz AG, Wenzlaff A, Seow A, Ying C, Staratschek-Jox A, Nurnberg P, Stoelben E, Wolf J, Lazarus P, Muscat JE, Gallagher CJ, Zienolddiny S, Haugen A, van der Heijden HF, Kiemeny LA, Isla D, Mayordomo JJ, Rafnar T, Stefansson K, Zhang ZF, Chang SC, Kim JH, Hong YC, Duell EJ, Andrew AS, Lejbkowitz F, Rennert G, Muller H, Brenner H, Le Marchand L, Benhamou S, Bouchardy C, Teare MD, Xue X, McLaughlin J, Liu G, McKay JD, Brennan B, Spitz MR*:Replication of lung cancer susceptibility loci at chromosomes 15q25, 5p15, and 6p21:a pooled analysis from the International Lung Cancer Consortium. *J Natl Cancer I*, 102:959-971, 2010.
- 034 *Ishiguro F, Matsuo K, Fukui T, Mori S, Hatooka S, Mitsudomi T*:Effect of selective lymph node dissection based on patterns of lobe-specific lymph node metastases on patient outcome in patients with resectable non-small cell lung cancer:a large-scale retrospective cohort study applying a propensity score. *J Thorac Cardiovasc Surg*, 139:1001-1006, 2010.
- 035 *Takayama R, Nakagawa H, Sawaki A, Mizuno N, Kawai H, Tajika M, Yatabe Y, Matsuo K, Uehara R, Ono K, Nakamura Y, Yamao K*:Serum tumor antigen REG4 as a diagnostic biomarker in pancreatic ductal adenocarcinoma. *J Gastroenterol*, 45:52-59, 2010.
- 036 *Kanda J, Matsuo K, Suzuki T, Hosono S, Ito H, Ichinobe T, Seto M, Morishima Y, Tajima K, Tanaka H*:Association between obesity and the risk of malignant lymphoma in Japanese :a case-control study. *Int J Cancer*, 126:2416-2425, 2010.
- 037 *Shitara K, Matsuo K, Hatooka S, Ura T, Takahari D, Yokota T, Abe T, Kawai H, Tajika M, Kodaira T, Shinoda M, Tajima K, Muro K, Tanaka H*:Heavy smoking history interacts with chemoradiotherapy for esophageal cancer prognosis:a retrospective study. *Cancer Sci*, 101:1001-1006, 2010.
- 038 *Nakanishi H, Yamashiro K, Yamada R, Gotob N, Hayashi H, Nakata I, Saito M, Iida T, Oishi A, Kurimoto Y, Matsuo K, Tajima K, Matsuda F, Yoshimura N*:Joint effect of cigarette smoking and CFH and LOC387715/HTRA1 polymorphisms on polypoidal choroidal vasculopathy. *Invest Ophthalmol Vis Sci*, 51:6183-6187, 2010.
- 039 *Kobayashi Y, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Hara K, Mizuno N, Hijioka S, Sawaki A, Matsuo K, Nakagawa H, Nakamura Y, Yamao K*:Serum tumor antigen REG4 as a useful diagnostic biomarker in gastric cancer. *Hepato-gastroenterol*, 57:1631-1634, 2010.
- 040 *Kato H, Yamamoto K, Matsuo K, Oki Y, Taji H, Kuwatsuka Y,*

- Seto M, Kagami Y, Morishima Y: Clinical impact and predisposing factors of delayed-onset neutropenia after autologous haematopoietic stem cell transplantation for B-cell non-Hodgkin lymphoma: association with an incremental risk of infectious events. *Ann Oncol*, 21(8):1699-705, 2010.
- 041 An B, Kondo Y, Okamoto Y, Shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JP, Sekido Y: Characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers. *Int J Cancer*, 127(9):2095-105, 2010.
- 042 Mizuta S, Matsuo K, Yagasaki F, Yujiri T, Hatta Y, Kimura Y, Ueda Y, Kanamori H, Usui N, Akiyama H, Miyazaki Y, Ohtake S, Atsuta Y, Sakamaki H, Kawa K, Morishima Y, Ohnishi K, Naoe T, Ohno R: Pre-transplantation Imatinib-based therapy improves the clinical outcomes of allogeneic hematopoietic stem cell transplantation in patients with newly diagnosed BCR-ABL-positive acute lymphoblastic leukemia: a comparative study. *Leukemia*, 25(1):41-7, 2011.
- 043 Zheng W, MacLerran DF, Rolland B, Zhang X, Inoue M, Matsuo K, He J, Chandra Gupta P, Rmadas K, Tsugane S, Irie F, Tamakoshi A, Gao YT, Wang R, Shu XO, Tsuji I, Kuriyama S, Tanaka H, Satoh H, Chen CJ, Yuan JM, Yoo KY, Ahsan H, Pan WH, Gu D, Suryakant Pednekar M, Sauvaget C, Sasazuki S, Sairenchi T, Yang G, Xiang YB, Nagai M, Suzuki T, Nishino Y, You SL, Koh WP, Park S, Chen Y, Shen CY, Thornquist M, Feng Z, Kang DH, Boffetta P, Potter J: Association between Body-Mass Index and Risk of Death in More Than 1 Million Asians. *New Engl J Med*, 364(8):719-29, 2011.
- 044 Shitara K, Oze I, Mizota A, Kondo C, Nomura M, Yokota T, Takahara D, Ura T, Yuki S, Komatsu Y, Matsuo K, Muro K: Randomized Phase II Study Comparing Dose Escalated Weekly Paclitaxel vs. Standard Dose Weekly Paclitaxel for Patients with Previously Treated Advanced Gastric Cancer. *Jpn J Clin Oncol*, 41(2):287-290, 2011.
- 045 Hishida A, Matsuo K, Goto Y, Hamajima N: Genetic predisposition to Helicobacter pylori-induced gastric precancerous conditions. *World J Gastrointest Oncol*, 2(10):369-379, 2010.
- 046 Tajiri H, Tanaka H, Brooks S, Takano T: Reduction of hepatocellular carcinoma in childhood after introduction of selective vaccination against hepatitis B virus for infants born to HBV carrier mothers. *Cancer Causes Control*, 22(3):523-7, 2011.
- 047 Lin Y, Yagyu K, Egawa N, Ueno M, Mori M, Nakao H, Ishii H, Nakamura K, Wakai K, Hosono S, Tamakoshi A, Kikuchi S: An overview of genetic polymorphisms and pancreatic cancer risk in molecular epidemiologic studies. *J Epidemiol*, 21(1):2-12, 2011.
- 048 Cai QY, Wen WQ, Qu SM, Li GL, Egan KM, Chen K, Deming SL, Shen H, Shen CY, Gammon M, Blot WJ, Matsuo K, Haiman CA, Khoo US, Iwasaki M, Santella R, Zhang L, Fair AM, Hu ZB, Wu PE, Signorello LB, Titus-Ernstoff L, Tajima K, Henderson BE, Chan YK, Kasuga Y, Newcomb PA, Zheng H, Cui Y, Wang F, Sheeh YL, Iwata H, Le Marchand L, Chan SU, Shrubsole MJ, Trentham-Dietz A, Tsugane S, Garcia-Closas M, Long JR, Li Chun, Shi JJ, Huang B, Xiang YB, Gao YT, Lu W, Shu XO, Zheng W: Replication and functional genomic analyses of the breast cancer susceptibility locus at 6q25.1 generalize its importance in women of Chinese, Japanese and European ancestry. *Cancer Res*, 71(4):1344-1355, 2011.
- 049 谷口千枝, 日比野福代, 南美知子, 坂 英雄, 田中英夫: がん専門病院における看護師の禁煙支援の現状と意識に関連する要因の分析. 第40回日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ, 236-238, 2010.
- 050 今井康陽, 田中英夫, 平松直樹, 林紀夫: 大阪府における性差から見たHCV関連肝細胞癌発症の動向. *Epidemiology of hepatitis C virus-related hepatocellular carcinoma in Osaka with special reference to sex difference*. *消化器内科*, 50(4):331-336, 2010.
- 051 田中英夫, 谷口千枝: クリニカルパスを用いて治療の効率化と質を保つ. *禁煙外来ベストプラクティス*, 57-63, 2010.
- 052 田中英夫, 谷口千枝: 喫煙依存 - 初診外来における初期診療 - 診断と治療, 98(suppl.):71-76, 2010.
- 053 朴 智榮, 鈴木勇史, 谷口千枝, 佐野 力, 田中英夫: ニコチンパッチ使用中に低ナトリウム血症を呈した肝硬変・糖尿病患者の1例. *内科*, 105(5):919-922, 2010.
- 054 谷口千枝, 田中英夫(編): *トランスセオレティカルモデルに基づく戦略的個別保健指導ガイド*. 看護の科学社, 2011(東京).
- 055 松尾恵太郎, 伊藤秀美: 血液悪性腫瘍の疫学. *medicine*, 47:2108-2113, 2011.
- 056 田中英夫: C型肝炎ウイルスをめぐる3つのコホート研究-感染インパクト, 自然史としての肝癌発生リスク, インターフェロン治療効果- HCV感染のnatural courseを探る: わが国におけるコホート研究, 53-7, 山形大学出版会, 2010(山形).

腫瘍病理学部

- 001 Kawamoto H, Yuasa T, Kubota Y, Seita M, Sasamoto H, Javed SM, Hayashi T, Nakahara H, Hassan R, Iwamuro M, Kondo E, Nakaji S, Tanaka N, Kobayashi N: Characteristics of CD133(+) human colon cancer SW620 cells. *Cell Transplant*, 19:857-864, 2010.
- 002 Okamoto N, Kuwabara K, Ohta K, Kitabatake M, Takagi K, Mizuta H, Kondo E, Sakaguchi N: Germinal center-associated nuclear protein (GANP) is involved in mRNA export of Shugoshin-1 required for centromere cohesion and in sister-chromatid exchange. *Genes Cells*, 15:471-484, 2010.
- 003 Navarro-Alvarez N, Soto-Gutierrez A, Chen Y, Caballero-Corbalan J, Hassan W, Kobayashi S, Takei J, Kondo Y, Iwamuro M, Yamamoto K, Kondo E, Tanaka N, Fox IJ, Kobayashi N: Intr

- amuscular transplantation of engineered hepatic tissue constructs corrects acute and chronic liver failure in mice. *J Hepatol*, 52:211-219, 2010.
- 004 *Navarro-Alvarez N, Kondo E, Soto-gutierrez A, Kawamoto H, Hassan W, Yuasa T, Kubota Y, Seita M, Nakahara H, Hayashi T, Nishikawa Y, Hassan RARA, Javed SM, Noguchi H, Matsumoto S, Nakaji S, Tanaka N, Kobayashi N*: Isolation and propagation of a human CD133-negative colon tumor-derived cell line with tumorigenic and angiogenic properties. *Cell Transplant*, 19:865-877, 2010.
- 005 *Yamamoto T, Navarro-Alvarez N, Soto-Gutierrez A, Yuasa T, Iwamura M, Kubota Y, Seita M, Kawamoto H, Javed SM, Kondo E, Noguchi H, Kobayashi S, Nakaji S, Kobayashi N*: Treatment of acute liver failure in mice by hepatocyte xenotransplantation. *Cell Transplant*, 19:799-806, 2010.
- 006 *Iwamura M, Komaki T, Kubota Y, Seita M, Kawamoto H, Yuasa T, Shabid JM, Hassan RA, Hassan WA, Nakaji S, Nishikawa Y, Kondo E, Yamamoto K, Kobayashi N*: Comparative analysis of endoderm formation efficiency between mouse ES cells and iPS cells. *Cell Transplant*, 19:831-839, 2010.
- 007 *Iwamura M, Komaki T, Kubota Y, Seita M, Kawamoto H, Yuasa T, Shabid JM, Hassan RA, Hassan WA, Nakaji S, Nishikawa Y, Kondo E, Yamamoto K, Fox JJ, Kobayashi N*: Hepatic differentiation of mouse iPS cells in vitro. *Cell Transplant*, 19:841-847, 2010.
- 008 *Nakaya T, Kuwahara K, Ohta K, Kitabatake M, Toda T, Takeda N, Tani T, Kondo E, Sakaguchi N*: Critical role of Pcid2 in B cell survival through the regulation of MAD2 expression. *J Immunol*, 185:5180-5187, 2010.
- 009 *Ito Y, Nakanishi H, Kodera Y, Hirai T, Nakao A, Kato, T*: Characterization of a novel lymph node metastasis model from human colonic cancer and its preclinical use for comparison of anti-metastatic efficacy between oral S-1 and UFT/LV. *Cancer Sci*, 101:1853-1860, 2010.
- 010 *Matsui M, Shimizu Y, Ikebara Y, Kondo E, Kodera Y, Nakanishi H*: Targeted delivery of oligomannose-coated liposome to the omental micrometastasis by peritoneal macrophages from patients with gastric cancer. *Cancer Sci*, 101:1670-1677, 2010.
- 011 *Ito S, Kodera Y, Mochizuki Y, Kojima T, Nakanishi H, Nakao A*: Phase II clinical trial of postoperative S-1 monotherapy for gastric cancer patients with free intraperitoneal cancer cells detected by real-time RT-PCR. *World J surg*, 34:2083-2089, 2010.
- 012 *Fukagawa T, Sasako M, Ito S, Nakanishi H, Iinuma H, Natsugoe S, Katai H, Shimoda T*: The prognostic significance of isolated tumor cells in the lymph nodes of gastric cancer patients. *Gastric Cancer*, 13(3):191-196, 2010.
- 013 *Kamiyama S, Ichimiya T, Ikebara Y, Takase T, Fujimoto I, Suda T, Nakamori S, Nakamura M, Nakayama F, Irimura T, Nakanishi H, Watanabe M, Narimatsu H, Nishihara S*: Expression and the role of 3'-phosphoadenosine 5'-phosphosulfate transporters in human colorectal carcinoma. *Glycobiology*, 21(2):235-246, 2011.
- 分子腫瘍学部
- [原著]
- 001 *Horio Y, Osada H, Shimizu J, Ogawa S, Hida T, Sekido Y*: Relationship of mRNA expressions of RanBP2 and topoisomerase II isoforms to cytotoxicity of amrubicin in human lung cancer cell lines. *Cancer Chemother Pharmacol*, 66:237-243, 2010.
- 002 *Tajima K, Ohashi R, Sekido Y, Hida T, Nara T, Hashimoto M, Iwakami S, Minakata K, Yae T, Tabahashi F, Saya H, Takahashi K*: Osteopontin-mediated enhanced hyaluronan binding induces multidrug resistance in mesothelioma cells. *Oncogene*, 29:1941-1951, 2010.
- 003 *Shen L, Kantarjian H, Guo Y, Lin E, Shan J, Huang X, Berry D, Ahmed S, Zhu W, Pierce S, Kondo Y, Oki Y, Jelinek J, Hussain S, Estey E, Issa JPJ*: DNA methylation predicts survival and response to therapy in patients with Myelodysplastic Syndromes. *J Clin Oncol*, 28:605-613, 2010.
- 004 *Yamada T, Matsumoto K, Wang W, Li Q, Nishioka Y, Sekido Y, Sone S, Yano S*: Hepatocyte growth factor reduces susceptibility to an irreversible epidermal growth factor receptor inhibitor in EGFR-T790M mutant lung cancer. *Clin Cancer Res*, 16:174-183, 2010.
- 005 *Takemura Y, Satoh M, Satoh, K, Hamada H, Sekido Y, Kubota S*: High dose of ascorbic acid induces cell death in mesothelioma cells. *Biochem Biophys Res Commun*, 394:249-253, 2010.
- 006 *Yanagisawa K, Konishi H, Arima C, Tomida S, Takeuchi T, Shimada Y, Yatabe Y, Mitsudomi T, Osada H, Takahashi T*: Novel metastasis-related gene CIM functions in the regulation of multiple cellular stress-response pathways. *Cancer Res*, 70:9949-9958, 2010.
- 007 *Huang QM, Tomida S, Masuda Y, Arima C, Cao K, Kasahara TA, Osada H, Yatabe Y, Akashi T, Kamiya K, Takahashi T, Suzuki M*: Regulation of DNA polymerase POLD4 influences genomic instability in lung cancer. *Cancer Res*, 70:8707-8417, 2010.
- 008 *Estecio MR, Gallegos J, Vallot C, Castoro RJ, Chung W, Maegawa S, Oki Y, Kondo Y, Jelinek J, Shen L, Hartung H, Aplan PD, Czerniak BA, Liang S, Issa JPJ*: Genome architecture marked by retrotransposons modulates predisposition to DNA methylation in cancer. *Genome Res*, 10:1369-1382, 2010.
- 009 *Suda K, Murakami I, Katayama T, Tomizawa K, Osada H, Sekido Y, Maehara Y, Yatabe Y, Mitsudomi T*: Reciprocal and complementary role of MET amplification and EGFR T790M mutation in acquired resistance to kinase inhibitors in lung cancer. *Clin Cancer Res*, 16:5489-5498, 2010.
- 010 *Takeyama Y, Sato M, Horio M, Hase T, Yoshida K, Yokoyama*

T, Nakashima H, Hashimoto N, Sekido Y, Gazdar AF, Minna JD, Kondo M, Hasegawa Y: Knockdown of ZEB1, a master epithelial-to-mesenchymal transition (EMT) gene, suppresses anchorage-independent cell growth of lung cancer cells. *Cancer Lett*, 296:216-224, 2010.

- 011 *An B, Kondo Y, Okamoto Y, Shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JP, Sekido Y*: Characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers. *Int J Cancer*, 127:2095-2105, 2010.

[総説および単行本]

- 001 *Kondo Y, Issa JP*: DNA methylation profiling in cancer. *Expert Rev Mol Med*, 12:e23, 2010.
- 002 *Osada H, Takahashi T*: let-7 and miR-17-92: small-sized major players in lung cancer development. *Cancer Sci*, 102:9-17, 2011.
- 003 長田啓隆, 高橋 隆: microRNA発現異常と発癌. 実験医学増刊, 第29巻, 羊土社:p200-205, 平成23年
- 004 新城恵子, 近藤 豊: がん細胞の可塑性とエピジェネティクスを標的とする治療開発. 癌と化学療法, 第37巻, 癌と化学療法社:p1654, 平成22年
- 005 近藤 豊: エピジェネティックセラピーの現状と展望. メディカル・サイエンス・ダイジェスト, 第36巻, 北隆館:p12, 平成22年
- 006 新城恵子, 近藤 豊: エピジェネティクスのがん診断への応用. 実験医学増刊, 第28巻, 羊土社:p144-53, 平成22年

遺伝子医療研究部

[原著]

- 001 *Miyata T, Yonekura K, Utsunomiya A, Kanekura T, Nakamura S, Seto M*: Cutaneous type adult T-cell leukemia/lymphoma is a characteristic subtype and includes erythema/papule and nodule/tumor subgroups. *Int J Cancer*, 126:1521-1528, 2010.
- 002 *Tsukamoto Y, Nakada C, Noguchi T, Tanigawa M, Nguyen L T, Uchida T, Hijiya N, Matsuura K, Fujioka T, Seto M, Moriyama M*: MicroRNA-375 is downregulated in gastric carcinomas and regulates cell survival by targeting PDK1 and 14-3-3zeta. *Cancer Res.*, 70:2339-2349, 2010.
- 003 *Uchida M, Tsukamoto Y, Uchida T, Ishikawa Y, Nagai T, Hijiya N, Nguyen L T, Nakada C, Kuroda A, Okimoto T, Kodama M, Murakami K, Noguchi T, Matsuura K, Tanigawa M, Seto M, Ito H, Fujioka T, Takeuchi I, Moriyama M*: Genomic profiling of gastric carcinoma in situ and adenomas by array-based comparative genomic hybridization. *Journal of Pathology*, *Journal of Pathology*, 221:96-105, 2010.
- 004 *Kato H, Yamamoto K, Matsuo K, Oki Y, Taji H, Kuwatsuka Y, Seto M, Kagami Y, Morishima Y*: Clinical impact and predis-

posing factors of delayed-onset neutropenia after autologous hematopoietic stem-cell transplantation for B-cell non-Hodgkin lymphoma: association with an incremental risk of infectious events. *Ann Oncol.*, *Ann Oncol.*, 21:1699-1705, 2010.

- 005 *Kato H, Kagami Y, Nakagawa M, Karnan S, Yatabe Y, Morishima Y, Seto M*: IL-4/CD40L Co-Stimulation Induces Long-Term Proliferation for CD10-Positive Germinal Center B Cell-Like Diffuse Large B-Cell Lymphoma. *The Open Leukemia Journal*, 3:60-68, 2010.
- 006 *Ko YH, Karnan S, Kim KM, Park CK, Kang ES, Kim YH, Kang WK, Kim SJ, Kim WS, Lee WY, Chun HK, Seto M*: Enteropathy-associated T-cell lymphoma—a clinicopathologic and array comparative genomic hybridization study. *Hum Pathol.*, 41:1231-1237, 2010.
- 007 *Iqbal J, Weisenburger DD, Greiner TC, Vose JM, McKeithan T, Kucuk C, Geng H, Deffenbacher K, Smith L, Dybkaer K, Nakamura S, Seto M, Delabie J, Berger F, Loong F, Au WY, Ko YH, Sng I, Armitage JO, Chan WC*: International Peripheral T-Cell Lymphoma Project: Molecular signatures to improve diagnosis in peripheral T-cell lymphoma and prognostication in angioimmunoblastic T-cell lymphoma. *Blood*, 115:1026-1036, 2010.
- 008 *Kimura Y, Sato K, Arakawa F, Karube K, Nomura Y, Shimizu K, Aoki R, Hashikawa K, Yoshida S, Kiyasu J, Takeuchi M, Nino D, Sugita Y, Morito T, Yoshino T, Nakamura S, Kikuchi M, Ohshima K*: Mantle cell lymphoma shows three morphological evolutions of classical, intermediate, and aggressive forms, which occur in parallel with increased labeling index of cyclin D1 and Ki-67. *Cancer Sci*, 101:806-814, 2010.
- 009 *Seto M, Honma K, Nakagawa M*: Diversity of genome profiles in malignant lymphoma. *Cancer Science*, 101:573-578, 2010.
- 010 *Seto M*: Genomic profiles in B cell lymphoma. (*Progress in Hematology*) *Int J Hematol.*, 92:238-245, 2010.
- 011 *Sung CO, Kim SC, Karnan S, Karube K, Shin HJ, Nam DH, Sub YL, Kim SH, Kim JY, Kim SJ, Kim WS, Seto M, Ko YH*: Genomic profiling combined with gene expression profiling in primary central nervous system lymphoma. *Blood*, 117:1291-1300, 2011.
- 012 *Kato H, Kagami Y, Kodaira T, Oka S, Oki Y, Chihara D, Taji H, Yatabe Y, Nakamura T, Nakamura S, Seto M, Yamamoto K, Morishima Y*: Nodal Relapse After Helicobacter pylori Eradication in a Patient With Primary Localized Gastric Mucosa-Associated Lymphoid Tissue Lymphoma. *Am J Gastroenterol.*, 106:549-551, 2011.
- 013 *Umino A, Nakagawa M, Utsunomiya A, Tsukasaki K, Taira N, Katayama N, Seto M*: Clonal evolution of adult T-cell leukemia/lymphoma takes place in lymph node. *Blood*, 117:5473-5778, 2011.
- 014 *Nakada C, Tsukamoto Y, Matsuura K, Nguyen TL, Hijiya N, Uchida T, Sato F, Mimata H, Seto M, Moriyama M*: Overexpress-

- on of miR-210, a downstream target of HIF1 α , causes centrosome amplification in renal carcinoma cells. *J Pathol.*, 224:280-288, 2011.
- 015 **Tsuzuki S, Taguchi O, Seto M**:Promotion and maintenance of leukemia by ERG. *Blood*, 117:3858-3868, 2011.
- 016 **Iqbal J, Weisenburger DD, Chowdhury A, Tsai MY, Srivastava G, Greiner TC, Kucuk C, Deffenbacher K, Vose J, Smith L, Au WY, Nakamura S, Seto M, Delabie J, Berger F, Loong F, Ko YH, Sng I, Liu X, Loughran TP, Armitage J, Chan WC**:International Peripheral T-cell Lymphoma Project. Natural killer cell lymphoma shares strikingly similar molecular features with a group of non-hepatosplenic $\gamma \delta$ T-cell lymphoma and is highly sensitive to a novel aurora kinase A inhibitor in vitro. *Leukemia.*, 25:348-358, 2011.
- 017 **Kurahashi S, Hayakawa F, Miyata Y, Yasuda T, Minami Y, Tsuzuki S, Abe A, Naoe T**:PAX5-PML acts as a dual dominant-negative form of both PAX5 and PML. *Oncogene.* 30:1822-1830, 2011.
- 018 **Takehita M, Nakamura S, Kikuma K, Nakayama Y, Nimura S, Yao T, Urabe S, Ogawara S, Yonemasu H, Matsushita Y, Karube K, Iwashita A**: Pathological and immunohistological findings and genetic aberrations of intestinal enteropathy-associated T cell lymphoma in Japan. *Histopathology.* 58:395-407, 2011.
- 019 **Nakagawa M, Tsuzuki S, Honma K, Taguchi O, Seto M**:Synergistic effect of Bcl2, Myc and Ccnd1 transforms mouse primary B-cells into malignant cells. *Haematologica.*, 96:1318-1326.2011
- 020 **Kumar V, Matsuo K, Takahashi A, Hosono N, Tsunoda T, Kamatani N, Kong SY, Nakagawa H, Cui R, Tanikawa C, Seto M, Morishima Y, Kubo M, Nakamura Y, Matsuda K**:Common variants on 14q32 and 13q12 are associated with DLBCL susceptibility. *J Hum Genet.*, 56:436-439.2011
- 021 **瀬戸加太**:胃MALTリンパ腫発症の分子機構:ピロリ菌の役割とその意義. *細胞工学(学研メディカル秀潤社)*, 29:581-586, 2010.
- 022 **瀬戸加太**:悪性リンパ腫とHelicobacter Pylori. *医学のあゆみ*, 235:419-425, 2010.
- 023 **本間圭一郎, 海野 啓, 中川雅夫, 瀬戸加太**:アレイCGHを用いた悪性リンパ腫の解析. *細胞*, 42:437-439, 2010.
- 024 **瀬戸加太**:胃MALTリンパ腫の原因としての遺伝子異常. *Medical Practice*, 28:273-276, 2010.
- 002 **Guo H, Liu T-Y, Uemura Y, Jiao S, Wang D, Lin Z, Narita Y, Suzuki M, Hirotsawa M, Ichihara Y, Ishihara O, Kikuchi H, Sakamoto Y, Senju S, Zhang Q, Ling F**:Bisphenol A in combination with TNF α selectively induces Th2 cell-promoting dendritic cells in vitro with an estrogen-like activity. *Cell Mol Immunol.* 7:227-234, 2010.
- 003 **Nakatsuka R, Nozaki T, Uemura Y, Matsuoka Y, Sasaki Y, Shinohara M, Ohura K, Sonoda Y**:5-Aza-2'-deoxycytidine treatment induces skeletal myogenic differentiation of mouse dental pulp stem cells. *Arch Oral Biol.* 55:350-357, 2010.
- 004 **Warren EH, Fujii N, Akatsuka Y, Chaney CN, Mito JK, Loeb KR, Gooley TA, Brown ML, Koo KKW, Rosinski KV, Ogawa S, Matsubara A, Appelbaum FR, Riddell SR**:Therapy of relapsed leukemia after allogeneic hematopoietic cell transplant with T cells specific for minor histocompatibility antigens. *Blood*, 115:3158-3161, 2010.
- 005 **Inaba T, Ino K, Kajiyama H, Shibata K, Yamamoto E, Kondo S, Umezui T, Nawa A, Takikawa O, Kikkawa F**:Indoleamine 2, 3-dioxygenase expression predicts impaired survival of invasive cervical cancer patients treated with radical hysterectomy. *Gynecol Oncol.* 117:423-428, 2010.
- 006 **Isomura H, Stinski MF, Murata T, Nakayama S, Chiba S, Akatsuka Y, Kanda T, Tsurumi T**:The human cytomegalovirus UL76 gene regulates the level of expression of the UL77 gene. *PLoS One.* 30:e11901, 2010.
- 007 **Sugimoto Y, Muramatsu H, Makishima H, Prince C, Jankowska AM, Yoshida N, Xu Y, Nishio N, Hama A, Yagasaki H, Takahashi Y, Kato K, Manabe A, Kojima S, Maciejewski JP**:Spectrum of molecular defects in juvenile myelomonocytic leukaemia includes ASXL1 mutations. *Brit J Haematol.* 150:83-87, 2010.
- 008 **Yagasaki H, Takahashi Y, Hama A, Kudo K, Nishio N, Muramatsu H, Tanaka M, Yoshida N, Matsumoto K, Watanabe N, Kato K, Horibe K, Kojima S**:Comparison of matched-sibling donor BMT and unrelated donor BMT in children and adolescent with acquired severe aplastic anemia. *Bone marrow transplant.* 45:1508-1513, 2010.
- 009 **An J, Fujiwara H, Suemori K, Niya T, Azuma T, Tanimoto K, Ochi T, Akatsuka Y, Mineno J, Ozawa H, Ishikawa F, Kuzushima K, Yasukawa M**:Activation of T-cell receptor signaling in peripheral T-cell lymphoma cells plays an important role in the development of lymphoma-associated hemophagocytosis. *Int J Hematol.* 93:176-185, 2011.
- 010 **Ishii M, Matsuoka Y, Sasaki Y, Nakatsuka R, Takahashi M, Nakamoto T, Yasuda K, Matsui K, Asano H, Uemura Y, Tsuji T, Fukuhara S, Sonoda Y**:Development of a high-resolution purification method for precise functional characterization of primitive human cord blood-derived CD34-negative SCID-repopulating cells. *Exp Hematol.* 39:203-213 e1, 2011.
- 011 **Muramatsu H, Takahashi Y, Sakaguchi H, Shimada A, Nishio N, Hama A, Doisaki S, Yagasaki H, Matsumoto K, Kato K, Kojima S**:Excellent outcomes of children with CML treated with

腫瘍免疫学部

[原著]

- 001 **Villalobos IB, Takahashi Y, Akatsuka Y, Muramatsu H, Nishio N, Hama A, Yagasaki H, Saji H, Kato M, Ogawa S, Kojima S**:Relapse of leukemia with loss of mismatched HLA resulting from uniparental disomy after haploidentical hematopoietic stem cell transplantation. *Blood*, 115:3158-3161, 2010.

imatinib mesylate compared to that in pre-imatinib era. Int J Hematol, 93:186-191, 2011.

- 012 *Hoshino Y, Nishikawa K, Ito Y, Kuzushima K, Kimura H*: Kinetics of Epstein-Barr virus load and virus-specific CD8+ T cells in acute infectious mononucleosis. J Clin Virol, 50:244-246, 2011.
- 013 *Kimura T, Kobno H, Matsuoka Y, Murakami M, Nakatsuka R, Hase M, Yasuda K, Uemura Y, Sasaki Y, Fukubara S, Sonoda Y*: CXCL8 enhances the angiogenic activity of umbilical cord blood-derived outgrowth endothelial cells in vitro. Cell Biol Int, 35:201-208, 2011.
- 014 *Nishio N, Takahashi Y, Ohashi H, Doisaki S, Muramatsu H, Hama A, Shimada A, Yagasaki H, Kojima S*: Reduced-intensity conditioning for alternative donor hematopoietic stem cell transplantation in patients with dyskeratosis congenita. Pediatr Transplant, 15:161-166, 2011.
- 015 近藤紳司, 井篁一彦, 山本英子, 稲葉智子, 新城加奈子, 新美薫, 東真規子, 吉川史隆: 脳内出血で診断された脳転移・肺転移・皮膚転移を呈した絨毛癌の一例. 東海産科婦人科学会雑誌, 47巻:207-212, 2010.

[総説・単行本]

- 001 *Nishio N, Kojima S*: Recent progress in dyskeratosis congenita. Int J Hematol, 92:419-424, 2010.
- 002 成田弥生, 鈴木元晴, 劉天懿, 村上真理, 松岡由和, 中塚隆介, 長谷真, 河野比良夫, 佐々木豊, 廣澤成美, 坂本安, 植村靖史, 藺田精昭: NKT細胞のアジュバント効果と抗腫瘍免疫応答への応用. Cytometry Research, 20巻:19-25, 2010.

腫瘍ウイルス学部

[学術雑誌]

- 001 *Ishida D, Nawa A, Tanino T, Goshima F, Luo CH, Iwaki M, Kajiyama H, Shibata K, Yamamoto E, Ino K, Tsurumi T, Nishiyama Y, Kikkawa F*: Enhanced cytotoxicity with a novel system combining the paclitaxel-2'-ethylcarbonate prodrug and an HSV amplicon with an attenuated replication-competent virus, HF10 as a helper virus. Cancer Lett, 288:17-27, 2010.
- 002 *Sato Y, Shirata N, Murata T, Nakasu S, Kudoh A, Iwabori S, Nakayama S, Chiba S, Isomura H, Kanda T, Tsurumi T*: Transient increases in p53-responsive gene expression at early stages of Epstein-Barr virus productive replication. Cell Cycle, 9(4):807-14, 2010.
- 003 *Murata T, Hotta N, Toyama S, Nakayama S, Chiba S, Isomura H, Ohshima T, Kanda T, Tsurumi T*: Transcriptional repression by sumoylation of Epstein-Barr virus BZLF1 protein correlates with association of histone deacetylase. J Biol Chem, 285(31):23925-35, 2010.
- 004 *Isomura H, Stinski MF, Murata T, Nakayama S, Chiba S, Aka*

tsuka Y, Kanda T, Tsurumi T: The human cytomegalovirus UL76 gene regulates the level of expression of the UL77 gene. PLoS One, 5(7):e11901, 2010.

- 005 *Nakayama S, Murata T, Yasui Y, Murayama K, Isomura H, Kanda T, Tsurumi T*: Tetrameric ring formation of Epstein-Barr virus polymerase processivity factor is crucial for viral replication. J Virol, 84(24):12589-98, 2010.
- 006 *Sato Y, Tsurumi T*: Noise cancellation: viral fine tuning of the cellular environment for its own genome replication. PLoS Pathog, 6(12):e1001158, 2010.
- 007 *Sugimoto A, Kanda T, Yamashita Y, Murata T, Saito S, Kawashima D, Isomura H, Nishiyama Y, Tsurumi T*: Spatiotemporally Different DNA Repair Systems participating During Epstein-Barr Virus Genome Maturation. J Virol, 85(13):6127-35, 2011.
- 008 *Isomura H, Stinski MF, Murata T, Yamashita Y, Kanda T, Toyokuni S, Tsurumi T*: The human cytomegalovirus gene products essential for late viral gene expression assemble into pre-replication complexes before viral DNA replication. J Virol, 85(13):6629-44, 2011.
- 009 *Murata T, Noda C, Saito S, Kawashima D, Sugimoto A, Isomura H, Kanda T, Yokoyama KK, Tsurumi T*: Involvement of Jun dimerization protein 2 (JDP2) in the maintenance of Epstein-Barr virus latency. J Biol Chem, 286(25):22007-16, 2011.

[著書等]

- 010 *Isomura H*: DNA polymerase processivity factor of human cytomegalovirus may be a key molecule for molecular coupling of viral DNA replication to transcription. Edited by Jelena Kusic, DNA Replication/Book 2, ISBN:978-953-307-259-3, Croatia, InTech - Open Access Publisher, in press (invited)
- 011 磯村寛樹: ヒトサイトメガロウイルス. 松島綱治編, 分子予防環境医学, 東京:本の泉社, 2010:218-224.

分子病態学部

- 001 *Nagai R, Hashimoto R, Tanaka Y, Taguchi O, Sato M, Matsukage A, and Yamaguchi M*: Syntrophin-2 is required for eye development in Drosophila. Exp Cell Res, 316:272-285, 2010.
- 002 *Murzakami M, Ito H, Hagiwara K, Yoshida K, Sobue S, Ichibara M, Takagi A, Kojima T, Tanaka K, Tamiya-Koizumi K, Kyogashima M, Suzuki M, Banno M, Nozawa Y, Murate T*: ATRA inhibits ceramide kinase transcription in a human neuroblastoma cell line, SH-SY5Y cells: the role of COUP-TFI. J Neurochem, 112:511-520, 2010.
- 003 *Yusa A, Miyazaki K, Kimura N, Izawa M, Kannagi R*: Epigenetic Silencing of the sulfate transporter gene DTDST induces sialyl Lewis x expression and accelerates proliferation of colon cancer cells. Cancer Res, 70:4064-4073, 2010.

- 004 *Ebisuno Y, Katagiri K, Kataikai T, Ueda Y, Nemoto T, Inada H, Nabekura J, Okada T, Kannagi R, Tanaka T, Miyasaka M, Hogg N, Kinashi T*:Rap1 controls lymphocyte adhesion cascade and interstitial migration within lymph nodes in RAPL-dependent and -independent manners. *Blood*, 115:804-814, 2010.
- 005 *Fujii M, Yusa A, Yokoyama Y, Kokuryo T, Tsunoda N, Oda K, Nagino M, Ishimaru T, Shimoyama Y, Utsunomiya H, Iwata H, Itoh Y, Itoh J, Kannagi R, Kyogashima M*:Cytoplasmic expression of the JM403 antigen GlcA-GlcNH₃⁺ on heparan sulfate glycosaminoglycan in mammary carcinomas - A novel proliferative biomarker for breast cancers with high malignancy. *Glycoconjugate J*, 27:661-672, 2010.
- 006 *Igarashi Y, Kannagi R*:Glycosphingolipids as mediators of phenotypic changes associated with development and cancer progression. *J Biochem*, 147:3-8, 2010.
- 007 *Inoue T, Taguchi I, Abe S, Li G, Hu R, Nakajima T, Hara A, Aoyama T, Kannagi R, Kyogashima M, Node K*:Sulfatides are associated with neointimal thickening after vascular injury. *Atherosclerosis*, 211:291-296, 2010.
- 008 *Kannagi R, Sakuma K, Miyazaki K, Lim KT, Yusa A, Yin J, Iza wa M*:Altered expression of glycan genes in cancers induced by epigenetic silencing and tumor hypoxia: clues in the ongoing search for new tumor markers. *Cancer Sci*, 101:586-593, 2010.
- 009 *Ueda M, Shimada T, Goto Y, Tei K, Nakai S, Hisa Y, Kannagi R*:Expression of CC-chemokine receptor 7 (CCR7) and CXC-chemokine receptor 4 (CXCR4) in head and neck squamous cell carcinoma. *Auris Nasus Larynx*, 37:488-495, 2010.
- 010 *Kakizaki F, Aoki K, Miyoshi H, Carrasco N, Aoki M, Taketo MM*:CDX transcription factors positively regulate expression of Solute Carrier Family 5, Member 8 in the colonic epithelium. *Gastroenterology*, 138:627-635, 2010.
- 011 *Deguchi A, Miyoshi H, Kojima Y, Okawa K, Aoki M, Taketo MM*:LKB1 suppresses p21-activated kinase-1 (PAK1) by phosphorylation of Thr109 in the p21-binding domain. *J Biol Chem*, 285:18282-18290, 2010.
- 012 *Kitamura T, Fujishita T, Loetscher P, Revesz L, Hashida H, Kizaka-Kudoh S, Aoki M, Taketo MM*:Inactivation of chemokine (C-C motif) receptor 1 (CCR1) suppresses colon cancer liver metastasis by blocking accumulation of immature myeloid cells in a mouse model. *Proc Natl Acad Sci USA*, 107:13063-13068, 2010.
- 013 *Sonoshita M, Aoki M, Fuwa H, Aoki K, Hosogi H, Sakai Y, Hashida H, Takabayashi A, Sasaki M, Robine S, Itoh K, Yoshioka K, Kakizaki F, Kitamura T, Oshima M, and Taketo MM*:Suppression of colon cancer metastasis by Aes through inhibition of Notch signaling. *Cancer Cell*, 19:125-137, 2011.
- 014 *Aoki K, Kakizaki F, Sakashita H, Manabe T, Aoki M, Taketo MM*:Suppression of colonic polyposis by homeoprotein CDX2 through its non-transcriptional function that stabilizes p27Kip1. *Cancer Res*, 71:593-602, 2011.

発がん制御研究部

- 001 *Bargagna-Mohan P, Paranthan RR, Hamza A, Dimova N, Trucchi B, Srinivasan C, Elliott GI, Zhan CG, Lau DL, Zhu H, Kasabara K, Inagaki M, Cambi F, Mohan R*:Withaferin A targets intermediate filaments glial fibrillary acidic protein and vimentin in a model of retinal gliosis. *J Biol Chem*, 285:7657-7669, 2010.
- 002 *Ichijima Y, Yoshioka K, Yoshioka Y, Shinobe K, Fujimori H, Unno J, Takagi M, Goto H, Inagaki M, Mizutani S, Teraoka H*:DNA lesions induced by replication stress trigger mitotic aberration and tetraploidy development. *PLoS ONE*, 5:e8821, 2010.
- 003 *Kasabara K, Goto H, Enomoto M, Tomono Y, Kiyono T, Inagaki M*:14-3-3gamma mediates Cdc25A proteolysis to block premature mitotic entry after DNA damage. *EMBO J*, 29:2802-2812, 2010.
- 004 *Ibi M, Zou P, Inoko A, Shiromiz T, Matsuyama M, Hayashi Y, Enomoto M, Mori D, Hirotsune S, Kiyono T, Tsukita S, Goto H, Inagaki M*:Trichoplein controls microtubule anchoring at the centrosome by binding to Odf2 and ninein. *J Cell Sci*, 124:857-864, 2011.
- 005 *Helfand BT, Mendez MG, Murthy SN, Shumaker DK, Grin B, Mahammad S, Aebi U, Wedig T, Wu YI, Hahn KM, Inagaki M, Herrmann H, Goldman RD*:Vimentin organization modulates the formation of lamellipodia. *Mol Biol Cell*, 22:1274-1289, 2011.
- 006 *Matsuyama M, Goto H, Kasabara K, Kawakami Y, Nakanishi M, Kiyono T, Goshima N, Inagaki M*:Nuclear Chk1 prevents premature mitotic entry. *J Cell Sci*, 124:2113-2119, 2011.
- 007 佐方功幸, 稲垣昌樹, 岸本健雄(編):細胞周期フロンティア 総268ページ (2010.) 共立出版
- 008 後藤英仁, 稲垣昌樹:「G2/M 移行期におけるCDK1の活性化およびチェックポイント解除機構」細胞周期フロンティア 52-57(2010.) 共立出版
- 009 笠原広介, 稲垣昌樹:「抗リン酸化ペプチド抗体と細胞周期研究」細胞周期フロンティア 5-10(2010) 共立出版
- 010 稲垣昌樹, 佐方功幸:「細胞周期研究の現状と展望」細胞周期フロンティア 248-250(2010) 共立出版
- 011 衣斐美歩, 稲垣昌樹:「中間径フィラメント」生化学事典 朝倉書店 in press

第1部 事業会計関係

第1表 比較損益計算書

科目	22年度 (A)	21年度 (B)	増減(△) (A) - (B)	収益費用構成対比		前年度比 (A/B× 100)	部 門 別		内 訳	
				22年度 %	21年度 %		運 用 部	病 院		
								病 金 額		構 成 対 比 %
病院事業収益	16,184,062,188	14,899,594,521	1,284,467,667	100.0	100.0	108.6	368,177,469		14,671,436,345	
医療収益	14,062,271,332	13,422,350,973	639,920,359	86.9	90.1	104.8	270,451,000	12,823,130,332	87.4	968,690,000
入院収益	7,805,576,518	7,138,036,494	667,540,024	48.2	47.9	109.4	0	7,805,576,518	53.2	0
外来収益	4,130,728,855	4,205,726,461	△74,997,606	25.5	28.2	98.2	0	4,130,728,855	28.2	0
一般会計負担金	1,255,359,000	1,230,942,000	24,417,000	7.8	8.3	102.0	270,451,000	16,218,000	0.1	968,690,000
その他医療収益	870,606,959	847,646,018	22,960,941	5.4	5.7	102.7	0	870,606,959	5.9	0
医療外収益	1,926,914,046	1,477,243,548	449,670,498	11.9	9.9	130.4	97,726,469	1,699,258,803	11.6	129,928,774
受取利息配当金	323,110	571,376	△248,266	0.0	0.0	56.5	323,110	0	0.0	0
一般会計負担金	1,445,707,000	1,291,682,000	154,025,000	8.9	8.7	111.9	38,361,000	1,407,346,000	9.6	0
一般会計補助金	0	0	0	0.0	0.0	-	0	0	0.0	0
国庫補助金	21,195,000	17,970,000	3,225,000	0.1	0.1	117.9	0	21,195,000	0.1	0
その他医療外収益	459,688,936	167,020,172	292,668,764	2.9	1.1	275.2	59,042,359	270,717,803	1.8	129,928,774
特別収益	194,876,810	0	194,876,810	1.2	0.0	-	0	149,047,210	1.0	45,829,600
過年度損益修正益	194,876,810	0	194,876,810	1.2	0.0	-	0	149,047,210	1.0	45,829,600
病院事業費用	15,114,356,725	14,348,314,461	766,042,264	92.4	96.3	105.3	610,620,817	13,367,038,726	91.1	1,136,697,182
医療費用	14,512,371,828	13,767,121,694	745,250,134	89.4	92.4	105.4	589,316,943	12,850,974,426	87.6	1,072,080,459
給与	7,131,720,338	6,570,233,576	561,486,762	44.1	44.2	108.5	534,903,495	5,983,542,612	40.8	613,274,231
給料	2,696,761,094	2,481,616,804	215,144,290	16.7	16.7	108.7	212,460,376	2,247,884,484	15.3	236,416,234
手当	2,515,903,310	2,317,162,527	198,740,783	15.5	15.6	108.6	154,623,256	2,167,863,159	14.8	193,416,895
賃金	128,657,943	120,720,846	7,937,097	0.8	0.8	106.6	7,385,523	100,970,115	0.7	20,302,305
報酬	416,323,855	443,101,210	△26,777,355	2.6	3.0	94.0	25,115,343	325,716,009	2.2	65,492,503
法定福利費	1,060,515,586	884,463,752	176,051,834	6.6	5.9	119.9	77,701,008	888,333,164	6.1	94,481,414
退職給与	313,558,550	323,168,437	△9,609,887	1.9	2.2	97.0	57,617,989	252,775,681	1.7	3,164,880

科 目	22年度 (A)	21年度 (B)	増減(△) (A) - (B)	収益費用構成対比		前年度比 (A/B× 100)	部 門 別 内 訳		研 究 所	
				22年度 %	21年度 %		運 用 部 円	病 院		
								金 額		構成対比 %
材 料 費	4,576,232,333	4,537,446,616	38,785,717	28.3	30.4	100.9	0	4,576,232,333	0	
薬 品 費	3,571,631,027	3,563,160,966	8,470,061	22.1	23.9	100.2	0	3,571,631,027	0	
診療材料費	908,133,408	883,278,539	24,854,869	5.6	5.9	102.8	0	908,133,408	0	
給食材料費	79,818,938	79,790,111	28,827	0.5	0.5	100.0	0	79,818,938	0	
医療消耗備品費	16,648,960	11,217,000	5,431,960	0.1	0.1	148.4	0	16,648,960	0	
経 費	1,670,324,270	1,525,902,564	144,421,706	10.0	10.2	109.5	37,982,037	1,459,727,616	172,614,617	
旅費交通費	6,912,780	5,397,187	1,515,593	0.0	0.0	128.1	2,795,957	3,658,524	458,299	
修 繕 費	85,806,291	92,674,440	△6,868,149	0.5	0.6	92.6	11,878,037	72,101,659	1,826,595	
需 用 費	370,019,932	401,105,065	△31,085,133	2.3	2.7	92.3	3,264,860	286,472,259	80,282,813	
(消耗品費)	63,030,769	61,036,964					2,794,491	51,359,033	8,877,245	
(光熱水費)	278,006,764	305,858,014					0	212,627,313	65,379,451	
(燃料費)	20,903,420	21,403,800					0	15,987,518	4,915,902	
(食糧費)	75,276	118,122					0	75,276	0	
(印刷製本費)	8,003,703	12,688,165					470,369	6,423,119	1,110,215	
役 務 費	36,120,506	33,770,469	2,350,037	0.2	0.2	107.0	12,408,554	19,532,986	4,178,966	
(保険料)	14,603,612	14,975,050					5,771	14,429,927	167,914	
(通信運搬費)	21,516,894	18,795,419					12,402,783	5,103,059	4,011,052	
その他経費	1,171,464,761	992,955,403	178,509,358	7.0	6.7	118.0	7,634,629	1,077,962,188	85,867,944	
(厚生福利費)	1,788,453	3,249,013					133,506	1,529,294	125,653	
(報償費)	2,150,518	2,590,238					89,445	1,889,880	171,193	
(職員被服費)	7,065,850	5,553,990					257,510	6,740,900	67,440	
(消耗備品費)	10,064,991	10,124,700					322,083	8,307,059	1,435,849	
(賃借料)	144,089,336	63,689,722					2,462,715	141,230,727	395,894	
(委託費)	957,244,055	887,328,718					3,072,396	874,412,240	79,759,419	
(交際費)	0	8,682					0	0	0	

科 目	22年度 (A)	21年度 (B)	増減(△) (A) - (B)	収益費用構成対比		前年度比 (A/B× 100)	部 門 別 内 訳			
				22年度 %	21年度 %		運 用 部	病 院		研 究 所
								金 額	構 成 対 比	
(諸 会 費)	1,795,979	1,775,675	20,304				255,000	1,540,979		0
(雑 費)	47,265,579	18,634,665	28,630,914				1,041,974	42,311,109		3,912,496
減 価 償 却 費	744,192,617	802,613,043	△58,420,426	4.6	5.4	92.7	15,977,791	523,377,593		204,837,233
資 産 減 耗 費	39,308,189	6,616,711	32,691,478	0.2	0.0	594.1	336,750	38,596,839	0.3	374,600
研 究 研 修 費	350,594,081	324,309,184	26,284,897	2.2	2.2	108.1	116,870	269,497,433	1.8	80,979,778
医 業 外 費 用	471,640,417	581,192,767	△109,552,350	3.0	3.9	81.2	21,303,874	413,532,178	2.8	36,804,365
支 払 利 息 及 び 企 業 債 取 扱 諸 費	123,087,993	235,865,925	△112,777,932	0.8	1.6	52.2	0	123,087,993	0.8	0
繰 延 勘 定 償 却	32,027,711	33,640,318	△1,612,607	0.2	0.2	95.2	329,825	17,044,843	0.1	14,653,043
雑 損 失	316,524,713	311,686,524	4,838,189	2.0	2.1	101.6	20,974,049	273,399,342	1.9	22,151,322
経 常 利 益 (△ 損 失)	1,005,173,133	551,280,060	453,893,073	6.2	3.7	182.3	△242,443,348	1,257,882,531	8.6	△10,266,050
特 別 損 失	130,344,480	0	130,344,480	0.8	0.0	-	0	102,532,122	0.7	27,812,358
過 年 度 損 益 修 正 損	130,344,480	0	130,344,480	0.8	0.0	-	0	102,532,122	0.7	27,812,358
当 年 度 純 利 益 (△ 純 損 失)	1,069,705,463	551,280,060	518,425,403	6.6	3.7	194.0	△242,443,348	1,304,397,619	8.9	7,751,192

第2表 比較貸借対照表

科目	22年度末		21年度末		対前年度比較		門別内訳				
	金額(A)	構成比	金額(B)	構成比	(A)-(B)	(A/B×100)	運	用	部	院	所
	円	%	円	%	円	%	円	円	円	円	円
(資産の部)											
土地建物	328,607,824	1.7	328,607,824	1.7	0	100.0	315,888,471	9,552,511	3,166,842		
建物減価償却累計額	28,760,405,027	61.6	28,760,405,027	63.6	0	97.4	56,784,347	21,611,521,405	7,092,099,275		
構築物	16,799,800,610		16,485,681,164		314,119,446		41,985,201	13,249,430,808	3,508,384,601		
構築物減価償却累計額	459,724,884	0.9	459,265,804	0.9	459,080	96.5	96,192,320	344,338,299	19,194,265		
器械備品	293,446,990		286,888,269		6,558,721		66,736,970	220,235,253	6,474,767		
器械備品減価償却累計額	10,419,133,007	16.8	10,723,924,694	16.6	△304,791,687	102.4	131,721,547	8,611,861,898	1,675,549,562		
自動車	7,147,471,974		7,529,950,230		△382,478,256		96,185,173	6,021,992,017	1,029,294,784		
自動車減価償却累計額	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0		
放射線同位元素	0		0		0		0	0	0		
放射線同位元素減価償却累計額	4,916,000	0.0	28,766,000	0.0	△23,850,000	17.1	0	4,916,000	0		
建設仮勘定資産	4,670,200	0.5	27,327,700	0.0	△22,657,500	1.511.4	0	4,670,200	0		
その他の有形固定資産	90,682,280	0.1	6,000,000	0.0	84,682,280	-	0	90,682,280	0		
その他の有形固定資産減価償却累計額	15,080,000	0.1	14,280,000	0.1	800,000	99.0	15,080,000	0	0		
有形固定資産合計	15,833,159,248	81.6	15,991,401,986	82.9	△158,242,738	82.9	410,759,341	11,176,544,115	4,245,855,792		
電話加入権	172,700	0.0	172,700	0.0	0	100.0	172,700	0	0		
その他の無形固定資産	10,702,539	0.1	107,025,319	0.6	△96,322,780	10.0	0	10,702,539	0		
無形固定資産合計	10,875,239	0.1	107,198,019	0.6	△96,322,780	10.1	172,700	10,702,539	0		
固定資産合計	15,844,034,487	81.7	16,098,600,005	83.5	△254,565,518	98.4	410,932,041	11,187,246,654	4,245,855,792		
現金・預金	1,134,850,190	5.8	1,155,664,943	6.0	△20,814,753	98.2	1,134,850,190	0	0		
未収金	2,143,629,966	11.0	1,760,549,382	9.1	383,080,584	121.8	543,359	2,143,086,607	0		
貯蔵品	84,982,133	0.4	58,885,012	0.3	26,097,121	144.3	0	84,982,133	0		
その他の流動資産	0	0.0	0	0.0	0	-	0	0	0		
流動資産合計	3,363,462,289	17.2	2,975,099,337	15.4	388,362,952	113.1	1,135,393,549	2,228,068,740	0		
控除対象外消費税	204,818,435	1.1	216,813,273	1.1	△11,994,838	94.5	3,824,058	101,289,865	99,704,512		
開発費	0	0.0	0	0.0	0	-	0	0	0		
繰延勘定合計	204,818,435	1.1	216,813,273	1.1	△11,994,838	94.5	3,824,058	101,289,865	99,704,512		
資産合計	19,412,315,211	100.0	19,290,512,615	100.0	121,802,596	100.6	1,550,149,648	13,516,605,259	4,345,560,304		

科 目	2 2 年 度 末		2 1 年 度 末		対前年度比較		部 門 別 内 訳		
	金額 (A)	構成比	金額 (B)	構成比	(A) - (B)	(A/B×100)	運 用 部	病 院	研 究 所
	円	%	円	%	円	%	円	円	円
(負 債 の 部)									
固 定 負 債 合 計	0	0.0	0	0.0	0	-	0	0	0
未 払 金	1,246,962,351	△34.4	1,125,859,007	5.8	121,103,344	110.8	71,544,309	1,104,829,828	70,588,214
そ の 他 流 動 負 債	125,776,294	△3.5	100,378,086	0.5	25,398,208	125.3	429,888	124,514,606	831,800
流 動 負 債 合 計	1,372,738,645	△37.9	1,226,237,093	6.3	146,501,552	111.9	71,974,197	1,229,344,434	71,420,014
負 債 合 計	1,372,738,645	△37.9	1,226,237,093	6.3	146,501,552	111.9	71,974,197	1,229,344,434	71,420,014
(資 本 の 部)									
自 己 資 本 金	1,246,962,351	△34.4	24,284,359,565	125.9	△23,037,397,214	5.1	1,820,334,748	20,568,470,963	1,895,553,854
借 入 資 本 金	5,669,011,839	△156.4	6,066,369,541	31.4	△397,357,702	93.4	0	5,669,011,839	0
企 業 債	5,669,011,839	△156.4	6,066,369,541	31.4	△397,357,702	93.4	0	5,669,011,839	0
資 本 金 合 計	6,915,974,190	△190.8	30,350,729,106	157.3	△23,434,754,916	22.8	1,820,334,748	26,237,482,802	1,895,553,854
資 本 剰 余 金	8,294,338,092	△228.9	7,841,384,809	40.7	452,953,283	105.8	16,955,720	5,731,838,203	2,545,544,169
受 贈 財 産 評 価 額	823,527,181	△22.7	804,122,008	4.2	19,405,173	102.4	16,955,720	314,583,292	491,988,169
国 庫 補 助 金	958,881,500	△26.5	958,881,500	5.0	0	100.0	0	909,956,500	48,925,000
他 会 計 負 担 金	6,346,060,680	△175.1	5,915,764,250	30.7	430,296,430	107.3	0	4,341,429,680	2,004,631,000
そ の 他 資 本 剰 余 金	165,868,731	△4.6	162,617,051	0.8	3,251,680	102.0	0	165,868,731	0
剰 余 金 合 計	8,294,338,092	△228.9	7,841,384,809	40.7	452,953,283	105.8	16,955,720	5,731,838,203	2,545,544,169
当 年 度 未 処 理 欠 損 金	△8,708,132,930	240.2	△9,777,838,393	△50.6	1,069,705,463	89.1	△10,391,657,782	2,038,081,554	△354,556,702
前 年 度 繰 越 欠 損 金	△9,777,838,393	269.7	△10,329,118,453	△53.5	551,280,060	94.7	△10,149,214,434	733,683,935	△362,307,894
当 年 度 純 利 益 (△ 純 損 失)	1,069,705,463	△29.5	551,280,060	2.9	518,425,403	194.0	△242,443,348	1,304,397,619	7,751,192
欠 損 金 合 計	△8,708,132,930	240.2	△9,777,838,393	△50.6	1,069,705,463	89.1	△10,391,657,782	2,038,081,554	△354,556,702
病 院 間 調 整 勘 定	△11,500,000,000	317.2	△10,350,000,000	△53.7	△1,150,000,000	111.1	0	△11,500,000,000	0
資 本 合 計	△4,997,820,648	137.7	18,064,275,522	93.7	△23,062,096,170	△27.7	△8,554,367,314	22,507,402,559	4,086,541,321
負 債 資 本 合 計	△3,625,082,003	99.8	19,290,512,615	100.0	△22,915,594,618	△18.8	△8,482,393,117	23,736,746,993	4,157,961,335

第3表 予算の執行状況(病院事業庁分を除く)

1収入状況調

(単位:円)

科 目	予算配分額	決算額	差 引	科 目	予算配分額	決算額	差 引
病院事業収益	13,556,558,000	13,062,001,349	494,556,651	医療業外収益	180,713,000	231,120,533	△50,407,533
入院収益	13,375,845,000	12,830,880,816	544,964,184	受取利息配当金	0	0	0
一人1日平均単価	8,129,090,000	7,807,284,997	321,805,003	預金利息	0	0	0
延患者数(人)	160,600	154,352	6,248	その他医療業外収益	180,713,000	231,120,533	△50,407,533
1日平均患者数(人)	440.0	422.9	17.1	不用品売却収益	10,000	105,165	△95,165
利用率(%)	88.0	84.6	3.4	その他医療業外収益	180,703,000	231,015,368	△50,312,368
外来収益	4,316,176,000	4,135,716,712	180,459,288	資本的収入	15,000,000	3,414,264	11,585,736
一人1日平均単価	28,194	27,614	580	雑収入	15,000,000	3,414,264	11,585,736
延患者数(人)	153,090	149,769	3,321	雑収入	15,000,000	3,414,264	11,585,736
1日平均患者数(人)	630.0	616.3	13.7	合 計	13,571,558,000	13,065,415,613	506,142,387
その他医療業収益	930,579,000	887,879,107	42,699,893				
室料差額収益	352,590,000	327,269,000	25,321,000				
公衆衛生活動収益	1,542,000	2,032,227	△490,227				
医療相談収益	1,000	0	1,000				
受託検査施設利用収益	6,070,000	8,313,660	△2,243,660				
その他医療業収益	570,376,000	550,264,220	20,111,780				

2 支出状況調

(単位:円)

科 目	予 算 配 分 額	決 算 額	差 引	科 目	予 算 配 分 額	決 算 額	差 引
病 院 業 務 費 用	8,484,353,000	8,240,454,200	243,898,800	減 価 償 却 費	812,005,000	734,516,850	77,488,150
業 務 費	8,484,351,000	8,233,738,190	250,612,810	建 物 減 価 償 却 費	529,679,000	462,953,642	66,725,358
与 当 等	650,824,000	633,669,542	17,154,458	構 築 物 減 価 償 却 費	6,828,000	6,827,255	745
金 酬	32,449,000	32,449,000	0	器 械 備 品 減 価 償 却 費	275,498,000	264,735,953	10,762,047
福 利 費	130,423,000	128,063,798	2,359,202	車 両 減 価 償 却 費	0	0	0
定 福 料 費	423,663,000	413,356,713	10,306,287	放 射 性 同 位 元 素 減 価 償 却 費	0	0	0
材 料 費	64,289,000	59,800,031	4,488,969	資 産 減 耗 費	23,784,000	11,631,939	12,152,061
品 費	4,804,634,000	4,802,090,412	2,543,588	た な 卸 資 産 減 耗 費	1,000	0	1,000
材 料 費	3,747,488,000	3,747,310,022	177,978	固 定 資 産 除 却 費	23,783,000	11,631,939	12,151,061
材 料 費	953,889,000	953,540,060	348,940	研 究 研 究 材 料 費	472,628,000	363,212,418	109,415,582
材 料 費	84,478,000	83,767,973	710,027	研 究 材 料 費	80,905,000	63,272,471	17,632,529
備 品 費	18,779,000	17,472,357	1,306,643	謝 金	50,335,000	30,486,000	19,849,000
費	1,720,476,000	1,688,617,029	31,858,971	函 書 費	25,547,000	21,482,749	4,064,251
費	1,476,000	85,753	1,390,247	旅 費	56,421,000	48,288,315	8,132,685
利 費	4,325,000	1,949,800	2,375,200	研 究 外 費	259,420,000	199,682,883	59,737,117
費	7,106,000	6,645,910	460,090	医 業 損 失	2,000	6,716,010	△6,714,010
費	10,807,000	7,419,139	3,387,861	雑 費	2,000	6,716,010	△6,714,010
費	64,281,000	64,274,813	6,187	不 用 品 売 却 原 価 失	1,000	0	1,000
費	12,367,000	10,374,265	1,992,735	そ の 他 雑 損 失	1,000	6,716,010	△6,715,010
費	295,569,000	291,907,070	3,661,930	資 本 的 支 出	190,383,000	189,941,828	441,172
費	22,842,000	21,948,591	893,409	建 設 改 良 費	41,212,000	41,000,000	212,000
費	209,000	79,037	129,963	建 設 費	41,212,000	41,000,000	212,000
費	13,123,000	8,038,429	5,084,571	改 良 費	0	0	0
費	90,969,000	90,096,579	872,421	資 産 購 入 費	149,171,000	148,941,828	229,172
料	0	0	0	医 療 器 械 購 入 費	149,171,000	148,941,828	229,172
料	151,851,000	149,797,321	2,053,679	備 品 購 入 費	0	0	0
費	11,858,000	11,106,056	751,944	合 計	8,675,136,000	8,430,396,028	244,339,972
費	1,011,933,000	1,005,097,448	6,835,552				
費	1,738,000	1,679,000	59,000	た な 卸 資 産 購 入 限 度 額	4,811,000,000	4,746,233,633	64,766,367
費	20,022,000	18,117,818	1,904,182				

第4表 固定資産(有形固定資産)

(単位:円)

資産の種類	平成22年度 年度当初現在高	年度中の増減		平成22年度 年度末現在高	減価 累計額	価値 増加額	却 当年度減少額	累計 額	平成22年度 年度末 却 済 額	備考
		増	減							
土地	328,607,824	0	0	328,607,824	-	-	-	-	328,607,824	
建物	28,760,405,027	0	0	28,760,405,027	16,485,681,164	462,953,642	148,834,196	16,799,800,610	11,960,604,417	
鉄筋コンクリート造	14,808,626,021	0	0	14,808,626,021	5,064,970,398	319,787,860	102,808,067	5,281,950,191	9,526,675,830	
コンクリートブロック造	106,122	0	0	106,122	89,846	2,578	829	91,595	14,527	
鉄骨造	286,427,597	0	0	286,427,597	99,399,175	6,875,407	2,210,363	104,064,219	182,363,378	
付帯設備	13,665,245,287	0	0	13,665,245,287	11,321,221,745	136,287,797	43,814,937	11,413,694,605	2,251,550,682	
構築物	459,080	459,080	0	459,724,884	286,888,269	6,827,255	268,534	293,446,990	166,277,894	
器械	10,723,924,694	480,109,013	784,900,700	10,419,133,007	7,529,950,230	264,779,442	647,257,698	7,147,471,974	3,271,661,033	
医療用器械器具	10,529,525,122	478,659,013	782,165,700	10,226,018,435	7,359,390,139	264,779,442	644,659,448	6,979,510,133	3,246,508,302	
一般備品	64,622,572	0	0	64,622,572	60,933,844	0	0	60,933,844	3,688,728	
炊事用備品	129,777,000	1,450,000	2,735,000	128,492,000	109,626,247	0	2,598,250	107,027,997	21,464,003	
車両	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
放射線同位元素	28,766,000	550,000	24,400,000	4,916,000	27,327,700	522,500	23,180,000	4,670,200	245,800	
その他の有形固定資産	14,280,000	800,000	0	15,080,000	0	0	0	0	15,080,000	
建設仮勘定	6,000,000	84,682,280	0	90,682,280	-	-	-	-	90,682,280	
合計	40,321,249,349	566,600,373	809,300,700	40,078,549,022	24,329,847,363	735,082,839	819,540,428	24,245,389,774	15,833,159,248	
病棟	5,899,978,088	0	0	5,899,978,088	2,257,551,565	138,059,487	0	2,395,611,052	3,504,367,036	
特放棟・診療棟	2,484,698,192	0	0	2,484,698,192	952,633,276	58,141,937	0	1,010,775,213	1,473,922,979	
国際医学交流センター・外来棟	2,377,351,003	0	0	2,377,351,003	819,991,675	55,505,514	0	875,497,189	1,501,853,814	
立体駐車場	949,887,367	0	0	949,887,367	266,158,075	19,634,612	0	285,792,687	664,094,680	
研究所棟本館	1,833,598,327	0	0	1,833,598,327	176,098,720	22,012,340	0	198,111,060	1,635,487,267	
生物工学総合実験棟	381,566,830	0	0	381,566,830	133,929,942	6,868,202	0	140,798,144	240,768,686	
研究所棟北館	570,518,075	0	0	570,518,075	279,156,507	13,115,116	0	292,271,623	278,246,452	
その他の	597,561,858	0	0	597,561,858	278,939,659	13,328,637	105,019,259	187,249,037	410,312,821	
付帯設備	13,665,245,287	0	0	13,665,245,287	11,321,221,745	136,287,797	43,814,937	11,413,694,605	2,251,550,682	
合計	28,760,405,027	0	0	28,760,405,027	16,485,681,164	462,953,642	148,834,196	16,799,800,610	11,960,604,417	

第5表 固定資産(無形固定資産) (単位:円)

資産の種類	年度当現在高	22年度の増減		当年度減価償却費	年度現在高	備考
		増加額	減少額			
電話加入権	172,700	0	0	0	172,700	
その他無形固定資産	107,025,319	0	96,322,780	0	10,702,539	
合計	107,198,019	0	0	0	10,875,239	

第6表 企業債 (単位:円)

種類	発行年月日	発行総額	償還		未償還残高	発行価額	利率	償還終期	備考
			当年度償還高	償還高累計					
資金運用部資金	平成 1.3.27	260,000,000	11,875,562	141,419,670	118,580,330	260,000,000	年 4.85 %	平成 31.3.25	がんセンター施設整備費
〃	平成 5.5.7	180,000,000	6,857,263	69,570,740	110,429,260	180,000,000	4.40 %	平成 35.3.25	がんセンター施設整備費
〃	平成 6.4.20	740,000,000	27,074,877	259,895,751	480,104,249	740,000,000	4.30 %	平成 36.3.25	がんセンター施設整備費
財政融資資金	平成 23.3.25	40,000,000	0	0	40,000,000	40,000,000	1.90 %	平成 53.3.1	がんセンター施設整備費
縁故	平成 18.4.14	440,000,000	110,000,000	440,000,000	0	440,000,000	1.68 %	平成 23.3.31	がんセンター中央病院院備品整備費
〃	平成 19.3.30	150,000,000	37,500,000	112,500,000	37,500,000	150,000,000	1.44 %	平成 24.3.31	がんセンター中央病院院備品整備費
〃	平成 20.3.31	354,000,000	88,500,000	177,000,000	177,000,000	354,000,000	1.30 %	平成 25.3.31	がんセンター中央病院院備品整備費
〃	平成 20.3.31	40,400,000	8,358,000	23,684,000	16,716,000	40,400,000	1.35 %	平成 25.3.31	がんセンター整備事業(借換債)
〃	平成 20.3.31	131,000,000	22,534,000	63,398,000	67,602,000	131,000,000	1.38 %	平成 26.3.31	がんセンター整備事業(借換債)
〃	平成 21.3.25	393,700,000	35,790,000	71,580,000	322,120,000	393,700,000	1.84 %	平成 32.3.25	がんセンター施設整備費(借換債)
〃	平成 21.3.25	991,000,000	82,582,000	165,164,000	825,836,000	991,000,000	1.88 %	平成 33.3.25	がんセンター施設整備費(借換債)
〃	平成 21.3.30	305,000,000	76,250,000	76,250,000	228,750,000	305,000,000	1.58 %	平成 26.3.28	がんセンター中央病院院備品整備費
〃	平成 22.3.25	390,000,000	0	0	390,000,000	390,000,000	1.05 %	平成 27.3.25	がんセンター中央病院院備品整備費
〃	平成 22.3.25	2,784,410,000	232,036,000	232,036,000	2,552,374,000	2,784,410,000	1.89 %	平成 34.3.25	がんセンター施設整備費(借換債)
〃	平成 23.3.25	42,000,000	0	0	42,000,000	42,000,000	0.97 %	平成 28.3.25	がんセンター中央病院院施設整備費
〃	平成 23.3.25	260,000,000	0	0	260,000,000	260,000,000	0.97 %	平成 28.3.25	がんセンター中央病院院備品整備費
合計		7,501,510,000	739,357,702	1,832,498,161	5,669,011,839	7,501,510,000			

第7表 医業収益(100)対要素別比率 (単位:%)

区分	給分	給与	費	薬品等医療材料費	給食材料費	減価償却費	その他経費	医業費用
医業収益対要素別比率	17年度	50.0		29.0	0.9	10.7	15.2	105.8
	18年度	49.4		30.8	0.7	9.3	15.4	105.6
	19年度	50.3		32.3	0.7	8.6	14.9	106.8
	20年度	50.2		33.2	0.6	6.3	15.2	105.5
	21年度	48.9		33.2	0.6	6.0	13.8	102.6
	22年度	50.7		32.0	0.6	5.3	14.7	103.2
病院	17年度	42.6		33.1	1.0	9.6	14.8	101.1
	18年度	42.8		34.8	0.8	7.9	15.0	101.3
	19年度	43.7		36.2	0.8	7.3	14.4	102.4
	20年度	44.5		36.3	0.7	5.0	18.5	105.0
	21年度	42.3		36.0	0.6	4.6	18.4	101.8
	22年度	49.7		34.4	0.6	4.1	13.8	102.6

第2部 病院 業務 関係

第1表 外来患者数(初診患者数)

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		同						左			内			記		
	数	総	数	総	数	総	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
初診患者数	6,253		6,193		5,557		485	391	489	491	465	468	509	456	490	435	410	468			
外来患者数	141,298		154,001		149,769		13,179	11,441	13,355	12,781	12,139	12,418	12,345	12,695	12,469	11,606	11,934	13,407			
1日平均患者数	526.3		636.4		616.3		627.6	635.6	607.0	608.6	551.8	620.9	617.3	634.8	656.3	610.8	628.1	609.4			
平均通院患者数	22.6		24.9		27.0		27.2	29.3	27.3	26.0	26.1	26.5	24.3	27.8	25.4	26.7	29.1	28.6			

第2表 外来患者数(診療別患者延数)

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		同						左						内			記		
	数	総	数	総	数	総	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
総	214,797		211,939		207,914		18,310	15,869	18,664	17,703	16,993	17,224	17,066	17,695	17,108	16,204	16,484	18,594						
消化器内科	22,225		21,500		20,385		1,763	1,541	1,946	1,722	1,722	1,691	1,567	1,941	1,688	1,479	1,617	1,708						
呼吸器内科	8,863		8,751		10,382		878	758	932	877	869	871	806	841	848	865	840	997						
循環器内科	3,255		3,137		3,281		313	238	268	279	213	304	268	258	289	250	289	312						
血液・細胞療法科	7,143		7,367		6,274		584	525	585	552	517	530	518	541	412	487	425	598						
薬物療法科	7,988		10,380		11,342		926	842	958	953	933	912	886	970	977	942	928	1,115						
頭部外科	13,785		14,069		13,590		1,278	1,087	1,157	1,218	1,192	1,043	1,100	1,175	1,129	978	1,092	1,141						
形成外科	870		1,224		1,618		134	140	137	132	139	130	133	139	129	125	128	152						
胸部外科	9,007		9,152		9,573		849	731	814	801	755	812	802	757	830	790	747	885						
乳腺科	25,140		23,621		22,650		2,057	1,708	1,955	1,971	1,898	1,996	1,948	1,843	1,816	1,763	1,726	1,969						
消化器外科	16,258		15,594		15,205		1,288	1,096	1,433	1,131	1,270	1,352	1,258	1,279	1,322	1,223	1,185	1,368						
整形外科	3,159		3,299		3,519		285	263	311	293	301	260	303	277	343	264	284	335						
脳神経外科	932		683		737		80	61	60	66	55	66	55	56	58	52	68	60						
泌尿器科	9,105		8,887		9,464		796	723	773	818	707	784	798	761	796	827	837	844						
婦人科	12,374		11,164		10,009		847	758	908	884	829	815	927	841	853	743	762	842						
皮膚科	647		479		475		45	34	48	35	39	44	44	27	45	28	33	53						
眼科	150		127		124		13	7	18	12	9	13	10	8	9	4	9	12						
放射線診断科	3,895		3,764		3,398		320	292	259	350	256	283	267	272	293	292	247	267						
放射線治療科	16,666		15,253		15,513		1,399	1,263	1,552	1,374	1,099	1,098	1,298	1,327	1,217	1,141	1,339	1,406						
放射線科	43,609		43,650		40,354		3,584	3,062	3,621	3,418	3,356	3,370	3,315	3,408	3,249	3,196	3,171	3,604						
内視鏡科	6,975		6,956		6,868		605	500	652	578	574	589	501	698	548	496	497	630						
歯科	2,736		2,870		3,146		265	239	276	239	260	260	262	276	256	258	260	295						
麻酔科	15		12		7		1	1	1	0	0	1	0	0	1	1	0	1						

第3表 入院患者数(入院・退院患者数)

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内 訳											
	総数	率	総数	率	総数	率	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	9,936		10,175		10,020		1,203	1,135	1,213	1,215	1,267	1,222	1,178	1,178	1,140	1,114	1,142	1,214
繰越患者数	375		375		396		386	357	402	429	382	424	416	380	410	231	394	386
新入院患者数	9,561		9,800		9,624		817	778	811	786	885	798	762	798	730	883	748	828
退院患者数	9,511		9,789		9,594		846	733	784	833	843	806	798	768	909	720	756	798
死亡	429		442		455		50	37	31	40	53	47	36	29	30	44	27	31
その他	9,082		9,347		9,139		796	696	753	793	790	759	762	739	879	676	729	767
月末患者数	375		386		416		357	402	429	382	424	416	380	410	231	394	386	416
患者延総数	152,710		154,884		154,352		12,632	12,763	12,440	13,282	13,304	13,055	13,280	12,686	12,806	12,714	12,230	13,160
1日平均患者数	418.4		424.0		423.0		421	412	415	428	429	435	428	423	413	410	437	425
病床利用率	89.2		89.7		89.4		89.0	87.0	87.7	90.6	90.7	92.0	90.6	89.4	87.3	86.7	92.3	89.7

第4表 外来患者数(性・年齢階級・住所別)

区分	総数	%	男										女									
			総数	%	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70~	総数	%	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70~
総数	5,557	100	2,398	100	1	16	42	130	196	424	883	706	3,159	100	1	11	132	375	628	661	776	575
%	100		100		0.0	0.7	1.8	5.4	8.2	17.7	36.8	29.4	100		0.0	0.3	4.2	11.9	19.9	20.9	24.6	18.2
総数	4,227	76.1	1,764	73.6	0	13	25	99	149	301	648	529	2,463	78.0	1	7	105	304	497	491	597	461
愛知県	2,255	40.6	889	37.1	0	7	16	50	74	149	324	269	1,366	43.2	1	5	70	169	276	267	295	283
その他	1,972	35.5	875	36.5	0	6	9	75	75	152	324	260	1,097	34.7	0	2	35	135	221	224	302	178
岐阜県	488	8.8	215	9.0	0	1	2	19	19	49	70	62	273	8.6	0	1	9	30	50	70	70	43
三重県	561	10.1	276	11.5	1	1	4	9	15	47	110	89	285	9.0	0	2	12	28	48	74	74	47
静岡県	34	0.6	16	0.7	0	0	3	1	0	3	5	4	18	0.6	0	0	2	0	2	5	6	3
福井県	11	0.2	6	0.3	0	0	0	0	1	1	2	2	5	0.2	0	0	0	1	0	1	3	0
長野県	59	1.1	39	1.6	0	1	2	2	5	7	16	6	20	0.6	0	1	1	0	4	5	6	3
石川県	3	0.1	1	0.0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0.1	0	0	0	0	0	1	1	0
滋賀県	21	0.4	11	0.5	0	0	0	1	0	1	7	2	10	0.3	0	0	0	1	0	3	3	3
その他	153	2.8	70	2.9	0	0	5	6	7	15	25	12	83	2.6	0	0	3	11	27	11	16	15

(平成22年度)

第5表 外来(初診)患者数(性・年齢階級・住所別)

(昭和39年12月～平成23年3月)

区	分	総数	%	男										女									
				0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70~	総数	%	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70~		
総	数	402,625	100.0	150,945	100.0	1,468	2,802	10,089	22,373	30,186	33,365	32,268	18,394	251,680	100.0	1,360	3,714	22,533	55,559	69,184	52,078	32,290	14,962
	%	100	.	100	.	1.0	1.9	6.7	14.8	20.0	22.1	12.2	100	.	0.5	1.5	9.0	22.1	27.5	20.7	12.8	5.9	
愛知県	数	326,182	81.0	119,886	79.4	1,193	2,317	8,531	18,950	24,626	25,905	13,937	206,296	82.0	1,147	3,165	19,221	47,017	57,143	41,299	25,389	11,915	
	%	176,212	43.8	64,984	43.1	704	1,370	4,898	10,279	13,170	13,408	8,163	111,228	44.2	641	1,917	11,289	25,068	29,725	21,156	13,970	7,462	
その他	数	149,970	37.2	54,902	36.4	489	947	3,633	8,671	11,456	12,497	5,774	95,068	37.8	506	1,248	7,932	21,949	27,418	20,143	11,419	4,453	
岐阜県	数	36,750	9.1	14,622	9.7	136	219	643	1,579	2,623	3,549	2,154	22,128	8.8	87	255	1,525	4,137	5,975	5,325	3,387	1,437	
三重県	数	25,587	6.4	10,303	6.8	71	163	461	1,132	1,863	2,468	1,484	15,284	6.1	73	184	984	2,895	4,313	3,689	2,207	939	
静岡県	数	3,947	1.0	1,790	1.2	25	35	90	208	346	430	222	2,157	0.9	12	31	200	401	539	485	342	147	
福井県	数	661	0.2	299	0.2	3	2	15	26	64	70	42	362	0.1	2	7	24	49	90	100	58	32	
長野県	数	2,037	0.5	957	0.6	7	17	37	71	166	238	153	1,080	0.4	6	15	51	156	252	295	208	97	
石川県	数	242	0.1	119	0.1	0	0	4	13	18	36	21	123	0.0	0	2	9	18	26	28	23	17	
滋賀県	数	1,089	0.3	444	0.3	0	5	28	59	70	111	56	645	0.3	5	11	40	115	172	152	96	54	
その他	数	6,130	1.5	2,525	1.7	33	44	280	335	410	558	319	3,605	1.4	28	44	479	771	674	705	580	324	

第6表 新入院患者数(性・年齢階級・住所別)

(平成22年度)

区	分	総数	%	男										女									
				0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70~	総数	%	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70~		
総	数	9,624	100	5,421	100	0	14	78	192	319	892	2,256	1,670	4,203	100	0	8	101	329	537	858	1,337	1,033
	%	100	.	100	.	0.0	0.3	1.4	3.5	5.9	16.5	30.8	100	.	0.0	0.2	2.4	7.8	12.8	20.4	31.8	24.6	24.6
愛知県	数	7,247	75.3	4,041	74.5	0	11	46	146	225	633	1,713	1,267	3,206	76.3	0	4	78	255	405	633	991	840
	%	3,479	36.1	1,922	35.5	0	3	25	51	115	256	800	672	1,557	37.0	0	1	24	100	212	296	481	443
その他	数	3,768	39.2	2,119	39.1	0	8	21	95	110	377	913	595	1,649	39.2	0	3	54	155	193	337	510	397
岐阜県	数	949	9.9	531	9.8	0	1	5	17	36	115	192	165	418	9.9	0	2	37	65	64	167	83	83
三重県	数	1,000	10.4	593	10.9	0	2	6	12	32	102	246	193	407	9.7	0	1	8	24	49	131	116	78
静岡県	数	55	0.6	29	0.5	0	0	2	1	0	5	15	6	26	0.6	0	6	1	0	6	10	3	3
福井県	数	14	0.1	9	0.2	0	0	0	0	6	0	2	1	5	0.1	0	0	0	0	0	0	5	0
長野県	数	130	1.4	80	1.5	0	0	1	8	3	12	38	18	50	1.2	0	3	10	3	7	20	7	7
石川県	数	14	0.1	13	0.2	0	0	11	0	0	0	2	0	1	0.0	0	0	0	0	0	0	1	0
滋賀県	数	39	0.4	22	0.4	0	0	0	7	1	5	4	17	17	0.4	0	0	0	0	0	3	7	7
その他	数	176	1.8	103	1.9	0	0	7	1	16	20	43	16	73	1.7	0	0	7	2	15	14	20	15

第7表 新入院患者数(性・年齢階級・住所別)

(昭和39年12月～平成23年3月)

区	分	総数	%	男							女											
				総数	%	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70~	総数	%	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
総	数	177,938	100.0	91,314	169	564	1,837	3,983	8,844	22,018	32,174	21,725	86,624	100.0	130	566	2,398	7,809	16,207	23,957	22,247	13,310
%		100	.	100	0.2	0.6	2.0	4.4	9.7	24.1	35.2	23.8	100	.	0.2	0.7	2.8	9.0	18.7	27.7	25.7	15.4
愛知県	総数	136,664	76.8	69,472	111	412	1,310	3,007	6,751	16,665	24,408	16,808	67,192	77.6	95	396	1,841	6,081	12,728	18,166	17,267	10,618
	%	69,713	39.2	35,025	53	153	586	1,360	3,303	7,968	12,111	9,491	34,688	40.0	41	162	901	2,887	6,502	8,812	8,974	6,409
岐阜県	その他	66,951	37.6	34,447	58	259	724	1,647	3,448	8,697	12,297	7,317	32,504	37.5	54	234	940	3,194	6,226	9,354	8,293	4,209
三重県	県	18,818	10.6	9,588	22	70	151	376	940	2,392	3,466	2,171	9,230	10.7	20	96	198	830	1,537	2,843	2,366	1,340
静岡県	県	14,357	8.1	7,879	12	49	126	290	631	1,970	2,897	1,904	6,478	7.5	7	20	146	456	1,333	2,014	1,739	763
福井県	県	1,693	1.0	928	11	12	45	110	128	218	298	106	765	0.9	5	24	53	106	136	224	147	70
長野県	県	2,442	0.1	1,117	0	1	5	4	25	29	38	15	125	0.1	0	0	4	6	17	53	32	13
石川県	県	2,133	1.2	1,223	4	6	42	61	115	260	388	347	910	1.1	2	24	51	69	121	200	258	185
滋賀県	県	111	0.1	50	0	0	12	0	5	5	19	9	61	0.1	0	1	1	6	19	13	14	7
その他	県	512	0.3	257	0	2	8	17	21	68	81	60	255	0.3	0	1	4	27	64	69	54	36
その他	他	3,408	1.9	1,800	9	12	138	118	228	411	579	305	1,608	1.9	1	4	100	228	252	375	370	278

第8表 放射線照射回数(診断—取扱件数)

区	分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内												訳
		総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月							
透視	総数	4,894	20.1	4,895	20.2	4,925	20.3	443	437	423	444	406	429	415	389	378	412			
放射線	器	1,584	6.5	1,473	6.1	1,521	6.3	121	116	146	115	142	135	127	139	121	114			
直接撮影	その他	3,310	13.6	3,422	14.1	3,404	14.0	322	321	277	329	264	294	288	250	257	298			
総	数	45,778	188.4	46,299	191.3	45,001	185.2	3,867	3,787	3,727	3,814	3,847	3,801	3,671	3,685	3,469	3,913			
呼吸器	器	27,010	111.2	28,683	118.5	24,582	101.2	2,158	2,055	1,967	2,192	2,157	2,051	1,986	2,012	1,837	2,087			
消化器	器	1,584	6.5	1,473	6.1	1,521	6.3	121	116	146	115	142	135	127	139	121	114			
泌尿・生殖器	部位	99	0.4	65	0.3	48	0.2	5	4	5	4	5	5	5	0	5	1			
心臓・血管	別	1,404	5.8	1,388	5.7	1,465	6.0	150	128	119	154	105	135	105	116	103	123			
骨	骨	3,908	16.1	3,638	15.0	3,271	13.5	210	265	287	241	264	277	271	288	262	354			
その他	その他	11,773	48.4	11,052	45.7	14,114	58.1	1,223	1,219	1,203	1,108	1,174	1,198	1,177	1,130	1,141	1,234			
単	純	39,820	163.9	40,378	166.9	39,035	160.6	3,337	3,280	3,192	3,284	3,344	3,278	3,182	3,214	3,004	3,417			
造	影	5,015	20.6	4,979	20.6	4,988	20.5	449	443	430	448	414	434	420	390	384	413			
特殊	殊	943	3.9	942	3.9	978	4.0	81	64	105	82	89	89	69	81	81	83			

第9表 放射線照射回数(診断一撮影枚数)

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	左											
							同											
総数	103,174	424.6	101,336	418.7	100,980	415.6	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
呼吸器	50,906	209.5	56,378	233.0	47,291	194.6	8,652	7,379	9,081	8,394	8,698	8,475	8,888	8,792	8,151	8,325	7,819	8,326
消化器	18,756	77.2	17,506	72.3	19,182	78.9	1,569	1,260	1,761	1,391	1,943	1,441	1,814	1,882	1,548	1,790	1,467	1,316
泌尿・性器	602	2.5	394	1.6	290	1.2	30	24	30	24	30	25	31	30	30	0	30	6
心臓・血管	4,662	19.2	4,486	18.5	4,466	18.4	484	295	375	389	404	471	390	388	308	300	345	317
骨	6,729	27.7	6,196	25.6	5,613	23.1	361	431	515	459	485	435	441	472	463	492	441	618
その他	21,519	88.6	16,376	67.7	24,138	99.3	2,023	1,750	2,152	2,161	1,985	1,903	2,071	2,020	2,042	1,945	1,974	2,112
単方	74,962	308.5	74,699	308.7	73,078	300.7	6,285	5,544	6,569	6,158	5,997	6,235	6,325	6,170	5,889	5,922	5,641	6,343
造影	27,701	114.0	26,111	107.9	27,328	112.5	2,323	1,794	2,458	2,204	2,642	2,193	2,511	2,568	2,223	2,346	2,127	1,939
特殊	511	2.1	526	2.2	574	2.4	44	41	54	32	59	47	52	54	39	57	51	44

第10表 超音波断層撮影件数

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	左											
							同											
総数	5,933	24.4	5,009	20.7	3,595	14.8	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
甲状腺	806	3.3	948	3.9	588	2.4	47	63	37	42	52	56	23	42	61	66	45	54
乳腺	1,375	5.7	836	3.5	775	3.2	71	36	72	78	46	58	96	60	73	53	70	62
腹部	1,674	6.9	1,721	7.1	1,681	6.9	136	111	188	138	131	141	126	129	131	125	161	164
その他	2,078	8.6	1,504	6.2	551	2.3	83	38	80	58	65	44	25	30	23	50	16	39

第11表 アイソトープ検査件数

区	分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内													
		左		右		左		同		内											
		総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
総	数	1,329	5.5	1,234	5.1	1,157	4.8	100	113	104	102	111	92	82	83	91	92	101	86		
	脳	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	唾	56	0.2	34	0.1	11	0.0	3	1	4	1	0	0	0	0	1	1	0	0		
	甲	6	0.0	8	0.0	2	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0		
	肺	4	0.0	6	0.0	8	0.0	0	0	0	0	0	2	2	2	0	2	0	0		
	腎	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	副	14	0.1	26	0.1	18	0.1	2	6	0	0	0	2	2	0	2	2	2	0		
	骨	933	3.8	853	3.5	796	3.3	67	75	75	75	82	61	52	53	66	59	69	62		
	腫瘍	4	0.0	0	0.0	1	0.0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0		
	探	3	0.0	6	0.0	2	0.0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0		
	その他	292	1.2	285	1.2	308	1.3	27	29	21	24	28	27	25	26	20	28	30	23		
	センチネルリンパ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	レノグラム	16	0.1	15	0.1	11	0.0	1	2	4	1	1	0	0	1	0	0	0	1		
	その他	1	0.0	1	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

第12表 放射線照射回数(治療一取扱件数)

区	分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内													
		左		右		左		同		内											
		総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
総	数	56,815	233.8	62,784	259.4	63,188	260.0	5,572	5,548	6,129	4,716	5,164	4,999	4,759	5,537	4,698	4,682	5,924	5,460		
	コハクト透視大量照射	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	R A L S	79	0.3	85	0.4	95	0.4	8	1	6	19	13	6	17	9	6	1	4	5		
	小線源	25	0.1	23	0.1	19	0.1	2	1	1	1	2	1	2	2	1	2	1	3		
	リニアック	52,454	215.9	58,039	239.8	58,320	240.0	5,141	5,165	5,690	4,311	4,751	4,608	4,353	5,128	4,311	4,293	5,546	5,023		
	C T	1,083	4.5	1,067	4.4	981	4.0	87	85	91	72	89	75	82	77	70	90	70	93		
	M R I	2,948	12.1	3,377	14.0	3,577	14.7	317	283	323	304	295	295	288	297	289	280	284	322		
	シミュレータ	226	0.9	193	0.8	196	0.8	17	13	18	9	14	14	17	24	21	16	19	14		

第13表 臨床検査状況(一般検査件数)

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	左						内					
							4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	2,812,427	11,573.8	2,923,804	12,081.8	2,807,313	11,552.7	231,095	217,397	237,983	235,541	240,936	236,328	231,285	236,778	228,933	235,608	222,289	250,495
検査	29,086	119.7	27,821	115.0	27,733	114.1	2,302	2,069	2,307	2,256	2,204	2,317	2,306	2,263	2,287	2,529	2,338	2,555
便検査	1,227	5.0	720	3.0	747	3.1	82	66	63	53	56	48	36	81	59	69	63	71
血液学的検査	900,392	3,705.3	1,021,237	4,220.0	919,789	3,785.1	75,945	71,131	77,338	77,028	84,768	77,265	74,920	76,834	74,398	76,976	71,894	81,292
生化学的検査	1,480,405	6,092.2	1,470,775	6,077.6	1,453,125	5,979.9	119,677	113,168	123,367	122,275	120,920	122,653	120,670	122,956	119,044	122,419	115,741	130,235
細菌学検査	15,077	62.0	15,065	62.3	16,309	67.1	1,210	1,217	1,853	1,730	1,350	1,487	1,201	1,279	1,187	1,185	1,183	1,427
(再掲:監視培養検査)	708	2.9	792	3.3	905	3.7	60	62	74	70	81	61	74	81	73	88	95	86
血清学的検査	181,853	748.4	190,445	787.0	193,101	794.7	15,751	14,860	16,382	15,841	15,713	16,194	16,201	16,558	15,983	16,420	15,669	17,529
(再掲:アイト-プ使用)	1,688	6.9	1,745	7.2	1,740	7.2	143	113	170	120	160	142	132	155	147	135	173	150
病理学内の検査	8,384	34.5	7,897	32.6	7,853	32.3	659	582	706	671	686	614	652	671	656	636	585	735
依頼	461	1.9	482	2.0	450	1.9	38	36	34	38	42	24	43	41	33	30	52	39
搬送子検査	1,324	5.4	1,547	6.4	1,580	6.5	128	115	127	122	135	119	121	141	126	137	144	165
細胞学的検査	8,619	35.5	7,568	31.3	7,345	30.2	638	507	725	633	534	613	674	640	618	563	546	654
採血業務	181,894	748.5	176,977	731.3	173,633	714.5	14,464	13,457	14,824	14,613	14,256	14,667	14,232	15,005	14,269	14,401	13,862	15,583
その他の治療処理等	3,705	15.2	3,270	13.5	3,003	12.4	201	189	257	281	272	327	229	309	273	243	212	210

第14表 臨床検査状況(機能検査件数)

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	左						内					
							4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	20,598	84.8	22,089	91.3	22,076	90.8	1,729	1,557	2,017	1,786	1,871	1,798	1,956	1,899	1,795	1,840	1,788	2,040
心電図検査	5,498	22.6	5,593	23.1	5,735	23.6	456	400	523	474	496	472	470	493	443	497	477	534
負荷心電図	1,983	8.2	1,908	7.9	1,864	7.7	128	104	188	156	154	171	165	162	160	156	137	183
トレットミルテスト	691	2.8	696	2.9	705	2.9	61	43	64	70	51	58	58	62	51	43	71	73
ホルター心電図検査	419	1.7	359	1.5	381	1.6	31	29	28	35	31	37	38	22	24	35	35	36
心臓超音波検査	2,062	8.5	1,951	8.1	2,221	9.1	175	135	181	198	174	191	184	202	192	205	181	203
肺機能検査	6,611	27.2	6,645	27.5	6,569	27.0	469	453	598	521	591	505	581	575	558	549	545	624
ピロリ菌呼吸気試験	67	0.3	84	0.3	81	0.3	9	5	8	8	10	4	10	4	5	5	5	8
聴力純音検査	79	0.3	119	0.5	102	0.4	9	13	6	13	11	15	2	5	9	1	7	11
乳腺超音波検査	1,272	5.2	796	3.3	719	3.0	61	40	73	68	48	50	76	66	68	54	57	58
骨塩定量検査	3	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の検査	1	0.0	5	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
血液ガス検査	1,912	7.9	3,933	16.3	3,699	15.2	330	335	348	243	305	295	372	308	285	295	273	310

(注)その他の検査:パクトル心電図検査、心音図検査、心拍出量検査、脳波検査を含む

第15表 臨床検査状況(内視鏡検査件数)

区 分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内 訳											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	同											
							4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総 数	8,834	36.4	8,740	36.1	8,515	35.0	712	610	814	702	708	723	642	868	708	641	618	769
上 部 消 化 管	5,012	20.6	4,779	19.7	4,820	19.8	401	359	431	398	404	410	380	511	399	369	351	407
下 部 消 化 管	2,537	10.4	2,717	11.2	2,540	10.5	214	174	271	213	215	209	165	254	209	186	186	244
気 管 支	165	0.7	151	0.6	159	0.7	13	7	20	3	7	12	22	17	13	9	10	26
膽管造影(ERCP)	148	0.6	157	0.6	90	0.4	7	5	4	13	11	11	10	8	5	7	3	6
超音波内視鏡(EUS)	687	2.8	664	2.7	640	2.6	54	49	65	52	48	66	43	58	55	43	44	63
超音波内視鏡下穿刺生検(EUS-FNBAB)	285	1.2	272	1.1	266	1.1	23	16	23	23	23	15	22	20	27	27	24	23

第16表 薬剤業務状況

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		同 左 内 訳											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	総数	77,728	319.9	75,118	310.4	75,173	309.4	6,306	5,593	6,211	6,267	6,140	6,526	6,494	6,357	6,619	6,051	6,059
枚数	11,213	46.1	9,211	38.1	8,574	35.3	656	579	727	693	628	819	740	720	718	712	757	825
入院	66,515	273.7	65,907	272.3	66,599	274.1	5,650	5,014	5,484	5,574	5,512	5,707	5,754	5,637	5,901	5,339	5,302	5,725
処方	138,711	570.8	135,593	560.3	137,542	566.0	11,429	9,673	11,240	11,193	11,007	11,817	11,757	11,874	12,337	11,427	11,431	12,357
枚数	24,442	100.6	21,882	90.4	19,499	80.2	1,655	1,366	1,704	1,615	1,487	1,747	1,545	1,607	1,580	1,631	1,736	1,826
入院	114,269	470.2	113,711	469.9	118,043	485.8	9,774	8,307	9,536	9,578	9,520	10,070	10,212	10,267	10,757	9,796	9,695	10,531
総数	1,435,099	5,905.8	1,374,632	5,680.3	1,086,309	4,470.4	93,522	75,711	86,015	87,218	85,677	95,461	90,147	92,776	102,031	88,684	90,529	98,538
枚数	466,497	1,919.7	399,375	1,650.3	292,969	1,205.6	24,907	21,458	23,528	23,961	21,461	26,620	22,341	25,105	24,693	24,065	26,564	28,266
入院	968,602	3,986.0	975,257	4,030.0	793,340	3,264.8	68,615	54,253	62,487	63,257	64,216	68,841	67,806	67,671	77,338	64,619	63,965	70,272
処方	954	3.9	836	3.5	1,002	4.1	59	75	91	88	104	78	75	78	98	86	87	83
枚数	816	3.4	779	3.2	859	3.5	50	64	72	68	82	63	65	66	87	82	81	79
入院	138	0.6	57	0.2	143	0.6	9	11	19	20	22	15	10	12	11	4	6	4
総数	104,148	428.6	110,407	456.2	104,899	431.7	8,711	8,734	8,801	9,452	9,197	8,453	9,016	8,397	8,322	8,517	8,180	9,119
枚数	21,485	88.4	22,239	91.9	22,330	91.9	1,782	1,742	1,871	1,947	1,901	1,756	1,783	1,905	1,870	1,937	1,813	2,023
入院	82,663	340.2	88,168	364.3	82,569	339.8	6,929	6,992	6,930	7,505	7,296	6,697	7,233	6,492	6,452	6,580	6,367	7,096
総数	494,874	2,036.5	519,211	2,145.5	478,858	1,970.6	40,055	39,676	40,599	44,728	43,134	37,640	41,864	38,124	37,012	37,802	37,192	41,032
枚数	64,337	264.8	68,023	281.1	64,344	264.8	4,954	4,966	5,338	5,593	5,458	4,910	5,045	5,589	5,500	5,721	5,305	5,965
入院	430,537	1,771.8	451,188	1,864.4	414,514	1,705.8	35,101	34,710	35,261	39,135	37,676	32,730	36,819	32,535	31,512	32,081	31,887	35,067
人数	2,605	10.7	1,912	7.9	2,397	9.9	134	117	133	157	149	127	222	275	222	291	259	311
算定件数	3,002	12.4	2,018	8.3	2,640	10.9	137	118	136	157	153	129	242	316	248	324	305	375
外来抗がん剤調製数*1	11,034	45.4	14,475	59.8	14,453	59.5	1,176	1,084	1,209	1,240	1,167	1,201	1,140	1,265	1,205	1,274	1,193	1,299
調製数(患者数)	17,262	71.0	22,766	94.1	21,888	90.1	1,802	1,638	1,806	1,856	1,798	1,826	1,707	1,911	1,793	1,929	1,805	2,017
調製数(剤数)	712	2.9	1,315	5.4	685	2.8	33	43	59	54	34	38	47	76	71	62	72	96
入院抗がん剤調製数*2	1,123	4.6	1,706	7.0	888	3.7	59	53	72	66	40	46	57	97	85	82	98	133
調製数(患者数)	50	0.3	2,351	9.7	8,844	36.4	516	588	749	728	797	882	756	751	748	788	694	847
調製数(剤数)	115	0.7	3,286	13.6	11,866	48.8	663	805	1,062	945	1,081	1,128	981	1,015	1,033	1,050	964	1,139
麻薬処方せん枚数	5,884	24.2	6,916	28.6	8,237	33.9	784	673	722	828	746	718	733	623	679	543	533	655
麻薬注射せん枚数	12,345	50.8	13,232	54.7	16,107	66.3	1,305	1,424	1,503	1,529	1,484	1,369	1,200	1,213	1,168	1,171	1,269	1,472
TDM実施件数*4	93	0.4	59	0.2	62	0.3	2	9	8	8	1	10	7	8	3	5	4	5

*1 外来抗がん剤調製数は、薬剤師が調製した分のみを計上

*2 外来抗がん剤調製数(治療を含む)は、薬剤師が調製した分のみを計上

*3 入院抗がん剤調製数(治療を含む)は、薬剤師が調製した分のみを計上(平成20年度から集計)

*4 TDM実施件数は平成20年度から集計

第17表 輸血状況

1 血液使用量

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
自己血液	431	35.9	385	32.1	325	27.1	42	28	40	10	30	16	28	28	26	23	36	18
全血	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
赤血球製剤	16	1.30	2	0.17	16	1.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	4	2
赤血球濃厚液	4,908	409.0	5,578	464.8	5,396	449.7	442	400	508	546	440	488	506	394	396	382	398	496
凍結血漿	754	62.8	934	77.8	684	57.0	56	40	64	31	35	79	41	39	62	40	70	127
血小板	15,995	1,332.9	16,565	1,380.4	15,395	1,282.9	1,395	1,115	1,520	1,445	1,255	1,430	1,495	895	765	1,200	1,490	1,390

2 検査件数

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
クロスマッチ	2,903	241.9	3,425	285.4	3,195	266.3	265	235	306	297	257	286	293	239	233	253	243	288
血液型	3,309	275.8	3,314	276.2	3,554	296.2	261	260	333	280	279	284	308	298	286	332	292	341
RH因子	3,309	275.8	3,314	276.2	3,554	296.2	261	260	333	280	279	284	308	298	286	332	292	341
間接クームス検査	8,827	735.6	9,616	801.3	9,198	766.5	717	676	854	785	749	788	841	754	702	769	711	852
抗体スクリーニング	5,913	492.8	6,181	515.1	5,981	498.4	452	439	547	487	489	502	546	511	467	515	462	564
直接クームス試験	12	1.0	17	1.4	27	2.3	0	2	3	1	3	1	4	3	2	2	6	0

第18表 患者給食数 (配膳延人数)

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	%	総数	%	総数	%	同						左					
							4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	121,399	100.0	115,668	100.0	121,252	100.0	9,845	9,942	9,616	10,126	10,490	10,336	10,195	10,173	10,284	9,947	9,724	10,574
常食	70,909	58.5	67,065	58.1	69,042	57.0	5,595	5,605	5,485	5,801	6,197	5,972	5,795	6,067	5,948	5,486	5,348	5,743
全粥	17,604	14.5	16,455	14.2	17,584	14.5	1,463	1,687	1,458	1,473	1,586	1,598	1,582	1,072	1,407	1,401	1,423	1,434
軟食	1,615	1.3	2,779	2.4	2,703	2.2	219	125	143	203	231	258	192	260	226	339	263	244
7分粥	1,438	1.2	2,946	2.5	1,878	1.5	151	83	97	145	155	97	131	176	216	212	214	201
5分粥	4,179	3.4	3,659	3.2	4,299	3.5	295	433	443	387	285	257	383	333	373	322	422	366
3分粥	4,223	3.5	3,810	3.3	3,876	3.2	292	327	323	253	319	344	273	288	314	433	313	397
流動食	2,307	1.9	1,907	1.6	1,881	1.6	128	162	134	149	152	151	170	146	154	201	209	209
加算食	9,138	7.5	7,335	6.3	7,733	6.4	593	630	527	724	559	590	739	807	616	542	613	793
非加算食	9,986	8.2	9,712	8.4	12,256	10.1	1,109	890	1,006	991	1,006	1,069	930	1,045	1,038	1,058	927	1,187

第19表 患者給食1人1日平均栄養量 (常食)

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	%	総数	%	総数	%	同						左					
							4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	1,838	100.0	1,856	100.0	1,914	100.0	1,845	1,849	1,832	1,816	1,834	1,853	2,073	1,842	1,843	2,073	2,295	1,818
穀類	913	49.6	922	49.7	952	49.7	914	921	909	912	912	915	1,032	910	912	1,032	1,139	912
動物性食品	467	25.4	472	25.4	486	25.4	466	472	465	469	457	470	526	470	465	526	585	462
その他	459	24.9	462	24.9	476	24.9	465	456	459	434	465	467	515	462	465	515	571	444
総数	72.6	100.0	73.4	100.0	75.7	100.0	72.9	73.4	72.7	71.7	72.1	73.4	82.0	73.4	72.7	82.0	90.9	71.8
穀類	17.9	24.6	18.0	24.6	18.6	24.6	17.9	18.0	17.8	17.9	17.9	17.9	20.2	17.8	17.9	20.2	22.3	17.9
動物性食品	39.8	54.8	40.2	54.8	41.4	54.7	39.6	40.2	39.6	40.4	38.7	40.0	44.8	40.4	39.6	44.8	50.0	39.3
その他	15.0	20.6	15.2	20.6	15.7	20.7	15.4	15.3	15.3	13.5	15.6	15.6	16.9	15.2	15.3	16.9	18.6	14.6

第20表 患者給食1人1日平均材料費 (常食)

区分	平成20年度		平成21年度		平成22年度		内											
	総数	%	総数	%	総数	%	同						左					
							4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	752.35	100.0	747.66	100.0	774.11	100.0	753.45	749.26	758.67	743.51	745.27	750.00	826.17	748.14	741.80	829.83	898.03	745.14
穀類	93.58	12.4	94.47	12.6	97.43	12.6	93.95	93.20	92.30	93.12	93.49	93.59	105.58	93.94	93.92	105.58	116.90	93.53
動物性食品	268.48	35.7	270.52	36.2	279.42	36.1	269.22	269.23	272.52	266.24	264.69	267.23	302.62	270.63	267.80	302.62	335.05	265.22
その他	390.29	51.9	382.68	51.2	397.26	51.3	390.28	386.83	393.85	384.15	387.09	389.18	417.97	383.57	380.08	421.63	446.08	386.39
1日当たり熱量 (Kcal)	2	-	2	-	2	-	2	2	2	2	2	2	3	2	2	2	3	2

第3部 研究所業務関係

第1表 解剖件数

区分	平成20年度	平成21年度	平成22年度	内											
				4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
死亡患者数	429	442	455	50	37	31	40	53	47	36	29	30	44	27	31
解剖数	9	11	5	1	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0
解剖率	2.1	2.5	1.1	2.0	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	2.8	3.4	3.3	0.0	0.0	0.0

第2表 放射性同位元素 (RI) 使用状況 (単位MBq)

区分	平成20年度	平成21年度	平成22年度	内											
				4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	995.56	733.34	871.56	140.04	69.11	74.82	61.35	108.27	84.70	50.84	81.40	67.27	31.13	49.84	52.79
3H (水素)	4.39	47.29	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
14C (炭素)	0.07	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00
32P (リン)	170.54	174.23	146.55	55.02	34.98	1.63	5.00	0.00	2.00	8.88	30.42	0.00	8.62	0.00	0.00
33P (リン)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
35S (硫黄)	0.00	33.53	18.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	18.50	0.00	0.00	0.00
51Cr (クロム)	820.56	478.29	706.50	85.02	34.13	73.19	56.35	108.27	82.70	41.96	50.98	48.77	22.51	49.83	52.79
125I (ヨウ素)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
90Y (イットリウム)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
111In (インジウム)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

第3表 共同利用機器使用件数

機器名	平成20年度	平成21年度	平成22年度	内											
				4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
蛍光顕微鏡	38	27	21	1	5	4	4	1	2	1	0	0	5	2	0
共焦点レーザー顕微鏡	432	412	494	54	46	53	53	60	45	40	41	34	34	26	41
細胞解析装置 FACS Calibur	1,057	1,079	1,031	94	68	91	91	93	84	80	94	88	91	88	68
遺伝子発現定量装置 ライトサイクラー	361	312	521	43	29	42	42	33	44	34	42	54	68	38	51
CCD写真撮影装置	2,178	2,163	1,745	114	117	158	158	119	187	141	114	150	141	142	172
超遠心機	101	156	173	12	9	17	17	8	11	11	21	9	21	14	21
超遠心機 (卓上型)	0	23	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
X線フィルム自動現像機	1,929	1,602	1,638	161	134	153	153	154	117	129	137	138	139	102	136
DNAシーケンサ	15,179	13,748	13,506	714	660	1,028	1,028	808	1,254	2,111	1,500	1,447	830	1,035	748
RI画像解析装置 BAS-2500	95	61	106	3	3	2	2	4	3	3	2	15	29	14	14
液体シンチレーションカウンタ	35	57	9	3	0	1	1	2	0	0	1	0	2	0	0
オートガンマ	85	101	91	10	8	8	8	10	12	11	13	11	5	1	1
実験用X線照射装置	640	523	561	50	34	41	41	43	34	36	34	42	64	60	57
化学発光画像解析装置 ImageMaster-CL	10	21	28	2	2	2	2	3	2	2	2	3	2	2	2
蛍光画像解析装置 Fluor Imager 595	7	26	35	6	3	2	2	3	2	2	2	3	2	2	4
旋回培養器	384	265	290	29	34	17	17	18	26	16	19	28	26	25	30
蛍光顕微鏡	12	12	12	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
走査電子顕微鏡	13	23	27	3	3	2	2	4	2	2	2	2	2	2	2
Biacor X	70	105	95	4	7	5	5	8	11	23	5	10	7	2	7
大型プリンター	12	40	59	4	6	4	4	6	8	4	5	4	4	4	4
スライド作製装置															

第4表 実験動物管理状況（月別動物飼育数）（各月第1週における動物数）（平成22年度）

種別	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	1,182	1,139	1,145	1,303	1,192	1,223	1,184	1,156	1,101	1,190	1,196	1,256
マウス	1,182	1,139	1,145	1,303	1,190	1,221	1,182	1,153	1,098	1,187	1,196	1,256
ラット	0	0	0	0	0	0	0	3	3	3	0	0
ネズミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ウサギ	0	0	0	0	2	2	2	0	0	0	0	0

第5表 実験動物管理状況（系統保存動物）

マウス：CHST-24-DKO, FUT4.7-DKO, Cmah-KO（分子病態学部）
 C57BL/6トランスジェニックmiR-146a, C57BL/6トランスジェニックmiR-193b（腫瘍病理学部）
 C57/BL6.ICR, ノックアウトマウス（VimentinSA/SA, TrichopleinLacZ/LacZ）（発がん制御研究部）
 B6-Ly5.1（遺伝子医療研究部）

第4部 がん患者登録・追跡調査関係

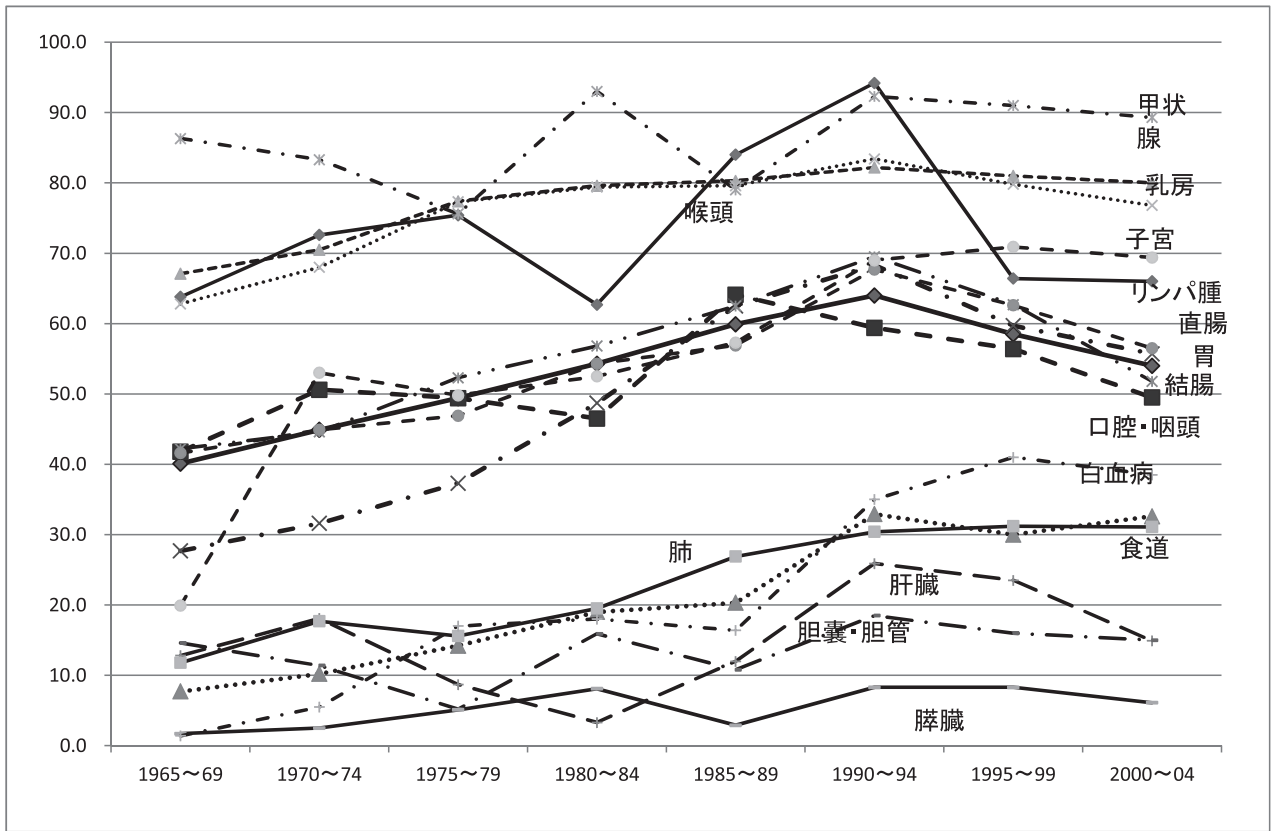
主要部位別・性別 がん患者相対生存率

診断年		5年生存率							
		1965~69	1970~74	1975~79	1980~84	1985~89	1990~94	1995~99	2000~04
症例数		7,624	7,726	6,788	6,839	6,944	6,819	8,017	10,746
全部位	男	29.5	32.6	34.8	39.8	47.3	52.1	47.5	44.1
	女	49.3	54.5	60.6	65.1	68.9	73.2	69.0	64.2
	計	40.1	44.9	49.4	54.3	59.9	64.0	58.5	54.0
症例数		288	290	224	207	285	340	535	780
口腔・咽頭	男	38.3	48.0	44.5	42.5	60.4	52.7	55.3	47.9
	女	49.1	54.4	58.8	56.0	70.8	76.8	59.1	53.3
	計	41.8	50.6	49.4	46.5	64.1	59.4	56.4	49.5
症例数		212	234	203	212	177	234	290	574
食道	男	6.4	8.6	14.0	18.4	20.0	30.7	27.0	33.0
	女	12.6	16.9	15.2	21.2	22.9	47.7	50.0	30.0
	計	7.7	10.2	14.2	19.0	20.3	32.9	30.0	32.6
症例数		2,516	2,040	1,735	1,558	1,423	1,212	1,260	1,369
胃	男	29.7	33.7	38.2	51.0	64.1	67.5	59.4	56.3
	女	23.7	27.6	35.9	44.9	59.6	70.0	60.4	54.3
	計	27.7	31.6	37.3	48.7	62.5	68.3	59.7	55.7
症例数		125	176	218	300	368	490	574	730
結腸	男	44.4	43.5	51.3	56.1	62.5	71.1	63.1	53.1
	女	38.7	45.9	53.6	57.7	62.5	67.6	62.2	50.3
	計	42.2	44.6	52.3	56.8	62.5	69.5	62.7	51.8
症例数		305	325	365	365	336	362	377	513
直腸	男	41.3	43.0	45.2	50.2	55.5	68.8	58.3	55.4
	女	42.1	47.0	50.0	60.5	59.3	65.8	69.1	58.4
	計	41.6	44.9	46.9	54.3	56.9	67.7	62.6	56.5
症例数		105	131	95	133	174	220	311	309
肝臓	男	10.1	16.6	7.3	4.0	12.0	25.1	21.3	16.1
	女	21.5	24.4	13.3	0.0	12.2	28.3	30.6	10.4
	計	12.8	18.1	8.7	3.3	12.0	25.9	23.5	14.9
症例数		45	74	41	76	76	68	25	60
胆嚢・胆管	男	5.4	11.4	7.2	21.9	16.5	23.6	33.3	7.4
	女	22.5	11.5	4.1	11.8	7.0	12.9	6.3	21.2
	計	14.6	11.4	5.2	15.9	10.8	18.5	16.0	15.0
症例数		59	90	97	93	92	105	157	313
膵臓	男	0.0	4.0	5.4	7.6	2.7	10.0	8.6	5.4
	女	4.5	0.0	4.8	9.7	3.1	5.6	7.7	7.3
	計	1.7	2.5	5.1	8.1	2.9	8.3	8.3	6.1
症例数		198	210	117	92	87	91	116	141
喉頭	男	63.6	71.4	78.9	65.1	83.6	93.8	67.0	65.4
	女	64.9	88.1	28.1	20.8	91.3	100.0	50.0	72.7
	計	63.8	72.6	75.4	62.7	84.0	94.2	66.4	66.0
症例数		549	654	628	723	765	792	1,164	1,548
肺	男	10.6	18.2	13.4	19.9	24.5	28.7	27.4	24.9
	女	15.1	16.0	21.2	18.3	33.7	35.1	40.7	44.3
	計	11.8	17.7	15.6	19.5	26.9	30.4	31.2	31.1
症例数		924	1,107	1,089	1,538	1,644	1,392	1,616	1,659
乳房	男	94.6	90.1	100.0	72.8	96.6	99.8	50.0	100.0
	女	67.0	70.4	77.3	79.6	80.3	82.1	81.0	79.9
	計	67.1	70.5	77.4	79.6	80.3	82.2	81.0	80.0
症例数		1,342	1,393	1,103	791	716	789	615	768
子宮	男	-	-	-	-	-	-	-	-
	女	62.8	68.0	77.3	79.4	79.6	83.4	79.8	76.8
	計	62.8	68.0	77.3	79.4	79.6	83.4	79.8	76.8
症例数		88	120	111	96	107	139	145	224
甲状腺	男	92.3	71.1	62.3	80.9	63.3	92.4	83.3	77.5
	女	84.2	87.0	80.4	96.4	84.2	92.3	93.6	91.8
	計	86.3	83.3	75.6	93.0	79.0	92.3	91.0	89.3
症例数		32	43	65	150	212	187	289	458
リンパ腫	男	16.7	52.6	51.1	56.2	55.9	63.4	66.1	61.5
	女	25.4	53.8	47.6	46.0	55.9	76.8	78.3	78.5
	計	19.9	53.0	49.8	52.5	57.3	69.0	70.9	69.4
症例数		78	74	54	68	40	33	61	52
白血病	男	2.2	4.9	13.5	21.4	19.1	36.9	37.1	34.6
	女	0.0	6.2	21.4	13.6	12.7	32.2	46.2	42.3
	計	1.4	5.5	17.0	18.0	16.4	35.0	41.0	38.5

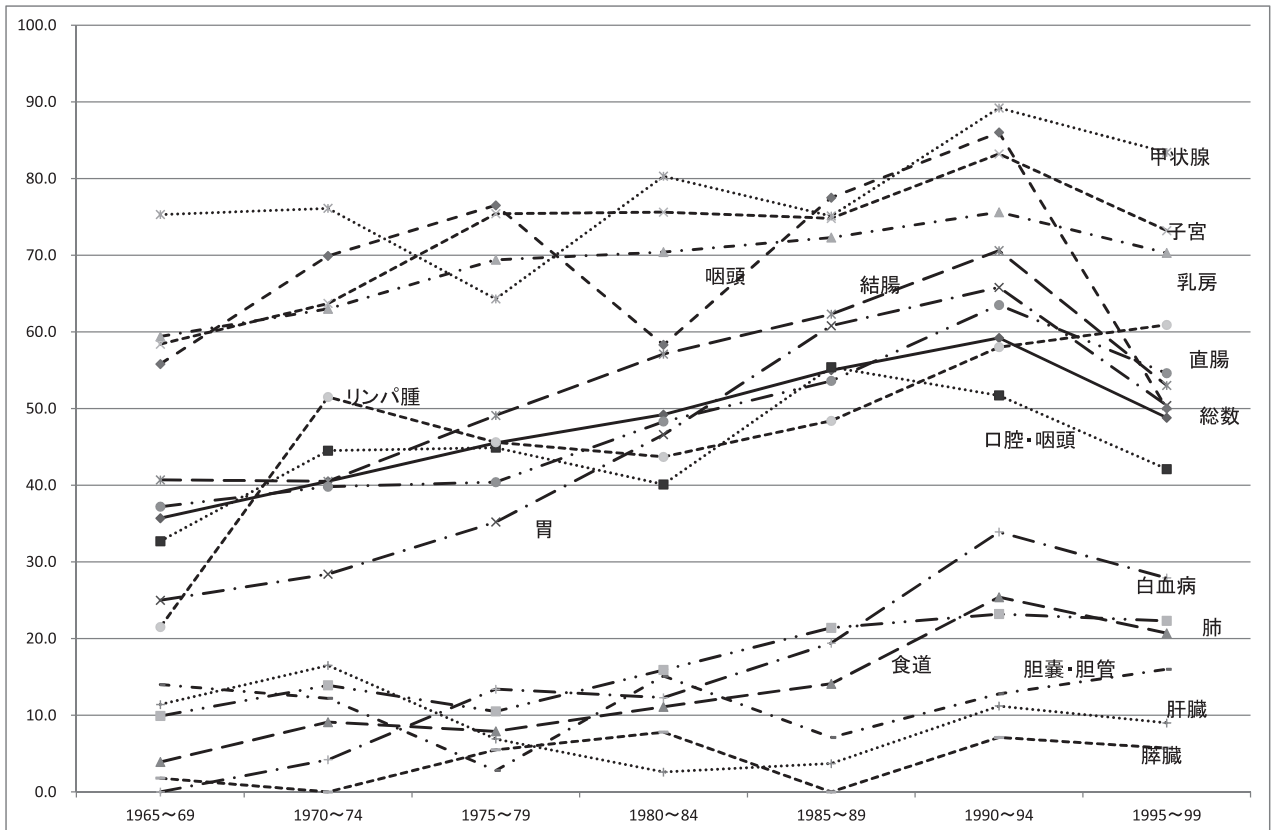
		10年生存率						
診断年		1965~69	1970~74	1975~79	1980~84	1985~89	1990~94	1995~99
症例数		7,624	7,726	6,788	6,839	6,944	6,819	8,017
全部位	男	25.8	28.7	31.2	36.4	43.7	46.5	36.3
	女	44.3	49.7	56.4	58.8	63.1	69.0	60.4
	計	35.7	40.5	45.5	49.2	55.0	59.2	48.8
症例数	288	290	224	207	285	340	535	
口腔・咽頭	男	28.0	39.8	39.4	40.1	51.5	47.3	40.4
	女	42.2	51.3	55.2	40.6	62.6	63.3	45.7
	計	32.7	44.5	44.9	40.1	55.4	51.7	42.1
症例数	212	234	203	212	177	234	290	
食道	男	3.3	8.2	7.2	11.1	12.5	22.5	17.9
	女	6.3	12.9	12.2	11.4	24.5	43.7	39.5
	計	3.9	9.1	7.9	11.1	14.1	25.4	20.7
症例数	2,516	2,040	1,735	1,558	1,423	1,212	1,260	
胃	男	27.3	30.2	36.5	48.9	63.4	64.9	48.4
	女	20.6	25.1	33.0	42.7	56.4	67.4	54.8
	計	25.0	28.4	35.2	46.6	60.8	65.8	50.4
症例数	125	176	218	300	368	490	574	
結腸	男	41.9	39.1	46.1	57.3	62.9	73.3	52.1
	女	38.9	42.4	53.2	56.9	61.4	67.3	54.2
	計	40.7	40.5	49.1	57.1	62.3	70.6	53.0
症例数	305	325	365	365	336	362	377	
直腸	男	37.2	39.1	38.6	45.2	54.7	63.5	52.0
	女	37.1	40.6	43.6	53.0	52.1	63.0	58.8
	計	37.2	39.8	40.4	48.3	53.6	63.5	54.6
症例数	105	131	95	133	174	220	311	
肝臓	男	7.2	13.9	6.1	3.2	3.6	9.8	7.9
	女	24.1	26.7	9.2	0.0	4.5	15.4	12.5
	計	11.4	16.5	6.9	2.6	3.7	11.2	9.0
症例数	45	74	41	76	76	68	25	
胆嚢・胆管	男	6.5	11.9	0.0	22.9	5.2	18.4	33.3
	女	20.6	12.6	4.4	9.9	7.2	6.6	6.3
	計	14.0	12.2	2.8	15.1	7.1	12.8	16.0
症例数	59	90	97	93	92	105	157	
膵臓	男	0.0	0.0	4.3	6.6	0.0	7.8	4.8
	女	4.6	0.0	10.6	11.7	0.0	5.9	7.7
	計	1.8	0.0	5.5	7.8	0.0	7.1	5.7
症例数	198	210	117	92	87	91	116	
喉頭	男	56.0	69.0	80.8	60.4	78.0	84.9	50.0
	女	54.6	82.9	15.6	21.7	64.2	100.0	50.0
	計	55.8	69.9	76.5	58.3	77.5	86.0	50.0
症例数	549	654	628	723	765	792	1,164	
肺	男	8.9	14.5	8.1	16.5	19.3	21.4	19.1
	女	12.9	12.1	16.8	14.2	27.3	28.1	30.4
	計	9.9	13.9	10.5	15.9	21.4	23.2	22.3
症例数	924	1,107	1,089	1,538	1,644	1,392	1,616	
乳房	男	87.4	100.0	74.4	57.6	95.2	99.8	0.0
	女	59.4	62.8	69.4	70.4	72.2	75.5	70.4
	計	59.4	63.0	69.4	70.4	72.3	75.6	70.3
症例数	1,342	1,393	1,103	791	716	789	615	
子宮	男	-	-	-	-	-	-	-
	女	58.4	63.7	75.4	75.6	74.8	83.2	73.2
	計	58.4	63.7	75.4	75.6	74.8	83.2	73.2
症例数	88	120	111	96	107	139	145	
甲状腺	男	73.9	54.1	47.5	54.1	51.0	79.4	71.4
	女	75.7	82.8	70.3	87.3	82.8	91.1	87.3
	計	75.3	76.1	64.3	80.3	75.1	89.2	83.4
症例数	32	43	65	150	212	187	289	
リンパ腫	男	19.2	51.0	46.3	48.3	45.9	51.3	54.6
	女	25.8	52.3	44.3	35.5	52.3	67.5	70.4
	計	21.5	51.5	45.6	43.7	48.4	58.0	60.9
症例数	78	74	54	68	40	33	61	
白血病	男	0.0	5.0	10.1	11.0	23.4	33.0	25.7
	女	0.0	3.2	17.5	14.1	12.7	35.2	30.8
	計	0.0	4.2	13.4	12.3	19.4	33.9	27.9

※このグラフは、176・178ページのデータをもとに作成しています。

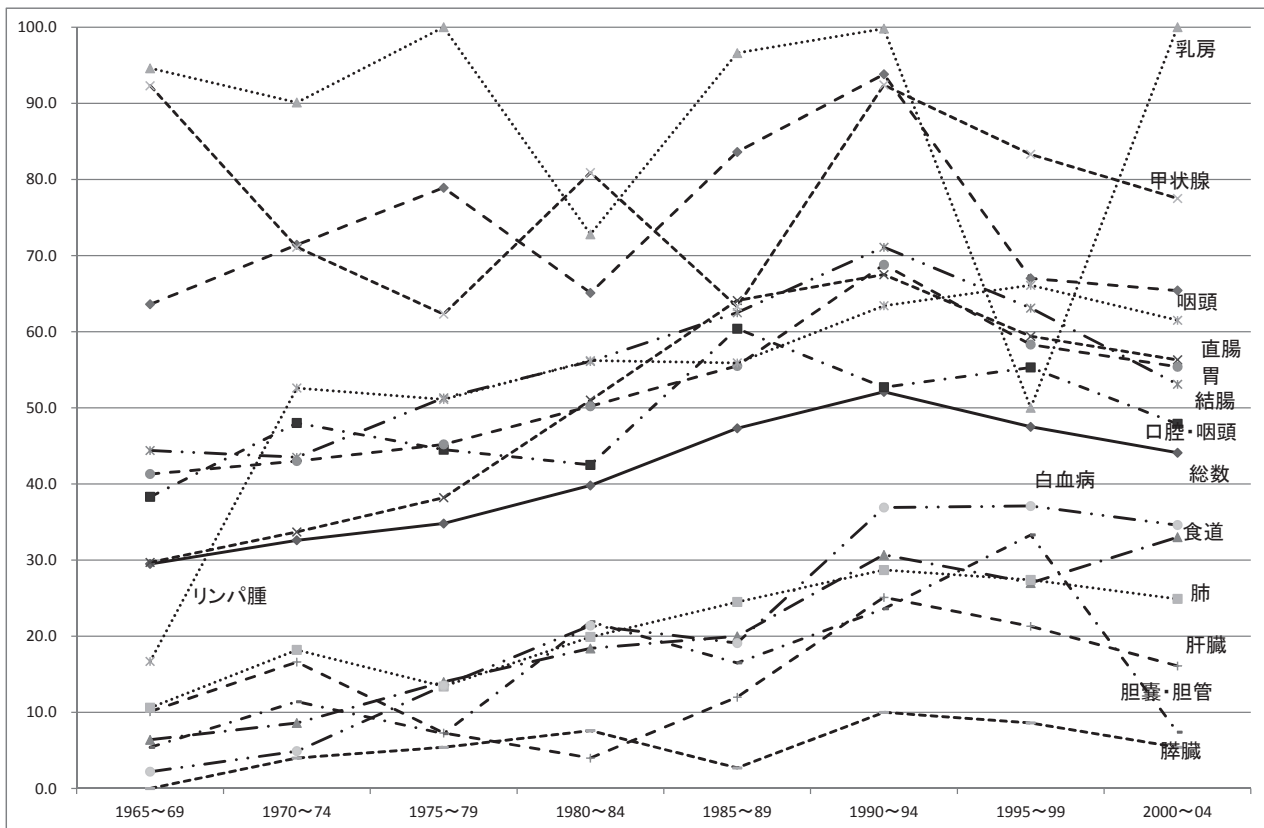
主要部位別 5年生存率（総計）



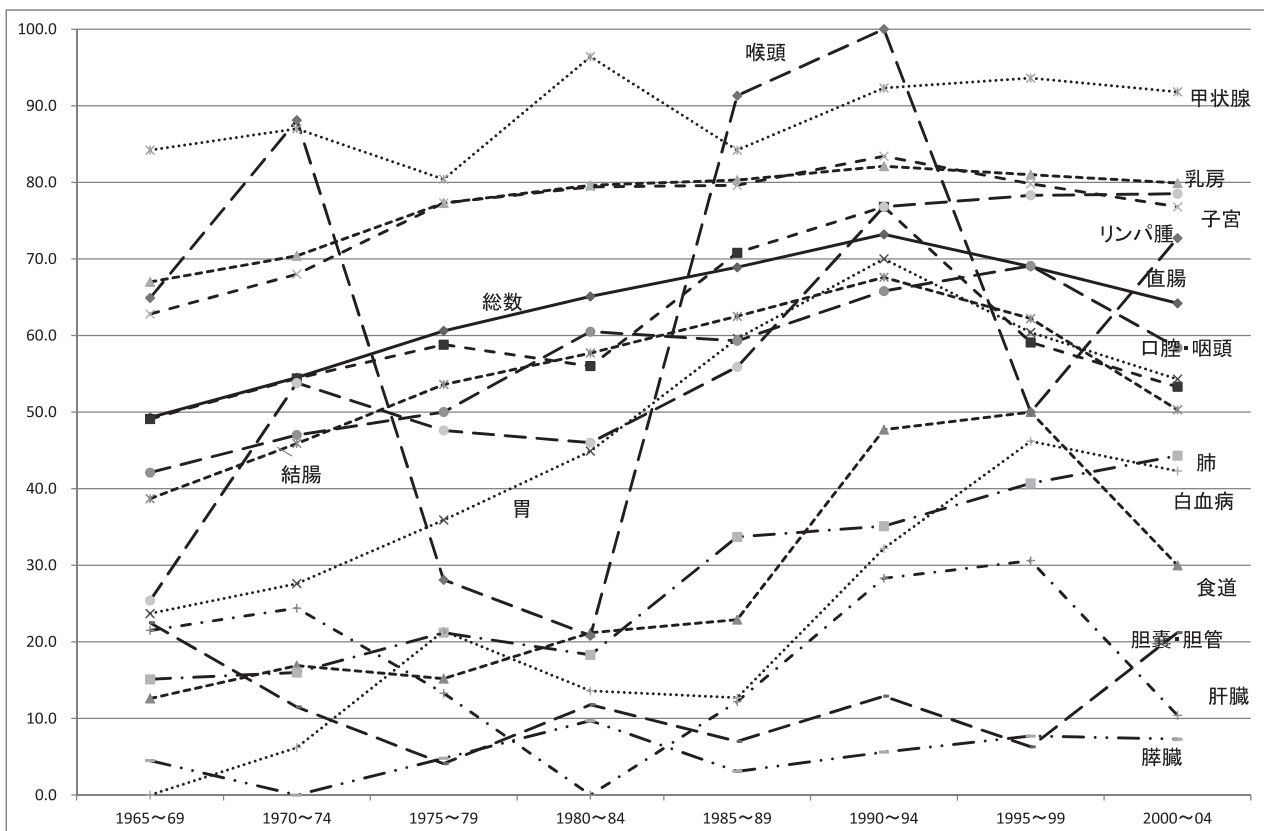
主要部位別 10年生存率（総計）



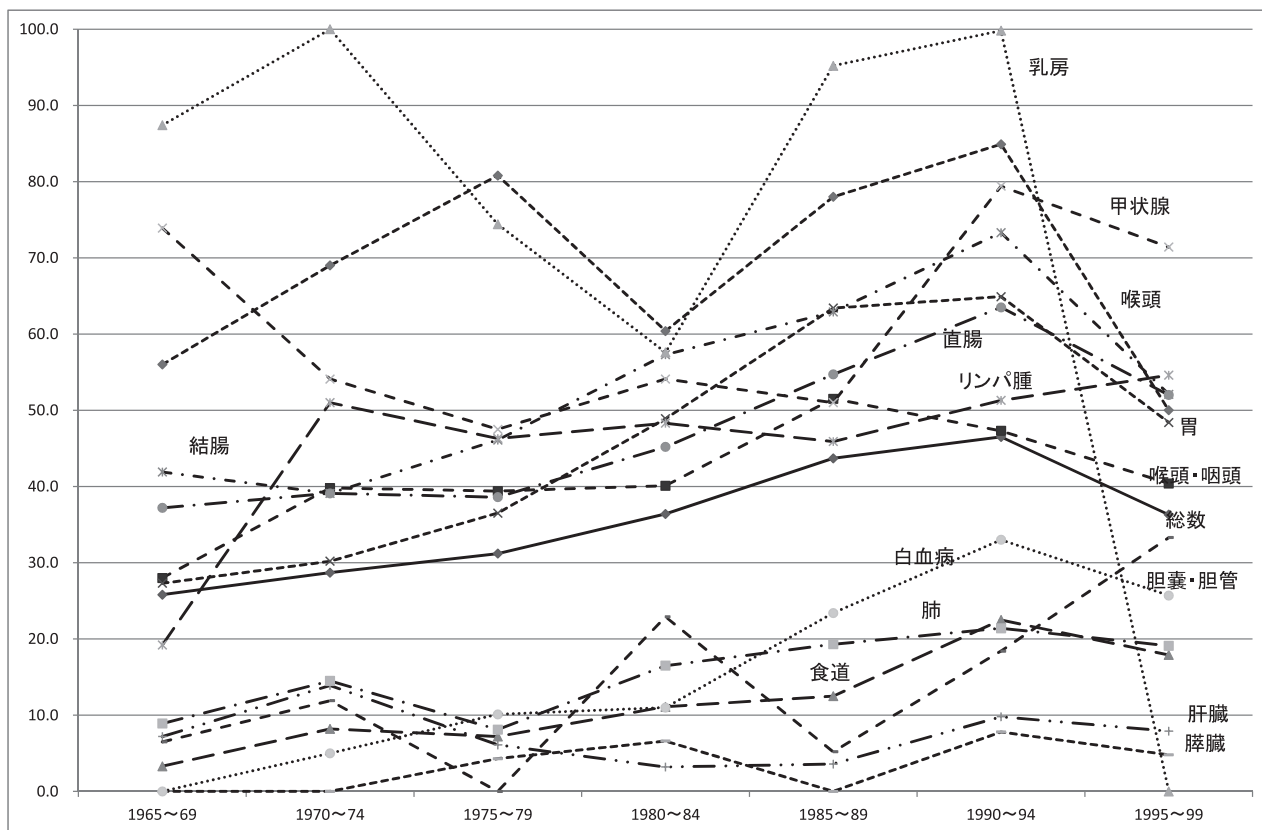
主要部位別 5年生存率（男計）



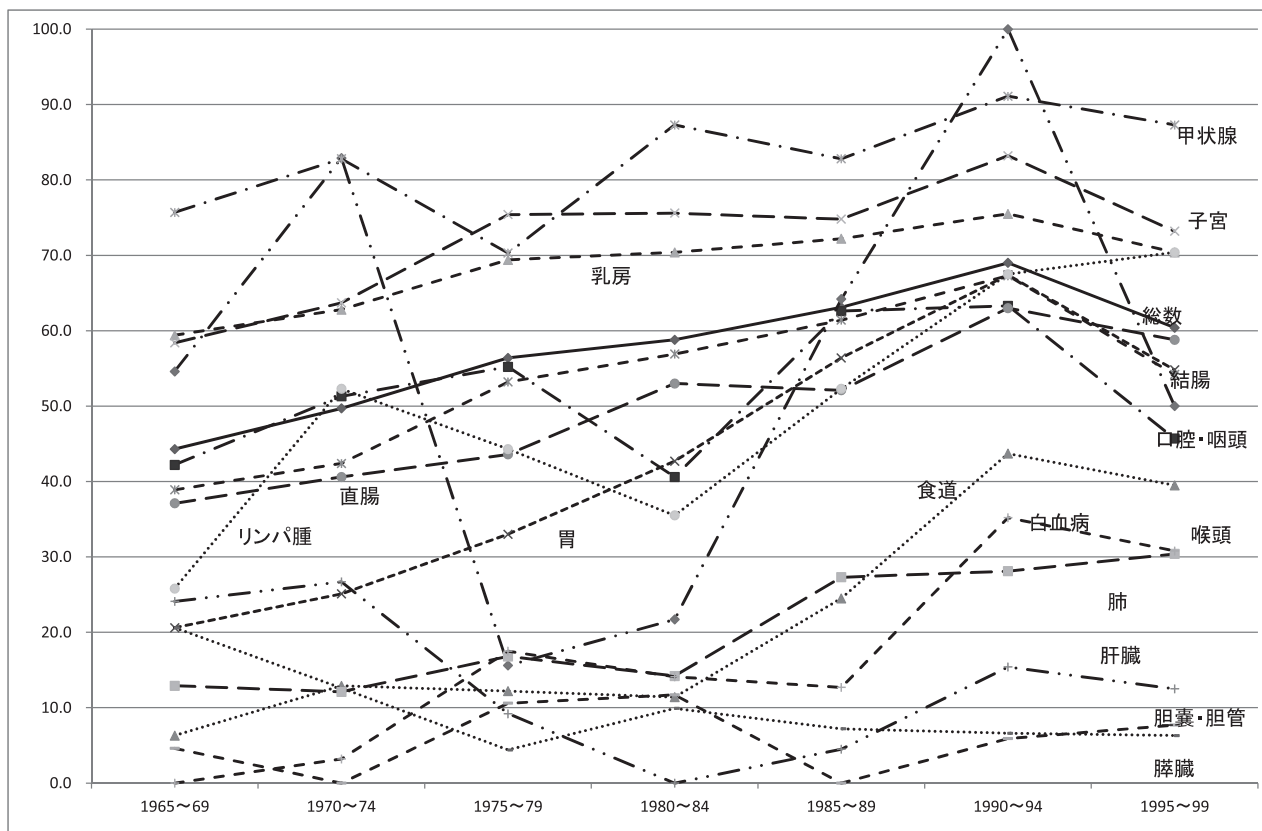
主要部位別 5年生存率（女計）



主要部位別 10年生存率（男計）



主要部位別 10年生存率（女計）



(参考) 22年度決算及び21年度類似病院比較(平成21年度地方公営企業年鑑より)

項 目	平成22年度		平成 21 年 度						
	愛知県・がん	順位	宮城・がん	埼玉・がん	千葉・がん	神奈川・がん	新潟・がん	静岡・がん	兵庫・がん
稼動状況									
病床利用率	(%)	84.6 (99.7)%	5	77.4	87.7	76.6	79.9	85.7	85.6
平均在院日数(一般)	(日)	15.1 (102.0)%	4	18.9	15.2	13.9	16.0	13.5	13.1
1日平均外来患者数	(人)	616 (96.8)%	4	298	768	442	565	983	904
外来入院患者比率	(%)	97.0 (97.6)%	-	66.7	145.1	135.8	136.8	152.1	123.3
収益状況									
入院患者1人1日当たり診療収入	(円)	50,570 (109.7)%	7	43,797	49,227	49,034	49,383	47,035	51,329
外来患者1人1日当たり診療収入	(円)	27,581 (101.0)%	4	21,060	21,553	31,310	22,600	15,273	28,929
医師1人1日当たり診療収入	(円)	317,548 (112.2)%	5	293,502	339,161	287,868	258,219	352,233	254,314
看護職員1人1日当たり診療収入	(円)	71,270 (86.5)%	4	63,525	73,706	82,395	85,732	85,851	74,353
検査技師年間1人当たり検査収入	(千円)	27,671 (104.9)%	3	19,647	26,557	19,886	24,788	22,158	38,316
放射線技師年間1人当たり放射線検査収入	(千円)	49,503 (96.2)%	3	27,185	63,489	37,295	40,091	42,913	53,276
繰入金状況									
1病床当たり一般会計繰入金額	(千円)	5,402 (107.1)%	4	4,244	5,153	6,850	6,416	3,242	11,152
一般会計繰入金対総収入	(%)	16.7 (98.6)%	4	20.2	15.9	20.5	21.0	12.5	26.9
一般会計繰入金対経常収益	(%)	16.9 (99.8)%	4	20.2	15.9	20.5	21.0	12.5	26.9
経営状況									
経常収支比率	(%)	106.7 (102.8)%	2	100.2	102.3	101.5	100.1	105.3	103.0
医業収支比率	(%)	96.9 (99.4)%	1	84.9	88.4	82.2	88.9	95.3	80.0
修正医業収支比率	(%)	88.2 (99.6)%	3	84.9	88.2	82.2	81.1	94.4	79.6
職員給与対医業収益	(%)	46.1 (104.3)%	1	62.3	51.4	57.7	52.7	50.7	45.5
減価償却費対医業収益	(%)	5.3 (88.6)%	5	3.6	7.9	6.9	4.8	5.9	11.1
病床100床当たり実質損益	(千円)	△ 326,272 (82.8)%	3	△ 419,135	△ 443,925	△ 637,070	△ 639,081	△ 192,517	△ 1,049,097
病床100床当たり純利益(△)純損益	(千円)	213,941 (194.0)%	2	5,291	71,425	47,927	2,503	131,710	66,115
病床100床当たり概算キャッシュフロー	(千円)	377,047 (135.2)%	3	77,440	302,408	236,665	139,945	274,719	401,975
支払利息対医業収益	(%)	0.9 (51.2)%	5	5.1	0.8	0.6	0.7	2.3	5.6
職員状況									
病床100床当たり医師数	(人)	21.2 (103.9)%	4	17.5	18.5	24.6	21.0	17.1	31.9
病床100床当たり看護部門職員数	(人)	85.8 (108.3)%	4	71.5	90.5	88.0	74.7	73.1	101.9
病床100床当たり事務部門職員数	(人)	9.2 (109.5)%	5	6.5	9.3	5.0	8.4	5.6	15.5
病床100床当たり放射線部門職員数	(人)	4.8 (109.1)%	2	4.2	5.5	6.2	6.5	6.2	7.0
病床100床当たり臨床検査部門職員数	(人)	5.0 (89.3)%	2	5.5	9.3	8.8	7.2	7.4	6.9
病床100床当たり全職員数	(人)	148.6 (115.7)%	3	111.2	146.3	142.5	133.5	122.7	181.4
職員平均年齢	(歳)	37 (100.1)%	6	39	38	38	35	43	35
医師1人当たり平均給与月額	(円)	1,452,173 (105.8)%	4	1,271,383	1,305,886	1,490,885	1,172,741	1,483,877	1,436,551
看護師1人当たり平均給与月額	(円)	436,518 (100.2)%	8	443,235	503,919	464,201	509,920	514,397	458,667
その他医療技術員1人当たり給与月額	(円)	533,916 (88.7)%	4	522,964	675,338	584,755	605,147	546,120	509,159
事務職員1人当たり平均給与月額	(円)	603,326 (83.4)%	2	549,104	645,363	617,702	622,271	613,223	668,285
施設設備									
1床当たり固定資産額(償却資産)	(千円)	30,828 (98.4)%	3	33,207	21,893	20,260	15,145	16,190	69,552

注: 類似病院の計数は「平成21年度地方公営企業決算の状況」報告値を愛知県が独自に集計・分析したもの。

注: 左枠外に★印のある項目は、順位が小さい順となっている。

※: キャッシュフロー: 純利益(損失) + 減価償却費 + 資産減耗費 + 繰延勘定償却

愛知県がんセンター年報第46号

愛知県がんセンター

名古屋市千種区鹿子殿1番1号

電話〈052〉762-6111番(〒464-8681)

Home Page: <http://www.pref.aichi.jp/cancer-center/>
